

2017年度 学位論文 (博士)

# 近代黎明期茶道史の研究

A study of the history of the tea ceremony  
at the dawn of the modern era

市村 祐子

目次

序章 本研究の課題と史料の所在	1	第二章 松阪町人本居信郷の茶の湯	44
第一節 研究史と課題	1	はじめに	44
(一) 近代茶道史の研究史	1	第一節 研究方法	44
(二) 隣接学問研究の成果	5	(一) 研究史	44
(三) 本研究の課題と構成	6	(二) 茶の湯関係史料の残存状況	51
第二節 史料の所在	6	第二節 本居家の概略	52
第一章 大庭屋平井家における青木遠州流茶道	9	(一) 家系	52
はじめに	9	(二) 居宅	53
第一節 研究方法	10	(三) 家業	54
(一) 研究史	10	(四) 歴代当主の文化活動	55
(二) 茶の湯関係史料の残存状況	11	第三節 本居信郷の茶の湯	56
第二節 大庭屋平井家の概略	12	(一) 信郷の家業	56
(一) 家系	12	(二) 信郷の茶の湯	59
(二) 居宅	13	① 『会席附』の概略	59
(三) 家業	14	② 自会記	60
(四) 歴代当主の信仰と旅及び詩文	14	③ 他会記	61
第三節 大庭屋平井家と青木遠州流茶道	20	小括	68
(一) 青木遠州流茶道について	20	第三章 大名茶道の幕末・明治	70
(二) 美英とソノの茶道	26	はじめに	70
① 『茶会々記集』における茶会	27	第一節 研究方法	70
② 『茶会々記集』に見る交流と茶道具	27	第二節 広島藩国家老上田安敦の茶の湯	71
③ 家元としての美英	36	(一) 上田安敦について—文武—	71
④ 平井ソノの茶の湯	38	(二) 茶の湯関係史料の残存状況	72
⑤ 美英の追善茶会	38	(三) 上田安敦の茶の湯	73
第四節 近代黎明期における大坂の茶道界	40	① 安敦が茶の湯を嗜んだ「山水軒」	73
小括	42	② 安敦の茶の湯	75

	I 『雅遊謾録』	
	イ、自会記	77
	ロ、他会記	84
	II 「上田家茶会記録」	86
	イ、自会記	86
	ロ、他会記	89
小括	(四) 上田家当主としての上田安敦	92
第四章	「古器旧物保存方」と博物館創設と茶道	93
小括		106
結論		108
あとがき		110
註		
参考文献		
史料・図版・表		
発表論文リスト		

## 序章 本研究の課題と史料の所在

### 第一節 研究史と課題

#### (一) 近代茶道史の研究史

日本茶道史の研究は、多くの先学により行なわれてきた。

日本近代における茶道史の研究は、熊倉功夫氏の『近代茶道史の研究』（昭和五十五年第一刷発行 日本放送協会出版協会）が嚆矢である。

当書は近代茶道史を通史で位置付け、構成は「茶道史研究とはなにか」から始まり、柳宗悦の民芸運動と茶道、そして現代の茶道の現状と、未来の茶道研究と茶道に関わる人々の在り方についての提言まで幅広い研究を行っていることが特長である。

熊倉氏は近代茶道の胎動を、茶道界内外からの近世後期の茶道批判と位置付けた。外部からの批判では、「いま私は、近世後期を十八世紀後半、いわゆる宝暦、天明期より考えているが、茶道の歴史のうえでも、この時期は天然宗左、一燈宗室、川上不白らの茶人がでて、いわゆる七事式が整理されるなど、一画期とされてきた。これらの宗匠が、家元制度を整理し、点前に新しい工夫をこらした前提には、もはや、従前のままでは安住しえぬ茶人社会の変化があり、そしてまた、一段ときびしい茶道批判が登場してきたことがあるう。」と指摘し、七事式が整理されたことや茶道界外からの批判のひとつとして太宰春台の『独語』を挙げた。<sup>註</sup>

松平不昧と井伊直弼については、

名器鑑編纂の発端が不昧編纂する『古今名物類聚』にあったことを思えば、松平不昧より高橋箒庵に至る強靱な茶の系譜が、近代の茶を貫いているのに気づかざるをえぬ。この茶の系譜を道具茶と呼ぶことはできよう。しかしそれは、あまりにも狭量な茶の見方である。道具茶の語は、道具に執着する茶人への軽侮の心を含む。その系譜を、あまりにも熟さぬ憾みはある

が、いま仮に「生活としての茶」と、本論では呼ぶことにしよう。

生活としての茶は、理念としての茶が日常生活を越えようとするのにならなくて、あくまで生活本位の茶である。理念としての茶は、茶道の独自性を主張することによって、茶道がなにかの役に立つことを拒否するものであった。生活としての茶は、茶道が、宗教・美術・文学・作法、そのほか諸々の芸道を含みこむことによって、その総合生活であることを主張するけれど、その結果、茶道の本質はその各分野に拡散し、融通無礙なる情念、しいて言葉にすれば、益田鈍翁のいう「常識の茶」だけが残る。それは一見、自立的な茶の独自性を構成しえぬかのごとくみえ、現実の茶道をおおらえどころのない情念である。それゆえ、生活の茶道の志向するものは、より具体的な茶の実際であり、その興味は茶道具の世界に集中した。

江戸時代の茶道具が整理され、体系づけられて、近代の茶人へとうけつがれる結節点こそ、松平不昧である。<sup>註</sup>

と述べ、松平不昧から始まり高橋箒庵に至る茶を、近代数寄者につながる「道具茶」と、「生活としての茶」に分類した。これは、天明期における茶道批判を超えた存在であり、熊倉氏は、ここを近代数寄者へのはじまりとしている。

松平不昧の位置付けについては、近世から近代への結節点とし、不昧の茶道批判は「不昧の自己コレクションにたいする、ほとんど完璧なまでに周到な態度の背後には、既成流儀によるあいまいな道具観にたいする批判がはたらいていた。不昧が既成の茶道に絶望し、大名としての新しい茶の世界を開拓しようとしたとき、厳密な道具の分類考証と、これに沿った蒐集の道を選んだのである。」と述べ、規制流儀にたいする道具批判と道具の分類考証が不昧の道であったことを指摘した。井伊直弼については、「遊芸化する茶道への批判が求めた茶の精神性は、井伊直弼の茶においてすぐれた到達点をえたといえよう。」と指摘し、その根拠を『茶湯一会集』に求め、「一期一会」と「独座観念」の語を挙げた。そして「直弼の茶は、純粹に茶の理念を追求する。そして思索の場として、独自の茶の形を形成しえた。それゆえに、直弼が志向する茶は、それ自身が独自の意味を主張する。他律的に、なにかの役に立つといった性格を拒否する茶であった。」と述べ、直弼の茶は茶会において茶の理念を追求し、

思索の場であり、なにかの役に立つ茶ではなかったことを指摘した。<sup>註三</sup>

「維新の宗匠」については、時代に沿った新しい点前の創造と体系化が幕末の茶道であるという位置付けを行った。熊倉氏は近代の胎動を寛政期とし、化政期から幕末は遊芸化した茶道に対する批判から、伝統の論理化と大系化をはかり、立礼式はそれらを抱合した取りくみ方の一つであると位置付けた。そして、明治初期における茶道の衰微は、為政者達の嗜好が煎茶に傾いていたことを理由として挙げた。更に、「芸道としての茶道も、それは日常生活から飛躍したハレの世界であり、緊張と解放を経験する、すぐれて特異なる時間と空間をますます志向する。これは幕末の茶業の展開が、その反動としてもたらした、近代茶道の特質であった。」<sup>註四</sup>と指摘した。

近代の茶道の性格については、第一は茶道の性格の変化、第二は茶道の伝達方法の変化、第三は茶道を学ぶ人びとの層の変化を挙げた。第一については茶道の精神性への重視を挙げ、それを裏付けるものとして知的な営みを指摘し、第二については「近代になって、人びとは、未だ直接逢ったことのない宗匠から許状をうけて茶を学んでいる。そこには当然新しい茶の伝え方、教え方が考案されなければならない。」<sup>註五</sup>とし、第三は大寄せの茶会を挙げた。

「理念としての茶道の復権」については田中仙樵を挙げ、仙樵が『茶禅一味』は「まさに国粹の二字をもって茶道文化の再評価を求めるもの」であり、岡倉天心の『The Book of Tea』は「天心の激しい国粹への傾倒のなから語り出されていることを忘れることはできない。」<sup>註六</sup>と指摘した。

「没落する茶道」においては、伝統の在り方について次のように述べている。

伝統とはやみくもに伝えられるものではなく、新たに創造的価値が発見されてはじめて継承される。伝統の継承はそのうちに否定と断絶とを包含しているといえよう。

茶道の伝統もまた、決して一筋にうけつがれてきたものではない。茶道が、すぐれて人と人とのつながりにおいて、その美を実現する芸道であるがゆえに、茶道の伝統は連綿と、断絶することなく続いてきたかのように錯覚する。しかし近代茶道の歴史をとってみても、そこにはさまざまに断絶を見ないわけにはゆかぬ。なかでもっとも大きな断絶は、明治維新に

つづく十数年の時代であった。

明治維新の激動は、深く民衆の生活の中に胚胎した破壊と創造の運動であり、それは変化と緊張の時代だったといつてよい。このような時代相は、遊びのスタイルにしても、江戸時代とは全く異なった性格をもたらした。一言でいえば、遊びのなかにも精神的なものが強く求められたことである。社会的変動が少ない時代には、人は遊びのなかに己の運命をもてあそぶ。それは博奕であり、遊蕩であり、遊芸であった。ところがいったん社会が革命の渦にまきこまれ、新社会建設の緊張感が張りつめると、遊びにたいして否定的な、あるいは単なる遊びであったものにも精神的なよりどころを求める傾向が生まれる。(中略)

しかし、精神性の志向が、たてまえてのいわば飾りものであったとばかり言わない。変革が常に理想主義に導かれるように、遊びのなかにも理想を追求し、遊びに加わることよって精神の高みへ向かわせるようなものが求められたのは、維新を前後する時期の一つの特徴だった。茶道が近代の戸口に立った時、理念としての茶道の復権が叫ばれたのは、まことに自然なことだったといつてよい。井伊直弼、玄々斎といった人びとの主張は、こうした意味をもっていた。にもかかわらず、遂に茶道は変革期の人びとの心を完全に把握することができなかった。それは、いかに理念としての茶道を追求しても、その様式の隅々にまで浸透している遊びの要素を、茶道から払拭することは不可能であったからだ。その結果茶道も、他の芸能と同じく、衰退の道をたどった。<sup>註七</sup>

熊倉氏は、伝統とは「創造的価値」が継承の鍵であり、伝統の継承とは否定と断絶を包含して成立していると指摘した。

その中において、「明治維新につづく十数年の時代」を「もっとも大きな断絶」と指摘し、明治維新と民衆活動については、「明治維新の激動は、深く民衆の生活の中に胚胎した破壊と創造の運動であり、それは変化と緊張の時代だったといつてよい。」と述べた。そして「遊び」の中にも「精神的なよりどころ」を求め、「茶道は変革期の人びとの心を完全に把握することができなかった。それは、いかに理念としての茶道を追求しても、その様式の隅々にまで浸透し

ている遊びの要素を、茶道から払拭することは不可能であったからだ。」と指摘し、「遊び」の要素が「理念」よりも勝っていたことを挙げた。

更に、「茶道の近代化にはもう一つの大きな障害があった。」と指摘し、「茶道を担う社会の変質」、「茶道家元が茶堂として勤務する大家の没落」を挙げた。

「茶道を担う社会の変質」とは、「茶道は、まことに煩瑣な約束事にとりかこまれ、そして茶会の型式の一つ一つが、たとえば、掛物、花、茶器、露地が、なにもものかの象徴として客の前にさし出されている。こうした、あくまでも象徴されたものを喜び、即物的な説明をきらう茶道が、そこに会する人びとの間で通用するためには、その説明的な部分、すなわち欠けている部分をおぎなう想像力と教養が、茶道に参加する人びとに必須の条件であった。そして、江戸時代という社会は、こうした想像力と教養を、均質にもつ小グループの存在する社会であった。このようなグループ内の交流では、省略された説明は容易に理解しあい、より象徴的な意味―意外性が追求される。ところが、維新直後の社会はどうだったのか。地方から上京してきた勤皇の志士たちには、ほとんど共通した教養や嗜好を求めることは困難だったろう。」<sup>註九</sup>と指摘し、江戸時代には茶道具が象徴するものを理解し合えるグループが存在したが、維新直後の社会では、勤皇の志士たちにはそのような教養と嗜好を求める事が困難だったであろうことを指摘し、茶道が維新直後に没落した理由としている。

「茶道家元が茶堂として勤務する大家の没落」については、表千家惺齋と裏千家円能齋の困窮ぶりを回顧録と『円能齋宗匠略伝』を挙げ、「多くの茶匠は、この窮乏の時代を、伝来の茶器を売り家屋敷を手放して耐えるのであるが、茶器そのものの価格が暴落し、茶器の購買層が失われてしまったために、その窮乏は一層きびしかったといえよう。」<sup>註九</sup>と述べ、道具商にも打撃を与えたことを指摘した。

茶道の再生については、「明治中期以降のナシヨナリズムの抬頭にともなう伝統文化の人びとの注目であり、また、礼法としての茶の再発見」、「茶道のパトロンとして、旧大名層にかわる財界人が急速に成長したこと」及び「苦難を経て新しい家元組織が充実してきたこと」により再生に向かったことを挙げた。

更に、変動期を従来の少数のパトロンに依存していた態勢から、一般大衆を

基盤とする新しい態勢へとときりかえたことよって再生を果たしたと指摘した。それは、「献茶」と「地方茶人の家元による組織化」であったことを指摘した。「献茶」については、「明治二十三年の利休三百年忌の茶事と、この豊公への献茶は、宗匠の茶が大きく復興したことをよく示す、画期的な茶事であった。豊公の大献茶会を組織したのは、たしかに黒田侯爵、渡辺清らの助力があったとしても、その中心は、宗匠達の力といっても過言ではあるまい。茶会に登場する亭主の多くは、宗匠達の弟子であり、その社中であり、出入りの人びとであった。」<sup>註十</sup>と述べ、「献茶」の魅力と宗匠達の「組織力」がこれを成し、熊倉氏はこの茶会を「宗匠の茶が大きく復興してきたことをよく示す」<sup>註十一</sup>と指摘した。

「茶道改革の運動」については、田中仙樵の大日本茶道学会の運動を挙げ、田中仙樵が明治三十一年（一八九八）に掲げた大日本茶道学会の「設立旨趣書」に、第一に、「茶道を日本の国粹として把握しようとしている点」<sup>註十二</sup>、「第二の特徴は、儒教道徳の実践の場としての茶の主張」<sup>註十三</sup>を注目すべき点として挙げている。更に、「秘伝の権威の否定と、修行の合目的性の要求という主張に発展した。その結論としてかかげられたのが、秘伝開放と流儀否定のスローガンであった。」<sup>註十四</sup>と変革点を指摘し、それは「仙樵がどんな秘伝もツマラナイ、と考えたのは、まさに道徳の実践という目的性をもってはじめて秘伝・修行が価値をもちうる」<sup>註十五</sup>ことからであったと述べた。

「第三節 近代数寄者の登場」において「数寄者」とは、熊倉氏は「財・政・官界に大きな力をもつ近代ブルジョアジーの一群であり、彼らはいくまで趣味として茶を楽しみ、その巨大な財力にまかせて茶道具を蒐集し、独自の茶風を切りひらいた」<sup>註十六</sup>人びとと規定した。更に「数寄者」らを世代ごとに四グループに分け、世代ごとの特徴的な傾向を分析した。明治二十年から三十年にかけての茶人で、外務卿であった井上世外（馨）については「井上世外は和敬会会員ではなかったが、持前の権力欲にまかせて道具の蒐集につとめ、のちの歴大なコレクションをつくりあげた」<sup>註十七</sup>人物であり、井上を挙げた理由は、「明治二十年に明治天皇行幸の茶会があったからであるとした。そして『世外井上公伝』の記述から、「この行幸は、八窓庵開きを機にしたものであったが、主体は歌舞伎見物にあつたらしく、八窓庵は見るだけで、茶は飲まなかったの

はそのためであろう。当日の道具組も伝わっていない。」<sup>註十八</sup>と行幸について述べた。この明治天行幸は、「開かれた明治二十年四月二十六日という時期に注目すると、その背景には井上の深慮遠謀があったとくに思える。井上の条約改正交渉は、明治十八年、外務卿就任によって推しすすめられ、鹿鳴館時代とも言われるその猛烈な欧化政策にたいする非難が井上に集中し、明治二十年には、世間の囂々たる非難は、一触即発の危険な状態にあった。ことにこの行幸に先んずることわずか六日、四月二十日には、伊藤博文の官邸で仮装舞踏会が開催されている。(中略)この狂態が演じられ、新聞でその詳報が伝えられるや、その数日後には、井上馨にたいする天皇の信任がいかに厚いかをデモンストレーションするかのごとく、茶道と歌舞伎の行幸が、井上邸で企てられたのである。」<sup>註十九</sup>と、欧化政策と相反する井上邸の行幸は、確実な目的を持って行われたことを指摘した。

更に、「(二十)では、茶道は明確に一つの機能を果たしている。茶道は行幸をひき出すための契機となり、歌舞伎を含めた諸芸能にたいする天皇の権威による新しい保証が、井上によって与えられたのである。」<sup>註二十</sup>と指摘し、明治天皇が「行幸」によって伝統芸能に与えた影響について論じ、ここから明治中期の茶から復興へ向かったと熊倉氏は位置付けた。

「学問する数寄者」においては、益田鈍翁や高橋箒庵らによる古美術の世界に茶の世界そのものが変化していった時に、別の数寄者の流れがあったことを論証した。それは近代知識人のなかに育まれ、知的営みとしての数寄の伝統である。」<sup>註二十一</sup>と指摘し、芸能の近代化について、次のような問題提起を行った。

今日呼ぶところの伝統芸能が、前近代のそれと同質のものであるはずはなく、前近代の諸芸能は近代の洗礼をうけ、変質をとげた時、あらたな生命をもつ伝統芸能が誕生したのである。一面において、芸能の近代化とは、近代における伝統芸能の誕生と同義であったといつてよい。それゆえに、近代化に成功した芸能が、いかなる過程を経ることによって伝統芸能への変質をとげたのか、そして変身の結果、芸能はなにを失い、なにを得たのか、ということが、近代芸能史の問題として追求されなければならない。<sup>註二十二</sup>

つまり、近代化に成功した芸能について、過程と変質について究め、その結果、なにを失い、なにを得たのかについて追究をしなければならないと指摘した。その論拠として熊倉氏は郡司正勝氏の研究を挙げ、谷崎潤一郎と小宮豊隆、山城少掾、西川一草亭及び夏目漱石をとりあげた。ここにおいて熊倉氏は谷崎と小宮のような近代的鑑賞者として登場した人びと、山城少掾のように近代的な解釈につとめた芸能側の人びとの思想を解釈した。<sup>註二十三</sup>

近代茶道史を初めて研究史大系の中に収めた書が『茶道聚錦』(昭和六十年発行 小学館)の『茶道聚錦第六卷 近代の茶の湯』で、十四名の研究者による十六編の論文が収録されている。

収録論文は、熊倉功夫氏三編(「近代の茶の湯」、「数寄者の茶の湯」、「茶道の普及と家元の活動」)、角山栄氏「開国と茶」、吉田光邦氏「海外から見た茶の湯―異質文化の一例」、田中秀隆氏「知識人の茶の湯」、田中日佐夫氏「近代における茶の湯と美術」、中村昌生氏「数寄者を支えた仰木魯堂」、小田栄一氏「数寄者の茶会記」、筒井絃一氏「玄々斎千宗室と文明開化」、戸田勝久氏「近代の茶の湯の基盤と展開 東京の裏千家を支点として」、久田宗也氏「近代の京阪神の茶家」、ランド・キャステイル氏「茶の湯の国際化」、籠谷真智子氏「女性と茶の湯」、竹内順一氏「美術館と茶道具」、鈴木博之氏「近代建築と数寄の空間」というように扱う分野は海外事情から建築史、女性史と多岐にわたっている。更には、近代数寄者の肖像画や茶道具及び茶室などの図録が豊富で、近代の茶道について理解が出来る構成である。

戸田勝久氏著『近代の芸文と茶の湯』(昭和五十八年 淡交社発行)と同氏著『茶の湯連翹抄』(平成十七年 思文閣出版)は、共に、茶人の生き様と実績から茶の湯を辿っていく書である。

前者では近代の作家、画家、落語家、数寄者、お雇い外国人等を十二人挙げ、後者では、第一部で千利休、裏千家歴代、第二部で金澤の茶の湯、毛利元就、井伊直弼、徳川齊荘、柳宗悦、末宗廣、第三部で近代の茶の湯を扱い、玄々斎宗室、伊勢商人、竹川竹斎、田中宗卜、そして自家の歴史を茶の湯との関わり方や後世に影響を与えた事について論証を行っている。

幕末の武士であり茶人であった井伊直弼を扱った研究書は、谷村玲子著

『井伊直弼―修養としての茶の湯―』（平成十三年 創文社）と熊倉功夫編『井伊直弼の茶の湯』（平成十九年 国書刊行会）がある。

淡交社五十周年記念出版として刊行された千宗室監修『茶道学大系』全十一巻では、第一巻「茶道文化論」（熊倉功夫、田中秀隆編）と第二巻「茶道の歴史」（谷端昭夫編）に、近代茶道に関する論者が収められている。

「教育史」の視点から茶道を取り上げた書には、小林善帆著『「花」の成立と展開』日本史研究叢刊18（平成十九年 和泉書院）がある。第五章「花」と「茶」―「稽古」「心得」の視点から」と、「第二部 近代における受容―女子教育の視点から」では、高等女学校二十一校（官立、公立、宮内省所管、私塾、ミッション、官公立ミッション以外、外地）の校則、施行令、学科課程表等から「花」と「茶」の科目、課外、趣味講座の分類からみた「教育」としての受容について、綿密な調査と研究が行われている。近年には『講座 茶の湯全史 近代』（平成二十五年七月一日発行 思文閣出版）が刊行された。

『講座 茶の湯全史 近代』の「概説」の中で熊倉功夫氏は、「西欧の概念にない茶の湯は、近代文化としてそのままでは認知されない。そこで近代に再生すべき方途としてとられた道は三つあった。第一は倫理、道徳、行儀作法として、さらに教育の中にそれを生かす生活文化としての道である。第二は趣味として近代人の審美的生活に資する道である。第三は茶の湯に含まれる理知的哲学的側面と美的側面に注目し、日本文化の表象として賞揚する道である。」<sup>註二十四</sup>と述べ、「今日、伝統文化といわれる能楽や茶の湯が文明開化期に衰退したことは事実で、今後、衰退とされる内容と質が吟味されることになる。」<sup>註二十五</sup>と指摘し、「衰退した」とされる内容と質の研究の必要性を述べた。

家元制度については、「近世家元制は明治維新とともに衰退し、新たに近代家元制が誕生したと考えられよう。その一番大きな違いは、近世家元制の経済的基盤が大名や大寺院などの扶持にあったのに対し、近代家元制は特定のパトロネージを受けず、大量の茶人による大衆的支持によっている点である。」<sup>註二十六</sup>と述べ、近世と近代では、家元制のパトロンが変質をしたことを指摘した。

## （二）隣接学問研究の成果

茶道史を取り巻く隣接学問は、歴史社会学、建築史、思想史、美術史、科学分野などがあり、「茶道」自体がもつ多様な世界により研究が細分化している。

歴史社会学の立場から近代茶道史を考察した田中秀隆氏著『近代茶道の歴史社会学』（平成十九年 思文閣出版）において、歴史的には、田中仙樵が大本茶道学会の設立趣旨書を発表した明治三十一年と、「茶道を芸術としてとらえるパラダイムの成立が昭和四年前後」<sup>註二十七</sup>とする年、「皇紀二千六百年」<sup>註二十八</sup>を近代茶道の三つの転機として論じた。

明治三十一年に田中仙樵から発表された「趣旨書」は「国粹主義」の表徴として論じられてきた。田中氏は「遊芸でないあるべき茶道の再興という形で定位されていた点にも留意をしておかねばならない。」<sup>註二十九</sup>と指摘した。それは「望ましからざる茶の湯像と望ましい茶道を区別して、望ましい茶道を提示するという戦略は、当時の状況では、茶人達に許された唯一の選択肢だったのかもしれない。」<sup>註三十</sup>と述べている。

齋藤康彦氏著『近代数寄者のネットワーク』（平成二十四年 思文閣出版）は、茶会記から近代数寄者が残した明治初年から昭和四十年の半ば迄の全二十五冊の「茶会記」と「日記」から亭主と茶客の「所属会・屋号・通称・号・出身地・続柄・流派・師匠・学歴・爵位・議員歴・職歴・経営参画企業名・役職などのデータ」<sup>註三十一</sup>を『日本紳士録』や原田伴彦編『茶道人物辞典』（一八八一年 柏書房）及び林屋辰三郎編『角川茶道大辞典』（一九九〇年 角川書店）等の辞典や各地の「人名辞典」を突合し、近代数寄者と政財界及び茶道界とのネットワークを様々な視点から析出した。そしてその結果から見えてきた時代背景と近代数寄者の政・官・財を含めたネットワークとその時代的変質を明らかにしたものである。明治・大正・昭和の時代区分で数寄者のネットワークについての表を見ると、熊倉氏が『近代茶道史の研究』の中で明らかにした「数寄者の四グループ」と一致する。また、和敬会等の数寄者の会に焦点を当てたグループでは、業界を超えた交流が見られ、古美術品の復元等を企業の社会文化活動（メセナ活動）で行っており、単なる「趣味人のグループ」ではなかったことを示した。

家元を中心として考察した論著には廣田吉崇氏の『近現代における茶の湯家



元の研究』（平成二十四年 慧文社）がある。廣田氏は、明治期における茶の湯を「貴紳」と「流儀」に分けて家元の実態について論じ、明治天皇の井上馨邸における「天覧茶会」、皇族への献茶から、近代家元の姿について論証を行った。

近代茶道史を美術史からみた論著には、依田徹氏の『近代の「美術」と茶の湯 言葉と人とモノ』（平成二十五年 思文閣出版）があり、明治期の茶の湯については欧米人の見た日本文化、夏目漱石の抹茶批判、岡倉覚三と日本文化論に分けて考察がなされている。

「伝統とは何ぞや」を考える上で看過出来ない論考には、名著刊行会発行の雑誌『日本学』十一号（昭和六十三年七月）と十二号がある。

十一号では「幕末Ⅱ近代化の葛藤」が取り上げられ、所収論文では犬塚孝明氏の「ロンドンで会った薩長の若者たち―幕末留学生断章」が、続号の十二号では「日本帰郷Ⅱ近代への逆説」を論題とした湯浅泰雄氏「ポスト・モダンの時代と和辻哲郎」、上垣外憲一氏「漱石にとっての伝統」が挙げられる。

### （三）本研究の課題と構成

これまで、近代茶道の歴史について先達の著書などを基に調べてみた。

その中で、幕末から明治初期（拙稿では以降、近代黎明期と記す）には幕藩体制の崩壊があったことにより、藩の茶堂（茶道）であった家元が、その活動を断絶せざるを得ない状況となり、この時期には茶道人口が減少し、茶道が衰退したことがわかった。但し、「伝統文化」というものは、継承・継続性がある後世に営々と伝え残されているものであり、衰退・断絶せざるを得ない状況になったとはいえ、その時期に茶道が直ちに衰退・断絶をしたのではない。

そこで、衰退したとされる近代黎明期の茶道はどのように行われていたのかということを第一の課題とし、茶人たちの活動と明治政府の国策及び世情が近代黎明期茶道へどのように関わったのか、そして、近代黎明期茶道とは何かということを第二の課題とした。

ここでいう「衰退」とは、茶会が殆ど開かれていなかったということ―つま

り、茶会記がこれまでは殆ど見つかっていなかったことと、茶会が開かれても使用された茶道具が名器ではなかったこと、茶道を行う人びとの動向が不詳であったことの三点を指す。本稿は前述の論点について、先ず町人、文人、武家それぞれの立場の人々が残した茶会記や各種史料に基づいてそれらの人々の茶道に係る活動状況を究明し、次に茶道継承にかかわる国策としての伝統文化の扱いとその位置、十九世紀における日本を見る世界、及び近代黎明期茶道とは何かについて考察した。

第一章から第三章までは、近代黎明期に茶道を行っていた人びとの記録を基にした事例研究である。

第一章は、大坂（大阪）において青木遠州流茶道の家元であった大庭屋平井家の十代にあたる平井治郎右衛門美英（茶名・貯月菴宗従）についての研究と考察である。

第二章は、伊勢国松坂において国学者本居宣長の末裔に当たり、神職であった本居信郷（茶名・宗朝）が嗜んでいた表千家流の茶道とその諸活動についての研究と考察である。

第三章は、広島藩国老であった上田安敦が嗜んでいた茶道についての論考である。

第四章では、茶道の継承に関わった、明治政府の国策、世情等の検討を行い、近代黎明期茶道とは何かについて考察を行った。

### 第二節 史料の所在

史学研究の上で最も重要な位置を占めるのが、人びとが直接に記した諸々の記録類―つまり、第一次史料である。

茶道史研究では、茶道の技術的・精神的なことが記された茶書類や書簡類、各種で開かれた茶会の記録である茶会記、茶人達が直接に創作した茶道具等が挙げられる。

第二次史料は、それらに基づいて出された翻刻や論考であり、研究の成果や後学の研究を推進させる為の補助的な役割がある史料類である。

当節では、各章で用いた史料の概要についてふれておきたい。

## (一) 大庭屋平井家関係

大庭屋平井家については、第十三代当主にあたる故平井勝彦氏が大阪市史編纂所に「大庭屋平井家文書」として一括寄託を行っているが、文書そのものは、大阪府豊中市にある平井家が管理を行って頂いている状態である。

文書目録はなく、著者が調査に入らせて頂いた時にみた文書史料の内訳は、大別すると「家関係」と「茶道関係」及び「家政関係」であった。「茶道関係」には、拙稿で取り上げる平井治郎右衛門美英が自作した茶道具も存在する。

十三代当主であった故平井勝彦氏から文書の公開許可を頂けたのは、「家関係」は「平井家系図」一軸（部分許可）で、「茶道関係」については、平井治郎右衛門美英が「青木宗鳳流遠州流茶道」の「家元」であった関係上、家元としての各種行事（「献茶会依頼」や「追善茶会」。但し、出納帳を除く）、自他会記が収められた茶会記二冊、門人への台子伝授控一冊、旅行記一冊であった。「家政関係」の文書は零であった。

茶会記については、翻刻をされているのは『茶会々記集』一冊が平成九年二月に大阪市史編纂所から『大阪市史史料集』第四十八輯（平井勝彦、市村祐子編）がある。

## (二) 本居信郷家関係

本居信郷の茶道関係史料については、三重県松阪市殿町に所在する「本居宣長記念館」に所蔵されている。

当記念館では所蔵目録が発行されており、本居宣長を中心とする本居家の人物についての全貌を知ることが可能である。

拙稿に關係がある目録の書目については、左記の三冊である。

- ・鈴木勝忠・岡本勝編『本居宣長記念館 蔵書目録五』昭和五十四年三月三十一日、松阪市教育委員会
- ・『本居宣長記念館収蔵品目録第一輯 文書篇』昭和六十年三月、本居宣長記念館
- ・『本居宣長記念館収蔵品目録第二輯 器物篇』昭和六十一年三月、本居宣長記念館

鈴木勝忠・岡本勝編『本居宣長記念館 蔵書目録五』では、千家から本居信郷に到来した書簡（茶会記を含む）の目録と法量及びその翻刻が記されており、千家との交流を知ることができる。

『本居宣長記念館収蔵品目録第一輯 文書篇』には信郷に関する文書類の目録と法量及び概要（一部翻刻もある）が記されている。「本居信郷之部 二一種」の項が設けられており、茶道関係書類は九種が存在する。他には、辞令や松坂国学所に関する書類や自筆稿がある。

『本居宣長記念館収蔵品目録第二輯 器物篇』には、宣長をはじめとした本居家の人々が使用していた道具類の目録である。

その中に「信郷関係」の項が設けられており、茶道具や日常生活用品が収録されている。

## (三) 上田安敦関係

上田家所蔵文書については、次のような調査本が刊行されており、上田流和風堂所蔵史料が翻刻されている。これにより、家政と茶の湯について知ることができ。

○政治史・茶道史研究協議会編『上田家文書調査報告書（二分冊）』平成十七年三月三十一日、広島市教育委員会

- 一 上田家家政史料集成
- 一 上田家茶書集成

更に、上田安敦については、左記の図録と解説書から、政治家として、そして茶人としての全貌を、残された文書や武具及び茶道具から窺う事が出来る。

○財団法人広島市文化振興事業団編『幕末維新の芸藩と国老上田家展図録』  
平成元年十月二十七日、財団法人広島市文化振興事業団

#### (四) 「古器旧物保存方」関係

布告「古器旧物保存方」は、国立国会図書館の日本法令索引（明治前期編）と国立国会図書館デジタルコレクションを利用した。

博物館（現在、東京国立博物館）に関しては、東京国立博物館編『東京国立博物館百年史』（昭和四十八年三月 第一法規）を用いた。

## 第一章 大庭屋平井家における青木遠州流茶道

### はじめに

日本茶道史の研究は多くの先学により行なわれてきたが、近代黎明期の茶の湯については、史料制約などにより、あまり研究対象とされてこなかった。熊倉功夫氏は明治時代を、明治初年（一八六八）より約三十年間を「衰退の時代」、明治二十九年（一八九六）の益田孝による大師会成立より昭和十五年（一九四〇）の利休三百五十遠忌までを「数寄者の時代」の二つに分けている。<sup>註</sup>明治初期にあたる「衰退の時代」については、「家元をはじめとする茶人たちの具体的な生活像を明らかにする必要がある。家元制は、組織に対して強い規制力を持つように、内に対しても家元とその家族に対する忠誠を考慮に入れなければ家元制を支える力を理解することはできない。一方でこうした家元制を支える最後の人々の存在も無視できない。それは、多くの場合、地方の弟子であった。表千家碌々斎、惺斎、あるいは裏千家又鈔斎、円能斎の行動は断片的にしか伝わらないが、わかっている範囲でも各地の弟子を訪ねて旅行している。つまり家元制の危機をのりこえるためには、比較的経済的に安定していた地方の素封家たちの協力が必要だったのである。地方の史料が明らかにされるなかで、より具体的にその状況を述べることができるようになるだろう。さらにいえば、この困難な時代に強靱な意志をもって細々と茶の湯を続けてきた家元以外の茶人たちの動向も注目する必要がある。」<sup>註</sup>と指摘し、「伝統文化といながら、そのにない手がつぎつぎと交替することによって、はじめて継承されてきたことに注目する必要がある。いわば、そのにない手としての地方がいかなる役割を果たしたのか、単に文明開化に遅れ、維新の夢に破れた草莽の国学だけではない。保守という原則において文化をにない続けた地方の存在があったはずである。」<sup>註</sup>と述べ、伝統文化の担い手の交替とその継承と地方の存在についての重要性について指摘を行った。

他に、井伊裕子氏による「井伊宗観の茶の湯」（『茶湯 研究と資料』二十三号所収平成六年一月二十五日 思文閣出版）は、大名茶道の立場から近代の

茶の湯を考える上で重要である。

拙稿で取り上げる大庭屋平井家（現在は平井家）は、江戸時代に大坂市中に存した商家で、十二代にあたる平井次郎右衛門が昭和十年（一九三五）に著した「平井家系図」によると、初代の大庭左衛門正俊（永禄三〇正保二年、一五六〇～一六四五）は天正十五年（一五八七）に河内大庭荘（現在、大阪府守口市）から浪速今橋中橋筋（現在、大阪府大阪市中央区）に移り住み、屋号を「大庭屋」と称したことが記されている。現在の平井家は北摂地域に居宅があり、当主は十四代目である。

家業については、「平井家系図」の「序」によると、諸藩大坂蔵屋敷に出入りをする御用商人（おそらく蔵元か掛屋）として大名貸を行っていた<sup>註</sup>のであるが、この創業時期は不詳である。

文化面については、三代にあたる大庭次郎右衛門が書画堪能であり、「仙岳」という号を持っていた。八代にあたる平井次郎右衛門時雍は書道と歌道を探り、茶道を嗜んでいた。

茶の湯については、六代目にあたる大場治七郎（平井次郎右衛門息）貞永と七代目にあたる平井次郎右衛門信美が、青木宗鳳が創始した青木遠州流茶道を修めており、八代目にあたる平井次郎右衛門時雍も、流派は不詳であるが、茶道を嗜んでいた。

十代目にあたる平井治郎右衛門美英（貯月菴宗従 天保十四年～明治四十一年「一八四三～一九〇八」、以下、美英と記す。）は、青木宗鳳（五代如習齋）について遠州流茶道を学んだ。青木宗鳳亡き後は、大坂における青木宗鳳流の遠州流茶道の「家元」として、その跡を継いだ。<sup>註</sup>人物である。

美英の茶の湯については、慶応二年（一八六六）から明治十九年（一八八八）にかけて自らが催した百三十二回分の茶会記である『茶会々記集』や、門人へ発行した免状の控である『茶道傳授扣』及び旅日記などから窺うことが出来る。

かかることから美英は、近代黎明期の大阪における町人茶人であり、青木遠州流茶道家元であった当時の実態と役割とを知る上で看過出来ない人物である。

本稿では、大庭屋平井家の概略と青木遠州流茶道について述べていきたい。尚、美英が嗜んでいた茶道の流派名は、第三節(一)における考察により、本稿

では「青木遠州流」と記す。

## 第一節 研究方法

### (一) 研究史

大庭屋平井家についての研究は、管見では原田伴彦氏の「平井家と茶の湯」(『大阪府の歴史』第四号所収)が嚆矢である。原田氏論文における大庭屋平井家の概略については、十三代目にあたる平井勝彦氏の口述により記述をされた箇所がある。それは、「平井家は天正十五年——秀吉の大阪城建設直後——河内国大庭荘から大阪市中に移ったという。」<sup>註六</sup>ことである。

家業については、平井家に残る金融関係史料から、延宝年間(二六七〇年代)に江戸堀五丁目に居をかまえ、豊後臼杵藩の銀掛屋をつとめ、金融業を営んで家産を積んだ。大庭屋の家運がとくに栄えたのは五代次郎右衛門のときであったことを明らかにしている。この五代信成は播磨平野郷の淀屋(大坂の淀屋辰五郎の一族)から宝永四年に平井家に入った人である。宝暦十一年(一七六一)に大坂西奉行興津能登守忠通が十人両替を補充したときに大庭屋はその一員に加えられ、宝暦から明和にかけて大庭屋の町家としての地位が確固たるものになったのである。その後、安永(一七七〇年代)には十人両替ではなくなるが、大坂の大両替商として続き、西島に新田開発なども行っていた。大庭屋の全盛期には肥後細川藩(五十四万石)をはじめ、福井(三十二万石)、小倉(十五万石)、小田原、福山、笠間、関宿、臼杵、広瀬、佐土原、宍粟、芝村、柳本の以上十三藩の蔵元となり、紀州五十五万石の徳川家をはじめ、松山、柳河、明石、土浦、宮津、棚倉、掛川ら十五藩の御立入となり、合計二十八の金融、財政のことに与った。これらの諸藩への融通は年間二十万両内外(米にして約二十万石)に及び、諸藩から受ける扶持米や会釈米は合せて千二百石であったと述べ、豊後臼杵藩の銀掛屋であったことを突き止めている。<sup>註七</sup>

大庭屋平井家と融通関係にあった肥後細川藩をはじめとした二十八藩についての関係については、これらの藩への年間融通額が二十万両内外であった。更

に宝暦十一年の幕府の御用金については「大阪町人に六十五万両の御用金を課し、鴻池屋、加島屋(広岡)、米屋(殿村)、越後屋(三井)など十家が五万両づつを割当てられたとき、大庭屋は近江屋久兵衛ら九家とともに二万五千両づつを負担しているによっても、その富福さがうかがわれる。」<sup>註八</sup>と指摘し、大庭屋平井家の当時の財政は鴻池屋などに次ぐ規模であった。

江戸後期から幕末における大庭屋平井家の財政は、「嘉永六年の米艦来航のおり、蔵元をしていた備後福山藩主の老中阿倍正弘から銀三百貫目(金にして五千両)の融通を依頼され、元治元年には新選組から一万両の借金を強請され、慶応二年の第二長州戦争のとき肥後細川家から銀千貫の調達依頼を、翌慶応三年には、小倉藩から銀八百貫目の借金を求められた」<sup>註九</sup>ことから、資力は相当なものであったことを指摘しており、このような状況下においても両替商として持ち堪えていたが、維新後は「鴻池、三井、加島屋など当家をのぞいて、大阪で最古の両替商であり老家の天王寺屋五兵衛、あるいは平野屋五兵衛以下の大家が相ついで没落した。大庭屋もその悲運にあつたひとりである。いま平井家には多数の大名あての融証文が残されている。いずれも借り付けされたものの残りである。」<sup>註十</sup>と指摘し、大庭屋平井家は借掛けによって没落したと述べた。

茶の湯については、美英が残した茶会記である『茶会々記集』の紹介を行っており、同茶会記集の初頁に美英が当茶会記を残す目的について記した「遠州流茶事録」と、茶会記の中から三会分(慶応二年十月条、明治二年三月条、明治三年三月九日条)の翻刻・紹介を行っている。美英と美英の師である青木宗鳳については、次の記述がある。

青木宗鳳の初代は紫雪庵といひ薙髪して凡鳥といひ明和二年に七十六才で没した。遠州流の山田大有の門弟である。いらい代々宗鳳をついで、大阪での茶界に声名をもった。(中略)美英は天保十四年(一八四三)に生まれ、慶応三年(一八六七)十月に、二十五才で家督をついだ。父の九代次郎右衛門美在も茶技を好み、大庭屋の福島の別邸に茶席をもうけた。これが貯月庵である。大阪の十人両替をはじめとする豪商の多くは、蔵元・掛屋などの職務のため、蔵屋敷の役人をはじめ大名諸家や商人仲間の賓客の饗応

接待のなどの必要から、社交サロンとしての茶席を設けたが、貯月庵もそれである。<sup>註十一</sup>

茶会記の参会客については、美英の経済界と社交界とのつながりについての分析を行っており、注目すべき人物として、磯谷宗庸・住友吉左衛門・鴻池善右衛門・白山善五郎・平瀬亀之助ら五人を挙げた。これらの人物は明治初年には美英をはじめ、みな三十歳前後であったことから、「明治後年の大阪の茶湯の展開の種はこの若い世代によってまかれていた。」<sup>註十二</sup>と、美英の茶会の在り方は大阪における近代の茶の湯へとつながることを言及した。

参会者の中に見える植村平兵衛・戸田弥七・春海藤次郎ら茶道具商については、彼らが正客、相客に茶道具商の一群を占めており、美英の茶会における彼らの立場について「茶事設営の蔭の立役者として活躍したことはいうまでもない」<sup>註十三</sup>と、茶事設営時から協力をしていたことを示唆した。

茶道具については、「遠州ゆかりの名物類をはじめ、由緒ある道具類が数多くある。」<sup>註十四</sup>と指摘した。

また、田中豊氏も原田伴彦氏『町人茶道史』（昭和五十四年 筑摩書房）を基にして『新修大阪市史』第四巻第四章第六節の項目「大庭屋平井家と『茶会々記集』」の中で、同様の指摘を行っている。

尚、田中豊氏は『角川茶道大事典 本文編』（平成二年五月一日 角川書店）において、「平井次郎右衛門」の項目名で、美英について記している。<sup>註十五</sup>

当書は茶道に関わる人名録として、平井家については初の収録であった。

青木凡鳥と大庭屋平井家とをつなぐ論文としては、山田哲也氏の「茶書によって家元を目指した茶人青木宗鳳―浪華文庫の考察を通して―」（千宗室監修・筒井紘一編『茶道学大系』第十巻 茶道の古典所収 平成十三年三月一日 淡交社）が挙げられよう。山田氏は青木宗鳳が残した「浪華文庫」を基にして、「浪華文庫」の目録の紹介を行うと共に初代青木宗鳳が「青木遠州流茶道」を創流した事由について、「当時の千家が家元制度を確立し、七事式を創出して茶道の大衆化に適応していく状況のまった中に、宗鳳は遠州流の茶家として身を置いていたのである。ここにおいて宗鳳のとった対応が、遠州流に宗及流を融合させた「遠州流」の創出であった。そしてその権威としての八十八部百

四十九冊にも及ぶ膨大な茶書の作成であった。血筋と茶風に対し、茶書と茶風で臨んだのである。」<sup>註十六</sup>と結論付け、千家の家元制度確立と茶道の大衆化に対する宗鳳の茶家としての位置は、権威付けとしての茶書と茶風であったと述べた。

「浪華文庫」が大庭屋平井家に移された事由については、「明治四年の青木宗鳳の没後、有力な門人であった大庭屋平井家に移された。時の当主美英により、本叢書の目録「青木宗鳳師筆遠州流茶道奥義伝并諸流一件目録」が作成されているが、これには「浪華文庫」の名称は見当たらない。このことは、青木家から平井家に移された時点においては、いまだ「浪華文庫」とは称していなかった事実を示すものであろう。」<sup>註十七</sup>と指摘した。

## (二) 茶の湯関係史料の残存状況

次に、大庭屋平井家が所蔵をしている平井家文書の中から、茶道関係史料の残存状況について紹介する。

平成五年（一九九三）に十三代に当たる当主で、史料所蔵者である平井勝彦氏の御協力を頂き、平井家所蔵の古文書の調査をさせて頂いたところ、【史料1-1】に挙げる茶道関係史料が見つかった。

八代にあたる平井次郎右衛門時雍の茶の湯や詠草は残っていない。

史料の中で大半を占めているのは、十代にあたる美英に関する史料である。

次に、各史料の内容について述べていきたい。

「貯月字之出典」は、美英の菴号である「貯月菴」の由来の漢詩が書かれた軸である。「汲深情大瓢貯月帰春應」と書かれており、蘇東坡の「煎茶詩」の一節を採ったものである。

茶会記は『茶会々記集』（三冊一括）と『當家貯月菴 茶会々記録』（一冊）の二種類が残されている。

『茶会々記集』には茶会総数百三十二会分、『當家貯月菴 茶会々記録』には同二百四十八会分が記されている。

茶会記の記録方法は双方とも、年月日、場所、招待客、開始時刻、茶道具、料理の順で記されている。

茶会記の記載年では、慶応二年（一八六六）十月十五日条から明治十九年（一八八六）二月十日条迄の茶会記が重複をしている。この間は『當家貯月菴 茶会々記録』の方が『茶会々記集』よりも、料理や道具についての記述が詳細になされていた。

『當家貯月菴茶会々記録』の初頁に「中興名物 眞中古窗面取曳貯茶入図 小堀家伝来」が挟まれていた。これは、大庭屋平井家が所蔵していたとみられる茶道具の一つの図と思われる。

『茶道傳授扣』は、明治二十年（一八八七）二月六日から大正十一年（一九二二）十月までの間にかけて書かれた美英とソノの門人帳ともいべき史料である。内容は、相伝事項、「右者茶道就御執心今般令相傳也」の語、相伝年月日、朱割印が上部に付された門人氏名、発行者である「貯月菴宗徒」の文字と朱印である。のちに詳しく述べるが、相伝者の大半は女性である。美英の没後、妻であるソノにより書き継がれていた。

大阪豊國神社における獻茶式に關係する史料は三種類が存在し、「獻茶式依頼茶具寄付一覧」は三丁分が残っている。紙の右端に留穴があることから、元々は冊子状になっていたと考えられ、残存状況から散逸した史料があるのではないかと推察する。

明治十八年十一月五日付の「獻茶式依頼状」は豊國神社宮司子爵日野西光善が差出人である。現在は額装にされており、平井家の鴨居に飾られている。

「故貯月翁追善茶会關係一括史料」は、明治四十二年（一九〇九）十月二十三日に尊光寺（大阪府大阪市中央区 北浜）に於いて開かれた美英の追善茶会についての史料である。「貯月庵社中」と「職方」を差出人とする招待状二通と欠席通知葉書と書簡、招待人名や領収書類が綴じられた『諸綴』一冊、追善茶会手向物の控一冊、当日の茶会記五紙、茶会の席ごとの芳名録二冊、配服をした人名を記録したもの一冊である。これらの史料により、美英の交友關係や社会的な地位を窺うことが出来る。

『花見能記』は、明治四年（一八七一）に美英が記した旅日記である。内容は、大坂から京都への道程と途中に立ち寄った所や和歌、茶会記などが記されている。参加者は美英、妻のソノ、青木宗鳳（五代・如習齋）、井上為藏、そして下男と下女の合計六名であった。

茶会關係では、他会記が十一会分残されている。茶会の場所は、東京二会、京都二会、大阪一会、不詳六会である。大正五年（一九一六）に開かれた「香室追悼茶会」以外の明治年間に開かれた茶会は美英の在世中であるが、美英がこれらの茶会に参加をしたのかについては不詳であるが、交友が見て取れる会記である。

青木宗鳳に関する史料は、一括して自製の袋に入れて保管をされており、「青木家代々記」（二紙）と『臺子傳授』（冊子・大和綴）が残されている。

「青木家代々記」には、初代の凡鳥（紫雪庵）から五代の如習齋までの法名と号及び没年が書かれている。当史料により、従来の研究ではあまり知られていなかった青木家の四・五代の生没年などについて知ることが出来る。

『臺子傳授』には青木家初代・凡鳥から五代・如習齋までが、門人達に台子を伝授をした記録である。享保十三年（一七二八）から文久元年（一八六一）にかけての百三十三年間に互る伝授記録で、門人二十一人に対する台子の伝授日と出身地と氏名及び屋号が記されており、青木遠州流茶道の伝播状況がわかる。

## 第二節 大庭屋平井家の概略

本節では、大庭屋平井家についての概略について、歴代当主の家系と居宅及び歴代当主の信仰と旅について紹介をしていきたい。

### (一) 家系

大庭屋平井家の家系を知ることが出来る史料は、二種類がある。一つ目は、十二代にあたる次郎右衛門が昭和十年（一九三五）十二月に記した「平井家系図」（二軸）で、現在もと書き継がれている。

二つ目は、筆者は不詳であるが、五代にあたる大庭次郎右衛門信成について書かれた「當家中興記 略」（一紙）である。

当主の代目の呼称は、家系図の「序」には「大庭屋 十二世 次郎右衛門」

と「世」が代目呼称に使用されているが、本文では「代」が用いられているので、拙稿では「代」を使用する。

最初に家系図【史料1―2】を紹介しておきたい。

【史料1―2】によると、平井氏は元々は大庭姓を名乗っていた。大庭姓を名乗った最初の人物は大庭景親であるが、その箇所は史料制約の部分に記されている。

大庭姓を名乗った次の人物は大庭次郎左衛門尉で、系図には「寿永年間ヨリ天正十五年間経平凡。四百餘年十一代同地二住ス。所謂郷士也。(読点著者)」と記されており、摂州河内国大庭荘(現在、大阪府守口市佐多中町)の郷士であった。大庭次郎左衛門尉の後が、大庭屋平井家の「初代」とされる大庭次郎左衛門正俊である。

人物については、故平井勝彦氏の口伝によると、二代にあたる大庭次郎左衛門の四男次左衛門は武士を志し、剣術に長けていたそうである。天和二年(一六八五)に次左衛門が死に至った「剣難」の詳細は家系図に記述が無く不詳である。

各代の嫡子については、当時の社会事情の所以の為か、早世している者が多い。大庭屋平井家は養子縁組を行うことにより、代々「家」を守っていたことが窺える。

苗字の「平井」については、五代にあたる大庭次郎右衛門信成が明和三年(一七六六)に隠居した年に、臼杵藩藩主からの書翰「臼杵藩主稲葉伊豫守ヨリ永年ノ感賞ニ依リ、扶持加増ト共ニ平井姓ヲ賜ル」。つまり、臼杵藩藩主稲葉伊豫守から永年の感賞により、扶持加増と共に平井姓を賜ったことが記されている。当時の稲葉伊豫守は弘道である。臼杵藩主稲葉伊豫守弘道からの感賞状は額装にされ、平井家が大切に保存している。

五代にあたる大庭次郎右衛門信成については、家系図において、「當家二取リテハ、別シテ大功有之所謂當家中興開基之主人也」との記述があり、別格の大功があるため、平井家中興の主人として位置付けている。それを裏付ける史料が「當家中興記 略」(一紙)である。これを次に紹介する。【史料1―3】

この「中興記」には、大庭次郎右衛門信成は摂州平野郷流レ町(現在、大阪府大阪市平野区流町)に淀屋権兵衛の二男として出生し、宝永四年(一七〇七)

二月に平井家に養子として入家し、その時に名前を八郎兵衛と改めたと記されており、正徳二年(一七一二)に家督相続を行っていることから家系図の記述と一致する。

実父の淀屋権兵衛の法名は宗源といい、平野の満願寺(大阪府大阪市平野区内に現存。見松山 満願寺。浄土宗。)に家屋敷の祠台の塔を建立した。実父家がいつ絶えたのかについては不詳である。

信成は宝暦五年(一七五五)六月に名前を治左衛門と改め、隣家に隠居し、苗字を「平井」と改めた。

明和四年(一七六七)七月二十九日に八十一歳で没し、難波に在する瑞龍寺(大阪府大阪市浪速区内に現存。黄檗宗慈雲山瑞龍寺。)に葬られた。

最後に「平井家系図」から歴代当主の婚姻関係について見ると、三代目にあたる大庭次郎右衛門は平野郷野堂町(現在、大阪府大阪市平野区平野野堂)の淀屋三郎の娘小ハルを娶っており、五代目にあたる信成は淀屋の一族である摂州平野郷流レ村(現在、大阪府大阪市平野区流町)の淀屋権兵衛の二男を入家をさせている。九代目にあたる平井次郎右衛門美在は山城國嵯峨(現在、京都府京都市右京区嵯峨)の角倉帯刀の娘である「てる」を妻に迎えている。かかることにより、大坂の豪商である淀屋に系する家と京都の豪商角倉家から入嫁を迎えていたことから、大庭屋平井家の両替商としての地位と交友の広さを窺うことが出来る。

## (二) 居宅

平井家には、当家の往時の全盛期を謳ったものとして代々受け継がれている歌と話がある。歌は「大阪敷え歌」、話は「砂かけ婆」で、どちらも成立年は不詳であるが、大庭屋平井家の往事が歌われている。

歌は、「一心寺二つ井戸、仁徳帝の御代から有しという三津寺、四四ツ橋、南地は五花街住吉の六道の辻、江戸堀の七つ倉、八軒屋」<sup>註十八</sup>と続く。「江戸堀の七つ倉」が大庭屋平井家所有の蔵であったと伝えられている。

「砂かけ婆」の話も「江戸堀の七つ倉」と関係がある。この話は、「江戸堀の七つ倉は、當時としては立派な倉庫街であったが夜は寂しいので砂かけ婆が



出るとして氣味悪がつた。三日月が早く落ちた闇夜や、五月雨の降りそぼつ夜などは此の邊を通ると、誰の悪戯かバラ、と小石交じりの砂を通行人に投げかけたもので、キヤツと女や子供達は悲鳴をあげて逃げだした。」<sup>註十九</sup>という怪談話である。

平井勝彦氏の口伝によると、「砂かけ婆」は落語家の笑福亭松鶴氏<sup>註二十</sup>が夏場に落語の「枕」に使用していたということであるが、五代目笑福亭松鶴氏の演目「次の御用日」の「地」の部分には次のような文がある。

ごてごていいながら、東横堀を南へ取ってまいりました。安綿橋の南詰住友様の御屋敷、この辺は只今でも淋しうござりますが以前は昼間でも人通りがござりません。現今大阪の市中で昼人通りがないと申しますと不思議なようですが、前方はずいぶん淋しいところがたくさんござりました。船場では本町橋の西詰南へ唐物町の浜、俗に本町の曲り。南では住友さんの浜。西では加賀の屋敷の裏手、薩摩堀願教寺の横手。江戸堀四丁目七ツ蔵。中之島蛸の松なんてずいぶん淋しいところです。只今は皆賑やかになりました。その以前はかような淋しいところがたくさんありました。<sup>註二十一</sup>

(傍線筆者)

大庭屋平井家の「七つ蔵」は落語の「枕」のみではなく、噺の中でも登場をさせており、大坂町民に知られていたことが窺える。

### (三) 家業

家業は、「平井家系図」の序に、幕末に至るまでの約二百八十年間の間は「専ら諸藩勝手向キ融通方ヲ勤メ」と記されていることから、諸藩大坂蔵屋敷に入りする御用商人（おそらく蔵元か掛屋）として大名貸を行っていたことがわかる。

宝暦十一年（一七六一）十二月十六日には大坂西奉行所において「江戸御役人并御奉行興津能登守様御立會」<sup>註二十二</sup>により米相場引上のために御用金を命ぜられた。その指定額は鴻池善右衛門ら十名が金五万両であったのに対し、大庭屋治郎右衛門を含む十名は金二万五千両であった。<sup>註二十三</sup>

文化三年（一八〇六）には大坂東奉行所へ召し出され、米相場引上を理由とした買米を総計三百十八軒の商家が命ぜられた。買米指定額は鴻池善右衛門と加嶋屋久左衛門が三万三千石であったのに対し、大庭屋次郎右衛門ら二十四名は七千石であった。<sup>註二十四</sup>

大名貸については中川すがね氏の著書『大坂両替商の金融と社会』によると、大庭屋平井家について「一統には西船場の雑喉場魚市場に關係した両替屋が多い。しかし文化七年には「近年時節悪敷御館入御屋鋪方茂六ヶ敷」と大名貸で打撃を受けて本両替を止め、米金銭の商い禁止などの規定を定めた。」<sup>註二十五</sup>の指摘があり、大庭屋平井家は西船場の雑魚場魚市場に關係した両替屋が多くいたことを追究し、文化七年に大名貸で打撃を受けたことにより本両替を止め、米金銭の商い禁止の規定を定めたことを述べている。

「付表 近世後期大坂の手形取り扱い商人」には、<sup>188</sup> 大庭屋治郎右衛門・次郎右衛門・二郎右衛門の項があり、「居所/店の場所」の項目には「江戸堀五丁目（延宝七年、安永三年）、雑魚場、新町（寛政十一年）」、「職種他」の項目には、明和五（一七六八）年に「家賃改会所事件でうちこわされる」<sup>註二十六</sup>との記述があることから、大坂市中で家賃改による打ち毀しの被害に遭ったことがわかる。当付表の配列番号186、187、189、190の氏名の欄には「大庭屋」の屋号が記されているが、いずれも平井家に残る系図には載っていない。

幕末には、「平井家系図」の序によると、備後福山藩に銀三百貫を融通し、新撰組には一万両の出金を強請され、また第二次征長戦争に肥後細川家に銀一千貫を調達するなどの富力を<sup>26</sup>持っていたが、明治維新期には倒幕により「諸藩の調達金ハ大半ハ回収不能」となった。

しかし、明治八年（一八七五）になると「右調達金二對シ年賦割済償還ノ恩典二浴スル」により、幕末に行った調達金に対し、年賦割済により、金額は如何ほどかわからないが、大庭屋平井家に償還金が戻ってきたのであった。

大庭屋平井家は長者番付にも記載がある。大阪府立中之島図書館郷土資料室所蔵の天保十三年発行「浪速大長者鑑」では、「前頭九枚目」、同室所蔵の明治三年発行「大日本持丸長者鑑」では「頭取 勸進元」であった。

### (四) 歴代当主の信仰と旅及び詩文

次に、史料が存在する歴代当主の信仰面と旅と詩文について述べていきたい。  
「平井家系図」には、三代にあたる大庭次郎右衛門と八代にあたる平井次郎右衛門時雍の信仰と詩文について窺うことが出来る文が書かれている。

三代にあたる大庭次郎右衛門は「仙岳」という号を持ち、書画が堪能であったという事は判明しているが、書画などは残存していない。

しかし、彼の信仰心を窺うことが出来る史料に、宝暦十三年（一七六三）に彼によって瑞龍寺（難波）に建てられた「法華塔」がある。現在は、「服部緑地公園内大阪市営霊園」内（大阪府豊中市）に所在する。

塔石は昭和二十年（一九四五）に大阪大空襲に遭った為、猛火と灼熱及び焼夷弾が当たったことによる損傷が今なお生々しく残っている。写真と翻刻文を【史料1-5】に挙げる。

建立の経緯は、塔碑の後側に記されている。その内容は、三代・大庭次郎右衛門にはなかなか子供が授からなかったことから、法華経の一字一字を石に書き付け、その石を難波瑞龍寺の南に埋め、仏の御加護による一族繁栄を願い法華塔を建立した というものである。

法華塔の他の二面には、大庭屋平井家の物故者三十五名の積名が刻字をされている。これは、平井勝彦氏が確認を行っている。

次に、文芸について紹介したい。八代にあたる大庭次郎右衛門時雍は「平井家系図」に、「書道並二歌道ヲ探り、茶道ヲ好ム」を記されている。彼の和歌が平井家所蔵の掛軸一軸と短冊二枚に残っているので、それを次に挙げる。

- ・掛軸 一軸 「了意了因居士 梅の歌」 成立年不詳
- ・短冊 「試筆 歳暮 年内立春」 成立年不詳
- ・短冊 「山夏月」 成立年不詳

ここに挙げた史料は全て年代未詳である。

掛軸「梅の歌」は、外題に「了意了因居士梅の歌」と記されている。了意とは江戸後期の古筆鑑定家である古筆了意（宝暦元々天保五年、一七五一〜一八三四）のことで、了因は時雍の法名で、当作品は二人の合作である。これは古筆了意が、梅が咲く候に平井家を訪ねたことが発端で、古筆了意が来訪したこと喜びを平井次郎右衛門時雍が綴らんと筆を執って梅の和歌を認め、古筆了

意も梅の和歌を認めたことにより出来上がった作品である。

短冊の「山夏月」【図1-1】は、時雍が書いたものである。短冊は上部から空色・白色（地色）・薄茶色で染められており、次の和歌が認められている。

なつ山の志げみに月能もりかねて

卯能花にのみ朝ハにはへ里 時雍

この歌の季節は夏で、夏山の茂みに月と卯の花が見える。朝には卯の花のみが香っているという風景を詠んでいる。

次に、大庭屋平井家の旅について紹介したい。大庭屋平井家は花見等の小旅行を催しており、年代は不詳であるが、旅の記録や下書きが残っている。

ここに紹介する花見旅行は、明治四年（一八七二）に催行された旅である。『花見能記』という書目で、大和綴をされた形態で残っていた。七日ばかりの日数で行っている。

参加者は平井治郎右衛門美英、ソノ、青木宗鳳、井上為蔵、店の真七と下女のお能、下男藤七ら七人である。

次に、行程表と行程地図を挙げる。【史料1-5】

京都は、「京都府大参事からのちに知事になった榎村正直」<sup>註二七</sup>と「府顧問の山本覚馬、勸業課長として企画立案に当たった明石博高ら」<sup>註二八</sup>による「第一期京都策」の真つ只中であった。

近代黎明期における京都は、慶応三年（一八六七）十二月九日の王政復古宣言により、慶応四年（一八六八）に二条城を中心に維新政府の首都計画が計画された。

しかし、明治二年（一八六九）に「東京への遷都が決定的な事実」<sup>註二九</sup>となり、「京都は千年にわたる帝都としての地位を失い、いわば廃都というべき事態」<sup>註三十</sup>となった。それは、「遷都にともなうて政治都市としての性格とこれに付随する人と機構をも失うことは、産業の存立基盤そのものが一挙に突き崩されたことを意味していた。このように、京都における明治時代の幕開けは、文明開化以前に産業の再興が急務」<sup>註三十一</sup>となっていたのである。

榎村と山本らにより、「他の地方にさきがけて勸業政策が政治経済から学校

風俗にわたる大改革を軸」<sup>註十三</sup>として推進された「第一期京都策」とは「明治初年から十四年に至る時期」<sup>註十三</sup>であり、その政策は「中央政府からの援助金（産業基金など）二十五万両をもとに、西陣機業に対する投資、勸業場・金屋密局<sup>註十四</sup>の設置、教育の普及、博覧会の開催、近代技術修得のための留学生の派遣など」<sup>註十四</sup>であった。

明治期における「京都策」は第三期までであり、「榎村のあとを受けて知事の座についた北垣国道によって、明治十年代の後半から、疎水事業や第四回内国勸業博覧会の開催に代表される第二期京都策」<sup>註十五</sup>、「明治の後半から大正期にかけて第三期京都策として道路拡築・電鉄敷設、上水道建設、第二疎水計画からなる三大事業が推進」<sup>註十六</sup>され、現在に至っている。

「市民の旅」という視点から見ると、明治二年（一八六九）正月廿日付で、行政官から左記の布告が出されている。

#### 第五十九号

今般、太政官始、四海一家之御宏護被為立候二付、箱根始

諸関門廢止被 仰出候事 誌<sup>註十七</sup>（句読点著者）

〔読み下し文〕

今般、太政官が始めて世界中に広大な計画を立てられるに付、箱根を始めとする諸関門の廢止を仰せ出されし事。

当布告は、箱根を始めとして全国に所在をしていた関門、つまり関所の撤廢を定めたものである。かかることにより、市民が自由に国内旅行を行うことが可能となったのである。

次に、美英ら一行の旅の行程を辿ってみることにする。

旅が行われた月日は、表題に記されていない。しかし、七日分の記録と、最終日が「二十八日」と明記されており、また、欄外にメモ書きされている旅先での茶会の記録などによって、明治四年二月二十二日から二月二十八日までの七日間（一八七一年四月十一日～四月十七日）の旅ではないかと考えられる。

行程の初日は、懇意にしている人々や別家の人達と別れの盃を交わし、午の

刻（現在では午前十二時頃）に出立したことから始まる。参加者各人が徒歩で片町（現在、大阪府大阪市都島区片町）の茶屋へ行き小休。小旅行の装いに替えた。それは紋服であった。片町から守口に至る間の交通機関については記されていない。「守口」は大庭屋平井家と関係が深い土地であり、宿駅が置かれていた。守口駅で小休。

明治維新後は、明治四年（一八七二）十一月五日に大蔵省第九十一の「東海道駅々陸運会社開業ヲ許ス」<sup>註十八</sup>により「城州伏水驛ヨリ河州守口驛迄」<sup>註十九</sup>、つまり山城国伏見から河内国守口の間陸運会社が開業したが、明治五年（一八七二）正月十九日の大蔵省發令第二号「東海道伝馬所並ニ助郷廢止ニ付陸運会社ヲ取建シム」<sup>註二十</sup>の法令により、伝馬・助郷が廢止されるまで続いていた。

「守口宿」か「守口驛」の呼称の変遷については、菊田太郎氏の論文「明治維新後の守口宿・守口驛（その一）―宿の廢止と驛の成立、助郷の改定と廢止―」（大阪経大会大北文次郎編集兼發行人『大阪経大論集』第二号所収）<sup>註二十一</sup>「守口宿の廢止と守口驛の成立」<sup>註二十二</sup>に詳しい。菊田氏の研究によると、「所轄官署の変更、及び、驛制改革に伴い、従来は、守口宿が公称であったのが、守口驛に改められた。」<sup>註二十三</sup>と記しており、上記文章の註において「徳川時代にも、雅稱様に守口驛と書いた例を見るが、それ以上に明治以後も、守口宿と書いている。」<sup>註二十四</sup>と指摘を行っていることから、「宿」か「驛」かの呼称については、明治維新後も統一をされていなかったとみることが出来る。

さて、小休後に美英一行は佐田村（現在、大阪府守口市佐田中町）に所在する天満宮（現在の佐太天神宮のことカ）を参拝した。そして美英は、対岸に咲き乱れる糸桜を見て「この里の名そ京都の糸櫻 奈かき春日もあかぬ色可な」と一首詠んだ。佐太天神宮の傍を流れる河川は淀川である。その後、佐田村某にて小休し一酌を催した。

枚方堤を行っていると古筆草乃がいると聞き、夕食のもてなしにと道すがらの慰めがあった。古筆草乃については、管見では史料がないので不詳である。

暮半頃に、橋本（現在、京都府八幡市橋本）の垣屋弥兵衛の宿に着いた。入湯後に薄茶と酒飯が来るまで寝た。

この日の最後には、青木宗鳳が北里の田舎普院に寄り、「口取にもてなし風情をしぬ」と記されている。「もてなし」とは、宗鳳は茶匠であるゆえ、茶の

湯ではないかと考える。「田舎普陀」とは、何を指すのか不詳である。

二十三日は、宿を出て男山八幡宮（石清水八幡宮）に参詣した。道すがら谷に杣の音が響く風情があつた。御本社が近く御幸が満ち、双廉（八幡造御本殿の事力）の修理も行届いていた。神前にぬかずき参つていと鳩の列も参りに来た。松の大樹には白妙の雪と見紛うものがあつた。それは露であつた。そこで「きてみ連ハ八千代も通ぬへし男山 松のむれゐる露のもてるも」と詠んだ。

その後、神前の片辺で一休みをした。その時に美英は前年の夏に男山に登山した時に、瀧本坊松花堂の茶席が「一新」（明治維新）の変乱により、取崩されたと聞いたことを思い出した。その懐旧の心から、次の一首を詠んだ。

「瀧本乃流の末ハ絶はかり むりを志のふ跡奈可里を里」

瀧本乃流―つまり松花堂の末は絶え、無理をしのぶ跡もないという歌である。

その後は木津川の渡りを使用し、松中から川上を上った。船上でよく咲いている桃の林があり、美英が渡守（船頭）に聞くと、「御や野村と答ふ」とある。

木津川の沿岸に桃の木が植えられていたことについては、「京都日出新聞」大正六年（一九一七）五月九日付「京都府物産(五)」内の「△桃及水蜜桃」の記事<sup>註四十四</sup>に詳しい。（旧字体は新字体に直し、ルビを除いた。）

桃及水蜜桃の栽培最も盛なるは久世、綴喜の両郡にして、之に隣接せる各郡産額多し。（中略）明治初年木津川改修方り旧川敷の払下を受けたる当時、砂地の栽培樹として桃を植付け、予想外の効果を得たるより、一意斯業の有益なるを認め、次第に栽培を拡張し、久世郡に於ける桃樹の栽培亦年と共に隆盛に趣きし（後略）

記事によると、桃と水蜜桃の栽培が最も盛んな地は久世郡と綴喜郡で、隣接する郡も産額が多い。明治初年の木津川改修に当たり旧川敷の払い下げを受けた時に砂地の栽培樹として植え付け、予想外の効果を得た。この事業の有益を認め、次第に栽培を拡張し、久世郡における桃樹の栽培は年と共に隆盛に趣いたとある。

「明治初年の木津川改修」とは、明治元年から三年にかけて「木津川最下流部を八幡に付け替え、合流部の河床高度を引下げる」<sup>註四十五</sup>という工事のことで

ある。

船頭が美英に答えた言葉「御や野村」は、「みや野村」や「見や野村」とも解釈が出来る。

「みやのむら」という村名の場合では、管見では明治九年（一八七六）に発行された地図「京都区分一覽之図、改正、附り山城八郡丹波三郡」（国際日本文化研究センター所蔵）<sup>註四十六</sup>には存在していない。

しかし、「野村」の場合は、現在の京都府久世郡久御山町内に町名「久御山町野村」という町名が存在し、久御山町総務部広報行政課編集・発行『久御山町統計書 平成21年度版』の「第一章沿革、1町の沿革」において「明治四年（一八七一）、京都府管下となつたあと、御牧地区では明治七年、野村・市田村合併（野村設置）」<sup>註四十七</sup>と記されていることから、明治四年から七年までは

「野村」が存在し、京都府の管下であつたことがわかる。かかることから、安直に過ぎるが、「御や野村」とは「野村」を指すのではないかと推測する。

「野村」から船は六地藏を回り、宇治に着いた。降船後、新田の何某で休んでいる。そこで一酌を催した後、平等院鳳凰堂に詣つた。境内の糸桜が今を盛んに咲いていたが、見学人は居なかつた。「静かな里は古都なればと昔を思ふばかり」と感想を述べている。境内にある「扇の芝」も出しており、「くち残る扇の芝生露ミえて すゝろに寒し宇治の川風」と詠んでいる。

その後、興正寺の山吹を詠み宇治川に來ると、川橋は大水（洪水）の為に流れ、舟渡しになつており、一興。向こう岸にある茶屋某で昼食を取り、平井家に入りをしている茶師森江惣左衛門方に寄り、茶菓のなを請うた。森江惣左衛門とは「將軍家御用茶師」であり、維新直後の「御通茶師」の一人<sup>註四十八</sup>である。ここで美英は家法の茶などを注文した。

その後、黄檗山（萬福寺）を参詣した。境内はくまなく箒目が行き届いていた。大亀谷を御し歩いた。これまでの道すがらは柳桜（シダレザクラのことカ）の花が今を盛りの真つ盛り。川岸の柳も緑の糸春風にゆらいで散り遅れていた。奥に出ると、畑の中に堆く盛つてあるものについて里人に問うと、うど（独活）の畑と答えた。難波津にはなく、大変珍しく覚えたとある。

それから藤森伏見稻荷を参拝し、東福寺へ詣り回楼から水の滴る木々の若葉

を詠み、紅葉頃の秋を思いやった。

そして五条通りの橋を川伝いに、先計町（先斗町）の菊屋久兵衛方にて宿。入湯後に酒にて心よく、すぐ寝た。

二十四日は、昨日は草臥れて臥し、辰の半刻（朝八時四分<sup>註十九</sup>）に皆と日を待ち朝食。二条の馬場邸内に寄留をしている角倉氏を訪ね、伊織と泰之介を同伴して帰宿した。

快晴なればと、打ち揃って東山を遊歩（散歩）した。

祇園の神社（八坂神社カ）、花頂山東大谷（総本山知恩院）、丸山（円山）も見物。清水寺の拝殿で休んだ。音羽山（清水寺）は絶景。洛中の眺望は、左手は八幡山から淀川を遠く見、昼の風景はいわん方なしと絶賛をしている。

そこから鳥辺山西大谷（大谷本廟）を参拝し、香花を申し付け、美英の先祖の墓所にも参拝した。そこから三十三間堂大仏殿へ行き、参詣を行った。

陽が落ちる頃に四条に戻り、御旅町を散歩し、高瀬川三条の「生亀楼」で酒肴と夕食を摂っている。「生亀楼」については、石田有年編『都の魁』（明治十六年十月発行）の「料理商の部」に記載がある。その記述によると所在地は「木屋町三条上ル町」で、「生洲 御料理」を看板料理としていた。「生洲」とは「生質料理」のことである。

食事後に角倉家らと立ち別れ、暮半頃に帰宿した。

美英らが歩いた河原町と木屋町には、前年の明治三年（一八七〇）十二月には「木屋町二条界限」<sup>註二十</sup>に舎密局の仮局が開局をしている。舎密とは「オランダ語の化学（シエーミー：chemie）を漢字に当てはめたもので、「これから実行に移されようとする産業の復興・近代化政策を科学的に支えようとするもの」<sup>註二十一</sup>であった。

明治四年（一八七二）二月十日には、「河原町二条下ル一ノ船入町の元長州藩邸」<sup>註二十二</sup>に勸業場を設け、府の勸業課を置かれた。美英らは、町の復興と近代化に向けて近代産業の創業と始動が行われている中を歩いたのである。

二十五日は辰刻（午前八時）頃に起床した。角倉家の田鶴女が来たので菓子と酒肴を出した。田鶴女は昼前に帰宅した。田鶴女とは角倉家の誰のことか不詳である。

午後は上御所大内（京都御所内裏のことカ）を拝見し、北野御廟（北野天満

宮のことカ）を参拝した。上御所については瀬川光行発行兼編集『日本之名勝』（明治三十三年二月三十一日出版）によると、「明治遷都と共に、全く廢地に帰し、今は開きて広漠なる遊園地とし、之を御苑と称せり。」<sup>註二十三</sup>と記されていることから、明治初年には御所は「廢地」となっていたことから、御所敷地内への立入は自由であったことが窺える。

北野御廟では茶種の御供を賜うとして、勅使の北野御廟に参向があり、群衆をしていた。

その後、今宮にある大徳寺と加茂神社（上賀茂神社のことカ）を参詣し、大徳寺の門前にある極道舎茶屋にて休みを取った。ここで酒肴を取ると膳が速く出た。その様は茶人をめぐるもてなしに似ていると言うと、奥に入ってしまった。

美英一行が酔いを覚えぬ道すがら、いずれも群衆が花に浮かれる風情は大変面白く、昨今は腰打ちも及ぶべくとの感想を述べている。

帰宿し入湯後は京地元名産の肴などを頼み一酌した。

戌刻（午後八時）頃に再び酔い、臥した。

二十六日は、朝に角倉家の者と家来の沖庸造が来て、明日の嵐山花見の案内を約束して帰宅した。

今日からは本山本願寺（西本願寺）の参詣の都合により、西六条の天満屋佐兵衛方へ旅宿を変えている。早目の昼飯の後に糸久の宿に立ち寄り、四条通にある佛光寺と東本願寺を参詣した。

午の半刻（午後一時）に、六条の天満屋佐兵衛方に着いた。天満屋とは、大阪毎日新聞社京都支局編『維新の史蹟』（昭和十四年六月一日発行）によると「下京區油小路花屋町下る西側」<sup>註二十四</sup>に所在した旅館である。同書に収録をされている油小路花屋町角菓子商羽田増吉氏（七二二）の話によると、「天満屋の主人は小畑佐平といふ人で、世間からは天満屋佐平と呼ばれてゐた。」と記されており、美英が宿泊をした明治四年の時の主であったことが一致する。

その後、美英が六条を通行中に知った、西六条の茶道である岩城紹清を訪ねた。紹清に連れられ、紹清の案内で両御堂（東本願寺と西本願寺）を参拝した。

東本願寺では飛雲閣の開扉を願い、御殿廻りから悲雲閣（飛雲閣のことカ）を一見している。

未の刻(午後二時)に帰宿。何刻かは不詳であるが、紹清氏の紹介により藪内紹吉宗返に臨時茶会の案内を請うた。その結果、藪内家は美英ら一行の為に茶会を催した。

申の刻(現在の午後四時)に美英は青木宗鳳と為蔵を連れ、紹清同伴で参会した。殊更に数寄の道であるから満足し、酩酊をして初更頃に帰宿した。

当時の藪内家は、九世竹露(文化七年〜明治七年 一八一〇〜七四)の時代である。しかし、美英が「藪内紹吉」と記している事から、十世休々斎(天保十一年〜大正六年 一八四〇〜一九一七)が亭主を務めたと考える方が妥当であろう。

二十七日は暁に本願寺へ農朝参詣し、帰宿後に朝食を取った。

その後、藪内家に昨日の御礼を述べて帰宿した。

辰の刻(午前八時)に立出して島原の遊郭を一見し、太秦の広隆寺に参詣後、その門前で一休みをしている。

午の刻(午前十二時)頃に嵯峨野に着いた。角倉家の田鶴女が先廻りをして船の用意をしてくれ、酒肴を申し付けた伝言も請けており、すぐに乗船した。

嵐山に現存する「観月橋」は、「明治二十一年十一月」<sup>註五十五</sup>に架けられた橋であり、美英一行が訪ねた時には無かった。

美英は、大井川から赤岩の渚まで差登(茶道力)を行い、松中のもてなしに皆が酔けた。

山桜は今を盛りで、いわゆる咲きも残らず散りも始めず十分の頃であった。

兎角花の時は風雨の障りで、満開の見物はこの地の人々も殊更良いと噂し合っていた。川岸の茶店は貴賤群衆で立錫の余地もなきまでの雑踏の勢いであった。

大堰川の戸難瀬の滝浪、山桜の風景は、なかなか映えては及ばなかったと記している。

美英は次の二首を詠んだ。

折りよくもをふてとるかなすともすれハ

花にハ風情御者るならひを

嵐山花にむ可へハ難波にて

見る月雪ハたもとなをき

申の刻(午後四時頃)に上陸し、名残惜しくも名産の花を後にした。

徒歩で梅の宮(梅宮神社のことカ)を参詣し、壬生寺を廻り、丙の刻(午後十一時〜午前二時の中の二時間)過ぎに帰宿した。

入湯後に一酌を催し、昨日の余話をしていたら夜が更けた。

明日は難波に帰京日であるので何某と家土産の用意等にて供なども、更に臥した。

二十八日は、暁に御堂始で興正寺の農朝に参詣し、帰宿後に朝食を取った。

今日は利休居士の正当忌日に付き、藪内家も利休居士へ供茶の例式であり在釜の案内があり、美英は行つて配膳を行った。懐石料理の「配膳」を行う事は正客の役割であることから、美英は正客として招かれたことがわかる。床には

名高い利休居士の「名残の文」が掛けてあり、初見した。

辰刻(午前八時)に宿を出て、伏見の近江屋小兵衛方に寄り三十石船を一艘頼み、酒肴飯の用意もさせて昼食後に乗船した。

船中で雑話、折々一酌を催した節に、春雨がしめやかに降り郭公の長音も聞こえ、風景はこれ又良かった。初更け前に帰った。

旅の行程中の記録はここまでである。

京都市内に於ける美英ら一行が使用した交通機関は記録をされていない。しかし、明治四年の京都市内の交通機関については、水上交通は淀川と京都市内

を結ぶ水運は「旧来の高瀬川が、明治期にも引き続き活用」<sup>註五十六</sup>をされており、

「伏見から天満橋上手までのいわゆる淀川筋は、江戸時代よりひき続いて過書船・淀川荷船・伏見船の独占区域」<sup>註五十七</sup>で、「明治二年(一八六九)十一月、

一般人の西洋型船舶の購入建造が許可されて明治三年から四年にかけて、淀川に外輪式の蒸気船が走り出し」<sup>註五十八</sup>であった。

美英ら一行が帰路に利用した三十石船は、伏見からチャーターをしたものであると考えられる。

三十石船とは「長さ五丈六尺(十七メートル)、幅八尺三寸(二・五メートル)、船頭が四人付き、乗客定員は二十八人だった。三十石船は京都・伏見の

豊後橋(現・観月橋)と大坂・天満橋間の淀川を、下りで半日か半夜で大坂・八軒屋に着いた。上りは船は一日か一晩で京都・豊後橋に到着した。便数は朝

晩二回で、大坂と伏見間を定期に双方から上下した。乗船場は大坂側が八軒屋、東横堀、淀屋橋の四カ所<sup>註五十九</sup>で、京都・伏見側の方が京橋、蓬莱橋、阿波橋、平戸橋の四カ所<sup>註六十</sup>であるが、美英らは「昼飯後」に乗船をしていることから、チャーター船を利用したのではないと判断した。

陸上交通は、人力車については「西京（京都）にては数十台に過ぎず、草津には一台のみ」と報じたのは、明治四年十二月の『京都新報』<sup>註六十</sup>で、明治四年には京都市内には人力車は数十台が存在していたことがわかる。

馬車については、明治四年時点においては不詳である。<sup>註六十一</sup>

明治期前半における京都の馬車事情は、「明治期の前半において、京都はさしたる道路政策もなく、したがって道路整備も行われていなかった。」<sup>註六十二</sup>で、道路整備に伴う新交通システムの導入は遅かったようである。

美英らの在京中には、角倉家の人々に会って夕飯を共にしたり、東山での花見に興じたりもした。

嵯峨野に於いては、角倉家の「田鶴女」という女性に船の手配等をしてもらっていた。これらは、大庭屋平井家の九代にあたる平井次郎右衛門信徳（美在）の妻であるが嵯峨の角倉帯刀から嫁いでおり、角倉家は親戚であり、嵯峨野方面の事については角倉家に頼ったのであろう。

当記録に出てくる角倉伊織は、明治二年（一八六九）三月二十四日に嵯峨川の高瀬船の支配を御一新により罷免<sup>註六十三</sup>をされており、高瀬舟の支配は明治政府の管轄であった。

茶の湯関係では、二十六日に六条に住している茶道の岩城紹清を、同日夕方は紹清氏の紹介により、藪内紹吉に臨時茶会の催しの案内を請うたところ、午後四時に茶会を催してくれた。この茶会に美英は紹清氏を伴い、青木宗鳳らと四人で参会した。

二十七日には、嵯峨の大井川（大堰川カ）の船下り中に「差登（茶道カ）し松中のもてなし」を行っていた。

以上のことから、大庭屋平井家の信仰面については、三代の大庭次郎右衛門は子孫繁栄と「家」の存続の為に先祖達の供養塔を建てて願掛けを行っていたことと、十代の平井治郎右衛門美英は、店の下男と下女を同行して京都への花見旅行中に檀那寺である西本願寺に参詣し、先祖の墓所にも詣るなど、店員

も家族同様の扱いであったことを窺うことが出来ると共に、家として先祖への敬虔な思いと願いを共有していたことが読み取れる。

旅の記録に関しては、十代にあたる平井治郎右衛門美英が残しているが、他の歴代当主については管見では不詳である。明治四年に催された右に紹介した日記では美英の師であり、その茶道を受け継ぐ青木宗鳳如習齋と共に、歌や茶の湯を楽しんだ様子がわかる記録であった。

平井家には、美英の筆によると考えられる旅日記が未だ残っている。

### 第三節 大庭屋平井家と青木遠州流茶道

#### (一) 青木遠州流茶道について

初代・青木宗鳳（凡鳥）は、大坂における「青木遠州流茶道」の初代の家元である。当節では、「青木遠州流茶道」と青木宗鳳家の絶後に家元を継いだ大庭屋平井家の十代にあたる美英の茶道について考察を行いたい。

「家元」の定義について西山松之助氏は、『角川茶道大辞典』の「家元」項において「技能を主とした文化領域で、その技能の一流一派の文化集団を統率する人あるいは家。」<sup>註六十四</sup>と規定した。

「流派・流儀」の定義は、林左馬衛氏が同辞典の中で、「一代限りで茶風が終わってしまう教寄者に対して、代を重ねて茶風を継承していく茶家を、家元として別置することができる。この代を重ねて茶風を維持してゆくために、教授内容の体系化が行われるが、これが流儀である。（中略）流派の共有財産の中心が流儀であるということになる。」<sup>註六十五</sup>と規定した。

ここで、表千家と石州流の流派展開についてみていこう。

表千家については、筒井絃一氏が「元禄三年から享保時代にかけての四十数年間は、いくつかの点で茶の湯の世界が新しい展開をみせた時期である。その顕著な例のひとつは、経済的余裕を持ちはじめた都市民への茶道への参加であり、いまひとつは、多くの流儀の成立である。さらには、三千家や藪内家をはじめ、三斎・遠州・宗和・石州の系統から次つぎと新たな茶家が独立したのも

また、この時期であった。(中略) 千家の系統からは宗徧・藤村庸軒・杉木普齋らが新しい一派を立てると同時に、久田流・堀内流・松尾流・三谷流という新しい分派も成立した。」<sup>註六十六</sup>と述べ、元禄三年から享保時代にかけての四十年間は、茶の湯の世界が新しい展開をみせた時期で、多くの流儀が成立したが、千家の系統からは宗徧・藤村庸軒・杉木普齋らが新しい一派を立てると同時に、久田流・堀内流・松尾流・三谷流という新しい分派が成立したことに言及した。

石州流については、西山松之助氏が「石州流が幕藩体制に密着した武家社会の茶として発展したのに対し、千家や藪内流は武家に限られることなく、むしろ一般庶民に流布することになったからであろう。それがどのような展開をたどったかを要約すると、石州流は各藩に分流して、そこにそれぞれ別派が成立した。宗源派・鎮信派・野田派・大西派・大口派・怡溪派・伊佐派・不味派などがそれぞれである。」<sup>註六十七</sup>また、林左馬衛氏が「石州流は、千家の茶と異なり、一子相伝という形式で一つの家元を守る方向に向かわず、免許皆伝という形式によって流儀を伝えていった。したがって、その流儀の広がりには、極めて多岐多端にわたり、全体像を復原することも、いたって困難であろうかと思われる。」<sup>註六十八</sup>と述べ、石州流は一子相伝という形式で一つの家元を守る方向に向かわず、免許皆伝という形式をとったことで、宗源派・鎮信派・野田派・大西派・大口派・怡溪派・伊佐派・不味派など多くの分派を生んだことを指摘した。

遠州流の流派の系譜についての研究としては、廣田吉崇氏論文「流派としての遠州流の展開―その系譜と点前―」<sup>註六十九</sup>がある。廣田氏は遠州流を遠州流宗家、小堀遠州流、玉川遠州流、林義牧派遠州流、山莊流、義牧遠州流、肥後熊本藩の遠州流、青木宗鳳流、紫遠州流、大和遠州流、壺月遠州流の十一派に分け、その系譜と点前を考察した。そして「遠州流のあり方として、小堀家の嫡流が近世以来茶の湯に関与している」<sup>註七十</sup>と述べ、「遠州系流派には伝承過程が不明なものもないではないが、その美意識に着目して小堀遠州への憧憬により支えられてきた側面があるように感じられる。」<sup>註七十一</sup>と指摘し、流派がわかれたものの、その根底には小堀遠州の美意識があったことを指摘した。

では、「青木宗鳳の茶道」とは如何なる流派であったのであろうか。これを明らかにするには、嘗て平井家が所蔵していた「浪華文庫」の存在が大きい。

これは現在、一般財団法人裏千家今日庵文庫に所蔵をされている。

浪華文庫についての研究は、山田哲也氏の二編の論文に詳しい。それは、「茶書によって家元を目指した茶人青木宗鳳」(千宗室監修・筒井紘一編『茶道学体系 第十巻・茶の古典』所収) 平成十三年四月八日 淡交社 と「浪華の茶匠初代宗鳳・青木凡鳥」(熊倉功夫編『茶人と茶の湯の研究』所収) 平成十五年十二月二十日 思文閣出版 である。山田氏は青木宗鳳の表記を「茶書によって家元を目指した茶人青木宗鳳」においては「宗鳳」、「浪華の茶匠初代宗鳳・青木凡鳥」においては「初代凡鳥をその剃髪後の名である「凡鳥」」<sup>註七十二</sup>としている。(拙稿では、山田氏論文「茶書によって家元を目指した茶人青木宗鳳」を「茶書論」、「浪華の茶匠初代宗鳳・青木凡鳥」を「茶匠論」と略称して記す)。

浪華文庫の形状については、「茶書論」において「宗鳳により調製された樺材の縦長の本箱五棹に分けて納められて」<sup>註七十三</sup>いると述べている。

全冊数については、「茶書論」の中の「八十八部百四十九冊」<sup>註七十四</sup>、「各々の第一丁目には、「紫雪庵陳本印」が捺されており、またほとんどの冊子の前後の遊び紙、あるいは最後の丁には、青木家の後に本叢書の所蔵者になった大阪の大庭屋平井家により、「平井氏」印、「貯月菴」印が朱肉の色も鮮やかに捺されている。」<sup>註七十五</sup>ことにより、美英がこれを受け継いだ事が証された。

「浪華文庫」の目録については、「茶書論」の中で全て公表<sup>註七十六</sup>されており、「一箱毎に書籍毎に書名・冊数・内容等、装訂の順で詳しく記録がなされている。初代・凡鳥の著作や編集になる書は五十二部九十五冊を数え、部数でみると全体の六割近くを占めており、それらの装幀は「紺地、または萌黄地の緞子を使って調製されており、宗鳳以外の著作者によるものは何れも白地の紗綾紋か、草花紋の唐紙により調製されている。このことは、宗鳳が自著と他書を明確に区別していることを示すもので、ここに宗鳳の浪華文庫における自負をみることができよう」と指摘を行っており、初代・凡鳥が当文庫をまとめるにあたり収蔵本の自他の区別を付けた事は、自流の創立に関わる事であった。<sup>註七十七</sup>

「浪華文庫」を残した初代・凡鳥(青木家歴代は「宗鳳」を名乗っているの)で、拙稿では代目・雅号の順で記す。については、「茶書論」においては「浪華文庫第三箱に収められている『利休茶道百首』奥書、第五箱に収められてい



る『茶祖伝』などによれば、大坂大江岸(天満八軒屋付近)に住し、俗名は青木儲左衛門、諱を勝英。紫雪庵一統子、青水蒲とも号し、剃髪後は凡鳥と称した。大坂において遠州流の茶家として活躍し、紫火棚、朱手付煙草盆などの好物を残し、明和二年(一七六五)十二月、七十六才で没した。<sup>註七十八</sup>と述べた

初代青木宗鳳(凡鳥)の茶系について山田哲也氏は『茶書論』で、『茶祖伝』及び『壺中炉談』によると、宗鳳の茶系は堺天王寺津田宗及に始まり、大徳寺第五十六世住持をつとめた、その子息江月宗玩―黒田庄兵衛(正玄)―黒田正円―山田乗仙―宗鳳へと続くものとし、自らを「津田宗及六世之台子」と位置付けている。<sup>註七十九</sup>と述べ、初代・青木宗鳳の茶系は津田宗及に始まり、宗及の子息である江月宗玩―黒田庄兵衛(正玄)―黒田正円―山田乗仙―宗鳳へと続き、初代・青木宗鳳が自らを「津田宗及六世之台子」であると位置付けていることを指摘した。更に、「遠州公の御一生の勝れ候事共を、宗及流の内へ取込たるを今の遠州流と申物也」として、宗鳳の受け継いだ遠州流茶道が、宗及流を核として、遠州の茶風を取り込むことにより、成立したことを明らかにしている。<sup>註八十</sup>と述べ、更に、

『茶器名物図彙』の記述を追ってみると、黒田正玄の項に、遠州より台子伝授を受けたことを記し、さらにそれが正円に伝えられ、その正円の弟子である山田乗仙などの時代、元禄年間になって京・大坂の地で遠州流が盛んになり、それも山田乗仙が京都から大坂に活動の拠点を移したことによるとしている。そして、乗仙の子、大用の没後の状況が次のように記されている。

当代上町ニ青木氏トイヘル流義ノ茶師アリ。是等モ元祖凡鳥と云ハ、右乗仙ノ弟子ナリ。山田ノ家死、跡無之。其後遠州流ヲ表ニシテ、凡鳥自己ノ差略ヲ被加、今以相続也。依之、元祖乗仙ノ門人、塩屋・升屋・肥前屋・川井氏等、右青木凡鳥ト不和ト相成リ。山田ノ古キ門人ハ、凡鳥ノ茶を青木流ト唱へ、遠州流トハ云ワレス、

この記述によれば、初代宗鳳が師家である山田家が絶えた後、自己流を加味した遠州流を称したため、山田家の古参の門弟と仲が悪くなり、彼ら

は宗鳳の流儀を遠州流とは認めず、青木流だと評したという。<sup>註八十一</sup>

と述べた。

更に山田氏は、「宗鳳が自らの茶系を操作し、遠州流でありながら宗及台子伝授六世を名乗ったのは、利休の血筋を引き、その茶法・茶風を受け継いだ千家の台頭に対抗する必要性に迫られたものであった。当時の千家が家元制度を確立し、七事式を創出して茶道の大衆化に適応していく状況のまっただ中に、宗鳳は遠州流の茶家として身を置いていたのである。ここにおいて宗鳳の対抗が、遠州流に宗及流を融合させた「遠州流」の創出であった。そしてその権威としての八八部四十九冊に及ぶ膨大な茶書の作成であった。血筋と茶風に対し、茶書と茶風で臨んだのである。言い換えれば、茶書をもって「家元」を目指したと言えよう。<sup>註八十二</sup>と述べ、初代宗鳳が遠州流を習得しながら宗及台子伝授六世を名乗ったことは、千家の台頭に対抗する必要性があったと述べ、宗鳳は遠州流に宗及流を融合させた遠州流の創出であり、その権威としての茶書「浪華文庫」を執筆し、「茶書をもって「家元」を目指したと言えよう。」と指摘した。

初代・凡鳥の茶道論は、『茶書論』の中で「浪華文庫各冊において宗鳳は「正道正実の茶」というものを主張」しており、それが記された書は『正道虚実論』と『喫茶南方録細註』一、二、三はじめに収められた『紫雪庵凡鳥茶意』の二本である。」と指摘し、その内容を紹介しながら茶道論を追究した。<sup>註八十三</sup>

これらの書に言う初代・凡鳥の「正道正実の茶」とは、山田氏は「物に惑わされることなく初心を保ち、点前をよく鍛錬し、茶の故実を知っていてもよく立場をわきまえて、物知り自慢することなく、茶道全般に知悉し、禅にのみ精神性を偏らせずに行うものであり、世間一般で行われている他のことと何等変わることはないのだから、むやみに口伝等ということはすべきではないというものである。(中略)この宗鳳の主張はさほど特異なものではなく、むしろ当然と言っているもので、特段ここに高い精神性や思想性は見いだせない。しかし宗鳳がこのような主張をわざわざ展開したのは大きな理由がある。(中略)千家の茶と宗鳳の茶の立場の違いを、千家批判として鮮明にせざるを得なかったのではなからうか。」<sup>註八十四</sup>と述べ、初代・凡鳥の茶の立場の違いが千家

批判にあったことを指摘した。

また山田氏は『炉台子一件』について、「本書は七冊にも及ぶ膨大なものであり『風炉台子一件』四冊と共に、津田宗及以来宗鳳に伝えられたという台子点前を詳細に書き記したものであるが、第十一巻の奥書によれば、「紫雪庵凡鳥」から「青木宗鳳老」に宛てられたものである。このことは初代宗鳳から二代宗鳳へ台子点前が相伝されたことを示しているに他ならないのである。そのような書物が浪華文庫に収められたということは、宗鳳の「遠州流」が継承される証しとして、本書を始めとする浪華文庫の茶書群が存在したことを物語っていると言えるのではないだろうか。宗鳳の膨大な著作群は、彼の「遠州流」において相伝の証しである秘伝書として機能したのではないだろうか。そうであるならば、ここに浪華文庫成立の意味を見いだすことができるのである。この意図は蔵書印の印文「紫雪庵伝本印」の「伝本」という文字に窺えよう。」<sup>註十五</sup>と述べ、津田宗及以来、宗鳳に伝えられた台子点前を初代・凡鳥から二代・宗鳳に相伝をしたことが奥書に記され、浪華文庫に収められた意味について、凡鳥茶道の相伝の証として「浪華文庫」が機能し、初代・宗鳳の著作自体が「相伝の証」そして「秘伝書」として機能し、それが浪華文庫の成立の意味であることを見出した。これを「蔵書印の印文「紫雪庵伝本印」の「伝本」という文字から指摘した。

青木宗鳳家について知りうる文書が、大庭屋平井家文書の中にも残されていない。袋の表に「青木宗鳳ヨリ皆傳調書在中」(史料1-6)と記されており、収められていた書類は、青木宗鳳家五代の「号」及び没年が記された「青木家代々記」(史料1-7)と青木家が台子点前を伝授した門人名が記された『臺子傳授』(史料1-8)の二種類である。

「青木家代々記」に基づき、青木家初代から五代迄の全ての生没年を探ると、次の通りである。

生年	没年
・初代凡鳥 元禄二年 (一六八九)	明和二年 (一七六五)
・二代新柳軒 享保十四年 (一七二九)	寛政五年 (一七九三)
・三代習々齋 安永元年 (一七七二)	文政十一年 (一八二八)

- ・四代貯清齋 寛政七年 (一七九五) 天保九年 (一八三八)
- ・五代如習齋 文政二年 (一八一九) 明治四年 (一八七二)

次に、『臺子傳授』の紹介を行う【史料1-8】。これは、青木家初代・凡鳥から五代目・如習齋が台子を各地に住する門人達に伝授を行った記録である。『臺子傳授』には、享保十三年(一七二八)から文久元年(一八六一)の間に、初代・凡鳥と五代・如習齋から台子点前を伝授された二十二人と、寺院一件の国と氏名及び伝授がなされた年月日が記されている。

寺院は「浪速下寺町萬福寺」の事で、大阪府大阪市天王寺区下寺町一丁目三―八十二に所在する慶立山萬福寺のことである。

国別では、大坂が八人と一寺、長州(萩、赤間)が七名、備後三原が一名、不詳が六名である。

職業別は、藩の茶道三人、商人二人、寺院一件が判明したが、残る十三人については不詳である。

藩の茶道職であった人々は、初代・凡鳥から伝授を寛保二年(一七四二)四月十九日に受けた岸和田藩の大森陶齋と山西國興、そして五代・如習齋から文久元年(一八六一)四月五日に伝授を受けた備後三原の久保玄佐である。

岸和田藩の茶道と記されている大森陶齋と山西國興については、傍証がないので不詳である。

備後三原の久保玄佐は、安芸広島藩三原浅野家十二代藩主浅野忠英(文政十二年)明治三十年(一八二八)一八九七)の茶道である。それは、京都・宇治の「片岡道二家文書」に残されていた史料から判明した。<sup>註十六</sup>

大庭屋平井家の中で伝授を受けた当主は、凡鳥から寛延三年(一七五〇)三月十一日に受けた大場治七郎貞永と、習々齋から享和元年(一八〇一)十月二十三日に受けた七代・平井治郎右衛門信美である。

大場治七郎貞永は、右に「平井治郎右衛門息」と記されていることから、六代にあたる平井次郎右衛門と思われる。元服時には「臺子傳授」に記されている「治」の字が異なるが「次七郎」と改名しており、法名は「實松院淨因良貞居士」で、平井家の他の当主名にはない「貞」の字が一字入っていることがその根拠<sup>註八十七</sup>である。

【表1-1】は、「青木家代々記」の青木家歴代の生没年と、『臺子傳授』に記録されていた伝授を受けた人々の伝授年月日を合わせたものである。

【表1-1】を見ると、生没年表上では、初代・凡鳥の時に伝授を受けた者は十四人、二代・新柳軒の時には零人、三代・習々齋の時には二人、四代・貯清齋の時には零人、五代・如習齋の時には三人であったことがわかる。

ここで一つの疑問点が浮かんでくる。それは、生没年上、三代・習々齋の在世中に伝授を受けたであろう筈の「平井次郎右衛門信美」と萩の「尾崎治エ門」について、『臺子傳授』には「初代凡鳥ヨリ」と記録があり、凡鳥から伝授を受けていることである。

この理由は、平井次郎右衛門信美と尾崎治エ門は、初代・凡鳥の名で台子伝授を受けたいと願ったのか、又は、三代・習々齋は台子伝授を行う時は初代・凡鳥の名のもとで行っていたのか、二つが考えられるが、これを解明出来る史料は見当たらない。

「浪華文庫」の名称については、「浪華文庫」と称する一群の茶書は、明治四年の五代宗鳳の没後、有力な門人であった大庭屋平井家に移された。時の当主美英により、本叢書の目録「青木宗鳳師筆遠州流茶道奥伝并諸流一件目録」が作成されているが、これには「浪華文庫」の名称は見当たらない。このことは、青木家から平井家に移された時点においては、いまだ「浪華文庫」とは称していなかった事実を示すものであろう。つまり、本叢書の名称は、青木家から平井家に移された後、旧所蔵者栗田添星氏が入手するまでに付けられたものと考えられる。<sup>註十八</sup>と指摘した。

筆者が平井家に取材に入らせて頂いた時に、浪華文庫について、「家の中では、あれは「浪華文庫」だと言いならわされていたし、箱に書いてあった。」また「小学二年生の頃（昭和七年 一九三二）の小学校の休み時間に、自宅前に停められていたタクシーの後部座席に見覚えがある角が丸い五つの木箱が載せられ、運ばれて行った事を目撃していた。」<sup>註十九</sup>更に、「青木宗鳳流の遠州流茶道を先祖は伝えていたが、私たちの代になってから遠州流茶道宗家の直門としてお世話になっている」との話を承った。

山莊流を創出した高谷宗範の伝記に、「明治十九年頃、大阪江戸堀筋違橋西詰南入った所に青木習々齋宗鳳の流れを汲んで、遠州流の茶を教へて居

た貯月庵平井治郎右衛門と呼ぶ茶家があつたので先生は同僚であつた座光寺糾氏外二三の人と俱に此茶家へ入門して点茶の技を修め」、更に「平井貯月庵氏に就て青木宗鳳流の遠州式作法を學び、後小堀宗舟氏に随つて遠州正流の式法を修得されたのである、（中略）平井氏に就いて青木流を修められた際、既に幾多の関門を通過し台子の領域まで進入して居られた」<sup>註二十</sup>と記してある。このことに関して、大庭屋平井家所蔵の『當家貯月庵 茶会々記録』を見ると、明治十九年十二月十日から二十三年七月六日までの五十回の茶会記の内の十八回の茶会の客に「高谷恒太郎」「高谷」の名が記録されている。

美英が作成した『茶会々記集』（百三十二会分が記されている）の最初の頁に「遠州流茶事録」が記されている【史料1-11】。

そこには、「大庭屋平井家は茶道を遠州流に求め、庵号は聴松菴であつたが、美英が紫雪菴青木宗鳳宗匠に師事し、貯月菴と改めた。宗鳳は凡鳥と称し、大坂の人で斯道の名宗匠であり、没後に、同師所蔵の流祖遠州公伝来の秘書と共に継承した。そして、後嗣の為に貯月菴に於ける茶事会記を集録して斯道の参考とする。」と記されている。

美英がかかる茶道を嗜んでいた時期は凡鳥没後約百年後であり、師匠は五代青木宗鳳如習齋であつて初代の凡鳥ではない。この一見矛盾した記事については二通りに解釈することができる。一つは、当茶道を継承した代々青木家の当主は紫雪菴青木宗鳳凡鳥を襲名していた。もう一つは、美英は五代青木宗鳳如習齋に師事したが、如習齋はその茶道を紫雪菴青木宗鳳凡鳥から代々継承してきた師匠であるので、このように記した。前者については、管見では、明記された史料がない。後者も推察に過ぎない。しかしいずれにせよ、美英が嗜み、師匠の没後に浪華文庫と共に継承した当流派の茶道は、それを創出した初代青木宗鳳凡鳥の茶道であるといえよう。

そしてその茶道の流派名としては、これまでの史料等に「青木流」「青木宗鳳流」「青木遠州流」<sup>註二十一</sup>「青木宗鳳流遠州流」「青木宗鳳流遠州式」などが見られるが、「青木遠州流」とするのが妥当であると考える。

これらのことと、大庭屋平井家文書の、『大庭屋平井家系図』【史料1-2】、『遠州流茶道傳授扣』【表1-8】などを参照してみると、平井家十代美英は

前記「遠州流茶事録」に記されているように、茶会記を集録しつつ「青木遠州流」の家元として、その茶道を広めた。

その時期には幕藩体制の崩壊により、大名貸を営んでいた平井家は諸藩への調達金の大半が回収不能となり財政が逼迫したが、美英はやりくりしながら青木遠州流茶道を教えていた。『茶会々々記集』最後に収録された茶会（明治十九年二月十日条）の後で、『當家貯月菴 茶会々々記録』に収録された茶会記の数は次の通りであり、最後の茶会は明治二十五年十二月十八日条である。

年	回
明治19年	13
明治20年	26
明治21年	12
明治22年	4
明治23年	13
明治24年	14
明治25年	13
計	95

『大庭屋平井家系図』には、美英の妻ソノが「主人ノ意思ヲ嗣キ小堀遠州流茶道ヲ傳授賢夫トシテ令名アリ」と記されているので、美英も晩年には小堀遠州流茶道を傳授していたと思われる。

明治二十年代の大坂の茶道界では小堀宗舟の活動があり、高谷恒太郎等がその門人となっている。<sup>註九十二</sup>

茶道界のこの様な世情の中で、美英が没した時又はそれ以前に、青木宗鳳から美英が継承したような形で青木遠州流を次代に受け渡すことができなかつたのではないかと思われる。

美英が没した明治四十一年に家督相続した十一代平井龜之助は同年に没した。美英の妻ソノは美英没後も茶道教授を続け、三十名に伝書授与を行っていたことが『遠州流茶道傳授扣』に記されている。しかし、ソノの没年と同年の十二代平井次郎右衛門が家督相続した昭和七年に、浪華文庫が平井家から個人の手に渡った。そして現在、浪華文庫は一般財団法人裏千家茶道資料館の今日庵文庫に所蔵されており、平井家は遠州流茶道宗家の直門として茶道を嗜んでいる。

したがって、享保中期に紫雪菴青木宗鳳凡鳥によって創出された「青木遠州流」茶道は、初代青木宗鳳（凡鳥）↓二代青木宗鳳（新柳軒）↓三代青木宗鳳（習

々齊）↓四代青木宗鳳（貯清齋）↓五代青木宗鳳（如習齋）↓平井治郎右衛門美英（貯月菴宗徒）と、六代に渡り、昭和初期まで約二百年間続いたことになる。

最後に、前に述べた『花見能記』に、二十六日条に美英と青木宗鳳らが藪内家の茶会に参会をした茶会記が記されているので、これを次に紹介する。

二十六日の茶会は、西六条に住していた岩城紹清の紹介により、藪内紹吉宗返に臨時茶会の案内を請い、その結果、藪内家は美英ら一行の為に茶会を催した会である。

この茶会は申の刻（現在の午後四時）に美英は青木宗鳳と為蔵を連れ、紹清同伴で参会した。

当時の藪内家は、九世竹露（文化七年〜明治七年 一八一〇〜七四）の時代である。しかし、美英が「藪内紹吉」と記していた事から、十世休々齋（天保十一年〜大正六年 一八四〇〜一九一七）が亭主を務めたと考える方が妥当であろう。

美英は、藪内紹吉から招かれた茶会の茶会記を二十六日から二十八日迄の記録が記された野線紙上部の野線外に書き付けていた。【史料1-9】に挙げる。

この茶会は、茶室「雲脚席」が待合席であった。

三畳向切の茶室の床には「此庵ノ文口歌入」が掛けられていた。会記の末尾には、この文の内容らしき消息文が記されている。それは、千利休が二月二十五日付で一世藪内劍仲に宛てた文である。

消息文の内容は、「老様」―豊臣秀吉と「駿府様」―徳川家康によるしく。我に御与った聊かの知行をもらった為、このような仕合になったという文である。

年号が記されていないので深入りは避けたいところであるが、仮に天正十九年（一五九一）だとすると、「二月二十五日」は京都では一条戻橋で問題の木像がハリツケにされた日である。

これらから考えると、「かくなる仕合」とは、利休が同日に「辞世」<sup>じんせい</sup>「人世七十力困希咄」<sup>りきまいきとつ</sup>「吾這宝劍」<sup>わがこのほうけん</sup>「祖仏共殺」<sup>そぶつともにくず</sup>「堤我得具足の」<sup>つゝまゝ</sup>「一太刀」<sup>ひつさく</sup>「今此時ぞ天に抛」<sup>いまこのとき</sup>をしたため」<sup>なげうつ</sup>と、つまり、豊臣秀吉から死を賜った事ではなからうか。

藪内家が「利休に関するものとして、利休の晩年劍仲に宛てた「うらやましの文」と、利休が細川幽齋へ送った消息に劍仲が添書した「末期の文」を当家に所蔵している。」<sup>註九十四</sup>ことが知られているが、「うらやましの文」の消息文は美英が書き記していた消息文とは全く異なる。<sup>註九十五</sup>

次行には「ぢ□ふずらゝ、俄茶湯のてんゝ、八田舎者でもおかしかるへし（句読点筆者）」と、美英が藪内流の点法を見た感想を率直に述べており、藪内流の豪快な点前が、美英にはおかしく映ったのであろう。

腰掛には、唐物籐組長角蓑盆と古銅火入、葉入折紙、灰吹青竹が置かれていた。

茶室燕庵については、床柱の炉柱アテナグリ、框は真塗、壁は腰張に古紙が張られ、鼓張になっており、手前辺りは横曆張であったことを書き記している。

茶道具は、待合席には利休筆の「うらやましの文」、茶室燕庵には九条関白尚實公の懐紙を掛け、釜は道也作の霰。炭斗はナヨ竹製。

香合は古田織部から劍中（藪内家一世劍仲の事力）に伝来した織部マガキで、箱は五世竹心であった。

灰器は大桶焼。  
花生は五世竹心作の銘「壽光」で、花は木蓮と黄水仙であった。

水指は利休伝来の品で、劍中（一世・劍仲）の書付がある伊賀焼耳付で、茶人も利休伝来の品で「瀬戸耳付挽家」、箱は劍中（二世劍仲）。

茶杓は比良齋（六世の比老齋の事力）の夫人の作で、比良齋による銘「妹の袖」の書付があった。

薄茶器は唐物の朱六角で、薄茶盃は二世真翁の手造で、銘は「日華」であった。

菓子箱は、主菓子箱は虎屋の「都の錦」、干菓子は「雲脚煎餅」と「千代結」で、茶は上林製の「花ノ白」であった。

十世休々齋は美英の急な依頼で開いた茶会であったが、道具組は、待合席で大変貴重な掛物を用い、茶席では和物と唐物を取り合わせ、千利休とのつながりがある掛物や水指及び茶入、花生を用い、茶杓は六代比老齋夫人作、薄茶盃は二世真翁手造の品を用いていた。

藪内家にとっては「俄」の茶会であるが、休々齋は由緒ある藪内家秘蔵の品

々を取り合わせ、美英らをもてなしたことがわかる。

料理は、雲脚膳と小丸椀で供された。

向付は永楽焼の麦わらで、中には鮎の刺身、芽紫蘇、山葵、二杯酢。汁は竹輪豆腐と蕨。煮物は鱧の骨切と百合根及び若布。焼物は若狭の小鯛。漬物は大根。吸物は蓴菜と絞生姜。八寸は鮎塩煮と吹田の慈姑。肴事（強肴の事力）は柚湯葉とサキ海老であった。

食材は鮎、鱧、鮎、若狭の小鯛といった魚類、蕨、百合根、蓴菜、吹田慈姑等の野菜類、植物蛋白の湯葉、薬味には芽紫蘇、山葵、絞生姜を使用しており、季節の先取りと旬、そして京都名産物である鱧、湯葉を取り合わせた献立であった。

## (二) 美英とソノの茶道

美英の茶道は、近代黎明期の大阪における茶道界を鑑みる上で青木遠州流茶道の最後の家元であったことから、大変重要である。

平井治郎右衛門美英は、庵号と茶名を貯月菴宗徒という。

庵号の「貯月菴」の由来は、中国・北宋の詩人である蘇東坡が作った煎茶詩の一節から採られたものであるが、いつ頃に美英に庵号と茶名を与えられたのかについては、相伝状が管見では残っていないので不詳である。

平井家には、筆者は不詳であるが「貯月之字出典 東坡煎茶詩」と題簽が付いた一本の書軸が残されている。これを【史料1-10】に挙げる。

この詩から、美英の号である「貯月菴」は、「大瓢、月を貯えて春甕しゅんざうに帰し」から採られたことがわかる。

明治維新後における美英の職業については、末宗廣「大阪の茶人 傳記稿」『日本美術工藝』五十号所収）の「平井貯月庵」項によると、「明治となり藤田家の勘定奉行を勤め居りしとか。明治廿年頃は江戸堀筋違橋西詰南入に居住し、茶道指南をなし居り由。」<sup>註九十六</sup>と記されている。

美英が、藤田家―藤田伝三郎（号香雪 天保十二年五月十五日―明治四十五年三月三十日―一八四一―一九一二年）の勘定奉行を勤めていた時期については不詳であるが、明治二十年頃には江戸堀筋違橋西詰南入（現在、大阪府西区

江戸堀一丁目付近)に住み、茶道指南をしていた。

妻ソノは、彼の没後はその後を継ぎ、茶道教授としてその名が知られていた。当節では、美英の茶の湯について、彼が残した茶会記である『茶会々記集』の分析と考察及び青木遠州流茶道の家元としての活動、そして美英没後に開催をされた追善茶会について、美英の妻であるソノが果たした役割を含めて述べていきたい。

### ① 『茶会々記集』における茶会

美英は『茶会々記集』を残している。これは、慶応二年(一八六六)十月十五日から明治十九年(一八八六)二月十日にかけて自らが催した茶会について記した茶会記である。

『茶会々記集』は、現在は平井家に保管されており、その状態は極めて良い。形状は、「茶会々記集 三」の題簽が中央に付され、観世紙綴りが付けられた四方帙に包まれており、三分冊になっている。

本の形状は横本で、各冊の法量は左記の通りである。

- ・『茶会々記集 一』縦十二cm、横九cm
- ・『茶会々記集 二』縦十二cm、横十五・五cm
- ・『茶会々記集 三』縦十二cm、横十五・五cm

茶会記は全て美英の自筆であり、後日の訂正箇所は殆ど見られない。

茶会記の最初の頁には「遠州流茶事録」が記されている(前述)。

当茶会記の記録方法は、年月日、場所、招待客、開始時刻、茶道具、料理の順で記され、年月日の上に赤丸が付されている。

茶会の場所は、「遠州流茶事録」の中に「当菴ニ於ける茶事會記」と記されていることから、全て大庭屋平井家の福島別業(現、大阪市福島区内にあった別邸)の茶室、「貯月菴」であると考えて良いであろう。かかる茶室がいつ建てられたのか、また建築などのことについては不詳である。

茶会の会数は総計百三十二会分が記されており、各冊の収録年代と会数は【表1-2】の通りである。

【表1-2】を見ると、各冊に記された会数は同一ではない。

年の途中の月から次冊に書き連ねているところを見ると、美英はキリが良い年に分けて茶会を記したのではなかったことがわかる。

次に各冊の記録年数については、一冊目には約十六年間分、二冊目には約三年間分、三冊目には約一年間分が記されており、各冊の記載年数と会数について、一年間当たりの茶会の会数頻度を見ると、三冊目の三十五会が一番多い。

次に、年別の茶会数についての分析を行う。年別に茶会数をまとめたものが【表1-3】である。

ここからわかることは、幕末期から明治初期(明治十年)にかけての茶会数は明治三年(一八七〇)の五会が最多で、慶応三年(一八六七)から明治元年(一八六八)、明治四年(一八七二)から同七年(一八七四)、明治八年(一八七五)から同十一年(一八七八)にかけての延べ九年間はゼロ会であるが、明治十二年(一八七九)から再び茶会の記録が始まり、明治十八年(一八八五)は三十八会の最多を数えることである。

明治十二年(一八七九)以前が少ない理由は、明治元年(一八六八)の銀目廃止などにより、大庭屋平井家が両替商として如何に持ちこたえられるかの騒ぎで茶の湯どころではなかったことと、近代黎明期におけるの煎茶(会)の盛行により、茶の湯の会はあまり大っぴらに開くことが出来なかったことによるのではないかと<sup>註九七</sup>と考えられる。

### ② 『茶会々記集』に見る交友と茶道具

次に、貯月菴宗従の青木遠州流茶道について、茶道具と参会者についてみていきたい。尚、全ての茶会記を【表1-4】にまとめたので、参照して頂きたい。

茶会記は、慶応二年(一八六六)十月十五日から十二月十四日にかけて催されたものが初回である。この茶会記を【史料1-12】に挙げる。<sup>註九八</sup>

この茶会は、美英の福島別業内の茶室「貯月菴」における茶会で、美英の師匠である青木宗鳳が「亭主」としての役割を果たし、平井治郎右衛門つまり美英が客として参加をしている。

更に、この茶会の在り方について注意すべきことは、席主と茶会が催された

期間の在り方である。前者については、師匠が弟子設営による茶席で茶会を催すことは大変珍しいことである。会記中には何も記されていないが、茶会が約二ヶ月の長期間にわたっていることから、何か特別な茶会であったのではないかと考えられる。

客は住友吉左衛門（住友家十二代・友親）、白山善五郎（四代）、木田庄左衛門と美英の四人であった。

道具立ては、小堀遠州家の好みの道具が四つ（待合火入、掛物、花入、水指）、松平不味好みは茶入、表千家は釜の各一つであった。

料理は、向付は鯛の造りに蕪おろしのおんかけを掛け、山葵が添えられている。汁は合わせ味噌に焼豆腐のバチ切りと叩き袖及び五分芹が実である。菜は、小鯛の骨抜きと大徳寺昆布及び蒟の羹、焼物は鱧の子の釉庵焼、香物は大根、吸物は粒椎茸と割いた梅肉、取肴は赤穂の干イカと納豆で、全体的に見ると旬の具材と保存食とを取り合わせた献立であった。

二回目に記されている茶会は、明治二年（一八六九）三月に催された茶会である。これを【史料1-13】に挙げる。

この茶会では亭主を平井次郎右衛門貯月が務め、客は第一回目と同様に住友吉左衛門、白山善五郎、木田庄左衛門ら三人と、新たに古筆了仲（十代・栄村）、植村平兵衛の合計五人が招かれている。

氏名表記を見ると第一回目と異なるのは、亭主である平井次郎右衛門つまり美英で、「貯月」という菴号が加わっていることである。かかることから、美英は明治二年三月を以て「貯月菴」の菴号を名乗ることを許されたのではないかと考えられる。

次に道具立てについては、待合は凡鳥好朱手付蓑盆、蓑入は独楽、手炉は播磨作、火入は絵唐津の筒を用いている。

茶席は、掛物は大徳寺百七十世清嚴宗渭の一行物「緑柳舞春風」、釜は庄兵衛の作で東山御物写しの「眞形四季竹ノ絵」である。香合は「型物香合一覧」で「西三段目前頭十枚目」の「染付桃」が使用をされており、灰器は大阪・堺の湊焼である。

花生は粉引徳利でニワトコと椿を入れ、薄茶器は溜吹雪、茶碗は対州焼の茂三。茶入は瀬戸八幡手肩衝の銘「筑波根」で、小堀蓬露の箱書がある。お茶は

「松ノ寿」が使用された。茶杓は松花堂作の共筒で銘は不詳、建水は七宝であった。美英は、焼物は国焼と唐物及び朝鮮の品を使い、釜は東山御物の写しや凡鳥好の蓑盆を使用するなど、多岐に亘り蒐集を行っていたことが窺える。

料理には、桔梗盆と溜刷目折敷が使用された。

汁は辛子とよめ菜及び松露、向付は赤楽杓子にイリ酒の鱧作と岩茸及び栗を織切りにした針栗で、煮物は木の芽と鯛の造り及び長ヒジキとタイラゲ（タイラギ貝）である。

焼物は織部焼の小鉢におこぜの山椒醤油の付焼、吸物は土筆と梅干、八寸は蛤の煮付けと糸わかめ、進肴は鯛のアラと竹の子、香物は新漬大根であった。

具材を見ると、オコゼは夏が旬であるので、オコゼの山椒醤油の付焼きは旬を先取りをした献立である。鯛は煮物と進肴に出てくるが、進肴は鯛のアラを使用しており、「始末」にも適った料理であった。

次に、開催事由がわかる茶会について述べていきたい。かかる茶会は次の通り十五種の事由で、二十二会分ある。

① 口切茶事

明治十二年十一月 十日  
明治十四年十一月 十日

② 風炉茶事

明治十五年 五月十六日  
明治十七年 八月十五日

③ 朝茶

明治十五年十一月廿八日  
明治十四年 元旦

④ 歳祝茶事

明治十六年 元旦  
明治十七年 一月  
明治十八年 一月

⑤ 元旦荘付並二料理

明治十六年 元旦  
明治十七年 一月  
明治十八年 一月  
明治十三年 四月廿八日

⑥ 誕生祝

明治十三年 四月廿八日

⑦ 甫公忌・遠州忌

明治 三年 三月 九日  
明治十六年 二月 四日

⑧ 青木宗鳳公園宗匠十三回忌追福

明治十八年 二月 七日  
明治十六年十二月 十日

⑨ 先代追善茶事

明治十三年 四月廿二日

⑩ 当家先々代了因大居士

明治十六年 三月 六日

から年忌正当二付寸志為追福茶事

三月十一日

⑪ 了因居士正当日二付精進ナリ

明治十六年 七月 十日

⑫ 木津宗詮好々斎追善茶事

明治十八年 六月

⑬ 年回茶事

明治 八年 四月 十日

⑭ 難波瑞龍寺年礼廻勤昼飯

明治十六年 一月 四日

⑮ 祭禮釜

明治十六年 七月十七日  
明治十七年 七月 十日

これらを大別すると、茶事の上での年中茶会三会(①、②)、茶事の開始時刻による茶会一会(③)、年中行事に関する茶会五会(④、⑤)、誕生祝茶事(⑥)、追善・追福茶事の内、小堀遠州忌三会(⑦)、青木宗鳳公園(如習齋)忌(⑧)、先代追善(⑨)、大庭屋平井家の了因大居士年忌(⑩)、同家了因大居士精進(⑪)、木津宗詮好々斎追善(⑫)、年回(⑬)の六会、寺院関係(⑭、⑮)の三会である。

尚、「③朝茶」事については、記されている開始時刻から見て朝茶事と断定が出来る茶会が二会ある。(明治十七年八月十日条「午前五時」、明治十八年七月廿六日条「午前五時」)。しかし、拙稿においては美英が「朝茶」と記した事を第一義と考えた為、「明治十七年八月十五日」条のみを「朝茶事」とした。

次に、これらの茶会についての紹介を行う。複数回の開催がある場合は、筆者が重要であると考える一会のみの紹介を行う。

①の「口切茶事」は二会分の記録があるが、拙稿では参会者が記されている明治十四年十一月十日条を紹介したい【史料1-14】。

この茶会の正客は、広教寺(本願寺連枝。大坂薩摩堀。昭和三十五年「一九六〇」)に大阪府豊中市東豊中に移転)住職であった梅上沢融<sup>註九十九</sup>、次客は木津宗詮、詰客は吉川善兵衛を招いていた。

道具組は、小堀遠州に所縁があるのは茶杓のみで、「宗甫公 銘時雨」であり、水指は「利休所持」の品、花生は宗且作の一重切である。茶碗は長次郎、茶入は大津手肩衝、仕覆は時黄地金欄である。

薄茶器は亀甲の四方張、薄茶碗は高麗茶碗紅葉半洲、御茶は綾の森であった。料理は、「チヨンノ目折敷」と「糸目わん」を用いている。「チヨンノ目折敷」とは、斬でハツリ目をつけた折敷である。

向付は糸目木皿を使用し、鯛の角作りと海苔に加減酢の調味である。

汁の具は「なめ竹」である。「なめ竹」とは、「滑茸」の事であろう。

煮物は鴨の丸と銀杏、アラメ、柚で、吸物の具は蕪骨と梅干であった。

八寸は、尼鯛(甘鯛)と納豆が出された。

茶会の最後に、茶会の後に美英は玄関で「糸目二重」に「上、キンコ 花かつを 下、熱かん徳利添」を入れて後段に飲ませていた。これらは「熱かん(爛

徳利添」と記されていることから、酒の肴であることがわかる。今回は酒を省略したので、美英は「後段」として供したのであろう。

茶会の進行については、後炭の節には香合なしで、灰匙に「梅か香」を乗せて出たことを記していた。この所作は、通常の点前であればしない事なのであろうか、当会記にのみ記されていた。

次に、②の「風炉茶事」について紹介を行う。これは明治十五年五月十六日条の一会のみである【史料1-15】。

当会記は、料理のみの記載である。

向付は新志野焼の角皿に根芋と胡麻醤油が盛られ、汁は辛子と海老丸及び蒟

である。

煮物は鱧の骨切りと花柚及び順菜(蓴菜)で、焼物は川鱒の角切りの付焼き、

吸物はヒジキと蕨、八寸はす巻きの鯰と胡桃で、旬の食材を取り揃えた献立であった。

次に、③の「朝茶」の紹介を行う。茶会記の中で「朝茶」と明記されているのは、【史料1-16】に挙げる明治十七年八月十五日条のみであった。

この茶会では、客は山田惣兵衛をはじめとする五客が招かれていた。

掛物は津田宗及の「茶白晝賛」、釜は「芦屋寫」で、茶杓は小堀宗本作の共筒「銘 松風」、茶碗は「熊川」、替茶碗は古萩である。

茶入は「藤四郎耳付」で仕覆は「萬曆フリトメ」、香合は青貝の団扇で、御

茶は小松の白、菓子葛焼であった。

和物と朝鮮物を取り合わせ、遠州流に所縁がある道具一品を入れていた。



次に、④の「歳祝茶事」は、明治十五年十一月廿八日の一会である。【史料1—17】。

当茶会は、参会者の誰かの歳祝茶会である。

道具組は、掛物は元伯の「頭上漫々脚下漫々」、花生は碌々斎作の輪無し式重の銘「扇寿」である。

茶入と茶杓は遠州流に所縁がある道具で、茶入は「遠州判中棗」で「緞子福寿文字アリ」の仕覆がある。茶杓は「小堀権十郎手造」の「銘 鳩杖」であった。

主菓子「常磐饅頭」が使用されていた。「常磐饅頭」とは、「碌々斎宗左好菓子。薯蕷皮の腰高饅頭で、中に青餡を入れて松に見立て、皮で雪を利かせたもので、不審庵家元の初釜はこの饅頭が嘉例とされている。」<sup>昔</sup>という品である。美英の茶会に於いては「詰熨斗添」と記されていることから、詰客の「歳祝」であったであろうことが窺える。

料理は、「溜角切折敷」と「丸わん」で供された。

了入靄皿には向付の鱧子細作りと針栗及び岩茸、汁は蕪の角切と摺胡麻が具であった。煮物は甘鯛と大徳寺昆布であった。

焼物は中鯛の幽庵焼、八寸はサキ海老と納豆、進肴は鴨の丸と蕪菜及びチヨロギであった。

鯛と海老及びチヨロギの具材から、祝いの膳であることが窺える。

次は⑤の「元旦莊付並二料理」について紹介を行う。当茶会記は四会分が残されている。それらの概要をまとめたのが【表1—5—1】から【表1—5—3】である。

【表1—5—1】の蓑盆と広間における道具組については、蓑盆と広間を使用していたのは明治十七年と同十八年であり、道具組は「手炉」を除いては全て同一の品であった。

【表1—5—2】の道具立て表を見ると、明治十七年と同十八年は建水を除いては、全て同一の品を用いていた。当表で特徴があるのは、明治十六年と同十七年を境として、掛物を始めとして全ての道具が一新をする事である。

明治十六年以前—つまり明治十四年と同十六年を見ると、花生、花、釜、方六、菓子は同一の品であるが、その他の道具は十四年と十六年では全く異なる

品を使用していたことがわかる。

蓋置は、年始めの茶会であるゆえ、青竹が用いられている。

【表1—5—3】の料理の献立では、前述の明治十六年と同十七年では、後者に「組重」が使用されていたことである。

献立の内容は、明治十四年と同十六年はほぼ同一であるが、同十七年から突如として変貌する。吸物の具は、明治十六年迄は「落し玉子、昆布結ヒテ（結び昆布）」であるが、同十七年からは「サキ梅、セリ（芹）、結昆布」と変わっている。「玉子」が無くなることにより、元旦に限り飲む「大福茶」の性格がより濃くなっている。

これらの「明治十七年」からの変化は、道具組については美英の何らかの意識の変化があり、料理については、大庭屋平井家の料理方又は青木遠州流茶道家元としての美英に出入りを許された料理方が変わったのかについては不詳である。

⑤の四回の茶会記の内、最後の記録を【史料1—18】に挙げる。

道具立ては、掛物は小堀遠州公の「年頭の文」を掛け、茶杓は青木家四代の貯清齋作「銘 太郎冠者」である。

釜は千家十職の一つ大西家の浄玄（代は不詳）作の「萬歳楽寫」、蓋置は新年ゆえ「青竹」を用い、「安政棚」の点前である。

茶碗は雲州焼（島根）、替茶碗は御本立鶴、花生は青磁鯉耳、茶入は瀬戸耳付と替茶入は御紋雪吹で、国焼と唐物及び朝鮮物を使用していた。

広間には「土佐二幅対 日月 蓬菜」を置いている。

次に、⑥誕生祝の茶事である明治十三年四月廿八日条の紹介を行う【史料1—19】。

当茶会は「誕生祝」である。客は大寺卯之助ほか三人だが、この中の誰かの茶会であろう。前に紹介を行った④「歳祝茶事」の明治十五年十一月廿八日条においては、「菓子 常磐饅頭 詰熨斗添」と記されていたことから詰客の「歳祝」と推測を行った如く、美英の茶会記では正客が「その日の主客」とは限らない場合がある。従って当茶会の場合は、参会者の誕生日が不詳である為、誰の誕生日祝であったのかについては解明しえない。

道具立ては、慶事茶会ゆえおめでたい品が使用をされている。

「熨斗目荘」という点前で、掛物は清厳和尚横物の「語帰一」。「帰一」とは「一つに帰する」という意味で、長寿祝の中でこれに相当するのは「還暦」であり、これは六十一歳の年に生年の干支に戻る祝事である。かかることから、筆者はこの茶会は「還暦祝」であったのではないかと推測する。

香合はノンコウ赤の「銘みどり」、花生は啐啄齋の一重切「銘鶴の宿」、薄茶盃は竹叟手造の赤黒「銘鶴龜」である。

料理は半月折敷と細の椀で供され、向付は慶入箆台で鱈の子の大根おろし、汁はつと豆腐と海苔、煮物は鯛身所と松露である。

吸物は蓴菜と生姜、焼物は鯛切身の塩焼き、作り身（造り）は鯛と独活、八寸は鯛と結昆布であった。

魚は「鱈の子」と「鯛」、野菜は旬の蓴菜が使用をされていたことから、道具立てから懷石料理の献立まで、全て「祝事」を意識しての会記であった。

次に、⑦甫公忌・遠州忌についての紹介を行う。

当茶会は小堀遠州公の忌茶会であるが、明治三年三月九日条は遠州忌「献茶会」、明治十六年二月四日条は甫公忌の「茶會」、明治十八年二月七日条は遠州公忌と記されており、各茶会の性格は異なっている。最初に、これらの茶会記の紹介を行う。

【史料1-20】 茶会記「遠州忌献茶」(⑦-I)

【史料1-21】 茶会記「甫公忌茶會」(⑦-II)

【史料1-22】 茶会記「遠州公忌」(⑦-III)

先ず、道具立てを見てみよう。「遠州忌献茶」(明治三年三月九日条)では、茶席の前の席に茶道具が設えられており、掛物は狩野守信の「宗甫公像 大燈国師賛」が掛けられ、黒塗足付台の上に「唐物天目台」と「瀬戸焼の天目茶碗」で献茶を行い、菓子は「唐物献茶菓子二色」と「根來台皿ニ蒸菓子・干菓子二包」を供えていた。唐物の献茶菓子と根來台皿に蒸菓子と干菓子が供えられており、和物と唐物の両方を用いていた。

茶席内の茶道具は、掛物については、「遠州忌献茶」は「遠州公筆横物 雲無心出宙」を、明治十六年二月四日条は「甫公横物歌」を、「遠州公忌」(明治十八年二月七日条)は「江雲和尚 円桐」と記されており、小堀遠州の品か遠州に所縁がある人物の品を掛けていた。

小堀遠州に所縁がある道具については、「遠州忌献茶」では掛物、茶入、蓋置の三つ、「甫公忌茶會」(明治十六年二月四日条)では茶杓、明治十八年二月七日条は茶杓である。

三分の茶会の道具立ては、重複して使用された茶道具と菓子は無いが、花は「木蓮、白椿」が二会使用されていた。

料理が供されたのは、参会者名が記されている「甫公忌茶會」のみであった。客は梅上尊融、園徳寺註と見学百圓の三名である。料理は「信楽弁当」という弁当方式で各自に供された。

次に、⑧青木宗鳳公園宗匠十三回忌追福茶事について紹介を行う。【史料1-23】

道具立ては、掛物は追福茶事とあつて如習齋筆の「甫公 椿の文寫」を使用していた。茶杓は象牙で、茶碗は高麗茶碗の一つである「砂御本」、替茶碗は「唐津」焼である。茶入は「時代中次」である。

香合は「ふくべ」、つまり瓢箪で作られており、藤村正員(藤村庸軒の子息)の花押がある。

次に料理は、向付は鯛の刺身と大根刻み、吸物の実は摺柚と一塩鱈及び蕪である。取肴は小鯛の付焼と水田(吹田)慈姑、他に手摺焼豆腐と竹輪玉子であった。

追善茶会であるが、所謂生臭物(鯛と鱈を使用していることから精進料理ではなく、故人が好んだ具材を取り合わせたと考えられる。

⑨の先代追善茶事は、九代にあたる平井次郎右衛門美在の追善茶会である。次にこれを紹介する【史料1-24】。

この追善茶事の客は、住友家十二代の住友吉左衛門友親、山口重蔵らが参加している。

道具立ては、掛物は木村素雪筆の「達磨画」。賛は表千家十一代の碌々斎が識している。木村素雪とはどのような人物であったのかについては不詳である。

釜は芦屋で、炭斗は時代檜木の籠である。花生は古備前耳付で、花は朱木蓮が生けられた。香合は青磁の木魚の形をしており、茶碗は朝鮮焼の脇井戸であった。

建水は左張(砂張)で、形状は「棒の先」である。

薄茶器は朝鮮樞茶で松平備前守の箱が付いている。「松平備前守」とは誰を指すのかは、管見では不詳である。薄茶盃はノンユウの四方形であった。

茶入は利休中棗で、仕覆は青木漢東（間道）である。これは現在、藤田美術館に所蔵されている。

茶杓は宗旦作の「銘マダラ」で、お茶は「祝の白」であった。

茶道具は故人が愛用した品であり、料理は「精進料理」ではないことから、故人が好んだ具を取り合わせたと言えよう。

次の⑩「当家先々代了因大居士年忌正当二付寸志為追福茶事」は、『茶會々記集』の中で、最大規模の茶会である。この紹介を行う。

この中で最も規模が大きい茶会は⑩の了因大居士年忌追福茶事である。了因居士とは、大庭屋平井家八代にあたる平井次郎右衛門時雍のことである。【史料1—25】に、この茶会記を挙げる。

当茶会は、『茶會々記集』に記されている追福茶会の中では最も規模が大きいものである。

客は四日に分けて総勢十六人が招かれており、初日には美術・鑑定を能くし、一時には十八会にも入っていた樋口三郎兵衛をはじめとする五人。二日目には十二代平井次郎右衛門が妻孝を娶った尊光寺（昭和二十年「一九四五」）の大坂大空襲により焼失）ら三人。三日目には鴻池家十世の鴻池善右衛門幸富（炉雪）、表千家流の十二代惺斎宗左の実弟であった平井利兵衛、道具持ちで有名であった白山善五郎（四代）ら五人。四日目には大同生命社長・堂島米穀取引所理事長を務めた広岡久右衛門（加島屋九世）、道具商の山口重蔵らの名が見える。

大庭屋平井家十代にあたる平井治郎右衛門美英は、時雍の遺徳と茶の湯を偲び、そうそうたる顔ぶれを集めて追福茶会を催したことを窺う事が出来る。

道具組については、掛物は津田宗及筆の「茶白畫賛横物」で、香合は青磁の「犬鷹」、釜は天猫平、方六は了入、炭斗は時代藤組平、花生は「宗及侯手造一重切 春の歌アリ」であった。

茶杓は「宗甫公手造 無銘共筒」で箱書付である。

茶入は利休の判がある「小棗」である。元伯宗旦の箱書があり、仕覆は「遠州緞子新切」の「包帛紗」であった。

茶碗は砂御本の大服、薄茶器は面中次で「福寿海」、薄茶盃は雲州焼の片身

替りで、口取は干柿であった。

お茶は「小松の白」が用いられ、菓子は波の重箱の中に小倉餡入りの腰高満頭、干菓子には白煎餅であった。

道具組は津田宗及の掛物をはじめとして、千利休と小堀遠州の品が多用されている。

美英は旬や季節を先取りしている魚、又は時雍の好みであった魚を使用したと考えられる。

野菜についてはよめ菜、土筆、蓮根、芽紫蘇、生姜、吹田慈姑を使用していた。

次に、⑪了因居士正当日二付精進ナリの紹介を行う【史料1—26】。

当茶会には、参会客の記録はない。

茶道具の中で目を引くのは、茶碗「唐物桃」である。「桃」は、大庭屋平井家の家紋である「三千年の桃」を想起させる。これを除いては、全て和物が使用されており、参会者を招いた前の茶会とは、道具立ては全く異なっていた。

料理は、肉や魚を一切使用していない精進料理である。

肴が供されており、酒席としての会であったのかもしれない。

次に、⑫木津宗詮好々斎追善茶事の紹介を行う【史料1—27】。

木津宗詮好々斎とは、初代の木津宗詮（安永四年（一七七五）〜安政二年（一八五五））のことである。

当茶会は料理のみの記録で、木地折敷と糸目精進宗具が使用されていたことから、精進料理としての扱いである。

献立は、向付は敷ジラス（豊鯛のことカ）に大徳寺麩と鈍豆、ユウ茸を乗せており、坪椀は鯛摺身と鯛のそぼろと茄子、花柚である。平椀は鱧と松露の塩蒸しに青山椒が掛けられ、汁はもずくと辛子、八寸は鯖の作りと青唐辛子、吸物はみるめ海苔と梅干、唐津の壺の中に小鳥の叩きと竹の子の穂先、菓子は柏餅であった。

精進料理ではあるが、鯛、鯖、鱧、小鳥の四品の食材は所謂「生臭物」であり、「汁」と「吸物」が供されているところから考えると、半精進・半懐石料理と考えられるのではなからうか。

次に⑬年回茶事について紹介を行う【史料1—28】。

当茶会は「年回茶会」であるが、誰の「年忌」とは記されていない。

参加者は住友吉左衛門、白山善五郎、木田庄左衛門、藪清右衛門、平井利兵衛の五名である。

茶会は、待合席、初座、料理、後座について記されている。

待合席には蓑盆、田楽箱、蒔絵硯箱、毛氈、光琳画の寒山拾得屏風を設え、腰掛には桐菊型手炉、慈光院形田盆、古銅火入、青竹の灰吹、葉入は折紙を置いていた。

初座の点前は二畳大目（二畳台目）で角釘箱棚であった。角釘箱棚の使用方は「釜」の後に、「棚ノ上二袋入茶入 下二箒 香合庄ル」と記されており、棚の上部に茶入、下に箒と香合が置かれていたことがわかる。

後座の道具組は、水指は「先代作唐物写寄木手桶 箱碌々斎又玄斎」を使用しており、「先代」とは青木家・五代の如習齋の事である。茶碗は「井戸松花堂 銘住吉」で、表千家と裏千家の宗匠らが作った道具を織り込んでいた。

次に、⑭難波瑞龍寺年礼廻勤昼飯の紹介を行う【史料1—29】。

当茶会は難波・瑞龍寺における「年禮廻勤昼飯」である。

瑞龍寺とは、「黄檗宗慈雲山 瑞龍寺」（大阪市浪速区元町一—十一—三十に現存）のことではないかと考えられる。

「年禮廻勤昼飯」とは、年ごとの挨拶回りの昼飯という意味である。

当茶会には参加者の氏名が記されていない。しかし、「上二人 下一人」の記述は、美英から見て「上・下」の格付であろう。

茶道具については記されておらず、料理のみの記録である。

献立は、向付は柿小口切と銀杏及び岩茸を干柿おろしと大根おろしを加えた極酢で調味をされている。汁の実は干瓢と椎茸である。煮物は慈姑の寄せ揚げと柚、牛蒡、百合根、芹で、焼物は焼豆腐の味噌かけ。肴は揚麩と昆布である。全て肉類を一切使わない「精進料理」であった。

菓子はジヨウヨウ満頭（上用・薯蕷饅頭）であった。

最後に⑮祭禮釜の紹介を行う。当茶会は明治十六年七月十七日と明治十七年七月十日の二会が催されている。その茶会記を【史料1—30】に挙げる。

これらの茶会は開催時期が七月であり、「祭礼」と記されていることから、神社の夏祭掛釜に合わせて客を招いたのであると考えられる。尚、どこの神

社であるのかについては記録がない為、不詳である。

参加者は、明治十六年七月十七日条は梅上沢融をはじめとした九名であるが、同十七年七月十日条は木津をはじめとした十七名である。その中で廣岡、兼松、青木、山田、石田の五氏は、双方の茶会に招かれていた。

道具組を比較して見ると、どちらも棚を使用しての点前で、明治十六年七月十七日条は「小及棚」、同十七年七月十日条では「遠州好 柱白竹」の棚であった。

二会とも同一の茶道具を使用していたのは「茶杓 宗本侯作 銘松風」、「方六 了入」、「建水 棒の先」、「蓋置 染付」の四品で、この他は異なる作者であったが、道具組の特徴が一つある。それは明治十七年七月十日条においては小堀遠州好みの「棚」、片桐石州好みの「茶入」、松平不味好みの「香合」の三品が大名茶人の「好み物」であったことである。このような道具組は明治十六年七月十七日条では見られない。美英は、明治十七年七月十日は、「大名茶」を意識して道具組を行ったと考える。

明治十七年七月十日条の吸物は、「皮鯨」と茄子の味噌汁であった。

これらの茶会記の分析を行うと、茶道具全般については小堀遠州とゆかりが深いものを中心として、幅広く蒐集をしていたことが窺える。

参加者は、古筆了仲、戸田弥七、若江六兵衛、多治見治兵衛、磯矢宗庸らの名が見える。茶会記の初めのうちは同業者を一緒にして招いているが、明治八年（一八七五）以降からはさまざまな客構成が見られる。

女性客については、明治十八年（一八八五）五月十一日条の茶会に北村家（一作・縫子・手代の佐助）を招いており、貯月菴宗徒の茶会における女性の招待客の初見である。同年七月二十九日条以降になると、女性のみを招待した茶会が多く見受けられるようになる。同年九月二十日条では、女性が正客をつとめている。

次に、当茶会記から「茶席」で用いられた茶道具について検討を行う。

まず、用いられた茶道具を道具別にまとめて、【表1—6】（【表1—6—1】）【表1—6—9】に挙げる。

次に、これら種々の茶道具を道具毎に、「作者」、「種類」、「材質」等に分類して分析を行う。

各分類ごとに使用会数を調べると【表1-7】の通りとなる。  
先ず、「掛物」から見てみたい。

掛物を作者別にまとめた表が【表1-7-1】である。

その表を見ると、臨済宗大徳寺派が三十五会と最多で、次は小堀遠州の十九会、珠光系と千家が各六会であった。

「武家」で見ると小堀遠州と小堀家と所縁がある人物の品を中心として蒐集しているが、「小堀家以外」では松平不昧が三会と最多であった。

茶人では「珠光系」と「千家」が各六会、「表千家」は二会、青木遠州流茶道の流祖である「青木宗鳳如習齋」と、煎茶道において大変重要な人物である「売茶翁高遊外」は各一会であった。

明治十二年（一八七九）から同十三年にかけて「待合」において用いられた掛物は、石川丈山や北村季吟などが使用されていた。

明治十三年三月九日条には、鴻池新十郎、広岡久左衛門、長田純一、山口重藏を招き「賣茶翁小堅物」を使用している。これは高橋箒庵氏が『近世道具移動史』の中で「明治六年頃より社會の秩序の復舊するに随つて、道具商界も漸く活氣を帯つたが其の機運の先驅を爲したのが文人物で、其の鑑賞家の巨魁が三條、木戸、山内諸公等であつたから、之を圍繞する學者官吏等は皆其下風を追ひ、後來茶人となつた者も、當時は御多分に洩れず文人物を崇拜した者と見え、此程安田善次郎（松翁）氏の傳記編纂者青島照瑞氏より聞く所に據れば、安田翁が明治五年より同十三年までに買い入れたる書畫骨董は約三十點許りあるが、總て文人物計り<sup>註三二</sup>と記していたように、煎茶（道）の盛行をみた時期と一致する。

かかることから、美英は青木遠州流茶道の流儀にとらわれることなく、時勢に沿つた、若しくは新しい視点から、茶の湯の演出を行つていたことが窺える。

加えて、明治十七年（一八八四）六月二十六日条の茶会においては、掛物は篷雪侯が書いた「貯月二字横物歌入」が使用されており、貯月菴宗従は自庵号に関わる物も蒐集していたことがわかる。

次に、掛物を種類別にまとめた表が【表1-7-2】である。

その表を見ると、「日本墨跡」が四十二会、次いで「日本画」が三十三会、「消息」が二十三会、そして「和歌」十四会、「俳句」が四会であった。

この他には和歌を記した「詠草」、仏の教えを識した「法語」、「中国画」も使用をされており、幅広い関心を持つて蒐集を行つていたことが窺える。

次は、花生について検討を行う。

花生を作者別にまとめた表が【表1-7-3】である。

「武家」は「小堀家」の品が十五会で最多で、「公家」は五会であった。

茶人では、「青木宗鳳家」が一会であるが、「千家」は六会、「表千家」は五会、「裏千家」は七会であり、「青木宗鳳家」の作者よりも使用会数が多い。

美英の茶会においては、青木遠州流茶道の流祖である青木家よりも、小堀遠州に傾いていたことを示していると言えよう。

次に、花生を素材別に分類を行つた表が【表1-7-4】である。

表を見ると、「竹」の五十三会が最多であり、次は「陶器」の二十会である。

「籠」は四会で、金属の「古銅」と「砂張」及び「唐金」は各一会であった。

次は、釜について検討を行う。

先ず、釜を作者別に分類を行つた表が【表1-7-5】である。

この表を見ると、使用会数が多いのは、千家十職の釜師である「大西家」は二十一会で、「西村家」は十五会、「宮崎家」は十一会で、「京都名越家」、「辻家」と続く。

これらの釜は、大庭屋平井家が茶の湯を嗜むようになってから歴代当主や家人が求め、蒐集を行つたと考える。

次に、釜を形状別に分類を行つた表が【表1-7-6】である。

この表を見ると、形状は二十五種類あり、様々な形状の釜を蒐集していたことが窺える。

使用会数が多い順では、「丸釜」は十二会、「平釜」は十一会、「真形釜」と「手取釜」が各八会、「大広口釜」は七会、「東陽坊釜」と「車軸釜」が各六会、「尻張釜」が五会、「富士釜」・「雲龍釜」・「百会釜」・「尾垂釜」・「阿弥陀堂釜」が各三会、「切掛釜」・「四方釜」・「四方口釜」・「平釜」・「ふとん釜」・「鶴首釜」は各二会、「肩衝釜」・「切釜」・「葛屋釜」・「立瓜釜」・「乙御前釜」・「達磨堂釜」が各一会であった。

次に、香合について検討を行う。

香合を作者別にまとめた表が【表1-7-7】である。

これを見ると、「小堀家」が五会、武家の「小堀家以外」は四会、茶人の「珠光系」と「文化人」は各四会が突出をして多かった以外は、茶人の「庸軒流」と「千家十職」及び「武家系塗師」が二会、「千家」と「裏千家」が各一会であった。「千家十職」は、樂家の九代である了入と三代道入（ノンコウ）の作品である。

使用回数では、美英は「小堀家」と小堀家以外の武家茶人の作品を多く茶会において使用していた。

次に、香合を素材別に分類を行った表が【表1-7-8】である。これを見ると、「陶器」が十九会で使用回数が最多である。

次は「瓢箪」で四会、「根来」と「青貝」が各三会、「鉄刀木」が二会、「堆朱」・「鎌倉彫」・「蒔絵」・「蛤」・「橙」は各一会であった。

「青貝」とは螺鈿細工の事である。現在の平井家には、この茶会に於いて使用されたのは不詳であるが、青貝の棗が大切に所蔵をされている。

次に、茶入について検討を行う。

まず、作者別に使用回数をまとめた表が【表1-7-9】である。この表を見ると、「陶工」の作品が十九会と最多であったことがわかる。「陶工」とは、新兵衛（瀬戸後窯）、盛阿弥、源十郎（瀬戸六作）、籐四郎（二代目・藤四郎春慶）の四名である。

「千家十職」の一会は樂家三代・道入の「ノンコウ」で、武家の「小堀権十郎家」と茶人の「青木宗鳳家」は、それぞれ一会であった。「青木宗鳳家」とは、三代・習々斎である。

次に、形状別に使用回数をまとめると【表1-7-10】の通りとなる。この中では「肩衝」が最も多い十二会で、次いで「雪吹」の九会、「耳付」の八会と続く。

「雪吹」、「寸切」は「棗」であるが、美英は濃茶を入れる「茶入」として使用をしていた。

次に、棗の分析を行う。

まず、作者別に回数をまとめた表が【表1-7-11】である。棗は、作者不詳が九十六会あるが、作者が判明している物では「塗師」の八会が最も多く、次いで「千家十職」の三会和「小堀遠州家」の二会である。

「青木宗鳳家」の一会は、三代・習々斎である。

次に、形状別に使用回数をまとめると【表1-7-12】の通りとなる。この表を見ると、「薬器」の十七会が最も多く、次いで「中棗」の十六会、「雪吹」の八会、「寸切」と「中次」の六会と続く。

「雪吹」と「寸切」は濃茶点前の時にも使用をされており、美英の道具の好みと言えるものではあるまいか。

次は、茶碗について検討を行う。

茶碗を作者別にまとめた表が【表1-7-13】である。

「千家十職」が十一会と最多であり、次いで「陶工」が五会、「青木宗鳳家」と「表千家」が三会和続く。

「千家十職」の作者は、樂家初代の長次郎、三代・道入（ノンコウ）、四代・一入、五代・宗入、十代・旦入、十一代・慶入の六人であった。

「青木宗鳳家」の三会は、全て三代・習々斎である。「陶工」は茂三（中庭茂山）、弥兵衛、高橋道八であった。

「文化人」は、松花堂昭乗であった。

次に、産地別による会数の考察を行う。

茶碗を産地別にまとめた表が【表1-7-14】である。この中では「高麗」が最も多く、六十九会使用をされており、次いで「国焼」の四十七会、「樂焼」の十六会、「ベトナム」と「中国」は各一会であった。

「国焼」は、志野焼、唐津焼（古唐津を含む）、朝日焼、瀬戸焼、伊羅保焼（古伊羅保を含む）、萩焼（古萩を含む）、雲州焼、角倉焼、織部焼であった。

次は、薄茶碗について考察を行う。

作者別に分類を行ったのが【表1-7-15】である。表によると「千家十職」が十七会と最多で、次に「陶工」の五会、「文化人」の三会、「青木宗鳳家」が一会であった。

「千家十職」の作者は、樂家初代の長次郎、三代・道入（ノンコウ）、四代・一入、六代・左入、九代・了入、十代・旦入の六人であった。

「青木宗鳳家」の一会は、三代・習々斎である。「陶工」は茂三（中庭茂山）、高橋道八、一元（註）、野々村仁清であった。

次に、産地別による会数の考察を行う。

産地別に分類を行ったのが【表1-7-16】である。

この中では「国焼」が最も多く、二十七会使用をされており、次いで「樂焼」の二十五会、「高麗」の十一会であった。

「国焼」は、唐津焼（古唐津を含む）、朝日焼（新朝日焼を含む）、瀬戸焼（黄瀬戸を含む）、萩焼（古萩を含む）、雲州焼、薩摩焼（古薩摩を含む）、尾戸焼（土佐）、角倉焼であった。

最後に、茶杓について考察を行う。

作者別に分類を行ったのが【表1-7-17】である。

表によると「青木宗鳳家」が三十一会で最も多く、次いで「小堀遠州家」が二十六会、「表千家」が十一会、「利休系」が九会、「裏千家」が六会、武家中で「小堀家以外」と「茶杓師」及び「文化人」が各三会、「武者小路千家」と「臨濟宗大徳寺派」が各二会、「石州流清水派」が一会であった。

作者の内訳は、「茶人」は「青木宗鳳家」は初代・凡鳥と三代・習々斎及び四代・貯清斎の三人、「表千家」は四代・江岑（逢源斎）、六代・原叟（覚々斎）、七代・天然（如心斎）、十一代瑞翁（碌々斎）の四人、「利休系」は利休、道安、少庵、宗旦の四人、「裏千家」は四世・臘月庵（仙叟）と十一世・玄々斎（精中）の二人、「武者小路千家」は初代・一翁（似休斎）と二代・文叔の二名、「石州流清水派」は、初代・清水道閑の一人であった。

「武家」では、「小堀遠州家」は一世・遠州と八世・宗中（正優）及び九世・宗本（正和）の三人、「小堀権十郎家」は小堀権十郎（篷雪）と小堀政安（篷露）の二人、「小堀家以外」は古田織部、金森宗和、細川三斎、松平不昧の四人であった。

「茶杓師」は甫竹と村田一斎の二人、「文化人」は尾形光琳（画家・工芸家）、一曜斎（画家）、三宅亡羊（儒者）、松花堂昭乗の四人であった。

次に、材質別による会数の考察を行う。

材質別に分類を行ったのが【表1-7-18】である。

この表から、材質が判明をしている物だけを限定すると、「竹」製が五十五会と最多である。

次いで「象牙」製の八会で、美英は「竹」製の茶杓を好んで使用したことがわかる。

以上、述べてきたように、これらの茶会では、多岐に亘る種類の茶具が使用されていたことが判明した。

### ③ 家元としての美英

青木遠州流茶道家元として、美英は「大阪豊國神社献茶式」を明治十八年（一八八五）十一月五日付で大阪豊國神社宮司 子爵日野西光善から依頼をされた。

「大阪豊國神社」は、当時は「今の中之島公園中央公會堂の在る邊」註四に所在した。

平井家が所蔵する史料は、大阪豊國神社の宮司と社務所を差出人とする貯月菴宗從宛の献茶式依頼書二通である。美英の、青木遠州流茶道の「家元」としての大阪における位置が窺えると考えられる。これらを【史料1-31】【史料1-32】に挙げる。

明治十八年（一八八五）十一月五日付の大阪豊國神社宮司、子爵日野西光善からの書状は、京都豊國神社に於いては数内家十代の竹翠紹智（天保十一年〜大正六年（一八四〇〜一九一七））により、献茶式を例年執行しており、大阪豊國神社に於いても同様に献茶式を行いたい事を「平井貯月宗匠」つまり美英に依頼を行っている内容である。

次の翌年明治十九年五月付の大阪豊國神社社務所からの書状は、前年に出された宮司・日野西光善による献茶式執行依頼書の通り、平井貯月宗匠を以て献茶式を執行致したく、願いては新調茶具の費用を願ひ申すべく多く募り締め、右諸有志の諸君の御賛助があったので、御依頼を行うという内容である。

別紙には、有志により大阪豊國神社に嘉贈された献茶式用の新調茶具（御紋附青磁御天目茶碗一對、「御紋附白地小葵長緒御袋 壺」、「御茶杓 壺」の三品）が記されており、平瀬龜之輔（両替商）が「御香 銘ミちとせ」を、賛助者は不詳であるが「金貳拾円」の嘉贈寄付、廣岡久左衛門（両替商）は金拾円を、平井家と交遊があった梅上家・大島良斎（職業不詳）・戸田弥七（茶道具商）は各「金五円」の嘉贈を行っていた。金一円は「現在の換算で二万円」とすると、廣岡氏は二十万円、梅上家を含む三家は十万円の嘉贈であった。

賛助目録については、茶の湯関係史料の残存状況において前述したように、保存状況から散逸している史料がある可能性がある。

美英が二度に亘る依頼を受け、実際に大阪豊國神社に於いて献茶式を執り行ったのかについては不詳である。

しかし、これらの史料から、美英が明治初期の大阪茶道界に於いて、青木遠州流茶道の家元として献茶式を行うことが出来る地位にあり、家元としての存在が大きかったことを示しているといえよう。

次に、美英の茶の湯を窺うことが出来るものとして、美英自作の茶道具が存在するので、次に紹介を行う。【史料1—33】

茶器は、美英の還暦祝に赤黒一対で作られたものである。

茶器の表面には高蒔絵で絵が描かれており、赤茶器の甲には桃花を、黒茶器の甲には兎、胴には土筆が大小五本描かれている。

茶器の箱裏書によると、美英の還暦祝に茶器一対が到来し、その年の試筆二首を茶器に書きかえたと記されており、赤中棗の蓋裏の和歌は、美英が書きかえたことがわかる。尚、和歌の筆は銀泥であった。

そして歌を一首。「何事も為さないで老いとなつた。過ぎしかたをしのぶ今日かな。」

これらは全て定家流で記されており、美英が定家流の書を究めようとしていたことが窺える品々である。

また、交友関係を示すものに、「掛軸 黒田清綱書」が残されており、

久かた能月乃光をたくはへし

ひら井の水の清くもあるかな

と揮毫をされている。黒田清綱とは、明治期の官僚・歌人で、維新後には藩参政・東京府大参事・元老院議員などを歴任し、子爵となり、議会開設後は貴族院議員・枢密院顧問官などを務めた人物である。

掛額に、横書で「貯月亭 為平井」と揮毫をした品も残っていた。

最後に、川島朋子氏が「史料紹介 明治後期の表千家—富田清助日記の記事をめぐる—」(『茶の湯研究 和比』四号所収)平成十九年 不審庵文庫編集

において、「富田常楽庵 清助 九代正博(小三郎) 大正十三年三月廿九日 七十六才没」<sup>註百五</sup>が記した七冊の日記から、表千家との交流に関する記事の紹介を行った。

その日記の中に「大坂平井氏」という記録が出てくる。これは「明治三十九年の表千家の焼失時の様子、またその後の復興に向けての動き」<sup>註百六</sup>における記事の中である。

次に、「大坂平井氏」と大坂の事を記載している記事の紹介を行う。これらが出て来たのは、【史料1—34】に挙げる四日分である。

日記に記されていた「大坂平井氏」については、屋号と名前が記されていない故、平井治郎右衛門美英との断定は行い難い。

明治三十九年に於ける「大坂 平井氏」は、管見では拙稿の「大庭屋平井家」と「平井利兵衛」の二家である。

「平井利兵衛」は呉服商である。時事新報社第三回調査「全国五拾萬圓以上資産家」名簿によると、「七十萬圓 平井利兵衛(呉服商) 南區鹽町通り三丁目 ▲財産種別 營業出資、不動産 ▲略歴

明治三十九年資本金十八萬圓を以て合名會社平井呉服店を組織し現時業務據當社員たり。」<sup>註百七</sup>との人物で、茶道との繋がりは不詳である。

仮に、「大坂平井家」が大庭屋平井治郎右衛門美英の事であると仮定を行うと、年齢的には美英は老境に入っていた。当時の大庭屋平井家は材木商、製紙業などの多角経営を行っていた時期に当たるが、財政面については不詳である。

表千家焼失・復興については、三月廿八日条の「千家利休忌茶会」は、表千家が焼失をした為に大徳寺聚光院に於いて開かれた。

その席に於いて「千家再建ノ義、有志ノ事」を富田清助正博が一派に披露した。そして当日の出席者の内から、山田永年を始めとする十二人を「カンジセワニン」(幹事世話人)方とした。

そして宗左氏に頼み「外二出入口又ハ買掛りハ平井氏兩人、石田氏ニ取シラベ方タノミ置」いた。つまり、表千家外の出納又は買掛の調べ方を、京都平井家及び石田氏ら三人が依頼をされたのである。

同日、富田清助の「利休忌ノ釜」には京平井氏と大坂平井氏の両氏が客として来ていた。千家の話に及び、出納書を平井氏が持参していた。それによる



と「内部借入金」が「三千円」あり、富田清助は両平井氏（京と大坂）にその内の二千円分を両家に「立替」を頼んだが、両家は断然断った。これに対して山田氏と富田清助は「少しカンジヲそんじ」たとある。

四月九日条でも「内部借入金的事」が話題となっており、「平井氏両家」にて立替云々を申し入れ置いたと記している。

七月十一日条では、表千家焼失後に長者町と富田清助が有志に度々宗左氏又は平井氏、大坂平井氏等にも打ち合わせをしているが、意の如くならない事はないとの事で、宗旦氏も甚だ残念に思われていると記している。

察するに、大庭屋平井治郎右衛門美英は、同じ「家元」としては表千家の復興に助力をしたいが、「資金面」となると諸処の事情により難しかったのであろうと考えられる。

#### ④ 平井ソノの茶の湯

次に、「家元・美英夫妻」について述べたい。美英夫妻が門人達に許状伝授をおこなったことは『遠州流茶道傳授扣』（以下、『傳授扣』）が残されていることにより点前名や伝授状況等を知りうる事が出来る。これは、【表1-8】にまとめたので参照して頂きたい。

【表1-8】によると、明治二十年（一八八七）二月六日が門人への最初の相伝日で、最後の記録は大正十一年（一九二二）十月である。かかることにより、美英は大阪豊國神社献茶式後に茶道教授を始めたことが窺える。

『傳授扣』に記載がある門人数は、六十名（内二名男性・一名は性別不詳）である。

明治二十年（一八八七）九月二十九日には、美英は大阪の川口居留地六番に所在した照暗女学校（現在、京都府京都市上京区に所在する学校法人・平安女学院）に於いて、田中花子・田村勢以子・松山倉子に伝書「風炉薄茶左右」、「風炉薄茶炭左右」、「風炉濃茶左右」、「茶器帛紗包」、「仕籠茶筌荘」を一括して発行を行っていた。

かかることから、美英は照暗女学校に於いて茶道教授を行っていたことが窺える。美英は、女学校の学科としての茶道科か礼儀科、あるいは課外活動のい

ずれかで美英が寄与をしていたことが考えられるが、当時の学科目についての史料は残存していない。

しかし、照暗女学校が京都府移転にあたり中心となって奉仕をした「司祭多川幾造師」<sup>註八</sup>が、明治二十五年（一八九二）十月二十日に京都府知事千田貞暁に申請した「照暗女学校規則・同校設立伺書」の中の「高等科課程表」の表外に「茶ノ湯生花モ一週間一時間以上適宜之ヲ受ク」<sup>註九</sup>と記されており、京都移転後も茶の湯と生花の教育に力を入れていたことがわかる。

次に、点前の伝授順序については、「茶道小習五条」を明治二十三年（一八九〇）二月六日から、「茶道拾二ヶ条」を明治三十年（一八九七）四月一日から定めている。

美英の妻ソノは美英没後も茶道教授を続け、三十名に伝書授与を行っていたことが『傳授扣』に記されている。しかし、宗匠名は美英の宗号である「貯月菴宗従」の名と彼の朱印が捺印をされていたことから、当時は、ソノは女性師匠として許状への記名をしていなかったことが窺える。

『傳授扣』の最終記録である大正十一年（一九二二）十月に名が残る石崎喜登子は、「台子極真惣行儀」が最初で最後であることから、ソノは時間がある時に記録を行っていたとも考えられうる。

尚、点前名では「唐物盆點」は、ソノの時代に初めて現れた点前である。手前のお稽古順序や伝書伝達の時期について、彼女なりに改善を行っていたと考えられる。

#### ⑤ 美英の追善茶会

美英は明治四十一年（一九〇八）四月十一日、六十六歳でこの世を去った。

同月十五日付の大阪朝日新聞と大阪毎日新聞には、彼の死亡・本葬広告「父治郎右衛門（貯月）儀豫テ病氣療養不相叶十一日死亡仕候ニ付來ル十七日午後正一時自宅出棺北濱五丁目尊光寺へ本葬執行仕候間生前辱知諸君へ謹告仕候東區北濱二丁目男平井龜之助 親戚一同 四月十五日」が出されている。

同月十八日には、両紙とも同日付で龜之助が葬送お礼の広告を出している。

(イ) 追善茶会の概要

追善茶会は平井家の檀那寺であり、美英の本葬が執り行われた北浜五丁目の尊光寺において明治四十二年（一九〇九）十月二十三日、午前九時から午後四時にかけて催された。

茶席の設置については、案内幕（紙幕）が二枚残されていたことにより知ることが出来た。かかる案内幕によると、茶席は御齋席を含めて三席設けられていた。更に、美英の遺物を展覧する「遺物展覧席」と「待合席」が併設されていた。

#### (ロ) 追善茶会の開催過程

追善茶会を催すにあたっては、貯月庵社中と知己の職方中により、それぞれ招待状が作成されていた。共に奉書紙に印刷がされており、茶券は切り離し用の点線状の切れ込みが入れられていた。

招待状の文章の趣がそれぞれ異なるので、【史料1―35】に紹介しておく。

これらの招待状から、席主は、貯月庵社中は「第一席」と「第二席」を、職方中は「第三席」を担当したことがわかる。

招待客については『故貯月翁追善茶会招待人名及精等 諸綴』が残存しており、知ることができる。当書には、開催に関係をした茶道具商・菓子屋・料理屋・印刷屋などの領収書も併せて綴られており、その数は膨大な量にのぼる。

この中から、故平井勝彦氏から公開を許された「招待客」についての記録のみを【史料1―36】に紹介する。

当記録は、藍色で二十行の縦罫線が引かれている和紙（事務用紙）を横二つ折りにした紙が使用されていた。

招待人名―つまり招待客名簿は、各種領収書等と共に一括して書類袋に入れられており、そこに「貯月庵社中」と大書されていたことから、貯月庵社中のみの名簿と判断をして良いと考える。

当名簿には追善茶会への出欠情報も記されており、欠席の場合は氏名の上部に「不参」の文字が付され、下部には出欠の確認済という意味であると思われる。「レ」と「(中点)」点が記されていた。

理由はわからないが、赤丸が氏名の上部に付された招待客もある。

これを見ると、招待人数は招待状の数で勘定をされており、総計二百二十一通（内郵送十四通）であった。

マスコミ関係は前半の招待客の中には入れず、別に「大阪毎日新聞社編輯課」と「大阪朝日新聞社編輯課」の二社を招待していた。

かかることにより、明治四十二年（一九〇九）十月二十二日付の大阪朝日新聞「四季富久呂」欄にはトップ記事として、「○追善茶会 故平井貯月庵社中は二十三日午前九時より内北濱尊光寺に於て茶筵を開く」と掲載をされ、同日の大阪毎日新聞「會」の欄においても同様の紹介記事が掲載されている。ここから、美英の追善茶会は「大寄せ茶会」であったのであろう事が推察出来る。

主な招待客は尊光寺、梅上家、山中吉郎兵衛（簪篋）、春海藤次郎（痴漸）、戸田弥七（露吟）、広岡久右衛門、樋口三郎兵衛、高谷恒太郎、植村平兵衛（以文堂）、中野善九郎、貴志弥右衛門（聴雪）、白山善五郎、平井利兵衛、村山龍平（玄庵）、木津宗一（三代宗詮）、千宗左、西村松之助、角倉玄親、林新助などである。

生前の美英の交友・交遊を物語るかのように、実業家や茶人及び茶道具商など多岐に亘っている。松殿山莊流の茶道を創立した高谷恒太郎は、美英から青木遠州流茶道を学んだ門下生である。美英に学んだ後、小堀宗舟にも学び、かかる流派をたてた。

尊光寺は美英の追善茶会の会場であり、本葬を執り行った寺である。

梅上家、山中吉郎兵衛、春海藤次郎、戸田弥七、広岡久右衛門、樋口三郎兵衛、植村平兵衛、白山善五郎、平井利兵衛、木津宗一らの十一人は『茶會々記集』の中で、参会者として度々出て来た人物である。

出席者の中の「平瀬三七雄」は「平瀬龜之助息」<sup>註11</sup>の事で、「初期光悦会役員 地区評議員 号一方庵」<sup>註12</sup>であった。

「村山龍平」は、明治十二年（一八七九）大阪朝日新聞社を創建した人物で、「号は玄庵、香雪」<sup>註13</sup>である。

「山中与七」は、「道具商」である。

「貴志孫右衛門」については、管見ではこの氏名は見つからないので、「貴志弥右衛門」の事ではないかと考えられる。

招待客の内、予め不参の通知が来ていたのは、千宗左と角倉玄親及び林新助の三人であった。

「林新助」は骨董商の中の「中道具商」であり、「角倉雲遠」とは「角倉玄

遠」のことであろうと推測する。「角倉玄遠」は嵯峨角倉家の最後の当主であった。

招待客の中で女性は崎山縫子、松本たけ、川越チカ、田村三枝、青木八重、小山トキ、中橋悦子、山内よし恵、吉川絹子、田辺島子、秋山はる子、磯野みち子、山本志づ子、木原京子、藪田ふく子、西尾せい子、比田とよ子、藤田シンら十八名であった。

これらの招待をされた女性たちは、『遠州流茶道傳授扣』には記されておらず、各々どのような人物であったのかについては管見では不詳である。

#### (ハ) 追善茶会の内容

幸いなことに、待合席、第一席、第二席（御齊席を含む）、第三席の茶会記は全て残存しており、どのような茶会であったのかについて窺い知ることが出来る。これを【史料1—37】で紹介する。

これらの茶会記から、全席とも道具立ては小堀遠州によって作られた茶道具を中心にして道具立てがなされたことがわかる。

貯月庵社中が席主をつとめた「第一席」の「靈前」には美英自作の和歌が展観され、「第一席」には美英が作製した孤蓬庵伝来の遠州有馬山写の茶杓が使用されており、間近に故人を偲ぶことが出来るような演出がなされていた。

一方、職方中が席主をつとめた「第三席」には、遠州蔵帳に書かれている茶道具類が数多く使用されており、美英自作の道具類は見られない。

追善茶会への実際の参会者については、貯月庵社中が席主をつとめた「第一席」と「第二席」の芳名録が残存していることにより、少しではあるが窺うことが出来る。

芳名録の記述の仕方は、「第一席」分については後日に整理されたものらしく、男性には「様」、女性には「殿」などの敬称が付されている。

苗字のみの記述が約三分の一を占め、字体が統一をされており、同一人物が書いたようである。尚、「第二席」分については氏名が全て書かれている。

また、丁毎に字体のクセが異なっており、追善茶会の当日に参会者による直筆ではなく、主催者側が皆で手分けして書いたものであろうことが推定できる。

次に、「芳名録」の紹介を行う。【史料1—38】

これらの芳名録によると、二席とも参会した人は、中野善九郎、木津宗一、

太田佐七（左七の誤りカ）、貴志弥右衛門、西村松之助、梅田善兵衛、芦田真七、毎日新聞社である。このうち、中野善九郎、太田佐七らは道具商、木津宗一、貴志弥右衛門は茶人である。

女性は、「第一席」には佐野里加、佐野定子、小田よ志恵ら六名、「第二席」には和田は奈、本居キシ、佐野サダら六名の、合計十二名が参会していた。尤も、芳名録に記入をしなかった人々もいると思われるので、追善茶会の参会者の総人数については、確かなことはわからない。

美英の追善茶会が開かれた意味は、社会的に混乱を極めた近代黎明期の大坂における茶人・文化人としての美英の存在を、多くの参会者に知ってほしい、記憶に止めてほしいということにあったのではないかと思われる。

#### 第四節 近代黎明期における大坂の茶道界

爾来、「大坂は天下の台所」といわれている。それは脇田修氏が著書『近世大坂の経済と文化』の中で、「全国からの物産が大坂に送られ、ここで加工されて、全国へ送り出された。それは奢侈品よりも大衆的な生活必需品であったことが特色であったこと」<sup>註百十三</sup>であり、その中で「大坂町人が生み出した生活意識といえるもの」<sup>註百十四</sup>として次の二点を挙げている。一つは「非政治性」<sup>註百十五</sup>、もう一つは「経済活動から生み出されてくる合理主義的思考」<sup>註百十六</sup>である。

前者は「泉屋住友など大名貸を嫌った家が多い。また淀屋のように日本一の豪商が、あつけなく取り潰しにあつたから、町人の身分意識は強かった。」<sup>註百十七</sup>ことで、後者は「金銭関係は基本のところ数量的な関係で成り立っているから、計量感覚が発達して合理的思考が強くなるであろう。また、利害の対立するなかでの取引をおこなう町人の場合、自説に固執し正義とする考えは、あまり出てこなかった。」<sup>註百十八</sup>と指摘を行った。

これらに基づく町人の生活観については、「初期の町人は質素儉約で働くことが生活のありようであった。」<sup>註百十九</sup>が、「幕末になると、船場育ちの者は「公家・武家・諸武士・出家がたを友とし、芝居役者を始め、医者・角力取・げいこ・おやま・たいこ持を年中相手ニしてくらしたることにて、茶の湯くさ・い

「ご・せうき・書画・楽舞とんとめつらしからず」(平野屋武兵衛)というように、広く文化的な環境のなかで暮らすようになっていく。家業をおろそかにしなければ、このような遊びも認めていた<sup>註百十</sup>という変化が存在したと述べている。

宮本又次氏は『大阪町人論』において、「江戸時代中期以後経済的実力を大阪が握ると、茶器・珍仕が大阪に集まり、その趣味の向上を来した。身分のやかましい封建社会にあつて、「和敬」を主旨とする茶室は身分的差異を忘れた別天地であり、武人も大小をすてて和氣藹々の中に時を過ごすことができた。大阪町人は茶を利用して盛んに諸侯とも交遊しようとした。人は茶の席にすわれば、その人が商人であろうと、魚屋であろうとまた武士であろうと、ひとりの客であり、生を「楽しむ」ひとりの人間なのである。<sup>註百十一</sup>と大阪町人の間で茶道が浸透した理由を指摘した。そして茶道を嗜むことが出来た町人は高級町人のみであり、「財力を重んずる町人は茶会の豪華をほこることはあつても、茶道本来の「わび」や「すき」を閑却するように<sup>註百十二</sup>なり、「町人間の茶道は「たくらみ」、構えや道具に重点をおくようになった。長崎本商人や十人両替衆の居商・蔵元などには名器珍仕を入手して、それを誇るものが出てきた。大阪町人の茶道にはそうした志向を否定しざることはできない。」<sup>註百十三</sup>と、大阪町人の茶道の在り方について指摘を行った。

近代黎明期に隆盛を見た煎茶については、檜林忠男氏が『煎茶の世界』において「旧幕の権力階層との結びつきが深かった抹茶は、維新と共に急速に凋落をして行き、これにかわって、それまで反権力的・在野的・反骨的性格の強かった煎茶が、この時代の気運に合致し、爆発的な流行を示すにいたつたのである。」<sup>註百十四</sup>と、煎茶が流行をした理由を「反権力的・在野的・反骨の」に求めた。

宮本又次氏は『大阪町人論』の中で、「まっ茶も大阪ではなかなか盛んではあつたが、それにもましてせん茶が大阪を本場とするにいたつてゐる。もちろん江戸にも学舎・詩人・画家の中でせん茶が喜ばれはしたが、花月庵流や小川流に対抗する流派はそだたなかつた。」<sup>註百十五</sup>と述べ、「上田秋成や木村兼葭堂巽斎のような在阪の有力文化人がせん茶に甚だ熱心」<sup>註百十六</sup>であつたことを挙げてゐる。

大阪における明治維新については、宮本又次氏は『大阪経済人と文化』の中で「明治維新は未完の市民革命であり、政権担当者の委譲という形で行われたから、伝統主義の氣質がそのまま温存され、そのため旧来の社会意識が非連続の形で連続し続ける。とくに第一の側面の奉公意識は国民国家 (national state) に移行して、藩国家の「国益」という provincial なものから、ナショナルリズムに上昇し、その中で忠誠となり、企業もまた「国事」を考へるようになる。士魂商才、「そろばん」と「論語」をふまえて、実業家精神が出てくる。対面は武士的なものであるが、これは見栄のものとなり、タテマエを主張することになる。分限は身分より階級に移行し、国家と結びついて権威主義となり、官僚制となり、こうしたことのために封建社会の貴賤賤金、農本商末思想がそのままつづいて、商人蔑視の感情を残すことになり、そのため第二の側面である始末、算用、才覚は必ずしも重きを置かれなくなる。」<sup>註百十七</sup>と指摘し、大阪町人が旨とする「始末、算用、才覚」は時代遅れと見なした。更に、産業の在り方については、「大阪の方は政府や役人の世話にならず、独立独歩の道をの上がつた。」<sup>註百十八</sup>と指摘し、「近代教寄者」達の在り方について言及した。

このような時勢にあつて、青木宗鳳家五代・如習齊の代には、大名茶の系統を引く青木遠州流茶道は、あまり大阪町人の間では広まらなかつたと思われる。近代黎明期における大阪には、両千家流をはじめとして、いろいろな流派が乱立していたことは『茶会々記集』の参会者たち―茶人、実業家、道具商らの彼らが所属していた流派から如実に窺うことが出来る。

明治四十一年(一八〇八)には藪内節庵により、「茶道は決して一流一派に偏すべきものではなく各流が互ひに交流して研究すべきものである」<sup>註百十九</sup>という彼の主義主張を汲んだ「篠園会」が発足したが、美英の茶の湯はいろいろな流派の人々が参加していた事から、時代の先端を行つていたと言えよう。これは、美英が青木遠州流茶道の宗匠であるという立場から、煎茶(道)に圧され茶の湯が衰退しつつある社会の中で、名器を使用して在阪の茶人を招待した茶会を数多く催していたことから窺うことができる。

また、江戸時代には男性のみの嗜みであつた茶の湯を、福沢諭吉が「すでに優美を貴ぶといへば、遊芸はおのずから女子社会の専有にして、音楽はもちろん、茶の湯、插花、歌、俳諧、書画等の稽古は、家計の許す限り

等閑にすべからず。」<sup>註百三十</sup>と述べているが、近代黎明期という時代の移り変りの中で、美英自身も、女性の教養・嗜みとしての茶の湯の在り方について、彼なりに、模索していたのであるかと考えられる。

大阪豊國神社における献茶式の依頼は、青木遠州流茶道の宗匠としての彼の地位が、大阪茶道界において不動であったことを雄弁に示していた。

美英は、近代黎明期の大阪茶道界において、時勢に従いながらも新しい茶の湯の在り方を模索し、御公儀の「旧いもの」としての世間の位置付けで衰退しつつある茶の湯の振興をはかることに、「家元」として尽力を行っていた。

美英亡き後、次代の当主、平井次郎右衛門の代の嗜みについての史料は残念ながら残存していない。

美英によって書かれた『茶会々記集』は、近代黎明期にかけての大阪における茶道界について、道具と人物（参会者）から、「数寄者の時代」に入る以前の世界を垣間見ることが出来た。

### 小括

本章では、近代黎明期において幾多の茶会を催しその茶会記を残した大阪商人大庭屋平井家十代・美英の茶の湯を取り上げた。大庭屋平井家は江戸時代に大阪において、諸藩の御用商人（おそらく蔵元か掛屋）として、大名貸を営み、茶道を嗜んでいた。

平井家所蔵古文書の茶道関係史料の大半は、美英に関する史料であり、「旅」の記録もあった。美英が明治初期に行った京都への小旅行の記録であって、当時の世情や、旅行中の風雅や茶匠としての美英の姿を垣間見ることができた。

大庭屋平井家は茶道を遠州流に求め、庵号は聴松菴であったが、美英が五代・青木宗鳳に師事し、貯月菴と改めた。そして、青木宗鳳の没後に、秘伝書（浪花文庫）と共にその茶道を継承した。

平井家十代美英は前記「遠州流茶事録」に記されているように、茶会記

を集録しつつ「青木遠州流」の家元として、その茶道を広めた。

その時期には幕藩体制の崩壊により、大名貸を営んでいた平井家は諸藩への調達金の大半が回収不能となり財政が逼迫したが、美英はやりくりしながら青木遠州流茶道を教えていた。そして、青木遠州流茶道を継承した明治四年から明治二十五年に亘って年平均約十回の茶会を開催し、その茶会記を残した。

しかし、財政難、その茶道の流儀、茶道界の世情、あるいはそれらが相まって、青木遠州流茶道は途絶えた。その時期としては、『當家貯月菴茶会々記録』の最後の茶会に鑑みて明治二十五年頃、又は美英没年の明治四十一年、又は最長で青木遠州流の秘伝書（浪花文庫）が平井家から個人の手に渡った昭和七年とみなせる。

『茶会々記集』に見る交友と道具立てについては、前者は始めのうちは同業者と一緒に招いているが、明治八年（一八七五）以降からはさまざまな客構成が見られた。後者は、小堀遠州の品を中心として美英の美意識に則った道具組がなされていたが、煎茶（道）が流行した時には文人物を使用しており、道具蒐集には美英に好みの幅があったことが窺えた。茶道具組と参会者からは、「数寄者の時代」に入る前の世界を見ることが出来た。

次に、「家元としての美英」については、大阪豊國神社における献茶式関係史料と美英自作の茶道具を取り上げた。

献茶式関係では、「平井貯月宗匠」に二度に亘る献茶式依頼があり、賛助目録には献茶式用の茶具や賛助金を有志からの嘉贈寄付が記されており、美英の大阪茶道界における家元としての確固たる地位を窺えるものであった。

次に、「平井ソノの茶の湯」については、許状伝授の控『遠州流茶道傳授扣』によると、学校茶道の記事もあり、明治二十年（一八八七）九月二十九日には大阪・照暗女学校において美英が生徒三名に伝書を発行していた。かかることから、美英は、女学校の学科の茶道科か礼儀科、あるいは課外活動のいずれかで寄与していたことが窺えた。

ソノは美英没後も茶道教授を続け、三十名に伝書授与を行っていたことが『傳授扣』に記されていた。

「唐物盆點」はソノの時代に初めて現れた点前であり、手前の稽古順序や伝

書伝達方法に改善を行っていたことが解った。

第四節では、美英とソノが近代黎明期の大坂茶道界において時勢に従いながらも点前の伝授方法を変えたり、文人物を取り入れるなどの工夫を行っていたことが明らかになった。

## 第二章 松阪町人本居信郷の茶の湯

### はじめに

三重県松阪市は、三重県の中部に位置する城下町である。

松阪城は、現在は松阪城跡公園となっており、嘗ての天守閣はないが、城下にはきちつと剪定された垣根が美しい「御城番屋敷」が残っており、幕藩時代の凜とした空気が残っている町である。

拙稿で取り上げる本居家は、江戸時代中期に医者であり、国学者であった本居宣長を生み、近代では童謡作曲家の本居長世を生んだ家である。

本居宣長家の旧宅については、「明治四二年一〇月、宣長旧宅の移築先は、当初山室山神社内（現松阪市役所の位置）が予定されていたが、松阪市魚町一六四五番地から、松阪城跡公園内に、移築・復元」<sup>註一</sup>され、本居宣長記念館と隣接している。

本居家については、「遠祖は本居県判官平健郷で、十三代目にあたる七右衛門道印が小津家を名乗り、居を松坂に移して染物業を営んだ。その子である道休は木綿業を開き、「中興開祖」<sup>註二</sup>とされており、宣長以降は宣長の学統を引く「和歌山」と、本居家の継承者は「松坂」とに分かれ、それぞれ時代と家の要請による役割を果たしていた。

家業については、宣長の時に「商を廃し」<sup>註三</sup>医者となった。

宣長以降は宣長の学問を継いだが、拙稿で取り上げる信郷は「国学への関心は薄」<sup>註四</sup>く、「神職の傍ら茶道を指導」<sup>註五</sup>していたようである。

信郷の次男で本居家を継いだ清造は、「大阪府第二尋常中学校国語科教員となり、その後、岐阜中教諭心得、国語伝習所高等科講師」<sup>註六</sup>等を歴任した教育研究者であった。

「宣長六代孫」<sup>註七</sup>にあたる長世は、作曲家である。長世は、多くの人が知っている『七つの子』や『赤い靴』等の作曲を行った。

次に、本居家の文化面については、『本居宣長事典』によると、有郷とその妻・国と信郷及び清造の項に記述があるのみで、その他の当主の文化活動については不詳である。

先ず、有郷とその妻・国については、「自詠は『有郷詠草』九冊（本居宣長記念館所蔵）として文政一二年から天保一年（一八四〇）迄の一部が残る。著書に紀行『密岳日記』がある。後妻の国は四日市諏訪神社神官生川氏女。夫婦三絃等の趣味を共にする」<sup>註八</sup>と記述をされていることから、和歌と三絃を嗜んでいたことが分かる。

信郷については、「茶道全般に造詣が深」<sup>註九</sup>かったことが知られている。その後を継いだ清造は、『本居清造詠草』がある。<sup>註十</sup>ことから、敷島の道Ⅱ和歌を代々、嗜んでいたことがわかる。

信郷自身の茶の湯については、信郷は自他会記を収めた茶会記である『会席附』五冊（四冊目と五冊目は『懐石附』収録年自安政四年（一八五七）〜至明治十八年（一八八五）と自作の茶道具が本居宣長記念館に所蔵されており、信郷の交友関係や彼の茶の湯を窺うことが可能である。

信郷は、近代黎明期の松坂と伊勢国における町人茶人であったことから、当時の実態と役割とを知る上で看過出来ない人物である。

本稿では、本居信郷の茶の湯について述べていきたい。

### 第一節 研究方法

#### (一) 研究史

三重県の茶道史についての研究は、『茶道聚錦 六 近代の茶の湯』に収録をされている戸田勝久氏の「近代の茶の湯の基盤と展開―東京の裏千家を支点として」<sup>註十一</sup>が嚆矢である。

戸田氏は「四 伊勢豪商と東京の裏千家流」<sup>註十二</sup>において、東京に裏千家流が広まる契機については「玄々斎が、田安家の四代であった斉荘と、田安斉匡の次男で五代を襲った慶頼を門人にしたこと」<sup>註十三</sup>と述べ、「玄々斎の茶系が東京

の裏千家流を形成するにあたって、長井鼎玄齋（一九〇〇歿、七十五歳）、田中宗ト（一九二三歿、七十八歳）の系統が主流になった<sup>註四</sup>ことを指摘した。

そして、「日本橋大伝馬町に江戸店を構える、松阪の木綿問屋<sup>註五</sup>であった長井鼎玄齋と「専門の茶匠」<sup>註六</sup>である田中宗トの存在を挙げ、六世六閑齋から江戸に何かしらの縁が出来、玄々齋の茶系が東京の裏千家流を形成するにあたっては、松阪町人である長井鼎玄齋と田中宗トの存在が大きかったことを指摘した。

更に「松阪の裏千家流は、八世又玄齋の門人であった藤田適齋が早い。藤田氏は長谷川家に最も近い縁戚を有するが、小津・長井・長谷川の三大家は複雑な婚姻関係を構成しているから、江戸における千柄菊旦との交流も想定される。その意味で、長谷川宗意（元美 聴雨齋）の父休拙（一七五〇—一八一七）の存在が注目される。休拙は又玄齋の歿年に、二十一歳、認得齋在世中に死んだ。このように、松阪に裏千家流が広達し、それが彼らの江戸店に及んだのである。」<sup>註七</sup>

と指摘し、裏千家流が江戸で展開をした理由について、松阪で長谷川家・小津家・長井家の三家に婚姻関係があり、江戸における千柄菊旦との交流が想定されることと、松阪における裏千家流の伝播が江戸店にも及んだと結論付けた。

平成十四（二〇〇二）年には、裏千家茶道資料館に於いて春季特別展「近代茶道への軌跡 裏千家十一代玄々齋宗室を中心に」が開かれた。（開催期間 三月二十日～五月六日）当図録<sup>註八</sup>には筒井紘一氏論文「玄々齋宗室の生涯（承前）」、戸田勝久氏論文「玄々齋と松阪の社中―長井同玄齋、小津、長谷川、三井などの諸家―」、神谷昇司氏の論文「玄々齋の建築」、赤沼多佳氏論文「玄々齋の茶道具」の四本が収録されている。

これらの論文の中で、十一世玄々齋宗室と伊勢国の茶人達について扱っていた論文は、筒井紘一氏の論文「玄々齋宗室の生涯（承前）」と戸田勝久氏の論文「玄々齋と松阪の社中―長井同玄齋、小津、長谷川、三井などの諸家―」であった。これらの論考について、次に簡単にみていくことにする。

筒井氏の論文「玄々齋宗室の生涯（承前）」は、論文題目の中にある「（承前）」で記された内容から始まる。

「（承前）」の大きな内容は、「玄々齋精中宗室の生涯についての概略は前回平成十三年秋季特別展「近代黎明期の茶の湯―裏千家十一代玄々齋宗室の時代

―」の図録で論述した。とはいえ、その範囲は主として玄々齋の出自である大給松平家とそれに連なる渡辺又日庵及び長谷川家を中心に据えながら、その生涯を見ていくことを主としたもの<sup>註九</sup>である。

筒井氏論文においては、「前回の展覧会の後になって玄々齋の新しい史料が次々と視野に入る幸運が訪れた。それらの史料を通覧していくと、玄々齋の交友の広がりや強力な牽引力で人をひきつけてきた人物像が彷彿され、その人間的な大きさには驚嘆させられるところが多々見出されるのである。ここで判明した玄々齋の交友の範囲とは、今までいわれられてきた伊予松山の久松家や加賀前田家は勿論のこと、遠くは長崎の町乙名若杉喜得郎とその子得重郎、江戸の豪商仙波宗意、伊勢松坂の長谷川次郎兵衛、長井同玄、小津松涛庵、射和の竹川竹齋、石見国浜田の恒松与吉郎、越後国柏崎の松村宗悦、岩国吉川家の茶道役名嶋宗古、岡山池田家の伊木三猿齋、近くは姫路の児島有隣齋、京都の公家徳大寺公純とその子住友春翠など全国各地に及んでいることがわかる。現代と異なり旅行の日程とその困難を考えた時、玄々齋と心身一体となって行動を共にする業躰と称する弟子達の活躍が大きく支えていたといわなければならない。と同時に玄々齋が弟子群を業躰として位置付けて各地へ派遣していったのも、その交流の広さ故であったことがわかる。」<sup>註十</sup>と述べ、玄々齋の幅広い交友と、彼を支える業躰が存在をしていた事を示す史料が発見されことにより、玄々齋の交友が南は長崎から北は江戸までの全国に亘っていた事がわかる。その身分は、公家や武士及び町人まで幅広い。

そして、この中から伊勢松坂の長谷川家、長崎町乙名若杉喜得郎、越後国柏崎の松村宗悦、射和の竹川竹齋の四名を抽出し、消息、日記や聞書及び書画軸他の新史料を提示をしながら、従来は知られていなかった玄々齋との交友関係について考証と検討を行っている。

拙稿では、この中から伊勢国に関係がある人物に限定し、筒井氏の研究の紹介を行う。それは、伊勢松坂の長谷川家と射和の竹川竹齋である。

先ず、松坂に所縁が深い玄々齋について筒井氏は、「長谷川家文書にみる玄々齋」から考察を行った。筒井氏は、長谷川家文書によると玄々齋の幼名が従来では「栄五郎」説が採られていたが、「千代松を幼名とする方が妥当であると判断するに至った。」<sup>註十一</sup>この証左として「裏千家十代認得齋長谷川源右衛門、



長谷川次郎兵衛の連名宛にだした九月二十五日付の消息」<sup>註一七</sup>が存在したこと  
を挙げ、千代松が玄々斎の幼名であった事を証明した。

次に、玄々斎が「裏千家の婿養子となるべく入家した年齢については、「十歳  
よりも前ではなかったか」<sup>註一八</sup>と推定を行っており、その証左を「玄々斎が半  
白を迎えた安政六年（一八五九）のことである。玄々斎はこの年九条久忠公よ  
り「精中」の号を頂戴し、記念として八代宗哲に造らせた黒塗丸盆を由縁の人  
たちに送っている。」<sup>註一九</sup>という消息に求めた。

そして、この後に玄々斎が「玄室」、「斎号」等への改名を行った経緯につい  
て詳しく述べており、長谷川家が裏千家・玄々斎と黒塗丸盆を贈るなどにより、  
深い関係があった事を証明した。

伊勢商人と茶という視点からは主な伊勢商人の表を挙げ、丹生（多気郡多気  
町）の長井家を筆頭とする「櫛田川グループ」、川喜田家を筆頭とする「藤堂城  
下町グループ」、三井家を筆頭とする「松阪グループ」、型紙仲間である伊勢家  
を筆頭とする「白子港グループ」、四日市の高津家を筆頭とする「其他」に商人  
達を地域別に分けた。そして「長谷川家を中心とする動向」については、「玄々  
斎が伊勢松坂の稽古人たちに送った茶杓」<sup>註二〇</sup>の行方から究明し、「そのほとん  
どが日本橋に店を構えている人たち」<sup>註二一</sup>であった事がわかる。

更に、京都における明治五年に開催された第一回内国勸業博覧会において玄々  
斎が行った出品は、「他国からも拝借するという気概を持って奉仕したものと考  
えられる。」<sup>註二二</sup>と述べ、それを裏付ける史料として長谷川家文書の存在があっ  
たとした。

次に、竹川竹斎については「射和の雄竹川竹斎」の項を設け、「玄々斎と最も  
交友の深かった人物の一人」<sup>註二三</sup>として取り上げた。

内容は、「嘉永元年（一八四八）四月に京都を旅した竹斎が今日庵を訪ねた折  
の茶会、及び嘉永六年（一八五三）に玄々斎が竹川家を訪れて「吉葛園」の扁  
額を認めたり、益友社の社中たちと楽しんだであろう茶会の片隣をみておくだ  
けに留めておかねばならない。」<sup>註二四</sup>としている。交友については、「いつ頃始  
まったかは不明」<sup>註二五</sup>であるが、『竹斎日記』から交友が見られるようになるの  
は「弘化五年（一八四八）正月から」<sup>註二六</sup>であるとしており、『なまこひの日記  
』と『川船之記』を傍証としている。

「益友社」の社中に対しては、嘉永六年の「二十八日には益友社全員が玄々  
斎に挨拶し、

廿九日宗匠入来一同伝授礼百五十両

宗味へ廿両 利休堂へ五両 内室へ五両弟子家来へ五両遣ス

右は近來益友講取結置候而右二而弁ス、社中盆点は伝授いさゝ

別記有

と書かれている。その後、十月十一日に（中略）利休尺八花入の写しを作っ  
ていることがわかる。」<sup>註二七</sup>と記されており、益友社社中へ玄々斎は盆点点前の伝  
授を行い、利休尺八花入の写しを作っていたことの指摘を行った。

玄々斎の逝去についても竹斎は日記に著しており、玄々斎と竹斎との交友が  
玄々斎の終生まで続いていたことを明らかにした。

戸田勝久氏の論文「玄々斎と松阪の社中―長井同玄斎、小津、長谷川、三井  
などの諸家―は、先ず「松坂（阪）」という都市の成立について」<sup>註二八</sup>から始ま  
る。司馬遼太郎氏が『街道をゆく 白河・会津のみち』<sup>註二九</sup>の中で記していた  
「利休七哲の一人にも挙げられている蒲生氏郷」<sup>註三〇</sup>の存在から始まる。

松坂と茶の湯との関連については、本居宣長記念館所蔵の「勢州松阪持丸長  
者鏡」に記載がある商人の中から長谷川家・長井家・久世家、小津家、村田基  
右エ門ら四家一個人の生涯とその交友について検討を行い、書状などを元に常  
念寺小妻氏、深津宗味、岡寺継松寺、田中宗卜らと玄々斎との関係について述  
べた。なお、「勢州松阪持丸長者鏡」とは、松坂における「長者番付」のことで  
ある。

長井氏については、「家蔵の玄々斎書状（淡々斎箱書）」に千宗室（玄々斎）が  
正月十五日に長井同玄斎をはじめとする十四人宛に出した「松坂社中消息」の  
紹介を行い、この消息に記されていた長井氏、長谷川氏、小津氏、三井氏、久  
世氏、村田氏、常念寺について解説を行った。そして、「田中宗卜に依って、松  
坂の茶の湯が、東京で伸展することに助勢したのである。」<sup>註三一</sup>と結論付け、維  
新後の東京における裏千家の茶の湯は、田中宗卜による所が大きかったことを  
指摘した。

江戸店との関係については、「幕藩体制の桎梏の中で、松坂町人は強固な経済  
力を武器として、一方では江戸傳馬町の中核を形成して、自由な精神の高揚を

みせた。」<sup>註三七</sup>と指摘した。

「松坂」の町については、「氏郷が去った松坂は、織部と同族とされる古田氏が二代（重勝・重治）あつた後、紀州徳川家の支配下に入つて、近世を全うする。かつては十二万石であつた主のいない城郭だけが残つた。その殿舎は明治十年まで存置している。当然、和歌山の藩庁から、役人が派遣され常駐するにしても、松坂は、藩主が不在の城下、商都となつたのである。」<sup>註三六</sup>と指摘し、松坂は和歌山の藩庁に役人が常駐はしていたが、藩主は不在であつた事と指摘した。

松坂町の町人意識については「殿様のいない城下町であることが、松坂町人の気質の形成に、深甚の影響を及ぼしたに違いない。」<sup>註三九</sup>と推測を行い、「封建制度下でありながら特異な狭間が、松坂にあつたのだと主張したい。」<sup>註四〇</sup>と述べ、藩主がいない城下町であつた事が松坂町人の気質の形成に深い影響を及ぼしていたと推測を行った。

松坂における文化活動を扱つた書は、平成二十五年三月二十八日に財団法人今日庵から発行された『茶道文化研究 第五輯 特集 勢州松坂の藝文と茶の湯』がある。当書において茶の湯について言及をしている論文は、掲載順に左記の五本である。（敬称略）

a・吉田 悦之氏 圓居の文化―松坂町人文化の多層性―

b・大喜多甫文氏 商人町松坂―松阪商人の文化的活動―

c・上野 利三氏 玄々斎と射和の竹川竹斎

d・龍泉寺由佳氏 伊勢商人津・川喜田久太夫の教養と半泥子

―石水博物館の所蔵品から―

e・戸田 宗安氏 勢州松坂茶事覚書

これらを順に見ていく事とする。

先ず、a吉田悦之氏の「圓居の文化―松坂町人文化の多層性―」においては、「国学者本居宣長が、三十有余年の歳月を費やし『古事記伝』を書き終えたのは寛政十年（一七九八）六月十三日、その三ヶ月後に祝賀の歌会が開かれた。寛政十年九月十三日夜古事記伝かき終へぬるよろこびの圓居して」<sup>註四一</sup>の中

の「詞書の「圓居」という言葉に注目したい。「圓居」は「まとゐ」と読み、意味は文字通り圓く輪になつて座ること、車座、サークルである。」<sup>註四二</sup>と、宣長

の文章の中に出てくる事を紹介した。そして「会説」とは、身分の隔てなく、時には立場を変えて議論し、白熱してもその場限りのことで後は争わない（中略）「会説」の成否は参加者の均質性、あるいは深い信頼関係の有無に関わる。それさえクリアすれば創造性のある会となる可能性を秘めている。つまり、「会説」とは学問における「圓居」なのである。成果も大事だが、自由という精神が支配する非日常の世界である。形態としては今のゼミナールに近く、同一視する向きもあるが、単純には比較出来ない。」<sup>註四三</sup>と、宣長の言う「圓居」とは、学問における「会説」であることを指摘した。

そして、「松坂はその「圓居」の精神が横溢する町であつた。」<sup>註四四</sup>と述べ、「この町では日常の延長であるはずの月次会やお稽古をも「圓居」に変えてしまう力があつた。」<sup>註四五</sup>と指摘した。

その理由としては、「松坂の旦那師で、茶の先生をする者は最低や」という風潮があつたそうだが、どこまでも自らの楽しみとして修行に励んだのである。その結果が「圓居」の日常化である。これを疑う人がいるかもしれないが、例えば明和期から明治期に至るまでのたくさんの茶会記、会席附や、歌会から古典講釈へと展開していった本居宣長の活動をたどると、その疑問は氷解するであろう。また、「圓居」が繰り返されてもマンネリズム化しなかつた背景には、主催者の力量と、その大きな担い手となつた精神的な意味での深さ、茶道の建築や工芸、料理にまで及ぶ総合性があつたことは言うまでもない。」<sup>註四六</sup>と述べ、松坂の文化は「圓居」の存在により成立をしていたことの指摘を行い、力量がある「圓居」の主催者と精神性が広く幅広い知識が結集していた事を理由に挙げた。

茶の湯については、「藤田氏は適齋、『宝曆咄し』に、藤田徳右衛門 テキ斎と改メ茶の湯を専らとなし、後は普請をなし公家の住居になす。此人其比茶之老分故弟子皆思ひ思ひにおこりをなすと書かれるように松坂茶道史の最初に位置する人である。茶道を裏千家八代又玄斎一燈、その没後は不見齋に習い、香道は蜂家宗元門である」<sup>註四七</sup>と述べたが、「明確なのは元文元年（一七三二）、長次郎百五十回忌に表千家左入から三井則右衛門が茶碗を贈られたことを待たねばならない。管見の及ぶ限りこれが松坂茶道史の最初の記事である。」<sup>註四八</sup>と、史料上は元文元年に三井則右衛門が長次郎百五十回忌に表千家左入から茶碗が

贈られたことを嘯矢であると指摘した。

「その次が寛延元年（一七四八）、宣長が山村通庵を師として茶道を習ったこと」<sup>註五九</sup>としている。

そして、三井則右衛門の子で三代時時は「明和七年十一月から天明四年閏正月までの茶会記（「松坂茶会記」）<sup>註五七</sup>を残しており、吉田氏は「明和年間は、適齋の活躍期とも重なり、松坂の茶道が本格化した時期といえよう。」<sup>註五八</sup>と述べ、「松坂茶会記」に長谷川治郎兵衛家の名前も見えるが、同家の茶は聴雨庵初主休拙に始まるとされる。<sup>註五九</sup>と長谷川治郎兵衛家についても言及を行った。

更に、「松坂茶会記」に記され高崎と同席した松坂町人については「長井嘉左衛門家の温齋道知、その子石瀬齋道尚あたりであろうか。いずれも裏千家流に属する。圓居の持つ祝祭性は流派の壁をも低くするのである。」<sup>註六〇</sup>と指摘し、「圓居」の幅の広さについて述べた。

次に、b大喜多甫文氏の「商人町松坂―松阪商人の文化的活動―」においては、茶の湯については「三 松坂商人の文化的活動」に「五 茶の湯」が設けられている。ここでは「松坂商人の間で茶の湯が盛んになったのは十八世紀後半頃からであり、藤田適齋・長谷川休拙（邦淑）・聴雨庵（元美）・六有（元貞）、長井同玄齋（嘉左衛門道閑）・鼎玄齋（九郎左衛門静閑）、小津石齋（清左衛門）、竹川竹齋、小妻啓真などがよく知られる。小妻（常念寺住職）以外は江戸店持ち豪商の主人たちであった。」<sup>註六一</sup>と紹介されている。

藤田適齋については「家督を息子に譲ってから茶・香・和歌に専心し、松坂の町人たちに茶の湯や香道を広めていった」<sup>註六二</sup>と指摘した。

商人の茶の湯については長谷川家と長井家及び竹川家についての紹介されている。

長谷川家については、「当主が茶の湯に熱を入れ始めたのは六代治郎兵衛邦淑である。」<sup>註六三</sup>とし、「茶の湯も裏千家八世又玄齋・九世不見齋に師事して、藤田適齋と共に松坂における裏千家茶の湯の先人であった。」<sup>註六四</sup>という位置付けがなされている。

七代治郎兵衛元美の時には「文化三年（一八〇六）江戸の大火で江戸五店が類焼し、経営が悪化した。その時、従業員たちの建言により松坂本・分家の出費の抑制などを実行した。元美は聴雨庵と号して茶の湯を嗜んだが、諸道具類の

購入などは極めて少なくなった。」<sup>註六五</sup>という。

八次元貞の時には「三河・平坂の木綿買次問屋を吸収合併するなど積極的な経営を行った。元貞は茶の湯では六有と名乗った。」<sup>註六六</sup>と記されており、裏千家との関係は、「親しい交流は十一世玄々齋の頃からで、天保十四年（一八四三）長谷川六有が父親の年賀を祝して玄々齋に揮毫を依頼した時の返事、および六有が安政五年長谷川家九次元照への家督相続が無事終了したことを報告し、その祝いに玄々齋が六有に水屋茶杓を送った書状などから玄々齋と長谷川家当主とは親密な間柄であったと考えられる。」<sup>註六七</sup>と、書翰の内容から親密さを裏付けた。

長井家に関しては、「長井家の主人は文化活動に熱心な人が多かった。とりわけ幕末から明治にかけては、松阪の茶の湯のまとめ役であった。」<sup>註六八</sup>と指摘した。その事由として「裏千家十一世玄々齋が松阪の社中に宛てた年賀の祝状の宛先には、長井同玄齋、長井祿之助、長谷川次郎兵衛、長谷川元之助、小津新兵衛、小津清左衛門、長谷川熊蔵、長井三郎兵衛、長井於とみ、三井宗十郎、久世弥一郎、長谷川次郎吉、村田本之助、常念寺啓真（以上敬称略）など、当時の松阪の茶人十四名の宛名になっている。その中で長井同玄齋（十二代嘉左衛門道閑）が筆頭に書かれていることから、当時同玄齋が松阪の茶の湯のリーダーであったことがわかる。」<sup>註六九</sup>と指摘した。

更に、長井家では女性も茶の湯を嗜んでいたという事を、「明治二十一年八月六日付けの今日庵宗室（十三世巴能齋）の長井家宛ての大暑の見舞状の宛名」<sup>註七〇</sup>に見出した。宛名は「長井同玄齋、長井由子、長井九郎左衛門、長井富子」<sup>註七一</sup>で、長井由子と長井富子の二名であった。

射和の竹川竹齋については、「江戸時代中頃の最盛期には江戸に六店（両替店・絹物店・木綿問屋・酒問屋・荒物問屋など）、京都に仕入店、大坂に両替店と仕入店など合計九店を経営する伊勢商人の代表的商家であった。」<sup>註七二</sup>と述べ、伊勢の代表的商人と位置付けた。

茶の湯については、竹齋が玄々齋に出した書状の「茶道伝授のお礼に自分が焼いた射和万古の茶器を献上」<sup>註七三</sup>し、「嘉永元年四月に京都を訪れた竹齋は今日庵を借り茶会を催した。」<sup>註七四</sup>と、玄々齋が「嘉永六年に九月二十六日から射和の竹齋邸に逗留、地元の茶人たちに茶道を伝授」<sup>註七五</sup>をしたことを記して

いる。

次に、c上野利三氏の「玄々齋と射和の竹川竹齋」は、「茶の湯は重要な竹齋の生活の一部を構成していたのである。」<sup>註六九</sup>という竹齋の人物像と射和の土地柄、そして「茶の湯はどのように玄々齋から手ほどきを受けたか。」<sup>註七〇</sup>等について考察を行った。

茶の湯に関しては、平井宗三に学び「射和に茶の湯を伝授しに来ていた人物」<sup>註七一</sup>であった。「竹齋が正式に入門するのは弘化四年（一八四七）三月六日のことである。代稽古は深津宗味が担当した」<sup>註七二</sup>とのことである。「嘉永元年（一八四八）四月の今日庵訪問の時には、玄々齋から直接指導を仰ぎ、急速に親密な関係」<sup>註七三</sup>となつた。「竹齋との良好な関係は終生続くことになるが、不安定な世情の故に玄々齋と竹齋の両人は幕末に一、二度京都で会つた後は、手紙のやり取りでつないでいることが、『竹齋日記』に頻繁に見られることから判明する。」<sup>註七四</sup>と述べ、玄々齋と竹齋の交友関係は政情の混乱期にも関わらず、「手紙」のやり取りをしていたことを挙げた。

次に、d龍泉寺由佳氏の「伊勢商人津・川喜田久太夫の教養と半泥子―石水博物館の所蔵品から―」では、茶の湯については「川喜田家では十三代遠里が五代堀内宗完に、十四代石水が二世住山楊甫の門に入り、のちに金森得水の取次ぎで表千家十一世碌々齋の門弟となり茶道を学んだ」<sup>註七五</sup>と述べ、十三代にあたる当主・遠里から茶道を嗜み始めたことを指摘した。

「川喜田家文書」には、「表千家に限らず、裏千家十一世玄々齋（一八一〇〜七七）からも安政の大地震の見舞状が届いており、流派を超えて交流があったことを窺える。」<sup>註七六</sup>と述べ、津では流派を超えての茶人達の交流があったことを証した。

半泥子の茶の湯については、「陶芸の中心は茶の湯である。表千家の十一代久田宗也（無適齋 一八八四〜一九四六）の門に入り、津の石水会館まで出稽古に来てもらっていた。」<sup>註七七</sup>と述べている。

最後に、e戸田宗安氏の「勢州松坂茶事覚書」は、戸田氏が研究上で出会った高瀬宗亦、潤玄齋深津宗味、横山宗頭、小川恒太郎の生涯と茶の湯について、翻刻史料や写真を織り込み乍ら、戸田氏の御先祖と長井家を基底としながら、伊勢の茶人について追究と紹介を行った。その内容を見ていきたい。

高瀬宗亦は、戸田氏が松坂と初縁を得た方である。高瀬の人物像については、戸田氏が紹介を行った「淡交会三重支部青年部が出した『淡青』（昭和五十八年一月二十日、第八号）」<sup>註七八</sup>の中から、茶の湯関係の一部を読むと、高瀬は明治二十一年（一八八八）六月六日に湊町の料理旅館あけぼのに生まれ、父の豊助は対碧と号し祖父の彦三郎と共に茶道を三時庵に受けていた茶道一家であったことがわかる。

戸田氏は「鷗琴」第八号に田中宗ト特集を発行したのは、昭和四十年三月である。残された一年七ヶ月の間に高瀬宗亦と私の交流は殆ど進展していない。その特集号に私が要請した「長井鼎玄齋と田中宗ト翁の事ども」が残されたと云える。」<sup>註七九</sup>と述べていることから、高瀬氏が「長井鼎玄齋と田中宗ト翁の事ども」で記していた長井と田中について、次に簡単に紹介を行う。

最初に高瀬氏と長井家との関係については、「曾祖父の代から当時松阪の旧家長井家に勤めて居りました。私の父はその長井家の鼎玄齋のお水屋の御用を勤めて居りました。其関係で私は父から鼎玄主人と田中宗ト翁との事どもを聞いて居りました。そうしたわけで父は田中宗ト翁とも常に文通をし、又東上の際は宗ト翁をお訪ねして居りました。」<sup>註八〇</sup>と述べている。曾祖父の代から長井家に勤めており、父の豊助は鼎玄齋の水屋に勤めていたのである。その関係で亦善は鼎玄齋と田中宗トとの関係について聞き、文通や訪問があったことがわかる。

鼎玄齋については「お兄様が眼が不自由であつたため事実上江戸店の御主人でありました。鼎玄齋は詩歌、俳句にも堪能であつたが特に茶道は裏千家十一代玄々齋の直門であつた。茶箱雪月花の御点前は長井家に御滞在中に玄々齋が考案せられたお点前であることは周知のことである。大伝馬町のお店ではお茶は勿論、向島の百花園の主人とも交遊があり茶盃、香合なども作られて居る。其中でも特に親交があり茶道を熱心に指導せられたのが当時小網町に居せられた田中宗ト翁であつた。又円能齋宗匠が東京に御滞在中、宗ト翁を介して親しく円能齋に種々玄々齋の事どもをお話なされたといふ事をきいて居ります。」<sup>註八一</sup>と記されており、鼎玄齋は兄が眼が不自由であつた為、事実上は江戸店の主人であり、詩歌や俳句も堪能であつたが、茶道は玄々齋の直門で、茶箱雪月花の点前は玄々齋が長井家の滞在中に考案した。

大伝馬町のお店では向島百花園の主人とも交遊があり、茶盃や香合なども作っていた。向島百花園の主人とは、「菊塙五代目の佐原鞠塙氏」<sup>註九十一</sup>のことである。

その中でも特に親交が厚かったのが田中宗トであり、裏千家十三世の円能齋であった。それは「鼎玄齋が死去の報に驚かれた宗ト翁が私の父に寄せられた御手紙でも如何にその交遊の深かった事を思はずには居られません。」<sup>註九十二</sup>と記しているからである。

次の潤玄齋深津宗味については、戸田氏が一本の茶杓を入手したことの紹介から始まる。茶杓とは、深津宗味作の「連城」である。茶杓には抜刷「玄々齋精中居士 百会記念の本より」<sup>註九十三</sup>と「貼付された小片」<sup>註九十四</sup>には「茶杓の銘「連城」の解」<sup>註九十五</sup>が識されていた。

前者には「玄々齋は安政三年（註・四十八歳）の仙叟百五十年忌を記念して、薩摩屋弥兵衛が所持していた仙叟の画像を十枚写し、最も親しい十人へ譲ったことがあった。その十人とは田安御殿（慶頼） 広辻宗敬 渡辺宗玄（又日庵） 江本宗玄 津田宗雨 若原宗祐 長井同玄 村瀬玄中 深津宗味 桑原即玄

齋であった。玄々齋を支えた重要な人物の名がみられる興味ある資料である。」<sup>註九十六</sup>と識されており、玄々齋を支えた人々がわかる貴重な史料である。

深津宗味については、長井家から竹川家に渡った書翰一通が紹介されているが、戸田氏曰く「未だ深津宗味に至っていない。」<sup>註九十七</sup>

横山宗頭については、「淡交会松阪青年部の三十周年記念誌」<sup>註九十八</sup>から紹介を行い、専門宗匠というより一地方の富裕教養者の趣が濃い。しかし家孫に今日庵名誉教授の横山宗樹（九十歳）を専門宗匠として出しているから、その存在は重い。」<sup>註九十九</sup>と位置付けた。

そして、佐久間芳山の窯場には「書院に宗頭の「松聲萬古」の堂々たる染筆が額装された」<sup>註一〇〇</sup>物があり、戸田家の「家父の戸田宗寛と小津茂右衛門（浜萩）と同道」<sup>註一〇一</sup>をしていた事と、『今日庵月報』大正四年四月第七卷第七号で記名は不用坊（横山宗頭）となっている」<sup>註一〇二</sup>ことから、「松阪長井家の茶筵時は三月四日趣向は花見」<sup>註一〇三</sup>の茶会記を紹介している

更に、「大正五年十二月十四日に、京都美術倶楽部で、長井家伝来の美術品の売立」<sup>註一〇四</sup>が行われたことから、十七頁に亘り売立目録の紹介を行った。

最後の小川恒太郎氏は、「松阪に於ける三井物語」（書名は「三井松阪店のすべて」<sup>註一〇五</sup>）を刊行した人物である。当節では、三井家と来迎寺について述べ、「長井家の菩提寺である、白粉町の天台宗真盛流の、教主山来迎寺」<sup>註一〇六</sup>について小川氏の文章を採録しながら述べた論考であった。

射和地区を中心とした文化史に関する論考は、平成二（一九九〇）年から同八（一九九六）年にかけて松阪大学地域社会研究所（平成十七年に三重中京大学と校名変更。平成二十三年閉学。）が行った竹川竹斎についての総合的な研究がある。

同大学教授であり、同研究所における射和地区商家文書研究に携わった上野利三氏は著書『幕末維新 伊勢商人の文化史的研究』（平成十三年二月二十八日多賀出版株式会社発行）の中で、同研究所における研究と新知見をまとめている。

その内容は、幕末・明治期における地方の政治・経済・教育についての総合的研究である。

目次には、竹川竹斎の文化的活動をめぐる研究（射和文庫、物産会、『蚕茶楮書』刊行の経緯、竹斎日記、『羈呻居柄』、竹口喜左衛門家記録の研究（竹口喜左衛門信義日記、『稿手本』、三井家・中井家小論などの標題が記されている。

茶の湯関係は「第一章 第一部 竹川竹斎の文化活動」の「五 文庫と文化教育活動―むすびにかえて―」において、竹斎が収集した書籍や古美術品等で構成される「射和文庫」について次のように記している。

竹斎はこれら蔵書や古美術品などの収集物の活用をどのように考えていたのであるか。「自筆年表」の嘉永元年（一八四八）の条に、

若年より力の及ぶところ書を求めてきたが、一万巻におよび、また知識を広めるため古文書、古器物をも収集し、月々三日をもつて老若男女を会集し、書を講じ、釜を掛けて茶の道を教え、そのことによつて文教を誘導し、かつまた、前以て題目をもうけて和歌を読ませたり、あるいは香道を聞き、盆山石をもてあそび、道徳を論じ、知識を広めることを眼目としてきた。

とあるように、毎月三のつく日に会集して、講書以外にも茶道・香道・歌会・

古美術といった幅のある教育内容を編成していたようである。註九八

ここから、竹川竹斎は「射和文庫」を元にして、民衆に文化と教育とを教授していたことがわかる。

茶道については「嘉永六年（一八五三）に裏千家の千宗室玄々斎が竹斎宅に来たときには、「社友」の何人かが直接茶道の手ほどきを受けたので、以後作法の稽古は本格的に行われることとなった。反面歌会はあまり熱心に行われなくなったようである。」註九九と記しており、裏千家十一世玄々斎の竹川家来訪後、茶道の稽古が本格化したことを述べた。

更に、竹川竹斎と射和、松坂の茶道については、永井謙吾氏が著書『茶人竹川竹斎とその周辺』を平成二十七年十月に上梓している。

取り上げている人物は、竹川竹斎の伯父・竹川政辰、父・竹川政忠、平井宗三、玄々斎、深津宗味、金森得水、金森得水の主君・久野純固、室・宗鑑、大徳寺の和尚、久志本常庸、川喜田家、楽旦入、長井同玄斎、長井鼎玄斎、長井登美、長井万峰、本居信郷、長谷川家、福井瑞隠、杉木普斎、正住弘美、西山宗因、川喜田半泥子、春木象軒、田中成章、広辻通玄斎、中井平右衛門、久世安庭、松室玄レイ斎ら一寺、二家である。

当書には本居信郷についても記されており、「第四節 同玄斎の周辺茶人」の第一項に立項されている。四頁に亘り記され、その内容は信郷の出自に始まり、茶道に関しては藝能史研究会編『日本庶民文化資料集成』（三二書房 昭和四十六年）の『堀内門人録』から、「信郷は天保十三年（一八四二）正月十三日、堀内不識斎に入門し、以後内弟子となり、茶道に精通している。時に十八歳であった。」註一〇〇ことを指摘した。更に、茶道の師匠としての記述もある。

永井氏は信郷の茶会記についても紹介を行った。それは信郷の自会記三件である。神宮文庫所蔵『内山正命文書』に記されている二件（嘉永五年卯月二十一日条、安政三年十一月二十三日条）と、同文庫所蔵の『茗筵録』に記載があるという「安政四年五月二十一日条」であった。

## （二）茶の湯関係史料の残存状況

信郷の茶道に関しては、本居宣長記念館から刊行されている所蔵目録や『三重県史』、『松阪市史』、信郷の実家がある『四日市市史』、そして松阪市域を研究対象とした書籍及び本居宣長記念館が所蔵している茶道具がある。先ず、当研究に当たり参考にさせて頂いた本居宣長記念館発行の目録を【史料2-1】に挙げる。

本居信郷に関わるものとしては、次の書がある。

・山田勘蔵著『本居春庭』本居宣長記念館

昭和五十八年七月発行

※著者は本居記念館初代館長。本書は、本居宣長記念館開館にあたり本居家資料を調査した成果をふまえ、春庭の生涯とその家族を記述している。

本書は春庭が嗜んだ文化や家族について詳述をしており、信郷以前の本居家の文化環境についても知ることが出来る。

本居信郷の茶の湯関係史料の残存状況について述べる。

本居宣長記念館が昭和六十年（一九八五）三月に刊行した『本居宣長記念館収蔵品目録第一輯 文書篇』に、「本居信郷之部 二二種」が記されており、その中に、茶道関係書類九種が存在する。それを【史料2-2】に挙げる。

そのように、信郷に関する茶道史料は、茶会記から茶室設計図迄幅広く残されているので、信郷の茶人としての面を窺うことが可能である。

これらの史料は、櫛の箱に収められ、各史料には、昭和四十五（一九七〇）年から内容調査が始められたことを示す調査票が付けられている。【図2-1】次に、信郷自作の茶道具と、信郷が使用したと考えられる茶道具について紹介したい。

本居信郷が使用・自作した茶道具については、『本居宣長記念館収蔵品目録第二輯 器物篇』（昭和六十一年八月発行）に収められている。当目録は、茶道具ごとに収録されている。

「茶道具之部」については全百一種（花入は別項目）が収録されている。

当目録の「本居信郷翁」の解題には、「本目録VI茶道具など、ほとんど信郷翁の使用品である。」と断定を行っていた。

茶道具別では香合が十六個で最も多く、次いで茶碗が十四口存在する。

次に、「茶道具之部」と「調度品之部」に掲載されており、信郷に関係があると考えられる茶道具について、『本居宣長記念館収蔵品目録第二輯 器物篇』（昭和六十一年八月発行）に基づき紹介を行う。【史料2-3】註一

これらの器物を見ると、信郷は茶杓から花入まで、実にいろいろな茶道具を制作していたことがわかる。

自作と考えられる茶道具の中には、宣長翁遠忌や神社創設記念を事由として挙げられているものもある。しかし、それらを使った茶会記は遺されていない。次に挙げる三品は、参会者に記念品として贈ったのではないかと考えられる。

茶碗一口「本居翁百年祭記念茶碗 松阪山川ホテル

盃一口「本居宣長大人一百年祭」内に桜を描く

盃一口「結城神社五百五十年祭」と巴の文を描く

この他には、到来品には、茶道家元や茶道仲間からの品々が存在する。

宣長に因んだ品は、香合「鈴香合」や茶杓「鈴屋」（千宗左作）がある。

このように、信郷所縁の品々からは信郷自身の美意識と審美眼を窺うと共に、交友関係についても知ることが可能である。

## 第二節 本居家の概略

本居家は、江戸時代中期の国学者であり町医者であった本居宣長（享保十五年〜享和元年 一七三〇〜一八〇一）と、近代の作曲家で「十五夜お月さん」、「七つの子」、「赤い靴」などの童謡の作曲を数多く手がけた本居長世（明治十八年〜昭和二十年 一八八五〜一九四五）を生んだ家である。

本居家の概略については、本居宣長記念館編『本居宣長事典』（平成十三年十二月 東京堂出版）の「事項」に「本居家」が立項をされている。註二

それによると、本居家の遠祖は本居県判官平健郷で、十三代目にあたる七右衛門道印が小津家を名乗り、居を松坂に移して染物業を営んだ。その子である

道休は木綿業を開き、「中興開祖」とされている。

その曾孫が宣長で、その時に木綿業から国学者の家に変わり、宣長の学問を明治期まで伝えた。

家自体は宣長の学統を引く大平系が「和歌山」と、本居家の家の継承者である春庭系は「松坂」とに分かれ、それぞれ時代と家の要請による役割を果たしていた。

春庭系の家の継承者たちは、松坂の門人の協力の下で、本居宣長の「遺言書」で指示された「影前会」を主催し、宣長の居宅と蔵書類を厳重に管理していたことがわかる。

### (一) 家系

本居家の家系図を【図2-2】に挙げる。

それによると、本居家は宣長の父である小津定利が祖である。

『本居宣長事典』の「本居宣長」項の「家系」によると、『家のむかし物語』などに依れば、遠祖は桓武帝の子孫尾張守平頼盛六世の孫本居県判官平建郷という。その四代後の武秀は蒲生氏郷に仕えたが、三十九歳で戦死。懐妊中の妻慶歩大姉は、一志郡小津村（三重県一志郡三雲町）油屋源右衛門家に身を寄せた。源右衛門は小津と改姓、松坂職人町に移住。油行商に従事。長男が夭折したので、次男清兵衛末友（法号道運）が家督を継ぎ、小津本家となった。註三

とあり、同項の本居宣長の「生涯」によると、「元文二年（一七三七）八歳より手習いを始める。一一歳の同五年、父定利没。義兄宗五郎が父の遺言で家督を相続。翌年五月、母かつは宣長・長女はん・次男親次・次女やつ（後にしゅんと改名）を連れて本宅を離れ、魚町の別宅に移る。」註四と記されており、魚町の別宅で宣長らは暮らしていたことが分かる。

本居宣長以降の当主は、松坂本居家と和歌山本居家に分かれるが、拙稿では右の系図に沿い、『本居宣長事典』の「人名」を基にして松坂本居家について簡単に紹介を行う。

二代当主は「大平」である。大平は「旧姓稻掛。幼名常松、のち茂穂・大平。通称十蔵・十太・十介・三四右衛門。号藤垣内。松坂の宣長古参の門人稻掛棟

盛の子で、明和五年（一七六七）一三歳で入門し、常に宣長の側にあつて従学した。寛政十一年（一七九九）四四歳のとき宣長の養子となり、享和元年（一八〇一）に宣長が没したため、翌二年に眼疾であつた宣長の嫡子春庭に代わつて本居家を嗣ぎ、紀州侯に仕えた。<sup>註五</sup>人である。人柄については「温厚篤実」<sup>註六</sup>で、「宣長亡き後の鈴屋社中をよく統率指導し、門人一〇〇〇余人に及んだ」<sup>註七</sup>という。

三代当主の「有郷」<sup>ありさと</sup>は、「春庭の長男。成人を待てない父は後継者としては選ばず、一九歳で長谷川源右衛門、その後、本町の小津清左衛門の養子に出すが何れも離縁となり、結局、春庭没後の文政十一年（一八二八）一月に小津久足を後見人とし家系を相続。五人扶持」<sup>註八</sup>であつた。

四代当主は「信郷」<sup>のぶさと</sup>である。信郷は「旧姓高尾。幼名玖之助。通称九兵衛・健亭。号宗朝・古好斎。四日市高尾家に生まれる。（中略）嘉永六年（一八五三）五月五日、有郷の後を嗣ぎ本居家四代当主」<sup>註九</sup>となつた。

次に、本居信郷について述べる。

本居信郷は本居家の四代目にあたる人物である。

信郷の生涯については、本居宣長記念館が昭和六十一年（一九八六）に発行した『本居宣長記念館収蔵品目録第二輯』の「本居信郷翁」が詳しい。

そこには、「四日市浜町の高尾田作の長子として生まれたが、その祖母は、宣長の長女飛騨であり、本居有郷が子に恵まれたため、松坂に来て本居を嗣いだのである。没年は明治三十三年、享年七十四歳。五代当主清造の父にあたり、資料も各種伝わっている。しかし、生業・趣味・交友などの私生活面のことには不明な点が多い。」<sup>註十</sup>と記されている。信郷の後を継いだのは、「信郷次男」<sup>註十一</sup>の「清造」である。次男で、「長男信世が高尾家を相続、代わつて本居家を継ぐ。」<sup>註十二</sup>という経緯で本居家を継いだ。本居家所蔵史料について、「戦後、資料の完全保存、公開を条件に松阪市への無償寄付を申し出たが、志半ばで没した。」<sup>註十三</sup>そうである。

本居家の宗教については、本居有郷までは浄土宗の檀家であつたが、信郷の代から神道に変えている。（後述）

## (二) 居宅

次に、本居家の居宅についてふれておきたい。

現在、本居家の居宅は本居宣長記念館横に本居宣長旧宅「鈴屋」（国指定特別史跡）として保存・管理がなされている。

『本居宣長事典』の「本居家宣長旧宅」項<sup>註十四</sup>によると、明治三十九（一八〇六）年八月に鈴屋遺跡保存会設立にあたり、本居清造氏から北隣の宅地・裏屋敷・土蔵をのぞく他の大部分の土地・家屋が寄託されている。当初は、旧宅の移転先は山室山神社境内内が予定をされていたが、旧宅の所在地である松阪市魚町一六四五番地から、松阪城跡公園内に移築・復元をされたことがわかる。

松阪城跡公園への移築後、宅跡には旧宅の礎石・裏庭・井戸、春庭宅とされる家屋・土蔵が保存された。

旧宅内の建築当初の間取りと形状については、大西氏著書『史跡本居宣長舊宅』の「二 鈴屋在来ノ状況」の「第二 建築當初ノ形状」に詳しい。ここには「明治十年前後ニ於テ、大二模様替ヲ施サレタルハ、現ニ高尾九兵衛氏及本居清造氏等モ熟知セラル、所」<sup>註十五</sup>と記されていることから、信郷時代に内装改築を行った事を、信郷の実家の末裔に当たる高尾九兵衛と、本居家の末裔に当たる本居清造がそれを熟知していたことがわかる。

茶室と水屋については、現在の「本居宣長旧宅」の外観からは当時を窺い知ることが出来ない。

吉田悦之氏によると、八畳間が茶室であつたそうである。

更に、吉田氏の話によると、信郷の時に天井に蛭釘を打っており、

宣長時代の旧宅状態に戻す時に、それらを除いたとのことである。大西氏の先述の著書には、信郷が仏間を改築する以前の状態についての記事<sup>註十六</sup>があり、茶室と水屋の部分は、当初は仏間の三畳敷であつたと記されている。この事実は清造氏と豊頼氏の記憶による。

信郷は、内装改築の時に仏壇の木材を使用し、その方法は、仏壇の一部を解体した時の部材の再利用であつた。これは、仏壇の木材には樺を用い、春慶塗を施していた。

かかることから、本居宣長旧宅の「仏壇の間」の改築の時期は、信郷が神道



に改宗した時に、改築を行なったという改築年代の比定が出来ると考えられる。

【図2—3】に、絵葉書に掲載された旧宅の平面図を挙げる。

大西源一氏の著書『史跡本居宣長舊宅』（発行年不詳）によれば、中庭については「庭園の樹石の布置は、表千家の流を汲んだものであると聞く。」<sup>註百十七</sup>と記されていることから、信郷の時代に造園がなされたと考えられる。【図2—4】に、現在の屋内の写真を挙げる。

### (三) 家業

本居家の家業は代ごとに異なる。これを本居宣長資料館編『本居宣長事典』を基にして見ていきたい。

小津家本家の初代である小津七右衛門は、「松坂魚町で染め物を扱う商人」<sup>註百十八</sup>であった。

三代目にあたる小津定利（三郎右衛門）は、「小津家本家であると共に隠居家の初代である。叔父小津清兵衛の江戸店に勤め、後、独立。正保二年（一六四五）、大伝馬町二丁目に木綿店を出す。店は三つ。二軒は木綿問屋で、一軒は売場（諸国より送られてきた木綿を町内の木綿問屋に売る店）。手代三十郎の働きもあり商いは成功し、承応二年（一六五三）には小津清左衛門の大伝馬町出店の資金援助をするに至る。」<sup>註百十九</sup>とあり、江戸の大伝馬町で松坂商人が店を出し、賑わいを創出する側であった。

七右衛門の「長男次郎右衛門宗運も、同じく大伝馬町に茶店を開業」<sup>註百二十</sup>している。

四代目にあたる小津定治は、「江戸堀留町に、煙草問屋と両替店を始め、富み栄える。」<sup>註百二十一</sup>という店だった。

五代目にあたる小津定該（道意）は早世。

六代目にあたる小津宗五郎は「天保二三年（一七二八）に実母が没し、義父定利の後妻勝（恵勝）に宣長が生まれたため、松坂を出て江戸に別に店を持つが、定利の遺言によって小津家を相続し、江戸在住ながら宣長ら親子の生活を支えた。」<sup>註百二十二</sup>とあるが、江戸で何を商っていたのかについては不詳である。

七代目の家業については不詳である。

八代目にあたる宣長は、国学者であったことは夙に有名であるが、本業は医者であった。「商を捨て、医学を志すという決断には、『家のむかし物語』に「跡つぐ弥四郎、あきなひのすぢにうとくて、たゞ書をよむことをのみこめば、今より後、商人となるとも、事ゆかじ」とあるように、母かつの適切な判断があったという。」<sup>註百二十三</sup>ことから、母かつが宣長の素質を見抜いて医者にしたことが記されている。

宣長は「京都では広島藩に仕えた堀景山に入門して儒学を学ぶ。その頃、契沖の『百人一首改観抄』を知り、古学に志す。また、小津を改め先祖の武士としての本姓本居氏に復する。同三年、堀元厚に、翌年には武川幸順に入門して医学を修める。（中略）宝暦七年一〇月、松坂に帰り医を開業。（中略）同年三年一二月、紀州侯に召し抱えられる。（五人扶持）（中略）「寛政」三年一〇月、紀州侯の召しによって和歌山に赴き、御針医格、十人扶持に進む。（中略）享和元年（一八〇二）二月、奥医師に列する。」<sup>註百二十四</sup>と記されていることから、宣長が苗字を武士としての「本居」姓に復し、松坂を皮切りに紀州侯に「医者」として召し抱えられていたことがわかる。

宣長は紀州藩に仕官しながら、町医者としても活躍していた。これは、宣長が往診時に使用した「薬箱」と医者としての帳簿『濟世録』<sup>註百二十五</sup>が証左である。

国学者としての宣長は、門人を数多く抱えていた。「宣長は晩年の寛政一一年（一九七七）に、門人組織の統制を図るために入門に際して厳しい手続きを課す通達を出した。「入門来謁之式、并同節束脩之品、名簿代、誓紙等」の手続きを大平を通じて済ませるようにと指示した内容で、通達後すぐには徹底できなかったようだが、指示通りに入門手続きがなされた者が門人とされた。」<sup>註百二十六</sup>ということである。

宣長は「家計経営の重要性は認識していて、生活の安定がすべての基本であると考えていた。家計簿も付けるし時には財テクを行い、冠婚葬祭の記録も丹念に付ける。多忙な中で家長としての責務を果たし、町内、また親戚の付き合いをいかにそつなく行うか。（中略）」<sup>註百二十七</sup>と、学問の前に日常生活を重視していた。「家の業（なり）なおこたりそねみやびをの書はよむとも歌はよむ共」これは七十の時、門人村上潔夫のために詠んだ歌だが、学問と生活の調和が宣長の姿勢であった。」<sup>註百二十八</sup>のである。

宣長の後は、本居家本家系相統者として春庭・有郷・信郷・清造と続き、学統としては紀州に移住した大平・豊穎・長世と続いていく。

これらの人々を本居家督相統者から見ていくと、春庭は父・宣長の刊行事業にも関わっていたが、「二十九歳のころから眼病を患い、三二歳で失明に至る。この不幸により、版下書きは中断する。その後、京都へ鍼医の修行に赴き、鍼医として生活の糧を得」<sup>註百十九</sup>ていた。春庭は、失明前迄は父親である宣長の仕事を手伝いながら薫陶を受け、失明後は鍼医として家業を営んでいた。

有郷の家業については、「春庭没後の文政二年（一八二八）一月に小津久足を後見人とし家系を相統、五人扶持」<sup>註百二十</sup>となったことが分かっているが、それ以前については、管見では不詳である。

信郷は、「慶応二年（一八六六）五月五日、松坂国学所教導。明治九年百枝神社祠掌となる。以後、神職の傍ら茶道を指導」<sup>註百二十一</sup>と記されていることから、信郷は神職兼茶道指導をしていたことがわかる。

清造は、「大阪府第二尋常中学校国語科教員となり、その後、岐阜中教諭心得、国語伝習所高等科講師、日本女学校専攻科講師、高等女学校国語読本編纂事業担任、皇典講究所神職養成部講師、文部省国語調査委員会調査事務嘱託、國學院大學講師、臨時帝室編修官等歴任」<sup>註百二十二</sup>をしており、教職員・研究者として糧を得ていた。

次に、学統の相統者について見ていきたい。

大平は、「明和五年（一七六八）一三歳で入門し、常に宣長の側にあつて従学した。寛政一一年（一七九九）四四歳のとき宣長の養子となり、享和元年（一八〇一）に宣長が没したため、翌二年に眼疾であった宣長の嫡子春庭に代わって本居家を継ぎ、紀州侯に仕え」<sup>註百二十三</sup>たとある。

豊穎は、「母の指導宜しく父の後を継ぎ紀州藩の江戸古学館教授の大任を果たす。維新後は明治天皇に仕え東宮侍講も務めた。（中略）神祇官、教部省などの官職を歴任。また東京帝大や国学院の講師を兼ねながら、大八洲学会を主宰し国学と和歌の振興に尽力」<sup>註百二十四</sup>した。

長世は、「明治四一年東京音楽学校本科を主席卒業。同期に山田耕筰等。邦楽調査補助となり母校に残る。（中略）大正七年二月「如月社」を結成し、邦楽と洋楽の調和を探る。（中略）山田耕筰や中山晋平らとともに大正から昭和にかけて

の童謡運動に参加、大正九年三月、雑誌『金の船』に「葱坊主」を発表、以後多くの作品を作る」<sup>註百二十五</sup>等、今なお私たちの心に響く童謡の数々を生み出した。松阪市内には「本居長世メモリアルハウス」が所在する。

#### （四）歴代当主の文化活動

松坂という町は、本居宣長の著書『玉勝間』十四巻に、「里のひろき事は山田につぎたれど、富める家おほく、江戸に店といふ物をかまへおきて、手代といふ物をおほくあらせて、あきなひさせて、あるじは国にのみ居てあそびをり、うはべはさしもあらで、うちうちはいたくゆたかにおごりてわたる」というごとく、伊勢商人を輩出して豊かな町として栄えた。商人たちは、江戸に店を構えて手代などに取り仕切らせ、主人は松坂に居て指示を与え、余暇には文雅を楽しんだ」<sup>註百二十六</sup>という町柄である。松坂町人は江戸時代から「管弦は、茶、和歌、俳諧、香などと共に松坂の町人社会での教養の一つ」<sup>註百二十七</sup>とされており、風雅高き町である。

このような町風の中において、本居家の歴代当主の文化活動をみていくと、小津姓の時代についての当主の文化活動は不詳であるが、本居姓の時代からは文化活動について知る事が出来る。

宣長は幼少期から文雅への関心が高く、「翌年〔寛延〕二年三月には宗安寺宝幢和尚から和歌の添削を受け、和歌を志すようになる。（中略）同〔宝曆〕六年には有賀長川に入門。和歌を学ぶ。（中略）同七年一〇月、松坂に帰り医を開業。また、この頃、嶺松院歌会に入会。毎月二回の例会に出席する。同歌会は享保一六年四月に西村善兵衛・嶺松院茂鮮・村田孫助らによつて始められたもので、当初は親しい町人の楽しみみの場であった。京都遊学が終わった宣長の参加は、同歌会の質的变化をもたらすことになった。歌会の会員が宣長の指導を受けるようになり、歌会そのもののレベルを向上させることになった」<sup>註百二十八</sup>ほどのレベルであった。

宣長は「十二歳七月から岸江之仲を師として謡曲を習」<sup>註百二十九</sup>い、龍笛、和琴を嗜んでいた。<sup>註百四十</sup>

春庭は、「作歌を始めたのは一五歳ころからで、嶺松院歌会への入会は一八歳

のころである。」<sup>註四十一</sup>のみが記されている。

大平は、「多忙な日々の中で著作、作歌活動を精力的に続けた。」<sup>註四十二</sup>とある。

有郷は、「夫婦共に三絃等の趣味を共にする」<sup>註四十三</sup>とある。

信郷は、「茶道全般に造詣」<sup>註四十四</sup>

清造は、「旧宅遺品を相続した清造はその保存と整理に全力を注ぎ、『本居宣長稿本全集』全三巻を刊行（最終巻三巻目の原稿は関東大震災のため消失、未刊）し、これが村岡典嗣の『本居宣長』と共に近代の本居宣長研究の出発点となる。」<sup>註四十五</sup>と『本居宣長事典』の中で記されている。他には大西源一氏著書『史跡 本居宣長舊邸』に於いても清造が本居宣長旧宅保存活動に関わった事が述べられており、本居宣長と本居家についての研究が可能となった事を考えると、清造氏の存在は大変大きかったと言える。

長世は、「邦楽を好んだ長世の関心は奥浄瑠璃・琉球歌謡・流行歌にまで及ぶ。」<sup>註四十六</sup>という幅広さで、明治の世に生まれ、昭和二十年に没した長世は、「歌は世につれ」の言葉の先を行くような多彩な作曲活動を行い、今なお私たちの琴線に触れるメロディを数多く遺した。

### 第三節 本居信郷の茶の湯

#### (一) 信郷の家業

信郷の家業については既に概要を述べたが、辞令や賞状などが本居宣長記念館に所蔵されているので、これらを紹介したい。

最初に、信郷の年譜を本居宣長記念館が作成しているので、簡単にこれを紹介しておきたい。尚、注の箇所は本居宣長記念館作成成分は（ ）を用い、筆者が要約を行った箇所は「 」を用いて区別した。

文政十年五月二十九日 高尾田作の長男として四日市浜町に生

まれる。「出生年月日については諸説ある。」

幼名を玖之助という。

天保十二年 名を九兵衛と改め高尾家を相続する。(十五歳)

弘化元年 信郷と称し、上京し堀内宗完宅に帰宿。表千家茶道を修行する。(宗完は五代目の不識斎宗完であろうか。)

弘化三年 宗朝と号し茶道師範の資格を得た。(但し『茶人系譜』には名は見えず。) 帰家し茶業をはじめめる。(この茶業が、茶道を教えたのか、道具・茶の販売か等、具体的な内容は明らかでない。)

嘉永六年五月五日 本居家養子となる。六月長谷川六郎次女

知賀を娶る。(二十七歳)

安政三年正月元旦 父田作没。(三十歳)

安政四年八月十九日 妻知賀没。(三十一歳)

安政六年八月 五日 生母牛(飛驒の娘)没。享年五十二歳。

矢川野で火葬。四日市に葬る。この年宗朝を改め、通称健亭と号した。(但し、以後も茶道においては宗朝と号

したようである。内遠は、宗朝の入家の頃から、その名前についてこだわり、嘉永六年と推定される七月二十七日付書翰でも「さてハ茶人になりきりて法体故ニさやうの名にて可有之か推察せられ候故」等と記して、その名前では扶持米ももらいにくいことを言っている。)

(二十三歳)

万延元年六月十七日 後室万寿を娶る。山田中嶋町江川半九

郎女。

九月二十八日 紀州藩より信郷に松坂国学所の設立許

可がおりる。翌年創設。(三十四歳)

文久二年 宣長六十一年祭により、菅相寺で遺墨展を行なう。

(三十六歳)

慶応二年八月十一日 長男信世生まれる。高尾家を相続する。

松坂国学所教導となる。(四十歳)

明治六年三月二十五日 和歌山本居家厄介を離れ、度会県に

送籍する。

五月九日 百枝神社祠掌。拾八社祠掌兼務辞令を受領。

十一月二十一日 清造生まれる。この頃より千宗左差出書翰が散見する。

明治七年三月九日 兼補権訓導辞令を受領。山室山神社造営官許おりの。(四十八歳)

明治八年三月二十一日 山室山神社鎮座式举行。その時宣長御正体を信郷が奉戴し、篤胤御正体を野呂万次郎が奉戴した。(四十九歳)

明治十年五月十七日 收拾挂任命辞令を受領。

九月二十六日 神宮教会所の建築に尽力した事により賞状を授与された。

十二月二十日 補訓導辞令を受領。(五十一歳)

明治十一年九月二十八日 浄土宗を改めて、以後神葬とする事となり、仏具一切を樹敬寺に預けた。(五十二歳)

明治十三年七月五日 富小路侍従勅使となり、山室山神社に奉幣。(五十三歳)

明治十四年 山室山神社改造金として、金百円下賜される。(又、この頃書籍店を営むにより、鈴屋を改造した。)(五十四歳)

明治十六年 宣長正四位追贈。四月二十六日 訓導依願免職。(五十六歳)

明治二十二年 山室山神社を殿町両役所跡地(今の松阪市役所に遷座する。)(六十三歳)

明治二十八年八月十日 八社社掌兼務依願免職。十二月二十八日 物部神社社掌依願免職。(六十九歳)

明治二十九年六月十九日

十社社掌を依願免職。

明治三十三年八月二十六日

没。七十四歳。

本居信郷の生家である高尾家は、「多くの文化人の中で、四日市の代表とされているのが伊達家、高尾家の二家であった。地方から訪れる学者・文学者が必ず門を叩いたのは、この二家」<sup>註四七</sup>と紹介をされている高名な家であった。

同書所収の文化人名録『改正泗水郷友録』には、信郷の父である高尾九兵衛は、「書・香・聞人・茶・馬術・弓・古物目利」<sup>註四八</sup>の項に記載がある。

信郷は本居家に入家後、宣長の国学の学統を引き継ぐことはなかったが、当年譜を見ると、神職として、そして松坂国学所を開き、それを預かる者として、宣長が極めた学問Ⅱ国学と共に生涯を歩んだのではないかと考える。

その理由は、『本居宣長記念館収蔵品目録第二輯 器物篇』(昭和六十一年八月発行)の「鈴之部」には「茄子形古鈴 青銅製胴張り一〇・二×高一三・〇」<sup>註四九</sup>とある。参考—宣長の長女飛騨の嫁した四日市高尾家に伝ったもので、信郷が本居家に持って来たものである。』<sup>註四九</sup>という鈴が存在しているからである。宣長が好きであった「鈴の蒐集」を信郷は意識をしていたことが、ここから窺うことが出来る。

信郷は、本居神社の創設に尽力した。山田勘蔵著『本居春庭』によると、本居宣長神社建立の経緯について、「明治初年以來、本居宣長を神社に祀るよう運動した人々は、川口常文(大足村)、野呂万次郎(美濃国可兒郡御嵩村)、本居健亭(魚町)、久世安庭(殿町)、岡村美啓(殿町)、垣本安基築(軽田部)等である。明治七年官許をえたが、祭神を本居宣長とすべきところ、平田学派の野呂万次郎、前野包広(一志郡小川村)等は相殿に平田篤胤を祀ることを主張した。元来この神社創建は強烈な平田学派の人々に動かされたところがあって、やむを得なかったようである。』<sup>註五〇</sup>と指摘をしている。本居宣長神社の建立にあたっては、宣長の師匠に当たる平田学派の人々による大きな影響を受け、相殿に平田篤胤を祀ることとなった経緯を窺う事が出来る。

尚、「信郷」の名前の由来については『本居宣長記念館収蔵品目録 第一輯

文書篇』の中に「信郷と命名の書付 写 一通」（尹章摘考 楮紙 二四・一× 三六・四糶）が詳しい。翻刻を左記に挙げる。

佳名

信郷 婦納生（花押）

信 韻鏡第十七開遠音金

郷 同三十三開 牙音属木 文政甲申歳降誕水性也

信者累代通冠字故生剋不能論之郷 納音本以生性水為

相生也

尹章摘考

当書付は誰が書いたのかは不詳であるが、本居宣長記念館は「清造翁の筆か」と推測している。

また、信郷と称した時期と出生について『本居宣長記念館収蔵品目録 第一輯 文書篇』では、「通説によれば信郷とは弘化元年十八歳の時に称したが、この覚の年次は不明。信郷自筆系図には文政十丁亥年五月廿九日生とあり。」と、信郷が書いた系図の説も挙げている。

次に、信郷の家業について述べる。

信郷の家業は、神職であった。

これを証する史料は『本居宣長記念館収蔵品目録 第一輯 文書篇』に収録されている「本居信郷辞令 写 十二通」と「賞状 五点」及び「松坂国学所に関する書類 写 七通」である。

最初に「辞令」を【史料2-4】に挙げる。

「辞令①」と「辞令②」の「百枝神社祠掌辞令」は、『本居宣長記念館収蔵品目録 第一輯 文書篇』に収録されている信郷への辞令の中で最も年代が古いものである。

内容は、度会縣から発令され「飯高郡船江村に嘗て存した百枝神社の祠掌と共に、北森神社を含む十八社の祠掌の兼務を行うようにとの辞令、辞令①と同時に出示されたもの」<sup>註五十一</sup>である。度会縣とは現在の三重県で、飯高郡とは、現在の松阪市飯高町である。

ここに記されている神社については、明治神社誌料編纂所発行『府縣郷社明治神社誌料』の「飯南郡」を探したが、管見では見つからなかった。しかし、「郷社」の「松阪神社」の項目の中には次の記述がある。（筆者が旧漢字は新漢字に直した。）

明治二年三月今上陛下の伊勢行幸に際し、奉幣使北大路殿を  
して参拝せしめらる、同七年六月郷社に列せられ、同四十一  
年村社雨龍神社、同石神社、同八重垣神社、同八雲神社三  
座、同八柱神社、同阿良野神社、同鈴森神社二座、同八幡神  
社、同百枝神社、無格社五座及び境内社十九社を合祀し、従  
来の社号慈悲神社を改めて現社号とする。<sup>註五十一</sup>（傍線筆者）

この中に村社として「八重垣神社」、「八雲神社」、「八柱神社」、「八幡神社」、「百枝神社」の五社が記されていることから、信郷が祠掌を任じられた神社は「村社」であったことがわかる。

尚、「祠掌」とは神職の一つで、府県社以下神社の神職のことである。祠掌の収入は、次のように規定をされていた。

「府県社以外の神官は、明治五年二月二十五日の太政官第五八号により、

官等	月給
府県社神官	十五等 五兩
府県社祠掌	等外二等 三兩
郷社神官	等外一等 四兩
郷社祠掌	等外三等 三兩
	民費から支出

と定められた。ところが、明治六年二月二十二日、太政官第六七号によって各地方郷社祠掌祠掌給料の民費課出が廃されて、「人民ノ信仰ニ任セ適宜給与」されることになり、続いて同年七月三十一日、太政官布告第二七七号により府県社神官の月給も廃止されて「郷社社同様人民ノ信仰依ニ任セ給与される」<sup>註五十二</sup>と記されていたことから、信郷の官等は「等外三等」、月給は民費から「三兩」であったことがわかる。府県社の場合には「大蔵省から支出」であったのに比し郷社は「民費」である為、「月給」とは雖も、実質的には不安定であったに

違う。

これが明治六年（一八七三）二月二十二日の太政官第六十七号により、給与は「人民ノ信仰ニ任セ適宜給与」となった。人民の信仰に任せる給与形態となり、これにより、益々収入は不安定になったのではないかと思われる。

次に、「訓導」関係の辞令書を【史料2—5】に挙げる。

辞令③は、信郷が明治三年（一八七〇）三月九日に教部省から「兼補権訓導」に、辞令④は明治十年（一八七七）十二月二十日に内務省から「補訓導」に任命された辞令である。

「兼補権訓導」と「補訓導」という役職は、国家神道胎動の為の「国民教化」に当たったのが、「訓導」という官職であったことが分かる。

辞令⑤明治十一年一月廿五日に神宮宮司大教正の田中頼庸から「八等輔教心得」を申し付けられた辞令である。

「神宮教院」とは、伊勢神宮から出た宗教で、江戸時代以来の伊勢講を結集して布教活動を行っていた組織である。

本居健亭もこれに加わり、辞令⑥は庶務祭典宮繕掛を申し付けられている。

辞令⑦は「訓導免職辞令」である。依願免職であったことがわかる。

辞令⑧は、明治二十九年六月十五日に三重県を発令元として、十社社掌免職並に八重垣神社社掌専従とする辞令である。

この辞令も信郷の依願により出された辞令で、三重県飯南郡松江村大字船江村社百枝神社兼、同村大字塚本村社引水戸神社、同村大字西ノ庄村社八幡神社、同村大字井村村社八幡神社、同村村社八柱神社、同村村社八雲神社、同村大字曲り村社八雲神社、同村社八柱神社同村社熊野神社、同村大字田牧村社八柱神社の社掌を免じ、同村大字西之庄村社の八重垣神社社掌を任ずるといふ辞令である。信郷が八重垣神社社掌であった任期は残念乍ら史料が無く不詳である。

次に、賞状を【史料2—6】に挙げる。

賞状①は、明治十年九月廿六日に祭主三品朝彦親王代理である神宮小宮司中教正浦田長氏から、神宮教会所を松坂に建てた事により「尊号一幅并扇子一握」を差し遣わされた。朱印は「神宮教院教長」となっている。

賞状②は、明治十一年五月十七日に「講社事務格別盡力」をした事により、短冊一葉と扇子一本を賞与として遣わされた。賞状③は、同十四年五月十七

日に「講社結収及布教上勳励候」ゆえ、「扇子壹對」が賞与であった。更に、同年はコレラが蔓延し、信郷が予防の説諭の為、講師として出張の節に連夜盡力をしたことが「神誠注釈賞」であり、神宮第一本部教会所が賞したものである。

信郷が神職に就いた事については、千宗左が明治六年（一八七三）六月十五日付宗朝宛に出した書簡の追而書に、

（前略）一、貴所様御事、当日九日於度会県、祠宮ヲ拜命、神職と被成、近村共廿五社計り御預り、此此者御多用相成り、乍去、釜ハ二七にて不有変、御掛有之由、先以御悦申上候、併御苦勞御儀御察申候（後略）  
註言五十四

と記されていたことから、宗左は、信郷が神職となり多忙となっても釜を掛けていることを「御悦」であると申し上げている。

## （二）信郷の茶の湯

### ① 『会席附』の概略

信郷の茶の湯について述べる。

信郷が遺した茶会記『会席附』には、全三百九十五会の自他茶会記が記されている。『会席附』は「式番」から「六番」までの五冊が残されており、「一番」を欠いている。

次に、番号ごとに収録されている茶会会数と年月日の範囲及び自他会記数について紹介する。

（1）「安政四巳年 会席附 式番」

・全四十会

・自安政四年三月十九日～至安政五年四月五日

（2）「安政五年年 会席附 三番」

・全四十二会

・自安政五年五月十六日〜至安政七年五月

(3) 「万延元申四月 懐石附 四番」

・全百二会

・自万延元年四月四日〜至慶応元年十二月三日

(4) 「慶応二丙寅年 懐石附 五番」

・全九十会

・自慶応二年一月十八日〜至明治四年二月十四日

(5) 「明治辛未歳二月ヨリ十八年十月至 懐石附 六番」

・全百二十一会

・自明治四年二月二十七日〜至同十八年十二月十四日

茶会記の記載方法は、年月日、(開催事由)、(開催場所)、客、茶道具、会席(懐石)、参会者、亭主の順序である。京・江戸(東京)・松坂以外の地における茶会開催や参会者については、国名が開催場所や人名の上に書かれている。年月別の茶会記の会数は、【表2-1】の通りである。

この表から開催年ごとに開催会数を見ていくと、安政六年(一八五九)に、最多の三十三会であった。

維新前後年を俯瞰すると、平均十数会の茶会を開いており、明治三年(一八七〇)二十六会、翌年には二十七会であった。

紀元節を設け、地租改正が行われた同六年(一八七三)には三十会であるが、その後の年から会数が激減する。この事由については、記載された『会席附』が「明治辛未歳二月ヨリ十八年十月至 懐石附 六番」、つまり、遺された茶会記の中では最終年となり、当会記に信郷が記した文字が徐々に大きくなっていく。これは信郷の齢に関係することに依ると考えられる。

寛政三年の元号がある二回分が所収されているのは、「万延元申四月 懐石附 四番」である。

嘉永二年の茶会記が続く中で突如現れる寛政の元号であるが、双方共に他会記で、参会者は信郷の父にあたる「高尾九兵衛」である。何故、幕末の茶事記録の中で父親の茶会記が収録されたのかについては不詳である。

『会席附』に記されている茶会記の最終年月日は明治十八年十二月十四日であり、残されている茶会記の中で元号が判明するものは明治十八年以降、つま

り、信郷晩年の年が多い。神職として多忙を極め、自らが参会した茶会や寄せられた茶会記を、『会席附』への採録を六番を以て止めた又は中止したという可能性も考えられる。

全茶会記を【表2-2】(【表2-2-1】〜【表2-2-5】)にまとめて挙げる。

これらの茶会記を自会記と他会記とに分け、検討を行う。

## ② 自会記

自会記として断定できるのは二会ある。その内、本居家で行われた「本居席茶事」を【史料2-7】に挙げる。

当茶会は、本居信郷邸で催された会である。

主は朝々庵宗四、つまり、信郷がつとめた。

道具の取り合わせは、掛物は確松登公の扇子自画賛。

花入は信郷が宗旦の「旅枕」を自作したもので、花は末客に花所望した。

茶入は朝鮮唐津で、茶碗は信郷の手造りであった。

茶杓は武者小路千家四代似休庵一翁宗守の作の共筒である。銘は「侘心」。建水は一閑張の本居家什器を用い、薄茶器は大棗で桐と葵紋の散らしが描かれた品を、薄茶碗は仁清作を用いていた。

かかることから、信郷は流派にとられず、自身の美意識を以て道具立てを行っていたことが窺える。

菓子は葛饅頭の小倉餡と麦おこしを用いていた。

料理は、向付は魚の種類は不詳であるが、「あらい」とすぐき及び野菜に加減酢を掛けた品を。飯は片飯で、汁は海老と穴子入りであった。

焼物、八寸、香物は引重で出された。その献立は、焼物は根芋とスルメのし

ぎ焼き、八寸は鮎の塩煮と「てこね井」であった。

香物は、さよりの浅漬であった。

次に、客については、長井家は長井嘉左衛門(同玄斎)、同九郎左衛門の二人である。長井家については、「長井家は松坂三大家(小津・長谷川)の一つで、元禄九年(一六九六)、日本橋大伝馬町に江戸店を開いた木綿問屋である。松坂

御為替組として、紀州藩から二十人扶持を給され、士分の扱いを受けた。」<sup>註五十五</sup>  
 家柄であった。

長谷川家は長谷川次郎兵衛「(九代元熙・宗暉)」<sup>註五十六</sup>、同次郎吉、同由之助の三人である。長谷川家については、「江戸大伝馬町に木綿問屋五店を有する豪商」<sup>註五十七</sup>であった。

小津家は小津清左衛門、同益吉の二人であった。  
 他は上井平四郎、久世安亭(安庭)、岡村孫祐、林文昌、丹羽元亭、西村為兵衛、清水八兵衛、竹内育次郎の十五名であった。

この中で久世安亭(安庭)については人物像が分かっている。それは「勢州松坂ノ人通称弥一郎文政八年本居春庭門ニ入りテ国学和歌ヲ学ヒ造詣スル所深ク歌人トシテ称セラル」<sup>註五十八</sup>という事である。  
 かかることから、信郷は錚々たる人物を招き茶会を開いていた事がわかる。

### ③ 他会記

自会記か、他会記かを特定できない茶会記が六会あり、他会記は全部で三百八十七会ある。

他会記には、信郷が参加していないものが多数あり、それらの茶会記は、信郷が茶匠等に依頼して収集していたものである。

先ず、『会席附』に収録された他会記の分類を行う。

- (イ) 信郷が参加した茶会 百二十五会 (三十二%)
- (ロ) 信郷不参加の茶会 二百六十二会 (六十八%)

信郷が参加していない茶会記が参会の二倍ほどある。これらを流派別及び開催地別に会数を見ると次のようであった。

流派別にみると、参加、不参加共、ほぼ同様に、表千家、裏千家が多いが表の通り種々の流派の茶会に参会し、かつ収集している。

開催地別にみると、参加、不参加の違いが明瞭であり、参会した茶会は約九十%が松坂であり、その他も近畿圏に限られていた。これに対して不参加の茶会記―収集した茶会記―は、京都が約半数で、次いで松坂が約

他会記 開催地域別 会数

	信郷不参加		信郷 参加	
	会数	%	会数	%
松坂	51	25.1	108	89.3
京都	109	53.7	3	2.5
東京 江戸	17	8.4		-
大坂	6	3.0		-
伊勢山田	4	2.0	3	2.5
神戸	3	1.5	*2	1.7
奈良	2	1.0	*2	1.7
四日市	2	1.0	*1	0.8
阿波	2	1.0		-
尾州	1	0.5		-
一身田	1	0.5		-
和歌山	1	0.5		-
福井	1	0.5	1	0.8
桑名	1	0.5		-
萩	1	0.5		-
津	1	0.5	1	0.8
不詳	59	---	4	---
合 計	262	100.2	125	100.1

\* 印  
 清水村  
 射和  
 鎌田吉祥<sup>三</sup>

他会記 流派別 会数

	信郷不参加		信郷 参加	
	会数	%	会数	%
表	152	63.1	86	71.7
裏	77	32.0	28	23.3
藪内	4	1.7	2	1.7
武者小路	2	0.8	2	1.7
江戸	2	0.8	2	1.7
宗徧	2	0.8	-	-
遠州	1	0.4	-	-
速水	1	0.4	-	-
他、不詳	21	---	4	---
合 計	262	100.0	124	100.1



二十五%、後は十%以下となるが、東京、大阪他の近畿圏の地域である。但し、阿波や萩で開催された茶会記もある。

かかることから、信郷の『会席附』からは、信郷の茶の湯と共に、当時の茶道界の様相が映し出されるものと思われる。この様な史料であるが、ここでは『会席附』に収録された茶会記として一括して取り扱う。

最初に、当茶会記から茶席で用いられた道具について検討を行う。

【表2-3】に使用された茶道具の抄録を挙げる。

次に、これらの茶道具を「種類」、「作者」及び「素材等」に分けて、【表2-4】に挙げる。

まず、「掛物」から見てみたい。

掛物を作者別にまとめた表が【表2-4-1】である。これを見ると、臨済宗大徳寺派が七十九会と最も多く、次いで表千家が六十二会、公家が六十会、裏千家が三十五会、利休系が三十二会、絵師が三十会と続き、不詳を除くとここまでで全体の約七十七%。そして武家、千利休、文化人、表千家堀内家と続いている。

「黄檗宗」は一会ある。これは「第五番」の明治元年二月二十五日条において、「隠元和尚筆」が使用されていることによる。

「文化人」についてみると、「第貳番」においては松花堂昭乗石川丈山の二人、「第三番」においては零人、「第四番」においては松永貞徳弟子である柿藤徳玄と松花堂昭乗の二人、「第五番」においては幽庵焼の元祖である堅田幽庵、木下長嘯子、松花堂昭乗の三人、「第六番」においては西行、松花堂昭乗、石川丈山、加賀千代女の四人の品が使用されていた。

次に、掛物を種類別にまとめた表が【表2-4-2】である。

これを見ると、日本墨跡の使用会数が最多の百五十六会、次いで日本絵画が百五会であり、この二種類で不詳を除くと約六十五%。そして和歌、消息、記と続く。

日本墨跡と日本絵画は、年を経ることに使用会数が増えている。

異色であるのは「起請文」と「押絵」である。「起請文」は「第四番」に一会（元治元年四月三日条）で、国光大師（法然）の一枚起請文であり、「押絵」は「第六番」に一会（明治四年三月二日条）で、絵柄は桃の枝であった。

次に、花入を見ていく。

花入を作者別にまとめた表が【表2-4-3】である。

作者別では、表千家の六十九会が最多で、続いて裏千家の六十二会、利休系の三十七会と続く。

千家十職では、樂家と宮崎家がある。樂家は六会であった。

信郷自作の花入を使用した会もあり、「第貳番」に一会（安政四年六月二日条）で、「宗全籠」を自作したものであった。

次に、【表2-4-4】により、花入を素材別で見ると、竹が百九十一会と最も多く、次いで陶磁器が六十六会、籠が二十五会、瓢箪が十会であった。

次に、釜について見てみる。

釜を作者別にまとめた表が【表2-4-5】である。

これを見ると、辻家が最も多く六十三会、次いで西村家の五十七会、そして宮崎家の四十一会であった。

形状別【表2-4-6】では、丸釜が五十一会、阿弥陀堂釜が三十六会、尻張釜が三十六会、そして真形釜、万代屋釜、霰釜と続く。

次に、香合について見ていく。

香合を作者別にまとめた表が【表2-4-7】である。

これを見ると、千家十職の樂家が十八会と最多であり、次いで表千家と文化人の八会、そして裏千家、千家十職の大樋家、飛来家と続く。松坂町人による自作も二会ある。

次に、素材別【表2-4-8】を見ると、陶器が百九十八会で群を抜いて多く、木は四十六会、貝は三十五会、そして堆朱、一閑張、果実と続く。

「果実」は橙や蜜柑であった。

次に、茶碗を見ていきたい。

茶碗を作者別にまとめた表が【表2-4-9】である。

これを見ると、「樂家」が百二十二会と最も多く、次いで「裏千家」の二十四会、「表千家」の十七会、「文化人」八会、「公家」は三会と続く。

「文化人」とは、仁清、光悦であった。

産地別【表2-4-10】で見ると、「国焼」が百八十三会、高麗が百三十会、「樂焼」が百二十七会、そして中国、ベトナム、シヤム・ビルマと続いていた。

次に、棗を見ていきたい。

作者別【表2-4-11】では「塗師」が最も多く十一会で、「文化人」は六会、千家十職の飛来家は四会、「茶人―利休系」は三会、であった。

「形状別」【表2-4-12】では、「大棗」が三十五会、「中棗」が三十三会、「小棗」は十八会であった。

次に、茶入について見ていきたい。

作者別【表2-4-13】で見ると「陶工」が最も多く二十四会である。「樂家」は五会、「裏千家」と「文化人」は三会、「公家」千家十職の塗師の「中村家」は各一会であった。

形状別【表2-4-14】で見ると「肩衝」が二十四会、「耳付」が十八会、「丸」が五会、「瓢箪」と「大海」が各四会であった。

最後に、茶杓を見る。

先ず作者別【表2-4-15】では、「茶人―表千家」が最多の百二十五会、続いて「茶人―裏千家」が九十会、そして「茶人―利休系」二十六会、「茶人―珠光系」二十四会と続く。

信郷自作の茶杓も使用されており、「第貳番」は安政四年末年三月条の「自作」と、「第四番」の文久二年閏二月十一日条「我尔作 銘時雲」の二本であった。

素材別【表2-4-16】では、「竹」が二百八十会と最も多く、次いで「象牙」の十六会、「木」の七会であった。

「一閑張」は「第五番」の慶応三年条（年月日不詳）において使用されていた。

信郷が参会していた他会記は、百二十三会あった。信郷は参会者の欄に、「我尔」「本居宗朝」、「自分」、「本居健亭」という表記を行っていた。

開催場所は、松坂においては商人宅や塩屋町席（貸席力）が、京では各家元邸内における茶席が使用されていた。

他会記の種類には、各種茶事（夜咄、不時他）、宗匠の追善・回忌等がある。全体的に見ると、茶事の開催事由が判明する会は百八十一会である。大別すると「初会」、「口切」という季節の茶事や「順茶」「稽古茶」という輪番茶事や

稽古茶事がある。

慶事では、茶道の宗匠や松坂商人の「祝茶」（還暦、長寿）、「病氣全快」等。弔事では茶道の宗匠や松坂商人等の「追悼（募）」、「回忌」などが見られた。

社会情勢を反映したものとしては「撒髪茶」がある。これは、断髪を行った時の記念を意味する茶事であろうと考えられる。

【表2-5】は、茶会を開催事由別にまとめた表である。

それを見ると、「茶事」が六十一会と最も多く、次いで「追善・追慕」茶会が二十会、「初会」が十七会、還暦などの「賀祝」が十六会、不時茶である「臨時」茶が九会、「遠忌」が七会、「名残」が五会と続いていた。

「追善・追慕」茶会は、茶道の宗匠と松坂商人の縁故の者の追善・追慕の為の茶会である。

「初釜」は第四番（元治二年二月九日条）と第五番（明治四年正月条）の二会であるが、いずれも他会記である。

全体的に見ると、事由が判明している茶会記の記録は「第四番」が最多の五十六会、次に「第五番」の四十三会であった。

次に、「初会」で「回忌」、「打合」の茶会であった明治元年（一八六八）十一月十日条の茶会を紹介したい。【史料2-8】

当茶会は十一月十日の初会であり、裏千家八世一燈宗室の百回忌のための打合せの茶会で、島田久々齋が亭主であった。

掛物は裏千家四世臘月庵仙叟の筆で、同家八世一燈の文であった。

釜は、宝珠形で大西清右衛門家九代・浄元の作、香合は交趾で富来の鼓、炭斗は瓢で一燈の筆と判があった。

茶杓は一燈作の柿の木製。花入は阿波焼の筒型で、花は雪柳と椿であった。

水指は伊部（備前）焼で、一燈の書付がある。銘は「石切」で、外箱は不見齋の書付があった。

茶碗は、樂家四代の一入の黒であった。

料理は、向付はからすみと大根おろし及び土筆、汁はきんこの作り身と芽紫蘇。煮物はぐじとなめ茸、吸物は和歌浦のりの生姜汁。八寸は鴨すき焼きで軍鶏のむしり身があった。

菓子には「浜水鳥」で、御茶は「綾昔」であった。

薄茶は広間で供され、掛物は一燈筆、釜は累座丸。香合は一燈好の品で、炭

斗も一燈好であった。

花入は一燈作の舟で、銘は「一葉」で共箱が付いていた。

茶碗は唐津焼と志野焼の筒茶碗の二口、茶器は一燈好みのツボツボ棗、茶杓は時代象牙であった。

道具組をみると、全で一燈宗室に所縁がある道具であり、百回忌茶会の予行茶会であったのではないかと考える。

次に、社会的な茶会として、皇族への献茶、学校に関する茶会を紹介したい。

先ず、明治二年（一八六九）三月二十六日に、山階宮に於いて深津宗味が献茶を行った会を挙げる。

○明治二年（一八六九）三月二十六日

山階宮於御茶室□時献茶 深津宗味

三月二十六日正午御客

伏見宮

山階宮

□之宮

後藤様津□  
外二四人

御相伴

後藤様津□

一 御掛物 近衛前関白忠熙公御筆

心如金石志仮松宿

一 釜 姥口宝珠松□アリ

弥二郎作

ツククサリ仙叟好拝領浄益作

東福門院様御物貝合蛤

一 香合 宗旦拝領一

画丸□永□印

松□京箱書付

一 花入 端之坊

□叟□庵書付

茶入 瀬戸新兵衛

一 茶入 袋 丹地山路模様製

花 石白牡丹

一 茶杓 角田川舟竿ヲ以 都とり何事とらん古さとの

精中宗室作 和する、編五久宗八

筒二古歌 松坂長井同玄齋東京出座之箱二

揮しなり数ノ内

御懐石 丸椀新調

御飯臺 御次一文字わん中丸折敷

洗鱧

金糸うり

わさひ

しろ湯

御飯

若鮎の塩やき

御香の物なら漬茄子

□□の尾付焼

青竹の串二差

無トウ海老

鯛の子

百合根梅肉阿へ

朱高ツキ

御菓子 □□□二

御惣かし

千代の山

御茶 清□白竹

竹田紹清詰

御薄茶碗紀州御庭焼赤

御茶器 鶴亀時代蒔絵棗

白ミソ

御汁 津ト豆腐

岩茸

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

鯛うき身

御平鯛昆布

松露

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

御飯

志ゆんさ

生姜汁

この茶会は、裏千家の業躰である深津宗味が皇族に献茶を行った茶会である。信郷は同席をしていないが、信郷が蒐集を行った他会記の中で松坂と縁がある深津宗味の献茶についても関心を払っていた事が分かる記録である。

さて、献茶会は山階宮邸内の茶室で催された。献茶先は伏見宮と山階宮ら三名。相伴客は後藤氏をはじめとした五人であった。

掛物は、近衛前関白忠熙公御筆の一行物。

釜は、弥二郎作の姥口宝珠形で、付属の鎖は浄益作の仙叟好みを深津宗味が拝領した品である。

香合は東福門院の御物の貝合蛤で、千宗且が拝領した品であった。

花入は端の坊で、花は石白牡丹であった。

点前は、衝立に熨斗を付けた松雲棚を使用している。

水指は、仙叟の判がある大桶焼である。

茶碗は、「御臺唐物」と記されている事から、天目茶碗が使用された事が分かる。天目茶碗の種類などは不詳であるが、天目台は唐物であった。

次客用の茶碗は、樂家七代の長入黒のアイヤメ写しであった。

茶杓は角田川Ⅱ隅田川の舟竿を使用し、玄々斎精中宗室が作ったもので、筒に古歌が記されていた。これは長井同玄斎が上京をした時に箱に揮毫を行ったもので、複数個の内一本であった。

茶入は瀬戸焼の新兵衛の作で、袋は丹地山路模様の製であった。

懐石料理は、丸碗は新調をされ、御飯台が使用されていた。次客用には、一文字碗で中丸折敷が使用された。

料理は、向付は鱧の洗いに金糸瓜と山葵。

汁は白味噌で、つと豆腐に岩茸が入っていた。

平は鯛のうき身に鱒昆布、そして松露。焼物は若鮎の塩焼きともう一品が青竹の串に差してあった。

香の物は奈良漬の茄子。吸物は蓴菜の生姜汁であった。

八寸は無頭海老と鯛の子及び百合根の梅肉和え、後肴は鱒、津崎麩の献手す

りであった。

炭斗は阿波焼、灰器は備前焼、薄茶碗は紀州御庭焼の赤、薄茶器は鶴亀が描かれた時代蒔絵棗であった。

次に、学校に関する茶会として、西京土手町女学校遷移式の際に生徒三人が千宗左の指導の下で点茶を行った茶会を挙げる。

○明治十一年（一八七八）九月一日

明治十一年九月一日

西京土手町女学校遷移式 点茶席四畳半

千代尼短冊 釜 銀富士形

掛物 百生やつる一すし之心より 風炉 鳳凰 □五郎作

花入 北政所へ利休ヨリ献上 水指 古赤絵四方

花 上二四季咲かきつはた 柄杓立 青磁

下二白萩 秋かいとう 火箸 シイ巻

建水 銅曲形浄益作

床脇二 唐クハ 蓋置 金三ツ葉

真塗長板 羽残箱硯箱 香合 青磁六角

炭斗 油竹小 菓子 琥珀まんちう

灰器 □入永楽□ 唐物内朱盆

茶入 古薩摩耳付 総菓子 糸巻藤

袋 白地古金襴 松葉

茶碗 青井戸 御茶 祝之白

啜 啄斎書付 銘瀬川 右同人献上

古□□□

茶杓 伴翁作

教授 千宗左

銘さ□□

生徒 檜本とき

薄茶器

點茶同 塚本のふ

中棗 江岑名判

同 清水てい

如心箱書

茶碗 了入黒平

以上

皆具三井高福藏品

この茶会は、西京土手町女学校遷移式に於いて行われた。西京土手町女学校とは前述した「新英女学校及女紅場」の事である。何が遷移をしたのかについて知りうる記述が『京都府誌』の中にある。それを次に紹介する。

十一年十一月より、抹茶及食札を教授す。八月に入り寄宿舎賄方の雇人を廢し、生徒をして交番に割烹及食品購買、簿記計算等を行はむ。

九月教場及舎寮の増築成る。是より先校舍既に狹隘を告ぐるのみならず、其の構造教場に適せざるを以て、増築の工を起し、是に至りて竣功せるなり。註五十九

(傍線筆者。旧字体を新字体に直した。)

これによると、九月に教場と舎寮の増築が完成している。この事から「遷移」とはこれを指し、「遷移式」が九月一日に挙行されたのではないかと考える。更に、十一月から「抹茶」と「食札」の教授が始まった事がわかる。遷移式の中で茶会が千宗左(碌々斎瑞翁)の教授により催されたことは、十一月からの本格的な「抹茶科」の教授に先駆けて、既に碌々斎が課外授業か何かの形で茶道教育に関与していたことが窺える。

茶会記に戻る。茶会の会場は四畳半で、真塗長板を用いた点前であった。点前は、生徒の檜本ときと塚本のふ及び清水ていの三人がつとめた。点茶の

教授は千宗左。表千家十一代碌々斎瑞翁のことであろう。

皆具は「三井高福藏品」と記されていたことから、三井家所蔵品を借り受けて行っていたことがわかる。

茶道具の取り合わせは、掛物は加賀千代女の短冊「百生やつる一すし之心よりに、花入は千利休が北政所に献上した蒔絵二重で、花は上に四季咲き杜若、下には白萩と秋海棠を入れていた。

釜は銀富士形で、風炉は鳳凰形。水指は古赤絵四方、柄杓立は青磁火箸は椎巻、建水は淨益作の銅曲形、蓋置は金三ツ葉であった。

香合は青磁の八角、炭斗は油竹製の小、茶入は古薩摩耳付で袋は白地の古金欄、茶碗は表千家八代の啐啄斎書付、銘は瀬川の青井戸。茶杓は表千家八代啐啄斎伴翁の作であった。

菓子琥珀饅頭で、唐物の内が朱色の盆を用いて出された惣菓子は糸巻藤と松葉。御茶は祝の白で、三井高福が献上した。

次に、松阪における信郷の交友関係を見る上で看過出来ない射和の竹川竹斎の射陽書院で開かれた「謝恩」茶会である元治二年(一八六四)四月二十七日条を紹介したい。【史料2-9】

当茶会は慶應元年(一八六八)四月二十七日に、射和の竹川竹斎が射陽書院で開いた会である。徳川家康没後二百五十年の御神祭の添茶(添釜力)の謝恩会として開かれた。

参会者は、信郷が正客で長井嘉左衛門、長谷川次郎兵衛、長谷川元之助、丹羽文亭と他に六人、計十一人が招かれた。

寄付の掛物は大黒庵茶の湯の付利休の書で、「喫茶去」の三文字と風呂釜(風炉釜力)の品及びさめ可い(醒ヶ井)の歌の利休筆写を裏千家十一世玄々斎精中宗室が記したものであった。

書院と広間は「射和文庫」と「射陽書院」の二会場が使用されていた。書院には、射和文庫に於いては拝領した二条閑白左府公を、射陽書院に於いては一条左府公の品を飾っていた。

広間の座敷では、射和文庫に於いては願主の稲垣佐渡守殿、射陽書院に於いては大坂人の呉義筆の品を飾っていた。尚、大坂人は不宿であると記されている。

上の間の床には、宣長の歌とその左右には一条大臣忠香公の筆になる「護国祐民」と三条内大臣実葛公の筆になる「赤心報国」が飾られていた。

そして、神宮御食机と御神酒が設えられており、神宮御食机には神宮上古の瓶子。御神酒は相可瓶子で、万古焼で模された物であった。

神宮御食机には、焼餅が左右に供えられていた。

花入は、利休が小田原陣中で作ったとされる銘「尺八」で、豊臣秀吉の御物で竹一本。外箱は三つあり、一休宗純と伝えられる物と沢庵宗彭と小堀遠州侯、そして了々斎である。

大箱の中には江月和尚と小堀遠州、沢庵の掛物並びに遠州中入筒があった。

花入台は御所車で、杉の木の足を打っていた。これは玄々斎が来た折に好みを新調し、玄々斎の書付が伴っていた。

花台は玄々斎書付が入れて添えてあり、花はかき柴草と花菊であった。

書院の違棚上には花入の伝来之記一卷があり、紫野大徳寺の大心和尚の筆で、玄々斎書判の箱が伴っていた。

違棚の下には古萩二ツ蛤の大鉢中真山水で五年実生板が一本、蒔絵実生の若松が兩年実生板十本が置かれていた。

押板には、御花箱と書物の箱及び重硯が十個置かれており、重硯には楓の落葉蒔絵と久老之筆「よそめにはいつにわき水と打ふとん

かきつめて見し楓の落葉を 久老」の歌が書かれていた。

向座敷の飾は、角飾で極彩色の品が用いられていた。

掛物は、唐棧本歌横物玄々斎の書で、外題は竹川竹斎と千宗室が記していた。内容は、禁裏より新院の松ヶ枝茶匙献上の御慶で、七種物であった。この「七種物」とは、禁裏新院の松で作られた茶匙Ⅱ茶杓を指すものと考えられる。

点前は裏千家八世又玄斎一燈宗室好みの「銀杏台子」で行われた。

釜は大黒庵より利休伝来の尾垂釜で、玄々斎がそれを模した五つの内の一つであった。天倫和尚筆による箱書付で玄々斎の写しであった。

風炉は、玄々斎好みの常陸風炉であった。

水指は玄々斎好みの東福門院様から宗旦が拝領した仁清焼で、葵を蔦の図に替えたツمامミがあった。

薄器は玄々斎好みの丹地と黒の板に鶴が描かれ、銘は曙棗であった。

杓立は揚げ雲雀の模様。吹竹は玄々好みで松風の印があり、浄寿作であった。香合は一燈好みで、箱も一燈の筆で「玉香合」と書かれていた。

羽箒は、丹頂鶴の三ツ羽であった。

茶入は、玄々斎による銘「松ヶ根」で、共箱書付がある古瀬戸写の樂焼であった。袋は印金地製であった。

茶碗は玄々斎好みの三つの内で大きさは中大。白赤の万年松が描かれていた。茶杓は、玄々斎が庭を出て一本の竹を指して作られたもので、銘は「老の友」であった。

建水は、玄々斎好みの尺八を模した飾竹で、書付があった。それは「御おく備も見あれハ 台子の上二心斗二」という句であった。

茶碗は、万古焼で銘は国。台は小代焼であった。

料理は、利休数寄屋碗と一文字碗を使用して供された。

向付は一入作の百合皿にあじひ鯛（味付の干鯛の事力）、茗荷先、紫蘇に二杯酢を掛けた品。汁は澄まし汁で、煮物は若竹と車海老であった。

蒔絵が描かれた重箱には、焼物の鯛切身御茶蒸しが入っており、香の物は沢庵漬、玄々斎の二重には「たけ」と白髪。「白髪」とは白髪葱の事であろう。そして伊勢国で食されている「霰漬」であった。

八寸は、蛤のとりやきであった。

菓子には、玄々斎好みの伝来仁清花輪模様の器に「可己餅」（かき餅の事力）、惣菓子は玄々斎好みの平遠山三つに玄々斎好みの「二見浦」であった。

御茶は竹田紹清詰めで玄々斎好みの「神の都」であった。

後席の薄茶と料理は略されている。

参会者は、正客は信郷で、長井家から長井嘉左衛門、長谷川家からは長谷川次郎兵衛と長谷川元之助、他に丹羽文亭、他に六人の計十一人であった。

信郷の交友関係は、松坂地域では長谷川家、小津家、長井家、三井家を中心とした、いわゆる松坂商人グループに久世家、岡寺山継松寺、常念寺が加わっていた。長井とみの名も散見する。

信郷は同席はしていないが、深津宗味が開催した茶会や、宗味が貴頭に献茶をした会記も記されていることから、信郷は流派を問わない茶会開催情報の入手をしていたことが窺えた。

## 小括

当章では、本居信郷が残した『会席附』や、近代黎明期における茶会の意味等について検討を行った。

第二節では、本居家の概略について述べた。「(四)歴代当主の文化活動」においては、『本居宣長事典』を基にした。宣長は和歌と謡曲及び龍笛、和琴を嗜み、春庭と大平は作歌、有郷は三絃等、信郷は茶道全般に造詣が深く、長世は邦楽を好んでいた。

第三節では、信郷が残した茶会記『会席附』と自作の茶道具等について検討を行った。

信郷は、神職の傍ら、表千家茶道師範として茶道を嗜み、安政四年三月十九日から明治十八年十二月十四日に至る迄の茶会記『会席附』五冊の中には、三百八十九会の自他会記が収録されていた。その内、自会記は二会だけであり、三百八十七会の他会記も、その多くは、信郷が参加をしていない他会記で、流派別にみると、参加、不参加共、ほぼ同様に、表千家、裏千家が多いが、他に藪内、武者小路、江戸千家等であった。また、開催地別にみると、参加、不参加の違いが明瞭であり、参加した茶会は約九十%が松坂であり、その他も近畿圏に限られていた。これに対して不参加の茶会記―収集した茶会記―は、京都が約半数で、次いで松坂が約二十五%、後は十%以下となるが、東京、大阪他の近畿圏の地域である。但し、阿波や萩で開催された茶会記もあった。

自会記の「本居席茶事」(明治四年五月二十一日条)の開催場所は本居信郷邸、客は長井嘉左衛門、長井九郎左衛門、長谷川次郎兵衛他十二名であった。茶道具は信郷自作の品が花入、茶碗の二品、本居家什器は建水の一品が用いられており、信郷は流派にとらわれない道具立てを行い、懐石料理には郷土料理「てこね井」を用いていた。

他会記の開催場所は、松坂においては商人宅や塩屋町席(貸席力)が、京では各家元邸内における茶席が使用されていた。

信郷が残した茶会記は、信郷の茶の湯のみならず各地の茶会の様相がわかる茶会記であり、近代黎明期の茶道が衰退していた世情の中で、いろいろな流派の茶会がそのような社会情勢を反映しながら脈々と続けられていたことが分かった。

その様な茶会の例として次のような茶会記もあった。ひとつは、「撒髮茶」がある。これは、断髮を行った時の記念を意味する茶会であろうと考えられ、道具組は慶事の品であった。

また、明治五年(一八七二)八月二十七日には、裏千家で開催された英国人トーマスボルンビー・ウアニスとイミリー・ウアニスらの茶会があった。咄々齋において椅子席点前が行われており、西欧化の風の中で、時代に沿おうとした姿勢が読み取れた。

また、明治十一年(一八七八)九月一日に「西京土手町女学校遷移式」において「点茶席四畳半」で開かれた学校茶道がある。西京土手町女学校とは「新英女学校及女紅場」の事である。同年十一月から「抹茶」と「食礼」の教授が始まっており、遷移式の中で茶会が千宗左(碌々齋瑞翁)の教授により催されたことは、十一月からの本格的な「抹茶科」の教授に先駆けて、既に碌々齋が課外授業か何らかの形で茶道教育に関与していたことが窺える茶会であった。

また、博物館(現在の東京国立博物館)内の六窓庵において博物館長野村素介らを正客とした茶会記も収録されていた。この茶会は博物館長の野村素介が濃茶席と懐石の亭主を務め、客は三條相國と参議の山田顕義及び室戸識、大審院院長従四位の渡辺驥が、薄茶席は古筆の仲が亭主を務め、客は三條・山田・室戸・渡辺の四氏に局長の野村が御詰の五人であった。茶会の道具立ては、鎌倉時代の品と宗和好みの品が数多く使用されていた。

この「博物館における茶会」は、現在の社会教育施設、わけでも博物館や美術館における各種の「茶会」の嚆矢であり、注目すべき茶会である。

信郷の交友関係は、松坂地域では長谷川家、小津家、長井家、三井家を中心とした、いわゆる松坂商人グループに久世家、岡寺山継松寺、常念寺が加わっていた。

時代的に見ると、近代黎明期には世の中の価値観が大きく変わったが、松坂の茶人たちも茶会を絶やすことがなかった。むしろ、新しい時代に入り、より

茶道熱を上げていたと言っても過言ではないほど、射和では竹川竹齋が「益友社」を作り、松坂では信郷を茶の湯上の指導者の一人として、茶室建築や茶道具の自作を行っていたことが解明された。

茶の湯が創始された時代、のちに千利休により茶の湯が大成された時代も共に戦乱の世にあったことから、明治維新前後においては、往時を偲びつつ同志で集い、茶室と茶友が心の拠り所として、そして「禅境」としての意味合いがあったのではないかと考える。



### 第三章 大名茶道の近代黎明期

#### ―安芸広島藩国老・上田安敦の茶の湯―

#### はじめに

広島市は中国地域最大の主要都市であり、太田川など数本の河川で形作られたデルタ地帯に中心市域がある。

現在の広島市は、江戸時代から幕末までは浅野家が藩主であった。『仮名手本忠臣蔵』でお馴染みの赤穂藩浅野家は、分家にあたる。

広島藩藩主浅野家は代々、武芸と諸文化活動に力を入れ、現在、国指定名勝庭園で上田宗箇が作庭した縮景園や、現在は被爆後の面影が残るのみの萬象園<sup>註</sup>などの庭園を市域内に所有していた。

広島藩国老として、浅野家代々に仕えたのが上田家である。上田家は上田宗箇（一五六三〜一六五〇）、名を佐太郎のちに重安と称し、宗箇と号した<sup>註</sup>上田宗箇に始まる。

上田流の茶は「凜として美しい」<sup>註</sup>、点前で、「翁の茶に於ける楽しむ所は清静に在り」<sup>註</sup>と表されている。

上田家は、「藩の家老という要職にあつて、茶の道だけに専念没頭というわけにはいかなかったでしょうから、『宗箇の茶の湯』というものを正確に伝えていくため」<sup>註</sup>に「上田家茶事預師範」の野村家と中村家が上田宗箇流茶道の教授を務めていた。

幕末明治期には上田安敦（讓翁）が国老を務め、混乱した世と藩政とを治めた。

安敦は明治四（一八七二）年に剃髪し、舟入村神崎の上田家下屋敷の山水軒に移った。そして和歌を詠み、お茶の道に励み、上田家に伝わる茶道具や茶書を整理したことで「上田流中興の祖と言われる」<sup>註</sup>人物である。

拙稿では、明治期に上田安敦が行った茶の湯を、公刊された茶会記と茶道具から窺う。

尚、文中で上田宗嗣<sup>そうじ</sup>氏とあるのは、現在の十六代家元「上田宗冨<sup>そうけい</sup>」氏のことである。

#### 第一節 研究方法

上田家の家政と茶の湯については、次の調査本などにより、知りうる事が出来た。

○政治史・茶道史研究協議会編『上田家文書調査報告書（二分冊）』広島市教育委員会 平成十七年三月三十一日

一 上田家家政史料集成  
一 上田家茶書集成

○上田宗嗣『茶道 上田宗箇流』広学図書 平成十六年十一月一日  
近代黎明期に当主であった上田安敦については、左記の図録と解説により、政治家として、そして茶人としての姿を、文書や武具及び茶道具から窺う事が出来た。

○広島市文化振興事業団編『幕末維新の芸藩と国老上田家展図録』広島市文化振興事業団 平成元年十月二十七日

上田家の茶会に関する史料の内、人名探究については次の書を使用した。

○『広島縣職員録』（明治九年七月〜十三年一月分）  
地名については、次の書を使用した。

○『角川地名大辞典（旧地名）』角川書店  
広島藩と広島市及び広島市全般の歴史については、左記の市史を使用した。

○広島市役所編『新修広島市史』第四卷 文化風俗史編 広島市役所 昭和三十三年十二月、

○広島市役所編『新修広島市史』第五卷 年表索引地図 編纂沿革 広島市役所 昭和三十七年三月

○広島市役所編『新修広島市史』第七卷 資料編その二 広島市役所 昭和三十五年三月  
○広島市役所編『広島市史』第四卷 名著出版 昭和四十七年十二月十二日

○広島市役所編『広島市史（社寺誌）』名著出版 昭和四十七年十二月十二日

広島藩の歴史と藩士については、左記を使用した。

○飯田米秋『藝藩通志第一巻』昭和三十八年七月十日 復刻『藝藩通志』刊行会

○林保登編『藝藩輯要 附藩士家系名鑑』芸備風土研究会 昭和四十五年七月二十日

明治期の広島市については、左記の書を参考にした。

○林保登編『広島繁盛記 附・厳島』東瀛社 明治三十三年六月二日 広島市中区の神崎学区については、左記の書などを参考にした。

○郷土誌編集委員会『神崎・舟入・江波地区の郷土史』（表題「心」）郷土誌編集委員会・広島市舟入公民館運営委員会平成七年十一月

○神崎小学校創立一〇〇周年記念事業委員会編『創立一〇〇年 神崎のあゆみ』神崎小学校創立一〇〇周年記念事業委員会 平成二十二年十二月

## 第二節 広島藩国家老上田安敦の茶の湯

### (一) 上田安敦について—文武—

上田安敦（文政三年五月二十二日〜明治二十一年十二月二十六日 一八二〇〜一八八八。号讓翁、春舎）は、広島藩最後の国家老である。安敦は「十代上田主水安世の嫡男として生まれ」<sup>註七</sup>たが、「その年父安世が卒したため、十一代の主として浅野主計の弟安定（のち安節、号松濤）<sup>やまだ</sup>が上田家に入り、その養子」<sup>註八</sup>となった。その後「安政三年（一八五六）、ペリーの来航の三年後、十一代安節の死去により、三十六歳でその遺領一万七千石を継いで、<sup>註九</sup>国家老」となり、幕末維新期の国政と藩政を担った人物である。

系図を、【図3-1】に記す。

尚、上田安敦が行った国政と藩政の詳細については、図録所収有元正雄氏論文「幕末・維新期の広島藩と上田家」と、政治史・茶道史研究協議会編集『上

田家文書調査報告書 一上田家家政史料集成』（広島市教育委員会発行 平成十七年三月三十一日 以下、『上田家家政史料集成』と略す。）に記されている。上田安敦の人物像については、「讓翁馬上の姿」という軸が上田家に遺っている【図3-2】。この画からは、凜として聡明で且つ繊細な風貌を窺うことが出来る。

上田安敦の履歴については「御履歴并御家政概略控」（政治史・茶道史研究協議会編集『上田家文書調査報告書 一上田家家政史料集成』広島市教育委員会 平成十七年三月三十一日 所収）があり、それを窺うことが可能である。当履歴書には「履歴」・「職務」・「学業」・「賞」・「家政概略」・「庶政」・「租税」・「勸業」・「役所」・「賞与」・「賑恤」・「兵事」の全十二項目があり、元号の時系列で安敦の事績について記されている。

拙稿では、「履歴」、「学業」、「賞」、「住所」、「死所」、「家政概略」、「勸業」の七項目について、【史料3-1】に紹介を行う。

この履歴によると、学業は漢学から始まり、茶湯まで九科目を修めている。茶湯は上田家茶事預師範の二家のひとつである中村家の中村泰心から皆伝を受けているが、何歳から修行を始めたのかについては不詳である。

「学業」については「家政概略」によると、上田家の私邸には三つの「私学」が設置されており、宝暦年中に創設された「講学所」、弓馬刀槍西洋調練を講じた「孟晋舎」、生徒の寄宿部屋も設けた四書左国史漢略等を講じた「泊静舎」である。

「講学所」については、広島市文化振興事業団編『幕末維新の芸藩と国老上田家展図録』広島市文化振興事業団 平成元年十月二十七日所収の、頼祺一氏解説「上田家の講学所」の中（四十八頁七行目〜十九行目）に、次のように記されている。

上田家の側用人が主管し、講学所係りと書記を置いて校務をつかさどらせた。教育を担当したのは教授・助教および子弟中より選抜された句読師で、あわせて八〜二名いた。生徒数は一定していなかったが百名を超えることはなかった。家臣の子弟は八、九歳になると入校し、以後十年程度の教育を受けた。学規は「白鹿洞書院揭示」が用いられているが、これは

あまり学派にこだわらず道徳を中心に教育する幕末期の教育方針を示していると思われる。教育課程は、素読・訓導・質義の三段階とされ、春秋二回試験が行われた。幕末期の教育内容をみると、漢学のみでなく和漢の歴史書や職原抄・令義解などの国書も用いられているが、別に和学の区分は立てていない。維新前五、六年には英仏学修行の給費生を遊学させることもしているが、これも漢学力のある者にしか許しておらず、あくまでも漢学教育が主流であった。

講学所では早朝より正午まで教育が行われ、訓導生・質義生は毎月三回開かれる詩作・作文の授業に出席できた。訓導以上の課程の生徒で将来有望な者は、家臣の屋敷に設けられた泊静舎という寄宿舎に入ることが許され、毎月一人の扶持と雑費が支給されるなど優遇され、他国遊学の道も開けていた。

家臣が講学所に入るか、私塾で学ぶかは自由であった。上田家当主は毎月定められた日に登学して聴講したが、これは御前講といって、この日だけは有職・非職の者を問わず必ず家臣も聴講した。学舎の規模などの詳細は不明であるが、学問奨励は上田家代々の家風であったともいえる。

「賞」については、元治元年十二月廿三日に長州征討出陣に付き、尾州総督府の尾張公(徳川慶勝)から刀一口、槍穂三本、手綱五筋を賜わり、同年同月廿八日には殿中(広島城内)にて出陣の労を賞せられ金五百両を賜っている。<sup>註十</sup>

明治十年五月卅日には、広島県から学校へ寄付をしたことにより、金賞の木盃を、翌年二月には陸軍省から明治十年の西南戦争に木綿七百反を献納したことにより、銀盃を頂いている。

「死所」は「住所」と同じ「広島県広島市河原町三百八十五番邸」となっており、この地は上田家の下屋敷で、後述を行う「山水軒Ⅱ万春園」があった場所である。

「家政概略」は上田家設置の講学所と泊静舎の説明から始まり、それ以降は家臣に何処へ行き何をどの師から学ばせたかについての記録である。「家政概略」には安節の時代の事も含まれるが、安敦の時には藩士や藩御抱えのイギリス人を招聘して「西洋調練」を家臣に学ばせたり、家臣を江戸に遣わして慶応

義塾他で英学・漢学を学ばせるなど、時代の先を見込んだ教育を行っていたことが窺える。

「城内の上田家私邸」は上田家上屋敷を指しており、十六代家元上田宗岡氏によると、現在の広島市では「旧広島市民球場の北地域に位置するハノーバー庭園の辺り」<sup>註十一</sup>であったそうである。

上田家上屋敷については、現在の広島市中心部地図<sup>註十二</sup>【図3-3】からその位置を示す。

地図から広島城と上屋敷の位置関係について見ると、大手門付近に上屋敷を構えていたことがわかる。

尚、十六代家元上田宗岡氏は「国際交流行事」として「四百年の伝統を持つ武家茶道として、文化交流の行事にも数多く参加」をしており、「姉妹都市ドイツ・ハノーバー市を訪問。記念式典でシュマルステイク・ハノーバー市長、秋葉広島市長と共に。」の写真と、日独合同による茶会の写真を紹介している。<sup>註十三</sup>

『図録』の中に安敦の詳細な年譜があるので、【表3-1】に挙げる。

## (二) 茶の湯関係史料の残存状況

上田家の茶の湯を知るには、政治史・茶道史研究協議会編『上田家文書調査報告書 上田家茶書集成』広島市教育委員会 平成十七年三月三十一日(以下、『上田家茶書集成』と略す)が刊行されている。

当書巻末の「上田家文書 茶書目録」では、茶書が三百三十三、風炉切型が二十八点が遺されていることが紹介されている。

三原市立図書館にも上田家関係の文書が遺されており、三冊が当書に掲載されている。

上田家所蔵分の内、茶会記で翻刻がなされていない書は管見では十五点あり、それは左記の通りである。(目録の「県番号」と「名称」のみ示す)

県番号 名称

・十三 茶会記(石井竹治参ル二付)

・百二十 四月六日茶事之記

・百二十一 茶会記（山水軒・会心亭）

・百二十三 茶会記（御広間・同所違棚）

・百二十四 茶会記

・百二十七 仲夏廿七日期会席

・百二十八 佐々木治兵衛方ニテ茶事懐石附

・百三十 御大典奉祝茶事

・百三十一 五月一日茶事

・百三十五 茶会記断簡二枚

・百四十二 二月廿三日正午山水軒

・百四十四 茶会会附

・百四十五 茶会記（茶碗・黒染一入）

・二百八 茶会記

・二百十 茶事（会記、点前、連歌、利休百首）

この中には大正の元号など年月がわかるものもあるが、年月等が記されていないものが殆どである。

次に、上田家が所蔵する茶道具については、『上田家茶書集成』に「茶具控」が所収されており、その全貌を窺うことが可能である。

安敦所縁の茶道具については『図録』が詳しい。【史料3-2】に、安敦所縁の茶道具の写真を挙げる。

これらの中には、安敦が遺した茶会記の中に記載がある道具も存在する。

今は窯跡すら分からなくなっている「広島焼」は、広島城下神崎の上田家下屋敷において焼かれていた焼物で、大変貴重である。

### (三) 上田安敦の茶の湯

#### ① 安敦が茶の湯を嗜んだ「山水軒」

安敦が茶の湯と和歌三昧の生活に入ったのは、「明治三年剃髪し山水軒さんすいけん讓翁じょうおうと号し、政務から引退」詳細してからである。

先述した安敦の年表の明治四年の項にも、「この年広島城郭内の上田家上屋

敷を返還し、舟入村神崎の上田家下屋敷山水軒に移る。」とある。

しかし、現在の「広島市中区舟入町」には、「神崎」の地名は存在しない。では、安敦が御一新後に家族と共に住し、茶の湯にいそしんだ「山水軒」はどのような所にあつたのであろうか。

「神崎」の名称が残っているのは「広島市立神崎小学校」とその学区名及び「神崎学区連合町内会・神崎学区社会福祉協議会」、本川に架かる中区中島と同区神崎学区を結ぶ「中島神崎橋」の三つである。

先ず、神崎学区は、東西は本川と天満川に、南北は江波町と本川町の間に位置する河原町、上舟入町、舟入町、舟入中町、舟入本町、舟入幸町の六町で成り立っている。

この「神崎」が「名所」として紹介されている書がある。林保登『広島繁盛記 附厳島』（明治三十三年六月一日発行）がそれである。

当書の「広島名所」には、「神崎」について次の紹介文註十五がある。

◎神崎 河原町の南、江波村に差掛る邊りを神崎と稱す。

本川の水將に注がんとするの涯りにして、若それ三春天朗らかなるの日杖をこの邊に曳かば、翠柳岸邊に搖き、麥隴

波紋を生じて景愛すべし。古人また神崎の夜雨を賞したりき。

（ルビを省略し、句読点を筆者が適宜加えた。）

右の説明文から、神崎という土地は、本川の水がまさに注ぐ涯で、春は朗らかな光がこの地に流れ、柳の翠が岸邊に揺れ、麦畑は波紋を生じて景色を愛すべきである。古人はまた夜雨も賞した—という風光明媚な土地であり、四季折々の「四景」があつたことが窺える。

「神崎」の現在の風景の一端を【図3-4】に挙げる。

現地で「神崎」の土地の由来について知ることが出来るものは、中島神崎橋の神崎側の堤に建てられている「神崎之碑」がある。

この碑は昭和六十（一九八五）年九月に、神崎学区連合町内会と神崎学区社会福祉協議会によつて建てられた。【図3-4-2】。

先ず、碑名「神崎之碑」から見ると、「神崎」の「ザキ」の漢字が現在使用

されている「崎」とは異なり、山偏に「立」の「崎」の字が使用されている。次に、碑文によると、「神崎」の名が歴史上最初に現れるのは、天和三（一六八三）年に木下順庵が第四代藩主浅野綱長の求めに応じて作った詩文「神崎八景」としている。この詩は、広島市役所編輯兼発行『新修広島市史 第四巻 文化風俗史編』（昭和三十三年十二月刊行）二百三十六頁に記載があるので、これを次に挙げる。尚、『新修広島市史』の頁上部の見出しと文章中の記載も「神崎八景」となっている。

#### 神崎八景

西疇春雨 江場秋月 蔽島豊翠 己斐霰雪  
草津朝煙 箕峯晩雪 前川白鷗 南浦漁舟 註十六

神崎は西疇の春雨、江場は現在の広島市中区江波を指し、その場から見える秋の月を、蔽島は廿日市市に所在する蔽島神社にある「千畳敷」の翠を、己斐と草津は現在の広島市西区に存在し、己斐の霰と雪、草津から立ち上る朝煙を、そして箕峯の晩雪である。前川とは本川を指しており、そこにいる白鷗を、南浦とは現在の広島湾を指していると考えられ、そこに浮かぶ漁船の風景である。碑文には「神崎」からの渡船が存在していたことを記しており、これは宝暦八年から始まり、明治の終わり頃まで続いていた。

上田氏との関係については、浅野藩政時代には「家老の上田氏や上級武士による船屋敷、下屋敷などが設けられていたといわれている。」と述べ、この地が水上交通の要所であったことがその理由であると指摘をしている。

では、いつ頃から船屋敷や下屋敷がこの地に置かれるようになったのか。筆者は、広島城下地図を所収している広島市未来都市文化財団 広島城発行の『広島城下絵図集成』（平成廿五年三月十九日発行）から記述の有無と場所の推移及び名称などを探ることにした。

『広島城下絵図集成』では、時系列で絵図が収録されている。その中から上田家に係る部分を収録したものを、【表3-2】に示す。（毛利家所領時代と岡山藩作成になる事実とは異なる絵図は当表から除いた。）

本川沿いに「上田主水屋舗」が存在するようになるのは「寛永年間広島城

下図」（広島城所蔵）である。寛永年間（一六二四〜四四）に描かれたもので、船屋敷は未だ存在しない。

現在の河原町・舟入町の付近に「侍屋敷」の地割りが見えるようになるのは「広島絵図」（元和五年御入国之御城下絵図・広島市立中央図書館所蔵）になってからである。この図では各氏の氏名は書かれていないが、侍屋敷は無彩色、寺地は赤などと色分けをされており、ここから当時の土地割がわかる。

船屋敷であろうと考えられる場所に「上田主水」と記された最初の絵図は「芸州広嶋之図」（山口県立文書館所蔵）である。当図が筆写された年代は、寛永七（一七九五）年である。

「材木新開」―新開干拓地（現在の河原町―舟入町付近）に、「上田主水」の名が記されていることをはっきりと読み取ることが出来る。【図3-5】

広島城学芸員の村上宣昭氏が「享和三く文化元年頃」と景観年代を比定している「芸州広嶋之図」（山口県文書館所蔵）では、船入村に「上田主水船ヤシキ」と明示されている。【図3-6】

続いて、広島城学芸員村上氏が「幕末の広島城下を知る上で、規準となる絵図といえる。」註十七と定義をしているのは、「御城下侍屋敷町新開絵図」（個人蔵）

【図3-7】である。本図から「上田船屋敷」と書かれるようになる。

「山水軒」に係るものとして「万春園」の名称も現在の広島市民の中に生きている。では、「万春園」とはどこから来た名称であろうか。

広島市役所編輯兼発行『新修広島市史 第四巻 文化風俗史編』（昭和三十三年十二月刊行）「第四節 建築・造園・茶華道」の「建築・造園」には万春園について次のような説明が記されている。

万春園は船入町広島市神崎にあり、家老上田家の別業として有名であった。園中の家屋山水軒について山名義方が記した

「山水軒記」はそのありさまを叙述している。註十八

つまり、家屋が「山水軒」で、全体を「万春園」という名称で読んでいるのである。

しかし、『広島市史 第四巻』の「明治大正時代 史蹟名勝天然記念物」の

「萬春園」項における説明<sup>註十九</sup>には次のように記されている。

船入村宇神崎にあり、もと藝藩家老上田男爵家の別業にして、明治維新後は一家久しく此處に住せしが、同三十年の頃、大手町七丁目の邸に移りてより、一時これを料理商魚松に貸付し、料亭となり、萬春園と號したりも、四十年の頃、土地家屋とも市内豪商某の有に歸せり。園中の家屋は山水軒と稱し、藝藩客儒山名義方<sup>雲巖 又は黄島 軒 梅庵と號す</sup>の記あり(後略)

最初に、この記述から「船入村」の中に字として「神崎」という地名が存在していたことがわかる。

次に、「萬春園」と号したのは明治三十年の頃に上田男爵つまり安敦が大手町七丁目の邸に引越後に料理商魚松に貸付け、料亭となった時だと記している。明治四十年の頃には料理商の魚松から「市内豪商某」へ土地家屋共に所有権が移っていた。「市内豪商某」とは誰かについては不詳である。

更に、料亭「萬春園」を裏付ける書としては林保登『廣島繁盛記 附嚴島』(明治三十三年六月一日発行)がある。当書の「旅宿及料理業」の「◎料理商」の項には、元浅野今中大学氏の所有で、「春和園」であった邸が明治三十三年には「料理商「春和園」」になっており、「萬春園」はこれに次ぐ順番で次のように記されている。

萬春園ハ河原町の下にあり舊藩老上田家の有するものにて<sup>てくないひろ</sup>邸内廣く老松深々として風趣多し近來借受けて料理を營める<sup>きょうはんろう</sup>なり。<sup>註二十</sup>

かかることにより「萬春園」の名称は、明治三十年頃からの料亭の名称から来ていることが判明した。

大正期にも「萬春園」の名称は存在していた。それは石井久雄氏編『裏千家広島のあゆみ』(茶道裏千家淡交会広島支部 昭和四十年九月十五日発行 非売品)所収「裏千家広島のあゆみ」の中では、大正九年五月十五日の円能齋の

初来広で迎えた会場は「市内河原町の鈴木別荘「萬春園」であったという記述である。

「萬春園」については、鈴木氏の「別荘」として所有権の変更がなされている。「鈴木氏」とは誰を指しているのかについては不詳である。

次いで、大正十一年六月に「広島地方在住の裏千家修好者の会」が「十四世淡々斎宗匠を萬春園にお迎えして発会式と茶会を催し、宗匠より会名を「松風会」と名付けられた。」<sup>註二十一</sup>という会も萬春園で開催された。

尚、「山水軒」「神崎」の表記の変遷について、地図と広島案内書他から、筆者がまとめた表を【表3-3】に挙げる。

## ② 安敦の茶の湯

上田家の広島藩における役職は藩家老であり、その茶の湯の教授方法は他の流派に類を見ない方法であった。『上田家茶書集成』所収の上田宗嗣氏論文「上田流の歴史と茶書」<sup>註二十二</sup>によると、上田家代々の当主は上田家の茶の湯を修めていたが、藩家老にあつた為に直接人に教えることはなく、野村・中村両家に各々百石を与えて家臣として召し抱え、宗箇の茶の伝承と伝授をさせていた。

「流儀」としての意識については、流祖である宗箇が存命中の時からあり、「茶事預」の名称は中村家六代の中村泰心の箱書付と「他所往来門人控」(安政四年)から、江戸時代後半には上田流茶事預の名称は確立していたと述べている。

では、上田安敦は、幕藩体制から明治維新へという国家が混乱を極めた時期に、茶道上田宗箇流を守る為に如何なる対応をしていたのであろうか。安敦の時代の茶道費用については、上田宗嗣氏前述論文の中で、上田家の財政面からこれを明らかにした文がある。<sup>註二十三</sup>それによると、一年間の予算銀百貫目の中から「御内輪雑費」に含まれた「御茶道御入用」は四貫二百目つまり全体の約四%であったことがわかる。かかることから、財政難にありながらも茶事の予算を確保し、茶道の継承に務めたことがわかる。

次に、上田安敦によって遺された茶会記から安敦の茶の湯について考察を行う。茶会記は、『上田家茶書集成』に所収されている『雅遊謾録』と「上田家

茶会記録」である。

最初に『雅遊謾録』について紹介を行う。書誌情報については、解題から次に挙げる。

【定義】十二代上田安敦（山水軒讓翁）の茶会記

【書誌】『外題』 雅遊謾録 山水軒

【内題】 なし

【番号】 『上田家所蔵文書』茶書143号

【法量】 縦一二・一cm 横一七・一cm

【品質】 紙本墨書 本紙楮紙 朱書なし

【紙数】 本紙五一丁 墨付四七丁

【装幀】 表紙本紙共紙 堅冊 袋綴仮綴

註二十四

「内容」については、解題において次のように記されている。

上田家十二代安敦は、幕末に広島藩家老を務め、征長戦争に広島藩の先鋒として出兵、あるいは京都に滞在する等国事に奔走した。明治三年剃髪し山水軒讓翁と号し、政務から引退して茶の湯と和歌三昧の生活に入った。山水軒は、上田家下屋敷の名称である。

本史料は、安敦が山水軒と号して茶の湯三昧のなかで記された茶会記で、明治七年四月十九日の茶会から始まり、明治十一年四月二十六日の茶会で終わっている。自会が十四会、他会が十六会、その他花会などを記録している。一般に見られる会記はその会に使用した道具類や出された料理などを記録しているのに対し、この茶会記は、道具類も記されているが、会毎に讓翁自身の感想、讓翁や客が詠んだ和歌、あるいは当日の出来事などが日記風に記録されており、明治初期の広島における茶道の状況を伝えており、他の史料に見られない独特なものになっている。

讓翁は、茶会の客の多くの名前を記している。これらは明治初年ころ上田家と交流のあった広島の人や上田流の高弟であろう。上田家茶事預であった野村円蔵、中村豊次郎の名前も客の中に見られ、上田流の茶道の展

開を窺う上で興味深いと思われる。

また、明治七年四月十九日の茶会で讓翁が「まともして春の木の芽を…」と詠んだ歌を、その会の亭主が表具して、翌年の五月五日の茶会で掛物として使用するなど、当時の茶会の様子を窺う上で興味を引くものがある。

註二十五

はじめに安敦の藩家老としての役割と引退後の生活状況について紹介を行い、次に茶会記の自他会数と特徴とについて述べ、安敦が当茶会記に感想や和歌などを記していることにより、広島における明治初期の茶道の状況がわかるとの指摘を行っている。

【図3-8】は、『雅遊謾録』である。

次に『上田家茶会記録』について紹介を行う。書誌情報については、解題から次に挙げる。「法量」は号数別に箇条書きに直した。）

【定義】「茶会記 明治十八年ヨリ」と題する十二代上田安敦の茶会記（冊子）及び一枚文書四点の茶会記を一括して「上田家茶会記録」とした。

【書誌】『番号』『上田家所蔵文書』茶書126・134・142・144・148号

【法量】126号（縦二四・二cm 横三二・六cm）

134号（縦二八・一cm 横四四・六cm）

142号（縦三一・〇cm 横四三・〇cm）

144号（縦二八・四cm 横四五・三cm）

148号（縦二二・一cm 横三三・七cm）

【品質】紙本墨書 朱書なし

【紙数】148号本紙七丁 墨付七丁 他は本紙一紙

【装幀】148号横帳袋綴 他は折紙

【成立】讓翁茶会記録である本史料は、明治二十一年九月を最終としており、この時期に成立した。

註二十六

「内容」については、解題に記されている。

註二十七

当解題は『雅遊謾録』と同様に、茶会の自他会数とその性格について述べて

いる。自他会記別では、自会記における半東は茶事預中村家七代豊治郎(快堂)が務めていたことを、他会記では十九年から安敦が亡くなる二十一年までの三回は亀次郎が亭主を務めていたことを指摘している。

茶会記の内容については、「茶会記 明治十八年ヨリ」においては「明治十八年五月三日」条の茶会記は氏名のみの記載であったが、当茶会記は一紙の茶会記である「5明治十八年五月三日茶事記」と同一であることを指摘している。当茶会記では上田家出入りの茶師である片岡道二が点前をしており、茶道具については「織部より宗箇が所望した古来名高い伊賀花入」である「生爪」を使用していること、そして亀次郎を亭主としたり客としたりしていることから、安敦が亀次郎を後継者として養成を行ったことが窺われる史料であると結論付けている。

一紙別々の茶会記については、その残存状況と内容から、安敦が催した茶会の準備のための記録かも知れない、と推察している。

最後に、安敦が維新後剃髪し、「茶の湯三味の生活」に入ったことを、「関が原の合戦に西軍に組して敗れ、領地を没収された後剃髪し、宗箇と号して茶の湯に没頭した」宗箇と重ね合わせ、「上田家の祖宗箇を彷彿とさせるものがある。」と指摘している。

次に、『雅遊謾録』と「上田家茶会記録」について考察を行う。

## I 『雅遊謾録』

『雅遊謾録』の茶会記をまとめて【表3-4】に示す。

まず、当書に収められている年月別の会数は、【表3-5】の通りである。

自他会記の会数については解題に「自会が十四会、他会が十六会、その他花会など記録している。」<sup>註二十八</sup>と記されているが、筆者は自会が十八会、他会は十七会、その他の会二会、全三十七会と判断した。

「自会」は、明治七年十一月十三日条「神応院にて遊ぶ けふ一瓢携て、人々と神応院にあそぶ庭の紅葉よし」は、「茶箱」を持参したのは安敦と多田雪齋の二人で、他の参会者は「からすみ」や、献立は不詳であるが「小重」を持参していた。かかることから、当会を茶会としても扱い、安敦が茶箱を持参し

ていることにより、当会を自会と判断した。その他の自会については、「此方」等の語が付されていたことから、自会と判断した。

「他会」は、明治七年五月十六日条「雪齋方にて生花の会」と同年十二月十四日条「常念寺にて五流打込生花会」を茶会に加えた。前者は茶会記に「其席二而点出二而薄茶飲ます」と記されており、後者は「雪溪茶室へ案内有て、薄茶の業有」と書かれていることから、茶会を併設していたと考えられる。

「その他の会」に分類をした会は、明治八年四月四日条「桜見」(於・神応院)と明治九年六月四日条「己斐村深山房二而歌会」の二会である。前者は桜見物、後者は歌会で、茶会の併設はなかった。

次に月次で見ると、茶会は夏季にはあまり開かれていなかったことがわかる。初夏である六月に会が開かれているのは、明治七年の他会一会と同九年のその他の会の二会を数えるのみである。歌会の開催場所は現在の広島市西部に位置する西区己斐である。

月別で開催回数をみると、明治七年十二月、明治八年二月・四月が三会で最多である。次いで明治七年四月・五月・十月、同八年一月・五月・十一月、同九年二月、同十一年一月の二会であり、夏季を除いて最低一箇月に一会は開かれていた。

次に、自会記と他会記を分けて、茶会の内容について分析を行う。

## イ、自会記

まず、自会で用いられた茶道具を見てみる。

自会で用いられた茶道具の種類を道具別にまとめて【表3-6】に示す(【表3-6-1】～【表3-6-9】)。

これらの表の中で、「控」の欄は三原市立図書館蔵『上田家文書』習俗行楽一〇一『茶具控』に記載の整理番号を表し、「御向」の欄は同館所蔵『上田家文書』習俗行楽一六六『御向 御茶湯道具類』に記載の整理番号を表している。(以下、「控」と「御向」と略称する。)

次に、各道具について検討を行う。  
はじめに、「掛物」から見てみたい。



掛物の種類と使用状況を【表3-7】に記した。

先ず、掛物の種類と使用会数を見る。

和歌は四会、消息と詩及び席画・席句は各一会、日本墨蹟零会、中国墨蹟三會、日本画は五會、中国画は五會である。

「不詳」の一会は「東涯筆」と記されている軸である。「東涯」とは儒学者である伊藤東涯のことである。

他に【表3-7】からわかることは、書院床には「花鳥二幅対 周子冕筆」が二会で使用されている以外は、この他の茶会においては全く異なる軸が使用されていたことである。

書院床で「花鳥二幅対 周子冕筆」が使用された茶会は、次の二会である。

・明治八（一八七五）年四月六日条の「花見茶会」

・明治十（一八七七）年四月五日条の「御成茶会」

前者では、安敦は茶会記に「茶附を本法にとゝのへた」と記されており、上田宗箇流の点前の中で最も重い法式の時に、この軸を用いた事が窺える。

後者は、正二位様つまり旧広島藩主浅野長勲公とその令室を招いた時の「御成茶会」である。

これらのことから推察すると、「花鳥二幅対 周子冕筆」の位置付けはあくまで重く、「書院床に掛ける軸」として定位置を占めており、威儀ある軸という扱いであった。

次に、「花生」について使用状況を見る【表3-8】。

先ず、作者別では、祖君（宗箇）が二会、と祖公と重羽公・大機君が各二会、茶人が一会、不詳が七会である。

重羽公・大機君とは上田家第四代のことであり、茶人とは武者小路千家（官休庵）家元の千宗守のことである。尚、安敦が所持していた「初春」銘の花生を作った武者小路千家（官休庵）の家元は何代目かについては不詳である。

次に素材別で見ると、竹が七会、陶器が三會、籠と金工が各二会であった。

「瀬戸」と「沙張（砂張）」は、共に明治八（一八七五）年二月二十六日条の「定日」の茶会において安敦が田村憲吉と多田雪齋に「梅一瓶つゝ生け」させた時に二人にその場で選ばせた花生である。

次に、「釜」は、「天描操口」と「山ノ釜」以外は「控」か「御向」に記録が

残されており、上田家で大切に扱われていたことが窺える。

使用会数は「桐の模様 古織添状有之」のみが二会使用されており、他は一会である。現在は、この釜と添状は根津美術館の所蔵となっている。註十九

次に、「香合」については、浅野家から拝領した「茄子香合 銘初夢」のみが『図録』にて来歴が判明するが、他は不詳である。

茶会に出てくる会数は「大槌梅」三會、青磁「浮牡丹」が二会使用されている他は、各一回ずつ使用されている。

材質で見ると、青磁が三會、陶器・木・堆朱・鮑が各二會、不詳一會である。この中で「形物香合番付」に入っている品は「青磁 柿」（前頭十四枚目）の一合であった。

次に、「茶入」については、茶入と棗を分けて分析を試みた。茶入の製造国は、和物二口、唐物と南蛮は各一口である。和物は織部と利休である。

次に、棗の使用回数は、宗哲作の黒中形と時代蒔絵が各二会で、その他は各一會であった。目を引くのは、安敦が山水軒に移るまでに住んでいた上田家上屋敷（広島城内）内の古木で作った「旧邸之古木にて 折鶴」である。（現存。写真前掲。）

次に、「茶碗」は、茶碗と替茶碗に分けて検討を行う。

先ず、茶碗の使用会数で見ると、萩焼の「銘ひろしま」が最も多い四會、次いで朝日焼が二會である。

次に、替茶碗は高原焼が二會で、その他は各一會である。

主茶碗と替茶碗の取り合わせについては、一定の法則はなかった。かかることから、安敦は、取り合わせが重複をしないように、常に注意して道具立てを考えていたと考えられる。

最後に、茶杓について見ていきたい。作者と本数で分析すると祖君（宗箇）一本、祖公一本、二代重政公（備前公）一本、小堀遠州一本、多賀左近一本、千宗且一本、不詳三本である。

「茶杓」の材質では、竹六本、象牙二本、不詳一本であった。

次に、『雅遊漫録』に記された自会記の内容について詳しく見ていきたい。最初に自会記では、安敦は自身が月釜を掛ける日「定日」を「六」がつく

日としていたことがわかる。

「定日」の文字の初見は、明治七（一八七四）年十二月十六日条である。それ以前は廿日や廿九日に「此方二而茶事」や「茶事」という言葉が見える。しかし、「定日」の初見以降の明治十一（一八七八）年四月廿六日条―つまり『雅遊漫録』の最終会である茶会記までには「けふは定日也」という言葉が付く。かかることから安敦は、明治七（一八七四）年十二月十六日から「六」が付く日を「定日」と定めたことが窺える。

「定日」に開かれた茶会は九会あるが、その内の主な茶会を紹介したい。

先ず、明治七年十二月十六日条―釜の掛おさめ―を挙げる。【史料3―3】この茶会では、客として招いている円蔵と豊次郎及び雪溪に対して予め「約」しておき（傍線）、憲吉に対してはおとつゝまり十二月十四日に安敦が憲吉に万年青を所望しており、「客」としても予め約していた。（波線）安敦が所望していた万年青は、憲吉に「直二書院の床江生さ」せている。

参会者の「円蔵」と「豊次郎」は、共に上田家茶事預師範である。

「円蔵」は野村円斎のことであり、上田宗嗣著「武将茶人上田譲翁」によると、「円斎は奥村家から入って餘休の養子となつた人で本名野村盛孝、通称円蔵。幽谷庵松園と称し、蟹廬舎とも号して和歌をよくした人」<sup>註三十一</sup>である。

「豊次郎」は「本名中村豊次郎、湯川家より入って十三代泰心の養子となり松風庵快堂と称し」<sup>註三十一</sup> 人である。

円蔵と豊次郎は、明治十一年四月五日開催の「御成茶席」と同年四月廿六日開催の「県令招き茶会」の二会を除いては、安敦が開いた全ての茶会に客として、又は勝手見合として参加している。

「憲吉」とは、他会記「明治七年五月十七日条」に「勝手見繕田村憲吉」と記されていることから「田村憲吉」であることが判明するが、職業等は不詳である。しかし、明治七（七八七四）年十二月十四日条「常念寺にて五流打込生花会」では、「会頭田村憲吉」と記されており、生花について指導的な立場であった人物ということが窺える。

この茶会では、安敦は茶席に手軽な酒肴を出し、夜が更けるまで物語をした。次に、明治九年一月十六日条―釜の掛初―を挙げる。【史料3―4】この茶会では円蔵と豊次郎が参り来て（傍線）、雪斎は二人が来た後に安敦

が呼んでいる。（二重傍線）「雪斎」は、度々茶会記に出てくる人物であるが、人物像については不詳である。

茶会では雪斎が花「水仙 黄梅 白玉」を持参しており、安敦がそれを所望している。花生は千宗守作の一重切「銘 初春」である。

軸は、維明大徳の「雪梅の図」を掛けている。

点前には丸卓を用い、水指は朝鮮芋頭、棗は旧邸―つまり上田家上屋敷和風堂の古木を用いて作られた「折鶴」（前掲写真参照）、茶杓は祖公、茶碗は宇治山城の朝日焼、替茶碗は黒楽、香合は加賀の大樋焼を使用していた。

水指の「朝鮮芋頭」は『茶具控』に記録が残っており、「イノ十八 一朝鮮芋頭 多田雪斎ヨリ到来」とあることから、多田雪斎が上田家に贈ったことがわかる。管見では、『御向』には記録は無い。

炭台には、水次は京の御室焼を、建水は高取焼を、蓋置は青磁の三つ唐子を使用していた。

全体的にみると、上田家に所縁がある道具が二品使用され、棗は「折鶴」、花生は「初春」を使用するなど、釜の掛初めに相応しい道具立てであった。

次に、明治十一年一月十六日条―釜の掛初―を挙げる。【史料3―5】

明治十一年の一月の釜掛初めの客は西村翠庵、山香忠一、伊藤春房と円蔵、豊次郎の五人であった。この日はたいそう雪が降っていたが、西村翠庵と山香忠一及び伊藤春房が訪ねてきたことを安敦は「よろこはし」と表現している。

参会者の三人―西村氏・山香氏、伊藤氏の中で職業が判明したのは伊藤氏だけであった。

伊藤春房は『廣島縣職員録』に氏名が残っていた。当職員録は「明治九年七月三十一日改」から「明治十三年七月一日改」が残っているが、伊藤春房の氏名が明記されているのは「明治九年七月三十一日改」の職員録のみである。当書によると伊藤は「廣島縣士族」で、「史生 十四等出仕」と記されており、司法に関する県の官吏であった。

茶会では、掛物は江戸時代後期の公家である千種有功卿の玉の御自画賛を掛け、花生は祖公（重羽公）作の尺八で銘は「音曲」である。寒紅梅は伊藤春房が持参して安敦に贈ったことから、安敦は伊藤氏に所望して花を生けてもらっている。

釜は「山の釜」を使用し、点前は「棚胡弓台」を用いている。茶ヒは備前公御作、つまり重羽公作の二重曲を、茶碗は朝日焼、替茶碗は高原焼を用いていた。蓋置は赤の楽焼で形は三宝、「庭焼」とある。

「庭焼」については、『図録』所収の上田宗嗣氏論文「武将茶人上田讓翁」の中の「○讓翁と茶の湯」において、安敦とのつながりについて次のような指摘がある。

十一代安世（松濤）は、上田家お庭焼を盛んに行い手造りのものも少なくありません。（中略）弘化二年（一八四五）讓翁二十五歳の時、松濤自作の庭焼 赤楽茶碗をもらい、それより八年後の嘉永六年（一八五三）九月に上箱をつくり蓋裏に「つくばねのこのもかもに陰あれど君がみかげにきすかげはなし」とあり、古今集より銘「筑波根」と名付けております。

註五二

上田家の御庭焼は安敦の父である安世が盛んに行っており、安敦が安世自作の茶碗を貰い受けたのは弘化二年であった。

山水軒については、安敦の年譜を見ると、文化四（一八〇七）年には安世が九月六日に「恭昭公（前藩主浅野重晟）を山水軒に迎え、恭昭公より自筆の絵「酈懸菊士童之図」を賜る」、文化十一（二八一四）年には「このころ、儒学者頼春水・杏坪、たびたび上田家下屋敷の山水軒に招かれる。」と記されていることから、父安世の代から山水軒は存在していたことがわかる。

しかし、「庭焼」については「山水軒」で焼かれたという記録がなく、当時は下屋敷の扱いであった山水軒に窯が存在したのかについても現時点では史料がない為に不明である。更に、安敦の時代においても庭焼用の窯が存在したのかについても不詳であり、この蓋置は誰の時代に作られたのかについては不詳である。

当茶会記で目を引くのは「菓子器」である。上田家が拝領したのは梅梢院で、これは九代浅野齊肅の生母で「藩士宮川柔輔の姉梅、後ち梅梢」註三十三のことである。

次の「料理」では、「井」の二品目に供された「赤かふら」は、西村氏が安敦に自作の和歌「是をそとおもふこころのあかかふら野ハしろ妙の雪をわけつ

つてふ」を添えて贈っている。安敦に対して、是をどうぞと思おう心と、心の赤と赤蕪の赤を掛け、白妙の野の雪を分けながら今日参りましたという歌である。安敦は「雪よりもふかきめくみのあかかふら たくひまれなるものこそまれ」と返歌し、今日の雪よりも深い恵みの赤蕪で類い稀なる物を見たと、西村氏の心遣いに対して感謝している。

料理はお正月に相応しく、素材は蛤、結び昆布、露の臺、勝栗、そして焼き穴子を出している。

円蔵と豊次郎も参会し、夜が更けるまで物語をした。

次に、明治八年四月六日条「花見茶事」を挙げる。【史料3-6】

この茶会は、安敦は自宅庭の桜木が盛りになったので花見茶事を催そうとして西村翠庵と伊藤春房及び木村里亭の三人を呼んだが、西村氏は当日に支障が出来た為に来なかった。そこで安敦が桑門雪溪を呼んだら「とく」も参り来たので、客は四人となった。

会附は「本法によりととのへた」つまり、本式の茶事を催そうとしたが、時刻の関係で「初入茶、後入、懐石」を出した。「中立」を省略したのである。

掛物は北小路祥光の和歌、香合は青磁の浮牡丹、炭取は唐物、炉縁は高台寺蒔絵を使用している。

懐石は、海鮮は鯛、白魚、鰯、大貝（大浅蛸のことカ）、鮎の子を、野菜類は芽紫蘇、蓼、筍、木の芽（山椒）、長老木、蕨を用い、旬と出始めを意識した内容となっている。

後入は重羽公作の竹一重切の花生に、木瓜と白桃の花を生けている。点前は「四方棚」を使用し、水指は備前焼の菱形、茶入は利休の銘難波、薄茶器は「キンマ」である。

茶碗は萩焼「ひろしま」、替茶碗は高原焼、茶杓は象牙を使用している。茶銘は「千代の友」、菓子「さゝれ石」、後菓子は「つくはね」と「春月」であった。

書院床には明末の画家である周子冕註三十四筆の「花鳥二幅対」を掛け、机は「堆朱」、香炉の形状は不詳だが「備前」を用いている。

会心亭の床には痴絶「布袋」、硯箱は「蒔絵」を飾っている。尚、萩焼茶碗「銘 ひろしま」は近年に新たに発見された品である。

茶道上田宗箇流公式ホームページの平成二十四年十二月二十一日付「最新情報」で紹介されているので【図3-9】に挙げる。

中村快堂筆「茶法寸方之類并銘物土器鑑定之覚」に、「萩茶碗大小、中に白薬でひろしまと有り」と書かれていることから、「銘 ひろしま」は大小の二つの茶碗が存在していたことが分かる。今回見つかったのは、上田流和風堂の事務局次長の小田聡之氏によると小だということである。<sup>註十五</sup>

尚、管見では「生誕四百五十周年記念 上田宗箇 武将茶人の世界展」(東京展 平成二十三年十二月三十日(金)～平成二十四年一月十六日(月)於松屋銀座8階イベントスクエア、広島展 平成二十四年二月十一日(土)～三月二十五日(日)於ひろしま美術館)において初出陳をされている。

さて、『雅遊漫録』の自会記で安敦は「萩茶碗 銘 ひろしま」を五会使用しているが、大・小のいずれであったのか、茶会記には寸法は書かれていないので不詳である。

次は明治十一年四月廿六日に広島権令藤井勉三氏他三名を招いた茶事である。【史料3-7】

この会記は第五代の広島縣権令(県知事)である藤井勉三(在職期間 明治八年一月二十三日～明治十三年四月六日)が、上田安敦が所持している茶器類の見物をしたいという理由により、安敦が四月二十六日に茶事を催し彼らを招いたという茶会である。

当年の四月十日から五月三日迄は第二回地方官會議開会期間であるが、藤井等はその合間を縫って参会したと考えられる。

当日の客は、藤井勉三権令の他に井上正光、山県篤蔵、林の三人である。林を除いた三人は広島縣職員で、『広島縣職員録』(明治九年七月三十一日改)によると、藤井は「山口縣士族」で「権令 従五位」、同職員録「明治十三年二月十日改」では「令 従五位」となっている。

井上正光と山県篤蔵は『広島縣職員録』「明治九年七月三十一日改」によると、共に山口縣士族で、井上は「大属」、山県は「権大属」で共に「司法」職に在った。同職員録「明治十三年二月十日改」では、井上は「一等属 衛生課長」、山県は「二等属 庶務課長」に異動となっていた。

井上は同職員録「明治十三年二月十日改」、山県は同職員録「明治十三年七

月一日改」記載「一等属 庶務課長」を最後に氏名が見えないことから、これ以降の年に退職したと考えられる。

当茶会に参会した時の三人の肩書は、藤井は「権令」、井上は「大属」、山県は「権大属」であった。

林については、『広島縣職員録』には林姓の者が数名いるが、茶会記には名前まで記されていない為、誰であるのか断定することは出来ない。

さて、当茶会は夕方の四時過ぎに藤井を含む四名が来た。

「表居間床」には、「祝筥」の明時代の書一軸物を掛け、卓は「黒塗四ツ足」、香炉は「古備前ツمامミ 麒麟」を置いている。香炉については、『茶具控』に「香炉」項「古備前」の三番目に「ツمامミ麒麟香炉」と記されている。

「中床」は全て「唐物」でまとめている。「八角大硯」、筆架は「唐金 うし」、筆は「堆朱柄」、そして唐墨である。

「違棚」には、「子昂馬之絵」の軸を「堆黒」の軸盆に置いている。

「部屋方書院床」には二幅対の「唐画山水」を掛け、花生は伊賀の「銘いのち」、花はシャカ(しゃが)である。花台は「唐桑」で、『茶具控』に「唐桑花台」の記録がある。

茶事は薄茶から始まり、掛物は「東山院様勅筆」―足利義政筆を掛け、花生は「祖君御作」宗箇作の一重切に春蘭を二本生けている。

釜は「桐の模様 古織添状有之」で、『茶具控』の「釜ノ部」の「一番」に挙げられ、「秘蔵之釜」と記されている、上田家で最も大切にされている釜である。

炉縁は「木地 駒沢理右エ門作」である。『御向』に駒沢理右エ門作で利休形の炉縁が二箱分記されているが、そのいずれかの判別は出来ない。

菜籠は「唐もの」を使用し、香合は「鮑貝 竜の彫物有之」を、灰器は「了入」作で羽箒は鶴の三ツ羽である。

点前は「袋棚」点前で、水指は「朝鮮」、棗は「時代蒔絵」、茶盃は「萩ひろしま」。替茶碗は二種あり、名物茶碗高麗の「金海」と一入「黒楽」、茶七は「多賀左近作」、建水は「伊賀」である。

道具組は、日本、朝鮮、高麗と多岐にわたる産地の品と山口県出身の参会者の顔ぶれに相応しく、且つ、嘗て政情と世情を賑わせた征韓論や旧幕時代を窺

えるような道具組であった。

菓子は「朱足打」に「谷つつじ」、干菓子は「長崎焼平鉢」に「千代結び」と「からめる松」を盛り合わせている。

料理は、藤井が持参した土産「国産 鯨のし」を安敦は早速、「赤壁図」が描かれた小井で「こます」と共に供している。「こます」とは、小鱒のことであろうか。

安敦は茶会記に、藤井からの土産品の「国分煙草」も鯨のしと同様に「国産」と書き記していた。

茶会は料理―つまり夕食だけで茶会はお開きとならず、「夜飯」を今利（伊万里）茶碗に「めし」と「松笠いか」、染付小鉢には「竹の子」と「なら漬瓜」を、「書院二而出」している。

更に、参会者が「茶好二付」の為、讓翁は数茶碗の一人赤楽で「勝手点出し」を行った。

茶を飲み乍ら「閑話」し、参会者の退出時刻は「午後十二時頃」であった。実に、八時間に亘る茶会であった。

「定日」以外の自会記は次の九会ある。

- ・ 明治 七年 一月廿九日条―此方二而茶事
- ・ 同年 十月 廿日条
- ・ 同年十一月十三日条―神応院にて遊ぶ
- ・ 明治 八年 一月 九日条―茶事
- ・ 同年 十月 廿日条―於此方
- ・ 明治 九年十一月 廿日条
- ・ 明治 十年 一月 廿日条―茶会
- ・ 同年 四月 五日条―御成茶会
- ・ 同年十一月 廿日条―茶事

明治十年四月五日に開かれ、浅野公を招いた御成茶会は別として、月日別に見ると、一月が三回、十月が二回、十一月が三回（内、一回は神応院）。日付では廿日が五回、九日と廿九日が各一回である。開催月は一定していないが、明治八年からは「廿日」に多く開かれている。

次に、筆者が重要な茶会だと考える二会を紹介する。明治十（一八七七）年

一月廿日条と同年四月五日条である。前者は茶入「上田大海」が使用されており、後者は前広島藩主浅野家の御成茶会であることがその理由である。

先ず、明治十年一月廿日条―「上田大海」使用茶会を挙げる。【史料3―8】この茶会は、茶入「唐大海」が主役である。それは、参会者が詠んだ歌の中にも窺うことが出来る。仕覆は「蜀紅錦」で、「長緒 ツカリ紫、裏地 唐綸子の白」を使用した。

茶入「唐大海」とは、上田家に今に残る「銘 上田大海」のことである。唐物の茶入で、仕覆と「四方盆 道恵作」と共に残っている。註三六【図3―10】

客は伊藤春房、桑門嶺月、多田雪斎の三名が招かれ、勝手見合は野村円蔵と中村豊次郎の上田流茶事預師範の二家が務めている。

この茶入が拝見出来た伊藤、桑門、多田の三名は、上田宗箇流の中でかなりの高弟であることが窺える。

安敦への土産に伊藤春房は枝柿一箱、多田雪斎は菓子一箱を持参している。茶会が開かれた場所は、道具付からみると、会心亭のみと考えて良いであろう。

茶道具について見ると、掛物は釜に付随する「織部公消息 但し桐釜の添文」を用い、釜は上田家秘蔵の「桐の釜」である。「上田大海」は付属の道恵作の黒四方盆に載せ、薄茶用の棗は宗哲作黒色の中形棗を使用した。

茶杓は重政公作の「二重曲」で、筒は安敦が拵えた品である。

茶碗は尾張瀬戸御庭焼、替茶碗は朝日焼と古志野、建水は備前焼を使用しており、茶入以外は全て国焼の取り合わせであった。

上田家の秘蔵道具を五つ取り揃えた道具組から見て、この茶会は格上であったことが窺える。

菓子については、「後菓子」の「松竹梅」は「従東京拝領之品」と記されている。

「拝領品」は懷石料理の「取肴」の「手附鉢」に「しやけ」（鮭）にも記されている。安敦は、『図録』の年表によると、明治八（一八七五）年に上京して旧広島藩主浅野長勳公に会っており、浅野長勳公から塩鮭を拝領したと考えられる。註三七

料理は、蕪、独活、土筆、さより、蛤、焼穴子と、春の匂と魁の品が使われ、供された。

安敦の点前は「山里棚」で行われ、後炭は野村円蔵、薄茶点前は上田家茶事預の中村豊次郎が行った。

茶会後の和歌会では、伊藤春房が「名におふ 大海といへる 茶入にて 茶をたまはりければ」と、茶入について感動を込めて詠めば、野村円蔵は「初月に 心のとけく 語あひて 大海原に出にけるかも」と、正月に心を溶かす語り合いが大海原に出るかも、と詠み、「大海原」と「大海」を掛けている。

多田雪斎は「よひかハす 友まつ風に かたらへは 言葉の花のにはいけるかな」と、友を待つ風に語る言葉の花が匂っていると詠んだ。

安敦は「かくなから 明ぬともなに いとはめや ころあひたる 夜半のまとゐは」と詠んでいる。「明けぬともなに」とは、茶会を開いた時間帯つまり朝茶の事か、来る二月に勃発しようとしている「武士の時代」の最後を表す西南戦争の事か。「心あいたる夜半のまどいは」は、心がお互いに通じ合っている―一座建立の中で、「時代の変化」における安敦自身の心の内を打ち明けたのではないかと推測する。

最後は、広島藩主浅野長勲公と夫人及び女中を招いた茶会である。上田宗嗣氏が既に『図録』所収論文「武将茶人上田讓翁」の中で紹介されている<sup>註19</sup>が、拙稿においても旧藩主との大切な一会であるので、筆者がAからE迄分類を行った茶会とは別格として紹介する。【史料3-9】

参会者について茶会記に記録された順で見ると、「正二位様」とは旧広島藩十二代藩主浅野長勲のことで、「御前様」とは上田宗嗣氏論文「武家茶人上田安敦上田讓翁」によると、浅野長勲の令室・「旧土佐藩主山内豊熙三女綱姫」<sup>註19</sup>の事である。

「御相伴 平井正太郎」は、浅野長勲と上田安敦とどのような関係であるのかについては不詳である。浅野家の「御女中」である、「おきよ」と「おらく」も招かれている。

安敦は当茶会の「御取持」を仙石典二に頼んだと記しているが、仙石典二についての詳細も不詳である。

茶道具については、掛物は「東山院様勅筆御歌」―足利義政の和歌、花生は

上田宗簡作の「竹一重切」、釜は自在釜の「山ノ文字」、羽箒は「鶴三ツ羽」を使用し、「袋棚」の点前であった。

茶碗は、銀覆輪の天目に根来朱の天目台。替茶碗は「萩広しまの文字」を使用している。

書院の掛物は周子冕の「二幅対 花鳥ノ絵」、獅子の置物は大機君一四代重羽作を取り合わせ、会心亭では伊藤東涯の掛物と、花生は桜の花を生けた白の交趾焼を使用している。

広島ゆかりの道具は替茶碗「萩ひろしま」と伊藤東涯の掛物、上田家関係は「花生」と「獅子置物」であった。近代黎明期に苦楽を共にした旧藩主に対する安敦の心が表れているようである。

浅野長勲からは「御菓子一箱 カステラ」を賜り、安敦は和歌で、嬉しい春に逢えたことで老いも若くなる心地がする と感謝を述べている。

次に書院で御膳と御酒とを出し、安敦と亀次郎は度々御杯を賜った。茶会の後は将碁となり長勲の相手は典二が、令室の相手は亀次郎が務めた。

浅野公夫妻は六時過ぎに御機嫌よく立座され、山水軒前の雁木から船で帰途に就いた。

最後に参会者の参加会数を個別に整理する。【表3-9】に所属別の参加会数を挙げる。

この中で参会数が最多の六会であったのは、上田流茶事師範預の野村円蔵と中村豊次郎が客としての参会分と、広島県吏の伊藤春房と職業不詳の多田雪斎であった。

次いで、野村円蔵と中村豊次郎が「勝手見合」として入る五会である。野村円蔵と中村豊次郎は安敦が開催する茶会には必要不可欠な人物であり、ある日は客として、またある日は勝手見合として安敦に仕えていた。

所属先では広島藩第十二代浅野長勲家内が四名、浅野長勲の相伴として茶会に参会した者が一名、上田家茶事預師範が二名、安敦の従者として茶会に参会した者が一名、旧広島藩士が三名、広島県職員四名の内、山口縣出身者が三名、広島縣出身者が一名、常念寺住職家が三名、不詳は九名である。

常念寺とは、広島市中区大手町三丁目に現存するお寺である。

女性は、浅野家女中の「おきよ」と「おらく」で、各一会であった。

次に、他会記について検討をしていきたい。

## ロ、他会記

他会記は全十七会である。全て安敦が正客として招かれており、その会数を亭主毎にまとめたものを【表3-10】に挙げる。

安敦が招かれた会数が最も多いのは多田雪斎の四会で、次いで中村豊次郎、桑門雪溪及び伊藤春房が共に二会である。尚、『雅遊謾録』の初回の記録は多田雪斎による他会記から始まっている。

茶会の開催場所については、浅野孫夫が神応院に於いて（明治七年六月十六日条）、桑門雪溪が常念寺に於いて開かれていた「打込生花会」（明治七年十二月十四日条）の二会の他は、全て亭主の自邸であった。

各人の流派については、確かな史料がない為に不詳である。しかし世並屋の三名（市郎左エ門、新八、松之助）については、「世並屋江左」の氏名が『新修 廣島市史』第四巻 文化風俗に「表流・三谷派に属するものであった。」

<sup>註四十一</sup>と記されており、安敦の他会記に記録されている世並屋市郎左エ門と新八及び松之助が世並屋江左の先祖であれば表流・三谷派の門弟を継いだ可能性もある。しかし、傍証がないので不詳である。

茶会の開催場所は、神社では「神応院」と「常念寺」の一社一寺がある。参会者の寺社関係者としては、「福王寺」と「伝福寺」の二寺がある。

安敦の存命中の明治二十年代における神応院は、廣島市小町の「趙叙院跡に移転」をしていた。

次に、茶道具について検討を行う。

使用された茶道具を道具別にまとめて【表3-11】に示す。

まず、掛物について種類別に使用会数を見ると、【表3-12】の通りである。

和歌の中には讓翁の自詠が二句あり、その他は貴頭の句である。讓翁が茶会で詠んだ歌を、後の茶会担当者が表装をして茶席に用いていたことがわかる茶会が二会ある。

作者の国別では日本が十四、中国が一つであったことから、他会においても

和物が多く用いられていたことが窺える。

次に、花生では、材質と作者別についてまとめると【表3-13】の通りである。

材質では「竹」が最も多く、籠と陶器が各二個である。

作者別では武家が二名。これは上田宗箇と小堀遠州の竹製である。茶人は表千家七代の如心斎製の竹製「船」で、その他は不詳である。

次に、釜については、浅野家所縁の品が二口ある。一つは広島藩浅野本家所蔵の「尾上」、もう一つは赤穂藩国家老の大石良雄旧蔵の「四方口尾たれ」である。「尾上」は広藤忠雄、「四方口尾たれ」は中村豊次郎の所蔵である。いずれも、流出期は不詳である。

讓翁が「誠二老き釜也」と驚いた「古浄味二所ほど銀クサヒ打」では、二カ所に銀の楔を打って補修しながら、大切に使用している茶人がいたことがわかる。

次に、香合については、製作国で見ると日本製が四合、中国製が六合である。

「形物香合番付」記載の品は零であった。

次に、茶人は瀬戸焼の二種類で、一方は「耳付」である。

次に、棗では、形状について見ると【表3-14】の通りである。

形状では中棗が最多の三会、次いで老松が二会、平棗、宝珠、雪吹、寸切が各一会であった。

目を引くのは「妙喜庵老松」で、妙喜庵とは千利休が京都・山崎に造ったとされる二畳の茶室「待庵」が存する寺のことで、その老いた松の木を使い、造られた「割蓋の茶器」<sup>註四十一</sup>である。

「春正」とは、塗師山本派の初代・春正の次郎三郎のことである。

次に、茶碗を見る。

種類別使用会数は【表3-15】の通りであり、楽焼と高麗が各五口で、国焼は二口であった。

「赤楽」は讓翁が上田家茶事預師範の中村家十三代泰心に譲った品が目を引く。他には、利休旧蔵で箱書は金森宗和の絵高麗、樂家六代左入作で十代旦入箱極書がある「黒筒茶碗」、同じく樂家三代道入（ノンコウ）枡形を九代了入が造った「ノンコウ枡形」、同家三代道入作の「黒楽 銘さゝれ石」がある。

国焼は、「松本焼」（萩市）と「大樋焼」（金沢市）である。

次に、替茶碗では、銘があるものではなく、種類別使用会数は【表3—16】の通りである。

朝鮮は「ミしま写し」の一口のみで、後は国産品である。三島の「写し」は、拙稿では国焼との数の比較の為、「朝鮮」に入れた。

国焼は仁清、朝日、唐津、藤名で、仁清は野々村仁清のことで、京焼、朝日焼は宇治市、藤名は島根の布志名焼のことであろう。

最後に、茶杓は作者別で見ると、武家二本、茶人四本、不詳二本である。しかし、「武家」の中には、讓翁が「祖君御作と申ことなれともうたかわし」と、茶杓が宗箇作とは疑わしいと疑義の眼を以て臨んだ茶会が一会あった。

次に、客組について検討を行う。亭主と客の相関を表したのが、【表3—17】である。

他会記は全十七会であり、上田安敦はその全ての茶会に参加している。従って、各亭主が行った茶会の数は上田安敦の参加会数と同じである。

この表から、安敦は多田雪斎の四会が最多で、中村豊次郎、伊藤春房及び桑門雪溪へは各二会、桑門嶺月、木村里亭、井前静、広藤忠雄、浅野孫夫、福王寺院主、世並屋一郎左衛門へは各一会の参会であった。

安敦以外では、多田雪斎の茶会に野村円蔵が四会とも招かれている。

中村豊次郎の茶会には野村円蔵が二会とも招かれており、桑門雪溪の茶会には多田雪斎、中村豊次郎及び野村円蔵が共に二会とも招かれていた。

最後に、筆者が重要（後記）だと考える茶会を二会、紹介する。一会は、広島縣官吏の伊藤春房宅に於ける明治七年十二月廿一日条、もう一会は上田家茶事預師範の一人である中村豊次郎宅に於ける初釜である。先ず、伊藤春房宅に於ける明治七年十二月廿一日条から紹介する。【史料3—10】

この茶会は広島縣官吏である伊藤春房の宅における茶会である。

客は安敦、多田雪斎、野村円蔵、中村豊次郎、田村憲吉の五人である。

初飾があり、棗は黒中、水指は備前、香合は黄南京の鴛鴦、茶碗は鶴の模様がついた大樋黒を使用している。

伊藤は茶会の後は歌会と予め決めており、それは「兼而雨来雪といふ題たされ」という文章からわかる。安敦は、「村雲のすき行まへ二風さえて やかて

ふりくる雪の初花」の歌と、伊藤の邸宅が「八千種花園」という名称があることを誰からか聞き及び、その祝いの歌も「詠草」として伊藤に贈っている。

伊藤は、秋の花園では何のもてなしも得られず、かの茶の湯か煮物で侍り、梅桜を折って焚かんと思うと詠んだ。この返歌に讓翁は、梅さくら 折てたかむとおもふなる ころの色に何をくらへんと、その心遣いの仕方何に比べることがあるうかと返している。この「梅桜」は、「平家物語」の中の「鉢木」に擬えた和歌である。

当茶会から、明治初期における広島市民の茶の湯の様子と、茶会後は歌会という進行の内容から、その教養の高さと気風を知ることが出来るので重要だと考えた。

次に上田家茶事預師範の一人、中村豊次郎宅での釜掛初めの茶会について記す。【史料3—11】

この茶会の客は安敦、伊藤春房、桑門嶺月、野村円蔵、多田雪斎の五名である。

手前については省略されているが、この日はかなりの寒さであったのである。初めは炭を「沢山」使用し、釜が煮えたぎっている様子を安敦は「おもしろし」と表現している。

道具組で目を引くのは、安敦ゆかりの品が二品使用されていることである。

赤楽茶碗と庭焼の蓋置である。赤楽茶碗は「先年」に讓翁が十五代中村豊次郎（快堂）に贈った品であるが、蓋置がいつ頃に快堂の手に渡ったのかについては不詳である。

料理の中の「さしミ」は安敦の土産である。芹と橙に季節感を想い起こさせ、アイナメと穴子に旬を感じさせる献立である。

中村豊次郎（快堂）は釜掛定日をたてて怠らず、「家の風をもおこす計のころ」と安敦は褒め、喜び、次の一首を詠んでいる。

何こともかはりゆく世にかはらぬは

たゞこのやとの松かせのおと

何事も変わりゆく世に変わらぬことは、ただこの宿（中村豊次郎宅）の茶の



湯の釜の音 という歌である。

上田家に仕える中村家は、安敦と共に政情と世情が変わりゆく時を共に歩んだ家である。今後も、中村家の釜の音は絶えないで欲しいという思いも、この歌に托したに違いない。

安敦五十九歳、中村豊次郎（快堂）四十九歳の正月の初釜であり、中村家の茶会についての一端を知ることが出来る茶会記である。

## II 「上田家茶会記録」

「上田家茶会記録」には、茶会記が次の五つに分けられて保存されている。

1 「茶会記 明治十八年ヨリ」（茶書148） 十六会

明治十八年一月三十日「正午 大森細君会」から安敦が亡くなる約三カ

月前の明治二十一年九月三十日「山水軒茶事」迄

2 「記（東山院様：）」（茶書126） 一会

3 「明治十五年二月廿三日」（茶書142） 一会

4 「茶会会附」（茶書144）「明治十六年二月十三日 茶会」の一会

5 「明治十八年五月三日茶事記」（茶書134） 一会

これらの茶会記をまとめたのが、【表3—18】である。

これらの茶会記について、先ず自他会記の別についてみると、解題（『上田家茶書集成』三百十六頁）では、1「茶会記 明治十八年ヨリ」（茶書148）は自会記四、他会記十一」と記されているが、「その他四つの茶会記」については「讓翁が茶会をする際の準備をするためのもかもしれない」と記されており、自他会記の区別はなされていない。

ただし、1「茶会記 明治十八年ヨリ」（茶書148）に道具等が記されていない「五月三日」条は、5「明治十八年五月三日茶事記」（茶書134）に詳しいので、それと置き換えて自会記とみなし、また、「十一月三日」条は、亭主が明記されていない「他会」とされているが、場所や客（特に正客）等からみて自会記とみなし、自会記六会、他会記十会として扱った。

次に、「その他四つの茶会記」の中から、残り「三つの会記」について改めて検討を行うと、次の如くである。

・2 「記（東山院様：）」（茶書126）—明治十年四月五日開催「御成茶席」の下案かもしれないが定かではない。

・3 「明治十五年二月廿三日」（茶書142）—亭主が明記されていない。

・4 「茶会会附」（茶書144）—最初に「明治十六年二月十三日茶会」と記されている。参会者名は書かれていない。しかし、「会心亭」という山水軒内の茶室の記述があり、茶道具は次に挙げる五つが讓翁所蔵の品と一致する。

花生「竹一重切祖先作」  
掛物「千種有功卿 玉の画賛」  
茶碗「萩 底二かなにてひろしまと之有」  
床掛物「雪裕 竜虎二幅対」  
香炉「古備前 布袋」

花生「竹一重切祖先作」

掛物「千種有功卿 玉の画賛」

茶碗「萩 底二かなにてひろしまと之有」

床掛物「雪裕 竜虎二幅対」

香炉「古備前 布袋」

3と4は『雅遊謾録』にも1「茶会記 明治十八年ヨリ」（茶書148）にも収録されていない。前述の「讓翁が茶会をする際の準備をするためのもかもしれない」をも考慮して、ここでは、この二会記を自会記として扱った。

「上田家茶会記録」は『雅遊謾録』と大きく異なることがある。それは、和歌の記載が少なくなることである。讓翁自詠の和歌は三会に記されているが、和歌を参会者と共に取り交わすこともなく、讓翁が茶会の感想を和歌で述べるに止まる。この理由は、下案の茶会記であったことによるのかもしれない。

次に、自会記と他会記について分けて検討を行う。

### I、自会記

自会で用いられた茶道具の種類を道具別にまとめて【表3—19】に示す（【表3—19—1】〜【表3—19—9】）。

各表の右欄に記した「1」、「3」、「4」、「5」は、それぞれ『上田家茶書集成』所収の左記の四つの茶会記、

1 「茶会記 明治十八年ヨリ」（茶書148）

3 「明治十五年二月廿三日」（茶書142）

4 「茶会会附」（茶書144）

5 「明治十八年五月三日茶事記」(茶書134)  
の整理番号を記したものである。

これらの表の中で、花入と釜の「控」の欄は三原市立図書館蔵『上田家文書』  
習俗行楽一〇一『茶具控』の整理番号を表している。

次に「上田家茶会記録」に記録がある茶会全てについて、用いられた道具の  
検討を行う。

まず、掛物については、種類別では画がのべ五会、書が三会、和歌が二会、  
消息が一会、詩が一会、不詳が一会使用されている。

使用場所については、「広間」と「待合」には周子冕の二幅対と中老子と伊  
川筆の三幅対が使用されており、この使用傾向は『雅遊謾録』と同じである。

1では、「正二位様書」―浅野長勲公の書と、祖公―四代重羽公による軸が  
用いられている。

全ての茶会において、重複して使用された軸はなかった。

釜は、「車軸 古山城 蓋古天明」を二会使用している他は、各一会であった。  
香合は、「青磁浮牡丹」一合の他は堆朱製を使用している。

花入は、宗箇由来の「伊賀生爪」を使用した茶会が一会ある。この茶会は、  
明治十八年五月三日条である。

茶入は、生産地別で見ると瀬戸が四合、織部と膳所及び備前が各一合、不詳  
が一合である。「新兵衛 銘相坂」は、中興名物の瀬戸大壺「銘 相坂」のこ  
とであろうか。利休作の「銘 難波」もあり、全て各一会ずつ使用されている。

薄茶器は、技法で見ると蒔絵が二合、塗物と糸目及び藤重が各一合、不詳が  
一合である。形状では、中次二合、不詳四合である。

茶碗は、宗箇作の「銘 さても」の使用が目を引く。明治十八年七月七日条  
の茶会である。

「萩 ひろしま」は二会使用されており、利休七種を写した「庭焼 七種写  
鉢開」は一会使用されている。

産地別では、国産八口、朝鮮産三口である。国産では萩と瀬戸が各二口、宗  
箇作「銘 さても」、朝日、古志野、摂州高原が各一口である。朝鮮産は高麗  
御所丸と半使及び金海である。

替茶碗は一入作の黒楽が二会あり、半使と金海が各一会であった。

茶杓は「先代作」(代目不詳)と「松濤君御作 櫻井竹 銘蓬萊」の二本が  
上田家関係、金森宗和作と藤村庸軒及び小堀遠州が各一本、不詳一本である。  
松濤君とは十一代安節のことである。

次に、参会者について見てみる。

まず、参会者とその参加会数は【表3―20】の通りである。

参会者の内、「大森細君」は1「茶会記 明治十八年ヨリ」(茶書148)の明治  
十八年十月廿七日条に「一今般大森敬之転任帰京ニ依而細君告別茶事 正午」  
の記述が存在することから、「大森細君」とは「大森敬之」の夫人であること  
が判明する。しかし、中村豊次郎と伝福寺の大巖禪師以外の人物については不  
詳である。

「大森敬之」については、国立公文書館デジタルアーカイブにはこの氏名が  
出てくる史料が六件あり、「東京府属大森敬之内閣属ニ転任ノ件」には大森の  
履歴が記されている。これによると、大森は弘化四年正月七日に丹波国桑田郡  
龜山大聖寺藩の出身で、旧名圭二。履歴が書かれた時の住所は「東京府京橋区  
櫻田鍛冶町七番地」で、東京府士族であった。

職歴は、「明治三年十二月 一 十津川郷文武所三等教授申付候事五條県(現  
在の奈良県五條市)」を振り出しに、兵部省(糾問司)、陸軍省(陸軍裁判所、  
東京鎮臺第一分營出張)、東京鎮臺、陸軍省(補陸軍裁判所)、陸軍裁判所(大  
坂鎮臺在勤)、陸軍省、東京府、東京地方衛生會を経て廣島縣に明治十三年六  
月二十四日に「一 任廣島縣一等属廣島縣」の辞令を受けて赴任し、明治十八  
年十一月十九日に「一 任東京府属」の辞令を受ける迄の五年半を廣島で暮ら  
している。

廣島縣職員としての大森は、「學務衛生両課長」も「虎列刺病流行之際豫防  
事務ヲ統理」、「統計部長兼務」、「庶務課長兼學務衛生課長」、「本局附職務部兼  
務」を歴任し、明治十七年十二月廿五日に「職務上特ニ勤勞候」により「手當  
金三拾七圓給與」、同十八年四月十四日に「廣島區小學區公立博篤書籍器械寄  
附」により「木盃壹個下賜」、同年十月廿四日に「職務上特ニ勤勞候」により  
「手當金七拾五圓給與」を受けている。

「履歴」の最終辞令は「明治二十年五月廿六日 一内閣會計局勤務ヲ命ス  
内閣」で終わっている。

この間、大森は『内地要覧』（日本国内の要覧・明治九年発行）をはじめ薬・衛生に関する書、民事刑法の書である『民事類聚』、戸籍に関する『官民必携戸籍大成』明治十一・十二年発行、警察と刑事の職務についての解説本である『警察主要』、『刑事類聚』（明治十二年）の全七冊を編集し、出版を行った。<sup>註四十二</sup>

「大森細君」は、最初の茶会である「明治十八年一月三十日 正午大森細君会」から始まり、同年十一月三日に山水軒で開かれた「一右細君送別茶事 正午」までの全五会に参会者として名を留めている。五会の内、二会は送別茶会で、安敦が開催した前述の送別茶事と、十月廿七日に亭主は不詳であるが「一今般大森敬之転任帰京ニ依而細君告別茶事」である。

次に、安敦が催した明治十八年十一月三日「一右細君送別茶事 正午」を紹介する。【史料3-12】

大森敬之の東京への転勤十六日前に、安敦は大森夫人の送別茶会を秋田栄三郎と浜田雨村を相伴として、半頭を中村豊次郎に任せて開いた。

掛物は和歌色紙、炉縁は時代蒔絵で釜は国師釜古天猫である。

手前は袋棚を使用して行われた。茶入は「古瀬戸 銘覚雲」で、棗は「時代蒔絵 水ニ紅葉」で季節感を感じさせる。

花入は千宗左作の竹船で、銘は「我友」である。「茶具控」の「竹花入」項で「一ノ九」に記されている道具である。いつ頃から大森夫人が譲翁と交友を結んだかについては史料がないので不詳であるが、譲翁は大森夫人を「友」として位置付けていたことが窺える。

花は、柳と黄色の小菊を生けている。

水指は「古備前手杵形」で、「茶具控」に「水指 一ノ八」に記載がある。

茶碗は「高麗御所丸」と「朝日焼」及び「古志野」が使用された。

茶杓は「松濤君御作 榎井竹」つまり、十一代安節の作、銘は蓬萊である。

「榎井竹」の由来は、『図録』六十二頁に「上田家の儒臣山口西園・西郭父子が宗箇の茶杓「敵がくれ」由来の地、泉州榎井から持ち帰った竹で作られたもの。」で、箱に山口西園（直淳）が天保十五年庚辰五月に由来を記したと書かれている。

懷石は、鮑目膳と面桶碗を用いて供されている。

菓子、伏見羊羹は秋田栄三郎が持参した。

全体的に焼物は南から古志野、古瀬戸、古備前、朝日、織部と上田家の先祖が創った品を用いていることから、西日本の国焼を主に用い、形状は向皿の富士形、水次の牛頭形から、今後の健勝を祈る道具立てだと考えられる。

女性が正客として出てくる自会記は、当会記を含めて三会有る。二会は大森夫人で、残る一会は種子と愛子。共に上田家の人々である。『雅遊謾録』では女性が出てくるのは浅野長勲を招待した茶会一会だけであるので、明治十八年頃から安敦は女性の茶道へも目を向けていたのかもしれない。

最後に、安敦の最後の茶会を紹介する。【史料3-13】

この茶会では添えに亀次郎、半頭を中村豊次郎が務め、客は中川清一郎と瀧前素大及び吉井敬二の三人であった。客の職業等については、史料が残っていないので不詳である。

初入の掛物は「祖公御作品」で、これは宗箇の作品である。

風炉は「祖公御好」、釜は古天明の車軸、菜籠は「一閑平物」。これは「茶具控」の「菜籠」の「ハノ五 一一閑平菜籠」に記載がある。

花入は「備前掛花入」。「茶具控」の「陶器」は掛瓶から始まっており、「二ノ七 一備前 同」と記載があることから、「二ノ七」が当茶会に使用されたのであろう。

茶入は新兵衛作の「銘松坂」、茶杓は小堀遠州作、茶碗は萩わり高台と高原焼である。

水次は「腰黒菓かん」で、「茶具控」の「水次」項に「ロノ七五 一不審庵形腰黒菓罐形」があるが、この品であろうか。

建水は相馬焼を、干菓子には長崎焼鉢を使用している。

懷石料理には志野織部と手付京焼鉢の二品は国焼と判明するが、染付と青磁は何処で作られたのか不詳である。

焼物を概観すると、国焼を東は相馬焼（福島市）から南は長崎焼と幅広く用い、上田家の焼物の好み幅広く分布をしていたことがわかる。

宗箇所縁の品を二品用い、安敦自身が考えた「ウツクシキ」品を取り合わせた、安敦最後の茶会であった。

## 口、他会記

次に、他会記について検討を行う。亭主と客との相関は【表3—21】の通りである。

安敦は全て正客として招かれており、次代の亀次郎の茶会は三会、中川清一郎は二会、浜田雨村、中村快堂、織村与一は各一会である。中川清一郎と中村快堂及び織村与一は上田家父子—安敦と亀次郎を招いているが、浜田雨村は安敦のみを招いていることがわかる。

女性（大森細君、貞松、利勢子）を招いたのは亀次郎と浜田雨村のみで、亀次郎は貞松と利勢子の二人、浜田雨村は大森敬之の夫人一人であった。

亀次郎が招いた女性、貞松についての続柄等については不詳であるが、利勢子は側女中である。

次に茶会記について検討を行う。他会記において道具が全て記されている茶会は「明治十九年二月十日 午後茶事」の亀次郎が亭主を務めている茶会のみである。これを【史料3—14】に挙げる。

当茶会は、亭主を亀次郎、薄茶を安敦が点て、客は中川清一郎、榎田直太郎、高野為太郎の三人である。中川清一郎の職業等については不詳であるが、榎田直太郎と高野為太郎は共に旧広島藩士である。

榎田直太郎と高野為太郎については「役人帖 原本二「辰五月改」トアリ」<sup>註四十三</sup>によると、榎田直太郎は「用達書物書」二十六石三人扶持以下、高野為太郎は「書方物書」二十石三人扶持以下。同書所収「永世禄給附」<sup>註四十四</sup>には榎田と高野共に浅野家の「御家政」の「御家従 事務係」として十二石が給されている。

しかし、明治十九年における両人の職業等については、史料がないので不詳である。

さて、「上田家茶会記録」の中で、茶会の亭主が亀次郎であるのは、これが初めての茶会である。角棚の手前で、掛物は北大路祥光画の「鞍鐙之御歌」である。

茶入は膳所耳附、棗は老松、濃茶用の茶碗は堅手、薄茶用の茶碗は大桶焼の立鶴を用いている。茶杓は藤村庸軒作の「銘 はま弓」。料理の器は永楽作の桜花形小井と古備前手付鉢を使用している。

掛物と茶杓は武家にとって大切な「鞍鐙」と「弓」を表現しており、「武家の茶」を亀次郎が意識し、自身の美意識により取り合わせたと言えよう。

当茶会を境として、同年五月三十一日条の茶会から安敦が亭主となり亀次郎を客としたり、亀次郎を亭主として安敦が客になっている茶会が三会有る。半頭は大野為次と中村豊次郎が務めており、客は利勢子が三会と最多で、亀次郎夫人や亀次郎の子供及び側女中、中村豊次郎など、いわば「上田家中」の者が占めており、内々の茶会として催されたものである。

亀次郎が亭主となった二回目明治二十年六月八日条では、道具は掛物、棗、茶碗、茶入、茶ヒ、水指の五つについて記されている。料理は「汁」と「吸物」の二つのみ記し、安敦は「此趣向上々」と料理内容を褒めている。

更に、茶会末に「おのれ即席 であらめ」と「たきりつつ 釜の音さへ長閑にて 音にこらすべし けふのまとあや」と歌を詠んでいる。安敦の亀次郎に対する嬉しげな様子がわかるようである。

最終回の明治二十一年二月廿八日条では、「茶器等相略ス、料理万端よし、（後略）」と記し、歌を一首認めている。

「上田茶会記録」の解題では、

この史料は、讓翁が茶事の内容、感想とともに、客と亭主を記していること、さらに次代の亀次郎を亭主あるいは客としたりしていることから、後継者としての養成を行っていることが窺われ、興味深い史料である。

と述べている。「上田家茶事預師範」が中村豊次郎（快堂）一人となったことから、安敦は豊次郎（快堂）と共に、次代を受け継ぐ亀次郎に家族と高弟らと共に茶会形式で稽古を付けていたのであるかと考えられる。

## （四）上田家当主としての上田安敦

上田家には「上田家茶事預師範」の野村家と中村家に上田家の茶道伝授を担う役割があったが、幕末から明治期の上田家当主であった上田安敦は、点前や相伝に如何なる役割を果たしていたのであろうか。

始めに、相伝における上田家の役割については『上田家茶書集成』所収の上田宗嗣氏論文「上田流の歴史と茶書」に次の記述がある。

中村泰心の著した「他所往来門人控」は、安政四年（一八五八）から明治二年（一八六九）に芸州以外の上田流の門弟に出した相伝免状の控と相伝免状の形式が記され、当時の上田流の相伝形態を知る上で貴重である。

この史料では、冒頭に冥加銀定の控として、茶箱箱伝・唐物点伝・盆点伝・台天目伝・盆点台天目伝・乱・真台子について、真台子以外相伝冥加銀が明記されている。個別に相伝状が出されているのと、当時の習い事の状況が推測できる。

乱飾免状の項に、「真の台子、此の両伝ハ、一子相伝の外：貴殿茶事抜群の執心懇望達主家へ」と乱飾の伝と真台子の両伝は主家（上田家）へ届け出ると記している。皆伝（真の台子）免状副書には、「：其後茶道の儀は、家臣中村、野村両家へ被伝、師範代久敷請給候聞：」、「奥儀ニ至り候節は、前以手元へ被相届候上、主家へ申達免状可差進候間、当人誓詞相調可被差越候：」とあり、家臣中村・野村両家が師範代として年久しく請給ってきたこと、真の台子は主家（上田家）へ届け出、当人から誓詞を師範代（茶事預り）へ差し出すこと、免状は茶事預りが出している。又、真の台子の免状には、「右は古田織部正重勝君、流祖宗箇え秘事相伝の奥旨候得ハ：」、「系譜え書記置候儀ニ候得ハ：」とあり、流祖宗箇が古田織部より秘事相伝したものを相伝させるとあり、真の台子に至つて織部の茶の湯系統であることを明記し、主家（上田家）に届出、系譜に記載すると述べている。

一般に、武家茶道と家元制度の関係については、今一つ不明とされることが多いが、乱飾と真台子は、主家（上田家）に届け出ること、免状は茶事預が発行することが明記してあり、武家茶道として伝承形態が確立しているのが判明し、貴重である。

「宗箇様御聞書」に「宗ヶ様ニも織部殿より伝を受けられ」とある様に、宗箇以来連綿として上田家の源流は、織部であることを真台子の免状で明記している。註四十五

つまり、上田家が「主家」として免状を発行する場合は、「乱飾」と「真台

子」の時に門人本人が上田家に届出、師範代に本人が「誓詞」を差し出すことを規定しており、免状は上田家茶事預師範が発行することになっていた。「真台子」の免状では、門人が初めて上田流の茶の湯は古田織部の系統であることを知らされるのである。

次に、「他所往来門人扣」に記されている「台天目免状」、「盆点台天目免状」、「乱飾免状」、「真之台子免状」と「皆伝添書案紙」の雛形の紹介を行う。【史料3-15-1】註四十六

これらを検討すると、門人が修行後に与えられた免状により弟子を取つても良い点前は「盆点台天目」からである。

「乱飾」が許されると、「一子相伝の外、難授秘事ニ候」。つまり、この点前は、「一子相伝の秘事」であることがわかる。更に続く。「貴殿茶事抜群之執心懇望達主家へ、今盤秘事令相伝之上ハ、堅他言他見有之間敷、尤門人抜群之輩、授与之節前以手元へ被相届候」―貴殿は茶事に抜群の執心で主家へ懇望を達し、今般秘事を相伝の上は堅く他言他見を有るまじく、尤も門人に抜群の輩の授与の節は、手元、つまり上田家茶事預師範に相届けられることと書かれている。この相伝方法については「真台子」まで続く。

つまり、門人が弟子を取り、その弟子が免状取得という時には、弟子が「乱飾」からの免許発行権は上田流茶事預師範に移り、「真台子」になると「誓詞」を上田流茶事預師範に提出し、「系譜」に名を連ねることができるといふシステムである。

次に相伝内容について検討を行う。

幕末から明治期にかけての上田家当主としての安敦は、免状の認証を行う他に、「後世に伝えるべく代々の道具類を整理、書付し、宗箇や二代重政の茶杓に追筒を造つたりしています。今日比較的江戸期の茶道具が上田家で正確に伝承されているのは譲翁あればこそです。」註四十七と言わしめる存在であった。

相伝内容との関連については、次の指摘がある。

## 「一、上田家歴代と茶事預師範」項

若くして茶の湯に熱心であった安敦は、家督を継ぐ十一年前二十六才の時弘化二年（一八四五）中村泰心より台子の皆伝を受けている。この時代

伝の形態を含め稽古順次が整備され、今日の姿にほぼ整えられるが、これは中村泰心の力による所が多い。註四十七

### 「三、上田家の茶書」項

〔江戸時代後期―流儀の拡大と和風堂〕内

芸州以外の門弟の状況は、中村泰心が著した「他所往来門人控」でわかる。安政四（一八五七）五月から明治二年の門人控で、関西、岡山、島根、山口、愛媛等に門人が拡がっている（二部他の資料による）。（中略）

この時代の茶事稽古順次より鎖の間と道幸がなくなっている。一般の武士と町衆等には鎖の間や道幸は必要なく、茶事稽古順次より抹消したのであろう。一方上田家では、江戸初期より鎖の間と次の間の道幸があり、明治初期広島城内上屋敷を退去するまで、上屋敷内和風堂での茶事作法は受け継がれる。

主客の心得を記した「二―6賓主録」は、当時の和風堂での茶事の詳細を述べており、標題の下に上田家十二代安敦の雅号「春舎」の朱印が見られるので、安敦の蔵書であることが分かる。鎖の間のこと、脇差の扱いや御成のこと等が記されており、茶事預から茶事を安敦が伝授され、その内容を家臣が著したものに印を押したと考えられる。

江戸後期文化・文政・天保年間流儀として拡大する中で、上田流は、一般向けの茶事稽古順次と宗箇以来の和風堂内での茶事作法の両面を茶事預は受け持つことになる。註四十八

安敦は二十六歳の時に茶事預である中村泰心から弘化二年に台子の皆伝を受けた。この時代には伝の形態を含めた稽古順次が整備され、今日の姿にほぼ整えられ、これは中村泰心の力による所が多いと述べている。かかることから、安敦は泰心が作成した相伝方法と門人への稽古順次をも学んでいたのではないかと推察する。

上田流茶道に関する書は、中村家七代の快堂も遺している。『茶法寸芳之類并銘物土器鑑定之覚』である。（前掲写真）

天保十年から、一般の武士や町人用の稽古順次の中から「鎖の間」と「道幸」

が抹消されたが、上田家では譲翁が上屋敷の和風堂を去るまで、「鎖の間」と「道幸」が稽古の中に含まれていた。

かかることにより、安敦の時代から相伝方法は二種類が存在したことが窺える。上田家内と一般武士・町衆用である。

上田家内には「藩主御成」の為に、邸宅である「和風堂」の造り方があり、その為の「点前方法・作法」が存在し、歴代当主はそれを修得していた。

「家元制度」について、西山松之助氏は『藝道と伝統』の中で、「完全相伝」について次のように述べている。

師匠についてその蘊奥をきわめたものは、その師匠から直接に免許皆伝の印可証明を与えられる。そうするとその印可証明を与えられた人は、自分について茶技を習得し蘊奥をきわめた弟子に対し、自分で免許皆伝の印可証明を与えることができる。それが弟子から弟子へと順々に踏襲されていった。

すなわち茶の技すべてと、相伝する権利とを、言い替えれば、すべてを伝授したのである。わたしはこのような被伝の相伝形式を完全相伝と呼んでいる（後略）註四十九

上田家の免状を見てみると、「被伝」も一般武士や町人にも開放しており、免状発行権は「乱飾」から上田流茶事預師範に移り、「真台子」と共に主家である上田家へ届出ることとなっている。

この面において、上田家の相伝方法は西山氏が称える「完全相伝」とは異なっている。更には、上田流茶事預師範が、門人が弟子を取っても良い段階に入り、その門人の弟子が「乱飾」以上の段階に入り免状を取得することになれば、上田流茶事預師範が門人の弟子の免状取得において門人の仲介者という役割を果たしていた。

西山氏は同書の「茶道における家元制度」の中で、「大名茶と家元制度の茶」について、「茶道文化社会の基礎構造に関する本質的な相違」註五十とみると「大名茶はすべて完全相伝形式である」註五十一と指摘を行っている。しかし、上田家の場合は「上田流茶事預師範」がその役割を果たしており、西山氏が称えた完

全相伝と異なる相伝方法であった。

幕末から明治期において、安敦は上田家当主として、上田流茶事預師範である野村家と中村家と共に流祖である宗箇以来の茶道具と茶書及び稽古順次の整理を行い、「真台子」の免状取得者を系譜に載せる役割を果たし、次代を背負う亀次郎の養成を行うなど、現在の「茶道上田宗箇流」の基礎を築いた人物でもあった。

現在は、上田流和風堂には「師範代」が二名おり、家元に代わって海外と日本国内にある茶道上田宗箇流の教室に赴き、門人達の指導を行っている。註五十二

## 小括

上田宗箇流茶道は、浅野家本家が広島藩に入部をした時代から、広島の地に根付いた。

第一節では、上田家第十二代当主であった安敦（讓翁）が明治四（一八七一）年に致仕して剃髪し、上田家下屋敷の山水軒に移ったということから、「山水軒」の場所について検討を試みた。江戸時代に「山水軒」のあった「上田家下屋敷」は、江戸・明治・大正・昭和に亘り「万（萬）春園」、「鈴木別荘」と名称が変わり、現在は住宅街となっていた。

第二節では、安敦の茶の湯について検討を行った。

上田家は藩の国老という要職にあった為、「宗箇の茶の湯」を正確に伝えていく為に「上田家茶事預師範」という制度があり、野村家と中村家の二家が守り伝えていた。

安敦が開いた茶会の道具立てについては、『雅遊謾録』と「上田茶会記録」を総じて検討すると、流祖である上田宗箇や四代重羽及び十一代安節（松濤）等が宗箇以来の邸である和風堂の古木を用いた自作の茶道具を盛んに取り合わせ、安敦自身の美意識による茶道上田宗箇流を嗜んでいたことがわかった。これは、高橋箒庵が「安田翁が明治五年から同十三年に買い入れたる骨董は約三十點計あるが、總て文人物計り」註五十三と指摘した「文人物流行」とは異なる茶道が行われていたことがわかる。茶の湯における文人物流行は東京がその舞台

であり、地方（広島）にはあまり伝播していなかったのではないかと考える。

安敦の茶会は、六が付く日を「釜掛定日」としていた時期もあったが、桜花が咲く頃や紅葉狩など、季節の楽しみに応じて開かれていた茶会もあった。自会の参会者には、上田流茶事預師範である野村家と中村家の当主を中心として、讓翁が師と仰いで教えを請うた旧広島藩士や、広島市内に在した寺院の住職及び広島縣官吏がいた。

安敦の茶会記の中で最大の催事は、旧広島藩主浅野長勲とその夫人及び女中を招いた「御成茶会」と広島権令を招いた二会であろう。長勲とは西南戦争中に、広島縣権令とは西南戦争後に茶会を開いていた。広島権令の場合は、上田家所蔵の茶器拝見がその事由であった。

他会記は全て安敦が正客として招かれており、亭主の身分は上田流茶事預師範の野村・中村両家や旧広島藩士、商人と幅広い交友が存在したことが窺えた。

茶会記の『雅遊謾録』には、自詠の和歌や参会者と共に詠んだ歌が記されている他に、安敦自身の感想も述べられていた。

「上田家茶会記録」には自詠の和歌が三会分記されているのみで、参会者の興趣の変化が窺えた。更に、当記録は次代の上田家当主となる亀次郎自身の茶会も含まれており、安敦が亀次郎を上田家中の人々と共に「後継者」としての教育を行っていた記録でもあったことが窺える。

かかることにより、上田安敦は幕末から明治という社会的に混乱を極めた時代にあつて、政務の傍ら茶道上田宗箇流の当主として、自らの茶の湯をきわめ、上田家当主の後継者を育てていた。

#### 第四章 「古器旧物保存方」と博物館創設と茶道

明治維新は、わが国に西洋文明をもたらした。それは、「富国強兵」「殖産興業」を旗印とし、衣・食・住の変化、時間の觀念、新しい思想形成等に影響を与えた。

近代黎明期には、神仏分離令による廃仏毀釈が行われ、旧幕時代からの伝統文化に対して厭世觀が存在していた時にも関わらず、茶道では、いままでみてきたように大坂町人で青木遠州流茶道の家元であった大庭屋平井家、旧広島藩国老で上田宗箇流茶道の上田安敦及び伊勢松坂町人・本居信郷が残した茶会記によると、幕末維新期の混乱期においても彼らは釜を掛けていた。

その時期に、茶道が脈々と受け継がれた背景（環境作り）として我が国初の文化財保存法である「古器旧物保存方」と公布後の政府の動き、そして博物館（現在、東京国立博物館）と日本各地で「博覧会」が開催されたことを看過することは出来ないと考ええる。そこで、そのような背景が黎明期の茶道にどのように影響を及ぼしたのかについて、次に検討をしていきたい。

先ず、太政官が明治四年（一八七二）五月二十三日に布告した「古器旧物保存方」をみる。その布告を【史料4-1】<sup>註</sup>に挙げる。その内容は、次の通りである。

古器旧物の類は、古今の時勢の変遷、制度、風俗の沿革の考証を行う上で、その益が少なからずある。自然に旧い物を嫌い、新しい物を競う流弊から、おいおい遺失・損壊に及んでは、実に惜しむべく事であるので、各地方に於いて歴代藏貯をしている古器旧物は、別紙の通り、品目並びに所藏人の人名を詳しく記載し、その官庁に差し出すべき事。というものである。布告の末には、「右品物は、神代から近世に至るまで、和製、舶来に関わらず」と記されている。別紙には、古器旧物を三十一の「部」に分けており、茶道具関係は二十七番目に出てくる。ここには「風炉 釜 茶碗等ノ茶器」と具体的な茶道具名が記されている。

また、茶道具としても用いられる道具類として考えられる物には破線を付したものがあり、単なる「古器旧物」扱いではなく、日本古来の伝統あるものの技術とその品そのものを「保存」する意図があったことがわかる。

そこで、このような「布告」が出されるに至った経緯を見てみる。

当布告公布に先立つ四月二十九日には、大学（現在の文部科学省）が弁官宛に【史料4-2】<sup>註</sup>の伺を出している。この伺は、九段坂上の兵部省並びに今度東京府から大学南校が受け取った三番薬園に於いて、別冊の仕組をもって博覧会を開催したく、最も兵部省へは談判済みであるので、この段を伺いたい。という内容である。この伺いに対し、明治四年二月二十九日には「可為伺之事」との裁可が出ている。文中に「博覧会」という言葉が出てくるが、これは、現在の「独立行政法人国立文化財機構 東京国立博物館」の草創期前のできごとを指す。

さて、二月二十九日に裁可が下りた「大学伺」であったが、何らかの事情があったのか不詳であるが、同年四月三日に大学南校から弁官宛に「上申」書【史料4-3】<sup>註</sup>が出ています。当上申には、「先頃に申上伺済に相成った博覧会に付、条書の第三条を増補したく、別紙を添える。追って御達しの切手雛形の写しを差し出します」と記されている。注目すべきは、次に記されている「博覧会大旨」である。

博覧会の主意は、「宇内の産物を一場に蒐集してその名称を正し、有用なるもの、あるいは博識の資となし、あるいは証徴の用に供し、人にその知見を拡充させ、寡聞固陋の弊を除こうとすることにある」ということである。つまり、「古器旧物」を「固陋の物」との扱かわれ方を取り除こうとしたのである。

そして、「博覧会は、今後毎年一回会期を定め、日月を重ねて宇内の珍品奇物を網羅し、人により遠く万里に遊ぶものを用いず、座して全地球上の万物を縦覧できるように期待する」の言葉で締められている。

ここに至るには、博物館をわが国にも作ろうという先人たちの努力があった。『東京国立博物館百年史』には、次のように記されている。

博物館が創設されるに至った直接の動機の一つとして古器旧物の保存の動きを挙げなければならない。古くから古社寺の宝蔵庫あるいは皇室・公卿・將軍・大名・富豪その他による古美術品等の収集が保存の施設としての役割を果たしてきたし、それらの一部には閉鎖的であったとはいえ公開を行ったものもあり、社寺の絵馬堂などともに、博物館的なものの萌芽



をここに見る人々もある。それはともかくとしてこれら社寺その他の宝物什器が維新に際して旧物破壊あるいは廃仏毀釈の名の下に、さらには経済上の変動等のために散逸するという重大な危機に直面するに至った。これに対してその保存の急務であることが叫ばれるに至り、古器旧物を保存している外国の博物館の存在を背景として博物館設置の原動力になったのである。<sup>註五</sup>

博物館創設としての「古器旧物の保存の動き」であつたが、茶道史の視点から見ると、茶道具も「古器旧物保存方」においては「古器旧物」という区分であるが、当時の文部省内では古器旧物を固陋とは見做さず、国民に対しても同様の扱われ方を否定するという事実があつたがゆえに、大切に扱われてきたと考へる。

では、大学南校に始まる我が国における博覧会に於いてはどのような物品が展示されたのであろうか。

次の【表 博覧会出品数】は、明治四年に開かれた大学南校物産会に始まる博覧会から明治九年（一八七六）に開かれた博覧会の出品物の中から茶道具のみを抜粋したものである。（明治四年大学南校物産会）は、茶道具・煎茶道具の記載がない為、「陶器之部」と「古物之部」を記載した。<sup>註六</sup>尚、これらの博覧会の会期・開催場所を【表 4-1】に挙げる。

以上のことから、地域別に差はあるが、「古器旧物保存方」の布告以降は博覧会ブームも手伝い、茶道具・煎茶道具の展観と保存が行われたのではないかと考へる。

明治初期の博覧会について國雄行氏は、著書『博覧会の時代 明治政府の博覧会政策』（平成十七年五月 岩田書店）の中で、

日本における博覧会の嚆矢は、一八七一年一月二日から一ヶ月間開催された京都博覧会である。この博覧会は、東京遷都後の京都の沈滞した空気を盛り返そうとして開かれ、入場者は一万二二一人も集まり、盛況であつたが骨董品の博覧会の域を脱していなかつた。<sup>註七</sup>

と述べ、第一回の京都博覧会をわが国における博覧会の嚆矢と位置付け、その内容は「骨董品の」であつたと指摘した。

次に、「古器旧物」を博物館展示の視点から見る。現在、東京国立博物館本館第四室は「茶の美術」であるが、その淵源を辿っていくと「大学献言」に行きあたる。それは大学が明治四年（一八七一）四月二十五日に太政官弁官に対して行ったものである。<sup>註八</sup>【史料 4-2】<sup>註六</sup>そこには、「殊に近來世上において歐洲の情実に悉く知らない輩がかの国の新開化の風をもつていたずらに新奇發明の物は耳に貴重と誤伝し、ひたすらに厭旧尚新の弊風を生じ、経歳累世の古器旧物は敗壞し顧みられず既に毀滅に及ぶことにより、考古の徵拠ともなるべく物も逐日消失してしまふことは実に惜しい。西洋各国には集古館を設けており、古今時勢の沿革は勿論、往昔の制度・文物を考証することは要務である。大学においても必要の要件であるので、何卒右等の物品を遺失しないよう致したく、集古館を御建設すること。府藩県へ御布告し、歴世相伝しなればならない宝物は勿論、自余の雑品にあつても考古の徵証にできる品物は精々保護をしなればならないことを御沙汰これあり。」と記されている。

この献言は前述した「古器旧物保存方」と双壁を成すものであり、「茶器」<sup>註九</sup>は茶道具に目を向けた文部官僚がいたからこそ、茶道具は保護の対象になりえたのである。

「古器旧物保存運動」について、國雄行氏は『博覧会の時代 明治政府の博覧会政策』の中で次のように述べている。

一八七一年頃になると、「厭旧競新」の風潮を見直す動きが起り、古器旧物保存運動が展開されていった。文部省における運動の中心人物は町田久成であり、彼は博覧会の中心人物であつた。文部省の展覧会展示物に古器旧物が多かったのは、近世の見世物の名残もあつたと思われるが、町田たちが博覧会を保存運動の一環として利用したのではないかと推察される。すなわち、文部省の博覧会は単なる見世物ではなく、入場者たちに知見を広めさせ、古器旧物保全の意識を植え付ける会でもあつた。<sup>註十</sup>

明治四年頃には厭旧競新の風潮を見直す動きが起り、古器旧物保存運動が

【表 博覧会出品数】

	名 称	明治 年	茶 道具	煎茶 道具	売 品		不詳	合計
					茶 道具	煎茶 道具		
1	大学南校物産会	4	0	0	0	0	111	111
2	京都博覧会	4	8	1	0	0	0	9
3	文部省博覧会	5	4	0	0	0	0	4
4	第1回京都博覧会	5	46	4	0	0	0	50
5	和歌山博覧会	5	6	0	0	0	0	6
6	巖島博覧会	5	0	0	0	0	0	0
7	徳島旧城展覧会	5	0	0	0	0	2	2
8	金沢展覧会	5	15	0	0	0	0	15
9	第2回京都博覧会	6	5	0	0	0	0	5
10	伊勢山田博覧会	6	43	3	0	0	0	46
11	太宰府博覧会	6	5	0	0	0	0	5
12	金刀比羅宮博覧会	6	4	2	0	0	0	6
13	東京山下門内博物館博覧会	6	0	0	0	0	0	0
14	伊勢山田博覧会	7	34	0	0	0	0	34
15	第3回京都博覧会	7	10	5	21	0	0	36
16	東京山下門内博物館博覧会	7	0	0	0	0	0	0
17	飯田博覧会	7	7	2	0	0	0	9
18	松本博覧会	7	5	0	0	0	0	5
19	聖堂書画大展観	7	0	0	0	0	0	0
20	名古屋博覧会	7	38	3	0	0	6	47

21	伊賀上野博覧会	7	32	13	0	0	0	45
22	高島博覧会	7	2	0	0	0	0	2
23	新潟博覧会	7	21	20	0	0	7	48
24	金沢博覧会	7	4	2	0	0	0	6
25	大町博覧会	7	0	0	0	0	1	1
26	高遠博覧会	7	14	0	0	0	2	16
27	木曾福島博覧会	7	2	0	0	0	0	2
28	太宰府博覧会	7	2	0	0	0	0	2
29	東京・吉原博覧会	8	0	0	0	0	0	0
30	第4回京都博覧会	8	25	0	0	0	0	25
31	熊本博覧会	8	6	0	0	0	0	6
32	第1回奈良博覧会	8	18	1	0	0	0	19
33	京都・本願寺集覧会	8	0	0	0	0	0	0
34	長野博覧会	8	1	0	0	0	0	1
35	飯田博覧会	8	6	0	0	0	0	6
36	大分展覧会	8	12	1	0	0	0	13
37	大阪博物場大会	8	16	9	0	0	0	25
38	第2回奈良博覧会	9	38	0	0	0	0	38
39	第5回京都博覧会	9	7	0	0	0	0	7
40	長野博覧会	9	0	0	0	0	0	0
41	彦根城博覧会	9	0	21	0	0	0	21
42	富山博覧会	9	10	0	0	0	0	10
合 計			184	54	0	0	10	248

東京文化財研究所編『明治期府県博覧会出品目録 明治4年～9年』  
平成十六年五月三十日 中央公論美術出版 から筆者作成

展開されていき、文部省における中心人物は町田久成であったと記されている。文部省による博覧会は、町田久成らが博覧会を保存運動の一環として利用したのではないかと國氏は推察を行った。

「博覧会」はその後、各地域で開催されていった。「茶道具」は保存すべき物として出品され、また、来場者に対しては、その意識を培われていった教育展示であったと考える。

町田久成らによる博物館構想は、「明治五年三月から開かれた博覧会が終わろうとする四月二十八日、博物館がかねて伺っていた「博物館博物園博物館書籍館建設之案」という伺が文部卿大木喬任の決裁を了した。」<sup>註九</sup>ことにより、「観点の中心が開化・勸業にあるが、ともかくこれを組み入れる構想を取り、総合的な博物館の形態を示している」<sup>註九</sup>博物館が創設された。

次に、博物館が列品分類を行った「人造物」について、「常備品略区別」の分類表を【表4-4】に挙げる。それを見ると、「茶器香具花器之部」は、開設当初から存在していた事がわかる。

依田徹氏は美術史の視点から、『近代の「美術」と茶の湯 言葉と人とモノ』（平成十五年六月二十五日 思文閣出版）の中の「第二章 文化財指定と茶道具―「美術」と趣味世界の境界―」において、「茶道具の美術作品としての評価を考えるために、文化財制度について見てみたい。」<sup>註十</sup>と述べ、次のように指摘を行った。

明治三〇年（一八九七）の「古社寺保存法」の段階で、国宝は「社寺ノ建造物及宝物類ニシテ特ニ歴史ノ証徴又ハ美術ノ模範トナルヘキモノ」と規定されており、「美術」という視点も重要な判断材料であった。この意味において文化財指定は、国家による美術作品への評価を示すものといえる。<sup>註十</sup>

依田氏は、「古社寺保存法」の段階で「美術品」、「国宝」という視点も重要な判断材料であり、国家による美術作品の評価を示すものといえる」と述べた。

しかし、この先駆けとなった「古器旧物保存方」は、「古器旧物」にたいして「美術品」という概念はなかったが、「古社寺保存法」の法律としての先駆

であったことは明白な事実<sup>註十一</sup>である。建造物に例えれば「古器旧物保存方」は礎石にあたり、「古社寺保存法」は基礎部分に当たる法律といえる。

「古器旧物保存方」が存在したからこそ、古社寺保存法へと発展し、今日の文化財保護法があるのである。さればこそ、「国宝以外」となった茶道具にも目を向けさせたのである。

更に、「古器旧物保存方」に先駆けて太政官に出された「博覧会の主意」には、「古器旧物」を「固陋の物」との扱われ方を取り除こうとし、全国的な博覧会の流行に至っている。

本邦における博物館の草創期は、「古器旧物保存方」とこれを献言し、明治四年（一八七一）文部省に博物館が設置され、翌五年に東京の湯島聖堂の大成殿を文部省博物館として博覧会を開催したことが博物館のはじまりである。このとき、古物部門を担当した文部大丞町田久成、物産部門は田中芳雄であり、この二人はわが国の草創期博物館の推進者となった。

現在、国立東京博物館庭園内に茶室「六窓庵」があるが、当茶室が奈良から博物館内に移築を行った局長は町田久成その人である。六窓庵が博物館に移設された経緯が記されている伺と「六窓庵茶室ノ記」が残されているので、それを【史料4-5】に挙げておく。<sup>註十二</sup>

「伺」は、博物館が内閣博覧会事務局へ六窓庵の由緒と履歴を記した文書を出すという「通牒案」である。ここで重要なのは、略説を編輯したところ、六窓庵が高評価だということ伺っている事と、「六窓庵茶室之記」の中においては六窓庵は大和国奈良興福寺元領内に存在し、既に頽廢に及ぼうとする時に博物館長町田久成が、有名な茶室の叢裡を空しく腐朽することをいたみ上陳したという二点である。

当時、博物館局長であった町田久成が、六窓庵を局内に残しておこうとした文書であり、当文書が提出されなければ、六窓庵が今に残らなかつたのである。

次に、六窓庵に関する文書を【史料4-6】<sup>註十三</sup>に挙げる。この伺は、これまでは保存の為に一ヶ月に三度開き、湿気払いとして炉に火を入れ草取りや掃除をしていたが、当分の間は毎月二度にし、坂昌員という者が茶屋の心得があるので、一日二十五銭を以て雇い、古筆了仲の手伝いの為に出勤致せば、六窓庵の保存の都合も良く、掃除も行き届きべく申す儀と存じるので、此段を伺い

たいという文書で、局長決裁である。局長は町田久成である。

町田久成と野村素介は見学者がいる時に六窓庵の開庵をしていたのかは当伺を見る限り不詳であるが、社会教育施設の中で茶室併設を行ったのは、博物館が管見では初めてである。

更に、本居信郷著『会席附』に収録された、明治十八年十一月二十二日に催された博物館茶会は、茶会そのものが文化財だということを世間に知らしめたと考える。

以上の事から、従来は町田久成については茶道史上では評価をされてこなかったが、茶道具を保存対象とした事と茶室に価値を見いだした点において、古器と茶道を分離して保存を考えていなかった体現者として町田を茶道史の視点から評価して良い人物であると考ええる。

本居信郷著『会席附』に収録されていた、六窓庵における茶会記を次に挙げる。

○明治十八（一八八五）年十一月廿二日

十八年十一月廿二日正午於 主 博物館長

六窓庵二茶之湯 従四位 野村素介

客 三條相国殿

参議

山田頭義殿 頭

正四位

室戸□ 殿

従四位

渡辺驥 殿

御詰 野村素介

床 後水尾天皇大字横物 思無邪

釜 道仁作四方

炭斗 唐物竹組時代

香合 鎌倉時代長角菊蒔絵

灰器 今戸ヤキ新

御中立

花入 金森宗和竹一重切銘官女

花藤紅之梅二こひ廿桜

水指 宗和好紅タメ塗手桶

茶入 古瀬戸耳付大海 袋三雲屋トンス

茶碗 鬼熊川

茶杓 利休長茶杓片桐名州 同文祿

建水 南蛮 砂張合子

蓋置 真竹

懐石

今利金襴手

向 向 すす笹作り □□□

水仙寺 汁 ゆり

かけん酢 若さけ 焼物 きん子

わさび ウマ煮

椀 鯛片身 吸物 園中 八寸からすみ

野 柚 つくし 辺中銀杏

蕪

菓 御子 橋餅 御茶 雲井ノ白 長井詰

薄茶同席

替茶碗 玳瑁盞天目

干菓子 紅白菊ト紅葉ウチモノ

右者二との外美事二付 畧池入口張候 局長代理

古筆了仲

点茶

当会記は、博物館（現在、東京国立博物館）内の六窓庵に於いて開かれた茶会である。博物館長の野村素介が濃茶席と懐石の亭主を務め、客は三條相國と参議の山田頭義及び室戸識、大審院院長從四位の渡辺驥が、薄茶席は古筆了仲が亭主を務め、客は先述の三條・山田・室戸・渡辺の四氏に局長の野村が御話であった。

茶会の道具立ては、鎌倉時代の品と宗和好みの品が数多く見られる。

博物館の設立に当たっては、現在の文化財保護法の前法である「古器古物保存方」が大きな影響を与えたと考える。当法では、文明開化の明治期にあつて「旧陋」とされた旧幕府時代の物品や発掘物等の保存を求めているのである。そのような所謂「時代物・旧幕物」を使用しての茶会開催は、急激な欧米化に走っていた時代にあつて、衆目を集めたことと思われる。

また、このような茶会が博物館内で開かれることは、「茶の湯」の国家の公認と見做しても良いと考える。更には、「博物館内での茶会」は、現在、全国の社会教育施設、わけでも博物館や美術館における各種の「茶会」であり、注目すべき茶会である。読売新聞によると、件の茶会についての報道が明治十八（一八八五）年十一月二十五日条に掲載されており、参会者と茶道具を知ることが出来る。茶道具は「總て博物館の品を以て組合せしものにて茶事ハ古筆了仲佐藤榮仲の両氏が担当」したとある。

更に、読売新聞によると「博物館内での茶会」の嚆矢は管見では、明治十八年三月二十八日に「山科、小松、北品川の三宮」を招いたものである。

かかることから、博物館内六窓庵に於ける茶会は、宮家をはじめ国家吏員を招いていた事実とマスコミに掲載された国家的な行事とみてよく、些か過言ではあるが、明治政府が当茶会を世の中に知らしめたことは茶道の保存を意図していたのではないかと考える。

次に、「博覧会」の政治的な位置付けについては、椎名仙卓が著書『日本博

物館成立史 博覧会から博物館へ』（平成十七年六月二十日 雄山閣）の中で次のように述べている。

明治の新時代になって、新政府は「富国強兵」（民族の独立）を達成するために「文明開化」（文明の欧米化）と「殖産興業」（産業の近代化）を急速に推進しなければならなかった。その過程の中で殖産興業をめざす一手段として「展覧会」の開催が考えられるに至った。当時、文明開化の七つ道具に「新聞」「郵便」「ガス灯」「蒸気船」「写真絵」「軽気球」それに「博覧会」が加わり流行語になっていて、博覧会が意識されているのである。註十四

新政府による、「文明開化」政策の「七つ道具」の一つであった「博覧会」。これは、時代の先端を行く物品だけではなく、旧来の物を見直す機会でもあったのである。

更に、ウィーン万国博覧会へわが国が出席を行ったことは、わが国の「伝統工芸品」や伝統文化の諸相が海外における「ジャポニズム」の流行に乗る形になった。

博覧会は実物を見、見聞を広め、出品物が殖産に役立つ物としての認識が出来る存在であった。その中には、「古器旧物」もあり、国民は「国産」の価値を改めて認識し、守るべき技術と「物」をガラス越しで見ることとで教養をつけていったのである。それは茶道具も同じことであり、世の中が激動時期であっても「恒常性」を持つているからこそ、今に伝えられているのである。

「文明開化」を考えるときに、西欧化と共にあらわれた「紳士」も重要なキーワードである。

神野由紀氏は著書『百貨店で（趣味）を買う 大衆消費文化の近代』の中で熊倉功夫氏の著書『近代茶道史の研究』を引き、「熊倉が指摘するのが、近代における茶道の大衆化である。教養をもった狭いコミュニティの中で成立していた茶道は、維新後に地方から上京してきた人々に獲得すべき趣味の対象であった。そうした新規参入を促すことになったのが、高橋草庵（義雄）の著した近代の茶人たちの記録であった。」註十五と指摘し、「西洋化が進む明治の日本における男性の文化を考えるとき、「紳士」という概念は重要な意味を持つ。（中

略)「紳士」は Gentleman の訳語で、本来、イギリスの支配者層で人格的にも優れた理想的人物を指す語であったが、十九世紀西洋社会においては近代の理想的な人物像として中流階級全般に広まり、これが明治期の日本にもたらされた。紳士という語は明治中頃から、財界人などビジネスで成功した人物に対して用いられるようになる。<sup>註六</sup>と、わが国の「紳士」の歴史的背景との差違を述べている。この点については、竹内里欧氏が「日本の武士道が歴史的な文脈と切り離され、西洋の紳士と対応関係に置かれていることについて、現実よりも理念を重視した抽象的紳士像が、結果的に日本の伝統と等値にし、それにより「近代初期の日本人が『西洋』という努力目標に向かって邁進することを容易にさせる日本の近代化の文化戦略」が可能になったと述べている。<sup>註七</sup>と指摘を行ったことに求められるのではなからうか。

では、「紳士」の日本における解釈とその態度が、近代化の日本戦略が可能になったのであれば、明治初期における日本人の西洋化とは、いったいどのような事があったのであろうか。

文明開化の地方伝播を考えると、芳賀登氏の著書『明治国家と民衆』も重要である。芳賀氏は「文明開化把握の問題点」において「村人が、渡る世間へ何故出ていかざるを得なくなつたか、封建共同体の危機意識の解明ぬきには、下からの文明開化の欲求の歴史的な位置づけはできない。」<sup>註八</sup>と述べ、松坂・射和の竹川竹斎が文明開化の世に追いつく姿を記している。

青木保ほか編による『ハイカルチャー 近代日本文化論』3所収の加藤幹郎氏は論文「II開花する文化の諸相 実業家文化の戦略と形式 明治・大正期を中心に」において、「明治一〇年代初頭、実業界にハイカルチャーを志向する社交サークルが突然、出現した。それは宴会や夜会、そして茶会という多様な形態をとった。」<sup>註九</sup>と述べ、「明治一二年は、実業家たちが国内外の交際窓口として際だった活動をした年であった。」<sup>註十</sup>と指摘を行った。

「実業家」をキーワードとして大坂の大庭屋平井家の平井美英と松坂の本居信郷とを見ると、管見では両者は海外との交易などはなかったが、茶道に関しては專業宗匠と師匠ではなかった。しかし、なりわいの傍ら、美英の場合は青木遠州流茶道の「家元」として、本居信郷は松坂や在京の公家たちや政府高官の茶会動勢を知る立場にあったことから、茶会を自ら開き、また参加すること

により「紳士」を目指していたのではないかと考える。

加藤氏は続けて、「明治一二年の饗応ラッッシュをつうじて、彼らが官民同席や貴紳との臨席に〈社会的威信の形式〉を見いだしたことを物語っている。今度は彼らが、客人をもてなす主権者の立場に立とうとしているのである。大倉喜八郎・益田孝・安田善次郎・岩崎弥太郎といった著名な実業家が、明治一〇年代の前半にこぞって私邸を購入したり建築したりしているのも、このことと無縁ではない。貴賓を招くことができる豪邸は、社会的威信を育てる物理的環境であった。」<sup>註十一</sup>と述べ、「明治一二、三年は、明治期実業家にとって、茶道や能楽などの諸芸能に関わっていることが、威信の上昇に効果を発揮するハイソサエティの文化的な指標—いわばP・プルデューが「文化資本」と名づけたもの—として認識された重要な時期となった。」<sup>註十二</sup>と指摘し、明治十一・二年代をハイカルチャーの萌芽と共に、茶道と能楽の嗜み(知識)をクローズアップさせた。

更に、「茶会の普及はまた、名品の所有を誇示する古美術ブームに後押しされた。よく知られているように、明治維新後の旧物破壊でほとんど顧みられなくなつた名家重宝の多くは、フェノロサたちによって安価で買収され、海外に流出し始めたが、これに刺激され、明治一〇年代初頭に龍池会などの古書画鑑賞会が組織され、伝統的な美術工芸が再び注目されるようになった。」<sup>註十三</sup>と指摘しているが、大庭屋平井家、広島・上田安敦、松坂・本居信郷が残した茶会記を見ると、「廃仏毀釈」が吹き荒れる世情の中で茶会を催しており、その時期はフェノロサらが日本の美—美術品に気付く以前であった。

更に言えば、古美術ブーム以前から、茶会は綿々と続けられていたのである。ここに挙げる本居信郷筆『会席附』に掲載された茶会記は、文明開化の最中に催された英国人を招いた、立礼式の点前である。

次に、明治五年(一八七二)八月二十七日に裏千家に於いて開かれた英国人トーマスボルンビー・ウアニスとイミリー・ウアニスの茶会を紹介したい。

○明治五年(一八七二)八月二十七日

壬申八月廿七日正午

客英国人

トーマスボルンビー・ウアニス

待合

イミリイー・ウアニス

□□形盆 津軽塗

通シ 青木氏

火入 アコタ形

島田久々齋

□五郎

鈴木宗遂

獨楽盆 栗田ヤキ

湯吞茶わん

於咄々齋

一掛物 東福門院様

御自作

月や何しぬ 業平御押絵

御□共

衝重のし

元伯宗且拝領

一釜 與次郎作

雲龍

椅子手前

一花入 先亭拝領

鳳凰風炉 阿波焼

銅ウスハタ

杓立 青磁

御□共

蓋置 古銅ホヤ

花菊

建水 七宝

日扇コン菊丸

炭斗 一燈好

一水指 古丹波

塩籠

石翁書付

一香合 和歌浦

銘伊賀栗

月日貝

一茶、古今利

一条殿下大政所

一条、條禪手

三位得子善女

一茶入 認得齋好

拝領風鎮ヲ以好写

袋 古鈍子

精中箱書付

一茶杓 象牙

利居共筒

永楽作

白地金欄手茶椀

鮑目折敷

□人

紅溜椀

仁清角皿

汁 平干瓢

木猪口ボウトロ

向 鰻鱈

そう免

香ノ物 奈良漬瓜

山葵醬油

青しそ

フレフエ付ヤキ

パン

平 鯛大戈

焼物 若州小鯛

吸物 むし玉子

大徳寺麩

ミアケむし

やき塩汁

庭前銀杏

強肴 新籠

八寸 手焼胤

可記石梅梨

花小刀添ル

菓子□粕糖

惣菓子 新製松葉

牛皮昆布

戀之やき

御茶 鄙乃新 竹田紹清詰

於寒雲亭

薄茶わん 青井戸

一掛物 土佐光起筆

同 茶杓 一燈作共筒

鱒 二幅対

一釜 小阿みた堂

附書院

與二郎作

料紙硯箱 竹二虎

風炉了金

金描アリ

一花 入 田安三玄侯

一重切

後

銘 請廻リ

於咄々斎

梅もとぎ

花月

美シヨキ

宗慎一

尾張ヤキ

三宗宙

三重棚

尾張知止齋君

一貞吉二

水指共拝領

二秀次郎

立鼓形

玄室二

上ニ香合

光琳蒔絵

主

三ツ羽

中 高取大海

□□名刻有

主 玄室

以上

この茶会は、裏千家の咄々斎と寒雲亭に於いて行われた。

参会者は、イギリス人トーマスボルンビー・ウアニスとイミリイ・ウアニス夫妻と通詞青木氏、島田久々斎と島田宗遂の五人である。

「英国人トーマスボルンビー・ウアニス イミリイ・ウアニス」の二人は、「新英学校及女紅場」(現在、京都府立鴨沂高等学校)の教員の可能性が高いのではないかと考える。それは『京都府誌』の「京都府立第一高等女学校」の項目に次のように記されているからである。

「新英学校及女紅場」は明治五年四月十四日の開校に係る。校舎は九條殿河原邸にして敷地面積二千二百五十一坪四合六勺あり。棟数十七、寢殿其の他の建物を以て教室に充てたり。教師は英人ボルンビー、イーバンス及其の妻エミリー、イーバンス以下邦人男数名女六名にして裁縫、機織、袋物、押絵等を教授したり、是れ実に本邦女学校の嚆矢なりとす。(中略)六年三月イーバンス夫妻の雇を解き、英人エリザベス、ウォーン、ウェツ

トン及其の妻エル子スト、ウェットンを以て教師とす。註十四

(傍線筆者、旧字体を新字体に直した)

新英学校及女紅場は、明治五年(一八七二)四月十四日に九條殿河原邸に開校した。草創期の教師は、英国人ボルンビー、イーバンス及びその妻エミリー、イーバンス以下、邦人男数名女六名で、裁縫、機織、袋物、押絵等を教授していた。これは日本史上初の女学校であった。

茶会記には「トーマスボルンビー・ウアニス イミリイ・ウアニス」と記載があるが、これは「ボルンビー、イーバンス及びその妻エミリー、イーバンス」の事ではなからうかと考える。

これを裏付けるものに次の文章がある。

①「府立高等女学校沿革」(明治二十三年)には、次のように記している。

「明治五年四月十五日

○英人ホルンビー・イバンス夫妻ヲ聘シ土手町岩倉氏旧邸ニ於テ英語及ビ女紅ヲ教授セシム。初テ華土族ノ子女ヲ教授スル目的ナリシカ、尋テ平民ノ入学ヲモ許可シ且別ニ着実ニシテ工芸アル女子ヲ挙テ之ヲ出頭女(女教師)ト称シ其教授ヲ分掌セシム。是ヲ新英学校及ビ女紅場ト称ス。」註十五

また、「新英学校・女紅場の最初の外国人教師」の紹介文があるので、それを次に挙げる。

②「新英学校・女紅場の最初の外国人教師として雇入れたのはイギリス人 Homby Evans とその妻 Emily Evans であった。Homby はノースウエルズの人で、長崎英語学校の教師であったが、明治五年四月、月給百五十弗で招かれて新英語学校で男子生徒を教えた。Emily は女紅場の教育をうけて、英語のほか洋裁などを教え、月給百弗であった。任期は夫妻ともに一年であったが、Homby は教授に不熱心であり、態度が傲慢であったので評判がわるく、そのため女紅場までがその被害をうけたので、六年三月に夫婦とも解雇となった。のち東京に出て Emily は大学予備門や私塾を教えた。」



①では「ホルンヒー・イバンス夫妻」と記されているが、②では「Homby Evans」と妻「Emily Evans」の英字が記されている。

当時は、「音」をいろいろな日本語表記にしていたのではないかと考える。

夫 Homby Evans は月給百五十ドルで招かれ、新英語学校で男子生徒に教授し、妻 Emily Evans は女子教育を受け持ち、英語のほかに洋裁などを教え、月給百ドルであった。

任期は夫妻共に一年であったが、Homby Evans の評判が悪く、女紅場が被害を受けた為、六年三月に共に解雇となった。

かかることから、当茶会は、夫妻の任期中に催された会であった事が分かる。

茶会の内容をみると、掛物は東福門院の自作と「月や何しぬ」という題で、元伯宗且が誰かは不詳であるが、拝領をした業平御押絵であった。

茶道具について見ると、風炉は阿波焼の鳳凰風炉で、釜は與次郎作の雲龍釜、花入は先亭Ⅱ九世不見齋石翁が拝領した銅のウスハタ、花は菊とヒオウギ及び紺菊丸であった。

杓立は青磁、蓋置は古銅火屋で、建水は七宝、炭斗は八世一燈好みの塩籠。香合は和歌浦で採れた月日貝である。「一条殿下大政所 三位得子善女」と記されていることから、この人物に所縁がある品であると考えられる。

水指は石翁書付の古丹波で、銘は「伊賀栗」、茶盃は古伊万里の条襷手、茶入は認得齋好みの夕顔棗、袋は古緞子、茶杓は利休共筒の象牙であった。

料理は、永楽作の白地金欄手茶碗と紅溜碗が鮑目折敷に置かれていた。

献立は、向付は仁清角皿に鰻と鰯の山葵醤油にオレフェ付焼きパン、汁は平干瓢と素麺、青紫蘇。木製の猪口にはボウトロ、香の物は奈良漬の瓜であった。

平は鯛の大戈は兜焼の事であろうか。大徳寺麩と庭で採れた銀杏が添えられていた。

八寸は手焼きの鼠と蒲鉾か。焼物は和歌山で獲れた小鯛の蒸物、吸物は蒸玉子の焼塩汁であった。

強肴は、新籠の中に入った柿と梨に、小刀が添えられていた。

菓子は牛皮Ⅱ求肥昆布、総菓子は新製松葉こいのやき、御茶は鄙乃新で、お

茶は竹田紹清であった。

後座は寒雲亭で催された。掛物は土佐光起の鱒の二幅対、釜は小阿弥陀堂で與次郎作、風炉は了金の作であった。

花入は御三卿の一人である田安三玄侯(斉匡)の一重切で銘は「請廻り」。花はウメモドキとビシヨキであった。

薄茶碗は青井戸、薄茶用の茶杓は一燈作共筒であった。

三重棚が置かれ、尾張知止齋(尾張徳川家十二代斉荘)から拝領した水指立鼓形、上段には光琳時絵の香合、中段には茶入の高取焼の大海が荘られていた。付書院には、料紙と硯箱が置かれていた。

後座の後は咄々齋に於いて「花月」が行われた。これに参加したのは宗慎、宗宙、貞吉、秀次郎、玄室の五人であった。

当茶会記は、「椅子席」で手前が披露されている。玄々齋が西洋化にも合うようにと考案した椅子手前であり、自庵で外国人を招いた初見の茶会かと考えられる。

次に、幕末に生まれた茶道の家元に、武者小路千家官休庵の十一世・一指齋一叟宗守(嘉永元年〜明治三十一年 一八四八〜一八九八)がいる。一指齋は近代黎明期の混乱期に家元として生きた人物である。

「幕末から明治維新にかけての流儀は大変に人的な受難期」<sup>註十七</sup>の時に家元に就いたのが一指齋であった。

武者小路千家官休庵の明治維新前の状況については千宗守「曾祖父 一指齋を思う」(武者小路千家第十一世 一指齋一叟宗守居士百回忌記念 一指齋の茶の湯)所収 武者小路千家 財団法人官休庵 平成九年九月二十八日発行)に次のように記されている。

致仕して来た讚州松平家より数百石に及ぶ致仕料としての扶持米が下げ渡されることにより、それが茶の湯の日々の糧となっていたのである。各歴代が時代による幾分の加増をみつ、年々最低限これだけの石高の収入がある事が、千家の一翼を担う流儀を二百数十年に渡って存続させて来た大なる要因なのであった。しかもその待遇は藩地に溜るのではなく、普段は京に在って日々の茶の湯を致し、藩主代替わりの及び当方代替わりの砌、

国元（讃岐）と江戸表へ一度ずつ出仕することが最低のノルマであった。後は臨時の呼び出しがあるのみ<sup>註十八</sup>

という状態で、武者小路千家官休庵は讃岐国松平家に仕え、扶持米を受けていた。待遇は、普段は京に住し、藩主代替わりと武者小路千家官休庵の代替わりの時に国元と江戸表へ一度ずつ出仕し、後は臨時呼び出しがある時のみ出仕していた。

明治維新後は、出仕先の讃岐藩が廃藩になった為、武者小路千家官休庵はずべてを失った。しかし、「明治十年を迎える頃」から、一指齋の動きがあった。

明治の十年代を迎える頃になると、茶の湯の世界にも少し光がさしかけてきたのであった。しかし未だその理解は充分ではなく、旧権力機構の遺物視されており、職業としての認知をされかねている状態であった。そして大道芸人と同様の「芸能鑑札」の下符を余儀さるまじく、此処に三千家連名にて当時の京都府庁に対して「上申書」を出している。一指齋は自ら筆にとり、利休以来の三千家の伝えた茶の湯が、歴史上どの様な役割を果たしてきたかを具体的に縷々述べ、それが決して新時代にそぐわないものではなく、むしろこれからの国威高揚になくてはならぬものである事を力説している。この時代「廃仏毀釈」をはじめとする伝統文化の事々が、旧時代を生きたとの理由のみで、永遠に抹殺されてしまったものが数多くあった。茶の湯も決してそれらの範中外でなかったのであるが、今日までその命脈を保ち得た原因の一つとして、この時の先人達の保存運動に大なる因がある事を忘れてはならない。<sup>註十九</sup>

と、一指齋が執筆した「上申書」の重要性について指摘を行った。

「上申書」は明治五年（一八七二）に出されたもので、その「上申書」を【史料4-17】<sup>註二十</sup>に挙げる。

同年八月二十三日には教部省が左記の布達を出している。【史料4-18】<sup>註二十一</sup>  
熊倉功夫氏は藝能史研究會編『日本芸能史』7近代・現代 平成二年三月二十日 法政大学出版局）の第一章三「家元制度の復活」において、「明

治五年、明治政府は財政改善をはかるために諸芸人に対して鑑札を与えるかわりに営業税を徴収することとし、京都府でも実施された。その結果、茶道の家元に対しても遊芸稼人の鑑札が与えられ<sup>註二十二</sup>と記している。

右に挙げた布達の中に記された「遊芸ヲ以テ渡世致制外者」とは、いったい何の遊芸や制外者を指すのか不詳であり、鑑札についてはふれられていない。

しかし、三千家が揃って京都府に鑑札制度に反対するという史料が残っている以上、府県単位で遊芸に対して鑑札制度を設けるといふ、現在でいう条例が出されたのではないかと考える。尚、明治政府が出したといわれる遊芸稼人に対して鑑札と営業税の賦課を行うという法令は、管見では見あたらない。

鑑札制度を設ける状況になった理由としては、教部省が出した「教則三条」と、政府官吏が下級武士の出身が多かった為に「遊芸」そのものに殆ど関心がなく、財政難の解消に如何に国民に賦課を行うかが重視をされた結果であったと考える。事実、政府の中枢にいた大久保利通や江藤新平らは下級武士の出身であり、神仏分離令の解釈に伴う廃仏毀釈は寺社を荒地にし、人心の荒廃を招いた。

更に、明治五年という年は芸能史上、注意を要する年である。芸能が教部省の管轄となり、「教則三条」が四月二十八日に出され、十一月には風俗を矯正する「違式註違条例」が發布された。「教則三条」とは、

- 一、敬神愛国ノ旨ヲ体スベキコト
- 二、天理人道ヲ明ニスベキコト
- 三、皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムベキコト<sup>註二十三</sup>

のことである。つまり、神を敬い愛国の旨を体すること、天の理と人の道を明らかにすべきこと、天皇を奉戴し天皇の旨を遵守すべきことの三点を国民たる精神と説いたのである。従って、芸能・遊芸の在り方が変容を迫られた。「遊芸稼人」が鑑札を許可されることは「政府のお墨付き」を意味し、営業税の課税は、政府はこれらの職業の人口を知るのみならず、課

税対象として政府の管理下に置くことを意味したのである。

このような明治政府による芸能・遊芸への圧迫政策の中を茶道が生き残ることができたのは、いち早く「茶道具」を全国的に保存対象とした町田久成の先見の明と、一指斎が執筆した「上申書」があり、茶道に関わる人びとの心と茶道自体の普遍性・継続性・発展性があるからだと考える。

その「上申書」では、「珍器を撰び山海之美味を集め、思々に催を競ひし人多く相成候。故に、自然と奢侈遊興の藝杯と流言に預候事、寔に是非も無、本意を背く次第。全く私共教示之不行届故と兼々迷悔仕居候」と、本来の茶道とは異なる「珍器」や「山海の美味」を集め競っていたことや、奢侈遊興の芸等と流言があることは「本意に背く次第」と一刀両断し、「私共の教示の不行き届き故と、かねがね迷惑・悔やんで居る」と記している。

更には、海外で未だ茶を挽いて服用する良能を開いていない様を心得ている。この茶の効能は御承知され事、故に追々、荒衰の地に茶実を植え、海外や辺境の地へも盛大に流布したいとの旨が記されている。

裏千家玄々斎宗室も明治五年に「茶道の源意」【史料4-9】<sup>註三十四</sup>を著し、京都府に反撥した。

一指斎はその後、「茶の湯指南書」を明治六年（一八七三）二月二十七日の日付で、当時の京都府知事、長谷信篤へ提出している。これはいわば新体制への改めでの職業登録であり、先の「上申書」で役所の理解を多少共得たためか、今度は淡々と私情を交えず、茶道指導を職業として申請し、そのために当時の法規に従って上納金（当時の税金）を収める意志のある事も明記している。<sup>註三十五</sup>と記されており、「公」に茶道家元・茶道指導という職業を「職業登録」した。

明治十三年（一八八〇）一月十三日に始まる北野天満宮献茶祭は、「兄碌々斎が今日にまで続く年中行事化された献茶祭の初回の奉仕を初め」<sup>註三十六</sup>、一指斎も翌年に献茶を行った。献茶は、「神社等への献茶という不特定多数の人々の参加を得て、公開の形式で行う事により、その新しい時代に於る存在理由を喧伝し、理解してもらおう機会として創り出されたのであった。これ又茶の湯の文明開化策の大きな具現化の一つ」<sup>註三十七</sup>であり、より多くの人々が茶道にふれることが出来る「空間」であった。

「多くの人々が茶道にふれる空間」という視点から「博覧会」をみると、京

都で開かれた「博覧会」における「出品物」としての「茶道具」は博覧会の回数を経るごとに多くなっていた事からも、旧幕府時代は一部の人のみの嗜みとなっていた茶道が、一般国民の中に茶道に関心を持つ人が多くなっていたことが窺える。それが、大庭屋平井家の美英の追善茶会の参会者にも見えるのである。

一方、目を海外に転じると、海外では「ジャポニズム」が流行していた。

欧米の地に起こった「ジャポニズム」について馬淵明子氏は、著書『ジャポニズム 幻想の日本』の中で「ヨーロッパが何に関心を持ち、何を無視したのかは今まではあまり分析されてこなかったが、これは実はきわめて重要な点である。ひと言で言ってしまうえば、ジャポニズムはヨーロッパ人の眼に止まり、彼らが好んで買い集めたものを基に形成されたのであり、それは日本人が価値を与えてきたものとは大きく隔たっていた。日本のどのような点がヨーロッパにアピールし得るのか、あるいはもつと端的に言ってしまうえば、何を売ることができるのかは、当時の日本政府にとっては多大な関心の対象であった。その結果、工芸品を中心に新たな輸出産業がおこり、万国博覧会の機会などに、新作の工芸品が大量に西欧諸国にもたらされた。」<sup>註三十八</sup>と述べ、日本の価値観とは異なる品が西欧では流行し、日本政府にとっては経済面で「輸出産業」が起こり、万国博覧会を介して「新作の工芸品」が輸出されたと指摘した。

そして、「ヨーロッパが形成した日本のイメージは、いわば彼らがこうあつて欲しいという願望に基づいた像であり、それこそがジャポニズムを性格づけている。」<sup>註三十九</sup>と、ジャポニズムのイメージについて、欧米人らが日本への「願望」であったと指摘した。つまり、「西欧化」をまっしぐらに進んでいた日本を「欧米人」から見れば、「文明開化」の国策の基、自らの「伝統」を消し去ろうとする日本人に警鐘を与えてくれ、その上、殖産興業としての伝統工芸を「輸出工芸品」としての価値を見出しにくれたのであるが、国内政策も「古器旧物保存方」を布告し、海外流出を防ぐ努力はしていた。

これを茶道界にあてはめると、大坂・大庭屋平井家と広島・上田安敦及び松坂・本居信郷が残した茶会記には、幕末維新期の混沌とした中でも釜をかけていたことから、「いわゆる近代化政策に眩惑されて「近代即西欧化」という誤った観念が一般化している嫌い」<sup>註四十</sup>があるとされてきた茶道史上においても

正す必要があると考える。

では、なにゆえに茶道は幕末維新期の中を生き残ることが出来たのであろうか。それは前に述べた「発展性」と「柔軟性」及び「恒常性」、「不変・普遍性」にあると考える。

それを「ジャポニズム」の面から探ると、「ジャポニズムと呼ばれる広汎な芸術運動は、西欧世界にさまざまな趣味的、芸術的、思想的変化をもたらしたが、その中で比較的看過されがちでありながら重要な側面として、日本の自然主義の導入がある。自然主義はもちろん、西欧世界にも存在し、人間中心の文化である人文主義との対比で登場してきたものであり、一九世紀においてはその台頭は目を見張るものがあつた。キリスト教が築き上げてきた、神を頂点に置き人間をその下に位置づけるヒエラルキーにおいては、自然は最も下のランクを占め、単独には低い価値しか持っていなかった。しかしこうした価値観は、キリスト教の力が弱まるに従つて次第に新たな側面を迎える。すなわち産業革命によって悪化した都市という生活環境を補うものとしての田園、自然への眼差しは次第に熱いものになり、科学技術の発展によって人間は自然の脅威から身を守るすべを身につけたため、自然はかつてないほど人間にとつて近しく、かつ親しみやすいものとなった。西欧文化が日本美術における自然のとらえ方を知つたのは、このように自然との関わり方を探りつあつた時点においてであるといつてよいだろう。」<sup>註四十一</sup>と述べ、日本における「自然」の取り扱い方と、西欧社会における人間中心文化との差違を明らかにし、西欧世界は自然との関わり方を探りつあつた時点と一致をしていたことを指摘した。

これは、茶道の世界では「花道」とのつながりや茶道具、そして生活の様式そのまが礼儀作法に生かされている点と合致する。

更に、茶道では「点前法式」を生活様式に合わせて変えることが出来ることがある。これは、宗匠が新しい点前法式を生み出すことにみることが出来る。かかることにより、先に述べた「発展性」と「柔軟性」及び「恒常性」、「不変・普遍性」を茶道がそのなかに秘めているからであると考えることが出来る。

近代黎明期に生まれた評論家・小説家の内田魯庵（慶応四年〜昭和四年 一八六八〜一九二九）は、論文「利休の風格と其の時代的環境」（『茶道月報』）において次のように記している。

自己の心を型の中に表現していく所に修練があり、自己の無限の経験と創意が必要なのである。元来伝統芸術、殊に茶道は単なる規矩準繩でなく、其の中に完全な分離化が質現されている結果、一分の隙も無駄なく磨きぬかれた玉の如きものを持つているからこそ、伝統としての意義もあり存在価値もあるのである。此処には完全な「完成」と云う言葉はなく、時代々に相承した人が先人の型を基準にして、如何にすればその中に自己の精神を活かす事が出来るかを創意工夫する。之はこの道の続く限り、又その人が茶道に専念する場合生涯が修練であると云うことが出来るのである。

（筆者が旧字体を新字体になおした。）

<sup>註四十二</sup>

茶道には「完成」という言葉はなく、自己の精神を活かすことが出来るかを創意工夫し、茶道に専念する場合は、生涯が修練であると説いており、いいかえると、茶道がある限り、それを修練する人の心を活かす工夫が必要だと言っているのである。つまり、世情がどのように動こうとも、その中で「創意工夫」を行い、その中で「自己の心の修練」を行うことの必要性を述べたのだと解釈することが出来る。そして、茶道には「不変性」もある。如何に世情や世論が動いても、動かぬものがある。これは、茶道を創った村田珠光、茶道を大成した千利休、そしてこれを継いだ茶道宗匠の心と技である。

福田恆存は『傳統にたいする心構』の中で、

文化とは生き方であつて、私たちがそれと意識しえぬもの、目的として追求しえぬものだといふエリオットの考へは正しい。たとへ過去の傳統文化にしても、それが傳統であり文化である以上、多かれ少かれ、現在の私たちの生き方のうちに分ちがたく流れこんでゐるものでなければなりません。<sup>註四十三</sup>

つまり、生活文化である以上、生き方の中で分かちがたい存在であるのだと述べている。それは、「柔軟」な姿勢で茶道と向き合った家元や官吏及び町人

・市民たちがいたからこそ、茶道は今に続く伝統文化になりえたのである。

梅棹忠夫氏は「日本の現代史の傾向をグラフであらわすとどうなるか。横軸に年代をとり、縦軸にはなんでもいい、それぞれの事物の生産なり、消費量なり適当な指標をとることとすると、たいいていのものはグラフのように、はじめはゆるやかに、あれほど急傾斜で上昇するカーブであらわすことができるのではないか。これを近代日本の文明史曲線とでもよんでおこう。」<sup>註四十四</sup>と「文明史曲線」【図4-1】を提唱した。

梅棹氏は「明治以来の日本政府は、革命の正当性を主張するために、近代日本の「明治紀元」をやたらに強調してきた。しかし、観念と制度は、そのときのおおきく変革されたとしても、民衆の生活そのものの変化は、連続的であった。衣食住・社会生活などの近代日本文明の諸要素は、もうすこし古い時代、化政期すなわち文化文政（一八〇四—一八三〇）のころにすでに展開をおわっていたとかがえたほうがよい。」<sup>註四十五</sup>と述べ、我が国の近代は化政期に始まっていると位置付けた。そして、社会制度は変革したが、国民の生活は「連続的」であると指摘した。

明治維新については「近代生活の諸変化にもとづく、ひとつの政治的帰結であったとかがえられる。近代がはじまって、時代に対するさまざまな疑問がでて、制度的にも矛盾がでてくる。そういうものを全部、政治的に精算したのが一八六八年だというかんがえである。」<sup>註四十六</sup>と指摘し、明治維新は近代生活の諸変化を因としている。そして「明治革命の連続性」において「おびただしい社会的変革が実施されましたが、同時におびただしい社会的伝統が継承されたのであります。」<sup>註四十七</sup>と述べ、お雇い外国人と水田耕作及び民法を挙げている。

茶道史上「何をもって近代とするか」については、林屋・熊倉両氏は化政期を挙げた。それは、茶道史をかえりみれば、天明期における茶道批判の上に近代茶道が成立したという熊倉氏の説がある。

熊倉氏は、「松平不味や酒井宗雅の茶の湯は、近代において財界人を中心とする近代数寄者の茶に継承され、独座観念を主張する直弼の茶は近代を越えて現代に通じるところがある。つまり、幕末の茶の湯の中から近代・現代の茶の湯が誕生したのである。」<sup>註四十八</sup>と述べ、幕末から近・現代の

茶道が誕生したと説いた。

幕末期において、松平不味は「贅言」において、井伊直弼は『茶湯一会集』の中において遊芸化した茶道をそれぞれの流儀に転化し、一派を創流した。

井伊直弼の茶道思想については『茶湯一会集』の中に序に記された「一期一会」と、「独座観念」が既によく知られているように、己の心を律することが主意であった。

松平不味は『贅言』の「茶湯心得」五箇条の中において、

一、時世のうつりゆきを弁ぜず、一と所にあしをとめて修行を知らざるものは生涯の下手と申すべき事<sup>註四十九</sup>

と述べ、時世の移り変わりを指摘せず、一箇所に足を止めて修行を知らない者は生涯の下手といい、また、「一心を修め慎み、清浄潔白を本として、禮樂かね備り、親疎貴賤の隔なく、一和の業を成すことなり」<sup>註五十</sup>と、心を修め慎み、清浄潔白を本として礼樂がかね備わり、親疎貴賤の隔でなく、一和の茶道を成すべきと説いたように、茶道に関わる人びとの心の持ちようや在り方を指摘した。

「文明史曲線」を茶道史にあてはめてみると、幕藩体制の崩壊により、藩の茶道（茶堂）であった家元がその活動を断絶せざるを得ない状況が、BCDの凹みの部分であり、CDの上昇線が茶道の近代黎明期にあたるのではないかと考える。

## 小 括

幕藩体制の崩壊などにより世情が混乱した近代黎明期において、美英、信郷、及び安敦等が残した茶会記によると、人々は釜を掛けていた。

第四章では、その時期に、茶道が脈々と受け継がれた過程に関わったと思われる「古器旧物保存方の公布」、「博物局の設置」、「各地における博覧

会の開催」、「その他行政の動き」、及び「茶道界の動き」等が近代黎明期の茶道にどのように影響を及ぼしたのかについて検討した。

先ず、太政官が明治4年に布告した「古器旧物保存方」では、その対象となる古器旧物として茶道具や茶道具としても用いられる道具類の名称が具体的にあげられており、また、単なる「古器旧物」扱いではなく、日本古来の伝統あるものの、技術と品そのものを「保存」する意図があった。

また、明治4年に、大学南校から弁官宛に、「博覧会」に関する、「博覧会大旨」が出ており、その中で、「古器旧物」を、「単なる古い物」という、扱いをしないようにしたことがわかった。

大学南校に始まり次々と各地で開催された博覧会においては、地域別に差はあるが、「古器旧物保存方」の布告と相まって、茶道具・煎茶道具の展観と保存が行われたのではないかと考える。茶道具の出品が多かったのは京都、伊勢山田、奈良、名古屋、伊賀上野、新潟他であり、家元や実業家たちが茶道具を出品していた。「実用品」であった「茶道具」が「美術品」として鑑賞される事にもなったが、「保存すべきもの」の一つとして、見学者たちへの教育効果は計り知れないものがあった。

現在、東京国立博物館の庭園内に、茶室「六窓庵」があるが、これは明治初期に、六窓庵が腐朽することを痛んだ時の局長、町田久成の働きかけにより、奈良から博物館(現、東京国立博物館)内に移築された。ここでは、「博物館」に収められた茶道具を用いて茶会が開催され、新聞記事にもなった。これは、国として茶室と茶道具の活用と共に、世間に茶道の存在を知らしめたものと思われる。

一方、海外では「ジャポニズム」が流行していた。日本の価値観とは異なる品が西欧では流行し、日本では、政府主導で「輸出産業」が起り、万国博覧会を介して「新作の工芸品」が輸出された。「西欧化」をまっしぐらに進んでいた日本に対して、「欧米人」は、「文明開化」の国策の基、自らの「伝統」を消し去ろうとする日本人に警鐘を与えてくれ、また、殖産興業としての伝統工芸に「輸出工芸品」としての価値を見出してくれたのである。

本居信郷筆『会席附』に収録された茶会記の中にある、文明開化の最中、

裏千家に於いて開かれた英国人を招いての茶会(明治五年八月二十七日)では、点前は立礼式で行われ、献立にはパンが出された。

明治五年、遊芸稼人等への営業心得と取れる教部省布達が出された。

熊倉功夫氏は藝能史研究会編『日本芸能史』7近代・現代 平成二年三月二十日 法政大学出版局)の第一章三「家元制度の復活」において、「明治五年、明治政府は財政改善をはかるために諸芸人に対して鑑札を与えるかわりに営業税を徴収することとし、京都府でも実施された。その結果、茶道の家元に対しても遊芸稼人の鑑札が与えられ」<sup>註三十一</sup>と記している。

「遊芸稼人」の鑑札制度は、政府がこれらの職業の人口を知るのみならず、課税対象として政府の管理下に置くことを意味した。

この様な動きに対して、三千家が揃って京都府に、「茶道職業之者」を「遊芸稼人」と同類とした鑑札制度に反対するという、一指齋が執筆した「上申書」<sup>註三十</sup>を明治五年に提出した。これは、鑑札制度に対して意見具申したように見えるが、近代黎明期の混乱状態の中では、茶道が遊芸と同等に扱われる風潮が現れたので、茶道の本質を自覚し、自己規定をして近代に備え、茶道の組み直しを図ったものでもあった。

梅棹忠夫氏の「文明史曲線」<sup>註四十四</sup>を茶道史にあてはめてみると、幕藩体制の崩壊により、藩の茶道(茶堂)であった家元がその活動を断絶せざるを得ない状況が、BCDの凹みの部分であり、C点が一指齋の「上申書」<sup>註三十一</sup>が提出された明治五年であって、近代黎明期茶道の新たな出発点にあたるのではないかと考える。

## 結論

第一章から第三章まで、青木遠州流茶道の家元であった大坂・大庭屋平井家十一代美英、伊勢国松坂・本居信郷、広島藩国老・上田安敦が残した茶会記を中心として、近代黎明期におけるそれぞれの茶道の活動状況を検討し、第四章では、国家が茶道にどのように関与してきたかを検討してきた。

まず、第一の課題「衰退したとされる近代黎明期の茶道はどのように行われていたのか。」について述べる。

大庭屋平井家の平井治郎右衛門美英は青木宗鳳の没後、青木遠州流茶道を継承し、その家元として大坂に根を下ろした。

代々大名貸を営んでいた大庭屋平井家は、幕藩体制の崩壊をまともに受け財政は逼迫したが、やりくりしながら青木遠州流茶道を指南し続け、明治二十五年迄月平均約十回の頻度で茶会を開き、その記録を残した。しかし明治の中頃になると、大阪茶道界の世情も加わり、美英の茶道は遠州流正流に傾いていった。残された茶会記によると、参会者には在阪の実業家や道具商らが多くおり、おおくは限定された客組であった。

美英が青木遠州流の茶会記である『茶会々記集』や『青木家代々記』等を残した事由は、茶道の衰退期である時期に最後の青木遠州流の家元として、また、遠州流宗家に合流する前に、青木遠州流が嘗て存在したことをこれらを通じて残しておこうという意図が読み取れるのではなからうか。

本居信郷は、神職の傍ら、表千家茶道師範として茶道を嗜んだ。松坂三家（長井家・長谷川家・小津家）を中心とした松坂の人々と寺社関係者が中心であり、地縁に基づいた文化圏を形作っていた。吉田悦之氏が説く「圓居の文化」が基底にあった為、地縁者たちが自ずと集まるようになり、近代黎明期においても動ぜず、地元で茶道文化が花開いていたと考えられる。

『会席附』に記録された茶会の多くは、信郷が参加をしていない他会記で、松坂の他に京都、大坂、江戸（東京）、他に阿波、伊勢山田、神戸等の日本各地で開かれた茶会記が収録されていた。これは、信郷が茶匠等に依頼して茶会記を収集していたことに依るものであり、衰退期とされてきた時期であった全国各地の茶会の様相がわかる茶会記であった。

他会記に記された流派は表千家、裏千家、他に藪内家、武者小路千家、江戸千家流、速水流他と多岐に亘っており、亭主と参会客は、茶道の宗匠や業躰、政府官吏、商人等という階層を問わない人びとが茶を嗜んでいた。また、「開国」の影響による英国人をもてなした立礼席茶会と、文明開化のさなかに博物館（現在、東京国立博物館）庭園内の六窓庵における茶会記もみられた。

これらは信郷が何らかの意図があつて収集したものとと思われるが、茶道界が危機的状況の時代に鑑み、全国各地の茶会記を収集し、記録に留めておくことによつて後世に伝えようとしたのかもしれない。

上田家の広島藩における役職は国老であり、上田家代々の当主は上田家の茶の湯を修めていたが、直接人に教えることはなく、野村・中村両家を「上田家茶事預師範」として、宗箇の茶の伝承と伝授をさせていた。

幕末時の当主であった上田安敦は、明治四年に剃髪し、茶道に励み、上田家に伝わる茶道具や茶書を整理した（上田流中興の祖と言われる）。

安敦が残した茶会記集『雅遊漫録』によると、茶人は上田家茶事預師範の二家を中心とした人びと―旧広島藩士や広島縣官吏、広島市内の寺社の住職たちであり、客は限定されていたことから、文化サロンが展開されていたとみてよい。釜掛定日を設け、旧広島藩士や町人（商人、寺社関係者）との茶道を行っていた。

「上田家茶会記録」には次代の上田流当主となる亀次郎自身による茶会記録も含まれており、安敦が亀次郎を上田家中の人々と共に「上田家当主」として茶道の教育を行っていたことがわかる。廃藩置県により仕官先をなくした為、上田宗箇流茶道として家元化をおこなったのではないかと考える。尚、上田家茶事預師範の中村家と野村家の二家は明治維新後も安敦の茶道に積極的にかかわっており、この二家がなければ、上田宗箇流茶道は今日に残らなかった。

かかることから、安敦がのこした茶会記からは、幕藩体制の崩壊による身分制の崩壊により階層を問わない人々との「茶道」を介した交友が所々にみられ、家元化して新しい茶を切り拓こうとしたことが読み取れる。

近代黎明期は、幕藩体制の崩壊により、藩の茶道（茶堂）であった家元がその活動を断絶せざるを得ない状況に陥り、また、開国も含めて世情が

大きく変わろうとした時期であったが、第一章から第三章の事例を見ると、数多くの茶会記が残されており、茶人たちは伝統の守るべきものを守りながら、その在りようは時勢、環境に合わせ、様々な立場の人々と共に、様々な様式で茶道を嗜んでいたことがわかった。

従って、近代黎明期に茶道が衰退したとされていたが、単なる衰退とはいえないということが明らかになった。

次に、第二の課題「茶人たちの活動と明治政府の国策及び世情が近代黎明期茶道へどのように関わったのか、そして、近代黎明期茶道とは何か」について述べる。

第四章では、近代黎明期の茶道に影響を及ぼした環境、とりわけ明治政府の国策としての関わり等について検討した。

先ず、明治4年の太政官布告「古器旧物保存方」は、その対象となる古器旧物として具体的に茶道具等の名称もあげ、単なる「古器旧物」扱いではなく、日本古来の伝統あるものの、技術と、その品そのものを「保存」する意図があった。また、「博物館」の設立、世界と日本各地で開かれた「万博」や「博覧会」によって、茶道具に工芸品としての価値が見出された事と、市民の、茶道具と茶道への知識が増進した。

また、明治五年八月には、遊芸稼人の風紀統制ともとれる教部省布達がだされた。更に、その頃各地で遊芸稼人の鑑札制度が施行され、茶道の師匠も遊芸稼人と同類にされようとした。その明治五年、三千家が揃って、京都府に「上申書」を提出し、遊芸稼人と同類とされた鑑札制度に反対した。その内容には、茶道は「三規」・「五常」等、教部省が教導職へ指示した国民への基本指導内容のものを持っているという茶道の本質を示しながら、なかには本意に背く行動をとる者がいて、茶道が贅沢な遊興の芸だとの風潮が有るが、今後は、広く正していくので、「茶道職業之者」を「遊芸稼人」と同類にしないで欲しいということが含まれていた。

この「上申書」は鑑札制度に対して意見具申したものではあるが、近代黎明期の混乱状態の中では、茶道が遊芸と同等に扱われる風潮が現れたので、「茶道本来の意義を正す」ために、世に宣言したものであつたと考えられることもできる。

幕末の頃にも、松平不昧は「贅言」を、井伊直弼は『茶湯一会集』を著わして、遊芸化した茶道界を批判していた。

また、第一章から第三章の事例を振り返ると、茶人達は、幕藩体制の崩壊・明治維新・文明開化の下、その環境を受け入れ、例えば立礼式点前を取り入れるなど、夫々の立ち位置で様々に工夫をしながら茶の湯を嗜んでいた。

従って、近代黎明期茶道は、激変する社会の下、ややもすれば遊芸化に走る状況の中で、松平不昧や井伊直弼らによる茶道批判の内容も含有しながら、茶道の本意を改めて自覚し、自己規制をして、時勢に合わせて工夫を凝らし、国策を理解した茶であつたと考える。

尚、近代黎明期において茶道が継続・躍進できた背景に、「古器旧物保存方」の公布と、各地で開かれた「博覧会」において「茶器（茶道具）」に工芸品としての価値が見出された事と、市民への「茶道具」の知識増進があつたことを看過することはできないが、「古器旧物保存方」では、「茶会」は保存対象にはなっていなかった。「古器旧物保存方」の公布や遊芸稼人の鑑札制度が施行されたことが、間接的には「茶会（茶道）の保存」に働いたが、「茶会（茶道）の保存」への国策としての積極的・具体的関与については明らかにすることができなかった。これは今後の課題である。



## あとがき

筆者が初めて茶道史に関心を持ったのは、岡山市にある就実女子大学文学部史学科一年の時であった。当時は史学科のみ一年次に茶道（裏千家）が必修科目であり、掛軸から本日のお稽古の意味を読み取り、季節を先取りした和菓子の美しさと松籟の音が心地よく響く静謐な雰囲気の中のお稽古は、毎週の楽しみであった。

加えて入学年度の平成元年（一九八九）は、千利休四百年遠忌の年であり、これの特集した書籍や映画が数多く出版・封切りをされた年である。この年に開かれた就実女子大学史学会の講演会では、後にゼミの指導教授となる神原邦男先生による速水宗達についての講演があり、茶道史という分野があることを初めて知る機会を得た。

二年次の夏には神原先生からお誘いを頂き、速水宗達の著書の翻刻作業に加えて頂き、史料蒐集・解説・探究の面白さと史料の重要性について教えて頂く機会を得、茶道史への関心は更に増した。

卒業論文では、幕末明治期の茶道とはどのようなものであったのかについて関心が湧き、特に隆盛をみた煎茶道について、浪花の町人学者であった木村兼葭堂の煎茶についての探究を行った。この拙い研究はその後、藝能史研究會の大会において発表をさせて頂く機会を得て、故林屋辰三郎先生からあたたかい言葉をかけて頂いたのは忘れ得ぬ思い出である。

大学院は、故石田善人先生のお薦めにより、神戸女子大学大学院の門を叩いた。そこでは、日本近世史専攻の故河手龍海教授、日本中世史専攻の故石田善人教授、日本民俗学専攻の田中久夫教授らに師事をさせて頂く機会を頂いた。博士前期・後期課程の五年間、天気が良い日には遙か大阪湾まで見渡せる先生方の研究室で警咳にふれ、研究の楽しさと厳しさを知った。

博士前期課程では、学部時代と同じく幕末明治期の茶道史への関心が続き、大庭屋平井家とのご縁を頂いた。大阪市史料調査会（当時）の渡邊忠司先生に、北摂の閑静な住宅地にお住まいの故平井勝彦氏を紹介させて頂いた。

阪神・淡路大震災が発生した日が、修士論文の提出日であった。その為、発生の一週間後が提出日となり、その約一箇月後に口頭試問を受けた。副

査をして下さった日本近代史専攻の山本四郎教授には大変お世話になった。

大学院入学と共に入会を許して頂いた茶の湯文化学会では、谷晃先生、熊倉功夫先生、中村昌生先生、田中秀隆先生、山田哲也先生、高橋忠彦先生、中村利則先生、中村修也先生をはじめとした諸先生方から何かとご指導を頂いた。

小著の第三章で取り上げた本居信郷については、熊倉功夫先生のご紹介により、本居宣長記念館で調査の機会を頂き、前館長の門暉代司先生、現館長の吉田悦之先生にご指導を頂いた。

本研究にあたっては、熊倉功夫先生に幾多のご教示とご指導を賜った。ご多忙の中をお時間を頂き、懇切丁寧ないろいろな事のご指導とご鞭撻を賜り、お礼の言葉は筆舌に尽くせぬものがある。

京都造形芸術大学大学院では、指導教授としてご指導頂いた中村利則先生と、仲隆裕先生、坪井剛先生から数々のご教示とご指導を賜った。また、教学支援グループ教学支援二課の鎌田高美氏にはいろいろとお世話になった。

また、三徳庵茶道研究助成の共同研究では栗野隆氏、岡本文音氏、松本康隆氏、八尾嘉男氏、依田徹氏との研究上の交友を頂き、大坂における明治期の茶道と茶道界について見直す機会を得たのは存外の幸せであった。

そして、広島の茶事情をご教示下さった齋藤孝夫氏との交友も忘れられないことである。

更に、本居宣長記念館、上田流和風堂、表千家不審庵文庫、裏千家今日庵文庫、国立国会図書館、京都府立図書館、三重県立図書館、大阪府立中之島図書館、岡山県立図書館、広島県立図書館、三重県松阪市松阪図書館、大阪府堺市立図書館、倉敷市立中央図書館、広島県広島市立中央図書館にお世話になった。

この他にも、何う先々でいろいろな方にお世話になった。ここに記して、心より厚くお礼を申し上げます。

最後に、研究を許し、静かに見守ってくれた両親に感謝したい。

平成三十年二月二十六日

市村祐子

# 註釈

## 【序章】

註一 熊倉功夫『近代茶道史の研究』（日本放送出版協会 昭和六十

二年四月）五十〜五十二頁参照

註二 前掲註一 七十二頁

註三 前掲註一 七十二〜九十一頁参照頁

註四 前掲註一 百三十九頁

註五 前掲註一 百五十一頁

註六 前掲註一 百五十八頁

註七 前掲註一 百五十九頁〜百六十頁

註八 前掲註一 百六十頁〜百六十一頁

註九 前掲註一 百六十三頁

註十 前掲註一 百六十六頁

註十一 前掲註一 百六十六頁

註十二 前掲註一 百七十七頁

註十三 前掲註一 百七十八頁

註十四 前掲註一 百七十八頁

註十五 前掲註一 百七十八頁

註十六 前掲註一 百九十三頁

註十七 前掲註一 二百十五頁

註十八 前掲註一 二百十六頁

註十九 前掲註一 二百十六頁〜二百十七頁

註二十 前掲註一 二百十七頁

註二十一 前掲註一 二百七十三頁

註二十二 前掲註一 二百七十三頁〜二百七十四頁

註二十三 前掲註一 二百七十四〜二百七十六頁参照

註二十四 『講座 茶の湯全史 近代』（思文閣出版 平成二十五年七月）

五頁

註二十五 前掲註二十四 七頁

註二十六 前掲註二十四 十六頁

註二十七 田中秀隆『近代茶道の歴史社会学』（思文閣出版 平成十九年

十一月）四十四頁

註二十八 前掲註二十七 九十頁

註二十九 前掲註二十七 三十頁

註三十 前掲註二十七 三十一頁

註三十一 齋藤康彦『近代数寄者のネットワーク―茶の湯を愛

した実業家たち―』（思文閣出版 平成二十四年一月）四十三頁

【一章】

- 註一 熊倉功夫「日本茶道史の構想」（木芽文庫編集『茶湯 研究と資料』二十三号所収 思文閣出版 平成六年十一月）八〇九頁参照
- 註二 前掲註一 八頁〇九頁参照
- 註三 前掲註一 九頁
- 註四 拙稿 平井勝彦・市村祐子共編『大庭屋平井家茶会々記集―貯月菴宗從茶事会記録―』解題（大阪市史料集 第四十八輯 大阪市史編纂所編 大阪市史料調査会 平成九年二月発行）九十六頁
- 註五 拙稿「大坂における幕末・明治初期の町人文化―大庭屋平井家の歴代当主と遠州流茶道―」（熊倉功夫編『茶人と茶の湯の研究』所収 思文閣出版 平成十五年十二月）四百四頁
- 註六 原田伴彦「平井家と茶の湯」（『大阪府の歴史』第四号所収 昭和四十八年十一月 大阪府史編纂室）十四頁
- 註七 前掲註六 十四頁参照
- 註八 前掲註六 十四頁
- 註九 前掲註六 十四〇十五頁参照
- 註十 前掲註六 十五頁
- 註十一 前掲註六 二十二頁
- 註十二 前掲註六 二十二頁
- 註十三 前掲註六 二十二頁
- 註十四 前掲註六 二十二頁
- 註十五 『角川茶道大事典』本文編所収（角川書店 平成二年五月発行）千五百五十八頁
- 註十六 山田哲也「茶書によって家元を目指した茶人青木宗鳳―浪華文庫の考察を通して―」（千宗室監修・筒井紘一編『茶道学大系』第十卷 茶道の古典所収 淡交社 平成十三年三月発行）二百五五頁 注①
- 註十七 前掲註十六
- 註十八 鷲谷樗風著『維新の大阪』（輝文館、昭和十七年）二二三〇二三四頁
- 註十九 前掲註十八
- 註二十 笑福亭松鶴については、「芸能懇話」十一号特集笑福亭松鶴（大阪芸能懇話会 一九九七年）によると、七世まで続いている。故平井勝彦氏の口伝の年代から考えると、五世（明治十七年〇昭和二十五年 一八八四〇一九五〇）あたりではないかと考えられる
- 註二十一 露の五郎編『五代目 笑福亭松鶴集』（青蛙房 昭和四十六年九月所収）「次の御用日」百十九頁
- 註二十二 「草間伊助筆記巻第二」（『大阪市史』第五巻所収 大阪市役所蔵版 清文堂出版 昭和四十年四月復刻版発行）八百三十五頁
- 註二十三 前掲註二十二 八百三十五〇八百三十六頁
- 註二十四 前掲註二十二 八百六十五〇八百七十四頁
- 註二十五 中川すがね『大坂両替商の金融と社会』（清文堂 平成十五年十二月発行）百三頁
- 註二十六 前掲註二十五 十八頁
- 註二十七 西川幸治・守谷剋久「第一章 京都の新生 第一節 古都の脱皮」（京都市編・林屋辰三郎責任編集『京都の歴史』8 古都の近代所収 學藝書林 昭和五十年三月）十八頁
- 註二十八 前掲註二十七 十八頁
- 註二十九 前掲註二十七 十七頁
- 註三十 前掲註二十七 十七頁
- 註三十一 前掲註二十七 十七頁
- 註三十二 前掲註二十七 十八頁
- 註三十三 前掲註二十七 十八頁
- 註三十四 前掲註二十七 三十八頁
- 註三十五 前掲註二十七 三十八頁
- 註三十六 前掲註二十七 三十八頁
- 註三十七 内閣官報局『明治二年 法令全書』二十三頁
- 註三十八 国立国会図書館電子図書館立法情報 日本法令索引（明治

前期編) 【明治前期編法令詳細情報】『法令全書』【大蔵省第91】

がいます。

註三十九 国立国会図書館電子図書館立法情報 日本法令索引(明治

註四十九 「Kakan 生活と実務に役立つ計算」(カシオ計算機株式会社)

前期編) 『法令全書』明治四年十一月大蔵省「第九十一 十一月

「江戸時代の時刻換算(不定時法)」で、時刻を割り出す時期を

五日 東海道驛々其他管轄府懸」条

「二十四節気」の「清明(四月二十日頃)」に設定し、計算を行っ

註四十 前掲註三十八 【明治前期編 法令詳細情報】『法令全書』

た数値である。場所の設定は予め決められており、「江戸の時鐘」

大蔵省第二号

(江戸両国あたり)であるので、京都の時刻は割り出された数値

註四十一 大阪経大会大北文次郎編集兼発行『大阪経大論集第二二号』

よりも遅くなる。

(昭和三十三年五月)所収 二頁

註五十 登坂和洋「特集 一極集中を打ち破れ 「愛」と「技術」

註四十二 前掲註四十一 四頁

が地域を救う 京都のベンチャー精神は輝き続けるか」

註四十三 前掲註四十一 四頁

(独立行政法人科学技術振興機構 (JST) 産学連携事業本部産学

註四十四 神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ「新聞記事文庫」

連携推進部編集・発行『産学官連携ジャーナル(月刊)』

内「京都市出新聞」所収

二〇〇九年一月号 平成二十一年一月所収) 十九頁

註四十五 植村善博・小林善仁・木村大輔・進藤美奈・山中健太・浅子里絵

「舎密」の邦訳語源は、林屋辰三郎・藤岡謙二郎「序説」

・杉山純平・三宅智志・山下博史「木津川・宇治川低地の地形と

所収 學藝書林 昭和五十年三月)の五頁に「ケミストリーを意味

過去四〇〇年間の水害史(1)」(『京都歴史災害研究第』七号

する舎密仮局」との記述がある。これは「化学」の英訳である。

(立命館大学 歴史都市防災研究所 平成十九年三月所収) 二頁

管見では、語源についてはオランダ語と英語の二説が存在する。

註四十六 国際日本文化研究センターホームページ

註五十一 前掲註五十 十九頁

所蔵地図データベース 地図番号〇〇二一五六二六三

註五十二 前掲註二十七 十八頁註七十二

現所蔵番号: YG/7/GJ156/K v、002156263

註五十三 瀬川光行発行兼編集『日本之名勝』(明治三十三年二月)

形態: 版本・多色

註五十四

大阪毎日新聞社京都支局編『維新の史蹟』

大きさ: 百二十一×八十八

註五十五

(大阪毎日新聞社京都支局 昭和十四年六月) 六十八頁

註四十七 久御山町総務部広報行政課編集・発行『久御山町統計書

後藤恭生「第五章都市圏の拡大 第三節 交通網の整備」

平成21年度版』(平成二十二年三月所収) 一頁

(京都市編・林屋辰三郎責任編集『京都の歴史』8 古都の近代

註四十八 坂本博司「上林一族と御用茶師仲間―解題にかえて―」

學藝書林 昭和五十年三月所収) 四百四十七頁

(『収蔵文書調査報告書6 上林春松家文書』宇治市歴史

前掲註五十五 四百四十八頁

資料館 平成十六年三月)所収 五頁表「維新後の宇治茶師」

註五十七 前掲註五十五 四百四十五頁

「御通茶師」は森江惣左衛門の他に片岡道二、西村了以

註五十八 前掲註五十五 四百四十五頁

(了道)、河村宗順(享三郎)、橋本玄可(規矩男)、馬場

註五十九 淀川資料館「淀川を上り下りした舟のさまざま」(淀川資料館

宗円、森本道加、喜多立玄、菱木宗見(時之助)、宮林有齋

「淀の流れ」第六十四号所収 平成十四年三月) 二頁

(源造)、新善右衛門、梅林宗雪、永田七郎右衛門の十二人

註六十一 前掲註五十五 四百四十五頁  
前掲註五十五 四百四十九頁に、

「京都といえ、むしろ、この馬車の数は意外と少ないものであった。明治九年七輛、同十三年十四輛、同十四年十三輛と数えられているから、大したものではない。」と記述があるが、明治四年についての記述はない。

註六十二 前掲註五十五 四百四十九頁

註六十三 国立国会図書館電子図書館立法情報 日本法令索引(明治前期編)『法令全書』明治二年【第三百十四】法令名—角倉伊織ノ

嵯峨川高瀬船支配ヲ罷ム 発令年月日—明治二年三月二十四日

註六十四 西山松之助「家元」(『角川茶道大辞典』六十八頁)

註六十五 林左馬衛「流儀と流派」(『角川茶道大辞典』所収)

千四百三十五頁

註六十六 筒井紘一「上流の茶と下流の茶」(千賀四郎編集『茶道聚錦』

5茶の湯の展開所収 小学館 昭和六十年十二月) 五十四頁

註六十七 西山松之助「日本芸能と家元」西山松之助・三條西公正編集

『伝統と現代』10 茶と香所収 五十三頁

註六十八 林左馬衛「石州流」『角川茶道大辞典』所収 七百二十九頁

註六十九 廣田吉崇「流派としての遠州流の展開—その系譜と点前—」

(野村美術館学芸部編集『野村美術館研究紀要』第二十六号所収 野村文華財団 平成二十九年三月十日)

註七十 前掲註六十九 二十七頁

註七十一 前掲註六十九 二十八頁

註七十二 山田哲也「浪華の茶匠初代宗鳳・青木凡鳥」(熊倉功夫編

『茶人と茶の湯の研究』所収(思文閣出版 平成十五年十二月) 三百二十五頁

註七十三 山田哲也「茶書によって家元を目指した茶人青木宗鳳」(千

宗室監修・筒井紘一編『茶道学体系』第十卷・茶の古典 淡交 平成十三年四月所収) 百八十七頁

註七十四 前掲註七十三 百八十七頁

註七十五 前掲註七十三 百九十四頁

註七十六 前掲註七十三 百九十七頁

註七十七 前掲註七十三 百九十四頁参照

註七十八 前掲註七十三 百八十頁

註七十九 前掲註七十三 百八十一頁

註八十 前掲註七十三 百八十二頁

註八十一 前掲註七十三 百八十五頁

註八十二 前掲註七十三 二百四頁

註八十三 前掲註七十三 百九十七頁参照

註八十四 前掲註七十三 百九十九頁

註八十五 前掲註七十三 百九十六頁

註八十六

宇治市歴史資料館編集・発行『収蔵資料調査報告書』15  
片岡道二家文書所収(平成二十五年三月)三十七頁  
翻刻史料「藝陽罷下り差出願文扣」史料番号33  
(差出人片岡道二光宣 万延元年)

半切紙

口上

今度為御礼御国へ罷出 御家様方より為御礼煎茶一壺  
進上仕御玄関へ罷出候節願書持参仕候、然ル処差上物并願  
書是は御茶道方へ向御差出被成候様ニ而以御使被仰下右ニ  
付貴宅へ持参仕候処、前代道二不束之次第被仰聞候趣御尤  
至極奉存候、何分前代之者氣尽已而(ママ)仕乱心者ニ御座候

付親

類共附会無之内段々増長致候付無余儀手逼入置御座候処追  
々病氣差重り五力年以前相果申候、且又入用之書留類一切  
無之様相成何事も相分り不申当惑仕候次第御座候、就而ハ  
貴所様方種々御配意被下候趣誠御氣之毒之段御察申上候、  
私代右様之事共仕間敷候間是迄行違私へ御免被下古来之通  
万端御取成之程偏奉願上候以上

八月

片岡道二

光宣

右近様茶道也

久保玄佐様

久保貞佐様

主水様茶道也

中村泰心様

□□(虫損)差略有之

註八十七

尚、当註の上田家の箇所については、上田宗嗣(現在、茶道上田宗箇流第十六代家元 宗冏氏)「武将茶人上田讓翁」図録「広島城築城四百年記念 幕末明治の芸藩と国老上田家展 激動の時代を生きた武将茶人、讓翁の世界。」(編集・発行(財)広島市文化振興事業団 平成元年十月二十七日発行)所収 四十九頁、五十一頁を参照した。

口上書の大意は、今度御礼に御国(安芸広島)に罷り出、御家様方(浅野家)より御礼の為、御煎茶一壺を進上する

為に御玄関へ罷り出た節に願書を持参したところ、差上物と願書は今後御茶道方へ差し出すようにと御使が仰せ下されたので、貴宅に持参した。

前代の道二が不束の次第と仰せ聞いた趣は、ご尤もと存じ奉る。なにぶん前代の者は気促で乱心者の為に親類共に付会もなく、段々増長し追々病気の為、五カ年以前に果てていた。且つ又、入用の書留類については一切なく、何事も分からなく当惑した次第である。貴所様方に種々の御配意を下された趣は誠に御気の毒とお察し申し上げます。私の代には右の様な事はないので、これまでの行違ひは私に御免下されて古来通り万端お取り計らいをお願い奉る である。

宛先は「右近様茶道也 久保玄佐様 久保貞佐様」と

「主水様茶道也 中村泰心様」である。

「右近様」とは、三原浅野家の三原城第十二代城主である浅野忠英のことで、「茶道」は久保玄佐並びに久保家の家人と思われる「久保貞佐」の名が見える。

もう一方の宛先の「主水様」とは、広島藩浅野家国老の上田家十二代にあたる上田安敦(讓翁 文政三年五月二十一日〜明治二十一年十二月二十六日 一八二〇〜一八八八)のことで、「茶道」の中村泰心は上田家の「上田家茶道師範預」の十三代中村泰心(生没年不詳)のことである。

口上書の大意は、今度御礼に御国(安芸広島)に罷り出、御家様方(浅野家)より御礼の為、御煎茶一壺を進上する為に御玄関へ罷り出た節に願書を持参したところ、差上物と願書は今後御茶道方へ差し出すようにと御使が仰せ下されたので、貴宅に持参した。

前代の道二が不束の次第と仰せ聞いた趣は、ご尤もと存じ奉る。なにぶん前代の者は気促で乱心者の為に親類共に付会もなく、段々増長し追々病気の為、五カ年以前に果てていた。且つ又、入用の書留類については一切なく、何事も分からなく当惑した次第である。貴所様方に種々の御配意を下された趣は誠に御気の毒とお察し申し上げます。私の代には右の様な事はないので、これまでの行違ひは私に御免下されて古来通り万端お取り計らいをお願い奉る である。

宛先は「右近様茶道也 久保玄佐様 久保貞佐様」と

「主水様茶道也 中村泰心様」である。

「右近様」とは、三原浅野家の三原城第十二代城主である浅野忠英のことで、「茶道」は久保玄佐並びに久保家の家人と思われる「久保貞佐」の名が見える。

もう一方の宛先の「主水様」とは、広島藩浅野家国老の上田家十二代にあたる上田安敦(讓翁 文政三年五月二十一日〜明治二十一年十二月二十六日 一八二〇〜一八八八)のことで、「茶道」の中村泰心は上田家の「上田家茶道師範預」の十三代中村泰心(生没年不詳)のことである。

口上書の大意は、今度御礼に御国(安芸広島)に罷り出、御家様方(浅野家)より御礼の為、御煎茶一壺を進上する為に御玄関へ罷り出た節に願書を持参したところ、差上物と願書は今後御茶道方へ差し出すようにと御使が仰せ下されたので、貴宅に持参した。

前代の道二が不束の次第と仰せ聞いた趣は、ご尤もと存じ奉る。なにぶん前代の者は気促で乱心者の為に親類共に付会もなく、段々増長し追々病気の為、五カ年以前に果てていた。且つ又、入用の書留類については一切なく、何事も分からなく当惑した次第である。貴所様方に種々の御配意を下された趣は誠に御気の毒とお察し申し上げます。私の代には右の様な事はないので、これまでの行違ひは私に御免下されて古来通り万端お取り計らいをお願い奉る である。

宛先は「右近様茶道也 久保玄佐様 久保貞佐様」と

「主水様茶道也 中村泰心様」である。

「右近様」とは、三原浅野家の三原城第十二代城主である浅野忠英のことで、「茶道」は久保玄佐並びに久保家の家人と思われる「久保貞佐」の名が見える。

もう一方の宛先の「主水様」とは、広島藩浅野家国老の上田家十二代にあたる上田安敦(讓翁 文政三年五月二十一日〜明治二十一年十二月二十六日 一八二〇〜一八八八)のことで、「茶道」の中村泰心は上田家の「上田家茶道師範預」の十三代中村泰心(生没年不詳)のことである。

口上書の大意は、今度御礼に御国(安芸広島)に罷り出、御家様方(浅野家)より御礼の為、御煎茶一壺を進上する為に御玄関へ罷り出た節に願書を持参したところ、差上物と願書は今後御茶道方へ差し出すようにと御使が仰せ下されたので、貴宅に持参した。

前代の道二が不束の次第と仰せ聞いた趣は、ご尤もと存じ奉る。なにぶん前代の者は気促で乱心者の為に親類共に付会もなく、段々増長し追々病気の為、五カ年以前に果てていた。且つ又、入用の書留類については一切なく、何事も分からなく当惑した次第である。貴所様方に種々の御配意を下された趣は誠に御気の毒とお察し申し上げます。私の代には右の様な事はないので、これまでの行違ひは私に御免下されて古来通り万端お取り計らいをお願い奉る である。

宛先は「右近様茶道也 久保玄佐様 久保貞佐様」と

「主水様茶道也 中村泰心様」である。

註八十八

註八十九

註九十

註九十一

註九十二

註九十三

註九十四

註九十五

拙稿「幕末明治初期茶道史への一試論―大坂町人大庭屋平井家十代貯月菴宗従の遠州流茶道を中心として―」(野村美術館学芸部編集『野村美術館紀要』第七号所収 野村文華財団発行 平成十年三月) 七十七〜七十一頁

前掲註七十三 二百五頁

拙稿「大坂における幕末・明治初期の町人文化―大庭屋平井家の歴代当主と遠州流茶道―」(熊倉功夫編『茶人と茶の湯の研究』所収 思文閣出版 平成十五年十二月) 四百二十三頁

渡邊虹衣編著『高谷宗範傳』(松殿山荘茶道会 昭和十年) 三十一、九十七頁

廣田吉崇「流派としての遠州流の展開―その系譜と点前―」(野村美術館学芸部編集『野村美術館研究紀要』第二十六号所収 野村文華財団 平成二十九年三月) 二十二頁

前掲註九十 三十一〜三十二頁

前掲註十五 七百六十二頁

前掲註十五 籠谷真智子氏分担執筆項目「藪内劍仲」 千三百六十八頁

鈴木半茶「利休と劍仲―うらやましの文と伊豫すだれの文―」(『日本美術工藝』百四十二・八月号所収 日本美術工藝社 昭和二十五年八月) 十一頁に、「うらやましの文」の読み下し文が記されている。それは次の通りである。

御禮本 望二候、誠に取亂タル茶ト

可申、

今午者古田殿申候間及晚候て御出候ハ

者一服可申候

あら、きのとく、いそかはし、さ湯にても

茶

にても無之候、うき世のすきはひ計(三)候

貴所の御すまいうら山しく候、かしく

易(花押)

藪中齋 回章

註九十六 末宗廣「大阪の茶人 傳記稿」(『日本美術工藝』菁五十号)

所収 日本美術工藝社 昭和二十三年)

五十三頁

註九十七 拙稿「幕末明治初期茶道史への一試論―大坂町人大庭屋

平井家十代貯月菴宗従の遠州流茶道を中心として―

(野村美術館学芸部編『野村美術館研究紀要』第七号

野村美術館 平成十年三月所収)

七十二〜七十四頁

註九十八 平井勝彦・市村祐子編『大庭屋平井家茶会々記集―

貯月菴宗従茶事会記録―』大阪市史料第四十八輯(大阪市史

編纂所編集/大阪市史料調査会 平成九年二月所収)二頁

註九十九 渡邊常庵「環堵會」(『日本美術工藝』五十七号所収)に

よると、梅上沢融の先代にあたる尊融は、大阪御堂筋の津

村別院にあつた「環堵」と名付けられた茶席で、昭和九年

(一九三四)の春頃から月釜を掛けて客を招いていた。

約一年間続いた後に梅上尊融の提唱により「環堵會」が

生まれ、各流の有志が寄り、会員持ち回りで毎月十日を釜

日と定めて茶会を開いていた。

「環堵會」は会員の知友、数寄者にも公開され、昭和十

八年(一九四三)頃まで続会をしていた。

註百 前掲註十五 鈴木宗康氏分担執筆項目「常磐饅頭」

九百九十六頁下段二十八行目〜三十二行目

註百一 「圓徳寺」の字体では、現在、大阪市生野区異と同市安倍野区

旭町に二寺が存在する。「円徳寺」の字体では、同市城東区東中浜

に一寺が存在するが、「園徳寺」の字体では、管見では存在しない。

註百二 高橋義雄『近世道具移動史』

(慶文堂出版 昭和四年十二月) 六十〜六十一頁

前掲註十五 長崎靖子氏分担執筆「玉水焼」八百四十九頁によると、

「楽家四代一入の庶子一元によって山城国玉水村に開かれ

た楽焼の窯。(中略) 玉水焼の作風は、黒楽・赤楽を主体

に、一入の朱釉を做つたもの、あるいは本阿弥光悦、三代

代道入の作風を写したものが多し」とされている。

樂焼の一つとして数えられるが、拙稿では「千家十職」

註百四 鳥井壽山人『生ける豊太閤』(世界創造社 昭和十四年七月)

五十五頁

註百五 川島朋子「史料紹介 明治後期の表千家―富田清助日記の記事を

めぐって―」(『茶の湯研究 和比』四号所収 不審菴文庫編集

平成十九年) 六十四頁

註百六 前掲註百二 六十四頁

註百七 神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ新聞記事文庫

時事新報社「第三回調査 全国五拾萬圓以上資産家」

大正五年十月四日付「大阪府の廿三」

註百八 『平安女学院八十五年史』(昭和三十五年十月 非売品)

明治二十五年十月二十日時点では、

「大阪市東區淡路町式丁目四拾四番屋敷士族 京都府上京区烏丸通

丸太町上ル春日町第四番内老号寄留」という身分と住所であつた。

註百九 前掲註百五 四十九頁

「割烹実習」と「体操」についても記されており、これらは左記の

通りである。

註百十 「割烹ハ高級生ヲシテ時間外ニ実習セシム」

「体操ハ毎日十五分之ヲ行フ」

齋藤康彦「近代数寄者の大寄せ茶会と社会事業」

〔山梨大学教育人間学部紀要〕第十卷 平成二十年三月所収)

三百三頁

註百十一 前掲註百七

註百十二 前掲註百七

註百十三 脇田修『近世大坂の経済と文化』(人文書院 平成六年三月)

三十六頁

註百十四 前掲註百十 百七十四頁

註百十五 前掲註百十 百七十四頁

註百十六 前掲註百十 百七十五頁

註百十七 前掲註百十 百七十四頁

註百十八 前掲註百十 百七十五頁

註百十九 前掲註百十 百七十八頁

註百二十 前掲註百十 百七十八頁

註百二十一 宮本又次『大阪町人論』(ミネルヴァ書房 昭和四十六年

六月)二百十六頁

註百二十二 前掲註百十八 二百十七頁

註百二十三 前掲註百十八 二百十七頁

註百二十四 檜林忠男『煎茶の世界』(徳間書店 昭和四十六年九月)

百四十一頁

註百二十五 前掲註百十八 二百十七頁

註百二十六 前掲註百十八 二百十八頁

註百二十七 宮本又次『大阪経済人と文化』(実教出版 昭和五十八年六月)

三〇四頁

註百二十八 前掲註百十八 四頁

註百二十九 前掲註九十六 福田三次「藪内節庵と篠園会」

六十頁〜六十一頁

註百三十 福沢諭吉「新女大学」(山住正己編『福沢諭吉教育論集』所収

岩波文庫 平成八年)



【二章】

註一 本居宣長記念館編『本居宣長』（平成十三年十二月二十日発行）

鈴木香織 二百四十～二百四十一頁

註二 前掲註一 吉田悦之 二百四十頁

註三 前掲註二 吉田悦之 二百四十頁

註四 前掲註二 吉田悦之 百八十五頁

註五 前掲註四 吉田悦之 百八十五頁

註六 前掲註四 吉田悦之 百八十三頁

註七 前掲註四 吉田悦之 百八十五頁

註八 前掲註四 吉田悦之 百八十二頁

註九 前掲註四 吉田悦之 百八十五頁

註十 前掲註四 吉田悦之 百八十四頁

註十一 戸田勝久「近代の茶の湯の基盤と展開―東京の裏千家を支点として」（中村昌生編・熊倉功夫責任編集『茶道聚錦

六 近代の茶の湯』所収 昭和六十年二月二十二日

小学館発行）二百七～二百十七頁

註十二 前掲註十一 二百十四～二百十七頁

註十三 前掲註十一 二百十四～二百十五頁

註十四 前掲註十一 二百十五頁

註十五 前掲註十一 二百十五頁

註十六 前掲註十一 二百十五頁

註十七 前掲註十一 二百十五頁

註十八 茶道資料館編集・発行『平成十四年春季特別展

近代茶道への軌跡 裏千家十一代玄々斎宗室を中心に』（茶道資料館 平成十四年三月二十日発行）

（茶道資料館 平成十四年三月二十日発行）

筒井紘一「玄々斎宗室の生涯（承前）」（茶道資料館

編集・発行『平成十四年春季特別展 近代茶道への軌跡

裏千家十一代玄々斎宗室を中心に』所収 茶道資料館

平成十四年三月二十日発行）百五十五頁

註十九

註二十 前掲註十九 百五十五頁

註二十一 前掲註十九 百五十六頁

註二十二 前掲註十九 百五十六頁

註二十三 前掲註十九 百五十七頁

註二十四 前掲註十九 百五十七頁

註二十五 前掲註十九 百五十八頁

註二十六 前掲註十九 百五十八頁

註二十七 前掲註十九 百五十九頁

註二十八 前掲註十九 百六十八頁

註二十九 前掲註十九 百六十九頁

註三十 前掲註十九 百六十九頁

註三十一 前掲註十九 百六十九頁

註三十二 前掲註十九 百七十五頁

註三十三 戸田勝久「玄々斎と松阪の社中―長井同玄斎、小津、

長谷川、三井などの諸家―」（茶道資料館編集・発行

『平成十四年春季特別展 近代茶道への軌跡

裏千家十一代玄々斎宗室を中心に』所収 茶道資料館

平成十四年三月二十日発行）

註三十四 司馬遼太郎『街道をゆく 三十三』（朝日新聞社

平成元年十一月出版）

註三十五 前掲註十一 百七十六頁

註三十六 前掲註十一 百九十六頁

註三十七 前掲註十一 百七十七頁

註三十八 前掲註十一 百七十七頁

註三十九 前掲註十一 百七十七頁

註四十 前掲註十一 百七十七頁

註四十一 吉田悦之「圓居の文化―松坂町人文化の多層性―」

今日庵文庫茶道文化研究編集委員会

『茶道文化研究 第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』

（平成二十五年三月二十八日発行）所収 十九頁

註四十二 前掲註四十一 十九頁

註四十三 前掲註四十一 二十〇～二十一頁

註四十四 前掲註四十一 二十一頁

註四十五 前掲註四十一 二十一頁

註四十六 前掲註四十一 二十一頁

註四十七 前掲註四十一 二十五頁

註四十八 前掲註四十一 二十六頁

註四十九 前掲註四十一 二十六～二十七頁

註五十 前掲註四十一 二十七頁

註五十一 前掲註四十一 二十七頁

註五十二 前掲註四十一 二十七頁

註五十三 前掲註四十一 二十七頁

註五十四 大喜多甫文「商人町松坂―松阪商人の文化的活動―」

今日庵文庫茶道文化研究編集委員会

『茶道文化研究 第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』

(平成二十五年三月二十八日発行) 所収 四十一頁

註五十五 前掲註五十四 四十一頁

註五十六 前掲註五十四 四十一頁

註五十七 前掲註五十四 四十二頁

註五十八 前掲註五十四 四十二頁

註五十九 前掲註五十四 四十二頁

註六十 前掲註五十四 四十二頁

註六十一 前掲註五十四 四十二頁

註六十二 前掲註五十四 四十二頁

註六十三 前掲註五十四 四十二頁

註六十四 前掲註五十四 四十二～四十三頁

註六十五 前掲註五十四 四十三頁

註六十六 前掲註五十四 四十三頁

註六十七 前掲註五十四 四十三頁

註六十八 前掲註五十四 四十三頁

註六十九 上野利三「玄々齋と射和の竹川竹齋」

今日庵文庫茶道文化研究編集委員会

『茶道文化研究 第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』

(平成二十五年三月二十八日発行) 所収 四十六頁

註七十 前掲註六十九 四十六頁

註七十一 前掲註六十九 五十六頁

註七十二 前掲註六十九 五十八頁

註七十三 前掲註六十九 五十八頁

註七十四 前掲註六十九 五十八頁

註七十五 龍泉寺由佳「伊勢商人津・川喜田久太夫家の教養と半泥子―石水博物館の所蔵品から―」

今日庵文庫茶道文化研究編集委員会

『茶道文化研究 第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』

(平成二十五年三月二十八日発行) 所収 七十一頁

註七十六 前掲註七十五 七十一～七十二頁

註七十七 前掲註七十五 七十六頁

註七十八 戸田宗安「勢州松坂茶事覚書」

今日庵文庫茶道文化研究編集委員会

『茶道文化研究 第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』

(平成二十五年三月二十八日発行) 所収 百二十七頁

註七十九 前掲註七十八 百二十八頁

註八十 前掲註七十八 百二十九頁

註八十一 前掲註七十八 百二十九頁

註八十二 日統社編輯部『油界の巨星 小倉常民氏』

(日統社 昭和三月二十五日発行) 三十頁

註八十三 前掲註七十八 百二十九頁

註八十四 前掲註七十八 百三十二～百三十三頁

註八十五 前掲註七十八 百三十三頁

註八十六 前掲註七十八 百三十三頁

註八十七 前掲註七十八 百三十三頁

註八十八 前掲註七十八 百三十三頁

- 註八十八 前掲註七十八 百三十四頁  
 註八十九 前掲註七十八 百三十四頁  
 註九十 前掲註七十八 百三十五頁  
 註九十一 前掲註七十八 百三十五頁  
 註九十二 前掲註七十八 百三十五頁  
 註九十三 前掲註七十八 百三十六頁  
 註九十四 前掲註七十八 百三十六頁  
 註九十五 前掲註七十八 百三十九頁  
 註九十六 前掲註七十八 百五十七頁  
 註九十七 前掲註七十八 百五十八頁  
 註九十八 上野利三『幕末維新 伊勢商人の文化史的研究』  
 (平成十三年二月二十八日 多賀出版株式会社発行)  
 三十三頁

- 註九十九 前掲註九十八 三十四頁  
 註百 永井謙吾『茶人 竹川竹斎とその周辺』(平成二十七年  
 十月 非売品)二百八十一頁  
 註百一 目録では銘を「高尾」と記しているが、史料には「高  
 雄」と記されていた。

註百二 本居宣長記念館編『本居宣長事典』

(平成十三年十二月二十日発行) 吉田悦之 二百四十頁  
 遠祖は本居県判官平健郷。その後、北畠国司家に仕え、一時は阿坂城目付を勤める。(以上、家伝) 一三代目七右衛門道印が小津家を名乗り居を松坂に移し、染め物業を営む。その子、道休は木綿業を開き「中興開祖」と称される。その曾孫が宣長で、この時に、商を廃し、再び本居を称する。宣長以後は国学の家系として、宣長の学問を明治期まで伝えた。

実子春庭の失明により、養子大平が宣長の後を受けて紀州藩に仕官、和歌山に住し、以後その名跡を嗣ぐ養子内遠、その子豊頼と学統は継承された。一方、春庭、その子有郷、養子信郷はそのまま松坂に住した。いわば大平系が学統継承者であるの

に對し、春庭系は家の継承者で、松坂の門人の協力の下、「遺言書」で指示された影前会を主催し、宣長の居宅と蔵書、稿本類を嚴重に管理した。

- 註百三 前掲註百二 岡本勝 六頁  
 註百四 前掲註百二 岡本勝 六頁  
 註百五 前掲註百二 岡中正行 百八十二頁  
 註百六 前掲註百二 岡中正行 百八十二頁  
 註百七 前掲註百二 岡中正行 百八十二頁  
 註百八 前掲註百二 吉田悦之 百八十一、百八十二頁  
 註百九 前掲註百二 吉田悦之 百八十五頁  
 註百十 本居宣長記念館『本居宣長記念館收藏品目録第二輯 器物篇』(昭和六十一年発行)「本居信郷翁」五頁

- 註百十一 前掲註百二 吉田悦之 百八十三頁  
 註百十二 前掲註百二 吉田悦之 百八十三頁  
 註百十三 前掲註百二 吉田悦之 百八十三、百八十四頁  
 註百十四 前掲註百二 鈴木香織 二百四十、二百四十一頁

国特別史跡(昭和二十八年三月三〇日指定)。明治二十九年八月鈴屋遺跡保存会設立にあたって、本居清造氏より北隣の宅地・裏屋敷・土蔵をのぞく他の大部分の土地・家屋が寄託された。同四二年一〇月、宣長旧宅の移築先は、当初山室山神社境内内(現松阪市役所の位置)が予定されていたが、松阪市魚町一六四五番地から松阪城跡公園内に、移築・復元をされ、宣長旧宅及び資料の管理のために保存会事務所の新設(現、「桜松閣」)、また、清造・豊頼両氏より寄託された遺墨・遺品の收藏のための倉庫建設、庭園の整備などがなされた。移築された旧宅は元禄四年(一六九一)に建てられ、もとは松坂職人町清光寺門前下手の小津喜兵衛宅向かいにあった。宣長の曾祖父道休の妻樹法尼が道休の没後に住んでいたもので、樹法没後は宣長の祖父唱阿の隠居所として使用していた。享保十一年(一七二六)、魚町に移され、その後借家としていたが、宣長父定利の没後、

宣長一二歳の時に、母勝や弟妹らとともに移り、七二歳で没するまで住んでいた。松阪城跡公園移築後、宅跡には旧宅の礎石・裏庭・井戸、春庭宅とされる家屋・土蔵が保存されている。

註百十五 大西源一『史跡本居宣長舊宅』（発行年月日不詳）  
三百八十二頁

註百十六 前掲註百十五 三百八十五〜三百八十六頁

一茶室及水屋ノ部分ハ、当初仏間ニシテ、三畳ヲ敷キ、一方ニ佛壇及押入レノ設アリシナリ。之レ又、諸氏ノ記憶セラル、所ニシテ、現状茶室及水屋天井ノ上部ニ、更ニ尚、当初仏間ノ天井、其儘ニ残存セルヲ見ルナリ。即チ仏壇ハ右方ニ在リテ、其幅一間トシ、左方半間ハ、押入タリシガ如ク、両脇共、當初ヨリ柱ノ残存シテ、仏壇框及鴨居痕跡ヲ存シ、尚仏壇ノ框、柱及棚板等ハ樺材ヲ用ヒ、春慶塗ヲ施セルモノナリ。何トナレバ、其材料ノ一部、柱、欄間及壇板等ハ、本居氏土蔵内ニ不用古材トシテ残存シ、寸尺、ヨク相当スルヲ見レバナリ。又該仏壇古材ハ其後ノ修繕ニ使用セシモノ少カラズ。書齋中窓手摺台ノ如キハ、仏壇ノ棚板ヲ使用シ、入口土間一隅ノ三角形小椽ノ框ハ、仏壇ノ上框ヲ使用シ、同椽板ハ、仏壇ノ棚板ヲ使用シ、該土間正面竇戸ノ敷居ハ、仏壇上ノ寄框ヲ使用シタル等ニテ、寸尺マタ良ク相當ナリ。悉ク此等ヲ集セシムレバ、缺損シテ不足ヲ告グルモノ、僅ニ二三ヲ出デズ。

當初ノ形状、歴然明瞭ナリ。即チ畳ニ接シテ、寄木上ニ引出シ、摺木ヲ入レテ、四個ノ引出ヲ設ケ、引出上ニハ框ヲ横へ、框内ニ棚板ヲ張りテ、寄框ヲ取付テ、此上ニ蹴込板ヲ嵌込ミ、蹴込上ハ、更ニ上框ヲ置キ、上框内ニハ、上棚板ヲ張詰メ、側ニハ側柱ヲ建テ、三方壁板張トシ、柱上ニハ臺輪ヲ廻ハシテ、天井ハ鏡板張トシ、上框ノ位置、上部天井臺輪下ニハ、檜模様線ヲセナル欄間ヲ嵌込ミタルナリ。要所ニ筋違ヲ取付ケ、野木舞ヲ廢シテ、裏板張トナセルノ類、是ナリ。

（傍線筆者。旧字体を新字体に直した。）

註百十七 前掲註百十五 三百六十三頁

註百十八 前掲註百二 鈴木香織 百五頁

註百十九 前掲註百二 吉田悦之 百五頁

註百二十 前掲註百二 岡本勝 六頁

註百二十一 前掲註百二 鈴木香織 百五頁

註百二十二 前掲註百二 鈴木香織 百五頁

註百二十三 前掲註百二 岡本勝 七頁

註百二十四 前掲註百二 岡本勝 七〜九頁

註百二十五 川崎市市民ミュージアム、四日市市立博物館、本居宣長記念館、朝日新聞社事業本部大阪企画事業部編『21世紀の本居宣長』図録（平成十六年九月十八日、朝日新聞社発行）所収 四十九頁〇『濟世録』（本居宣長筆、十冊）の説明によると、「医者としての帳簿。二十九歳頃から晩年に至るまで書き続けた。患者と投薬、及びその薬代を記す。

（中略）現存は十冊、約十六年間に残る。（後略）。とある。筆者は本居宣長記念館主任学芸員、吉田悦之氏。同図録には、宣長は診察・投薬の他、製薬とその販売をしていた事を窺える史料が掲載をされている。

註百二十六 前掲註百二 岡中正行 二百四十二頁

岡中氏は、「門人」の定義には諸説あるが、門人の範囲を「宣長

大平・春庭が関与して認定した者ということだろう。」と結論付けている。

註百二十七 前掲註百二十五 吉田悦之「本居宣長の思考法」十三頁

註百二十八 前掲註百二十五 吉田悦之「本居宣長の思考法」十三頁

註百二十九 前掲註百二 中村朱美 百八十六頁

註百三十 前掲註百二 吉田悦之 百八十一〜百八十二頁

註百三十一 前掲註百二 吉田悦之 百八十五頁

註百三十二 前掲註百二 吉田悦之 百八十三頁

註百三十三 前掲註百二 岡中正行 百八十二頁

- 註百三十四 前掲註百二 吉田悦之 百八十五頁  
 註百三十五 前掲註百二 吉田悦之 百八十五頁  
 註百三十六 前掲註百二 岡本勝 五頁  
 註百三十七 前掲註百二十五 図録『21世紀の本居宣長』  
 吉田悦之 二十七頁  
 註百三十八 前掲註百二 岡本勝 七頁  
 註百三十九 前掲註百二十五 図録『21世紀の本居宣長』二十六頁  
 本居宣長筆『日記』本居宣長記念館蔵 吉田悦氏解説文  
 註百四十 前掲註百二十五 図録『21世紀の本居宣長』二十七頁  
 ・「龍笛」本居宣長遺愛 本居宣長記念館蔵  
 ・「和琴」本居宣長遺愛 三井文庫蔵  
 の写真と解説文がある。
- 註百四十一 前掲註百二 中村朱美 百八十六頁  
 註百四十二 前掲註百二 岡中正行 百八十二頁  
 註百四十三 前掲註百二 吉田悦之 百八十二頁  
 註百四十四 前掲註百二 吉田悦之 百八十五頁  
 註百四十五 前掲註百二 吉田悦之 百八十三頁  
 註百四十六 前掲註百二 吉田悦之 百八十五頁  
 註百四十七 四日市市編集・発行『四日市市史』第十卷  
 史料編近世Ⅲ（平成八年発行）八百八十二頁
- 註百四十八 前掲註百四十七  
 註百四十九 本居宣長記念館発行  
 『本居宣長記念館収蔵品目録第二輯 器物篇』  
 （昭和六十一年八月発行）所収「鈴之部」 五十三頁  
 註百五十 山田勘藏著『本居春庭』  
 （本居宣長記念館発行 昭和五十八年） 百十八頁  
 註百五十一 本居宣長記念館発行  
 『本居宣長記念館収蔵品目録 第一輯 文書編』  
 （昭和六十年三月）三十三頁  
 註百五十二 明治神社誌料編纂所編輯『府縣郷社 明治神社誌料』

- （明治神社誌料編纂所発行  
 明治四十五年一月十五日発行）七十六頁  
 註百五十三 新田均「井上毅の構想と内務省の政策」  
 『現代神道研究集成編集委員会 委員長工藤伊豆編  
 『現代神道研究集成（第三卷）』神道史研究編Ⅱ  
 株式会社 神社新報社 平成十年十二月三十日発行）  
 所収 五百六十三頁
- 註百五十四 鈴木勝忠・岡本勝編『本居宣長記念館 蔵書目録五』  
 昭和五十四年八月発行  
 八十四〜八十五頁の翻刻による。
- 註百五十五 林屋辰三郎ほか編『角川茶道大事典』  
 （角川書店 平成二年五月一日発行）  
 項目名「長井鼎玄斎」（戸田勝久氏記述）  
 千十九頁
- 註百五十六 筒井紘一「松阪長谷川家文書にみる裏千家」  
 今日庵文庫茶道文化研究編集委員会  
 『茶道文化研究第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』  
 （平成二十五年三月二十八日発行）所収  
 「長谷川家略系図」（百八十三頁）から人物比定を  
 行った。
- 註百五十七 大喜多甫文「商人町松坂―松阪商人の文化的活動―」  
 今日庵文庫茶道文化研究編集委員会  
 『茶道文化研究第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』  
 （平成二十五年三月二十八日発行）所収 四十一頁
- 註百五十八 浅野松洞『三重先賢傳』（玄玄社 昭和六年）  
 註百五十九 前掲註百五十九 三百七十六頁

【三章】

註一 萬象園 現存しない。庭園内にあった屋形灯籠と殿様の腰掛石と伝承されてきた礎石は、移設し、保存されている。碑文あり。

碑文 萬象園の屋形灯籠・礎石（英数字は漢数字に直した）

「ここにある屋形灯籠と礎石（手前は殿様の腰掛石と呼ばれていました）は、萬象園（広島市中区羽衣町一番三〇号）より移設されたものです。

萬象園は、一六五七年（明暦三年）、浅野藩筆頭家老、三原浅野家により別邸として創始され明治維新にいたり、その後は分割譲渡されながらも、一九五八年（昭和三十三年）まで浅野家により所有されてきました。

庭園の様式は「池泉回遊式」で元安川の景観を借景とし大小様々な石組みによる庭園でした。

萬象園の名づけ親は郷土が生んだ国文学者頼山陽とされ、当時から縮景園に次ぐ名園と言われてまいりました。

この名園を一九五九年（昭和三十四年）に当時の日本電信電話公社が購入し、一九六〇年（昭和三十五年）四月に職員の福利厚生施設として「中国電信電話会館 萬象園」を開設いたしました。

その後、宿泊、結婚式にと、広く広島県内や全国の皆様にご利用いただけるようになり、庭園のある宿泊施設として好評を博してまいりましたが、近年においてはご利用いただく方々のニーズも大きく変化し、閉館することとなりました。

その閉館にあたり、萬象園に関する歴史と文化を後世に伝えるため、庭園内にあった屋形灯籠と殿様の腰掛石と伝承されてきた礎石を当時の面影を偲びここに移設し保存することといたしました。

二〇〇二年（平成一二年）四月

西日本電信電話株式会社 広島支店

註二 上田宗嗣『茶道 上田宗箇流』（広学図書 平成十六年十一月（第五刷））三十頁

註三 上田宗箇・上田宗篁『上田宗箇流茶の湯 入門編』（第一学習社 平成二十三年十二月）二頁

註四 前掲註三 三頁

註五 上田宗嗣「武将茶人上田讓翁」（広島市文化振興事業団編『幕末維新の芸藩と国老上田家展図録』所収 広島市文化振興事業団 平成元年十月）五十四頁

註六 前掲註五 五十一頁

註七 前掲註五 四十九頁

註八 前掲註五 四十九頁

註九 前掲註五 四十九頁

註十 広島市文化振興事業団編『幕末維新の芸藩と国老上田家展図録』（広島市文化振興事業団 平成元年十月二十七日）所収の年表（五十七頁）の元治元年二月二八日条には「登城。出陣の労として金若干を賜る。」、同年同月二九日条には「総督徳川慶勝より佩刀・槍穂・手綱を賜る。」と記載があるが、これは「家政概略」に記されている日付が異なる上に、賜品の内容が逆になっている。この点については、後日に検討すべき課題となろう。

註十一 平成二十二年に開催をされた茶の湯文化学会広島国内研究会（会期一月三十日〜三十一日）で、同月三十日にオリエンタルホテル広島に於いて催された懇親会上で、筆者が上田宗箇十六代家元から直接に伺ったことである。

註十二 観光案内地図「ようこそ広島へ！観光ガイドブック」平成廿五年五月 広島観光コンベンションビューロー観光振興部 内の、「広島市中心部地図」から広島城周辺の一部を引用

註十三 上田宗嗣『茶道 上田宗箇流』（広学図書 平成十六年十一月（第五刷））

註十四 上田宗嗣氏論文「上田流の歴史と茶書」（政治史・茶道史研究協

議会編『上田家文書調査報告書（上田家茶書集成）』所収 広島市教

育委員会 平成十七年三月）三十七頁

註十五 林保登『廣島繁盛記 附嚴島』（明治三十三年六月）九十三頁

註十六 広島市役所編『新修廣島市史 第四卷 文化風俗史編』（広島市役所

昭和三十三年十二月）二百三十六頁

註十七 『広島城下絵図集成』（広島市未来都市文化財団広島城平成廿五年

三月）四十四頁

註十八 前掲註十六二百八十一頁

註十九 広島市役所編『廣島市史 第四卷』（名著出版 昭和四十七年十二

月）七四三〜七四四頁 山名義方の「山水軒記」は、左記の

通りである

#### 山水軒記

#### 山名義方

廣城之陽村卷神崎山水之望踰於他境其為山也峰嶺百數間造形

爭為水也潮汐干頃於廓勢豪白雲綠霞時散光彩雄島嶼常著景

華宇內之勝所謂「嚴島神秀峯々鍾奇特立風烟有餘雪月無邊群

翰孤翼出沒乎碧嵐中懸帆盪」舟隱見乎藍浪上至其之妙色隱

晴之變態雖可賭焉不可道也然州人之」近遠于此多是行者唯行止

者唯止其故矯首而聊寄眸則為鮮矣蓋以其實是」天眞之卓質絕文

就之使人眼界豁閉靈府朗寥淨消塵慮者此衆俗之所以不」是一顧

也州之元老上田源重羽墅在此地年來踈牆儉屋而已去歲修舊造

新」不用奢營不施修飾園池氣澹樹石趣雅春花秋芳因彰美焉鳴禽

吟蟲自得所」焉軒以山水名之雖是非踞於良象亦非跨於坎儀披窓

則」漫馨接於座」軒之為名苟實賓也閒需記於僕僕之庸賤所

難應也然其厚以數固辭隣於不」遜乃試操」因有所欲道請道之古

人有言得於耳目與得之於心者所寓之樂」各適其適信有旨哉然私

詳之在物之足取者與其偏於耳目若心孰若自耳目」至於心今如斯

軒其於山水寓心有要孔聖之謂山水孟子之說海瀾以是為所」適則

其遊眺玩覽竟歸于道義之工夫而是樂之則亦何樂加旃今在源老若

亦」能適那適則於從大以務本遂得知仁並進而樂以壽乃可期焉於

是舉斯鄙語」而與所瞻視之少概併書以為記元祿歲次乙亥季春仲

澗州土山名義方」

欽記

註二十 林保登『廣島繁盛 附嚴島』（明治三十三年六月）百四十頁

註二十一 石井久雄編集『裏千家広嶋の阿ゆみ』 二頁

註二十二 前掲註十四 三十三頁

宗箇の茶は、今日まで上田家に伝えられきたが、その伝承の仕方は独特のものであった。むろん上田家代々も宗箇を崇敬し、その茶を修め、茶の湯に堪能であったが、藩家老という要職にあり、直接人に教えることはしなかった。野村、中村という二家に各々百石を与えて召し抱え、宗箇の茶の伝承・伝授をさせ、茶事預とよばれた。

流儀としての意識は古く、宗箇在命中の正保三年（一六四六）に記したと推定される「宗箇様御聞書」に重安流、御流儀、宗箇様流とある。茶事預の名称については、中村家六代中村泰心の箱書付や「他所往来門人控」（安政四年）を見ると、御流儀茶事預、上田流茶事預とあり、江戸時代後半には上田流茶事預の名称は確立している。

註二十三 前掲 註十五 三十四頁

安敦（号讓翁）の時代広島藩は、文化・文政期から嘉永期にかけての極度の財政難に加え、ペリー来航以来の軍備強化の負担も大きく、上田家もこれまで通りの家政では立ち行かなくなった。安敦は家督を継ぐと、早速家臣の村上佐一郎に命じて、財政建直しの案を作らせている。これは「御内輪雜費」まで及び一年間の経費予算は、銀百貫目（銀一貫目は約金二十両）と見積もられた。この内「御茶道諸入用」は四貫二百目とされており、茶事の会計に占める割合を知ることができ

註二十四 前掲註十四 史料編 参考13「雅遊謾録」 解題 二百九十六頁

註二十五 前掲註十四 二百九十六頁

註二十六 前掲註十四 史料編 参考13「上田家茶会記録」 解題

三百十六頁

この上田家茶会記録は、冊子の「茶会記明治十八年ヨリ」と他の一紙の四会よりなり、「茶会記明治十八年ヨリ」は、自会記四、他会記十一で、讓翁が六十九歳で没する三カ月前までの茶会記である。自会記では茶事預中村家七代豊次郎（快堂）が半東を務めている。他会記では、十八年十一月十三代亀次郎（安靖）を伴って出向き、翌十九年二月十日亀次郎が亭主を務め、薄茶は讓翁が担当している。十九年から讓翁が亡くなる二十一年までの三会は、亀次郎が亭主を務めている。二十年五月三十一日には山水軒で正午稽古茶会という名で讓翁が山水軒老人として亭主を、亀次郎が正客を務めている。讓翁最後の茶会である明治二十一年九月三十日の茶会も「主・山水軒、添・亀次郎、半東・豊次郎」とあり、相客や招いた客は、当時の上田流の高弟や数寄者達と思われ、家族の名も見える。明治十八年五月三日の自会記は客の名前のみとなっているが、この内容は5「明治十八年五月三日茶事記」に詳しい。この会では、薄茶席で道二が点前をしている。宗箇以来浅野家、上田家出入りの茶師で、この時期広島に逗留していたのであろう。この茶会には、織部より宗箇が所望した古来名高い伊賀花入「生爪」に木蓮を二本入れて使用している。この史料は、讓翁が茶事の内容、感想とともに、客と亭主を記していること、さらに次代の亀次郎を亭主あるいは客としたりしていることから、後継者としての養成を行っていることが窺われ、興味深い史料である。

その他四つの茶会記は、一紙の別々の記録で、明治十五年二月二十三日、明治十六年二月十三日、明治十八年五月三日、年代不明の四会である。明治十八年五月三日の茶会記は、1「茶会記明治十八年ヨリ」にある同日の茶会の詳しい内容となっており、これら一紙の茶会記は、讓翁が茶会をする際の準備するためのものかも知れない。

安敦は維新後、領地を奉還し、剃髪して山水軒讓翁と号して茶の湯三昧の生活に入っている。その生き方は、関が原の合戦に西軍に組みして敗れ、領地を没収された後剃髪し、宗箇と号して茶の湯に没頭し

た上田家の祖宗箇を彷彿とさせるものがある。

註二十八 前掲註十四 二百九十六頁

註二十九 NHKプロモーション『生誕四百五十周年記念 上田宗箇

武将茶人の世界展図録』第三章 茶の湯釜―強い興味―（平成二十三年十二月）

図版番号159、160 百三十〜百三十一頁

作品解説二百二十二頁作品番号160

註三十 前掲註五 五十五頁

註三十一 前掲註五 五十五頁

註三十二 前掲註五 五十一頁

註三十三 広島市役所『広島市史 第三卷』（広島市役所 大正十二年十二月）

二百三十八頁

註三十四 板倉聖哲「幕末期における東アジア絵画コレクションの史的

位置―近代との比較―」（関西中国書画コレクション研究会編・

発行『国際シンポジウム報告書 関西中国書画コレクションの

過去と未来』平成二十四年三月）所収 七十五頁

註三十五 上田流和風堂事務局次長小田聡之氏から書簡でご教示を頂いた。

註三十六 前掲註二十九 図版「第三章―宗箇の「ウツクシキ」世界」

「ゆかりの茶道具―宗箇の物数寄―」図版番号173〜174

図版解説二百十四頁

註三十七 前掲註五 五十九頁明治八年条

註三十八 前掲註五 五十一〜五十四頁

註三十九 前掲註五 五十四頁

註四十 前掲註十六 二百八十五頁

註四十一 前掲註三十五

註四十二 国立国会図書館近代アーカイブで、これらの書を閲覧可能である。

註四十三 林保登編『藝藩輯要 附藩土家系名鑑』（芸備風土研究会 昭和

四十五年七月）百九〜百三十七頁

註四十四 前掲註四十三 百三十八〜百五十八頁

註四十五 前掲註十四 四十頁



- 註四十六 前掲註十四 五十一頁  
註四十七 前掲註十四 三十三頁  
註四十八 前掲註十四 三十六、三十七頁  
註四十九 西山松之助『藝道と伝統 西山松之助著作集第二卷』（吉川弘  
文館 昭和五十九年六月）  
註五十 前掲註四十九 三百十一頁  
註五十一 前掲註四十九 三百十一頁  
註五十二 上田宗岡氏講話「日本人の美意識と茶室」平成廿五年十月  
十四日開催 井原遠鐘クラブ創立十五周年記念講演会・観月茶会  
（於・華鶴大塚美術館―岡山県井原市）  
註五十三 高橋義雄『近世道移動史』（慶文堂出版 昭和四年）六十、  
六十一頁

【四章】

- 註一 【太政官布告第二五一】(明治四年五月二十三日)
- 註二 『東京国立博物館百年史 資料編』(第一法規出版 昭和四十八年四月三十日) 五百七十二頁
- 註三 前掲註一 五百七十二頁
- 註四 『東京国立博物館百年史』(第一法規出版 昭和四十八年四月三十日) 二頁
- 註五 國雄行『博覧会の時代 明治政府の博覧会政策』(岩田書店 平成十七年五月) 二二三頁
- 註六 前掲註四 三十七〜三十八頁
- 註七 前掲註四 二十五頁
- 註八 前掲註四 六十三頁
- 註九 前掲註四 六十五頁
- 註十 依田徹『近代の「美術」と茶の湯 言葉と人とモノ』(思文閣出版 平成十五年六月二十五日) 五十一頁
- 註十一 文部省編『学制百年史』(帝国地方行政学会 昭和四十七年) 前掲註二 四百頁
- 註十二 前掲註二 四百頁
- 註十三 前掲註二 四百頁
- 註十四 椎名仙卓『日本博物館成立史 博覧会から博物館へ』(雄山閣 平成十七年六月二十日) 二十四頁
- 註十五 神野由紀『百貨店で〈趣味〉を買う 大衆消費文化の時代』(吉川弘文館 平成二十七年五月十日) 十四頁
- 註十六 前掲註十五 四十頁
- 註十七 前掲註十五 四十七頁
- 註十八 芳賀登『明治国家と民衆』(雄山閣 昭和四十九年十一月十五日) 百十頁
- 註十九 青木保ほか編『ハイカルチャー 近代日本文化論3』(岩波書店 平成十二年三月二十四日) 百八十頁
- 註二十 前掲註十九 百八十一頁
- 註二十一 前掲註十九 百八十一〜百八十二頁
- 註二十二 前掲註十九 百八十二頁
- 註二十三 前掲註十九 百八十七頁
- 註二十四 『京都府誌 上』(大正四年) 三百七十四〜三百七十五頁
- 註二十五 重久篤太郎『京都の英学―京都府女紅場・女学校』(『英学史 研究(5)』所収 昭和四十七年) 百一頁
- 註二十六 前掲註二十八 百四頁
- 註二十七 千宗守「曾祖父 一指齋を思う」(『武者小路千家第十一世一指齋―叟宗守居士百回忌記念 一指齋の茶の湯』所収 官休庵 平成九年九月二十八日) 九頁
- 註二十八 前掲註二十七 二十四〜二十五頁
- 註二十九 前掲註二十七 十四頁
- 註三十 前掲註二十七 十五〜十八頁
- 註三十一 倉田喜弘校注『芸能 日本近代思想大系』(岩波書店 昭和六十三年七月二十二日) 二百四十一〜二百四十二頁
- 註三十二 藝能史研究會編『日本芸能史7 近代・現代』(法政大学出版局 平成二年三月二十日) 五十七頁
- 註三十三 前掲註三十二 二十頁
- 註三十四 前掲註三十二 五十七頁
- 註三十五 前掲註二十七 二十五頁
- 註三十六 前掲註二十七 十九頁
- 註三十七 前掲註二十七 十九頁
- 註三十八 馬淵明子『ジャポニズム 幻想の日本』(星雲社 平成九年九月九日) 十一頁
- 註三十九 前掲註三十八 二十一頁
- 註四十 宮崎道生『近世・近代の思想と文化』(べりかん社 昭和六十年五月十六日発行) 百三十八頁
- 註四十一 前掲註四十 三十頁
- 註四十二 内田魯庵「利休の風格と其の時代的環境」(『茶道月報』所収 茶道月報社 昭和二十五年六月一日) 三頁

- 註四十三 福田恆存『傳統にたいする心構』(『日本文化研究 第八卷』所収  
新潮社 昭和三十五年七月十日) 二十二頁
- 註四十四 梅棹忠夫『梅棹忠夫著作集 第七卷 日本研究』所収(中央公論  
社 平成二年八月三十日) 三百六十六～三百六十七頁
- 註四十五 前掲註四十四 三百六十七頁
- 註四十六 前掲註四十四 三百七十八頁
- 註四十七 前掲註四十四 五百八十一頁
- 註四十八 熊倉功夫「序章 井伊直弼の生涯と茶の湯」(熊倉功夫編『井伊  
直弼の茶の湯』(国書刊行会平成十九年六月三十日) 十七頁
- 註四十九 阪急文化財団 逸翁美術館編『復活! 不昧公大圓祭—小林一三  
が愛した大名茶人・松平不昧』(阪急文化財団 逸翁美術館 平成  
二十五年三月二十九日) 七十三頁
- 註五十 復刻版編纂: 松平家編輯部『増補復刊 松平不昧傳』(原書房  
平成十一年十一月二十七日) 百三頁

## 参考文献

### 序章

### 書籍

- ・熊倉功夫『近代茶道史の研究』日本放送出版協会 昭和六十二年
- ・『講座 茶の湯全史 近代』思文閣出版 平成二十五年
- ・田中秀隆『近代茶道の歴史社会学』思文閣出版 平成十九年
- ・齋藤康彦『近代数寄者のネットワーク―茶の湯を愛した実業家たち―』思文閣出版 平成二十四年
- ・政治史・茶道史研究協議会編『上田家文書調査報告書(二分冊)』広島市教育委員会 平成十七年(上田家家政史料集成 上田家茶書集成)

### 第一章

### 書籍

- ・平井勝彦・市村祐子共編『大庭屋平井家茶会々記集―貯月菴宗従茶事会記 録―』解題(大阪市史料集 第四十八輯 大阪市史編纂所編 大阪市史料調査会発行 平成九年二月)
- ・鷺谷樗風『維新の大阪』輝文館 昭和十七年
- ・『草間伊助筆記巻第二』(『大阪市史』第五巻所収 大阪市役所蔵版 清文堂出版 昭和四十年四月復刻版)
- ・中川すがね『大坂両替商の金融と社会』清文堂 平成十五年
- ・西川幸治・守谷剋久「第一章 京都の新生 第一節 古都の脱皮」(京都市編・林屋辰三郎責任編集『京都の歴史8 古都の近代』 學藝書林 昭和五十年)
- ・久御山町総務部広報行政課編集・発行『久御山町統計書平成21年度版』平

### 成二十二年

- ・青山霞村『山本覺馬』同志社 昭和三十年
- ・大阪毎日新聞社京都支局編『維新の史蹟』大阪毎日新聞社京都支局 昭和十四年
- ・村井康彦・筒井紘一・赤沼多佳編『茶道美術手帳』淡交社 昭和六十二年
- ・後藤恭生「第五章都市圏の拡大 第三節交通網の整備」(第三版) 京都市編
- ・林屋辰三郎責任編集『京都の歴史8 古都の近代』 學藝書林 昭和五十年)
- ・青木充延編著・澤井常四郎増補『三原志稿』(得能正道編纂兼発行者 備後郷土史會発行 昭和十年)
- ・宇治市歴史資料館編集・発行『収蔵資料調査報告書15 片岡道二家文書』平成二十五年
- ・高橋義雄『近世道具移動史』慶文堂出版 昭和四年
- ・鳥井壽山人『生ける豊太閤』世界創造社 昭和十四年
- ・『平安女学院八十五年史』(昭和三十五年 非売品)
- ・松本康隆『近代における茶室創作の動向について―三代木津宗詮・小林一三・笛吹嘉一郎の作風を通して―』学位論文(京都工芸繊維大学 平成十八年乙第四百四十九号)
- ・櫻井敬太郎ほか著『京都府下人物誌 第一編』金口木舌堂 明治二十年
- ・脇田修『近世大坂の経済と文化』人文書院 平成六年
- ・宮本又次『大阪町人論』ミネルヴァ書房 昭和四十六年
- ・榎林忠男『煎茶の世界』徳間書店 昭和四十六年
- ・宮本又次『大阪経済人と文化』実教出版 昭和五十八年
- ・福沢諭吉『新女大学』(山住正己編『福沢諭吉教育論集』岩波文庫 平成八年)

### 論文

- ・熊倉功夫「日本茶道史の構想」(木芽文庫編集『茶湯 研究と資料』二十三号所収 思文閣出版 平成六年十一月二十五日発行)

- ・拙稿「大坂における幕末・明治初期の町人文化―大庭屋平井家の歴代当主と遠州流茶道―」（熊倉功夫編『茶人と茶の湯の研究』所収 思文閣出版 平成十五年十二月二十日発行）
- ・原田伴彦「平井家と茶の湯」（『大阪府の歴史』第四号所収大阪府史編纂室 昭和四十八年十一月発行）
- ・山田哲也「茶書によって家元を目指した茶人青木宗鳳―浪華文庫の考察を通して―」（千宗室監修・筒井紘一編『茶道学大系 第十巻 茶道の古典』淡交社 平成十三年三月一日発行）
- ・鈴木忠司「Ⅱ 伝統のなかの産業」（京都文化博物館学芸課第二課片岡肇・鈴木忠司編 図録『気球があがった―近代京都の一世紀―』 京都府京都文化博物館発行 昭和六十三年十月一日）
- ・植村善博・小林善仁・木村大輔・進藤美奈・山中健太・浅子里絵・杉山純平・三宅智志・山下博史「木津川・宇治川低地の地形と過去四〇〇年間の水害史(1)」（『京都歴史災害研究第七号』（立命館大学歴史都市防災研究所 平成十九年三月一日発行）
- ・坂本博司「上林一族と御用茶師仲間―解題にかえて―」（『収蔵文書調査報告書6上林春松家文書』宇治市歴史資料館 平成十六年三月三十一日発行）
- ・登坂和洋「特集 一極集中を打ち破れ 「愛」と「技術」が地域を救う 京都のベンチャー精神は輝き続けるか」（独立行政法人科学技術振興機構（SST）産学連携事業本部産学連携推進部編集・発行『産学官連携ジャーナル（月刊）二〇〇九年一月号』平成二十一年一月十五日発行）
- ・辻ミチ子「索引年表 7 維新の激動」（京都市編・林屋辰三郎責任編集『京都の歴史10 年表・事典古都』
- ・淀川資料館「淀川を上り下りした舟のさまざま」（淀川資料館発行「淀の流れ」第六十四号（平成十四年三月三十一日発行）
- ・拙稿「幕末明治初期茶道史への一試論―大坂町人大庭屋平井家十代貯月菴宗徒の遠州流茶道を中心として―」（野村美術館学芸部編集『野村美術館紀要 第七号』所収（財団法人 野村文華財団発行 平成十年三月十日）
- ・筒井紘一「上流の茶と下流の茶」千賀四郎編集『茶道聚錦5 茶の湯の展

- 開』昭和六十年十二月一日 小学館発行
  - ・西山松之助「日本芸能と家元」西山松之助・三條西公正編集『伝統と現代10 茶と香』
  - ・山田哲也「浪華の茶匠初代宗鳳・青木凡鳥」（熊倉功夫編『茶人と茶の湯の研究』所収（思文閣出版 平成十五年十二月二十日発行）
  - ・鈴木半茶「利休と劍仲―うらやましの文と伊豫すだれの文―」（『日本美術工藝』百四十二・八月号 日本美術工芸社 昭和二十五年八月一日発行）
  - ・末宗廣「大阪の茶人 傳記稿」（『日本美術工藝』菁五十号 日本美術工芸社 昭和二十三年発行）
  - ・岩崎公弥「近世後期尾張における農民的商品生産・流通と農間余業―『尾張徇行記』をもとに―」（愛知教育大学研究報告 第43輯』平成六年二月十日
  - ・川島朋子「史料紹介 明治後期の表千家―富田清助日記の記事をめぐって―」（『茶の湯研究 和比』四号 不審菴文庫編集 平成十九年発行）
  - ・齋藤康彦「近代数寄者の大寄せ茶会と社会事業」（『山梨大学教育人間学部紀要』第十巻 平成二十年三月十日発行）
- 電子記録類
- ・国立国会図書館電子図書館立法情報 日本法令索引（明治前期編） 近代デジタルライブラリー
  - ・神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ「新聞記事文庫」
  - ・国際日本文化研究センター所蔵地図データベース
  - ・「Kcisan 生活と実務に役立つ計算」（カシオ計算機株式会社）
  - ・瀬川光行発行兼編集『日本之名勝』（明治三十三年二月三十一日出版）国立国会図書館近代デジタルライブラリー
  - ・国立国会図書館 電子展示会「近代日本人の肖像」

第二章

辞典類

・本居宣長記念館編『本居宣長事典』 平成十三年

書籍

・『本居宣長記念館収蔵品目録 第一輯 文書編』本居宣長記念館 昭和六十年

・『本居宣長記念館収蔵品目録第二輯 器物篇』本居宣長記念館 昭和六十年

・鈴木勝忠・岡本勝編『本居宣長記念館 蔵書目録五』松阪市教育委員会 昭和五十四年

・茶道資料館編集・発行『平成十四年春季特別展 近代茶道への軌跡 裏千家十一代玄々斎宗室を中心に』茶道資料館 平成十四年

・司馬遼太郎『街道をゆく 三十三』朝日新聞社 平成元年

・日統社編輯部『油界の巨星 小倉常民氏』日統社 (昭和三月二十五日)

・上野利三『幕末維新 伊勢商人の文化史的研究』多賀出版 平成十三年

・永井謙吾『茶人 竹川竹斎とその周辺』平成二十七年 (非売品)

・大西源一『史跡本居宣長舊宅』(発行年月日不詳)

・朝日新聞社事業本部大阪企画事業部編『21世紀の本居宣長』朝日新聞社 平成十六年

論文

・四日市市編集・発行『四日市市史 第十卷 史料編近世Ⅲ』平成八年

・山田勘蔵著『本居春庭』本居宣長記念館 昭和五十八年

・明治神社誌料編纂所編『府縣郷社 明治神社誌料』明治神社誌料編纂所 明治四十五年

・『京都府誌 上』 大正四年

・戸田勝久「近代の茶の湯の基盤と展開―東京の裏千家を支点として」(中)

・村昌生編・熊倉功夫責任編集『茶道聚錦六 近代の茶の湯』所収 昭和六

十年二月二十二日 小学館発行)

・筒井紘一「玄々斎宗室の生涯(承前)」(茶道資料館編集・発行『平成十四年春季特別展 近代茶道への軌跡 裏千家十一代玄々斎宗室を中心に』茶道資料館 平成十四年三月二十日発行)

・戸田勝久「玄々斎と松阪の社中―長井同玄斎、小津、長谷川、三井などの諸家―」(茶道資料館編集・発行『平成十四年春季特別展 近代茶道への軌跡 裏千家十一代玄々斎宗室を中心に』 茶道資料館 平成十四年三月二十日発行)

・吉田悦之「圓居の文化―松坂町人文化の多層性―」今日庵文庫茶道文化研究編集委員会『茶道文化研究 第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』(平成二十五年三月二十八日発行) 所収

・大喜多甫文「商人町松坂―松阪商人の文化的活動―」今日庵文庫茶道文化研究編集委員会『茶道文化研究 第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』(平成二十五年三月二十八日発行) 所収

・上野利三「玄々斎と射和の竹川竹斎」今日庵文庫茶道文化研究編集委員会『茶道文化研究 第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』(平成二十五年三月二十八日発行) 所収

・龍泉寺由佳「伊勢商人津・川喜田久太夫家の教養と半泥子―石水博物館の所蔵品から―」今日庵文庫茶道文化研究編集委員会『茶道文化研究 第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』(平成二十五年三月二十八日発行) 所収

・戸田宗安「勢州松坂茶事覚書」今日庵文庫茶道文化研究編集委員会『茶道文化研究 第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』(平成二十五年三月二十八日発行) 所収

・新田均「井上毅の構想と内務省の政策」(現代神道研究集成編集委員会 委員長工藤伊豆編『現代神道研究集成(第三卷)』神道史研究編Ⅱ 株式会社神社新報社 平成十年十二月三十日発行)

・筒井紘一「松阪長谷川家文書にみる裏千家」今日庵文庫茶道文化研究編集委員会『茶道文化研究第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』(平成二十

年二月二十二日 小学館発行)

・筒井紘一「松阪長谷川家文書にみる裏千家」今日庵文庫茶道文化研究編集委員会『茶道文化研究第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』(平成二十

年二月二十二日 小学館発行)

・筒井紘一「松阪長谷川家文書にみる裏千家」今日庵文庫茶道文化研究編集委員会『茶道文化研究第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』(平成二十

年二月二十二日 小学館発行)

・筒井紘一「松阪長谷川家文書にみる裏千家」今日庵文庫茶道文化研究編集委員会『茶道文化研究第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』(平成二十

年二月二十二日 小学館発行)

・筒井紘一「松阪長谷川家文書にみる裏千家」今日庵文庫茶道文化研究編集委員会『茶道文化研究第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』(平成二十

年二月二十二日 小学館発行)

・筒井紘一「松阪長谷川家文書にみる裏千家」今日庵文庫茶道文化研究編集委員会『茶道文化研究第五輯 特集勢州松坂の藝文と茶の湯』(平成二十

年二月二十二日 小学館発行)

五年三月二十八日発行) 所収

- ・重久篤太郎「京都の英学―京都府女紅場・女学校」(『英学史研究(5)』昭和四十七年発行所収)

### 第三章

#### 書籍

- ・政治史・茶道史研究協議会編『上田家文書調査報告書(二六分冊)』広島市教育委員会 平成十七年(・上田家家政史料集成・上田家茶書集成)
- ・財団法人広島市文化振興事業団編『幕末維新の芸藩と国老上田家展図録』広島市文化振興事業団 平成元年
- ・上田宗嗣『茶道 上田宗箇流』広学図書 平成十六年(第五刷)
- ・林保登『広島繁盛記 附厳島』明治三十三年
- ・広島市役所編『新修広島市史 第四卷 文化風俗史編』広島市役所 昭和三十三年
- ・『広島城下絵図集成』広島市未来都市文化財団広島城 平成廿五年
- ・広島市役所『広島市史 第三卷』広島市役所 大正十二年
- ・『新修広島市史 第四卷 文化風俗史編』昭和三十三年十二月
- ・広島市役所編『広島市史 第四卷』名著出版 昭和四十七年
- ・林保登『広島繁盛 附厳島』明治三十三年
- ・石井久雄編『裏千家広嶋の阿ゆみ』
- ・NHKプロモーション『生誕四百五十周年記念 上田宗箇 武将茶人の世界展図録』平成二十三年

- ・『藝藩通史 第一卷』飯田米秋 昭和三十八年
- ・林保登編『藝藩輯要 附藩土家系名鑑』芸備風土研究会 昭和四十五年
- ・西山松之助『藝道と伝統 西山松之助著作集第二卷』吉川弘文館 昭和五十九年
- ・高橋義雄『近世道移動史』慶文堂出版 昭和四年

#### 論文

- ・上田宗嗣「武将茶人上田讓翁」財団法人広島市文化振興事業団編『幕末維新の芸藩と国老上田家展図録』平成元年十月二十七日、財団法人広島市文化振興事業団) 所収
- ・上田宗嗣氏論文「上田流の歴史と茶書」政治史・茶道史研究協議会編『上田家文書調査報告書(上田家茶書集成)』所収 平成十七年三月三十一日 広島市教育委員会
- ・板倉聖哲「幕末期における東アジア絵画コレクションの史的位位置―近代との比較―」(関西中国書画コレクション研究会編・発行『国際シンポジウム報 告書 関西中国書画コレクションの過去と未来』平成二十四年三月九日) 所収

#### 終章

#### 書籍

- ・『東京国立博物館百年史』第一法規出版株式会社 昭和四十八年
- ・國雄行『博覧会の時代 明治政府の博覧会政策』岩田書店 平成十七年
- ・依田徹『近代の「美術」と茶の湯 言葉と人とモノ』思文閣出版 平成十五年
- ・文部省編『学制百年史』ぎょうせい
- ・椎名仙卓『日本博物館成立史 博覧会から博物館へ』雄山閣 平成十七年
- ・神野由紀『百貨店で(趣味)を買う 大衆消費文化の時代』吉川弘文館 平成二十七年
- ・芳賀登『明治国家と民衆』雄山閣 昭和四十九年
- ・青木保ほか編『ハイカルチャー 近代日本文化論3』岩波書店 平成二十二年
- ・馬淵明子『ジャポニズム 幻想の日本』星雲社 平成九年

- ・宮崎道生『近世・近代の思想と文化』ぺりかん社 昭和六十年
- ・内田魯庵「利休の風格と其の時代的環境」『茶道月報』茶道月報社 昭和二十五年六月
- ・福田恆存『傳統にたいする心構』『日本文化研究 第八卷』新潮社 昭和三十五年

論文

- ・工藤泰子「明治初期京都の博覧会と観光」（光華女子大学研究紀要四十六号所収 平成二十年十二月発行）
- ・梅棹忠夫「日本史のしくみ―変革と情報の史観」（梅棹忠夫『梅棹忠夫著作集 第七卷 日本研究』中央公論社 平成二年八月三十日発行）所収
- ・千宗守「曾祖父 一指齋を思う」（『武者小路千家第十一世 一指齋一叟宗守居士百回忌記念 一指齋の茶の湯』所収 武者小路千家 財団法人官休庵 平成九年九月二十八日発行）

電子記録類

- ・国立国会図書館デジタルコレクション『法令全書』



# 史料・図版・表

## 目次

### 史料

【史料1―1】	大庭屋平井家所蔵の茶道関係史料	史1
【史料1―2】	大庭屋平井家系図	史3
【史料1―3】	「當家中興記 略」(一紙)	史10
【史料1―4】	「法華塔」	史11
【史料1―5】	大庭屋平井家の花見旅行『花能見記』	史12
【史料1―6】	「青木宗鳳ヨリ皆傳調書在中」と記された文書	史18
【史料1―7】	「青木家代々記」	史19
【史料1―8】	『臺子傳授』	史20
【史料1―9】	藪内紹吉茶会記 明治四年二月廿五日条	史23
【史料1―10】	「貯月之字出典 東坡煎茶詩」平井家所蔵	史27
【史料1―11】	『遠州流茶事録』『茶会々記集』	史28
【史料1―12】	平井次郎右衛門美英著『茶会々記集』初回茶会	史29
【史料1―13】	茶会記 明治二年三月条	史30
【史料1―14】	茶会記「口切茶事」(①)	史31
【史料1―15】	茶会記「風炉茶事」(②)	史32
【史料1―16】	茶会記「朝茶」(③)	史33
【史料1―17】	茶会記「歳祝茶事」(④)	史34
【史料1―18】	茶会記「元旦荘付並ニ料理」(⑤)	史35
【史料1―19】	茶会記「誕生祝」(⑥)	史37
【史料1―20】	茶会記「遠州忌献茶」(⑦―I)	史38
【史料1―21】	茶会記「甫公忌茶會」(⑦―II)	史39
【史料1―22】	茶会記「遠州公忌」(⑦―III)	史39
【史料1―23】	「青木宗鳳公園宗匠十三回忌追福茶事」(⑧)	史40
【史料1―24】	「先代追善茶事」(⑨)	史41
【史料1―25】	「了因大居士年忌追福茶事」(⑩)	史42
【史料1―26】	「了因居士正当日ニ付精進ナリ」(⑪)	史44
【史料1―27】	「木津宗詮好々斎追善茶事」(⑫)	史45
【史料1―28】	「年回茶事」(⑬)	史46
【史料1―29】	「難波瑞龍寺年礼廻勤昼飯」(⑭)	史48
【史料1―30】	「祭禮釜」(⑮)	史48
【史料1―31】	史料 豊國神社宮司子爵日野西光善より書状	史51
【史料1―32】	史料 大阪豊國神社社務所より書状	史51
【史料1―33】	美英自作の茶道具書状書状	史52
【史料1―34】	富田常楽庵日記	史54
【史料1―35】	追善茶会の招待状	史56
【史料1―36】	追善茶会の招待客	史57
【史料1―37】	追善茶会の内容	史63
【史料1―38】	追善茶会の芳名録	史68

【史料2—1】	本居宣長記念館発行の目録	史76
【史料2—2】	『本居宣長記念館収藏品目録 第一輯 文書篇』 本居信郷之部 茶道関係書類（九種）	史77
【史料2—3】	『本居宣長記念館収藏品目録 第二輯 器物篇』	史87
【史料2—4】	『本居宣長記念館収藏品目録 第一輯 文書篇』 本居信郷辞令（神社祠堂）	史117
【史料2—5】	『本居宣長記念館収藏品目録 第一輯 文書篇』 本居信郷辞令（訓導関係）	史118
【史料2—6】	『本居宣長記念館収藏品目録 第一輯 文書篇』 本居信郷 賞状	史121
【史料2—7】	「本居席茶事」	史123
【史料2—8】	「初会」で「回忌」、「打合」の茶会	史124
【史料2—9】	竹川竹斎の射陽書院で開かれた「謝恩」茶会 御履歴并御家政概略控	史125
【史料3—1】	安敦所縁の茶道具	史131
【史料3—2】	明治七年十二月十六日条—釜の掛おさめ	史135
【史料3—3】	明治九年一月十六日条—釜の掛初	史135
【史料3—4】	明治十一年一月十六日条—釜の掛初	史136
【史料3—5】	明治八年四月六日条—花見茶事	史138
【史料3—6】	明治十一年四月廿六日条—広島県令招待茶事	史140
【史料3—7】	明治十年一月廿日条—「上田大海」使用茶会	史143
【史料3—8】	明治十年四月五日条—御成茶会	史145
【史料3—9】	明治七年十二月廿一日条—広島縣官吏宅茶会	史147
【史料3—10】	明治十一年一月八日条—中村豊次郎宅釜掛初茶会	史149
【史料3—11】	明治十八年十一月三日条—右細君送別茶事	史150
【史料3—12】	明治二十一年九月三十日条—安敦最後の茶会	史153
【史料3—13】	明治十九年二月十日条—亀次郎が亭主	史154
【史料3—14】	免状雛形	史156
【史料3—15】	「古器旧物保存方」	史160
【史料4—1】	「大学伺」	史162
【史料4—2】	「大学南校上申」書	史162
【史料4—3】	「大学献言」	史163
【史料4—4】	「六窓庵茶室ノ記」	史164
【史料4—5】	「六窓庵開日改正之義伺」	史164
【史料4—6】	一指斎の「上伸書」	史165
【史料4—7】	明治五年八月二十三日教部省布達	史167
【史料4—8】	裏千家玄々斎宗室「茶道の源意」	史167
【史料4—9】		史167

図版

【図1—1】	平井家所蔵の短冊「山夏月」	図1
【図2—1】	本居宣長記念館所蔵信郷関係文書箱	図1
【図2—2】	本居家の家系図	図2
【図2—3】	本居宣長翁の住宅の図	図2
【図2—4】	現在の屋内の写真	図3

【図3—1】	上田家関係略系図	図5
【図3—2】	讓翁馬上の姿	図5
【図3—3】	広島市中心部地図	図6
【図3—4】	現在の「神崎」の風景	図7
【図3—5】	「芸州広島之図」図録番号8	図8
【図3—6】	「芸州広島之図」図録番号16	図8
【図3—7】	「御城下侍屋敷町新開絵図」（個人蔵）図録番号21	図9
【図3—8】	『雅遊謾録』	図10
【図3—9】	萩焼茶碗「銘 ひろしま」	図10
【図3—10】	上田大海	図11
【図4—1】	近代日本の文明史曲線(梅棹忠夫)	図12

表

【表1—1】	青木家歴代の生没年と伝授年月日	表1
【表1—2】	大庭屋平井治郎右衛門美英著『茶会々記集』巻別収録年月日と会数	表2
【表1—3】	大庭屋平井治郎右衛門美英著『茶会々記集』年別会数	表2
【表1—4】	大庭屋平井治郎右衛門美英著『茶会々記集』一覧表	表3
【表1—5】	開催事由「元旦荘付並二料理」茶会の内容	表13
【表1—6】	大庭屋平井治郎右衛門美英著『茶会々記集』茶席で用いられた茶道具一覧	表15
【表1—7】	大庭屋平井治郎右衛門美英著『茶会々記集』茶道具使用状況	表33
【表1—8】	大庭屋平井家文書『遠州流茶道傳授控』より、門人と傳授状況	表40
【表2—1】	本居信郷『会席附』記載の年月別茶会記数	表41
【表2—2】	本居信郷『会席附』	表44
【表2—3】	本居信郷『会席附』記載の茶道具の抄録	表76
【表2—4】	本居信郷『会席附』記載の茶道具の使用状況	表79
【表2—5】	本居信郷『会席附』記載の茶会の開催事由	表87
【表3—1】	上田安敦(讓翁)関係略年譜	表88
【表3—2】	上田家下屋敷・船屋敷、神崎表記の変遷表	表92
【表3—3】	山水軒、神崎表記の変遷表	表94
【表3—4】	上田安敦著『雅遊謾録』	表96
【表3—5】	『雅遊謾録』自他会記別表	表100
【表3—6】	『雅遊謾録』自会記の茶道具	表100
【表3—7】	『雅遊謾録』自会記「掛物」の種類と使用状況	表103
【表3—8】	『雅遊謾録』自会記「花生」の種類と使用会数	表104
【表3—9】	『雅遊謾録』自会記客参加会数	表104
【表3—10】	『雅遊謾録』他会記会数	表105
【表3—11】	『雅遊謾録』他会記の茶道具	表105
【表3—12】	『雅遊謾録』他会記「掛物」の種類別使用会数	表107
【表3—13】	『雅遊謾録』他会記「花生」の材質別、作者別使用会数	表107
【表3—14】	『雅遊謾録』他会記「花生」の形状別使用会数	表107
【表3—15】	『雅遊謾録』他会記「茶碗」の種類別使用会数	表107
【表3—16】	『雅遊謾録』他会記「替茶碗」の種類別使用会数	表107
【表3—17】	『雅遊謾録』他会記亭主と客の相関	表108

【表3―18】	上田安敦著『上田家茶会記録』	表
【表3―19】	「上田家茶会記録」 自会記の茶道具	表
【表3―20】	「上田家茶会記録」 自会記の参会者	表
【表3―21】	「上田家茶会記録」 他会記 亭主と客の相関	表
【表4―1】	博覧会の名称・会期・開催場所	表
【表4―2】	博物館が列品分類を行った「人造物」	表

【史料1—1】大庭屋平井家所蔵の茶道関係史料

○「貯月字之出典」筆者不詳 一軸

蘇東坡「煎茶詩」より 貯月菴宗従頃力

○『茶会々記集』 貯月菴宗従著 三冊一括

○『當家貯月菴 茶会々記録』貯月菴宗従・ソノ著 半紙本一冊 七十四丁

自慶応二年十二月十四日～至明治二十五年十二月十八日

※付属史料「中興名物 眞中古窗面取曳貯茶入函 小堀家  
伝来」 筆者不詳 一紙着色

○『茶道傳授扣』 貯月菴宗従・ソノ著 半紙本一冊 十五丁

自明治二十年二月六日～至大正十一年十月

○大阪豊國神社獻茶式関係史料 一紙

・「獻茶式依頼状」明治十八年十一月五日付 一紙

差出人 豊國神社宮司子爵日野西光善 一紙

・「獻茶式依頼状」明治十九年五月付 一紙

差出人 大阪豊國神社社務所

・「獻茶式依頼茶具寄付一覧」明治十九年五月 三丁

差出人 大阪豊國神社社務所

○故貯月翁追善茶会関係一括史料 明治四十二年十月廿三日

・招待状 差出人 貯月庵社中 一通

・招待状 差出人 職方 一通

・欠席通知葉書、書簡 千宗左ほか五葉、書簡二通

・『故貯月翁追善茶会招待人名及精等 諸綴』

横長本一冊 八丁（但し招待人名録のみ）

・『故貯月翁追善茶会手向物控』 横長本一冊 三丁

・「茶会記」 五紙

「大床」、「第一席」、「第二席」、「第二席御献立」、

「第三席」

・『第一席 芳名録』 横長本一冊 五丁

・『第二席 芳名録』 横長本一冊 九丁

・『配服人名録』 横長本一冊

○『花見能記』明治四年 美英著 半紙本一冊 十五丁

○他会記

・茶会記（断簡）

明治十五年十二月十二日付

十一

・弘法大師会記

明治三十五年三月二十一日

・鎮信徳祐居士二百年祭

会主 心月庵 松浦詮

年月日不詳

・不審庵（正午）

富士見乃三井家別邸

三月五日

・不審庵（正午）

富士見乃三井家別邸

十月十六日

・官休庵 一旻于居士一周忌追善 於祖堂

明治三十二年十二月十五日～十七日

・仙洞御所又新亭英国皇族殿下献茶

年月日不詳

・根于の里引流亭 馬越恭平

明治三十八年十二月二十三日

・片桐宇闕居士二百五十周年忌追善茶会

年月日不詳

催主 本庄宗慶 宗泉

於 大阪美術倶楽部

・香室追悼茶会

主 藤田江月

大正五年十一月二十日初会

・茶会記（断簡）

○貯月菴宗従詠草、短冊類

○美英作茶道具

・茶杓「有馬山写し 共筒」 竹

四点

・茶入「還曆祝一双赤黒」

一本

赤蓋裏 歌あり、箱書あり

・花入「まだ見ぬ」

竹

一本

○青木宗鳳関係一括史料

・「青木家代々記」

一紙（材木商社作成紙使用）

・『臺子傳授』

明治十八年八月上旬 筆者不詳

○青木公園関係

明治十九年四月 紫雪菴著 三丁

・「江月禪師贊語猩々翁画

公園写」成立年不詳 一軸

【史料1—2】大庭屋平井家系図

註記

- 一、当図の翻刻内容は、十三代当主であった故平井勝彦氏から公表の許可を得た箇所のみである。
- 二、適宜、句読点を筆者が加えた。
- 三、「〔 〕」は、次代継嗣であることを筆者が加筆した。
- 四、「 ” ”」は、原文では「改行」があつたことを示す。
- 五、漢字は原文表記に則り、旧字体とした。

平井家系図

序

抑考、家ハ天正ノ昔、河内大庭莊ヨリ  
出テ、大坂ニ住スル事、茲ニ三百五拾有餘年、  
而テ、幕末ニ至ル凡二百八十年間、専ラ  
諸藩勝手向キ融通方ヲ勤メ、傍ラ  
時ニ十人兩替ノ一員トシテ、所謂天下ノ金  
融ニモ參劃シテ繁盛□リ幕末ニ及  
ヒ、欠慶過ニ明治維新ノ大阪事トナル也。  
諸藩ノ調達金ノ大半ハ回収不能ト  
ナリ、僅ニ明治八年亥年ニ至リテ、右調達  
金ノ一部ニ對シ年賦割濟償還ノ恩  
典ニ浴スルニ至レリ。拾幾年遂ニ祖先傳來ノ  
珍器什物、不殘封藏ノ倦質借金  
拾萬圓從開拓使諸藩出金加入方

ノ馮濟ニ充ツル事ニ立チ至レルコト因トナリ、一ツハ  
時勢ノ然ラシムルコトナリト雖、只茲ニ子孫  
後嗣者トシテ最モ不堪遺憾ハ、当家  
傳來ノ家系譜ノ右出、藏中ニ在リテ、遂ニ  
亡失シリタル事也。余、寵縁ニナリ当家  
ノ相続者ニ当リ、此儀□ニテ残念不堪即  
意ニ馮シ、先年来之レガ編成ニ没頭断リ、  
祖先ノ手記或ハ古文書或ハ口傳ニ基キ、或ハ  
古社寺ニ趣キ勿論古老ニモ乞フテ、慎重専念  
精校ナル家系講ニ纏ケルヲ得タレハ、余ノ本懐

トエン為ナリ。希クハ子孫後嗣先ナトニモ余ノ□  
ニ諒を顯弁本源恒ニ仰、先祖威徳肖、  
且進遠祖祭誠篤ク書サレシコトヲ。  
則定、子孫長延家門昌阜ニ  
其土域

昭和十年十二月

大庭屋

十二世 次郎右衛門

定紋 三千年ノ桃

宗旨 禪宗ヨリ

眞宗ニ改ム

墓所 難波鉄眼寺

京都大谷

(中略 非公開)

初代 大庭次郎左衛門正俊

天正十五丁亥於河内國付大庭莊  
於浪速今ノ今橋中橋喬ニ住ス。  
有或所為町人屋號ノ出断姓ニ、  
佑クモノ大庭屋ト称ス。置專諸億  
ノ用達ニ筆ス。

正保二年乙酉正月廿九日卒年

法名 浄雲 行年八十五歳

室 正保四丁亥年九月朔日卒

法名 眇雲 行年七十五歳

長男 次郎左衛門正重〔二代継嗣〕

二代 大庭次郎左衛門正重

但、浄雲嫡子也

延宝六年午十二月廿七日卒

法名 賢眞 行年四十七歳

室 但、中村久兵衛女俗名梅

寛文八年戊申十二月廿一日卒

法名 妙輪

長男 次郎右衛門〔三代継嗣〕

二男 久松



三男 長四郎  
四男 次左衛門

后〔後〕室 天和二年壬戌卒 劍難死  
但、里元不知、俗名澤

延宝六年戊午八月十二日卒

長女 イヌ 撰州平野野堂町淀屋三郎兵衛妻  
元禄十五年壬午卒 行年二十五歲

三代 大庭次郎右衛門

但、賢眞嫡子妙輪實子也。

號仙岳、書畫堪能ニシテ

令名アリ。居ヲ江戸堀五丁目ニ移ス。

宝永七年庚寅八月廿五日卒

法名 仙岳 行年五十一歲

天王院仙岳浄長居士

室 但、撰州平野野堂町淀屋三郎兵衛

女 俗名 小春

宝永五年戊子七月廿九日卒

法名 英覺 行年四十九歲

香台院桂覺信女

長男 治郎右衛門〔四代継嗣〕

二男 平次郎

元禄四年辛未卒 行年三歲

三男 次郎三郎

宝永正月卒 行年十一歲

長女 蝶

四代 大庭治郎右衛門

但、仙岳嫡子也

正徳二年壬辰正月十三日卒

法名 琳瑞 行年廿六歲

室 但、大坂内本町天神山筑山

素庵女也。琳瑞死去後

不縁トナル。其後、不知。

五代 大庭次郎右衛門信成〔花押〕

但、撰州平野郷流レ町淀屋権兵衛二男傳右衛門。

宝永四年丁亥二月入家。其段、八郎兵衛ニ改ム。

正徳二年壬辰家督相續。次郎右衛門ノ襲名ス。」

當家ニ取りテハ、別シテ大功有出所謂者中興之主人也。実家ハ淀屋辰五郎一族也。明和三年丙戌治左衛門ト改メ、陵宗ニ隱居ス。」  
此年、白杵藩主因幡伊豫守ヨリ永年ノ感賞ニ依リ、扶持ノ加増ト共ニ平井姓ヲ賜ハル。佑三両今大庭ヲ改メ平井ト称ス。」

明和四年丁亥七月廿九日卒

法名直寿院直翁淨威居士 行年八十五歳

室 但、仙岳妾腹女也而琳瑞妹ニ

俗名蝶家督相續ノ女也

享保二年丁酉七月四日卒

法名理元 行年廿三歳

靈光院淨性理元大姉

後室 但、大坂平野町一丁目加賀屋三郎左衛門女也

元文元年辰六月十五日卒

法名妙光 行年四九歳

後室 但、出生和州九品寺杉本孫三郎伯母也

大坂江ノ子嶋苦屋久兵衛親分大庭屋

善八世話元文五年申十二月入嫁

宝曆七年丁丑八月九日卒

法名妙秋 俗名ふき

桂光院皓月大姉

長女 モト

享保六年辛丑卒 行年九歳

六代 平井次郎右衛門(花押)

(付箋)

但、播州宍粟郡山崎城下、英賀屋治郎右衛門五男也。千草屋又四郎並加賀屋三郎左衛門縁ニ依リ、千草屋世話ニテ「妙光四ノ時享保十六年壬子十一月九歳ニテ當家ニ来リ養子ト為ハ、幼名辰五郎及元服七次郎ト改ハ、明和三年六月養父次郎右衛門「治左衛門ト改メ隣家へ隱居後、先代襲名次郎右衛門ト改メ、家督相續實方ハ井上氏ニテ、吉世次郎右衛門兄相續。甚十郎ト称ス。

安永九年庚子朔日卒

法名實松院淨因良貞居士

行年五十七歳

室 大坂北堀江五丁目赤穂屋伊左衛門女也

俗名班 法名

母號如雪姉俗名直淡路町一丁目河内屋仁左衛門

花押 印

妻ニ「妹小春ハ今橋一丁目堺屋七左衛門妻也。  
其前偶者」委細ハ梅楠屋ニテ可知  
長男 大庭元次郎  
寛延元年戊辰卒 行年三歳  
二男 大庭万太郎  
宝曆七年丁丑卒 行年九歳

七代

平井次郎右衛門信美  
但、撰州住吉郡平野郷辻花七郎右衛門猶子。

(恩カ)

實ハ和州式上郡慈念寺村東野左兵衛門  
舎弟也。幼名留三郎。家號相續及ビ次郎右衛門ノ  
襲名後、治右衛門と改メ隣家へ隠居ス。

天保四年癸巳二月十二日卒

法名 靈照院章因寥翁居士

行年七十四歳

室

但、大坂今橋二丁目紙屋吉左衛門女也

俗名 操 嘉永五年十二月卒

行年 八十九歳

八代

平井次郎右衛門時雍

但、播州宍粟郡山崎城下英賀屋甚十郎ヨリ  
入来、幼名利五郎。書道並歌道探リ茶道ヲ  
好ム。

天保五年甲午七月十日卒

法名 寂照院了因明輝居士

行年 五十三歳

室

但、和州式上郡慈恩寺村東屋佐兵衛娘也

俗名トミ 信美姪也

文化八年辛未六月十五日卒

法名 妙相院浄光智大姉

行年 廿二歳

長男 次郎右衛門信徳〔九代継嗣〕

二男 廉次郎のち治七郎

長女 班

文化三年丙寅卒 行年零歳

〔朱書〕

禪宗ヨリ眞宗ニ改ム

後美在

九代

平井次郎右衛門信徳

但、時雍長男也幼名鹿治郎。

及元服先代次郎右衛門ヲ襲名

後、治七郎改メ隠居剃髮後佛門

ニ入ル。更ニ治斎ト改ム。天保五年、

家督相續。慶応三年隠居。

明治十六年十一月卅一日卒

法名 釋 春蓮

行年 七十四歳

室

但、山城国嵯峨角倉帯刀女也。

角倉家ハ旗本ニシテ、祖了以翁大井川ヲ

開キタル方ニシテ、同地に祖像アリ。

俗名テル。眞宗ニ得休シ剃髮佛門ニ入ル。

明治廿三年十月十八日卒。行年七十一歳

法名 釋 至導

治

十代

平井洙郎右衛門美英

⑤但、摂州住吉郡平野郷三上才治郎男也。」

美在之従々弟也。幼名英三助。及元服」

治七郎ヲ改メ慶応三年家督相續。」

治郎右衛門ト為ス。蓋シ畫家は次郎右衛門」

ヲ疑名スベキ処也。殊更治郎右衛門ト改名セシ

処、」察スル処、實父才次郎ノ治ヲ用斗タルカ。

他へ次ヲ治ニ俟リモノ、戸籍エ治トナリシ。」

茶道宗匠トシテ貯月ノ號アリ。」

⑥青木宗匠ノ門下ニシテ加島屋及千草屋ト」

共ニ青木門下三月ノ人也。時恰モ維新」

ノ大阪軍二付、其間料理ニ走り、蓋シ良考ノ」

苦勞ニ明ラズ。遂ニ決シテ茶道ノ宗匠トナリ後」

藤田傳三郎ノ乞ニ応シ、同家ニ奉職。性従快」

稀ニ見ル人格者トシテ重キヲ成ス。」

明治四十一年四月十一日卒

法名 釋 教従

行年 六十六歳

室 ソノ 播州坂越奥藤小治郎ノ女

主人ノ意思ヲ嗣キ小堀遠州流茶道ヲ傳授賢夫  
トシテ命名アリ

昭和七年十月十九日卒

法名 釋 教智

行年 八十六歳

十一代 平井龜之助

大坂東成郡北平野町炭屋白山栄三郎弟順治郎二男

明治四十一年 家督相続

同年 没 行年四十二歳

室 撰州平野郷野堂町末吉増臣ノ女

十二代 平井次郎右衛門

長州藩士山田改之助二男

大正五年 入家

昭和七年 家督相続二依リ栄作ヲ改メ

先々代ヲ襲名ス

室 孝 大阪北濱五丁目尊光寺尾木原勝祐長女

尤尊光寺ハ当家ノ旦那寺也

大正五年 入嫁

昭和四十八年 没

長男 成美

戦死

二男 勝彦（十三代継嗣）

長女 俊子

十三代 平井勝彦

・次郎右衛門二男

・遠州流宗家直門師範

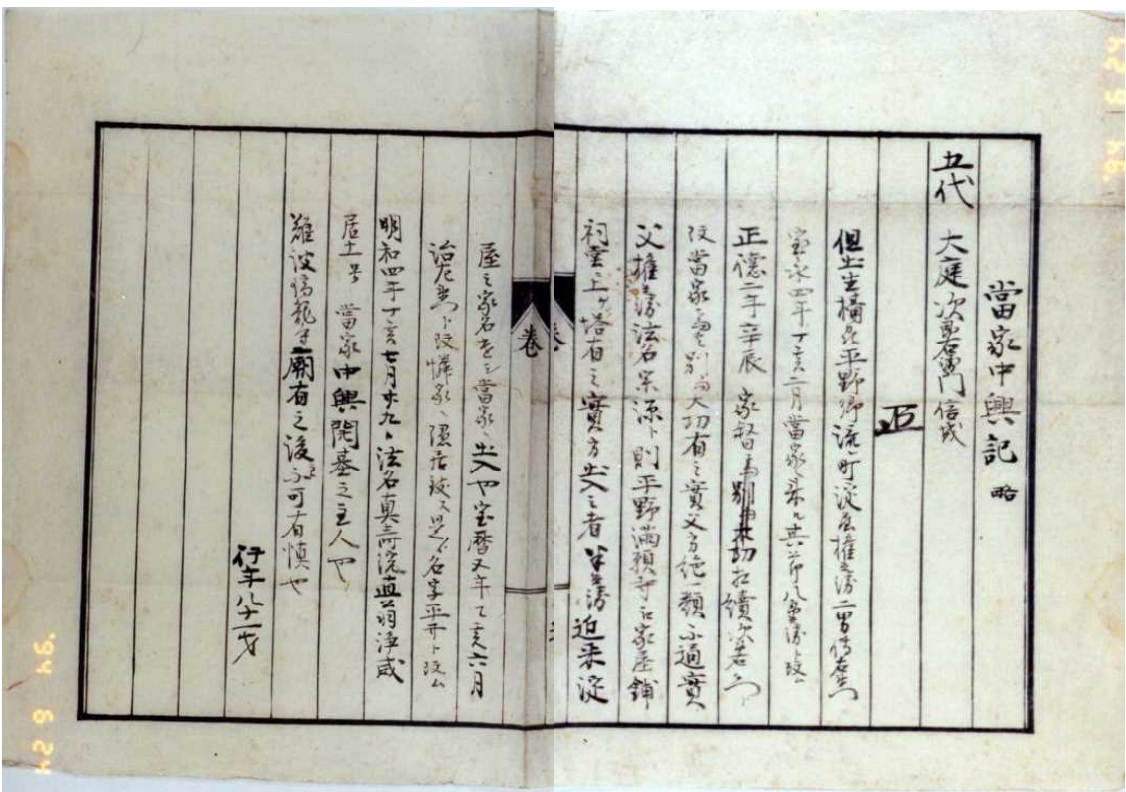
貯月庵 宗寅

室 郁子

・医学博士高山光徳の三女

・遠州流宗家直門家元師範代 時新庵 宗郁

(写真撮影筆者)



當家中興記 略

五代 大庭次郎右衛門信成

〔花押〕

但、出生摂州平野郷流レ町、淀屋権兵衛二男傳右衛門。



大阪市設服部霊園  
 (大阪府営服部緑地公園内)  
 著者撮影

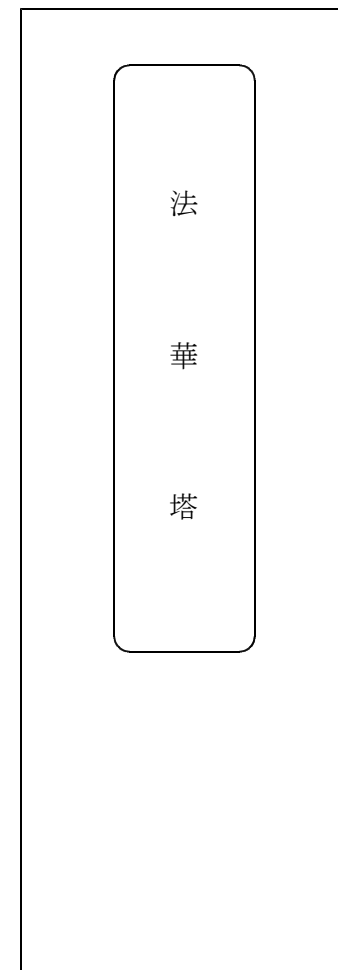
(翻刻文の中の「」は、空襲による焼失欠損により  
 解説不能を表す。)

【史料1-4】「法華塔」

<p>宝永四年丁亥二月、當家へ来ル。其節二八郎兵衛ト改ム。正徳二年辛辰、家督与。別而大功相讀次郎右衛門ト改。當家ニ而も別而大功有之。實父方絶一類不通。實父権兵衛法名宗源ト則、平野満願寺江家屋舖祠堂三ヶ塔有之。實方出入之者、半兵衛迫来。淀</p>	<p>卷</p>
<p>屋之家名遣シ、當家出入也。宝曆五年乙辛六月、治左衛門ト改、隣家隠居致ス。是 平井ト改ム。明和四年丁亥七月廿九日、法名真壽院通翁浄威。居士号。 當家中興開基之主人也。難波瑞龍寺廟之後可有慎也。</p>	<p>行年八十一歳</p>

正面

碑文



裏面

撰州大坂大庭信茂無子召安貞子播州為蝮腹〔□□〕  
 子娶林氏有二子共ノ大為蓋自彼此異熟業所〔□□〕  
 滌〔□□〕莫如积典娶石累然親筆法華經六舊九〔□□〕  
 七百二十日言盛大□瘞于難波瑞龍寺南專祈〔□□〕  
 佛力加彼〔□□〕千罪根祖德敷揚繁興一族雲〔□□〕  
 寶曆十三年癸未仲夏 大庭安貞立〔□□〕

横面

积  
 淨慶 淨信 清讚 寬心 賢正 妙秋  
 利松 皎巡 淨意 如幻 覺夢 幻夢  
 智貞 智清 教從 教知 教進

积  
 賢眞 妙輪 淨雲 妙雲 仙岳 英覺  
 眞翁 琳瑞 理元 瑞旭 淨因 貞因  
 宗□ 了因 宗清 教□ 教□ 教□



【史料1—5】大庭屋平井家の花見旅行『花能見記』

行程表

美英著 『花見能見記』 明治4年 旅行行程表

- 註
1. 参拝・見学箇所ごとに箇条書きにした。
  2. 和歌の説明文の頭に○印を付し、和歌は「J」（カキ括弧）で括った。
  3. ( ) は、現在の時刻や名所及び所在地について筆者が補足を行ったことを表す。
  4. 解説不能な文字は口であらわした。
  5. 和歌以外の変体仮名と旧字体は新字体に改め、文中に句読点を加えた。

日付	天候	行程	宿
22日	記述無	<p>総意の人々・別家の輩と別れの盃、午刻〔午前12時〕出立。</p> <p>片町の茶屋にて小休。  <small>：徒歩</small>            守口駅にて小休。            佐田村の天満宮〔現在の佐太天神宮のことカ〕参拝。            ○糸柳の咲物よしをしくれ行きで、それは一毛とにしていとも異事に咲きければ            「この里の名ぞ京都の宇櫻察かき春日もあかぬ色可なり」            佐田村何某にて小休。            椿半頃、橋本〔現在、京都府八幡市〕の垣屋弥兵エへ着く。            入湯後、薄茶酒飯。            宗鳳、北里の田舎普院に寄られ、口取にもてなし風情をしめ。            「里能子乃使足殘し遠栗春日之尔まき徒足行使くし里可察」</p>	橋本 垣屋弥兵衛方
23日	晴	<p>宿出立。</p> <p>畠山八幡宮〔石清水八幡宮〕参詣。            「きてみ連ハ八千代も通めへし畠山松のむれぬる露のもてるも」            神前の方辺まで一休。            ○前年登山の頃、真勢の瀬本坊松花堂の茶席も一新の変乱に取崩ゆ致しへかるも、            北とききて朝日<small>の心やちかは</small>」            「瀬本乃流の末ハ絶ばかりむりを志のふ御宗可里を里」             木津川の渡り 松中→野村〔船〕            ○いとゞ咲きはるの桃の林の有りしを護守にとへハ、御や野村と答ふ            「見渡せハ鷗むか里にみえにを里御や野々里の桃の清さか利」             木津川の渡り 六地蔵→新田</p> <p>宇治有阿某にて休、一酌を催し飲。            平等院〔平等院鳳凰堂〕に詣でる。            ○賴政公も旧法扇の芝生も之を出してあり            「くち残る扇の芝生露ミえてすゝるに樂し宇治の川風」            興正寺〔仏徳山興聖宝林禅寺のことカ〕の山吹を詠む。            宇治川 船渡しにて向岸に行く。            茶屋何某で昼餐。            茶師森江惣左衛門方一茶葉子のもてなしを請う、家法の茶など注文。            黄檗山〔黄檗山萬福寺〕参詣。            大亀谷〔現在、京都府伏見区深草大亀谷〕を御す。            藤の森伏見の稲荷〔伏見稲荷太社〕参拝。            東福寺へ詣る。</p> <p>：五條道の橋を川匠い〔徒歩カ〕</p>	先計町〔先斗町カ〕 菊屋久兵卫方
24日	晴	<p>先計町〔先斗町カ〕 菊屋久兵卫方にて宿。</p> <p>辰の半刻〔午前8時頃〕、皆と日を待ち、朝飯を済ます。            二条黒堀堀内寄留の角倉氏へ相訪れる。            伊織参之口同様にて帰宿。            打揃、1日東山を遊歩す。            祇園の神社〔八坂神社のことカ〕、花見山東大谷丸山〔総本山知恩院〕見学。            清水寺の拝観にて休。            鳥辺山西大谷〔大谷本願〕へ参拝、番花を申付、我先祖の御墓所へも参拝。            三十三間堂大仏殿へ詣。            陽彦、四条通り御旅町を散歩。            高瀬川三条、生亀楼まで酒肴夕飯、角倉氏らと立ち別れる。            椿半頃、帰宿。</p>	先計町〔先斗町カ〕 菊屋久兵卫方

25日	晴	辰刻〔午前8時〕ばかり起床。 角倉内、田鶴文入来、菓子酒肴差し出す。昼前鼎宅。 午後、上御所大内拜見。 北野御園参詣。茶種の御供を賜う例として勅使参向あり。 今宮大徳寺、加茂神社（上賀茂神社のことカ）参詣。 大徳寺門前、宇、徳道舎茶店にて一休、酒肴取進、一同臥。 鼎宅。 入湯後、京地名産の肴など申付一酌。 氏刻〔午後8時〕頃、再び御臥。	先計町（先斗町カ） 新屋久兵工方
26日	細雨	朝、角倉子並びに家来沖藤道召連れ入来、明日、奥山花見の案内を約して鼎宅。 早屋紙飯後、糸久の宿に立ち寄る。 四条通佛光寺、東本願寺参詣。 午の半刻〔午後1時〕、六条の宿に着く。 西六条茶道岩城沼落、訪られ案内まで両御堂参拜。開扉を相願し、御殿廻りに 遊樂園（飛騨園のことカ）一見。 未の刻〔午後2時〕鼎宅 紹清氏（表千家吉田正風流第4代の吉田紹清カ）の紹介にて、案内紹吉宗返の 臨時茶会催しの案内を請けたことにより、宗鳳、為載連れ紹清同伴で四人で参会。 初更辺鼎宅	六条 天満屋佐兵衛方
27日	細雨	晚、本願寺農朝参詣。鼎宅後御臥。 案内家へ昨日の御礼を述べ入湯ん。 辰の刻〔午前8時〕頃発足。 嶋原の遊里を一見。 木暮広隆寺参詣門前まで一休み。 午刻〔午前12時〕頃前、嶋嶺野着。 田鶴文先廻りにて船の用意。酒肴敷にも申付可伝請より、すぐ乗船。 乗船、大井川より赤岩の瀬まで差窓〔茶道カ〕し、松中のもてなし皆々破けぬ。 ○大堀川戸難瀬の難浪山桜の風景なかうはゆて尔は及かず 「折りよくもをふて徒果かなすともす連ハ花尔ハ風情御者果ならひを」 「奥山はなれむ可ハハ難波尔てみる月雪ハたもと祭をき」 申刻〔午後4時〕上陸。 徒歩で梅の宮へ参拜す。壬生寺内廻る。 丙の刻〔午後11時～午前2時までの2時間〕過ぎ、鼎宅。 入湯後、一酌を催し、きのこの参詣にてはからすも夜を更しぬ。	六条 天満屋佐兵衛方
28日	雨	晚、御堂始。興正寺の農朝に参詣。 参詣後鼎宅、朝参。 利休居士正当徳日に付、案内家も居士へ茶を供えられの例式なり。在座の案内に付、 配膳す。床八名高き居士のなごりの文を掛けてあり、始めて一見す。 辰刻〔午前8時〕退出る。 伏見近江屋小兵衛方へ立寄り三十五船一機申付。酒肴紙の用意もさせ、昼食後乗船。	六条 天満屋佐兵衛方

行程地図

一、国土地理院の標準地図（京阪地方仮製二十万分の一地形地図）に、同院作製の地図情報「明治初期の湿地帯データ」を重ねた。（透過率零％）

二、凡例は国土地理院作成「明治初期の湿地帯データ」

凡例	近畿地区
旧河道	
干潟・砂浜	
深田	
水田、田	
湿地	
砂礫地	
泥地	
塩田	
荒地	
川、湖、沼、海	
泥炭地	—
ヨシ	—
茅	—
草地	—
堤防	

三、地図上の記号について

- ① 日次行程と交通手段及び訪問先に分けて、左記の記号を用いて地図上に記した。
- ② 「交通手段」については、行程が船舶か徒歩等か不詳な場合は、矢印線を黒色の点線で表した。
- ③ 地図は、複数日分の行程を一枚の地図に入れ込んだものもある。表記上、初日分を除いた日は、訪問先の前に日付を冠した。

○ 日次別

- ・ 初日 — 赤色 ●
- ・ 二十三日 — 青色 ●
- ・ 二十四日 — 緑色 ●
- ・ 二十五日 — 緑色 ▲
- ・ 二十六日 — 青色 ▲
- ・ 二十七日 — 緑色 ■
- ・ 二十八日 — 青色 ■

○ 交通手段別

- ・ 船舶 — 青色矢印
- ・ 徒歩等 — 茶色矢印

○ 訪問先別

- ・ 地名 — □ 吹き出し
- ・ 地名 — 楕円形吹き出し
- ・ 宿 — | 山形矢印



二日目(二十三日)



初日(二十二日)

行程図



六日目～七日目（二十七日～二十八日）

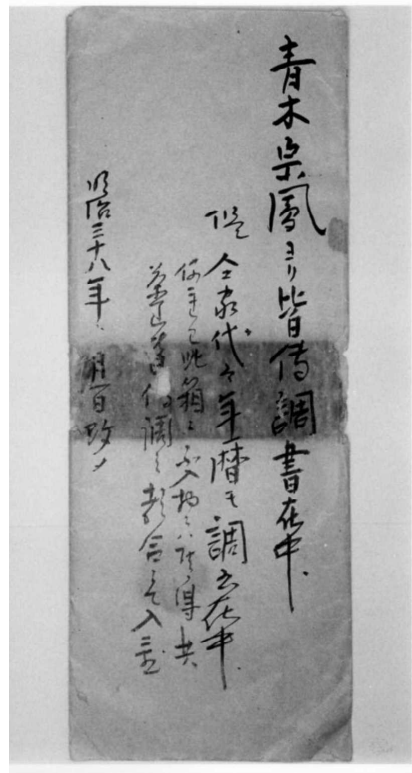


三日目～五日目（二十四日～二十六日）

【史料1—6】「青木宗鳳ヨリ皆傳調書在中」と記された文書

袋

(写真は筆者撮影)



翻刻文

青木宗鳳ヨリ皆傳調書在中

但 全家代々年曆モ調書在中

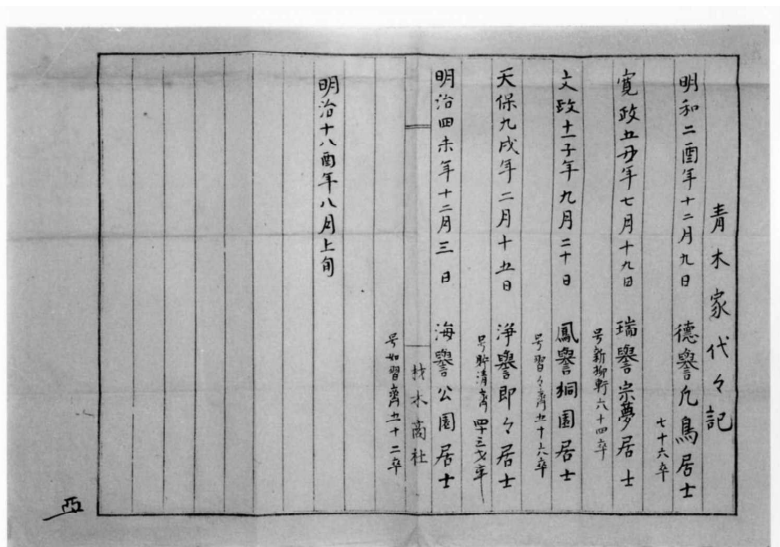
何れ此箱ニ不入物ニハ候得共

(穴欠)

茶道□□□調之都合ニて入置

明治三十八年 月一日改メ

【史料1-7】「青木家代々記」



翻刻文

青木家代々記	
明和二年十二月九日	德誉凡鳥居士 七十六卒
寛政五年七月十九日	瑞誉宗夢居士
文政十一子年九月二十日	号新柳軒六十四卒 鳳誉桐園居士
天保九戌年二月十五日	号習々齊五十六卒 浄誉即々居士
明治四未年十二月三日	号貯清齊四十三才卒 海誉公園居士
明治十八酉年上旬	号如習齊五十二卒 材木商社

花押

同 同 同 同 同

長門希島関川高深前  
 菅房延享丁卯十月廿  
 浪速大崎治郎貞永  
 寛延三年十一月廿  
 浪野久左衛門高方  
 寛治元年十一月廿  
 浪野久左衛門高方  
 寛治元年十一月廿  
 浪野久左衛門高方  
 寛治元年十一月廿  
 浪野久左衛門高方  
 寛治元年十一月廿

同 同 同 同 同

中富興治郎知盈  
 延享元甲子六月十日  
 長州早野美彦海島  
 延享二年十月廿  
 浪速下喜身萬徳寺  
 延享二年十月廿  
 浪速川上勘三郎重教  
 延享四年二月廿  
 長門希島関川伊左門  
 保則延享四年十月廿

臺子傳授

同 同 同

初代元身了浪速  
 神田五郎門成般享保十二年  
 申拜月廿九  
 田田重左門致了享保  
 三年八月廿七  
 伊勢村四郎五郎去光  
 寛保元年辛酉三月十六  
 泉内守和由茶之通大佐  
 陶吉吉島國興寛保三年  
 申拜月十九



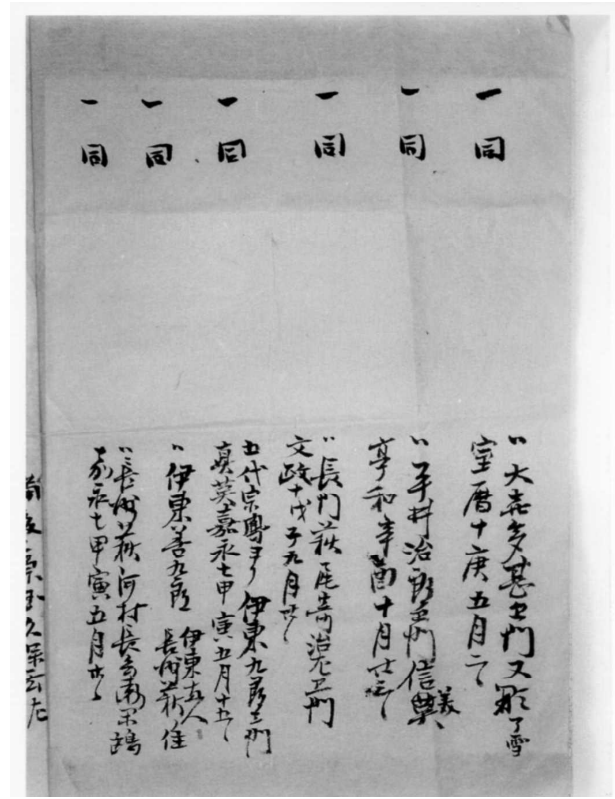
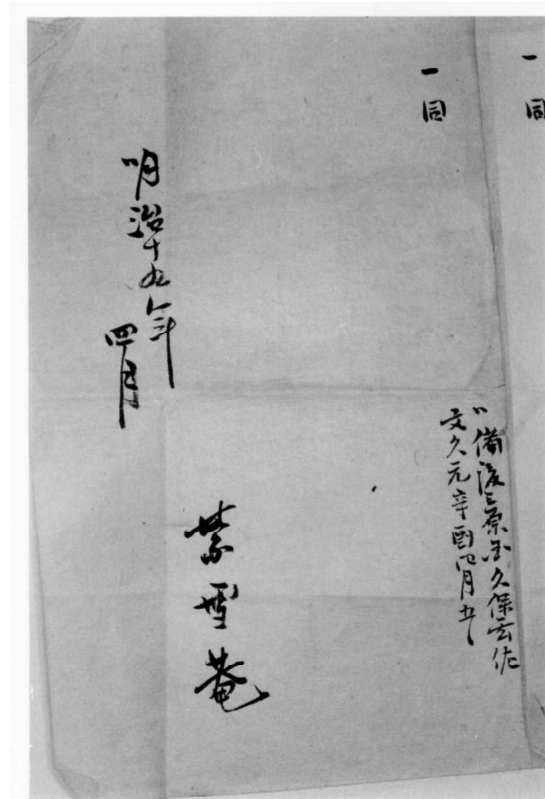
翻刻文

一 壹子傳授

一 同

初代凡鳥ヨリ浪速  
神田七左エ門成般享保十三戌  
申卯月廿日

品田重左エ門致了付享保  
十三戌申八月廿一日



- 一 同 伊勢村四郎五郎長光  
寬保元年酉十二月十六日
- 一 同 泉州岸和田茶道大森  
陶齋山西國興寬保二壬戌  
卯月十九日
- 一 同 中富興治郎和盈  
延享元甲子六月十五日
- 一 同 長州萩早野彦左衛門江  
延享四丁霜月十二日
- 一 同 浪速下寺町萬福寺江  
延享四丁霜月十八日
- 一 同 浪速川上勘工門重教  
延享四丁三月廿六日
- 一 同 長州赤馬関篠田保左工門  
保則延享四卯十月三日
- 一 同 長州赤馬関川崎源工門  
茂房延享四丁卯十月十六日
- 一 同 平井治郎右衛門息  
浪速大場治七郎貞永  
寬延三庚午三月十一日
- 一 同 浅野久右衛門尚方  
寶曆元辛未十二月十四日
- 一 同 奥源五郎八  
寶曆七丁丑三月廿六日
- 一 同 澤長左衛門清秀  
寶曆八戊寅四月朔日
- 一 同 大喜多甚工門又船了雪  
宝曆十庚五月二日

一同 〃平井治郎右衛門信奥 美  
享和辛酉十月廿三日

一同 〃長門萩尾崎治左エ門  
文政十戊子九月廿日

一同 五代宗鳳ヨリ伊東九郎エ門  
眞英嘉永七甲寅五月十五日

一同 〃伊東善九郎 伊東真人  
長州萩ノ住

一同 〃長州萩河村長兵衛閑鷺  
嘉永七甲寅五月廿日

一同 〃備後三原久保玄佐  
文久元辛酉四月五日

紫雪菴

明治十九年  
四月

【史料1-9】藪内紹吉茶会記 明治四年二月廿五日条  
藪内紹吉茶会記

待合

雲脚ナリ三帖向切  
掛物 此庵ノ文□歌入  
ぢ□ふずらゝ俄  
茶湯のてんゝゝハ田舎  
者てもおかし可累  
へし

唐物籐組長角

腰掛

菘盆

古銅火入

葉入折紙

灰吹青竹

於燕庵茶室

床 炉柱アテナグリ

カマチ真塗腰張ニ古紙

古鼓張多張手前辺横曆張

掛物 九条関白尚實公

懷紙

頤 霞裏单鶯

上下 茶ドンス

一文字 紺古金欄

中

釜 道也作霰

炭斗 ナヨ竹

香合 織部マガキ

古田侯方劍中へ伝来

本家ナリ 箱竹心

灰器 大樋

花生 式重切竹心作

銘壽光

花 モクレン

黄水仙

水指 伊賀耳付

共蓋

利休方傳來箱書付

劍中

茶入 瀬戸耳付

挽家書付

利休

箱劍翁

吸物  
蓴菜

焼物  
漬物  
若狭小鯛  
大こん

煮物  
和可布  
百合根  
鱧骨切

汁  
わらび  
竹輪豆腐

向  
免しそ  
わさび  
二はい酢

永楽麦わら  
鮎ノ作り

料理  
雲脚膳  
小丸わん

銘日華

全茶盃  
手造  
真翁

薄茶器  
唐物朱六角

建水  
塗曲

蓋置  
青竹

銘妹の袖  
比良齋  
書付  
燕奥様  
比良齋

茶杓  
比良齋室

茶盃  
新渡リ  
半使

袋  
細川ドンス

絞生が

八寸 鮎塩煮

吹田慈姑

肴事 柚湯葉

サキ海老

菓子 都の錦

干菓子

雲脚煎餅

千代結

茶 花ノ白

上林左入

✂

御意□罷文

可徒々々

老様駿府様へ

よろしく我尔御与候

聊の知行もらひて

かくな累仕合

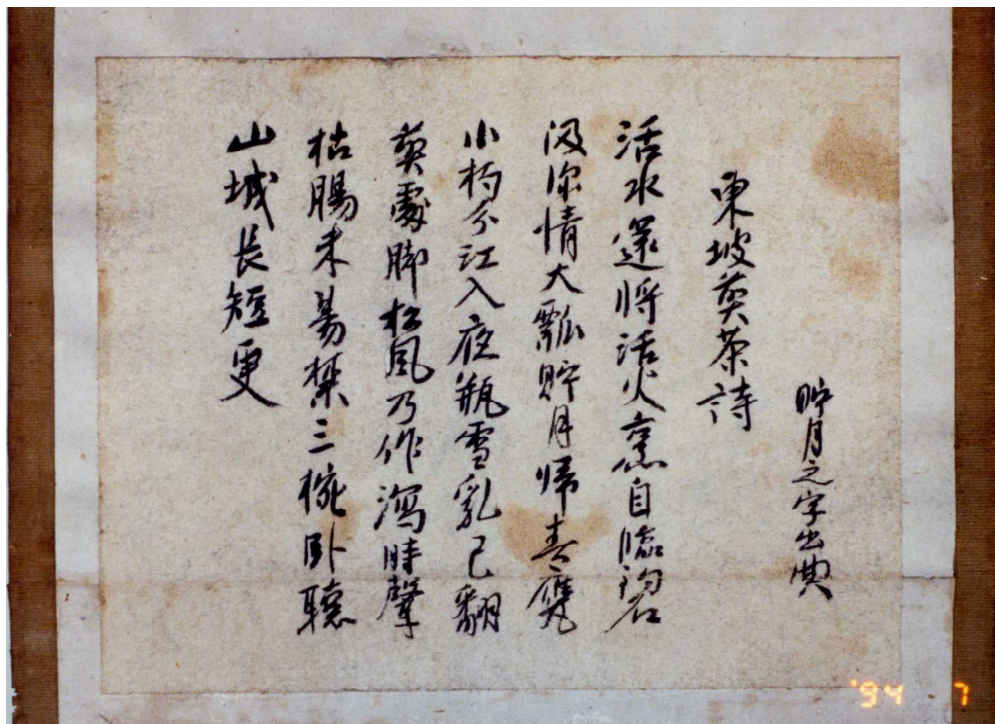
拜尤々々

二月廿五日

休判

紹智殿

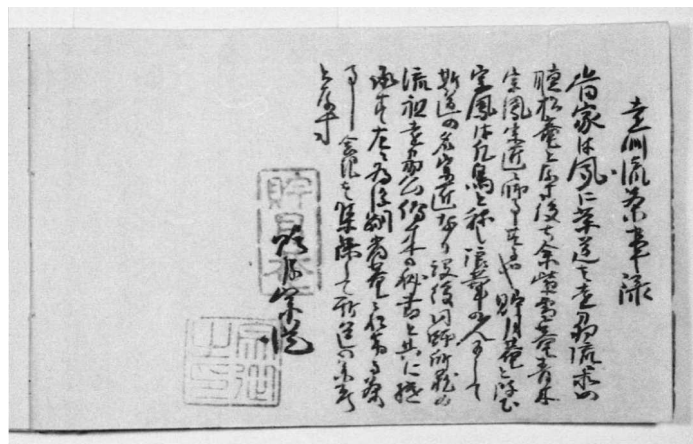
(写真撮影 筆者)



【史料1—11】『遠州流茶事録』「茶会々記集」

(写真撮影・句読点筆者)

表紙



遠州流茶事録  
 当家は夙に茶道を遠州流ニ求め、  
 聴松菴となす、後ち余紫雪菴青木  
 宗鳳宗匠ニ師事するや貯月菴と改む。  
 宗鳳は凡鳥と称し浪華の人にして、  
 斯道の名宗匠なり、没後同師所蔵の  
 流祖遠州公伝来の秘書と共に継  
 承す。左ニ為後嗣当菴ニ於ける茶  
 事会記を集録して斯道の参考  
 となす。

(朱印)

貯月菴

貯月宗従

宗従  
 之印

(朱印)



【史料1—12】平井次郎右衛門美英著『茶会々記集』初回茶会

(朱筆)

○慶応二寅年十月十五日ヨリ十二月十四日迄

福島當家別業於貯月菴

侘主 青木宗鳳

客 住友吉左衛門

白山善五郎

木田庄左衛門

平井次郎右衛門

待合 遠州好真塗四方形松波菱

火入 吳須冠手 青竹灰吹

葉入 折昏 唐物手炉

初座 香合羽箒式重角棚

掛物 宗甫公文 手造水指添

釜 浄味阿弥陀堂 了々斎箱書付

香合 青磁犬鷹 灰入 柳川

炭斗 新ふくべ

料理 真塗角木折敷

糸目黒丸盆

繪唐津猪口

向 コチ造り 蕪おろし

汁 わさび あんかけ 飯

合味噌 焼物 キス子

焼豆腐バチ切 友菴焼

叩キ柚子 五分セリ 香の物 大根

菜 小鯛骨抜キ 菓子 ジョウ腰高

大徳寺昆布 銘 炭竈

蒨ノ臺

吸物 粒椎茸

サキ梅肉

取肴 赤穂干イカ

納豆

後入

花入 小堀宗友手造

花 椿

水指 一重切

水仙

信樂 宗甫公手造 同公箱書付

茶入 不昧公好

袋 松風棗 歌アリ

茶七 村田一斎共筒

こぼし 木地曲

茶 片手鉢ノ手

御茶 祝の白

薄茶器 豊前上野焼

肩衝 雪の花

干菓子 松葉

【史料 1 | 1 3】茶会記 明治二年三月条

(朱筆)

○明治二年三月於当菴

主 平井次郎右衛門貯月

客 住友吉左衛門

白山善五郎

木田庄左衛門

古筆 了仲

植村平兵衛

凡鳥好朱手付菘盆

待合 荻入 独楽 手炉 播磨作

火入 絵唐津筒

掛物 清巖和尚一行物 緑柳舞春風

風帯 中 花鳥模様竹屋町

上下 紋紗

釜 庄兵衛作 眞形四季竹ノ絵

東山御物写 土佐光芳下絵

箱書付光貞

炭斗 時代藤組ヒラ菜籠

香合 染付桃  
花生 粉引徳利

灰器 湊焼  
薄茶器 溜吹雪  
花 庭トコ 椿

水指 習々斉好  
真塗 小手桶

御茶 松ノ寿

茶碗 茂三  
茶杓 松花堂共筒

茶入 瀬戸八幡手肩衝  
銘筑波根

建水 七宝

袋 鱗形緞子 書付

料理 桔梗盃  
溜刷目折敷

赤楽杓子

向 イリ酒鱒作

汁 からし

岩茸 針栗

よめ菜

煮物

木の芽 鯛作身  
長ヒジキ タイラゲ

織部小鉢  
焼物 おこぜ山椒

吸物 土筆  
梅干

醤油付焼  
青櫛

八寸 蛤煮付

進肴 鯛ノアラ 煮合  
竹の子

糸わかめ  
香物 新漬大根

【史料1-14】 茶会記「口切茶事」(①)

(朱筆)

○明治十四年十一月十日口切茶事

客 梅上沢融

木津宗詮

吉川善兵衛

掛物 清巖和尚一行

炭斗 藤組 語萬里一丈鉄 方六 了入

香合 吳須八角 花生 宗旦作 一重切

水指 利休所持 茶碗 長次郎 花 白椿

茶入 大津手肩衝 建水 木地曲 袋 蒔黄地金襴

茶杓 宗甫公作 薄茶器 亀甲 同茶碗 四方張

銘 時雨 紅葉 半洲

御茶 綾の森 干菓子

料理 チョンノ目折敷

糸目木皿 糸目わん

向 カケン酢 汁 なめ竹

鯛角作り 海苔 吸物 蕪骨 梅干

煮物 鴨の丸ギンナン 八寸 尼鯛 納豆

荒め 柚

○ 帰路ノ節玄關、糸目二重ニテ 上、キンコ 花かつを 下、熱かん 徳利添

○ 後炭ノ節香合無シ 灰匙、梅か香ヲ乗セテ出ル

【史料 1 | 15】 茶会記「風炉茶事」(2)

(朱筆)

○ 明治十五年五月十六日風炉茶事

料理

新志野角

向 根芋 汁 からし

胡麻醬油

海老丸

煮物 鱧骨切 花柚

順菜

燒物 川鱒角切

付燒

八寸 スマキボラ

吸物 ひしき

菓子 くるみ

蕨

菓子 あやめ餅

干菓子

茄子

香の物

奈ら漬瓜

【史料 1 | 1 6】 茶会記「朝茶」(③)

(朱筆)

○明治十七年八月十五日朝茶午前六時

客

山田惣兵衛

井上為蔵

松本新兵衛

外二人

掛物 津田宗及

建水 かね

釜 芦屋寫

香合 青貝

炭斗 時代竹組

団扇

茶杓 宗本作共筒

替茶碗 古萩

銘 松風

方六 了入

茶碗 熊川

御茶 小松の白

茶入 藤四郎耳付

菓子 葛燒キ

袋 萬曆ヲリトメ

干菓子

水指 春慶細曲

料理 カンナメ折敷  
丸わん

向 キンコ細竹輪蒲鉾  
庄内麩 ギンナン  
蒸し玉子掛

猪口 花鱈塩辛

吸物 味噌ニテ唐ノ芋 焼物 藻魚

ずいき摺胡麻

作り身 鯛 取肴 車海老 煮付

みる 他

八寸 干イカ

みょうが

煮付

香の物 茄子

【史料 1 | 17】 茶会記「歳祝茶事」(④)

(朱筆)

○明治十五年十一月廿八日歳祝

茶事

客

白山善五郎  
同 春甫  
長田純一  
芦田、原

待合 一閑桶形

火入 島もの

手炉 今戸焼

掛物 元伯一行 方六 了入

語 頭上漫々脚下漫々

釜 寒雉丸 花生 輪無し式重

碌々斎作

炭斗 ふくべ 銘 扇寿

雪柳

香合 交趾黄 花 白椿

水指 瀬戸 建水 木地曲

茶入 遠州判中棗 袋 緞子 福寿文字アリ

茶杓 小堀権十郎手造 銘 鳩杖

蓋置 青竹

銘 鳩杖

蓋置 青竹

茶碗 如心齋  
銘 雫

御茶 祝の白

薄茶器 黒引溜

同茶盤 元伯判

唐津小服

菓子 常磐饅頭  
詰熨斗添

独楽盆

干菓子 松葉

料理 溜角切折敷  
丸わん

了入靛皿

向きすご細作り

汁 蕪角切

針栗

摺胡麻

岩茸

煮物 甘鯛身所

焼物 中鯛

大徳寺昆布

柚 アンヤキ

吸物 なめ茸

香の物 奈ら漬

八寸 サキ海老

納豆

進肴 鴨ノ丸

塩辛

蕪菜

チヨロギ

【史料1-18】 茶会記「元旦荘付並ニ料理」(⑤)

(朱筆)

○明治十八年一月年始荘付並ニ料理

菘盆 松角長火入染付

灰吹 青竹 葉入蒔絵

手炉 松齋

掛物 宗甫公

茶杓 貯清齋作

釜 浄玄作 年頭の文

安政棚 萬歳楽寫

炭斗 平菜籠

茶碗 雲笏焼

替茶碗 御本

立靄

花生 青磁鯉耳

菓高 菓子 干菓子

茶入 瀬戸耳付

替 御紋雪吹

炉縁 松花堂好

塗

建水 木地曲

廣間 土佐二幅対

日月 蓬萊

料理

松花堂好

吸物 サキ梅

結昆布

五ブセリ

赤絵皿

向 橙柚

さこし

芋かけ

染付

片口

海月

志野

盃 うす亀台

鉢子 桐猪口

小皿

かつら桶

盃洗 角

銘 太郎冠者

水指 左張

蓋置 青竹

香合 橙

灰器 柳川

縁高

木地箱 木地台耳土器

組重 百合根 ごまめ

苞玉子



【史料1—19】 茶会記「誕生祝」(⑥)

(朱筆)

○明治十三年四月廿八日正午(誕生祝)

客

大寺卯之助

山田惣兵衛

芦田真七

土田湖流

待合

蓑盆 桑手付 火入 宣徳

蓑入 蒔絵鐘の巢

掛物 清巖和尚横物

熨斗目荘

丸三方

釜 弥右衛門

茶碗 井戸

炭斗 霰透木

建水 エフゴ

唐物底 四方籐組

茶杓 叟共筒  
銘みどり

香合 ノンカウ赤箱原叟

薄茶器 泰叟  
中棗

花 啐啄斎一重切

銘 鶴の宿

花 貝母

同茶盃 黒赤

竹叟手造

銘 鶴亀

菓子 千代八千代

干菓子

ゆふたすき

料理 半月折敷  
細のわん

汁 つと豆腐

慶入箸ダイ  
向 鱈の子

海苔

煮物 大根おろし

吸物 順菜

生が

焼物 鯛塩焼

八寸 鯛占

切身 結昆布

作り身 鯛うど 塩辛  
【史料1—20】 茶会記「遠州忌献茶」(⑦—I)

(朱筆)

○明治三年三月九日福島別邸ニ於テ  
遠弼忌献茶

掛物 宗甫公像 画狩野守信

大燈国師賛

黒塗足付台

唐物献茶菓子二色献ス

天目 瀬戸

天目台 唐物台

根来台皿ニ蒸菓子・干菓子二包

茶席

掛物 遠州公筆横物

雲無心出宙

唐物夕顔卓ニ

香炉ニ花生荘ル

香炉 古染付銀ホヤ

花生 唐物砂張小舟

香合 交趾鴨小型

炭斗 唐物金馬八角

方六 素焼

釜 五郎右衛門作鶴首七宝紋

水指 南蛮

盛阿弥作尾張棗

箱書付小堀権十郎

袋 藤種緞子

茶碗 朝日焼

茶杓 不昧公作

建水 木地曲

唐物花輪透

箱書 宗甫公

御茶 菓子 蒸羊羹

干菓子

黄南京鉢 梅ニ牡丹

四方黒塗盆

【史料1—21】 茶会記「甫公忌茶會」(⑦—II)

(朱筆)

○明治十六年二月四日甫公忌

茶會

客

梅上尊融

園徳寺

見学百圍

掛物

甫公横物歌

前二春日盆

浄益香炉

花生

青磁

花木蓮白椿

釜 平釜

小四方臺

天目茶碗

炭斗

竹組平

建水

木地曲

香合

ふくべ

濃茶

水指

唐津手桶

菓子

みそ路焼

饅頭

茶碗

高麗曙

干菓子

松葉

茶替

雲州

茶入

利休好

茶杓

瀬戸ズン切

料理

信楽弁当

上ニ

大ツト麩

汁

豆腐叩キ

肴

干イカ

芽シソ

若菜あへ

木の芽

あちやら

赤貝蓮根

若芽

【史料1—22】 茶会記「遠州公忌」(⑦—III)

(朱筆)

○明治十八年二月七日遠州公忌

御像前  
小四方台天目  
小昏棚 青磁香炉  
花生 竹根釣船習々齋作  
花 松

床 江雲和尚

円桐

花生 木下長嘯子作  
花 木蓮、白椿  
茶入 古瀬戸  
一重口

山里棚

茶杓 宗本作

水指 銅釣瓶

銘 松風

茶碗 砂御本

建水 木地曲

替 古萩

方六 了入

炭斗 春日盆

御茶 祝の白

香合 津田宗及手造  
丸 箱一燈

釜 天猫車軸

干菓子

菓子 栗餅

干柿

汁粉 白餅

【史料 1 | 2 3】 「青木宗鳳公園宗匠十三回忌追福茶事」(8)

(朱筆)

○明治十六年十二月十日青木宗鳳  
公園宗匠十三回忌追福

掛物 甫公 公園筆

椿の文寫

花生 井戸脇 茶杓 象牙

花 寒菊菜

葉水仙 茶碗 砂御本

釜 五郎左衛門 替茶碗 唐津

手取 炭斗 時代藤組平 水指 紹鷗信楽  
建水 かね 菓子 茶入 時代中次  
香合 ふくべ 干菓子 歌仙

藤村正員 花押

料理

向 鯛作身 取肴 小鯛付焼  
大根キザミ 水田慈姑

吸物 摺柚 外二

一塩鯖 手摺り

燕 焼豆腐 竹輪玉子  
飯

【史料1—24】 「先代追善茶事」(9)

(朱筆)

○明治十三年四月廿二日午後二時

先代追善茶事

客 住友吉左衛門

藪清右衛門

山口重蔵

谷村、森田

待合 凡鳥好菘盆 火入黄瀬戸

手炉 籠トウ組

掛物 達磨画 木村素雪筆

賛 碌々斎

いやいやといふニ是非是非賛を乞ひ  
あつたら達磨消えてなくなる

釜 芦屋

炭斗 時代檜の木

水指 木地曲

籠

花生	古備前耳付	茶入	利休中棗
花	朱木蓮	袋	青木漢東
香合	青磁木魚	茶杓	宗旦作
方六	慶入	銘マダラ	
茶碗	脇井戸	菓子	蓬生
建水	左張	御茶	祝の白
	棒の先		
薄茶器	朝鮮櫛茶		
	箱		
	松平備前守		
同茶盃	ノンカウ		
		四方	
	料理		
ノンカウ菊形		汁	尾張細干
向	チョコロギ		わらび
			大根
芽シソ	白酢あへ		からし
海老身			
コウ茸			
煮物	きんこ	焼物	鯛身所
	松露		塩むし
	浅草	八寸	鮎
			百合根
	海苔		
吸物	土筆	作り身	鯛
	梅干		
後肴			
	煮合		
	小鳥丸		
	ゑん豆	香の物	奈ら漬瓜
吸物	味噌		
	おこぜ		
	三ツ葉		

【史料1—25】 「了因大居士年忌追福茶事」(10)

(朱筆)

○明治十六年八当家先々代了因大居士  
年忌正当二付寸志為進福茶事

案内人名

三月六日午後三時

山片重明 樋口三郎兵衛 全重郎兵衛  
森関山 賀島長三郎

同 七日午後二時

尊光寺 大仙寺 同新発意

同 八日正午

鴻池善右衛門 鴻池新十郎  
白山善五郎 平井利兵衛  
原 弥兵衛

同 十一日午後二時

廣岡久右衛門 長田純一  
白山善五郎 山口重蔵

待合 蓑盆 凡鳥好朱角手付

火入 高趾取 葉入 折昏  
灰吹 白竹 手炉

掛物 津田宗及

茶臼 畫賛横物

香合

青磁 犬鷹

表具 金襴

釜 天猫平

方六 了入

炭斗 時代藤組平

花生 宗及侯手造一重切 春の歌アリ

春を知るまかきの竹の

朝露ハ

千代もかはらぬ

色やみすらむ

花 ハシバミ

コシシノ

水指 朝鮮唐津手桶

茶杓 宗甫公手造

無銘共筒 箱書

茶入 利休判アリ小棗 箱書付元伯宗旦  
袋 遠州緞子新切ニテ包帛紗  
茶碗 砂御本 大服 蓋置  
白竹

建水 春慶曲  
薄茶器 面中次  
福寿海トアリ  
薄茶盃 雲州焼  
片身替リ

御茶 小松の白 干菓子 白煎餅

波ノ重箱 腰高満頭 口取 干柿  
菓子 小倉あん

料理 カンナメ折敷  
丸わん

赤絵寄セ 向 ハゼ子作り イリ酒 汁 よめ菜  
土筆 わさび からし

煮物 鯛身所 白魚焼目付  
蓮根小口切 芽シソ

焼物 あふらめ 吸物 海苔  
山椒醤油付焼 針シヨウガ

八寸 干イカ 吹田慈姑  
ヒシキ

尻肴 白魚 塩辛  
若芽

【史料1—26】 「了因居士正当日ニ付精進ナリ」(11)

(朱筆)

○明治十六年七月十日



了因居士正当日ニ付精進ナリ

掛物 江雲和尚

花生 沓形船

白桐

花 ムクゲ

風炉 浄林筒

釜 浄味雲龍小

炭斗

時代桧木籠

茶碗 唐物桃

茶入 蒔絵蝶

茶杓 象牙

水指 信楽

建水 かね

菓子 桜餅

料理

肴 大ツト麩

吸物 薄葛

生が

白瓜角あげ

キクラゲ

冷やしもの

豆腐

志たしもの 茄子

梅肉掛

胡麻あへ

切飯 加田若布かけ

【史料 1 | 2 7】 「木津宗詮好々斎追善茶事」(12)

(朱筆)

○明治十八年六月木津宗詮好々斎

追善茶事

料理 木地折敷

糸目精進宗具

敷ジラス

向 大徳寺麩

汁 モヅク

ナタ豆

からし

コウ茸

坪 鯛摺身同ソボロ 八寸 鯖作  
茄子 花柚 青唐からし

平 鱧 松露塩むし 吸物 ミルメ海苔  
青山椒 梅干

唐津壺 菓子 柏餅  
進肴 小鳥叩キ  
竹の子穂先キ

【史料 1 | 28】 「年回茶事」(19)

(朱筆)

○明治八年四月十日正午回茶事

客 住友吉左衛門

白山善五郎  
木田庄左衛門  
藪清右衛門  
平井利兵衛

待合 蓆盆 田楽箱 蒔絵硯箱  
毛氈 光琳画 寒山拾得屏風

腰掛 桐菊型手炉  
慈光院形田盆  
古銅火入 青竹灰吹  
葉入折帑

二疊大目 角釘箱棚

掛物 大燈国師 四十首詩法語ナリ  
一文 紫地印金  
中 緞子ヨモキ地 外題 大心和尚  
上下 茶色バ 代々ノ添諭アリ  
象軸

香爐 青地三ツ足 但、銀ヨウ敷  
 香銘 野辺ノ梅  
 穂家 銀松竹梅ノ透  
 香盆 堆朱三角盆  
 初座 棚ノ上ニ袋入茶入 莊ル  
 下ニ箒 香合  
 釜 寒雉 少乙御前  
 炭斗 時代藤組平  
 方六 了入作 備前古  
 香合 染付鯉桶 陽柳觀音像模様アリ  
 料理 朱 常器膳 玄々斎好  
 根来盃  
 向 昆布ニテ煮詰 カウ茸  
 焼豆腐三切 白酢交り  
 早蕨穂 リツニラ酒 吹梅干入ル  
 酒次 木地横手  
 煮物 木の芽 細切昆布  
 大原女湯葉  
 松露  
 引物 細ノ重 汁 からし蒨  
 竹の子 カタ布卷 粒椎茸  
 煮付  
 香の物 奈ら漬  
 八寸 水善寺衣掛 カヤ油揚  
 宮前大根  
 吸物 順菜  
 花生 宗旦一重切 詠めにハ八月雪花の匂ひ哉  
 箱仙叟玄々斎  
 花 白ボケ  
 赤木蓮  
 水指 先代作唐物写 建水 左張  
 寄木手桶  
 箱碌々斎又玄斎 蓋置 青竹  
 茶入 備前釜形 薄茶器 五郎

茶杓 銘 郭公 仙叟書付 大棗  
 少菴 無銘  
 筒仙叟 贊筒如心齋 茶盆 一元黒  
 茶碗 井戸松花堂 菓罐 唐物手付  
 銘住吉  
 菓子 葩 干菓子 金馬高付  
 飴

【史料 1 | 29】 「難波瑞龍寺年礼廻勤昼飯」(14)

(朱筆)

○明治十六年一月四日難波瑞龍寺  
年禮廻勤昼飯

上二人 下一人

向 極酢 汁 干瓢  
 干柿おろし 椎茸  
 大根おろし  
 柿小口切  
 キンナン  
 岩茸

煮物 慈姑寄セ  
揚ケ

焼物 焼豆腐 柚 牛蒡 湯葉  
 味噌かけ 百合根 セリ

肴 揚麩 菓子 ジョウヨウ  
 昆布 満頭

香の物 奈ら漬

【史料 1 | 30】 「祭禮釜」(15)

(朱筆)

○明治十六年七月十七日祭禮釜  
午後四時

客

梅上澤融  
廣岡久左衛門  
高木善兵衛  
兼松青木  
山田石田  
楠本山片

掛物 尚信瀧

水指 信楽

風炉 了全作  
道安形

茶碗 古萩

釜 天猫広口

替茶碗 御本

風炉先屏風

三島寫

小及棚

茶入 青貝薬器

茶杓 宗本侯作

香合 光琳蒔絵

建水 銘松風

方六 了入 神垣ノ図

蒸菓子 葛桜餅

蓋置 染付

糸目平

干菓子 朝顔

料理

向鰻

白焼二切

タデ

取肴 車海老

吸物 キンコ

花鱈

焼肴 スミヤキ

隠元豆

煮合 長茄子

冷豆腐

片葛あんかけ

摺柚

志たしもの菜

切飯 加田若布かけ

○明治十七年七月十日  
祭礼釜ヲ兼ネテ

掛物 土佐筆 賛信尹公

三輪山凶

釜 芦屋釜 庄兵衛作

茶碗

高麗片手

風炉 了善作

替

習々齋手造

道安形

四方口面取

棚 遠苧好

柱白竹

茶入

石苧公好

炭斗 時代竹組

茶杓

宗本共筒

香合 不味侯好

丸白寿の画

銘 松風

建水 棒の先

方六

了入

蓋置 染付

水指

春慶曲

菓子 卷下夕

干菓子 二種

小豆入

料理

吸物 中味噌

鉢 酢蛸

皮鯨茄子

ミヨウガ

大小皿引

鯨塩押作り

鱧塩焼

ツバス一尾

隠元豆

ハジカミ

客

飯 切飯

木津、白山、永井、小島

奥野 山口 大島 石田

山西 森田 山田 湖柳

青木 服部 廣岡

若村 兼松

【史料 1 | 3 1】 史料

豐國神社宮司子爵日野西光善より書状

明治十八年十一月五日付 一通

平井貯月宗匠

京都豊國神社 獻

茶式之儀者藪内紹吉

ヨリ例年執行相成候二付

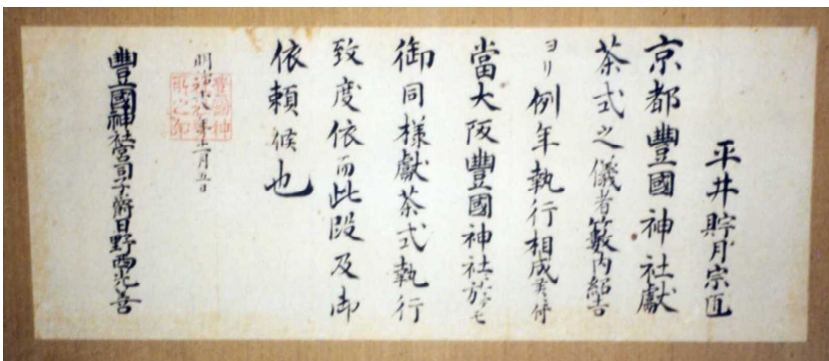
當大阪豊國神社ニ於モ

御同様獻茶式執行

致度依而此段及御

依頼候也

明治十八年十一月五日



豊國神社宮司子爵日野西光善

【史料 1 | 3 2】

史料

大阪豊國神社社務所より書状

明治十九年五月付

二通

前書通獻茶式平井貯月ヲ以  
 執行致度願而者右新調茶具  
 之費願申可多募ル右諸  
 有志之諸君御贊助之上  
 御嘉贈有之候様態ニ致御依頼  
 候也

明治十九年五月

大阪豊國神社社務所



法量  
長さ 7.5 cm

・ 茶杓 「宗甫侯有馬山写 貯月写之 共筒」 一本  
製作年代不詳

【史料 1-33】 美英自作の茶道具

一	御紋附青磁御天目茶碗一對	
一	右、白地小葵長緒御袋	壺
一	御茶杓	平瀬亀之輔
一	御香 銘ミちとせ	
一	金貳拾円	廣岡久右エ門
一	金拾円	梅上家
一	金五円	大畠良斎
一	金五円	戸田弥七
一	金五円	



・ 茶器 「還暦祝一双赤黒」箱書付 二合 製作年代不詳



赤中棗 蓋裏

法量	
黒大棗	直径 8 cm 高 7.5 cm
赤中棗	直径 8 cm 高 6.5 cm



箱裏書

我が還暦祝い尔この茶器壹双  
到来尔まかせ其とし乃試筆二首  
之内を茶器尔書かへをく

何事もなさて老とハ奈里尔けり  
す起こしかたを志のふ気ふ可な

けふよ里ハ  
もと能こ  
よみ尔た  
ち可へり

満た六十  
まで  
行きて

もとらむ  
貯月  
花押

明治三十六年

貯月菴宗従 花押

卯壺月

・ 花入 「まだ見ぬ」一重切



法量	
外径	7 cm
高	40 cm

箱裏書

鵲乃わたせ累はし尔をく霜の  
志ろ起をミれハよ楚更尔気累

貯月菴

【史料 1 | 3 4】 富田常楽庵日記

(傍線筆者)

明治三十九年

● 二月十六日

大坂有力家へ千家の事フイチヨ、江村氏ニたのミ入置。午後二時過キ、福田氏、福本氏同道して、サガ森田氏ノ月釜ニ行。

● 三月廿八日

前九時より千家利休息に行。本年は出火後ノ事故、大徳寺中ジユコウ院ニて有り。其席ニて千家再建ノ義、有志ノ事、一派へひろふスル。本日出席者ノ内ニて左之人々をカンジセワ方ニス。

山田永年 中川宗□ 芦田翁 粟辻 我 石田氏 大坂平井氏  
京平井氏 職人方にて土井翁 樂吉氏 浄益氏 奥村老人。  
宗左氏ニタのミ、これ迄ノカリ入金、金高書ゐ出候処、先三千円斗、外二出入方又ハ買掛りハ平井氏兩人、石田氏ニ取シラベ方タノミ置。

● 三月廿八日

本日ハ利休忌ノ釜終日掛ケル。

床 大龍筆名利休

前 から物丸シヨク

香ろふ 向獅々<sup>(筒カ)</sup>長二郎作

花生 古銅経<sup>(筒カ)</sup>筆 利休有判 花 サイカ 白椿

風呂釜 廿四の通り

水サシ のんこう作キス手形 宗全箱書

茶わん 長二郎作 名□明堂 覚々斎箱

替 朝日ヤキ

茶杓 廿四の通り

なつめ 覚々直書 利ノ字

くわしはち 青地ハタソリ

ひくわしき 朱四方から物 如心齋書付

くわし 手セイ草ノ餅 ひくわし 伊織セイ さくら わ

らひ

来人左ニ山田永年氏、京平井氏、大坂平井氏、飛来氏、笠松氏、福本氏、大川氏、外清之助、高はし氏

山田永年、千家の事二付、ふと平井氏兩人と出会、千家の事二付昨日よりはなしいろく有り。平井氏、左の書るい御持参、金壺千六百八拾九円、一月廿五日より三月廿六日迄、見舞金、惣入高内壺千四百五拾三元五<sup>(銭)</sup>七<sup>(分カ)</sup>ノ諸雑用、今日の処サシ引百拾円九十四三ノ、外ニ有志金四百三拾五円有り、今日迄ノかり入金三千円也。外二月ニ貳拾円ツゝクスシ金有り。此三千円ノ内貳千円、当分兩平井氏ニ立替の事、タノミ入候処、兩家ともタンゼンことわりのよし取申候二付、山田氏我とも少しカンジヲそんじ居ル

● 四月九日

本日午後早々平井氏、石田氏、千家ノ事ニ付御こし。ふと宗左様も御こし同席。内部かり入金ノ事、平井氏兩家にて立替云々申入置。其前千家へ且入黒茶わん、名無之事書付料、外ニ大宗匠へ見舞として有合くわし壺箱、碌々齋六十一才の節ノ華ノ字一字一行物書入云々、為持遣ス。

●七月十一日  
 午後早々千宗且久々御こし。八雲棚ノ事申入置候。いろく  
 はなしの内ニ、焼失後、長者町と我兩人して以後ノ法立有  
 志ホシユニ度く、宗左氏又ハ平井氏、大坂平井氏等ニも打合  
 致し候へども、意ノ如クならざる事はなし致し候。宗且氏も  
 甚々残念ニ思被居候。

【史料1—35】 追善茶会の招待状

貯月庵社中

(句読点筆者)

	貯月庵社中	<p>秋晩茶情相催候に際し、故平井          貯月翁追悼慰霊之為め、来る廿          三日同翁宿坊内北濱尊光寺に          於て茶筵相開き候に付き、午前          九時より午後四時迄の内に、御          来喫被下度、此段御案内申上候          貯月庵社中</p> <p>十月 敬白</p> <p>追白御備物等は堅く御辞退申上候          御来喫之節は御案内状御持参を乞ふ</p>
第一席	尊光寺	
第二席	魚嘉席 薄茶 御齊	

職方中

職方中

月を貯ふと名におひし平井のぬし、みやびやかに心の底深  
りければ、我輩つねによりそひて、そのねもごろなる交り  
うけしに、去年の春、水の音たえにしは、いとをしきにを  
ん。  
ことし一めぐりにあたりて、木のめたつるむしろを設けて  
清きながれを結べりし、昔をかたらふはしにもと思ひたち  
たれば、来り臨みたまはむことを希ふにこそ

翁 知己

職 方 中

追白御備物等は堅く御辞退申上候  
御来喫之節は御案内状御持参を乞ふ

第三席

魚 嘉 席

薄 茶

【史料1—36】 追善茶会の招待客

凡例

- 一、十三代当主・故平井勝彦氏から許可を得た部分のみの翻刻を行った。
- 二、判読不可能な字は、□で字数を表した。
- 三、氏名の下部の黒点は、当書をまとめた人か、当日の受付係による墨点である。
- 四、『茶會々記集』に参会者として出ていた者は、太字にした。
- 五、拙稿で取り上げる人物については、傍波線を付した。

表紙

四十二年第十月廿三日

故貯月翁追善茶會  
招待人名及精 等

諸 綴

朱印

梅上家

尊光寺

中村宗瑞

寺川文助

太田佐七

不参

崎山縫子

梅田善兵衛

外添  
十本

江村嘉一郎

橋本市松

松本たけ

川越チカ

不参

藪田忠次郎

治村六助

弾琴旌

大島操

鮒宇

沢字一

田村三枝

森田操

倉谷米次郎

池原權之助

網島

山中吉良兵衛

茂田屋

高木与太郎

芝川又右エ門

田中合名会社

高島新之助

桑原深造

青木八重

平

田中鼎三郎

(朱印) 西原清二郎

○ 廉島濱右エ門

辻川 半三郎レ

三宅 恒三レ

春海 藤次郎レ

小棹 種次郎レ

戸田 弥七レ

宏林 栄雄レ

田中 太七郎レ

高岡 福信レ

(朱印) 高木 弥七レ

○ 浅井 久太郎レ

坂田 作次郎レ

広岡 久右エ門レ

辻川 天悴レ

(朱印) 樋口 三郎兵エレ

○ 下村 一貫レ

不参 小山 トキレ

山本 三四郎レ

上 嘉三郎 (鉛筆消シ)

小園 長兵エレ

泉 観遊レ

高谷 恒太郎レ

大橋 伴レ

(朱印) 植村 平兵衛レ

桃山 ○ 中橋 悦子レ

砂 貞吉レ

芦田 順三郎レ

川端 佐七レ

伊奈 清助

並 康 榊レ (鉛筆消シ)

平瀬 三七雄レ

豊田 善右エ門レ

木津 宗一レ

酒井千代太郎レ  
 不参 ○ 林 新助・  
 吉田 頭 三レ  
 (朱印) 平  
 ○ 上田 康 蔵レ  
 平井 利平エレ  
 山中三郎兵エレ  
 楠本万助 瀧 □ □ □レ (鉛筆)  
 村山 龍平レ (鉛筆)  
 不参 藤本 一 二レ (鉛筆)  
 (朱印)  
 不参 ○ 千 宗 左・  
 (朱印) 兼松 寛レ  
 玄

寺田 秋 甫レ  
 田村 太兵衛レ  
 山中 与七レ  
 伊藤 孫兵衛レ  
 中野 善九郎レ  
 玉手 弘 道レ  
 住山 勉三郎レ  
 戸田 改之助レ  
 平井 直三郎レ  
 小寺 篤兵エレ  
 谷村 伊右エ門レ  
 貴志 孫右エ門レ  
 武田 謙兵エレ  
 上野 理 一レ  
 白山 保三郎レ  
 (朱印) 白山 善五郎レ  
 ○ 大 仙 寺レ  
 植村 起 三レ  
 (朱印) 中村 孫三郎レ



高木 井  
 田 辺 島 子レ  
 磯野 みち子レ  
 不 参 山 本 志 づ 子 レ  
 榎 井 木 原 京 子 子 レ  
 不 参 藪 田 ふ く 子 子 レ  
 井 嶋 佳 井  
 西 尾 せ 以 子 子 レ  
 比 田 と よ 子 子 レ  
 百 〇 八 通  
 西 村 松 之 助  
 百 十 通 〇 〇 屋

〇 角 倉 兼 遠 ・  
 (朱印) 玄  
 〇 角 倉 兼 親 ・  
 (朱印)  
 〇 卜 半 様 ・  
 清 水 留 七 子  
 (朱印) 社 中 ノ 中  
 〇 中 野 太 右 三 門 ・  
 山 田 ニ よ し 恵 子  
 松 蔵 子  
 吉 川 研 右 衛 門 子  
 秋 山 絹 子  
 吉 川 研 右 衛 門 子  
 秋 山 絹 子  
 は る 子

△印分  
(欄外)

(朱印)

○藤田小太郎

○西村秀造

○久原庄三郎

西村禮作

本山彦一

藤田シン

網島様

手紙添

総計百十七通

内郵送十四通

差引百通

来通

外二

山田様へ

拾通

吉川様へ

拾通

田中様へ

拾通

林様へ

拾通

井口様へ

拾通

江村様へ

九通

土田様へ

拾通

芦田様へ

拾通

河合様へ

拾通

平井様へ

拾通

平井様へ

拾通

合計百廿一通

(朱印)

○今井平七・  
○岡本□平・

大阪毎日

編輯課レ

大阪朝日

編輯課レ

二十通 戸田外へ

【史料 1 | 3 7】 追善茶会の内容

◇貯月翁追善茶会会記

一、待合席

大 床

幅兆殿司極彩色积迦

文殊普賢 三幅對

二、第一席

靈前

平井貯月翁自詠數首  
和歌

香炉 鍍金蓮彫

花生 青竹

前卓 黒断改前机

第一席

幅 印月江禅師墨蹟 播磨入道仁清作

表装 一風萌黄牡丹唐草印金奉寄進

中 紫地造土印金  
上下 茶シケ

花生 古備前四方簀木経筒  
薄板

花 吹上菊 数珠玉  
柱ニ木彫 如意

釜 古天猫真形

風炉 青木習々齊好

香合 古球形 深草焼

堆朱俱利一文字

三十一、第二席 御斎

炭斗	唐物藤組八角檳榔
葉入	
鉦	遠州好象眼大角豆
火箸	象眼
羽箒	野雁
灰器	了入作
小井家	依需云々
棚	遠州寄木棚
水指	仁清色絵香炉形
羯摩	手輪宝の画
底ニ	明曆三月卯月
播磨	入道仁清作
奉寄進	
茶器	古瀬戸引貯
篷露	公函書付
換	遠州蔵帳ノ内
茶碗	黒甲花彫薬器形
三作	三島
換	黄瀬戸筒
茶杓	孤蓬庵伝来
遠州	有馬山写
貯月翁	自作
建水	遠州好
木地曲	
蓋置	青竹
菓子器	
乾山草	花画
雑益、皿	銘〃
干菓子器	
存星彫八角萬曆銘	
松の木實	
ひさこ	

第二席

御齊

幅 雪舟西游山水

大横物

自筆ニテ

名所地入

表装 一風白地中牡丹本願寺切

古金襴

中 白地菊虫入

古銀襴

上下 茶唐花緞子

三十二、第二席 御齋献立

第二席

御齊献立

縁高ニテ

差身(鯛汐押)

海老三丸

卵細卷

蓮根

銀杏(松葉サシ)

四、第三席

切 飯（昆布カケ）

吸物

占豆 腐地

盃 黄瀬戸

德利

第三席

床

幅 達磨画讃 其角筆

武帝□□為守と古たへ与秋の風  
表装 一風白茶地金更紗

中 藤萌黄浪之縫  
上下 浅黄 紋紗

元土方蓬雨傳來

唐物手付四方

花生 大 籠

枯芦 蓮房 秋草

違棚

虚空本來禅一卷

一休和尚作 宗甫公筆 函書付

蓬雪外題

遠州藏帳之内

軸盆

堆朱

長盆 くりぐ

函書付 宗甫

遠州藏帳之内

釜 寒雉尾之釜

風炉 與次郎

欠キ

大光院公用文字

敷瓦

織部

四方模様

【史料1—38】 追善茶会の芳名録

凡例 二席とも参加した者には、傍線を付した。

「第一席 芳名録」 三丁 表紙

第一席

芳名録

中野 善九郎様

木津 宗一様

太田 佐七様



桃	大	伊	福	上	竹	小	辻	全	本
室	島	東	田	田	田	田	川	庄	
								御	
		文				半			
		清	次	衛		雨	三	令	
		操	助	郎	爾	名	郎		
様	様	様	様	様	様	様	様	嬢	様

三	堀	大	辻	植	玉	高	戸	山	原	浅	和	御	大	久	芦	平	浅	貴	岡	曾	竹	坂	矢	河	白
宅	田	島		村	木	木	田	本	田	田	田	同	道	保	田	井	田	志	本	和	中	田	飼	中	井
				泉														弥							
		長		平		政									安	利	清	右	猪	嘉	麗	作		作	忠
恒		兵		兵	寺	弥	之					人	立	有	兵	兵	三	衛	之	兵	之	次	次	三	
三		衛		衛	七	七	助					翠	恒	恒	衛	衛	郎	門	助	衛	助	郎	郎	郎	
様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様

猪寺平右衛門様  
 庭山 嘉一郎様  
 江村 豊様  
 岡本 豊様  
 香野 義次様  
 武田 伴兵衛様  
 忝 秀次郎様  
 佐野 里加殿  
 同 定子殿  
 砂本 様  
 杵田 様  
 芦田 御二方様  
 澤田 宇一様  
 小田 よ志恵殿  
 全 直枝殿  
 宮本利右衛門様

上田 衛爾様  
 弾 舜平様  
 田村 太兵衛様  
 日比野 由太郎様  
 松本 様  
 鎌田 二方様  
 伊藤 様  
 樋口 様  
 小澤 様  
 田中 様  
 楠本 様  
 植田 様  
 中西 様  
 泉 様  
 伊藤 孫右衛門様  
 林 與一様  
 新井 様  
 加藤 喜作様  
 伊藤 泉様  
 中西 様  
 植田 様  
 楠本 様  
 田中 様  
 小澤 様  
 樋口 様  
 伊藤 様  
 鎌田 二方様  
 松本 様  
 日比野 由太郎様  
 田村 太兵衛様  
 弾 舜平様  
 上田 衛爾様

曾 林 様	平 瀬 内	熊 田 様	井 上 様 方	高 木 様	池 原 鹿 之 助 様	上 田 茶 寮 様	井 上 熊 太 郎 様	久 保 都 蔵 様	西 村 松 之 助 様	芦 田 老 人	横 田 久 兵 衛 様	毎 日 新 聞 社	田 中 丑 松 様	全 御 令 嬢	桑 原 深 造 様	小 寺 御 舍 弟	山 中 政 吉 様
-------------	-------------	-------------	------------------	-------------	----------------------------	-----------------------	----------------------------	-----------------------	----------------------------	------------------	----------------------------	-----------------------	-----------------------	------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

寺 田	草 間	吉 崎 善 藏 様	川 端 善 三 郎 様	梅 田 善 兵 衛 様	中 野 太 右 衛 門 様	藤 井 清 兵 衛 様	舟 越 彦 兵 衛 様	山 中 三 之 助 様	治 村 御 内 室 様	全 留 次 郎 様	吉 田 猪 太 郎 様	井 上 市 次 郎 様	住 山 市 次 郎 様	菅 太 一 様	和 田 潔 三 様
--------	--------	-----------------------	----------------------------	----------------------------	---------------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	-----------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	------------------	-----------------------

第二席

芳名録

第二席	
芳名録	

曾和	山本	武内	坂田	矢飼	中野	太田	河原	白井	木津	橋本	梅田	江村	藤田
嘉兵衛	徳之助	甚之助	作治郎	善九郎	善九郎	佐七	源造	忠三郎	宗一	市松	善兵衛	嘉一郎	徳次郎

原田	大島	山本	和田	同	大道	中川	朝田	久保田	富田
貴軒	左衛門	太助	は奈	黛栄	立翠	由瀨	清三郎	清三郎	安三郎

新	加	鈎	上	楠	小	田	樋	山	日	井	松	伊	大	弾	田
井	藤	田	田	本	源	中	口	田	比	上	本	東	畠		村
							六	野		三					太
		武	善				左	芳		千	京	清		舜	兵
		喜	兵	太	義	寿	辰	衛	口	代	一	助	操	平	衛
雜	作	エ	郎	助	介	蔵	門	承	郎						

全	本	全	上	福	山	三	辻	山	竹	高	堀	辻	玉
居		田	田	田	宅	川	田	田	典	木	田	忠	圓
				六			半		右		清	左	
キ	宗	誓	誓	次	香	慎	三	東	衛	彌	右	衛	寺
シ	慶	二	齊	郎	植	三	郎	助	門	一	衛	門	

貴	戸	浅
志	田	田
弥	政	恭
右	之	帥
衛	助	
門		

大	田	曾	藤	山	中	山	山	治	井	吉	吉	和	宮
村	中	谷	井	中	野	田	田	村	上	田	田	田	本
中	每			甚					市	留	猪	德	利
日	正	清	三	右						二	二	二	吉
壯	太	究	兵	之	衛	直	孝	六	二	郎	郎	郎	兵
實	郎	藏	衛	助	門	枝	藏	助	郎				衛

住	沢	芝	杉	同	芦	森	左	佐	三	砂	武	岡	川	吉	庭	伊	林
山			田	田	田	納	野	木			田	本	端	崎	山	藤	
勉				周							伴	哲		善		右	
三	宇	左	藤	は	三	梅	利	サ	三	元	兵	太	佐	三	齊	衛	與
郎	一	一	吉	留	郎	香	加	夕	恒	吉	衛	郎	七	郎	園	門	市

西中辻  
村島

□竹梅  
太演兵  
良郎衛

吉野	和田	若林	宇木興左衛門	池原茗	熊田基	井上ハル	茶寮	横田六三郎	久保都蔵	芦田眞七	西村松之助	岩田又右衛門	山中政吉	小寺篤兵衛	岸田文吉	桑原	桑原すみ
----	----	----	--------	-----	-----	------	----	-------	------	------	-------	--------	------	-------	------	----	------

## 【史料2-1】本居宣長記念館発行の目録

(発行目録と米印を付している説明文は、本居宣長記念館ホームページに掲載されているものを転載した。)

- ・北岡四良・岡本勝・間宮忠夫編『本居宣長記念館 善本目録』昭和四十八年三月発行
  - ※宣長稿本や手沢本千九十八点を載せる。
- ・北岡四良・岡本勝編『本居宣長記念館 蔵書目録三』昭和五十二年八月発行
  - ※『重要文化財 本居宣長稿本類目録』、『本居宣長記念館 善本目録』に記載のない収蔵蔵書千五百余冊を載せる。
- ・鈴木勝忠・岡本勝編『本居宣長記念館 蔵書目録四』昭和五十八年八月発行
  - ※春庭詠草と本居家来簡類の翻字を載せる。
- ・鈴木勝忠・岡本勝編『本居宣長記念館 蔵書目録五』昭和五十四年八月発行
  - ※右記目録未記載資料六百点を載せる。
- ・『本居宣長記念館収蔵品目録第一輯 文書篇』昭和六十年八月発行
  - ※文書を載せる。右記目録とも重複する。
- ・『本居宣長記念館収蔵品目録第二輯 器物篇』昭和六十一年八月発行
  - ※宣長の遺品や鈴など器物全品を載せる。
- ・『本居宣長記念館収蔵品目録第三輯 短冊篇其一』昭和六十二年八月発行
  - ※昭和四十五年寄贈の主に宣長、大平、春庭などの門人短冊を載せる。
- ・『本居宣長記念館収蔵品目録第四輯 短冊篇其二』平成二年八月発行
  - ※昭和五十四年年寄贈品を中心に、宣長や一族の短冊を載せる。
- ・文化財保護委員会『重要文化財 本居宣長稿本類目録』昭和四十八年五月発行
- ・文化庁文化財保護部美術工芸課『重要文化財 本居宣長著述関係資料追加指定目録』昭和五十四年八月発行
- ・本居宣長記念館『重要文化財 本居宣長稿本類並関係資料追加指定目録』



平成十八年八月発行

※指定は同年六月。同月、過去の指定名称も記した  
目録を文化庁が作成した。

・『本居家寄贈品目録』

※昭和四十五年十一月に寄贈された資料の名称と員  
数を載せる。

・『本居家新規寄贈品目録』

※昭和五十四年に本居彌生氏・本居若葉氏から寄贈  
された資料の名称と員数を載せる。

・『新規寄贈品目録 第二集』

※昭和五十八年までの本居家以外からの寄贈品を載  
せる。

【史料2-2】『本居宣長記念館収蔵品目録 第一輯 文書篇』  
本居信郷之部 茶道関係書類(九種)

(『会席附』に確認が出来た茶会記を記している日付には、  
両括弧番号上に◎印を筆者が記した。)

- ・会席附 写 五冊一卷一欠 袋仮綴 共表紙 内題無
- (1) 法量縦二五・〇×横一七・〇糎  
外題「安政四巳年 会席附 式番」五十五丁
- (2) 法量縦二四・二×横一六・八糎  
外題「安政五午年 会席附 三番」五十六丁
- (3) 法量縦二四・六×横一六・七糎  
外題「万延元申四月 懷石附 四番」百三十四丁
- (4) 法量縦二四・二×横一六・八糎  
外題「慶応二丙寅年 懷石附 五番」百二十五丁
- (5) 法量縦二三・七×横一六・七糎  
外題「明治辛未歳二月ヨリ十八年十至懷石附 六番」  
百三十八丁

参考

(1)は、「元伯宗且式百回追慕百会茶之湯」(安政四  
年三月十九日より「山田中野三太夫殿茶事」(安政  
五年四月二日)迄の会記)、(2)は安政五年五月十六  
日下屋敷における茶会より同七年五月四日朝の八疊  
敷における不時茶会迄の会記、(3)は万延元年閏三月  
三日正午の碌々齋宗左茶事より慶応元年霜月三日の  
尾州吉田常和宅安楽亭茶事迄の会記(但し第一丁は

「覚々斎富士絵讃」等掛物の覚)、(4)は慶応二年卯月十八日不審庵の茶事より明治四年二月十四日の聴松庵二畳中板における家督隠居祝茶までの会記、(5)は明治四年二月廿七日正午の茶事より同十八年十二月十四日津の富岡九峯茶事迄の会記。各冊表紙に「本居」と記す。(3)と(4)に付紙。(3)は「四畳半角柱釘天井ヨリ一尺五寸七分、又隅寸法奥ヨリ五尺」(4)は従一位資枝らの松竹梅歌三首を記す)略図など散見する。

・信郷宛千宗左書翰及び会記(一)

三十三種

参考 以下三十二通の書翰及び会記は、蔵書目録五に収められたもので、ここでは翻字もされている。(但し二十九番を除く)各項の下の数字(一八三〜二二五)はその折の整理番号である。

- (1) 四月十五日付 二通 法量縦一六・横二×六五・五糎  
内一通は追而書 (一八三)
- (2) 六月十九日付 一通 法量縦一五・八×横四四・五糎  
参考 明治十二年か (一八四)
- (3) 一日付 一通 法量縦一五・八×横四一・七糎  
参考 年始状 封筒添。 (一八五)
- (4) 十一月廿二日付 二通 法量縦一五・九×五六・七糎  
参考 封筒添。 (一八六)
- (5) 二月廿三日付 二通 法量縦一五・八×三二・二糎  
内一通は追而書。
- (6) 参考 年始状と宮川海苔の礼、封筒添。(一八七)
- 十二月九日付 一通 法量縦一六・六×横三二・九糎  
参考 口切茶事の会記進覧の件。 (一八八)
- (7) 八月十日付 一通 法量縦一五・七×横二五・四糎  
参考 吸江斎十七年の茶事会記進覧の件。  
別紙二枚、封筒添。  
別紙①「六月廿九日正午於不審庵」の会記。  
別紙②「六月六日正午於不審庵」の会記。(一八九)
- (8) 一月十五日付 二通 法量縦一六・一×横三一・〇糎  
内一通は口代と書いた小片。  
参考 封筒添。(一九〇)
- (9) 五月十九日付 一通 法量縦一五・八×横八五・〇糎  
参考 明治六年か ふくため糟漬、八十漬、五十漬  
等の件、また近況報告、封筒添。(一九一)
- (10) 六月八日付 一通 法量縦一五・九×横一四・二糎  
参考 明治六年。小鮑八寸の礼と、それを使った会

- (11) 記を進上する件など。包紙添。(一九二)  
六月十五日付 一通 法量縦一五・八×横七四・〇糎  
参考 明治六年。長谷川氏所蔵の左入の細筒水指の  
件など。封筒添。(一九三)
- (12) 七月廿九日 一通 法量縦一五・八×横九二・八糎  
参考 明治六年。官休庵会記進上の件など。会記は  
「三月十日正午於点雷堂ニ 主 宗守初而之茶」  
とあり。封筒添。(一九四)
- (13) 八月三十一日付 一通 法量縦一五・七×横七四・〇糎  
参考 明治六年。たしから村寒製ひしきの礼。黒角  
水指の共蓋が松阪に着いた折、折れていたこと  
等。封筒添。(一九五)
- (14) 九月十七日付 一通 法量縦一五・七×横六六・〇糎  
参考 明治六年。黒角水指の件など。又、五ツワレ  
井戸茶碗の狂歌「筒井ツゝ五ツニワレシ角蓋ハ  
我カワリシカトクイニケラシナ」を記す。  
(一九六)
- (15) 十月三十一日付 一通 法量縦一八・八×横五一・五糎  
参考 明治六年。曠叔五十回忌の記念品に対して、  
香料をいただいたことの礼。封筒添。(一九七)
- (16) 三月五日付 一通 法量縦一六・三×横四五・二糎  
参考 明治七年。祝儀金、甘海苔の礼など。封筒添。  
別紙一枚 (一九八)
- (17) 七月十九日付 一通 法量縦二四・二×三四・〇糎  
参考 明治七年。封筒添。(一九九)
- (18) 八月十九日宛 一通 法量縦一六・四×横九〇・四糎  
参考 明治七年。御菓子料の礼。南蛮建水随流直書  
付の件等。(二〇〇)
- (19) 七月二十四日付 一通 法量縦一七・六×横四一・四糎  
参考 明治七年。南蛮水コホシ極書付の件など。封  
筒添。別紙一枚。  
別紙 戊八月の指物師利斎の受取書  
(宛名は「不審庵様取次衆中」)。(二〇一)
- (20) 三月十三日付 一通 法量縦一六・四×横二七・〇糎  
参考 明治八年。年始状と祝儀金の礼。封筒添。別  
紙一枚。(二〇二)
- (21) 別紙 長井氏旧冬皆伝のこと。会記一枚進上のこと  
等。  
十月十一日付 一通 法量縦一六・六×横二四・一糎

- (22) 参考 明治八年。平瓢箪の礼等。封筒添。別紙一枚。  
別紙 「八月三十一日萩熊五一宅於四疊半催」  
「十月二日正午於七疊敷」会記。(二〇三)  
三月十日付 一通 法量縦一六・八×三二・〇糎  
内一通は追而書  
参考 明治九年。年始状と御肴料の礼。封筒添。別紙一枚。
- (23) 別紙 「二月廿一日正午於不審庵」会記 (二〇四)  
四月三日付 一通 法量縦一六・〇×横二〇・四糎  
参考 明治十六年。封筒添。別紙一枚。
- (24) 別紙 「三月卅一日正午於不審庵」会記。(二〇五)  
七月二十四日付 一通 法量縦一六・五×横三三・〇糎  
参考 明治十六年。封筒添。別紙一枚。
- (25) 別紙 「明治十六年五月廿二日 加州金沢兼六園」会記。(二〇六)  
一月三十日付 一通 法量縦一六・九×横一五・六糎  
参考 明治十八年。会記進上の件。(二〇七)
- (26) 七月四日付 一通 法量縦一六・九×横一五・六糎  
参考 明治十八年。会記進上の件。(二〇八)
- (27) 十月三十日付 一通 法量縦一六・一×横三六・二糎  
参考 明治十八年 四日市田村氏入門の件。封筒添。(二〇九)
- (28) 十二月廿七日付 一通 法量縦一六・〇×横一七・〇糎  
参考 明治十八年。口切茶事会記進上の件。封筒添。別紙一枚。
- (29) 別紙 「十二月十日正午於不審庵」会記。(二一〇)  
六月一日付 一通 法量縦一八・一×横七・三糎  
参考 明治十九年。会記進上の件。茶会は宗員風路之茶事。封筒添。(二一一)
- (30) 二月七日付 刊 一通 法量縦三五・五×横四五・七糎  
参考 明治二十年二月一日御苑内覧会において、三井高朗、三井八郎右衛門が企た献茶の会記。印刷。貼付された紙に「点献 千宗左」と墨書。封筒添。(二一二)
- (31) 五月十九日付 一通 法量縦一五・六×横一七・七糎  
参考 明治二十年。風路茶事会記進上の件。封筒添。別紙一枚。
- (32) 別紙 「五月十一正午於不審庵」会記。(二一三)  
六月二十八日付 一通 法量縦一五・九×横一八・〇糎  
参考 明治二十二年。風炉茶事会記進上の件。封筒

添。

(33) 十二月付 一通 法量縦一七・九×横一〇・四糎 (二一四)

参考 明治二十三年。遠忌追悼茶会記進上の件。封筒添。別紙一枚。

別紙 「十二月日正午於祖堂利休居士三百年追悼」茶会会記。(二一五)

・信郷宛千宗左書翰及び会記(二)

十種

参考 以下九通の書翰及び会記は、前項「信郷宛千宗左書翰及び会記」と同類ながら、各状封筒が備わらず、又書翰内容も、会記進上のことだけのきわめて簡略なもので、現在まで一応別に分類されていたものである。年次不詳の為発信月日順とする。

(1) 一月十五日付 一通 法量縦一六・三×横四六・〇糎

参考 千宗且・千宗左連署。年頭祝詞と旧冬口切茶事会記通知。

(2) 三月十五日付 一通 法量縦一六・〇×横三一・〇糎

参考 無沙汰をわび、この程催した茶事の会記進上の件。別紙一枚。

別紙 「三月十日正午於不審庵」会記。掛物は「安宝和尚花ノ一字 了々箱書付」

(3) 四月廿日付 一通 法量縦一六・九×三一・四糎

参考 千宗左留守居差出。東京の茶会の会記を回送する通知。別紙一枚。

別紙 「四月二日於正午御別邸上茶」会記。

「御容」正二位殿川殿 御姫方御両所 老女人 齊葉(マヤ)桜門」とあり、掛物は「大燈国師墨跡」。

(4) 五月廿一日付 一通 法量縦一六・七×横四七・七糎

参考 今春出京の御心組が病気のため延引したことへの見舞と干し雉子の礼。

(5) 五月三十日付 一通 法量縦一六・六×横一九・九糎

参考 別紙一枚  
別紙 「五月 日正午於不審庵」会記。

掛物は如心斎の竹画賛。

(6) 六月廿八日付 一通 法量縦一六・九×横二六・四糎

参考 風炉催会記進上の件。別紙一枚。

別紙 「六月十五日正午於不審庵」会記。

掛物は正二位徳川様御筆「碧雲」二字。

(7) 七月七日付 一通 法量縦一五・七×横一四・三糎

参考 風炉茶催の会記進上の件。別紙一枚。  
別紙 「三月廿六日正午於不審庵」会記。

掛物春沢和尚の活卓之

(8) 七月十五日付 一通 法量縦一六・五×横二五・一糎

参考 吸江齋年記茶事会記進上の件。別紙一枚。

別紙 「六月廿九日正午於残月亭 祥翁宗旦居士卅

三回忌追悼茶」会記。付箋「会記書損シ有之御

仁免可被下候也。」

掛物は「大燈国師辞世頌 古溪和尚筆、無学和

尚箱書付、外題天倫和尚」。

(9) 七月廿六日付 一通 法量縦一七・〇×横一六・四糎

参考 茶事を都合により宗員が催したこと等。別紙

一枚。

別紙 「七月廿日午前十時於残月亭」主人は宗員。

(10) 十二月十日付 一通 法量縦一六・七×横一九・八糎

参考 口切茶事の会記進上の件。からすみ恵送の礼。

別紙一枚。

別紙 「十一月廿九日正午於不審庵」会記。

掛物は「寂宝和尚一行 了々齋箱書付」。

・信郷宛千宗員書翰及び会記

四種

参考 以下四通の書翰及び会記のうち(1)と(3)は蔵書目録五に

収められたもので、翻字もされている。項目の下の番

号が、その整理番号である。

(1) 六月廿九日付 二通 法量縦一六・六×横四三・八糎

内一通は追而書。

参考 明治二十一年。宗員差出。宗左(宗員父)病

気の件等。封筒添。別紙一枚。(二一六)

別紙 「六月廿一日正午於不審庵」会記。

(2) 八月十五日付 一通 法量縦一四・〇×横九・〇糎

参考 明治三十二年。宗旦差出。二見よりの帰路面

会したい旨等。葉書。(二一七)

(3) 九月三日付 二通 法量縦一七・〇×横七〇・七糎

内一通は追而書。

参考 明治三十二年か。宗旦差出。

松阪で世話になったことの礼等。(二一八)

(4) 六月十六日付 一通 法量縦一六・〇×横三〇・五糎

参考 年次不詳。宗員差出。風呂茶事の会記進上の件。

父病気乍ら快方に向かいつつあることなど。

別紙一枚。

別紙 「六月八日正午於不審庵」会記。  
掛物は「如心齋小倉色紙 三種 了々齋箱書付」

・不審菴茶会記

写 三枚

- (1) (四月 日正午会記) 法量縦一八・二×横一一・四 糶  
参考 亭主は惺齋(表千家十二代宗匠千宗左)

掛物は利休筆「不審庵」。

- (2) (六月十五日正午会記) 法量縦一七・三×横八四・〇 糶

参考 掛物は利休筆「晒之文」。

- (3) (十二月十五日正午会記) 法量縦一八・二×横八一・一 糶

参考 掛物は 大龍和尚の「性鏡」二字。碎礫齋箱書。

・信郷宛長生庵松年書翰及び会記

二種

- (1) 十二月十日付 一通 法量縦一九・一×横四〇・九 糶

参考 明治二十三年か。利休居士三百年忌茶事会披露の件。別紙一枚。

別紙 印刷。明治廿三年十一月廿日長生庵におゐて

利休居士三百年忌追悼」会記。

- (2) 長生庵茶会会記 写 一枚

法量縦一六・五×横一二五・六 糶

参考 明治廿四年六月七日正午の茶会。長生庵は堀内家。年代より見て松翁か。その弟十代宗完か。

・良休宗佐居士二百年追悼茶会会記

写 一枚

卷紙 法量縦一八・〇×横一〇二・四 糶

参考 十一月五日正午に不審庵で行われたもの。掛物は「随流齋筆 椿の絵覚之 如心齋箱書付」

良休は表千家五代。随流齋はその号。元禄四年七月十九日没。

・楽焼陶家記

写 一葉

卷紙 法量縦一三・八×横三九・四 糶

参考 楽家代々(宗慶より十代且入まで)の家系と窯印を記す。上包みあり。

・宗朝設計間取図

七種

参考 以下七点の資料は、宗朝(信郷)が茶室を設計した時の覚書である。手元の反故を使用したため、各紙の寸法、又、仮綴でも各丁の大きさは不同で

あるため、概要のみを記す。内容も大略を記すにとどめる。  
包紙あり。

(1) 長井氏絵図 一袋

- ・ 図面 六葉 小片二葉
- ・ 書翰 三通

I 二月十一日付 本居宛長井差出

法量縦一六・二×横二五・〇糎

II 五月四日付

(長井) 宗朝宗匠宛五鈴差出

法量縦一六・四×横一八・六糎

封筒添 (封筒の上にも床天井の寸法

覚)

III 七月十六日付 本居宛長井差出

法量縦一六・四×横二五・九糎、

封筒添

絵図一枚

法量縦一二四・〇×横三三・二糎

楮紙 鉛筆書

- ・ 仮綴冊子装 三冊

I 三丁 一丁才「二階略図」

紙背「小津氏別荘略図二枚ノ内」

等

II 二丁 一丁才「外ノ覚

III 九丁 一丁才「長井氏」

紙背「八衛語釋 上」等

参考 袋は伊勢古市桂木屋の「きさらき」と書かれたもの。その上書に「明治廿六年長井氏絵図入」と記す。

(2) 長谷川氏四疊半図 一袋

- ・ 図面 一枚

- ・ 覚書 一枚 端書「長谷川氏茶室図」

末尾「明治廿九年七月二日 数寄屋

大

工 西京 上板久七」

- ・ 仮綴冊子装 一冊 六丁

第一丁才「長谷川氏四疊半図入」と記

す。



(3) 本町小津氏絵図 一袋

- ・ 図面 十一枚（内一枚包紙兼用、又、四枚は包紙に入り一束となる。）

- ・ 仮綴冊子装 三冊

- I 二丁一紙

- II 五丁二紙

- III 第一丁才「本町小津氏」

参考 図面一束の包紙には「本町小津氏絵図 黒田町西

川氏図入」と記され、「大徳寺々中玉林院如心齋好

蓑庵<sup>(ま)</sup>ウツシ」などを含む。包紙裏面は「小津氏別

荘略図 二枚ノ内」。

袋は「本町小津氏<sup>並ニ</sup>西川氏図 絵図入 丹羽氏図

外ニ小津芳蔵 四日市生田（二字不明）所 世古

氏略図入」

(4) 四日市村田氏新築略図 一袋

- ・ 図面 三枚

- ・ 仮綴冊子装 一冊 九丁一紙

第一丁才「村田氏新築略図」

紙背 山室山神社関係の反古 信郷詠草「月前

落葉」等

(5) （茶室絵図）一冊

- ・ 袋仮綴冊子装 一二三丁 表紙なし

参考 紙背のうち六枚は信郷らの詠草

(6) 間取仕法廣間小間切形 四束

- ・ 紙片①法量縦三・八×横二・一糎 二十枚（一束）

- ②五枚（一束） 三浦愛之助の名刺を細く切ったもの。

- ③三十六枚（一束） 土居光華らの名刺、色紙を細く切ったもの。

- IV 十二枚（一束）

参考

それぞれの小片には、たとえば六疊、拾二疊などと書いてあったりする。①のみ寸法一定、他は形状

も一様でない。③の包紙は「松坂新町白木福松」が

販売した「司命丸」の広告。④の包紙は間取図下書。

袋は「松坂魚町 砂糖商 小津店」の「白砂糖」と

あり、墨で消す。その上書に「間取仕法 廣間小間

切形入 本居」。

(7)

小間ノ方

一袋

・紙片 五枚

(6)と同様厚紙を切ったもの。但し、六疊で一八・〇×一三・五糎と、前記のものより大きい。

・図面 二枚

I 法量縦二六・横六×三二・七糎

II 法量縦二四・五×一七・〇糎

・覚書 一枚

三〇・三×横四一・〇糎

裏は弘化二年巳正月廿七日茶会記

信郷の自作や自作とみられるとわかる項目の上には◎を付し、筆者が信郷の自作であろうと比定した作品には△を付した。

内容の記載については、筆者が省略を行った箇所は「」括弧で表記した。(写真は著者撮影)

茶道具之部

◎茶杓 八本 本居信郷自作

・ 共筒「八千矛 宗朝(花押)」

筒裏書「以前の愛樹の古木を削之 明治六年初秋 鈴廼屋水屋常什」

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	
一七・〇	一七・二	一七・六	一八・三	一八・六	一七・五	一七・八	一七・〇	杓長(単位・榎)
	楓	銀杏	梅	たちはな	松	をかたま	おくら	材質
	權先裏	權先裏	權先裏	權先裏	權先裏	權先裏	權先裏	材質記銘箇所
	切留裏	節裏	切留裏	切留裏	節裏	切留裏	切留裏	花押記銘

筒書





- ・茶杓 二本
- ・筒書「徳川従二位殿御命 千貫松 座論」
- ・松 一八・五
- ・梅 一六・三
- ・真の茶杓
- 「以松阪古城之松梅ヲ作」



櫛先裏に材質名が彫り込まれている。



・茶杓 一本 共筒 真の茶杓  
 ・杉 一八・〇  
 ・筒書「白兔 玄室（花押）」  
 「本居健亭主江都乃土産として長谷川松窓  
 兄ヨリ贈らるゝ品」



・茶杓 一本 共筒 草の茶杓  
 ・竹 一八・四  
 ・筒書「春けしき 長生菴 松翁」  
 「不老間再興建築」  
 「明治三十年（花押）」

・茶杓 一本 共筒 草の茶杓

・竹 一八・三

・参考 筒書「鈴屋 左（花押）」

筒袋は代用品。



・茶杓 一本

・木 一六・二 試作品か。

・茶入 一

・陶器 胴張六・五×高八・五 瀬戸焼

肩衝形 牙蓋 底に一文字刻す。（判読出来ず） 仕覆 箱付



・茶入 一

・陶器 胴張七・五×高五・五

茄子形 秋草の絵を二面に書く（色絵付）  
牙蓋 箱は蓋置の箱を流用する。

・茶器 一

・磁器 胴張七・〇×高七・〇 藍で梅花染付

・茶器 一

・漆器 径七・〇×高七・二 中次形雪吹  
箱裏「塗師 宗哲（花押）」

参考 宗哲は千家十職の一。中村家の人である  
う。



・天目茶碗（台共）一

・陶器 径一二・五×高七・〇 緑釉 貫入

阿漕焼 窯印「阿漕」  
（天目台）径一四・〇×高一〇・〇  
窯印「阿漕」

参考 この茶碗の付属品と思われる反古が一枚  
ある。次に翻字する。

「天籟自鳴 堆碧題（印）（印）（絵は略  
す） 玉堂（印）（印）（印） 温故知新  
多意匠 図采色自然工 十年辛苦一塊土  
造出安東古老風 丙申春日為玉虹堂主人  
松陰生（印）（印） 明治二十九年三月  
甄陶法古自有雅趣 題阿漕焼窯瓷器  
具致

三重県津市極楽町贅崎道 阿漕焼陶器製造  
所 産栄舎市川岩吉

尚、絵は阿漕浦の図で、芭蕉の阿漕塚の  
碑を描く。



◎ 井戸茶碗

陶器 一口

径一三・五×高六・二 乳白色

参考 箱書「自造 箱共 茶碗」  
 (ウ) 「井戸うつし・銘カケヒト号 朝 (花押)」

・ 天目茶碗

陶器 一口

径一三・一×高五・五

玳瑁蓋に類似する。高台内に釜印「仁清」。





・茶碗 一口

・陶器 径一三・〇×高八・八

杉形 高台内は渦巻 色は萩焼に類似する

・茶碗 一口

・陶器 径二・二×高七・七

杉形 口縁下に二本の線と象形模様

薩摩か仁清写し

◎茶碗 一口

・楽焼 径一二・五×高六

杉形 赤楽 高台内「朝（花押）」と刻す。

信郷自作



・安南写茶碗 一口

・染付 径一二・四×高八・五

高台径（内径）五・一×高二・〇

白磁に薄藍で描く 内側にも模様

高台に「伝阿弥造」とあり。箱付

参考 箱書「安南写茶盃（印）」「安南写以古

城山之土 道八造」（ウ）「以古城山之土

造（印）」（仁阿弥道八の説明は略す）」

・茶碗 一口

・陶器 径九・七×高八・〇

しぼり袋形 乳白色 金継

◎平茶碗 一口

・陶器 径一三・四×高五・〇

参考 箱書「平茶碗」「碧雲白華 貞桑居主人

書」「三井氏へ逐ル詩銘文字有 守謚主筆

二ノ内」「自作 箱共 平茶碗 朝（花押

）」



・塩筭茶碗

一口陶器

径一〇・五×高八・〇  
 山桜の絵としきしまの歌をあしらう  
 高台 窯印「万古」か。  
 削り





◎ 茶碗

・ 楽焼 一口  
 「福寿」と書く 半筒形  
 高台瓢形楽の印 信郷自作



・ 茶碗

・ 陶器 一口  
 高台径(内径)五・一×高二・〇  
 馬上杯形 桜の色絵付 窯印「阿漕」  
 付紙一枚  
 参考 付紙(のし紙)「本居翁百年祭記念茶碗  
 松阪山川ホテル」

◎茶碗

- 一口
- ・ 樂焼 径一・五×高八・〇

赤楽に緑灰色、宣長の歌を内側より外側に

書く。外側は信郷の自詠

窯印瓢形楽の印 信郷自作

参考 宣長の歌は「さとるべき事なき世にさとら

むとおもふ心そまよひなりける」

信郷の歌は「楽のしふ茶をたつる茶わんに

もなれはうれしきおのか手造」



- ・ 天目台

一基

- ・ 漆器 最大径一六・八×高六・八

金泥の縁取り

- ・ 水指

一

- ・ 陶器 径一二・三×胴張一八・〇×高一四・五

松竹（草か）の色絵付（餌ふごの地模様）

耳付 塗蓋 箱付

参考 箱書「美曾路」「初春にまた幾年なす一

ふしは千世にやちよをこむるくれ竹

資枝（花押）」

- ・ 水指

一

- ・ 陶器 口径一二・〇×一〇・五

高一七・〇

備前か 全体は赤茶一部に自然釉

塗蓋 箱付

- ・ 水指

一

- ・ 陶器 口径一八・〇（底径一四・五）

高一八・五

古備前 胴に千筋（ろくろの筋）

塗蓋 槍の鞘形

◎水指

一 陶器 径一五・五×高一五・〇

雲鶴文

塗蓋 射和万古に類似 信郷自作

参考 蓋(ウ)「自造 朝(花押)」

・野溝釜

一 鉄 釜口径一八・三 胴張二四・二

蓋径一八・四 高〇・九

甑口鈚付は龍 掬い蓋(共蓋) 柚肌 箱付

・蓋置

一 唐銅 最大径六・七×高八・三

穗屋香炉形

・蓋置

一 鉄 径八・〇×高四・三

五徳形 底に「春日社」と陽刻。

・蓋置

一 唐銅 高五・〇

さざえ形



・蓋置

一 樂焼 巾五・三×高五・三

三つ葉形 樂焼に灰色系の色が少し入る。

底に窯印「樂」。

参考 十一代慶入の前印に類似する。

・蓋置

一 樂焼 径四・〇(内径二・三)×高四・五

赤楽に白色が入る。筒状

・建水

一 陶器 径一〇・〇 胴張一四・〇 高九・八

口縁片側片口状になる。  
餌ふご形 蓮花唐草文 瀬戸

・建水

一 陶器 径一七・〇×高八・〇

窠文形 瀬戸

・建水

一 陶器 径一六・〇 高七・五

片口形 黒茶色で古色をおびる。  
底に下駄印あり 伊賀焼か

・花入

### 調度品之部

#### ◎ 橙香合

一合 橙 径六・五×高三・三

橙の実、中は黒漆 箱付

参考 箱書（貼紙）「古好齋作 橙香合 二代

目宗完書付」

「橙香合 好古齋自作 宗完」



・橙香合

一合 橙

径一一・〇×高四・五  
橙の実、中は黒漆

・鴛鴦香合

一合

・杉

巾九・五×六・〇 高七・二  
木地で木目で景色を出す。

蓋裏「晋（花押）」



・独楽香合

一合

・木

径四・八×高三・四  
木地で木目で景色を出す。

蓋裏「幽（花押）」

・蒔絵香合

一合

・漆器

径五・五×高二・〇  
表は梨地に椿と水仙の花包み文。

中は梨地 桐箱



・ 蔦丸香合 一合

・ 木 径七・八×高一・五

白木 湯本細工

蓋裏に「好（花押）」と朱漆で記す 箱付

参考 箱書「箱トモ 湯本細工蔦丸香合 左」と記す。



・ 香合 一合

・ 陶器 径六・五×高四・〇

伊賀焼か 粗放無骨な作りで、天部に青い釉葉がかり、また淡い朱の釉葉が塗られるが、全体に精錬されない土があらわれる。

・ 松傘香合 一合

・ 陶器 長六・〇×巾四・〇×高三・〇

松傘形で、青白色の釉葉がかかる。

窯印「まいこ」不詳□風軒

参考 神戸市垂水区にあつた舞子焼か。





◎布袋香合 一合

・陶器 巾五・〇×高四・三

天をおおぎ大笑いする布袋。  
底に宗朝の花押あり 信郷自作



・龍文香合 一合

・陶器 径六・七×高四・七

外は茶色、班紫と白、内は緑釉。  
浜縮緬の仕覆 中国か交趾。

・分銅型香合 一合

・陶器 五・五×四・〇五×三・〇

青白釉

窯印「赤膚山」「李」

・蓮香合 一合

・楽焼 径五・五×高三・五

蓮の実形

蓋裏「好（花押）」

窯印「楽」（十一代慶入の隠居印） 箱付

参考 箱書「拾二ノ内」「今般長谷川定次郎主

実父乗願居士之依追悼応求好之 又妙玄室

（花押）明治十四年辛巳十月」

〔又妙玄室の説明文略〕



・鈴香合 一合

・楽焼 径六×高六・八

金の溜塗り

蓋裏 窯印「楽」（九代了入の隠居印）

箱付 添状一通

参考 箱書「鈴香合 了入造置」

「贈 鈴の屋君 明治十年秋

十一代慶入（印）」（印）は隠居印



添状（一四・七×二〇・二）

「記 一 鈴香合 一箱 右進上仕候

御慰とも相成候ハ、大慶奉存候 一半

衿 一 右 末之至候得共御内室様へ

進上仕度御着留願上候尚宜御伝声奉願

上候 慶入 本居健亭様

尚々外之二書毎々御無礼御手数恐入候

得共御両家様早々御達し之程願上候

以上」

◎結び文形香合 一合

・陶器 最大八・〇×高二・二

茶と鼠色の釉薬

底に宗朝の花押 信郷自作



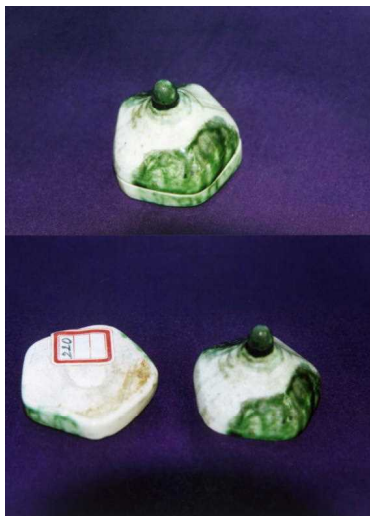
◎宝珠形香合

一合

・陶器

巾五・五×高五・二  
五稜形、上に玉がつく  
宗朝の花押 信郷自作

緑釉



◎蛤香合

一合

・蛤

最大巾九・八 縦七・八  
蓋に朱漆で「和合」  
中は金を塗り、漆で  
「朝（花押）」 信郷自作



・土風炉

一

・径二七・〇×高二〇・〇

奈良風炉形 五徳付 三つ足

参考 奈良風炉は、初期の前欠き風炉で乳足が多く、頬当て風炉ともい『倭漢三才図絵』にも図が出ている。

・灰器

一

・陶器

径一九・〇×高八・〇  
ろくろ目あり 緑に釉薬がかかる  
窯印「金剛山」

・灰器

一 陶器 径二三・〇（ノ一七・〇）×高七・〇  
底部補修 窯印「楽」

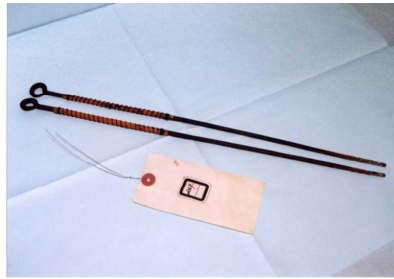
・灰匙

二 銅 一には「甫」の刻あり。風炉用 添状一通  
参考 添状「覚 一五 勿也 利休形風爐灰杓子

一本 右之通槌受取申候以上 中川浄益  
（黒丸印） 八月廿八日 本居宗朝様」

・長火箸

一 鉄 三七・九 上部を竹の皮で包み紺の撚糸を  
巻く。



・炉用火箸

一 鉄 二七・八 柄は桑

・風炉用火箸

二 鉄 ①三四・二 ②二七・二  
袋張 みず有り

・風炉用火箸

一 鉄 二九・〇  
参考 風炉用火箸の包紙一枚あり。

「利休形風爐鉄張火箸 中川浄益」とあり、  
前項か、本項のいずれかのものと考えられる。

・杓立

一

・樂焼

口径四・二

高台径三・九

胴張八・〇

高一七・七

緑色に金泥で笹葉重ね

窯印「楽」（九代長入）

桐箱

参考 箱蓋「長入作杓立」



・杓立

一

・銅

胴張八・五 高一六・八

象形文 箱付

参考 箱書「銅杓立」「南京杓立」

・釜据え

一

・木 一六・五×一六・五×二・四

(内法 一三・七)

・炭切形

二

・竹 長二三・三

①口 輪炭 胴炭 管炭 点炭 毬打炭

②フロ 輪炭 胴炭 管炭 毬打炭

とあり 包紙

参考 包紙「炭切形 炉風炉 指物師利斎

(印)」

・羽箒

六枚

① 三三・〇

② 二九・四

③ 三一・二

④ 三二・〇

⑤ 一二・四

⑥ 一五・二

・羽箒

- 一枚
- 三四・五 桑柄鶴ひとつ羽 箱 包紙
- 参考 箱「桑柄鶴ひとつ羽 孤芳庵什」
- 包紙「御羽箒 一ツ羽 元笠（印）」
- 印刷

・箱炭斗

- 一
- 桑 二六・三×二六・三×一六・三
- (把手含め二七・二)
- 桑木地 やや上開き 水屋用

・湯桶

- 一
- 曲物 径一五・四×高一三・八
- 三ツ足 注口 取手付 内は朱塗

・薄板

- 一枚
- 漆塗 四一・二×二九・二 箱付
- 参考 箱書「溜蛤葉薄板」「塗師宗哲」（印）
- 行の花入（国焼の釉）を置く

・小板

- 二枚
- 松 大 二九・一×二七・五×一・六
- 小 二六・〇×二四・三×一・五
- 拭塗 両面に長い楕円の堀り込み五本ずつあり。

箱付 参考 箱書「松ノ木小板 大小 指物師利齋」

・長板

- 一枚
- 漆塗 七四・〇×三〇・〇×一・四
- 参考 炉用

・鎖

- 一
- 鉄 釣釜鎖（ゆるし鉤。もとおり、鉤、蛭釘掛が付く）



・弦

一 鉄 左右巾二三・一  
釣釜用 形は釜釣と称される馬蹄形のもの

・環

一 対 左右巾八・〇 利休所持模 包紙付

・環

三 組 左右巾七・六 一つは細造り

・手拭掛

一 錫 七六・〇 箱付

・鍵袋

一 梅蝶文亀甲裂 牙爪有□包紙付  
参考 包紙「利休形鍵袋 袋師友湖」  
千家十職の一、土田友湖の作である。

◎茶巾筒

二 陶器 ①径二・七×高六・二  
②径三・三×高六・五

◎茶巾筒

三 竹 ①径三・五×高五・六  
②径三・五×高五・五  
③径三・三×高五・六  
①「朝（花押）」と朱漆で書く。  
②「朝（花押）」と朱漆で書く。  
③「古好（花押）」と朱漆で書く  
信郷自作

◎茶布巾入

一 陶器 鉄 六・〇×九・五×三・〇  
乳白色 半円形 信郷自作

・茶合

一 黄楊 口径七・五×高五・〇  
本来茶掃箱の中の一つだが、他には小羽箒しか

・花月札

伝わっていない。煙草盆（調度品之部）参照  
十二枚 竹 一・二×二・七 表「一」の裏「月」、  
「桜」、「（無印）」 同じく「二」「三」  
「ウ」の十二枚 折居入

参考 七事式の一 花月の時に使用する。折居  
には一と書く。一回の花月で使用するの  
は五枚。

・茶筥

一

・煤竹  
参考 高山豊前作 箱付  
箱貼紙「高山豊前（印）」

・茶筥

一

・煤竹  
参考 高山豊前作 箱付  
箱貼紙「数穂茶筥」「高山豊前（印）」



・柄杓

三本竹

- ① 風炉用 合の径五・五 月形  
切止は身そぎ
- ② 炉用 合の径六・三 月形  
切止は皮そぎ
- ③ 水屋用 合の径七・〇 月形  
切止は一文字

・花月札

十二枚竹

参考 月形は利休形の別称

「桜」、「（無印）」 同じく「二」「三」、  
「ウ」の十二枚 折居入

参考 七事式の一 花月の時に使用する。折居  
には一と書く。一回の花月で使用するの  
は五枚。

・箸

三膳竹

・竹 二五・四 緑色塗 矢羽根木地抜き  
包紙付 未使用

参考 包紙「へ舎 根 勢州松阪垣鼻町  
利休御塗箸」と記す  
本 鳥羽屋長助

・箸

一膳木

一膳木 一七・二



- ・折れ釘類
  - 二五本
  - ・鉄（一点のみ竹） 包紙が二枚あり、一は竹釘を包む、一は不明
  - 参考 包紙一「利斎掛物釘」（竹釘を含む）
  - 二「にしり上り打掛 一」
- ・蛭釘
  - 三本
  - ・鉄 九・五
  - ① 一五・五
  - ② 一九
  - ③ 一九
  - つり釜の掛金具
- ・稲妻釘
  - 一本
  - ・鉄 九・五
  - 包紙「浄益作 稲妻釘 一本」
  - 包紙「松坂魚町本居健蔵様 高尾宗朝 ちん先拂 高尾」
  - 「白子 林昌寺様迄 本居健蔵 高尾宗朝 預り 賃先拂」などと記す。
- ・鐘掛釘
  - 参考 中川浄益作
  - 三本
  - ・鉄 五・三 包紙付
- ・袋掛釘
  - 一
  - ・鉄 五・四 中川浄益作 包紙付
- ・掃込掛釘
  - 一
  - ・鉄 四・五 中川浄益作 折釘 包紙付
- ・簾掛釘
  - 二
  - ・鉄 五・二 折釘 包紙付
- ・にしり打掛掛釘
  - 一組
  - ・鉄 包紙付 躡上は躡口のことである
- ・道幸ヒジ釘
  - 二本
  - ・鉄 一・五 包紙付
  - 包紙に「高知県貫属士族 二宮頼長」
- ・燈産掛釘
  - 二
  - ・鉄 五・〇 折釘 中川浄益作 包紙付
- ・折れ釘類
  - 三本
  - ・鉄 ① 五・七
  - ② 五・〇
  - ③ 五・一
  - ① ② は中川浄益作 包紙付

日常什器類

・ 亀足縁高

一基  
桐 二六・〇×二六・〇×一六・〇

六角形六足 箱付

参考 箱書「仙叟好 亀足縁高 孤芳庵什」

と記す。仙叟は、裏千家四代千宗室。

宗室は宗旦の四男で、その兄が表千家四

代千宗左である。加賀前田侯に仕え二百

石を祿した。元禄十年一月二十三日没。

七十六歳。

◎ 向付

五口

・ 楽焼 一二・八七×二一・五×二・二

菱形 瓢形楽の窯印 本居信郷作

・ 銘々皿

十枚

・ 陶器 径一〇・〇×高二・〇

菊文様(五) 葉文様(五)

把手付 竹

参考 慶入は十一代、信郷と親交があった。

・ 盃

一口

・ 漆器 径九・〇×高三・〇

朱漆 外側に金で「本居宣<sup>(ママ)</sup>長大人一

百年祭」内に桜を描く

・ 盃

一口

・ 漆器 径九・〇×高二・九

朱漆 外側に金で「結城神社五百五十

年祭」と巴の文を描く 桐箱付

黒漆で描く

高台内「名古屋市随製」と書く

・ 盃

一口

・ 漆器 径九・〇×高二・九

朱漆 外側に金で「結城神社五百五十

年祭」と巴の文を描く 桐箱付

◎猪口

十口  
・楽焼 径九・八（く六）×高三・四（三・三）

（白（二））他は赤色 口縁は黄、内は白色 瓢形の楽の印 信郷作

◎猪口

五口  
・陶器 径七・五×高二・五

内に山桜の絵、外は「しきしまの」

歌。窯印「阿漕」

◎小壺

五口  
・陶器 胴張六・八〇×高四・〇

織部手 宗朝花押 信郷自作

◎ふりだし

一口  
・陶器 胴張一〇・〇×高一二・〇

瓢型 織部手の緑釉 梅花文 瓢形の楽の印 信郷自作

◎舟形楊子入

一口  
・陶器 二・〇×四・二×二・三

信郷の自作である。

・助炭

一口  
・竹、紙 三五・〇×四三・〇

籠に紙を貼り紅葉、桜、萩、竹を墨で描く。茶道用のものか。

照明具類

・燭台

一基  
・竹 高六一・〇 竿は竹

・菊燭台

二基  
・漆塗 高五一・〇

下の台は菊花形に盛りあがる。竿は漆塗。

参考 信郷の代に茶道の夜咄などに使用したものである。前項も同じ。

◎芯入れ

一  
・楽焼 径九・〇×高八・五

共蓋（十四面形のつまみ付） 赤楽

瓢形楽の印 信郷自作

◎秉燭

一  
・楽焼 径一〇・〇×高五・〇

分銅型で把手付きの蓋が付く 信郷自作

花器類

・花入

参考 「秉燭の説明の為、略す」

— 陶器 径八・九×高二六・〇

黄瀬戸 杵形 箱付

参考 「瀬戸焼花入」

・花入

— 古銅 径一三・二×高二六・六  
耳は獅子

・花入

— 唐銅 口径二・二（胴張一三・五）×  
高二〇・〇

底に鍵形の打ち込み 糸巻き模様

・花入

— 竹 径八・二（く九・四）×高二〇・五  
両端を節で切り胴には節なし

掛花入にも使用できるよう金具付

金具下に「旅枕 花押」と朱漆で記す

箱付

参考 箱書「けうもはやゆきくれたけの旅ま

くら寝さめなくさむ花のいろく」

颯々庵 宗凹（花押）」

・花入

— 竹 径一一・〇×高二七・七

花窓をとり漆を柱と切口に塗る

釘穴下に「高尾」

「不寂（花押）」



\* 一 目録では銘を「高尾」と記しているが、史料には「高雄」と記されていた。



△花入  
 一  
 ・竹 径一・二・〇×高二〇・〇  
 達磨型 「古松 朝（花押）」と記す  
 釘穴あり



△花入  
 一  
 ・竹 径五・四×高四三・〇  
 置筒形 朱で「不出来 古好（花押）」  
 参考 信郷の号は、宗朝か好古庵だが、好古  
 とも称したか。



・花入  
 一  
 ・竹 径五・〇×高五三・五  
 手桶形 手は上方で末広形に大きく開く  
 朱で「鈴屋」と記す

△花入

一 竹

径一・〇×高一七・五  
花窓一 釘穴  
「残月 朝（花押）」



・花入

一 竹

径一四・五×高二八・二

釘穴下に朱で「養老（花押）」 箱付  
参考 箱書「安政乙 冬日製之七十叟得水」  
「得水老人七十賀所贈 竹翁藏」

・水盤

一 陶器

径四〇・〇×高四・〇（く五・〇）

外側に木の葉打ちこみ  
耳付 常滑か

煎茶道具類

・煎茶茶碗

二口 陶器

径九・〇×高五・五

南京藍手 龍の画（金泥）  
口縁は金で二重 高台内に模様  
画、模様は二碗とも異なる 中は白磁

・煎茶茶碗

二口 陶器

径一〇・二×高五・〇

秋草を藍で描く（薄、萩、藤袴）  
内は白磁

・急須

一 陶器

幅九・〇×高九・〇

（藍も含む）青・緑の釉の地に牡丹、  
鳥、獣、花の図面を描く  
下部には釉薬かからず地の色がでる  
十錦糸か

・涼炉

一居

・樂焼

径一二・〇×高一・九  
赤樂 上の方に緒締



・茶合

二

・木質

①長二三・三  
Ⅲ長一四・五

樺の木か

### 喫煙具類

本来は信郷の代に茶事の折に使用したものではないかと考えられる。

・キセル

十七本

①石州形（雁首と吸口に唐草模様を刻す）  
二本

②如真形 七本

Ⅳその他 八本（吸口欠 一本  
雁口欠 一本 を含む）

・煙草盆

一面

・木質 一七・三×二六・〇×一〇・三  
糸巻き透し 手無し 木地

・煙草盆

一面

・木質 一八・一×一八・〇×一八・二（把手  
含め二六糎） 手付 下に抽斗付く  
糸巻き透し 手無し 木地

・煙草盆

一面

・木質 一六・三×二〇・五×一一・八（把手  
含め二七糎） 千鳥透し 手付  
下に抽斗付く

参考 抽斗の中に「万延二年便曆」（桃花庵  
蔵板）等を入れる。（小羽箒、入歯等）

・火入

一

・磁器

径一〇・四×高九・四

馬の絵染付 高台「道光年製」とあ

り  
割れを継ぐ

・火入

一

・磁器

径一〇・五×高一〇・五

竹林の絵染付 口縁波形

・火入

二

・唐銅

径一一・五×高一〇・〇

飛龍文様

・火入

一

・唐銅

径一〇・九×高九・五

銅が捻貫のように段々になる

・火入

一

・唐銅

径一〇・九×高九・五

宝尽し文 小火鉢

・袖炉

一居

・唐銅

胴張一三・〇×高一六・〇 手付

風覆は唐銅で梅花の透しがあり口穴がある

・火箸

一対

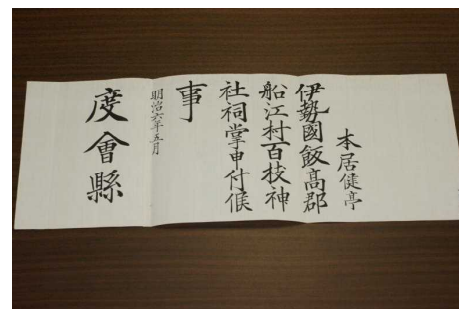
・鉄

二三・八

参考 火箸は茶道具之部に出したが、これは寸法も短かく、煙草盆で使用したものか



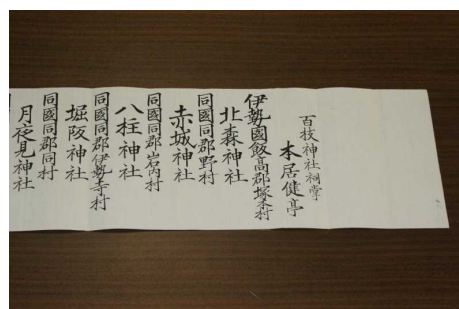
辞令① 百枝神社祠掌辞令



19.8 cm 51.1 cm

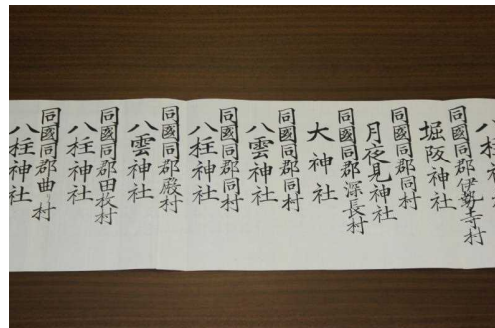
本居健亭  
 伊勢国飯高郡  
 船江村百枝神社祠掌申付候  
 事  
 明治六年五月  
 度會縣

辞令② 拾八社祠掌兼務辞令



19.8 cm × 168.1 cm

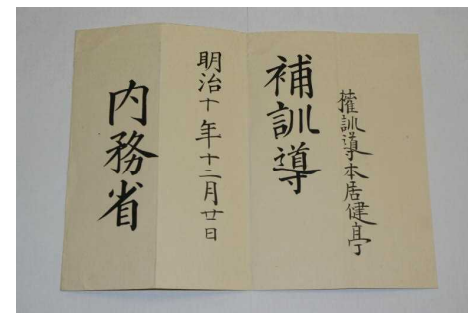
百枝神社祠掌  
 本居健亭  
 伊勢国飯高郡塚本村  
 北森神社  
 同国同郡野村  
 赤城神社  
 同郡同村岩内村  
 八柱神社  
 同国同郡伊勢寺村  
 堀阪神社



同国同郡同村  
 同国同郡同村  
 月夜見神社  
 同国同郡深長村  
 大神社  
 同国同郡同村  
 八雲神社  
 同国同郡同村  
 八柱神社  
 同国同郡同村  
 八柱神社  
 同国同郡同村  
 八柱神社



辞令④ 補訓導辞令



22.7 cm × 30.8 cm

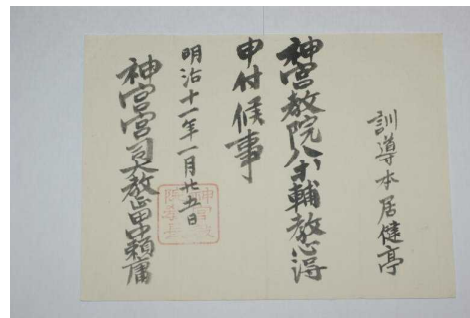
權訓導本居健亭

補訓導

明治十年十二月廿日

内務省

辞令⑤ 神宮教院八等輔教心得辞令



19.3 cm × 26.1 cm

訓導本居健亭

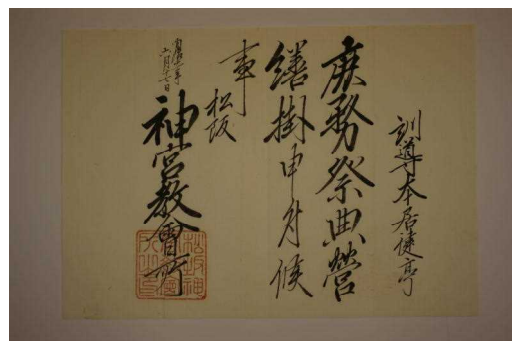
神宮教院八等輔教心得

申付候事

明治十一年一月廿五日

神宮宮司大教正田中頼庸

辞令⑥ 庶務祭典宮繕掛



16.2 cm × 23.0 cm

訓導本居健亭

庶務祭典宮

繕掛申付候

事

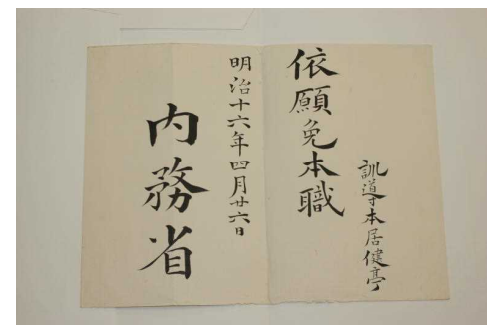
松阪

明治十一年

六月十七日

神宮教會所

辞令⑦訓導免職辞令



22.9 cm × 31.1 cm

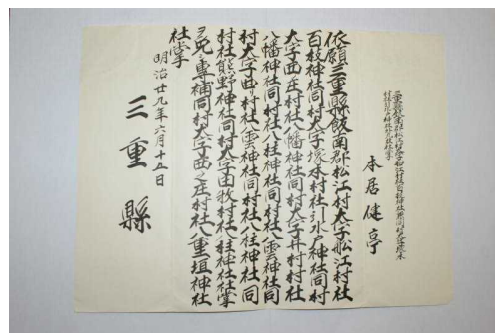
訓導本居健亭

依願免本職

明治十六年四月廿六日

内務省

辞令⑧十社社掌免職並に八重垣神社社掌専従とする辞令



22.8 cm × 30.7 cm

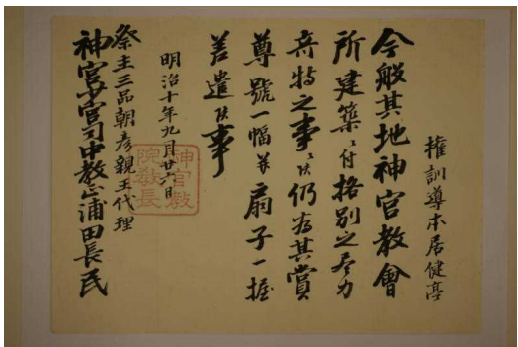
三重県飯南郡松江村大字船江村社  
百枝神社兼同村大字塚本／村社  
引水戸神社外九社祠掌  
本居健亭

依願三重県飯南郡松江村大字船江村社  
百枝神社兼同村大字塚本村社引水戸神社同村  
大字西ノ庄村社八幡神社同村大字井村社  
八幡神社同村社八柱神社同村社八雲神社同  
村大字曲リ村社八雲神社同村社八柱神社同  
村社熊野神社同村大字田牧村社八柱神社社掌  
ヲ免シ専補同村大字西之庄村社八重垣神社  
社掌

明治廿九年六月十五日

三重県

賞状



19.2 cm × 26.2 cm

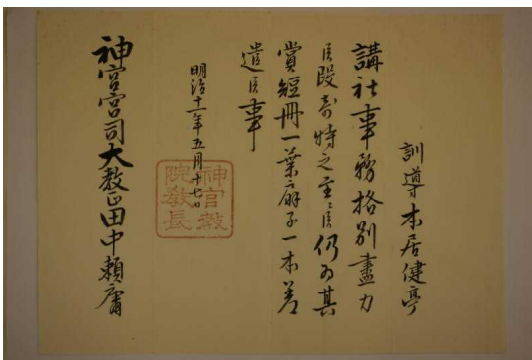
權訓導本居健亭  
今般其地神宮教會  
所建築二付格別之尽力  
奇特之事二候仍為其賞  
尊号一幅並扇子一握  
差遣被事

明治十年九月廿六日

祭主三品朝彦親王代理

神宮少宮司中教正浦田長民

賞状②



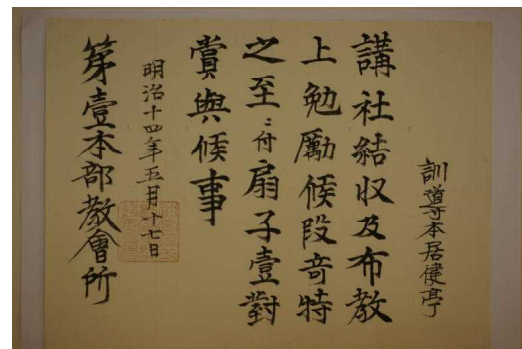
19.4 cm × 25.9 cm

訓導本居健亭  
講社事務格別盡力  
候段奇特之至候仍為其  
賞短冊一葉扇子一本差  
遣候事

明治十一年五月十七日

神宮宮司大教正田中頼庸

賞狀③



19.4 cm × 25.9 cm

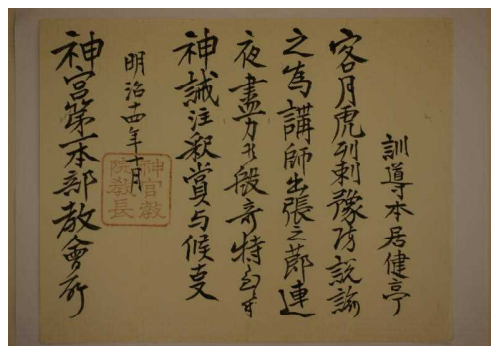
訓導本居健亭

講社結収及布教  
上勉勵講段奇特  
之至二付扇子一封  
賞與候事

明治十四年五月十七日

第一本部教會所

賞狀④



19.4 cm × 25.9 cm

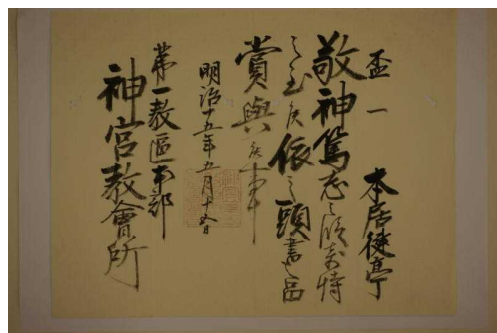
訓導本居健亭

客月虎列刺予防説諭  
之為講師出張之節連  
夜盡力乃段奇特之二付  
神誠注積賞与候事

明治十四年十月

神宮第一本部教會所

賞狀⑤



19.4 cm × 25.6 cm

盃一 本居健亭

敬神篤志之段奇特  
二至候依之頭書之品  
賞与候事

明治十五年五月十五日

第一教區本部

神宮教會所

【史料2-7】「本居席茶事」（明治五年五月二十一日条）

（字配りは原文のまま）

○明治五年  
五月廿一日正午初會 於本居席

一 掛物 扇子 確松登公 料理 喜物□□

自画賛 向 あらひ 汁 田舎打海老

□□役二而 すくき あなこ

かけんす しる

やさい 飯 片飯

一 鈴旦

一 笠

旅装

住餘

言朋東

海知多

奥

西外□

一 鞠春軒



引重

焼物 根芋 香物 さより

するめ 浅漬

しき焼

引重桶

吸物 たれミそ 八寸 鮎煮付

ふり志み 塩煮

葛蕪 てこね井

粒山椒

菓子 くつまん頭

小倉あん 風爐宗品作 釜古天明芋頭なり

灰器了入 香合 黒可間□崖取唐物三牌竹笠

灰器了入 香合ハ茶箱入ニテ庵の什物

花 藤菜可つゝ 一 茶碗 添え□手造

一 花入 宗旦旅枕号自作長竹 一 茶ヒ 一 翁共筒

末客ニ花所望す 銘 侘心

一 水指 湯とふを用 建水 一 閑張庵什

一茶入 朝鮮唐津  
袋モフル  
一御茶 清昔 詰播製  
薄茶器 [長]庵大棗  
桐葵紋ちらし  
同茶碗 仁清茶入等

茶箱の可ルミを用

お菓子 麦おこし

已上

主

客

朝々庵宗凹

長井嘉左衛門。同九郎左衛門。長谷川次郎兵衛。同次郎吉。  
同由之助。」

小津清左衛門。同益吉。上井平四郎。久世安亭。岡村孫祐。  
林文昌。丹羽元亭。」

西村為兵衛。清水八兵衛。竹内育次郎。

【史料2—8】 「初会」で「回忌」、「打合」の茶会

○明治元年（一八六八）十一月十日

十一月十日初会 一燈居士百回忌打合

於四疊半正午

一 掛物 仙叟筆 一 花入 阿波筒

一 燈文横 書付一無斎

一 釜 一 燈宝珠 花 雪柳

水□同筆 椿

浄元作 一 水指 伊部一燈書付

一 香合 交趾 銘 石切

富来之鼓 外箱不見斎

炭斗 瓢一燈筆 一 茶碗 一入黒一燈認

判アリ 何□跡

方六 仙叟好大樋 一 茶入 籠□写

一 茶杓 一燈作柿木 一 袋 ヲランタ

料理

向 からすみ栓作り 汁 作身きん子

大根おろし テ山□ 煮物

つくし 免しそ よ□

なめ茸

吸物 和歌浦のり 八寸 □原方到来



生が汁

鴨すき焼

志やもとり

むしりて

菓子 濱水鳥

惣かし 雪□

まつ葉

御茶 綾昔

薄茶於広間

三重棚一燈書付

一 懸物 前々惶々添書

一 水指 □□

一 釜 ルイサ丸

一 茶わん 唐津

一 浄吸作

一 茶器 志の筒

一 香合 一燈好木彫□

一 箱書とも ツボ 又玄斎好 棗

炭斗 同好藤組

灰器 禾

一 茶杓 判アリ 時代象牙

一 花入 一燈作舟

薄茶濟テ出ル

銘一葉 共箱

原

島田久々齋 主

【史料2-9】 竹川竹斎の射陽書院で開かれた「謝恩」茶会

○四月二十七日

四月二十七日正午

於射陽書院

客 我尔 長井嘉左衛門

長谷川次郎兵衛

長谷川元之助

丹羽文亭

外に六人

東照宮二百五十年 御神祭添茶謝恩会

寄附掛物

大黒庵茶之湯の付利休之書

喫茶去三文字并ニ風呂釜之品

さめ可い歌兩蔵利休筆写

玄々齋書

書院□拝領

射和文庫二条関白左府公

射陽書院一条左府公

広間座敷  
射和文庫 願主 稻垣佐渡守殿  
射陽書院 大坂人 吳義筆 同人不宿

上ノ間

床 掛物 唐棧二行

東照(アツマテル)御(ミ)神(カミ)貴志(トウトシ) 天(ス)  
皇(メロ)遠(ギヲ)伊都岐(イツキ)奉(マツ)良須(ラス)

御功績(ミイサヲ)見(ミ)礼(レ)波(ハ)め 平宣長

左右

護国祐民 一條左大臣忠香公御筆 拝領  
赤心報国 三条内大臣実葛公御筆 拝領

神宮御食机 瓶子 神宮上古之瓶子

御神酒 相可瓶子 舘村田代伝来  
後園物 万古模シ

同上 左

御焼餅 右

御前左 利休小田原陣中作

御花入 銘尺八 豊公御物竹壺入之外箱三ツ

一休伝 沢庵遠州侯 了々齋  
大箱中 江月遠州 沢庵掛物  
并遠州中入筒共

御花入台 御所車 杉木地足打

玄々齋 入来之節好新調

書付 同人筆

花台 玄々齋 書付本入添

花 かき柴草

はなきく

違棚上

御花入 伝来之記一卷 紫野大心和尚筆

箱 玄々齋 書判

同 下

古萩二ツ 蛤大鉢中真山水 五年実生板一本

蒔絵 実生の若松 兩年実生板十本

押板

御花箱并添書物之箱□

重硯十 槻落葉蒔絵のき久老之筆

よそめにはいつにわき水と打ふとん

かきつめて見し槻の落葉を 久老

向座敷之飾

角飾□□□

極彩色寿□の地

外題竹川竹斎横千宗室

掛物

唐棧本歌横物玄々斎書

禁裏と就之新院茶及高□松ヶ枝茶匙

献上之節御慶

七種物

一燈好いちやう台子

釜

所蔵大黒庵と利休伝来尾たれ釜玄々斎模五ツ之内

箱書付元天倫和尚筆 玄々斎台写

風炉

玄々斎好常陸風炉□切座

水指

玄々斎好 東福門院と様宗且拝領仁清焼

葵ヲ薦の図ニ替ツマミ菊蒔絵樂吉左衛門宗哲

藤二郎模本力かは判共玄々

薄器

玄々斎好丹地ト黒之板ニ鶴□□銘曙棗

杓立

今 あげ雲雀もやう

火□

今節 徳□銀香□

ふき竹

玄々好 松風の印 浄寿作

香合 一燈好 箱同筆 玉香合トアリ

羽箒

丹頂鶴の三ツ羽

溜 サハリ張りぬき

茶入 玄々斎銘共箱書付古瀬戸写樂吉左衛門焼

銘 松ヶ根

袋

印金地製

茶碗 玄々斎好之三ツ之内

中大 白赤之万年松

茶杓 玄々斎庭出獨竹指シ而作

銘 老の友

建水 玄々斎好但对句尺八模之飾竹書付

御おく備も見あれハ 台子の上ニ心斗ニ

茶碗 銘国 万古竈焼 台 小代焼

利休すきやわん 一文字わん

一入ゆり皿

すまし

車海老

向 あじひ鯛 汁 めみゝ 煮物 若たけ

茗荷先

□ □

しそ

おとし

こ

飯

二はい酢

き蒔絵重箱

焼物 鯛切身御茶むし

香の物 沢庵漬

玄々斎二重

八寸 蛤のとりやき

吸物 たけ

白髪

当所霰漬

玄々好伝来仁清花輪模様

玄々斎好ノ平遠山三ツ

菓子 可己餅

惣菓子 二見浦

玄々好

一 御茶 神の都 竹田紹清詰

玄々好

後薄茶 料理 略之

慶應元年四月廿七日

射陽書院主人竹川竹斎

(『上田家家政史料集成』二百三十二頁  
〜二百三十五頁より引用)

(表紙)

御履歴并御家政概略控

履歴  
住所 旧広島藩城内一町目邸  
住所 広島県広島市河原町三百八十五番邸  
上田主水後継仕称  
文政三庚申年五月二十二年生

年月日	学業	師名
文政九年正月十五	漢学堀川学ヲ修ム	家臣 山口恕介
嘉永七年正月十八	射術日置流一騎前相伝ヲ得	家臣 南部貫祐
同年八月十五日	炮術中和流免許皆伝ヲ得	家臣 伴角馬
安政五年七月	軍学甲州流奥義相伝ヲ得	藩士 小幡孫兵衛 吉田儀右衛門
<small>慶応三</small> 弘化元年正月	国学	藩士 岡田清 村田良穂
安政五年四月廿三	馬術大坪流奥義相伝ヲ得	藩士 井口庫人
元治元年八月廿九	槍術宝蔵流目錄相伝ヲ得	藩士 佐久間栄
弘化二年二月	劍術実手流	家臣 松田盛江
弘化二年十月	茶湯上田流台子皆伝ヲ得	家臣 中村泰心

賞  
元治元年十二月廿三日

辞令  
征西出陣二付、総督尾張公  
ヨリ刀一口、槍穂三本、手

官庁  
尾州総督府

元治元年十二月廿八日

綱五筋ヲ賜フ

殿中ニ於テ金五百兩ヲ賜フ、

明治十年五月卅日

是出陣ノ勞ヲ賞セラル

広島県

明治十一年二月

木盃一個、是ハ学校ヘ寄付  
金ノ賞ナリ  
銀盃一個、是ハ明治十年西  
南ノ役木綿七百反献納ニ  
付、其賞トシテ下サル

陸軍省

死 所

広島県広島市河原町三百八十五番邸  
明治二十一年十二月二十五日没

家政概略

一 凡文武ニ特別励精ナル者ヲ拔擢シテ専門ニ其業ヲ修メシム  
一 講学所

城内私邸ニアリ、漢学ヲ講スル処ニシテ、宝曆年中ノ創設ニシテ  
家臣福山儀ヲシテ専ラ教育ヲ担当シ、爾来劉元高及ヒ山口貫左衛  
門、山口恕介、山口清助、山口大佐、山口實造、山口文造等ノ儒  
臣相續キテ教育ヲ掌リ、臣下ヲシテ斯道ニ奨励セシム

一 孟普舎  
城内私邸ニ在リ、弓馬刀槍炮術西洋調練ヲ講スル処ニシテ、臣下  
ヲシテ斯術ヲキョウレンセシム

一 泊静舎  
城内私邸ニアリ、生徒ノ寄宿スル処ニシテ、四書左国史漢略等通  
シテ、将来見込ミアル者ニ非ザレハ入舎ヲ許サズ、定員凡三十五  
名トス、一名ニ付一口ト紙筆墨其他需用品ヲ給ス

職員  
教授 二名  
助教授 五名

毎月三回会読作文詩作ヲ課シ、其他質問随意科トス  
一 明治五壬申年次男亀次郎ヲ備後ニ遣シ誠志館ニ入レ、家臣田中雄  
八郎ヲ随従シ共ニ修行セシム  
一 同年継子龍之進ヲ東京ニ遣シ慶応義塾ニ入レ家臣中川文吉・勝矢  
新吾ヲ随従シ共ニ修行セシム  
一 嘉永七年二月四日、家臣本山蔵・須藤奉之進ニ命シ岩国ニ遣シ、  
藩士有坂淳造ニ就キテ、大炮発射ヲ修行セシム、但安節在時



茶箱

茶箱（上田讓翁所持）

木工 1組 明治時代  
32.2 × 15.5 × 28.0

上田讓翁愛用の茶箱。箱の蓋裏に自筆の歌が貼りつけられている。

しげみ重美は讓翁の別名。

雪のあした花のゆふべにまどゐして  
酒のほかなる楽しみぞこれ

【史料3-2】安敦所縁の茶道具

『幕末維新の芸藩と国老上田家展図録』（財団法人広島市文化振興事業団編集発行 平成元年十月二十七日）より転載

（ルビは筆者が適宜追加した。）

- 一 慶応二年二月、家臣水谷貢・山口文造・木野謙造・福永友五郎ヲ江戸ニ遣シ、慶応義塾及ヒ古賀寺ノ塾ニ入レ、英学漢学ヲ修行セシム
- 一 嘉永元年八月、家臣福山篤・堀田孫六・福山善太夫ニ命シ・藩士甚内ニ就キテ火矢ヲ修行セシム
- 一 安政元年五月、守矢千代槌ニ命シ、藩士佐久間栄ニ就キテ槍術ヲ学バシム
- 一 藩士奥弥右衛門父子ヲ聘用シ、家臣士族ヨリ刀差ノ者迄西洋調練ノ教授ヲ委托シ、其門ノ高弟十五名ノ来教ヲ依頼ス
- 一 本藩英人某師ヲ聘用セラレ、英式調練ヲ教授セシメタルノ際、家臣伴左一・山下政之進・安井繁吉ニ命シ、之ニ就キテ修行セシム
- 一 嘉永二年、家臣豊島周迪ニ命シ水戸ニ遣シ、医学ヲ修メシム
- 一 安政二年、家臣劉用賢ニ命シ長崎ニ遣シ、医学ヲ修メシム
- 一 安政六年、家臣三宅春造ニ命シ下総ニ遣シ、医学ヲ修メシム

但安節時  
同前



真塗折鶴金蒔絵棗

溜塗折鶴銀蒔絵棗

右 真塗折鶴金蒔絵棗 遠坂宗仙  
 漆工 1口  
 明治6年(1873)  
 高 7.2 × 径 6.7

左 溜塗折鶴銀蒔絵棗 遠坂宗仙  
 漆工 1口  
 明治時代  
 高 77.2 × 径 6.2



茶杓 銘 岩船  
 茶杓 銘 山の井

茶杓 銘 岩船 上田讓翁所持  
 竹 1本 明治時代  
 長 18.5 筒長 22.6

筒に自筆の茶杓歌銘がある。  
 おり立てこゝろ長閑にそのかみの  
 深きあとくむ岩船の水 讓翁  
 かつて、宗箇が隠棲した佐伯郡浅原村の竹  
 で作ったものという。



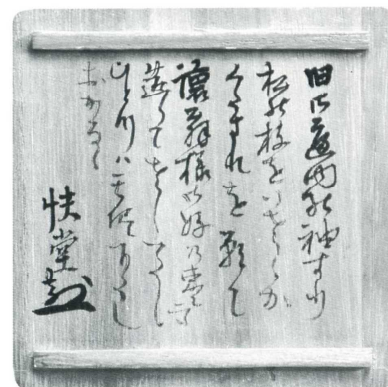
庭焼 赤楽茶碗 銘 筑波根



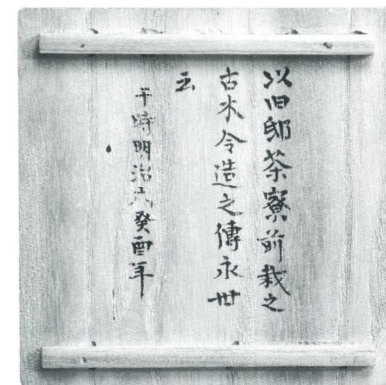
庭焼 赤楽茶碗 銘 筑波根  
上田安節  
陶磁器 1口 江戸時代  
高 7.4 × 長径 11.3 × 短径 10.5

安節から譲り受けた安敦により、「筑波根」と命銘された。蓋に命銘のもとになった古今集の和歌が安敦により墨書されている。

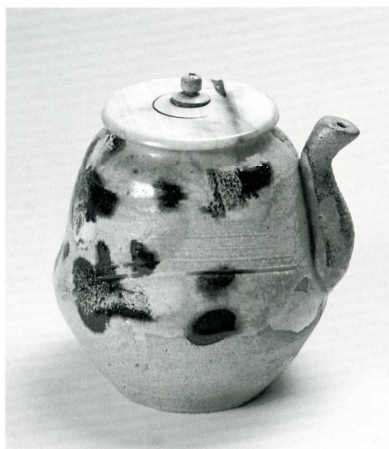
つくばねのこのもかのもに陰はあれど君がみかげにますかげはなし



譲翁に仕えた十五代預り師範中村快堂かしたうにより以下の箱書が付されている。  
「旧御庭内の袖すり  
松の枝をいささか  
くたされたを願て  
譲翁様御好の棗二つ  
造りてさしいたし、  
ひとつは其儘下たし  
おかるゝ 快堂（花押）」



真塗折鶴金蒔絵棗 譲翁箱書  
「以旧邸茶寮前栽之  
古木令造之傳承世  
云、  
于時明治六年癸酉年」



広島焼水滴茶入

広島焼水滴茶入 井上延年  
陶磁器 1口 明治時代  
9.1 × 8.4 × 7.8



広島焼香炉

広島焼香炉 井上延年  
陶磁器 1口 明治時代  
高 8.7 × 径 8.5



庭焼 赤楽茶碗 銘 木守

庭焼 赤楽茶碗 銘 木守ほか 千穂平  
陶磁器 6口 江戸時代 弘化 2 (1845) 年  
高 7.5 × 口径 12.2 × 高台径 5.0 (木守)

利休七種茶碗の写し。惜しくも「大黒」を欠く。  
弘化二年乙巳九月 御手焼 陶工千穂平作」の箱書が  
あり、11代安節の時代上田家の庭で焼かれたものと思わ  
れる。

利休七種は長次郎七種とも呼ばれる楽焼茶碗。千利休  
が初代長次郎の作った茶碗の中から名作と思われるもの  
7個を選んで取り上げたと伝えられる。黒楽3碗、赤楽  
4碗からなる。それぞれ黒楽は「大黒」「鉢開」「東陽坊」、  
赤楽は「早船」「検校」「臨濟」「木守」と銘がつけられて  
珍重され、後世この7種の写しがよく作られた。

広島焼は城下神崎（現中区河原町）にあった上田家下屋敷  
内で焼かれた陶器。開窯期は不明。

明治 32 年（1899）ごろ瀬戸から井上延年を招いて茶器、  
花器、酒器、文房具等を焼いたが、6年ほどで廃窯となっ  
ている。



茄子香合 銘 初夢（上田安節所持）  
 漆工 1口 江戸時代  
 3.5 × 8.8 × 4.5

天保6年（1835）、上田安節（11代）が浅野白杏（ながとし長懋）より拝領した品。白杏は第7代広島藩主浅野重晟（しげあきらしげあきら）の子。正月の初夢に茄子を見れば縁起がいいといわれることから「初夢」と命銘された。

【史料3-3】

明治七年十二月十六日条—釜の掛おさめ

（傍線・波傍線筆者）

明治七年十二月十六日

けふハ定日なれば、釜かける、円蔵、豊次郎くる、雪溪も兼て約しおきたれば夕方くる、おとつひ所望しおきたるおもとを、憲吉持来たれば、直ニ書院の床江生さす、茶席ニ而手軽き酒肴、出して夜ふくるまで物語す

【史料3-4】

明治九年一月十六日条—釜の掛初

（傍線・二重傍線筆者）

明治九年一月十六日

けふ釜かけ初、円蔵、豊次郎まるくる、雪斎をもよひてゆるやかにかたらふ、同人より花を到来にて花所望

水仙 黄梅

白玉

軸 維明大徳

花生一重切

千宗守作

雪梅の図

銘初春

丸卓

水指 朝鮮芋頭

棗

旧邸古木にて

作る 折鶴のもよふ

茶七 祖公御作

茶碗

朝日

替茶碗 黒楽

香合

大樋梅

炭台

水次 御室

建水

高取

蓋置 青磁

三ツ唐子

【史料3—5】 明治十一年一月十六日条—釜の掛初

おなし月十六日

我宿の釜初メ、此日いとう雪降ければにや、西  
村翠庵、山香忠一、伊藤春房ふりはへ、とハる  
ことよるこはし

掛物 千種有功卿

玉の御自画賛

花竹尺八 銘音曲 祖公御作

花寒紅梅

此花は伊藤氏持来ておくらる、其の同方江所望  
にて、同方これを生らる

釜 山の釜

棚胡弓台

水さし

朝鮮芋頭

棗

老松

茶七 二重曲

備前公御作

茶碗

朝日

替茶碗 高原  
 蓋置 赤楽 三宝 庭焼  
 建水 沙張  
 炭台 木地  
 香合 大樋梅  
 灰器 了入  
 菓子器 梅梢院様 拝領  
 菓子 取ましへもの

料理

吸物 蛤拔身  
 結ひ昆布  
 ふきのとう

取肴 玉子四ツわり  
 勝栗沙糖煎て  
 やきあなこ

井 岩茸 すミそ

同 赤かふら  
 面桶わんニて 小鳥たゝき  
 山芽小口

めし

香の物

右の内、赤かふらハ西村氏よりおくらる  
 是をそとおもふこころのあかかふら  
 野ハしろ妙の雪をわけつつてふ  
 歌をそへられたれハ返し  
 雪よりもふかきめくミのあかかふら  
 たくひまれなるものこそミれ  
 かくて、夜ふくるまでものかたりしてあそふ  
 円蔵、豊次郎も来たる

【史料3—6】 明治八年四月六日条—花見茶事

・明治八年四月六日条—花見茶事

同月六日

此のほと庭の桜盛なれば、花見の茶事催して、西村翠庵ぬし、伊藤春房ぬし并木村里亭を呼たれと、翠庵ぬしには、俄ニさわることに有て不参、依而雪溪師を呼たれは、とくも被参、会附にて本法にとゝのへたれとも、時剋の処もあれば、初入茶、後入、懐石を出す、初入の時ハ、春房ぬしと里亭二客也

会附 祥光卿御歌

鞍あふみ云々

掛物

釜

天描操口

香合

青磁浮牡丹

炭取

唐物

灰器

了入

炉縁

高台寺蒔絵

懐石

向皿

鯛糸作  
芽ちそ  
たて

汁

みそ  
松露

煮物

にしき玉子  
竹の子  
三ツ葉

吸物

白魚  
きのめ

取肴

小鳥焼て  
大貝  
長老木

強菜

鱈へちみ  
わらひ

重引

鮎子  
火取

よめ菜  
香の物

後

花生 重羽公御作 花ホケニ  
竹一重切 白桃

四方棚

水指 (伊) 尹部 菱形 ○茶入 利休  
銘難波

茶碗 萩 蕨 替 袋古金欄花兔

茶杓 象牙 文字有 ○茶碗 高原

蓋置 金五徳 ○薄茶器 キンマ  
○建水 伊賀

茶銘 千代の友

菓子 さゝれ石  
後菓子 つくはね  
春月

已上

書院床

花鳥二幅対 周子晁筆

机 堆朱  
香炉 備前

会心亭

床 掛物 痴絶布袋 一幅

硯箱 蒔絵  
料紙

おのもおのもかたらひつゝ酒くみかハしておのれ、  
あハれしる人にとハれてこの春は  
さくかひ有と花もおもはん、とよみたれは、春  
房ぬしも、

よし野山あらしのやまもかくならむ梢を埋む  
花のしら雪 世のこともさらになすれて木のも  
とは花より外のこゝろやはある、と読れたれは、

またおのれ、  
我園にさかりさくなるさくらより君かこと葉  
の花をめてつゝ、とよみたれハ、是はとくも出  
来たと人にわらふ、円蔵よみたるハ、  
咲そらふ花のむしろに今日ハ来てあすその神  
の恵をそしる、かく打興して夜十一時ころとお  
ほしき頃人々退座也

【史料 3 | 7】 明治十一年四月廿六日条—広島県令招待茶事

明治十一年

一 県令藤井勉三殿、此方所持之茶器類見物有之  
度よし、年寄尋相聞く、依之四月二十六日茶  
事相催して招く、夕四時過入来、飾付、献立  
左之通

表居間床

- 一 掛物 祝管明之書 一幅もの
- 一 黒塗四ツ足卓
- 一 香炉 古備前ツマミ 麒麟

中床

- 一 八角大硯 唐もの
- 一 筆架 唐金 うし
- 一 筆 堆朱柄 ○唐墨

違棚

- 一 子昂馬之絵 ○軸盆 堆黒

部屋方書院床

- 一 唐画山水 二幅対

- 一 花生 伊賀 銘いのち

花シヤカ

- 一 花台 唐桑



後  
一掛物 紀州葛城山松之図  
一置物 獅子 大機公作  
一卓 唐物

茶事次第 薄茶

客

藤井勉三殿  
井上正充  
山県篤蔵  
林

床

一掛物 東山院様勅筆  
一花生 祖君御作 一重切

花シユンラン 三本

一釜 桐の模様 古織添状有之

一炉縁 木地 駒沢理右エ門作

一菜籠 唐もの 竜の彫物有之

一香合 鮑貝 竜の彫物有之

一灰器 了入

三ツ羽鶴

袋棚

一水指 朝鮮

一棗 時代蒔絵

一茶盃 萩ひろしま

一茶七 多賀左近作

一替茶椀 金海

一同 黒楽 一入

一建水 伊賀

菓子

一朱足打

谷つゝし

一千菓子 長崎焼平鉢

千代結ひ  
からめる松  
盛合せて

献立

一 朱蒔絵椀

吸物  
かなな目

折しき  
〔ひよ鳥たゝき二つ  
めうか竹〕

取肴

一 青交地平鉢

合せさより  
ひしき玉子  
香茸そほろ

しゐ菜

一 赤絵呉使大井

鯛平作  
〔竹の子の皮  
芽ちそ〕

一 染付小井

百合ね  
〔きのめあへ〕

一 手付織部鉢

火取鮎子

一 赤壁平井

くしらのし  
〔こます〕

一 藤井  
是ハ藤井より土産之品  
土産左之通

一 国産 鯨のし  
一同 国分煙草

夜飯

(伊万里)

一 今利茶椀  
めし

一 染付小鉢  
〔松笠いか  
竹の子  
なら漬瓜〕

右料理は書院ニ而出ス、後亦茶好ニ付、勝手  
点出し

茶椀

一 入赤楽  
是ハ数茶椀也

右にて閑話、午後十二時頃退出

【史料3—8】 明治十年一月廿日条—「上田大海」使用茶会

○明治十丁亥年一月廿日 茶会

客

伊藤春房

桑門嶺月

多田雪齋

勝手見合

野村円蔵

中村豊次郎

会附

掛物

織部公消息

但し桐釜の添文

○花生

古渡唐金象耳

花柳に菜花

釜

桐の釜

○炉縁

高台寺蒔絵

菜籠

唐物

○香合

大樋梅

山里棚

茶入 唐大海

袋蜀紅錦

長緒ツカリ紫

裏唐リンス白

四方盆 黒道恵

水指

薩摩

○茶碗

尾張瀬戸御庭焼

茶七

重政公作

二重曲

筒 譲翁

中形棗

黒宗哲

○替茶碗

朝日 同古志野

建水

備前

○蓋置

青竹

水次 木地 湯桶

茶銘 八千代の友

菓子

後菓子

従東京

御所まんちう

松竹梅

拝領之品

料理  
カケンス  
さより糸  
皿  
岩茸  
芹

○汁  
蕪  
すりこま

四寸  
玉子ニツ  
うと三ツ

○吸物  
しほ鶴

取肴

手附鉢  
しやけ  
小海老  
土筆

但

しやけハ拝領之品

井 火取あなこ

○蓋物  
蛤抜ミ  
海苔

めし 酒

一伊藤氏より 枝柿 一箱 土産  
一雪斎と菓子 一箱 土産

後炭  
薄茶手前

円蔵  
豊次郎

右ニてゆるくもの語しておもしろし、当座  
おのく歌有

山水軒にまかりて

名におふ大海といへる茶入にて

茶をたまはりければ 春房

初月に心のとけく語あひて大海原に出に

けるかも

山水軒君に参のほりて 円蔵

よひかハす友まつ風にかたらへは言葉の花の

にほいけるかな

雪斎

たゆる音なくて聞けり松風の湯気を

したふてにほう梅か香

一月廿日の夜、伊藤、桑門、多田ぬしを招

て、木芽煮てよめる、讓翁  
かくなから明ぬともなにとはめや、こころ  
あひたる夜半のまとるは

【史料3-9】 明治十年四月五日条—御成茶会

四月五日

一 正二位様并ニ

御前様、午後一時過より御成被為在、於席薄  
茶奉也

御相伴

平井正太郎

御女中

おきよ

おらく

道具附

掛物 東山院様勅筆

御歌

花生 竹一重切

祖君作

花  
木レンケ  
ホケ  
シヤカ

炉縁

木地

春齋

釜 自在釜とそ  
山ノ文字有

菜籠

唐もの

香合 香梅か雪 青磁 浮牡丹

灰器 了入

釜敷 藤組

鶴三ツ羽

袋棚

水指 尹部菱形  
茶入 キンマ  
天目 根来朱  
台 銀覆輪

替茶碗 萩広しまの文字有  
湯呑 古渡染付

茶七 象牙 利休形  
水次 染付 銀口  
蓋置 三ツ人形  
伊賀

建水  
柄杓 菓子  
木地足打台 敷紙

〔千代結  
こいくし〕

書院床 木地三宝のし鮑  
のしおさへ、楽宝珠

硯箱  
料紙

掛物 二幅対 花鳥ノ絵 周子冕  
卓 唐もの

置物獅子 大機君作  
手炉 大明宣徳

同 唐金  
煙草盆 杉木地鞍形

蒸菓子 谷つゝし  
春慶 足打台

青磁鉢

会心亭  
掛もの 東涯筆  
花生 花桜 白交地  
風鎮 金

一書院にて御膳、御酒肴奉也

御菓子一箱カステラ賜之、誠に御懇とくなる

ことにて、誠に有かたきまでかたしけなければ、  
よみて奉る  
かくはかり嬉しき春に逢ぬれば  
老もわかゆるここ地こそすれ

何かとけふの御取持に仙石典二をたのむ  
おのれ、亀次郎たひく御杯たまはる、おなく  
さめに基また将基磐なとりでて典二  
正二位様の基の御相手亀次郎  
御前様の将基の御相手、誠御機けんうるはしく  
御ゆるくと御もの語あらせられ、夕六時過ぎ  
御機嫌よく御立座、前雁木より御船にて被為入

【史料3—10】 明治七年十二月廿一日条—廣島縣官吏宅茶会

同月廿一日

伊藤春房宅ニ而茶事有、薄茶也  
客

自分  
雪齋  
円蔵  
豊次郎  
憲吉

丸卓

初飾付 水指 羽箒 香合 棗黒中

但し 水指ハ備前 香合ハ黄南京鴛鴦  
茶碗大桶黒鶴の模様

掛物 野々宮卿 初雪の御うた 蓋置新渡三宝  
花入 竹 花 寒菊二梅

料理  
魚糸作 おろし大根  
春菊 せうか  
干柿 汁  
合味そ 根いも からし

坪  
燕 二ツ  
鴨 同  
菜茎からし

吸物  
蛤拔身  
雲州海苔

飯  
酒  
取肴  
玉子四ツ切  
きくらげ  
きんなん  
うすくわい  
みるし付ル  
しる菜 鯛切身  
同 ゆとうふ  
さとう取て

兼而雨来雪といふ題いたされハ、よミて持参  
そのうた

村雲のすき行まへニ風さえて、やかて  
ふりくる雪の初花、また此宿を八千種花園をい  
ふときゝたれハ、祝のこゝろをハよミておくる  
二首とも、詠草のまゝニして持参

八千種の花の色ハちとせの秋も、  
まなくさくへし、あるしよめるうた

上田讓翁くんのめつもて、我柴の戸明けよと  
諷し給ふハ、いともいとも幽けくあることに  
なん、

されは、望持たる園生にて、何のもてなしも  
得侍とそ、かの木芽煮か煮のものし侍りて、  
梅さくら折てたかんとおもふとそ、おもふに  
かなふ今日のまとゐハ 踏分てたれかハとハむ  
草の庵の塵つもりたる庭のかよい路

時雨来雪

夜もすからさゆるあらしも音たててしくれし  
跡の雪のしろたへ 円蔵かよみたるは、  
袖ひろし夜半のしくれニふりかへてゆき  
おもしろき庭の通路、雪斎、憲吉もまた俳諧の  
発句よみたり、是ハらすれたれハ、不書にある  
しの梅桜云々のうたの返し  
梅さくら折てたかむとおもふなるこころの色  
に何をくらへん 跡分てのうたの返しハ、円蔵  
したれとも、わすれたるは不書、かく打興して  
夜ふけて帰る、けふのつとハ紅魚一尾也



【史料3-11】明治十一年一月八日条—中村豊次郎宅釜掛初茶会

○明治十一年一月八日  
中村豊次郎方釜掛初薄茶也

客 自分

伊藤春房

桑門嶺月

野村円蔵

多田雪斎

掛物 明人無門の書

花寒梅一枝 菜花

花生 備前鳶口 臘梅一枝

床ニ大福台ニ根松の橙ののし

席は台目

(浄味)

釜 日の丸 古状見

棗 老松

茶七 象牙

茶碗 赤楽 是ハ先年泰心へ

遺候器也

替茶碗 藤名

同 仁清

蓋置 三宝 庭焼

建水

菓子器庭焼 菓子

千代結

霜柱

席入後手前はハ略ス、是は寒天故ニ、初は炭を  
沢山にして、釜もよくだきり、寒天ニ働、おも  
しろし

吸物  
〔あいなめまくり  
芹〕

取肴  
〔玉子四ツわり  
大豆  
海老小口  
昆布  
椎茸〕

井  
〔鯨のし  
橙す〕

同 さしミ 是ハ自此方贈たる也

めし

汁  
〔あハせミそ  
大根〕  
向  
〔あなこそほろ  
おろし大根〕

香物

此快堂ニハ定日をたてゝおこたらす、釜かけ、  
家の風をもおこす計のころなれば、よろこは  
しくてよめるうた  
何こともかはりゆく世にかはらぬは  
たゝこのやとの松かせのおと  
かくて興して、夜ふくるまでかたらふ、まこと  
におもしろし

【史料3—12】 明治十八年十一月三日条—右細君送別茶事

十一月三日 正午  
一右細君送別茶事 山水軒

大森細君  
相伴 秋田栄三郎  
浜田雨村  
半頭 中村豊次郎

掛物 近衛殿下、鷹司殿下、九条殿下

(色)

御式紙

炉縁 時代蒔絵

釜 国師釜天貓

棚 棚袋 水指 羽箒 鍔飾ル

水指 古備前 手杵形

菜籠 さゝ籠 香合 鮑浪二竜の彫有

蓋置 青磁砧三ッ人形 水次 古染付

牛ノ絵

懷石

鉋目膳 面桶碗

向

富士形 皿  
笑梨

三杯酢 (いほ々々海老)

きくらげ

あわせミそ 大根小口

黒豆

芹子葉

汁

引菜

青磁三角鉢

(鴨)

ひえ鳥

串焼 三くし

煮物

松金鯛

結ヒ昆布

○手付織部鉢

ひしき玉子

小栗さとう煮

吸物

蛤拔身

○香のもの

漬物到来 鮎カス漬

なら漬

後入

花

(ト、コ柳  
黄小さく)

柳ハ餞別故ニ

御花入 竹船 宗左作

銘我友

水指 古備前手杵形

茶入 古瀬戸 銘覚雲 袋古金欄

棗 時代蒔絵 水二紅葉

茶七 松濤君御作 檜井竹 銘蓬萊

茶碗 高麗御所丸

同 朝日 同 古志野

水次 古染付 牛頭形 ○建水 信楽

茶銘 老楽

菓子 伏見羊羹

秋田へ到来之分御膳

後菓子 白雪候 (鮓) 両様

開広間

三幅対 老松 中老子 左右芦鴈

卓 唐物 伊川筆 置物 御作 獅子

吸物 こち切身 わか芽

(磁)

青地雲龍

平鉢 はまち わさひ

さしミ

(伊万里)

今利茶わん 角蒲鉢 山のいも小口

茶椀むし きんなん

万年漬 織部蓋付

(須)

赤絵呉使 鯛酢漬

以上

同年九月三十日 山水軒茶事

主 山水軒

添 龜次郎

半頭 豊次郎

中川清一郎

客 瀧前素大

吉井敬二

初入

掛物 祖公御作品

風炉 銅 祖公御好

(共)

釜 車軸 古山城友蓋 古天明

香合 根来朱

菜籠 一閑平物

懷石

汁 ミソ 焼豆腐 染付平皿 きすの京風

たゝき菜

すりこま

きくらげ

いり酒

四寸 小鳥たゝき

ゆは

引菜 (こち)

合利 中皿 小知魚 みりん煮

但銘々へ引

取肴

志野織部片口

結ひ玉子  
押し海老  
ゆり根

強菜 烏賊わたあへ

青磁 六角井 わさひ

吸物 さめ鯨のし  
山椒  
香物  
手付京焼鉢 なら漬

備前掛花入 花そえきく  
紅白三本  
後入

水指 朝鮮耳附  
茶入 新 新 銘松坂  
袋 古銀らん  
茶杓 遠州作  
筒ニ加藤右馬様 小堀遠作と有之

茶椀 萩わり高台  
同 高原焼  
薄茶器 時代蒔絵 楓ニ水  
水次 腰黒薬かん  
建水 相馬焼  
茶銘 綾森  
菓子 しら玉  
干菓子 長崎焼鉢  
菊 稻穂葉  
已上

【史料 3 | 14】 明治十九年二月十日条 | 亀次郎が亭主

明治十九年二月十日午後茶事  
主 亀次郎  
薄茶 山水軒  
客 中川清一郎  
榎田直太郎  
高野為太郎

初入

掛物 北大路祥光画  
鞍鐙之御歌

釜 古天描 手取釜

炭台

香合 赤絵吳使  
香薰衣更 福

蓋置 唐金寒月

炉縁木地

角棚 水指、羽箒、香合飾ル

角 料理  
ツゝ足

小盆二而 朱 蒔絵碗

雑煮 餅紅白 二ツ  
鯛切身、結昆布

引菜

永楽 桜花  
形

小井 鯛切身  
高砂湯皮筥

取肴

古備前手付鉢

若狭鯉ヲヒテ  
海老小口  
橙皮サトウニ

強菜

蓋物 六角

薯蕷  
海苔打

後入

水指 瀬戸八角

茶入 膳所耳附

茶七 藤村庸軒作  
銘 はま弓

茶碗 堅手  
 茶碗 老松  
 棗 大樋立鶴  
 茶椀 了入作 焼板  
 建水 銅腰黒  
 水次 茶銘 大岩打城  
 菓 子 小倉野  
 惣菓 子 玉 松葉 桜花  
 夜飯

飯 吸物(澄) 薯蕷  
 スメ 花松魚

向 柚形猪口万年漬

香のもの  
 奈ら漬

酒 前ニ取肴直して

已上

【史料3—15】 免状雛形

【史料3—15—1】 「台天目免状」雛形

一盆点台天目免状

大丈  
 奉書折紙調  
 免状

一台天目伝  
 右当流格別之秘事、口決ニ候得共、貴殿  
 積年執心、依難黙止秘事口決不殘令相  
 伝者也



上田流・・・  
名書判

年号

月日

何野何某殿

【史料 3 | 1 5 | 2】 「盆点台天目免状」雛形

一盆点台天目免状

奉書調

折紙免状

一盆天目之伝

右累年執心之依修行、難為秘事、令伝授之上ハ、門人取立可有之候、以後連々無怠鍛鍊於有之は、奥旨之授に可至者也依而免状如件

年号

名書判

月日

何野何某殿

【史料 3 | 1 5 | 3】 「乱飾免状」雛形

一乱飾免状

檀紙折紙調 鳥子半切

折紙免状

乱飾之伝

右当流ニおゐてハ、真之台子、此兩伝之儀ハ、一子相伝之外、難授秘事ニ候得共、貴殿茶事拔群之執心懇望達主家へ、今盤(般)秘事令相伝之上ハ、堅他言他見有之間敷、尤門人拔群之輩、授与之節前以手元へ被

相届候へハ、其段申達置、免状進上可致候、依而免状一札件如

年月日  
年号  
名判

何野何某殿

【史料3 | 15 | 4】 「真之台子免状」雛形

一真之台子免状

(檀紙竪)  
タンシタテ紙調

皆伝免状  
一真之台子之伝

右は古田織部正重勝君、流祖宗固君江秘事相伝之奥旨候ハ、容易ニ難致相伝候処、今般貴殿拔群之執心達主家格別を以、秘事口伝等無残処、令相伝候上、系譜江書記置候儀ニ候得ハ、猥ニ他言他見用捨有之、弥以規則相叶候様可被致候、依而皆伝一札如件

上田流茶・・・

年号  
月日  
中村・・・

何野何某殿

【史料3 | 15 | 5】 「皆伝免状添書案紙」雛形

一皆伝免状添書案紙

奉書折紙

皆伝免状副書

(般)

一今盤、貴殿積年茶事御執心ニ付、奥旨被  
伝口伝決無殘処令皆伝候、尤当流之儀ハ、  
(抑)  
仰流祖宗固君弓馬之余暇、茶事一流被致  
開発候儀ハ、天下ニ普皆人之知処ニ候得  
共、其後茶道之儀ハ、家臣中村・野村兩  
家へ被伝、師範代年久請給候間、自今  
弟子拔群之輩相伝事、奥儀ニ至り候節ハ、  
前以手元へ被相届候上、主家へ申達免状  
可差進候間、当人誓詞相調可被差越候、  
依而為後証、皆伝奥旨免状副書一札如件

上田流・・・

年号

中村・・・

月日

何野何某殿

【史料4-1】「古器旧物保存方」

○太政官第二百五十一布告  
(筆者が旧字体を新字体に直し、句読点と傍線を入れた。)

古器旧物ノ類ハ、古今時勢ノ変遷制度風俗ノ沿革ヲ考証シ候為メ、其裨益不少候所、自然厭旧競新候流弊ヨリ、追々遺失毀壞ニ及ヒ候テハ、実ニ可愛惜事ニ候条、各地方ニ於テ歴世蔵貯致シ居候古器旧物、別紙品目ノ通細大ヲ不論厚ク保全可致事。

但、品目並ニ所蔵人名委詳記載シ、其官庁ヨリ可差出事。

(別紙)

一 祭器ノ部

神祭り用ル楯矛其他諸器物等

一 古玉賢石ノ部

曲玉 管玉 瑠璃 水晶ノ類

一 石 雷斧ノ部

石弩 雷斧 霹靂礎 石劍 天狗ノ飯匙ノ類等

一 古鏡古鈴ノ部

古鏡 古鈴等

一 銅器ノ部

鼎 爵 其他諸銅器類

一 古瓦ノ部

名物並名物トナラスト雖古キ品

一 武器ノ部

刀劍 弓矢 旌旗 甲冑 馬具 戈戟 大小鉄砲 彈丸

戰鼓 咆囉等

一 古書画ノ部

名物 肖像 掛軸 卷軸 手鑑等

一 古書籍並古經文ノ部

温古ノ書籍 函書及古版古写本其他戲作ノ類ト雖モ中古以前ノ

モノニテ考古ニ属スル者等

一 扁額ノ部

神社仏閣ノ扁額並諸名家書ノ類等

一 樂器ノ部

笛 笙 箏 篳篥 太鼓 鉦鼓 羯鼓 爭 和琴 琵琶

仮面其他猿樂装束並諸樂器歌舞ニ属スル品

一 鐘銘碑銘墨本ノ部

名物並名物ニアラスト雖モ古キ品

一 印章ノ部

古代ノ印章類

- 一 文房諸具ノ部
  - 起案 硯 墨 筆架 硯屏ノ類
- 一 農具ノ部
  - 古代ノ用品
- 一 工匠器械ノ部
  - 同
- 一 車輿ノ部
  - 車 輿 籃輿等
- 一 屋内諸具ノ部
  - 居室諸具 屏障類 燈燭類 鎖鑰類 庖
  - 厨諸具 飲食器具 煙具等
- 一 布帛ノ類
  - 古金襴並古代ノ布片類
- 一 衣服裝飾ノ類
  - 官服 常服 山民ノ服 婦女服飾 櫛簪ノ類
  - 傘笠 雨衣 印籠 巾着 履屐之類
- 一 皮革ノ部
  - 各種ノ皮革並古染皮ノ紋図
- 一 貨幣ノ部
  - 古金銀並古楮幣等
- 一 諸金製造器ノ部
  - 銅 黄銅 赤銅 青銅 紫金 鉄 錫
  - 等ヲ以テ製造セル諸器物
- 一 陶磁器ノ部
  - 各国陶器磁器等
- 一 漆器ノ部
  - 蒔画 青貝 堆朱等ノ諸器物
- 一 度量權衡等ノ部
  - 秤 天平 尺 斗 斛 算盤等古代ノ用具
- 一 茶器香具花器ノ部
  - 風炉 釜 茶碗等ノ茶器 香合 香炉等ノ香具 花瓶
  - 花台等ノ花器類
- 一 遊戲具ノ部
  - 碁 将棋 双六 蹴鞠 八道行成 投壺 楊弓
  - 投扇 歌骨牌等
- 一 雛幟等偶人並兒玩ノ部
  - 這子 天兒 雛人形 幟人形
- 一 木偶 土偶 奈良人形等其他兒童玩弄ノ諸器
- 一 古仏像並仏具ノ部
  - 仏像 經筒 五具足 宝鐸等ノ古仏具
- 一 化石ノ部

動物ノ化石並動物ノ骨角介殻ノ類  
右品物ハ上ハ神代ヨリ近世ニ至ル迄和名舶齋ニ不拘

【史料4-2】「大学伺」

大学伺 弁官宛

九段坂上兵部省並、今度、東京府ヨリ南校へ受取候元  
三番薬園ニテ、別冊ノ仕組ヲ以テ博覧会相開催シ度、最兵部省  
へハ談判済ニ有之候間、此段相伺候也。四年二  
月大蔵ママ

可為伺之通事 四年二月廿九日

(句読点筆者)

【史料4-3】「大学南校上申」書

大学南校上申 弁官宛

先頃申上伺済相成候博覧会ニ付ケ、条書ノ内第三条増補  
イタシ候間、別紙相添此段候也 四年四月三日大学  
追テ御達ノ切手雛形写差出申候也

博覧会大旨并切手雛形

博覧会

博覧会ノ主意ハ、宇内ノ産物ヲ一場ニ蒐集シテ其名称ヲ  
正シ、有用ヲ弁シ或ハ以テ博識ノ資トナシ、或ハ以テ証徴  
ノ用ニ供シ人ヲシテ其知見ヲ拡充セシメ、寡聞固陋ノ弊ヲ  
除カントスルニアリ。然レトモ、皇国從來此挙アラサルニヨ  
リ、其物品モ亦随テ豊贍ナラス故ニ、今者此会ヲ総説シテ百  
聞ヲ一見ニ易ヘシメント欲スルトイヘトモ、顧ミルニ隆盛  
ノ挙ニ至ツテハ、之ヲ異日ニ待サルヲ得サルモノアリ。因テ  
姑ク現今官庫ノ蔵スル所及ヒ自余ノ物品若干ヲ駢列シテ、  
暫ク人ノ来觀ヲ許シ、以テ其開端トナス。自今爾後毎歳一次  
其会期ヲ定メ、日ヲ逐ヒ月ヲ累ネテ漸々宇内ノ珍品奇物ヲ  
網羅シ、人ヲシテ遠ク万里ノ外ニ遊フヲ用ヒス。座シテ全地  
球上ノ万物ヲ縦覧セシメンコトヲ期ス。  
一 当今官品未タ完足セス故ニ、金石ノ属草木ノ類ヨリ鳥  
獸魚介虫豸等ニイタルマテ総テ天造ニ属セシ物、又諸器  
械奇品古物及ヒ漢洋舶齋ノ諸品総テ博識ノ資トナス  
ヘキ人造ノ物ヲ所蔵シ、展觀ニ供セント欲スル。有志ノ輩

ハ会前ニ之ヲ当館ニ携へ来ルヘシ。且ツ、最奇ノ物品ヲ出セシ輩ニハ褒賞ヲ賜フヘキ。其出品ハ博覧会物品部類書

ヲ見テ其大概ヲ知ルヘシ

一 会期ハ、来ル五月五日ヨリ同月晦日マテノ間ヲ限リ、展観ハ、毎朝九字ヨリ午後五字マテノ間ヲ限トス。

一 来観ノ輩ハ、男女貴賤を論スルコトナシ。

但シ、一時ノ雑沓ヲ防ク為メニ、南校ニ於テ予メ切手ヲ渡置ヘシ。

一 持参ノ品物ハ、其持主ノ姓名ヲ記シ之ヲ列スヘシ。尤預リ証書渡シ置、会后引替品物差戻スヘシ。

一 商売売買ノ品物若シ贖ヒ度者アラハ、売主ト談判勝手次第ナリトイヘトモ、会中ハ其品物ヲ列シ置ヘシ。

明治四年辛未月

大学南校  
博物館

(切手の雛形 略)

(句読点、傍線筆者)

#### 【史料4-4】「大学献言」

大学献言

集古館建設ヲ建設候一大要件ハ既ニ外務省等ヨリ及献言候旨ニ付更ニ贅言不仕候へ共、戊辰干戈ノ際以来、天下ノ宝器珍什ノ及遺失候モノ儘有之哉ニ伝承致シ、遺憾ノ至ニ有之候処殊ニ近來世上ニ於テ欧洲ノ情実ニ悉知不仕候輩ハ彼国日新開化ノ風ヲ以テ徒ニ新奇發明ノ物耳貴重仕候様誤伝致、只管厭旧尚新ノ弊風ヲ生シ経歳累世ノ古器旧物敗壞致候モ不顧既ニ毀滅ニ及候向モ有之哉ニ相聞へ考古ノ徵拠トモ可成候物逐日消失仕候様成行、実以可惜次第ニ有之候。抑西洋各国ニ於テ集古館ノ設有之候ハ古今時勢ノ沿革ハ勿論往昔ノ制度文物ヲ考証仕候要務ニ有之、大学ニ於テモ必要ノ要件ニ候間何卒右等ノ物品遺失不仕候致度、併當時内外御用途御多端ノ折柄ニ付、若集古館御建設ノ儀速ニ難被為行儀モ有之候ハバ姑ク府藩県へ御布告相成、歴世相伝仕居候宝器ハ勿論自余ノ雜品ニ有之候共考古ノ徵証ニ可相備品物ハ精々保護相加候様御沙汰有之且夫々専務ノ者被命右器物ヲ凶画ニ模写致シ羅集編成ノ儀被仰付候様有之度、若シ当時ノ世態ニテ更ニ一歳有余ヲ打過候ハバ天下ノ古器宝物ハ大概壞滅仕、竟ニハ其形似モ不存候様相成行候患害無之トモ難申候間、何卒至急御処置有之候様仕度此段献言仕候 以上(四年四月廿五日 大学) (傍線筆者)

【史料4-5】「六窓庵茶室ノ記」

六窓庵茶室之義ニ付伺

（明10・8・13 条  
（決裁日不明）局長決裁）

上野公園内六窓庵之義ハ旧奈良春日山麓叢裡ニ空ク腐朽ニ属シ候処明治九年七月運搬之際難船ニ罹リ残ル処ノ木材若干ヲ以脩造シ右原由書類等モ流失シ確定之書類無之ニ付別紙略説ヲ編輯シ候間右ニテ可然□□御高評価御伺候也

内国博覧会事務へ御通牒案

過日当局編輯掛より当局公園地詰之者へ照会有之候該園内ニ建築六窓庵履曆之義別紙記載御廻し申候此段申進候也

明治十年八月 日

博物局

内国博覧会事務局 御中

（土地建物録 明10）

六窓庵茶室之記

六窓庵茶室ハ金森宗和ノ作ル所ニシテ松庵ト并大和国奈良興福寺元領内ニアリテ既ニ頽廢ニ及ハントセリ時ニ博物局長町田久成此ノ有名ナル茶室ノ叢裡空シク腐朽センコトヲ痛ミ上陳シテ明治九年七月十等出仕遠藤直道ヲ遣シテ之ヲ上野公園地中ニ移建セメンガ為大阪ニ於テ船積シ運輸ノ際明治九年九月十七日豆州加茂郡長津呂村港内ニ於テ暴風激浪ニ罹リ該船破碎ス此時松庵ハ流失シ纔ニ残ル所ノ六窓庵木材若干ヲ収集シ他木ヲ補ヒ此ニ脩造ス  
金森宗和ハ出雲守長重ノ嫡男ニシテ始テ重近ト称シ飛驒守ニ任シ從五位下ニ叙ス後千京師ニ住シ剃髮シテ宗和ト号ス千道安門ニ入り茶事ニ名アリ明曆二年十二月十六日卒ス時年七十三

（土地建物録 明10）

（明11・10・1 供覽）

（傍線筆者）

【史料4-6】「六窓庵開日改正之義伺」

六窓庵開日改正之義伺

明12・7・2 案

（決裁日不明）局長決裁



上野公園地六窓庵之義保存之為是迄壹ヶ月三度宛開戸  
且湿氣払トシテ炉中点火等致来候処右庵内草取掃除之  
都合モ有之候間当分ノ内開日之儀毎月二度ニ致シ候而坂  
昌員ト申者茶屋之心得モ有之者ニ付一日金廿五錢ヲ以御  
雇相成古筆了仲ノ手伝トシテ六窓庵開日而已出勤為致候  
ハ、六窓庵保存都合モ宜掃除向行届可申儀ト存候此段相  
伺候也  
(例規集 明12)

【史料4-7】一指齋の「上伸書」

乍恐奉願上候口上書  
右者茶道之意味奉嘆願仕候

一 私共先祖千利休宗易茶道中興仕候。其源意者、  
忠孝五常を精励し、節儉約質素を専に守り、  
身分相応之家勢を怠らず、治世安穩之恩沢  
を忘却致さず、貴賤衆人共に親疎之隔なく、  
交会致し、子孫長久無病延命之  
天恵を仰ぐ祈術にして、則、一服點茶の規矩も  
仁義を旨として嚴密に手順を立て、礼節敷し  
坐歩共に五礼を乱さず、又、約を違えず誠心以て  
執行仕候。事業に悉皆頭然御坐候。依之旧来  
朝廷始奉り御採用在之。下賤之者も是を相学び、  
艸庵にて只在合せの器物を清く用ひて、一碗の  
茶を貴賤の論せず、貧福に拘らず、礼儀を以て  
親しむ。筵を結びて質素を示し、茶受と号、  
畢竟腹中を温て茶味の良能を喫る為に  
龜抹の懷石を食し、和漢聖賢之教事  
を感談致し、更に心底を磨き候。道々候処  
中比来世上の風儀に習候哉。珍器を撰み山海  
之美味を集め、思々に催を競ひし人多く  
相成候故に自然と奢侈遊興の藝杯と流言  
に預候事、寔に是非も無、本意を背く次第  
全く私共教示之不行届故と兼々迷悔仕居候処  
近此  
御一新之御時節比儘捨置候而自然  
御趣意に相背候様、  
御聞上げ相成候而者誠に奉恐縮候儀に奉存候。  
其中にも、近來は厚志の者にも何と無茶の会  
を憚り居候輩も相聞エ、是に相泥を候而追々

茶道衰微に至り候時は私共先祖江対し不孝之儀は勿論、相続に相障候儀と甚歎息仕候に付今度私共篤と熟談仕、向後弟子共申に及ばず執心之輩へ真実堅固古風專一に相守り申候。茶法教辱仕恐ながら

御国恩可奉報儀、厚相諭候様尽力仕度奉存候。

就而外国にて未だ茶を挽服用仕候良能

不開候様相心得候。右茶の効能在之候儀は

御承知被為在候事、故追々荒衰之地御開

被遊茶実御植附に相成候儀に付而者乍恐

尚々茶の道相開海外偏境迄も盛大流布

勉強仕、報国之志貫通仕、宇内之繁栄奉

祈候処私に沙汰候而ハ等閑に打過憤発仕候。

所詮も速々念願協間敷残念奉存候。依之

不顧恐儀上候致共、前条之次第、

御憐察下置衆人茶道有志之者ハ

老若男女家業之寸暇に入学致し不苦之旨

御布告被下置候御儀相協候はば人々無懇念

執行可仕もと感銘至極奉存候。随而私共

先祖始テ茶道職業之者も引立以來蒙

御国茶道連綿相続可仕誠に以難有仕

合難尽筆紙奉存候。就而者実に四悔之

一滴にも相劣候得共、為冥加当申年より

歳々申合せ□之献税仕度奉存候事に御座候

此段謹而願上候。誠恐謹言

千宗守 印

千玄室 印

千宗室 印

千宗左 印

明治五と

京都府

御廳

(解説校訂 杭迫柏樹氏)

【史料4-8】明治五年八月二十三日教部省布達

能狂言を始テ音曲歌舞ノ類ハ、人心風俗ニ關係スル処不少  
候ニ付、左之通、各管内營業ノ者共へ可相違事

壬申八月二十三日

教部省

一、能狂言以下演劇ノ類、御歴代ノ皇上ヲ摸擬シ、上ヲ褻瀆<sup>せつとく</sup>  
シ奉リ候体ノ儀無之様、厚注意可致事。  
一、演劇ノ類、専ラ勸善懲惡ヲ主トスベシ。淫風醜態ノ甚シ  
キニ流レ、風俗ヲ敗リ候様ニテハ不相濟候間、弊習ヲ洗除シ、  
漸々<sup>ぜんぜん</sup>風化ノ一助ニ相成候様、可心掛事。  
一、演劇其他、右ニ類スル遊芸ヲ以テ渡世致制外者扨ト相唱  
へ候從來ノ弊風有之、しかるべからざる可然儀ニ候条、自今ハ身分相応行  
儀相慎ミ、營業可致事

(傍線筆者)

【史料4-9】裏千家玄々齋宗室「茶道の源意」

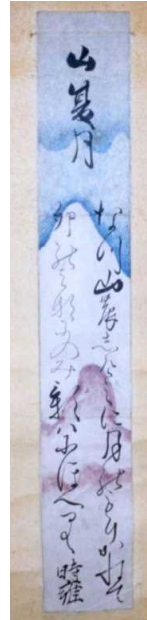
茶道の源意は忠孝五常を精励し、節儉質素を専らに守り、  
分限相応たる家務に怠らず、治世安穩の朝恩を奉戴し、貴賤  
衆人親疎の隔て無、交会し、子孫長久、無病延寿の天恵を仰  
ぐ、斯業を教諭の道故に茶会の規矩厳重礼節正敷、五体を崩  
さず誠心を以て執行成す事業也、依て纔か薄茶

一点中にも此意趣悉皆顕然と表示畢、

衣食住道具も露地も奢りなく誠意を励む茶味の明けくれ

精中六十三ヶ年七ヶ月誌

【図1-1】平井家所蔵の短冊「山夏月」



【図2-1】本居宣長記念館所蔵信郷関係文書箱

文書箱 本居信郷之部

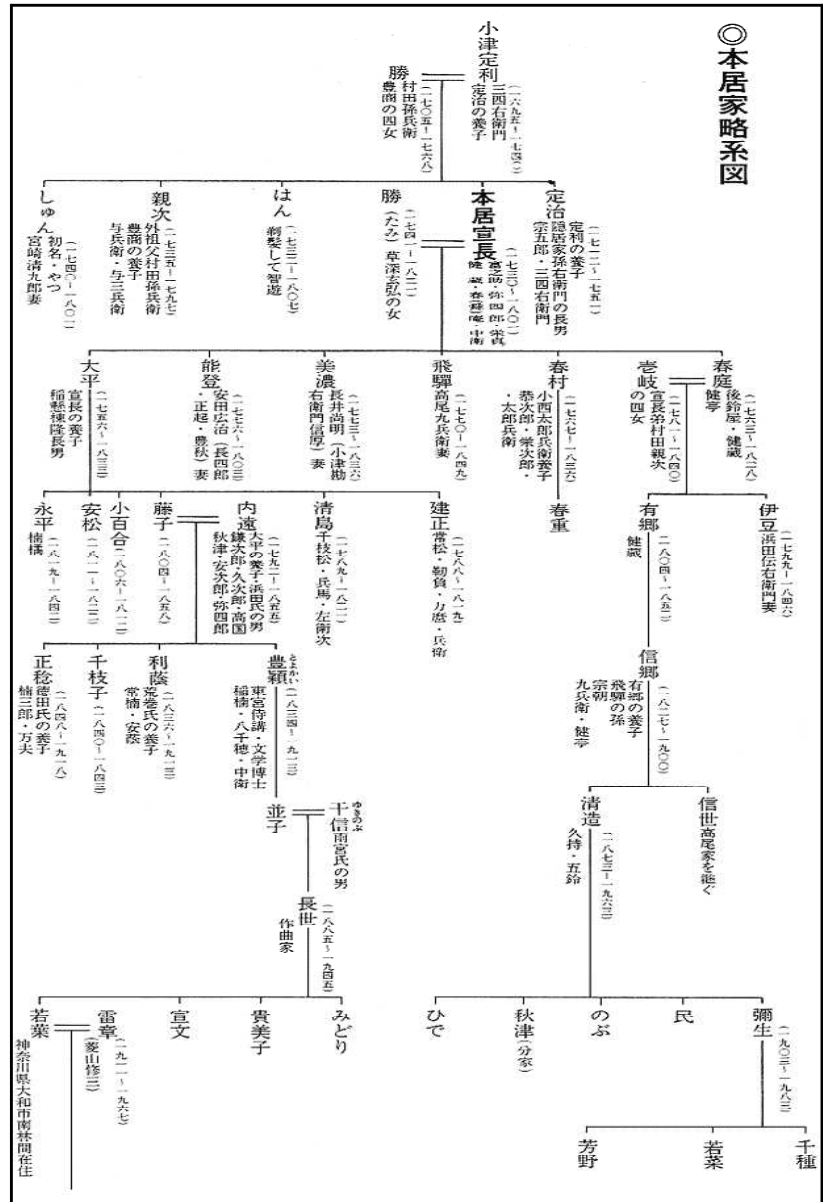


『會席附』の調査票

第三門 家東調査票		昭和 〇年 〇月 〇日 調	
分類	第二部	第二 英	第二 搜 其他記録
番号	本居 信郷	目録番号	〇〇
書名	本居 信郷	紙張	〇〇
種別	本居 信郷	綴り	〇〇
丁数	〇〇	綴り	〇〇
採以	〇〇	綴り	〇〇
符以	〇〇	綴り	〇〇
帯	〇〇	綴り	〇〇
項	〇〇	綴り	〇〇

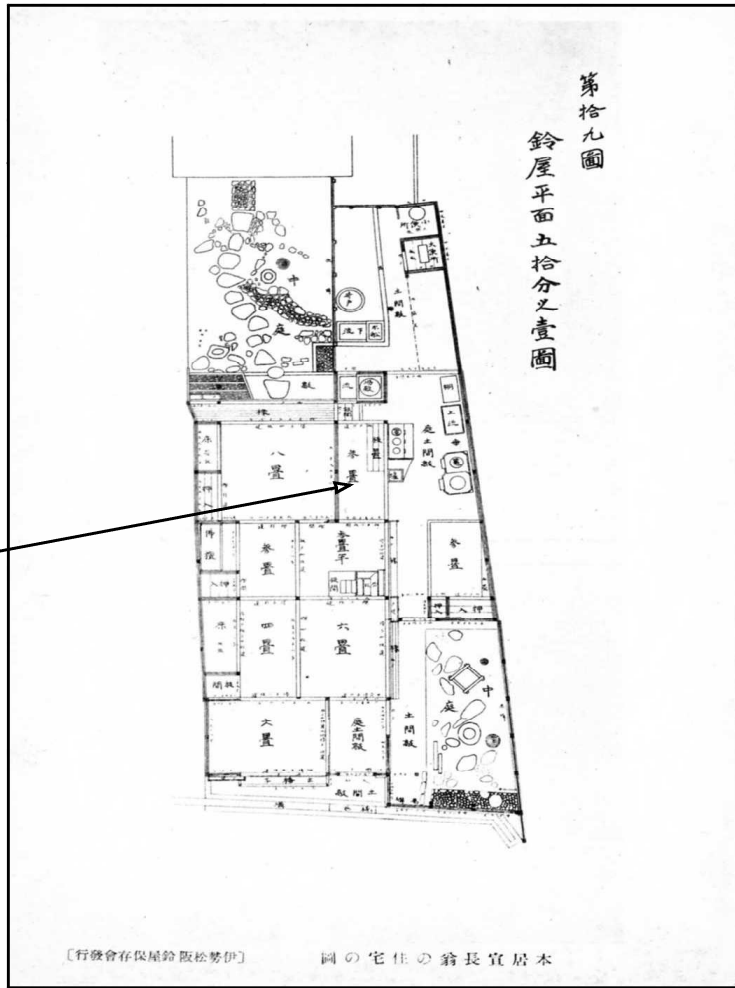
信郷 1-1

【図2-2】本居家の家系図



典拠（本居宣長記念館ホームページ「宣長ワールド」）

【図2-3】本居宣長翁の住宅の図



絵葉書 松阪鈴屋遺跡保存會発行  
昭和 14 年 6 月 (139 版)

【図2-4】 現在の屋内の写真

三畳間



三畳間から仏間を見る



八畳間（奥中の間）



（筆者撮影）

三畳間の天井



八畳間（奥中の間）天井  
蛭釘が残っている（○印）



八畳間（奥中の間）の縁側





六畳間から露地を臨む



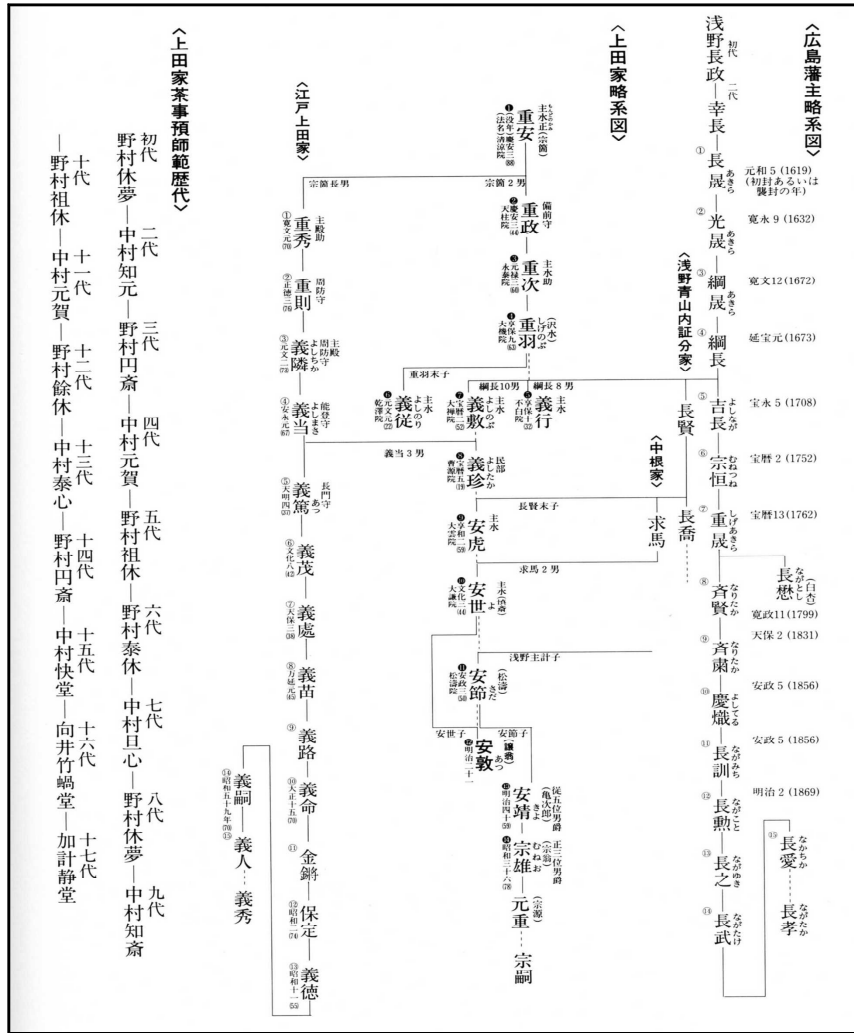
中庭



露地

【図3—1】 上田家関係略系図

『幕末維新の芸藩と国老上田家展図録』 財団法人広島市文化振興事業団編集発行  
 (平成元年十月二十七日) 六十頁より転載



【図3—2】 讓翁馬上の姿



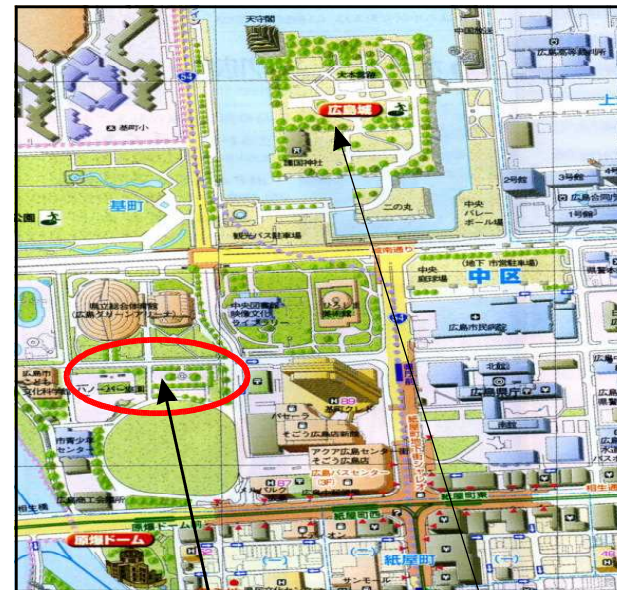
上田宗嗣著『茶道上田宗箇流』  
 (広学図書株式会社発行)  
 119頁から転載





庭園正面から東方を臨む  
 (平成 25 年 8 月 7 日 筆者撮影)

【図 3-3-1】 ハノーバー庭園とその周辺 (上田家上屋敷跡)



ハノーバー庭園 広島城

観光案内地図「ようこそ広島へ！観光ガイドブック」  
 (公益財団法人 広島観光コンベンションビューロー  
 観光振興部 平成廿五年五月発行) から引用

【図 3-3】 広島市中心部地図

【図 3-4-1】



住吉橋付近から中島神崎橋を臨む  
(平成25年8月6日 筆者撮影)

【図 3-4-2】



神崎之碑 (平成25年8月6日 筆者撮影)

【図 3-4-3】



碑文 (平成25年8月6日 筆者撮影)

碑文の内容

「神崎」の名が歴史上最初に現れるのは、天和三年（一六八三）藤原惺窩の門人であった木下順庵が、藩主浅野綱長の求めに応じて作った詩文「神崎八景」であると思われる。

更に、享保八年（一七二三）には、「神崎開」の名で正式な藩領として記録されている。

「神崎」という名の由来は、太田川の本流である本川の「川の崎」が訛って「神崎」となったという説や、対岸に住吉神社が在ることから「神の崎」と呼ばれるようになったという説、あるいは、当地の開発にかかわった人の名からという説もある。

本川に臨む神崎の地は、水上交通の要所であったため浅野藩政時代には家老の上田氏や上級武士による船屋敷、下屋敷などが設けられていたといわれている。

また、宝暦八年（一七五八）に始められた「神崎船渡」は、明治の終わりまで続けられ市民の利便に供せられてきた。

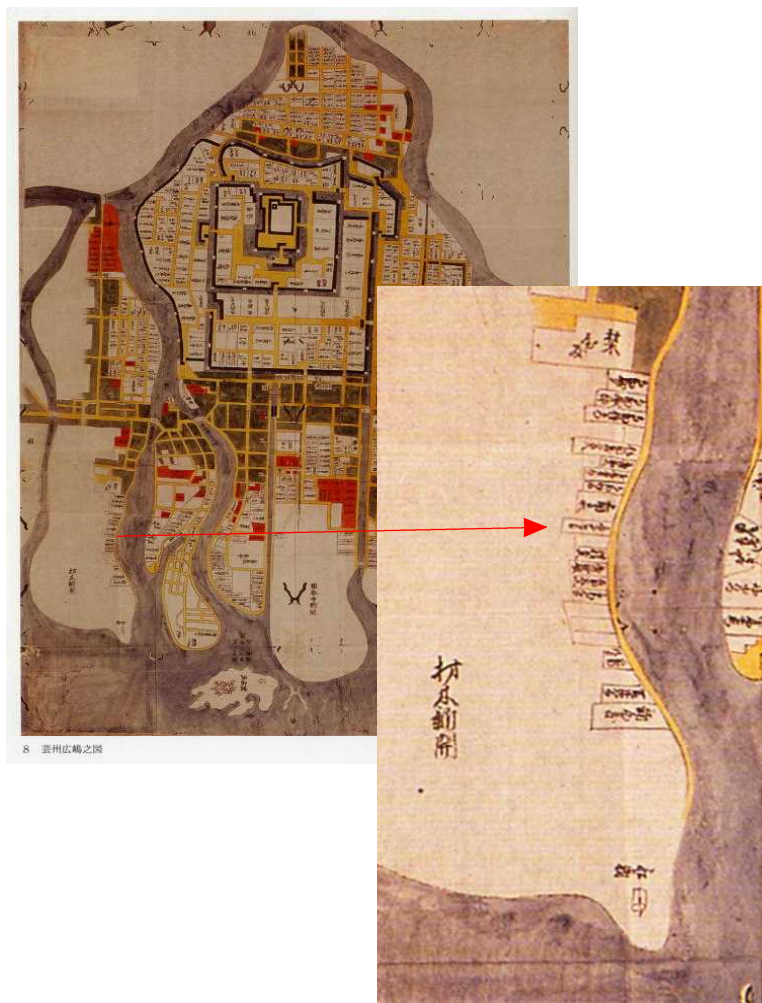
この古くからの名称が後世に伝承されることを願い、ここにこの碑を建てる。

昭和六十年九月

神崎学区連合町内会  
神崎学区社会福祉協議会

【図3—5】「芸州広嶋之図」図録番号8

『広島城下絵図集成』広島市未来都市文化財団 広島城発行  
(平成廿五年三月十九日)より転載



【図3—6】「芸州広嶋之図」図録番号16

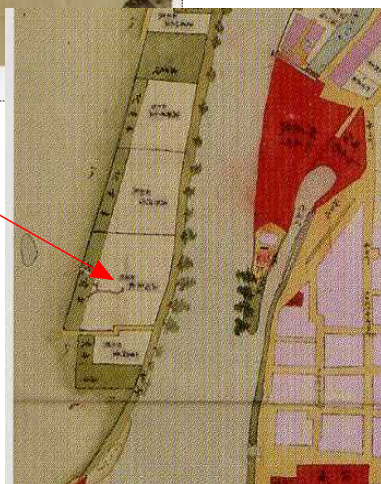
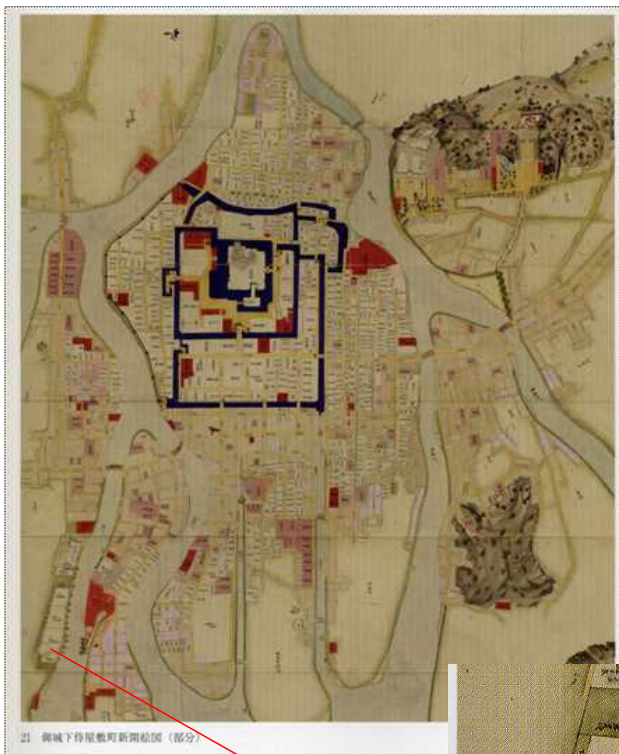
『広島城下絵図集成』広島市未来都市文化財団 広島城発行  
(平成廿五年三月十九日)より転載



【図3-7】

「御城下侍屋敷町新開絵図」（個人蔵） 図録番号21

『広島城下絵図集成』広島市未来都市文化財団 広島城発行  
（平成廿五年三月十九日）より転載



【図3—8】 『雅遊謾録』

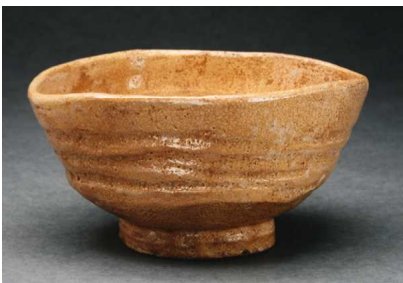
『幕末維新の芸藩と国老上田家展図録』 財団法人広島市文化振興事業団編集発行  
(平成元年十月二十七日) 二十六頁資料番号五十一より転載



【図3—9】 萩焼茶碗「銘 ひろしま」

上田宗箇流公式ホームページ「最新情報」より転載

『幕末の十五代茶事預師範中村快堂が残した「茶法寸方之類并銘物土器鑑定之覚」に、「萩茶碗大小、中に白薬でひろしまと有り」と記載があり、その後行方の分からなくなっていたもう一つの萩茶碗が、この度和風堂に戻ってききました。公開の予定はまだありませんが、覚書にあったお道具が平成の世で再び揃いました。』





高 6.9 cm、口径 5.8 cm、胴径 8.6 cm

【図3-10】 上田大海

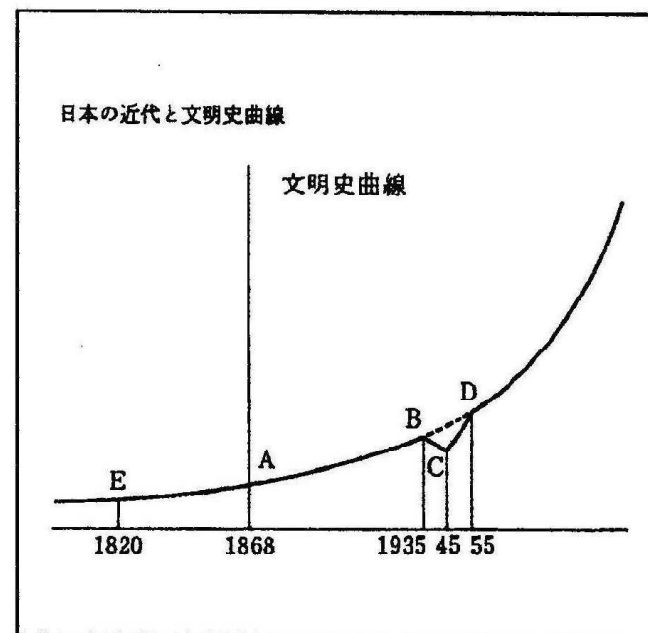
上田宗箇流公式ホームページ「茶道具」より転載

平成二十三年の記事によると、仕覆の鳥襷宝尽し（上田鳥襷）が、京都の齋藤貞一郎氏の手により、五百年ぶりに復元された。

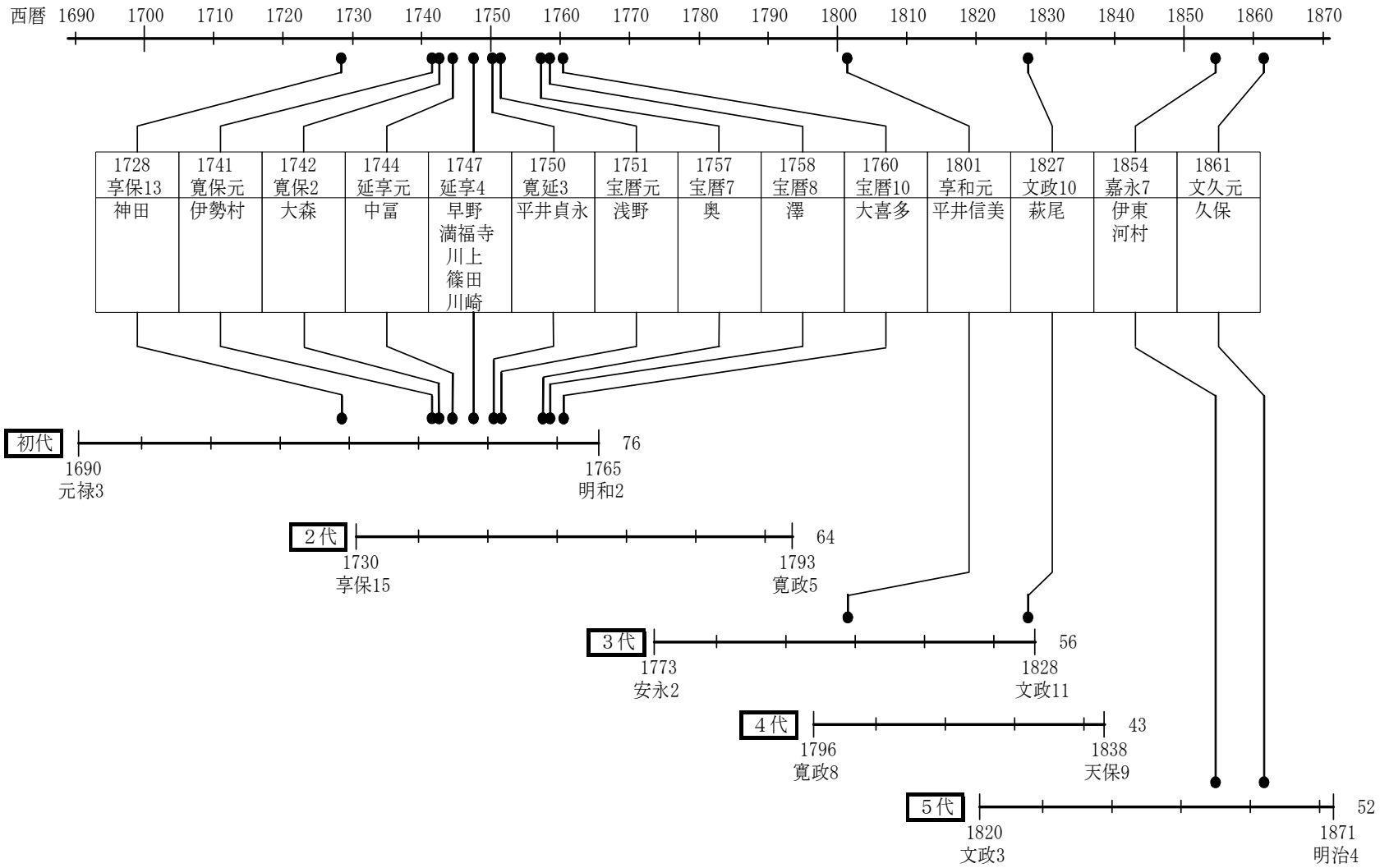


「茶法寸方之類并銘物土器鑑定之覚」

15代茶事預 中村快堂筆（部分）



『梅棹忠夫著作集第13巻  
地球時代に生きる』  
1991年10月20日発行  
中央公論社



【表1-1】 青木家歴代の生没年と伝授年月日



【表1-2】 大庭屋平井治郎右衛門美英著『茶会々記集』  
 巻別収録年月日と会数

冊	自	至	会数
1	慶応02 (1866) .10.15	明治15 (1882) .11.04	47
2	明治15 (1882) .11.28	明治18 (1885) .03.10	50
3	明治18 (1885) .03.16	明治19 (1886) .02.10	35
総計			132

【表1-3】 大庭屋平井治郎右衛門美英著『茶会々記集』  
 年別会数

年	会数
慶応2年	1
慶応3年	0
明治元年	0
明治2年	1
明治3年	5
明治4年	0
明治5年	0
明治6年	0
明治7年	0
明治8年	2
明治9年	0
明治10年	0
明治11年	0
明治12年	12
明治13年	9
明治14年	8
明治15年	12
明治16年	17
明治17年	21
明治18年	38
明治19年	6
総計	132

【表1-4】平井次郎右衛門美英著『茶会々記集』—底本 平井勝彦・市村祐子編 大阪市史料調査会発『大阪市史料第48輯 大庭屋平井家茶会々記集—貯月菴宗従茶会記録—』(平成9年7月発行)所収 1~95頁

- 凡例 1. 左端の番号は、筆者が便宜的に付けたものである。  
 2. 初入、後入等の表記は【 】で「掛物」の欄に記した。  
 会記に記載がない場合は、筆者が丸括弧を付して【 】内に記した。  
 3. 道具名が事項名と異なる場合は、〔 〕で記し、「薄茶器」用の茶碗を記している「同茶盃」は、「薄茶盃」と表記した。

茶会々記集 一														
No.	元号	月日	茶会名 他	場所	亭主	客	掛物	花生	釜	香合	茶入	茶碗	茶杓	
1	慶応2	10月15日 ～ 12月14日	福島当別業於貯月菴	福島当別業於貯月菴	青木宗鳳	住友吉左衛門 白山善五郎 木田庄左衛門 藪清右衛門 平井次郎右衛門	【初座】 宗甫公文 手造水指添		浄味阿弥陀堂 了々斎箱書付	青磁大鷹				
							【後入】	小堀宗友手造 一重切			不昧公好 松風棗 歌アリ 薄茶器 豊前上野焼 肩衝	〔茶盃〕片手鉢ノ手	〔茶匕〕村田一斎共筒	
2	明治2	3月	於当庵		平井次郎右衛門貯月	住友吉左衛門 白山善五郎 木田庄左衛門 古筆了仲 植村平兵衛	清巖和尚一行物 緑柳舞春風	粉引德利	庄兵衛作 東山御物写 眞形四季竹ノ絵 箱書付 光貞	染付桃	瀬戸八幡手肩衝 銘 筑羽根 小堀蓬露箱 書付 薄茶器 溜吹雪	茂三	松花堂共筒	
3	明治3	1月	於当菴			鴻池善右衛門 同 新十郎 住友吉左衛門 白山善五郎 木田庄左衛門	【初座】 古溪和尚一行物	利休作尺八	浄元作 大広口 尾だれ	〔香炉〕青磁		南宗寺伝来 長次郎黒	原叟共筒 銘早馬	
							【後席】 元伯短冊		九兵衛作丸	備前布袋	茶箱入 笹蒔絵棗	茶箱入 井戸小服	真塗	
4		1月13日	正午 於当菴			鴻池新十郎 樋口三郎兵衛 木田庄左衛門 詰 山西夕陽	元伯古溪和尚一行物 橋二人物面贊	瓢箪 常叟作 銘巢立鶴	寒雉作	交趾鴨	利休時代棗 随流判喰違ヒトアリ 薄茶器 仙叟好 手造	古唐津 薄茶碗 赤染手造 不見斎 銘 恵比須	甫竹共筒	
5		3月13日	午前九時 於当菴			磯谷宗庸 田中宗七 中村平五郎	不昧公 歌入文	信楽旅籠	與二郎 霰尾だれ	青磁厂	玉川手 芋の子 薄茶器 詩中次	薄茶盃 一入黒 手造	一翁共筒	
6		3月9日	福島別邸ニ於テ遠叟忌献茶	福島別邸			【(献茶)】 宗甫公像 面狩野守信 大燈国師贊					天目 瀬戸・天目台 唐物台		
							【(茶席)】 遠州公横物 雲無心出窟	唐物砂張小舟	五郎左衛門作 鶴首七宝紋	古染付銀ホヤ	盛阿弥作尾張棗 箱書小堀権十郎	朝日焼	不昧公作	
7		5月17日	正午於当菴			鴻池新十郎 白山善五郎 平瀬亀之助 小島久治郎 永井如泉菴	一休禪師 心源置字七言詩 自性天然從劫空 雪溪淵膝意無窮 看々本命元辰底 逆水掛輪任変廻		芦屋霰 眞形	堆朱 遠州公箱書付	瀬戸大覚寺手 不昧公銘 山吹 箱書引歌アリ 薄茶器 御藏帳写 唐木寸切	三作三島 中服 薄茶盃 仁清平		
8	明治8	4月10日	正午年回茶事			住友吉左衛門 白山善五郎 木田庄左衛門 藪清右衛門 平井利兵衛	【待合】 光琳画 寒山拾得屏風			〔香炉〕青地三ツ足				
							【二疊大目】 大燈国師 四十首詩法語ナリ		寒雉 少乙御前	染付鯉桶 陽柳観音像模様アリ				
							【(後席)】	宗旦一重切 発句銘 箱仙叟玄々斎		備前釜形 銘郭公 仙叟書付 薄茶器 五郎大棗	井戸松花堂 銘 住吉 薄茶盃 一元黒	少菴 無銘 箱仙叟 贊筒如心斎		
9		5月6日	正午於当菴			白山善五郎 古筆了仲 植村平兵衛	【(初座)】 漁樵問答ノ図 顔輝筆 贊 李潭蒲菴両禅師 宋久也		道也百会	存置丸 栗二猿ノ模様				
							【後入】	古銅四方薄バタ 箱如心斎 覚々斎所持		瀬戸呷啜斎書付 銘山家 薄茶器 嵯峨時代 蒔絵棗	伊羅保 箱書佐久間将監 薄茶盃 長次郎作 独楽形	遠叟公作 銘 白菊		
10	明治12	3月25日	於当菴			広岡久右衛門 白山善五郎 樋口三郎兵衛 平井利兵衛	【(初座)】 清巖一行 春來草相生	仙叟好 二重窓切 銘 龍紋	浄味作 阿弥陀堂	染付 トキン茄子	溜塗駒トメ丸棗 竹叟書付	柿のヘタ 銘京極	原叟作 銘花の香	
							【広間】							

No.	元号	月日	茶会名 他	場所	亭主	客	掛物	花生	釜	香合	茶入	茶碗	茶杓
							常信 夏冬山水双幅		浄元作 霰		駒トメ写 玄々斎	ノンカウ升	
11		3月28日	三月廿八日				「料理」のみ記載あり						
12		5月8日	正午於当菴			鴻池新十郎 広岡久右衛門 白山善五郎	二條家為卿 姫路切歌もの	ノンカウ作 鯉耳薄端	道也作 達磨堂 箱書原 叟	独楽宝珠	宗甫花押 中棗 薄茶器 寸切 如心斎	手井戸 薄茶盃 黄瀬戸 角	
13		5月27日	正午於当菴			若江六兵衛 多治見治兵衛 井上平内 植村新平	(野)(瓦) 武蔵宗丸 詠草二首 野郭公 時鳥志ばしかたらへし武蔵の 入方知らぬ月ニならはし 水邊螢 五月關池の汀ニ飛ぶ螢 雲より外の星月夜哉	竹の舟 銘苔の雫	如心斎好 富士型 道也作	不昧公好 花籠	高取瓢箪 源十郎作共筒 薄茶器 小堀権十郎好 溜吹雪	熊川 小服	原叟作 銘鳴戸
14		6月13日	正午於当菴			広岡久右衛門 白山善五郎 平井利兵衛	漁菴横物 静處	一入作り細口 如心斎判アリ	道也作 四方	道安作 蟹	萬右衛門作 肩衝 薄茶器 黒雪吹	井戸 薄茶盃 古薩摩	江岑共筒 銘白衣
15		7月23日	午後四時於当菴			山本三四郎 甲谷権兵衛 春海藤治郎	賣茶翁小豎幅 煎茶炊飯是順平	唐金経筒地紋アリ	天猫殿肩衝	漆塗丸牡丹	薩摩瓢箪 箱書不昧公	ノンコウ 黒平	文椒宗守共筒 銘龍宝
16		11月4日	午後二時於当菴			原弥兵衛 白山善五郎 馬場 木村	元伯短冊	江岑尺八	九兵衛作 ふとん	交趾笹蟹	随流好 中棗	古伊羅保 われ 箱書江月 替茶碗 左入黒	江岑作 銘柴の菴
17		11月10日	口切茶事				清巖和尚一行		與四郎作	交趾狸	元伯判中棗 薄茶器 雪吹	如心斎手造 赤楽 薄茶盃 呉器 小服	道安作 共筒
18		11月18日	正午於当菴			磯上 治村 福田 谷村 吉川	松花堂画 寿老 賛江月和尚	元伯作尺八	芦屋 くづ屋形	大樋焼角足付 仙叟判アリ	宗拙判大棗 薄茶器 随流銘雪吹	古萩	原叟共筒 八幡竹ニテ作ル
19		11月30日	正午於当菴			清水 横田 永井 小島 石田	深草元政上人短冊 残菊 神無月霜夜の菊の 匂はすハ我の片身ニ 何をおかまし	黒筒 山本退菴作 銘初露	天猫作平	染付開扇	伊賀肩衝 薄茶器 時代黒 面中次	井戸脇小服 小堀大膳箱書 薄茶盃 長次郎 黒筒	光琳作共筒
20		12月3日	正午			平井利兵衛 岩井 永井 山口仙	松花堂布袋 賛沢菴和尚	宗入作一重切 箱 江岑	天猫平	染付 まりはさみ	薄茶器 平棗 随流判	薄茶盃 長次郎 黒	碌々斎 共筒
21		12月14日	正午			顯孝菴方丈 望月 原 葛城	長閑堂雪の句入文 遠州公藏	古銅共筒 随流判アリ	與次郎作 霰百会	光悦写雀の子 宗乾作	盛阿弥作 大棗 薄茶器 元伯好 木地平棗	斗々や 薄茶盃 左入 黒筒	如心斎共筒
22	明治13	3月9日	正午於福島別業	福島別業		鴻池新十郎 広岡久右衛門 白山善五郎 長田純一 山口重蔵	【待合】 元禄時代堂上方短冊 【(初座)】 石川丈山筆横物 閑置写 江南豎水碧於天中 有白鷗閑伴我 【(後入)】						
									白切釜 與次郎	交趾荒磯			
								一重切遠州公作 銘青葉			瀬戸肩衝 落徳手 薄茶器 時代嵯峨棗	長治郎作 銘初手造 覚々斎 外箱了々斎 薄茶盃 茂三	少菴作 筒随流
23		3月19日				鴻池新十郎 広岡久右衛門 白山善五郎 平井利兵衛	相阿弥 梅ニ雀ノ画 賛 建仁寺宗山七言ノ詩アリ 老梅半朽着花稀 倒苗寒條力尚微 小雀飛来不堪栖 恰如卧雨野薔薇	熨ノ坊形浪ニ登り亀蒔絵 銘千歳	浄味筋萬字		利休棗 元伯極付 箱了々斎 銘 影法師 薄茶器 シマモノ 手瓶	古萩 筆洗 薄茶盃 左入 黒	遠州作 銘春風
24		4月22日	午後二時先代追善茶事			住友吉左衛門 藪清右衛門 山口重蔵	達磨画 木村素雪筆 賛碌々斎 いやいやといふニ是非是非賛を乞ひ あつたら達磨消えてなくなる	古備前耳付	芦屋	青磁木魚	利休中棗 薄茶器 朝鮮標茶 箱 松平備前守	脇井戸 薄茶盃 ノンカウ 四方	宗旦作 銘マグラ

No.	元号	月日	茶会名 他	場所	亭主	客	掛物	花生	釜	香合	茶入	茶碗	茶杓
						谷村 森田							
25		4月28日	正午 (誕生祝)			大寺宇之助 山田惣兵衛 芦田真七 土田湖流	清巖和尚横物 語帰一	啐啄斎一重切 銘鶴ノ宿	弥三右衛門 霰 透木	ノンカウ赤 鶴ノ画 箱原叟	薄茶器 泰叟 中棗	薄茶盃 黒赤 竹叟手造 銘 鶴亀	仙叟共筒 銘みどり
26		5月23日				永井利兵衛 山口重蔵 森田新左衛門 坂野源兵衛 山中三郎兵衛	【初座】 松花堂 横物 賛 江月和尚 【廣間】 雪舟 松間ノ月画	朝鮮耳付長	寒雉	鎌倉藤の実形	新兵衛作肩衝	井戸 箱小堀大膳	元伯共筒 銘 霊山
27		6月12日				石崎 清水 小寺 石田 森井	清巖和尚横物 松の字 賛江月和尚	宗甫公一重切	九兵衛作		江存作 瓢箪 薄茶器 斗々や	古萩	宗本作 銘 郭公
28		11月18日	正午			白山善五郎 鴻池新十郎 藪清右衛門 山口重蔵 澤津	光広卿 紅葉歌入文 箱中院殿		與次郎筋丸	染付	随流判 小棗 薄茶器 碌々斎好 山中作 雪吹	宗入赤 薄茶盃 古唐津 小服	
29		12月2日	正午			永井利兵衛 井上清兵衛 清水吉次郎 戸田弥七 村井	元伯詠草 箱如心斎		鈍霰 寒雉作 箱 玄々斎	立唄 一筋ナダレアリ	薄茶器 一閑雪吹	薄茶盃 一入黒 銘 落葉	利休作 元伯筒
30		12月22日	正午			鴻池新十郎 白山善五郎 樋口重郎兵衛	元伯宗旦堅文 雪の和歌三首 詩作一首 箱 玄々斎	備前徳利	與次郎 百会	伊賀カラシ 箱原叟	絵 高兼平 薄茶器 盛阿弥中次	一入黒小服 イビツ 銘弓張 薄茶盃 古唐津	仙叟 銘月迫 箱一燈
31	明治14	1月1日	元旦荘付並ニ料理				宗甫公文 松花堂蔵	粉引徳利	天猫平	交趾	薩摩丸 肩衝	古萩	利休手造 無銘
32		1月25日				平井利兵衛 清水吉次郎 天満 鹿島	石州侯文 正月廿五日付消息		鈍霰	信楽花籠形	薩摩丸 肩衝 薄茶器 竹の棗	弥兵衛作 御本 箱書付不昧公歌アリ 心ある人ニ見せはや津の国の 長柄の橋の春の景色ハ 薄茶器 一入黒	宗中作 無銘
33		3月22日	正午			白山善五郎 広岡久右衛門 藪清右衛門 山口重蔵 平井利兵衛	古田織部文	〔花入〕宗友 一重切	寒雉立瓜	古染付 蛤海老藻畫	盛阿弥中棗 薄茶器 竹木棗	御所丸 薄茶盃 薩摩焼	如心斎 銘早蕨
34		4月9日	正午			井上平兵衛 樋口三郎兵衛 吉川善兵衛	一休和尚一行 語花下忘帰因美景	竹心作尺八 銘斧の柄	天猫霰	染付桜手	五郎作棗 薄茶器 □つ竹 中次	薄茶盃 了入作黒 銘松島	
35		5月18日	正午			木津宗詮 梅上沢融 大仙寺 正念寺	季吟短冊 待郭公		佐兵衛 四方ヲダレ	唐物丸 青貝文字アリ	唐津長 薄茶器 溜塗 高台寺蒔絵	絵高麗写 慶入作焼オロシ 薄茶盃 唐津小服	一曜斎共筒 銘ムチ
36		6月13日	正午			白山善五郎 中原 村井 酒井	如心斎 竹の畫賛 箱啐啄斎 空晴れて星かと思ふ若竹の…		道也巴霰	黒丸 甲ニ象牙ニテ文字アリ	中棗 随流判アリ 薄茶器 寸切	人形手	宗中作 筒宗慶
37		11月10日	口切茶事			梅上沢融 木津宗詮 吉川善兵衛	清巖和尚一行 語萬里一丈鉄	宗旦作 一重切		呉須八角	大津手肩衝 薄茶器 亀甲 四方張	長次郎 薄茶碗 紅葉 半洲	宗甫公作 銘 時雨
38		12月15日				永井利兵衛 森田新左衛門 山口重蔵	宗甫公文	江岑作 銘 白山	天猫平	青磁	利休時代 中棗 随流判アリ	古萩	宗中手造
39	明治15	3月23日	午後四時			樋口三郎兵衛 山片重明	清巖和尚一行 語 應無住所而其心	宗甫公無銘式重切	清右衛門 鬻首	交趾中丸 甲ニ牡丹	薩摩 薄茶器 碌々斎 中棗	番匠呉須 薄茶盃 了入黒	三宅亡羊共筒 早蕨ノ歌アリ

No.	元号	月日	茶会名 他	場所	亭主	客	掛物	花生	釜	香合	茶入	茶碗	茶杓
						森関山							
40		3月25日	正午			吉川善兵衛 高谷恒太郎 白山善五郎	古岳和尚 紹鷗参禅の記	宗甫公式重切	天猫平		翁手 蓬雪書付 薄茶器 雪吹 宗旦判アリ	刷毛目 薄茶碗 古唐津	碌々斎共筒 銘慈童
41		5月5日	午後三時			高谷恒太郎 吉川善兵衛 山田惣兵衛	長闇堂画 發句入半切文 宗甫公賛	遠州公式重切 銘尾の上 引歌アリ 立かへり 見て□□ニ 高砂の尾上の松にかかる ふしなみ	古浄味小丸 鷹峯大虚菴トアル	唐物柚	直斎仁和寺棗	熊川	宗全作共筒
42		5月16日	風炉茶事				「料理」のみ記載あり						
43		5月					「料理」のみ記載あり						
44		5月19日				広岡久右衛門 白山善五郎 永井 森井	印月和尚墨蹟	元伯式重切 銘雪吹	古芦屋真形 松竹梅	独楽平	秀次中棗 薄茶器 一閑茶桶	薄茶盃 斗々や 小服	如心斎作 牛の子ニ踏まるな庭の蝸 牛角ありてとても頼みそ
45		6月23日	午後四時			広岡久右衛門 森田新左衛門 兼松 松屋	清巖和尚横一行 語帰一		天猫平	唐物籠地丸	元伯手張 一閑菊ノ模様 薄茶器 紋吹雪	三島平 薄茶盃 露山焼	宗中手造
46		7月6日				森田新左衛門 小畠久次郎 北風 石田	宗甫公半切文 六月廿八日付 佐川田喜六蔵	輪無式重 凡鳥作	道や作 霰	タガヤサン丸 甲と虫 青貝	仙叟判 中棗 薄茶器 染付	庸軒手造 赤染判アリ 薄茶盃 唐津三島	小堀権十郎作 筒 青木習々斎
47		11月4日	午後五時			吉川善兵衛 山田惣兵衛 外に二名	光琳門人横物 友禅 紅葉小鳥	置筒 銘花かさ	天猫丸 霰 銘をだれ	染付小丸	備前玄々斎書付 箱啐啄斎 薄茶器 寸切	井戸脇 ワレ 薄茶盃 了入黒	

茶会々記集 二

No.	元号	月日	茶会名 他	場所	亭主	客	掛物	花生	釜	香合	茶入	茶碗	茶杓
1	明治15	11月28日	歳祝茶事			白山善五郎 同 春甫 長田純一 芦田 原	元伯一行 語 頭上漫々脚下漫々	輪無し式重 碌々齋作 銘 扇寿	寒雉丸	交趾黄	遠州判中棗 薄茶器 黒引溜 元伯判	如心齋 銘 雫 薄茶盃 唐津小服	小堀権十郎手造 銘鳩杖
2		12月12日	正午			平井利兵衛 見学百圃 植村平兵衛	大龍和尚一行 越鳥巢南枝		浄味丸	乾山 甲ニ玉川ノ囷	不入張祓 瓢箪 薄茶器 小棗	不白手造 黒 薄茶盃 雲笏焼	御所清涼殿 呉竹
3		12月20日				小畠久治郎 吉川善兵衛 山田惣兵衛	元伯 橋と人物画賛	宗友一重切	寒雉鉈	交趾鴨	小堀権十郎手造 一閑文入 薄茶器 紋吹雪	伊羅保 薄茶盃 古萩	宗中作
4	明治16	1月1日	荘付并ニ料理				宗甫公 春発句三首	粉引徳利	天猫平	南京染付丸	福寿海 〔替茶入〕 蒔絵蝶	砂御本	次郎太郎
5		1月4日	難波瑞龍寺年禮廻勤昼飯	難波瑞龍寺		上二人 下一人	料理の一部のみ記載あり						
6		1月14日	正午			廣岡久右衛門 同 信五郎 阪井仁平治 兼松 寛 井上為藏	江雪和尚 横物	宗友侯手造 一重切	天猫広口	染付橋杭	仁清齋首 〔薄茶器〕 蝶蒔絵中棗	砂御本 薄茶盃 比良焼筒	習々齋作 銘うゝたね
7		1月23日	午後二時			梅上澤融 円徳寺 見学百圃	江雪和尚 圓桐	宗友侯作一重切 歌銘春	天猫廣口	染付橋杭	仁清	絵御本 薄茶盃 一入黒	習々齋作 うゝたね
8		2月4日	甫公忌茶會			梅上澤融 園徳寺 見学百圃	甫公横物歌		平釜	ふくべ	利休好 瀬戸ズン切	天目茶碗 替 雲州	江月和尚手造
9		2月10日				平井利兵衛 見学百圃 植村平兵衛	宗甫公短冊	習々齋一重 銘をし鳥	平釜	染付	時代蝶蒔絵棗	高麗寫萩焼 替茶碗 角倉焼仁清寫露	習々齋作 うゝたね
10		3月6日～ 3月11日	明治16年ハ当家先々代 了因居士年忌正当二付寸志 為進福茶事			3月6日午後3時 山片重明 樋口三郎兵衛 全 重郎兵衛 森関山 賀島長三郎 3月7日午後2時 尊光寺 大仙寺 同新発意 3月8日正午 鴻池善右衛門 鴻池新十郎 白山善五郎 平井利兵衛 原 弥兵衛 3月11日午後2時 廣岡久右衛門 長田純一 白山善五郎 山口重藏	津田宗及 茶白畫賛横物	宗及手造一重切	天猫平	青磁 犬鷹	利休判アリ小棗 箱書付元伯宗日 薄茶器 面中次 福寿海トアリ	砂御本 大服 薄茶盃 雲州焼 片身替リ	宗甫公手造 箱書付共 無銘共筒
11		6月6日	午後三時			梅上澤融 明園寺 正念寺 見学百圃	宗甫公 鉄砲文	井戸脇徳利	道もおだれ	青貝	広沢手 宗和侯箱書付 薄茶器 菓器		江月和尚手造 筒大心和尚
12		6月10日	荘付及料理				探幽鍾馗	宗和侯一重切	道也ヲダレ	信楽ガラシ	雪吹 銘福寿海	御本 後井戸脇 替茶碗 角倉焼仁清寫露	象牙
13		7月10日	了因居士正当日二付精進ナリ				江雲和尚 白桐	沓形船	浄味雲龍小		蒔絵蝶	唐物桃	象牙
14		7月17日	祭禮釜 午後四時			梅上澤融 廣岡久右衛門	尚信瀧		天猫広口	光琳蒔絵 神垣ノ囷	青貝菓器	古萩 替茶碗 御本三島寫	宗本侯作 銘松風

No.	元号	月日	茶会名 他	場所	亭主	客	掛物	花生	釜	香合	茶入	茶碗	茶杓
						高木善兵衛 兼松 青木 山田 石田 楠本 山片							
15		8月10日	荘付及料理				長閑堂 歌入文		浄味小雲龍	桃	備前	片手	宗本侯手造 銘松風
16		9月10日	荘付及料理				宙宝和尚 円桐		定琳 紅葉の畫	黒根来 藤の実	習々齋手張 銘おみなし	唐津中服 信楽	象牙
17		10月3日	午後三時			梅上澤融 廣岡久右衛門 三香菴 兼松	長閑堂歌入文 遠叢公藏	井戸脇徳利	道也丸をだれ	鎌倉菊形	源十郎 尻張	古萩	貯清齋作共筒 銘太郎冠者
18		10月10日					清巖和尚一行 語處々円光独露	信楽 うつくまる	道もおだれ	鎌倉菊形	仁清 鬻首	古萩片口	凡鳥 歌銘
19		11月10日					涌蓮短冊 殘菊		浄林手取	朱根来 小食籠	雪吹 福寿海	半寸	象牙
20		12月10日	青木宗鳳公園宗匠十三回忌 追福				甫公 椿の文寫 公園筆	井戸脇	五郎左衛門手取	ふくべ 藤村正員花押	時代中次	砂御本 替茶碗 唐津	象牙
21	明治17	1月	年始荘付及料理				甫公 年頭文	青磁鯉付	浄玄作萬歳楽	橙	瀬戸耳付 替 御紋雪吹	雲州焼 替茶碗 御本立鬻	貯清齋作 銘太郎冠者
22		1月10日					宗甫公 年頭文	輔信公式重切 無銘	浄元尻張	染付丸	御紋雪吹	御本筒 茂三手	習々齋作 象牙
23		3月10日					不昧公 二月廿三日付文	唐津手桶	天猫平	染付丸	伊部	砂御本 替茶碗 玉水弥兵衛 黒	貯清齋作共筒 銘太郎冠者
24		3月15日	甲子午後二時			森田新左衛門 小島久治郎 清水常七 永井利兵衛 石田栄助	光廣春三首襖紙	長嘯子ズンド切 無銘	庄兵衛作 真形竹の模様	津田宗及赤丸 箱書付一燈宗室	藤四郎耳付 箱書付宗和侯 薄茶器 菓籠	絵御本 割高台 雲州焼 片身替	習々齋作 銘うゝたね
25		3月27日	午後四時			梅上澤融 園徳寺 見学百圓 山田惣兵衛	津田宗及 茶臼畫贊	有鱗軒 式重切 銘鳴瀧	浄林手取 釣釜	青磁 犬鷹	ライ盆荘り 玉柏手 薄茶器 朱 茶桶	ハンス ハタワリ 薄茶盤 面取	甫公作 無銘
26		4月10日					津田宗及 茶臼畫贊	長嘯子ズンド切 無銘	あしや		蒔絵蝶	御本 替茶碗 一元 光悦寫	習々齋 うゝたね
27		5月10日					大心和尚 茶ノ悟道歌		芦屋寫 庄兵衛竹の模様		福祿寿	新御本三島寫 唐津われ	象牙
28		6月17日	午後三時			森田新左衛門 永井利兵衛 小島久治郎 外一名	津田宗及 茶臼畫贊	粉引徳利	天猫廣口	存置 木瓜形	仁清作 鬻首	熊川 替茶碗 角倉焼 天目	貯清齋共筒 銘太郎冠者
29		6月26日	午前十時			白山善五郎 平井利兵衛 白山善右衛門 平井利助	鐘雪侯 貯月二字横物歌入	備前 ウツク丸	天猫廣口	存置 木瓜形	藤四郎耳付 薄茶器 菓器	斗々や 銘津守 薄茶碗 習々齋手造 銘一曲	松花堂共筒
30		7月10日	祭礼釜ヲ兼テ			木津 白山 永井 小島 奥野 山口 大島 石田 山西 森田 山田 湖柳 青木 服部 廣岡 若村 兼松	土佐筆 三輪山図 贊信尹公		芦屋寫 庄兵衛作 竹ノ模様	不昧侯好 丸白寿の画	石筋公好 面取平棗	高麗片手 替茶碗 習々齋手造 四方口面取	宗本共筒 銘松風
31		8月10日	午前五時			永井利兵衛	江雲和尚 白桐		芦屋寫 庄兵衛作		藤四郎耳付	熊川	宗本共筒 銘松風

No.	元号	月日	茶会名 他	場所	亭主	客	掛物	花生	釜	香合	茶入	茶碗	茶杓
						田中真七 柏塚値三郎 天木繁三郎 村井一作			竹の模様		薄茶器 銘雪吹	薄茶器 古萩	
32		8月15日	朝茶午前六時			山田惣兵衛 井上為藏 松本新兵衛 外二名	津田宗及 茶臼畫贊		芦屋寫	青貝 団扇	藤四郎耳付	熊川 替茶碗 古萩	宗本侯作共筒 銘松風
33		9月10日					長閑堂 虫の歌入文	習々斎置筒 銘勝角力	天猫平	フクベ 書付正員	銘茶摘ミ	御本 替茶碗 唐津ワレ	貯清斎作 太郎冠者
34		10月5日	午後早々			梅上澤融 浄光寺 木部崎 百濟 松原	清巖和尚一行 月光		浄琳手取	不昧公好 福の字		朝日焼	宗本共筒 銘松風
35		10月10日					清巖和尚一行 月光		道やおだれ	鎌倉	宗伯作	砂御本 替茶碗 朝日焼	太郎冠者
36		11月10日					涌蓮残菊 短冊	粉引徳利	浄玄丸 本願寺伝来	染付丸		雲州焼 片手替 替茶碗 一入赤	太郎冠者
37		11月22日	正午			永井原 坂野 若村 山中	原叟 富士ノ画贊 とにかくや 末廣狩の 富士の雪	如心斎作 式重 銘寶	九兵衛作 阿弥陀堂	染付 玉章	ノンコウ 赤肩衝 薄茶器 藤重作 中次	啐啄斎手造黒 銘みの亀 薄茶器 高麗	元伯作 筒古織
38		11月29日	午前十時			若村山西 永井吉川 春海	利休所持 江月和尚箱書付 真珠菴宗玄外題 情欲禪師墨後偈了リ 【廣間】 元信筆 岩ニ鳥 水仙	宗友一重切	仙叟好 寒雉作	吳苧染付 銀杏	古瀬戸	井戸小服	宗旦作 銘松風
39		12月11日				永井利兵衛 吉川善兵衛 山田惣兵衛	宗友侯 中の字	習々斎作 式重切 銘 おし鳥	浄玄丸	染付丸	雪吹 薄茶器 葉器	御本	貯清斎作
40		12月23日	午後四時			廣岡久右衛門 梅上澤融 兼松 外	宗友侯 中の字	習々斎作 式重切 銘 おし鳥	浄玄丸	志野	備前 薄茶器 時代黒棗	絵御本	貯清斎作 銘次郎冠者
41		12月19日	午後四時			山田惣兵衛 西原北村 牧野	宗友筆 中の字	習々斎作 式重切 銘 おし鳥	寒雉作 鉈霰 箱玄々斎	染付 張子牛寫	源十郎肩衝 薄茶器 葉器	砂御本 薄茶器 唐津	銘太郎冠者
42	明治18	1月	年始荘及料理				宗甫公 年頭の文 【廣間】 土佐二幅対 日月 蓬萊	青磁鯉耳	浄玄作 萬歳楽寫	橙	瀬戸耳付 替 御紋雪吹	雲劬焼 替茶碗 御本 立霧	貯清斎作 銘太郎冠者
43		1月20日	午後四時				翠岩和尚一行 満年松置霜	鷹司輔信公 式重切 銘 鳴瀧	浄玄作 萬歳楽	栗田焼 藤の実	源十郎 薄茶器 蝶蒔繪棗	安南 薄茶器 道人作 富士	貯清斎 銘太郎冠者
44		2月3日	午後三時				小堀蓬雪侯 短冊 題 松下鶴	宗友作 一重切 銘若草	天猫平	薩摩焼丸 狸々ノ囃	瀬戸耳付 箱書付 銘福祿寿	萩焼 薄茶器 御本筒	習々斎作 うたゝね
45		2月7日	遠叟公忌				江雲和尚 円桐	木下長嘯子作	天猫車軸	津田宗及手造 丸 箱一燈	古瀬戸 一重口	砂御本 替 古萩	宗本作 銘松風
46		2月10日					不昧公文	宗友一重切 銘春の歌	浄琳作 手取	津田宗及手造丸	時代 黒葉器	砂御本 替 玉水黒	貯清斎 銘太郎冠者
47		2月23日	午後三時			永井利兵衛 森田新左衛門 小島久治郎 田中新七 北村一作	光廣卿懷紙 春三首	小堀宗英作 無銘	天猫作 車軸	交趾笠井 蓋 長入	瀬戸 薄茶器 時代黒 葉器	熊川 薄茶碗 尾戸焼 雲霧寫	習々斎作 うたゝね
48		2月25日	午後四時			山田北村 西原	沢菴和尚一行 緑水青山	宗友作一重切 銘春の夜	作兵衛作 銘萬歳楽	蛤 玄々斎書付	源十郎作 薄茶器 葉器	端反 薄茶器 黒棗 玉水作	貯清斎 銘ひな霧



No.	元号	月日	茶会名 他	場所	亭主	客	掛物	花生	釜	香合	茶入	茶碗	茶杓
						林 牧野 大島 安東 木島 中村 片山 樋口							
49		3月	午後四時			林 大島 山田 牧野 岩木	大龍和尚一行		天貓霰丸		瀬戸丸 肩衝 銘時雨 薄茶器 葉器	且入 志野寫 薄茶盃 井戸脇	小堀宗本作 銘松風
50		3月10日					大心和尚 福寿横物		天貓作 霰丸	唐津角 甲二鹿	仁清 鬻首	熊川 替 雲笏燒	甫竹筒 如習斎

茶会々記集 三

No.	元号	月日	茶会名 他	場所	亭主	客	掛物	花生	釜	香合	茶入	茶碗	茶杓
1	明治18	3月16日	午後三時			樋口三郎兵衛 加賀、島 片山、中井 田中、木島 林、和久 牧野	光廣卿 懐紙 春三首	青磁	浄玄作 ふとん釜	染付丸	藤四郎 春慶 薄茶器 蒔絵蝶	熊川平 角倉焼 天目 薄茶盤 面取	甫竹作 青木宗鳳筒 銘 昔話
2		4月10日					伊勢の図 光起筆 賛信尹公	一重切	浄琳手取	染付丸	備前	熊川 替 習々斎 面取	小堀宗本 銘松風
3		4月23日	午後三時			永井利兵衛 塩路 田中	清巖和尚一行 語 處々圓光	時代籠	釣釜 道也作 東陽坊	鎌倉彫	瀬戸翁手 薄茶器 雪吹	砂御本 替茶盤 唐津	貯清斎 銘太郎冠者
4		5月15日	午後二時			比田 塩路 永井利兵衛	中院通義卿 郭公短冊	時代籠筒	浄雪 四方口	唐木茄子 宗友侯書付	瀬戸生鼠手 薄茶器 蝶蒔絵棗	熊川 薄茶盤 道八	貯清斎 太郎冠者
5		5月9日	午後四時			加賀権作 雨泉清次郎 片山永介 大島 北村	旧明石藩知事 嵩翁書一行 春風百草香	杏形 宗中作 銘 郭公	天猫作 車軸	宗友書付 タカヤサン茄子	瀬戸翁手 薄茶器 菓器	そば 薄茶盤 新朝日	凡鳥共筒 銘 うた すなほなる
6		5月10日					勝月畫 宗中賛		天猫作 車軸	宗友侯書付 茄子	時代黒 菓器	蕎麦	凡鳥作 銘 歌
7		5月11日	正午			北村一作 同 縫子 手代 佐助	中院通義卿 短冊 暁郭公		天猫作 車軸		瀬戸生鼠手 肩衝 薄茶器 蒔絵蝶棗	絵御本 薄茶盤 仁阿弥 黒平	小堀宗本共筒 銘 松風
8		5月25日	午後三時			梅上澤融 清水正幸 北村一作	鉄砲の文	置筒 習々斎作	口四方		瀬戸翁手		
9		6月4日	午後三時			淡野権四郎 林 梅甫 外 二名	宗甫公 五月雨の俳句		道安作 東陽坊	存置 木瓜形	時代蒔絵 平棗	新御本 三島	象牙
10		6月10日					宗甫公五月雨俳句	宗和侯一重	道也作 東陽坊	存置 木瓜形	菓器	後井戸脇	習々斎作 うた々ね
11		6月11日	午後四時			林 梅甫 北村、片山 山田、西原 中井	小堀宗中一行 身與白雲閑		道安作 東陽坊	存置 甲二虫	生鼠子 肩衝	蕎麦 重ネ茶碗	小堀蓬雪作
12		6月13日	午後二時			永井利兵衛 田中 比田	小堀蓬雪横物 照火露中	輔信公二重切 銘鳴瀧	道安作 東陽坊	存置 甲二虫	翁手 薄茶器 菓器	ソバ台點 台朱花形 薄茶盤 朝日焼	貯清斎 太郎冠者
13		6月	木津宗詮好々斎追善茶事				「料理」のみ記載あり						
14		7月15日	午後四時			梅上澤融 西念寺 大仙寺	「料理」のみ記載あり						
15		7月26日	午前五時			山田惣兵衛 片山 北村 西原	松花堂筆 芙蓉畫	交趾 鉢	道仁作 切掛形	籠地 笛吹 船乗 人物	盛阿弥中棗 薄茶器 古瀬戸 一重口	高麗半ス 箱金森宗和 薄茶盤 旦入 黒ヒラ	凡鳥共筒 銘 歌 すなほなる
16		7月29日	午前十時			梅上幸子 泉 梅子 田中颯子	冷泉為理卿 短冊 日の本の云々		少菴 霰切掛		道志作 中棗 薄茶器 古瀬戸筒	刷毛目 道八作 薄茶碗 新御本ヒラ	甫竹 筒如習斎 銘昔話
17		8月10日				山田惣兵衛 吉川善兵衛 永井利兵衛	江月和尚横物 無心二字	輔信公 二重切 銘鳴瀧	浄味小龍雲		仁清 鬻首	萩焼	古田織部作
18		8月24日				西原、毛利 山田、北村 林、片山	萩翁一行物 茶香透竹藪		関東作 真形鶯の地紋	唐物黒丸	南蛮ルイ座	信楽花橘寫 宗中箱書	清水道竿作 共筒 無銘
19		9月18日				梅上 兼松 廣岡久右衛門	清巖和尚横物 濠外起清風		天猫富士形		瀬戸生鼠手 肩衝 薄茶器 寸切	熊川 薄茶碗 萩片口	金森宗和作 無銘
20		9月20日	正午			永井絹子	江月和尚一行 亀萬年喚友	時代手附籠	天猫富士形	朱根来丸	瀬戸翁手	端反 半ス	金森宗和 無銘

No.	元号	月日	茶会名 他	場所	亭主	客	掛物	花生	釜	香合	茶入	茶碗	茶杓
						田中常子 林 梅甫					薄茶器 黒葉器	薄茶碗 黒染	
21		9月28日	午後五時			西原 山田徳永 北村 林	大心和尚筆 紹鷗利休茶ノ悟道の歌		五郎右衛門 手取	宗友作 唐木茄子	古瀬戸寸切 薄茶器 葉器	三斎公手造 赤染 薄茶碗 後井戸脇	玄々斎作 銘松風
22		10月8日	午後三時			第九銀行頭取 三淵静逸 山村 福田 中村	江月和尚一行 亀萬年喚友	長嘯子作	天猫真形	不昧公好 百寿	薄茶器 宗友書付梅の木 戸沢左近作	三斎公手造 赤染 替茶碗 新御本	甫公共筒
23		10月10日					長閑堂 秋歌入文	時代黒籠	浄琳作 手取	道志作 菱斗	宗友書付 梅の木 左近作	織部黒 替茶碗 新御本	甫公共筒
24		11月10日					涌蓮短冊 後菊	長嘯子侯古竹掛	天猫広口	唐物 独楽	道志作 菊黒蒔絵棗	半寸われ 替茶碗 習々斎手造	瀬田掃部寫 政安作
25		10月13日	正午			田中頼子 永井絹子 田中常子	宗友侯 中の字 歌入	三斎公作 式重切	天猫作 真形	道志作 菱斗寫	嶋物茄子 薄茶器 黒葉器	御本 薄茶盃 唐津	玄々斎作 銘松風
26		10月25日	午後四時			円光寺 北村 山田惣兵衛 大畠 清水 西原	晴川院画 菊一本 宗中賛 霜の一字	古銅釣瓶	寒雉作 車軸	時代藤ノ実 甲ニ青貝ニテ虫	仁清瓢箪 薄茶器 若松蒔絵棗	熊川 薄茶盃 唐津	宗甫公作共筒 銘落紅葉
27		11月24日	午後三時			山田惣兵衛 大畠 林 西原 能勢	清巖和尚一行 語 直指人心	習々斎一重切	浄元作 尻張	交趾荒磯	古瀬戸 肩衝 薄茶器 朱桐棗	織部 黒 薄茶盃 御本 立蠶	三斎公作 共筒
28		11月25日	午後二時			徳永 西原 田中 比田	宗甫公短冊 花ニ咲嵐の月の時雨哉		浄光作 尻張	交趾 荒磯	島モノ茄子 薄茶器 玉蒔絵葉器	絵御本 薄茶盃 雲笏焼	宗本作
29		12月26日					元伯 橋ニ人物畫賛	尺八 銘千鳥	寒雉作 ナタ	交趾鴨	利休時代中棗 随流判 喰違ヒトアリ 薄茶器 蒔絵葉器	薄茶盃 ノンコウ 赤筒 原叟書付 銘 光明	仙叟作 月迫
30	明治19	1月4日	難波瑞龍寺年始廻礼 昼飯料理	難波瑞龍寺	方丈外一名 供一名	難波瑞龍寺	料理の一部のみ記載あり						
31		1月10日					宗甫公 年頭の文 十日付 【廣間】 光起蠶	輔信公式重切 無銘	浄元作 尻張	染付丸	御紋雪吹	御本筒 茂三手	習々斎作
32		1月23日	午後四時			廣岡久右衛門 吉川 西原 北村 林	【初座】 宗中一行物 清景在新春 【廣間】	金森宗和 式重無銘	道也作 萬歳楽	了入 朝日形	薩摩 肩衝 薄茶器 独楽	絵御本 割高台 薄茶碗 旦入 赤	貯清斎作 銘丹頂蠶
33		1月25日	午後四時			西原 山口 泉 宮崎 北村	宗甫公 年頭の文	宗和式重切	道也作 萬歳楽		翁手		貯清斎作 太郎冠者
34		2月8日	午後二時			口谷 比田 田中 山田	甫公短冊 人古侘かりて遣ふ 立寝かな	粉引徳利		新渡 張子牛	古瀬戸 耳付 薄茶器 葉器	薄茶碗 雲笏焼	玄々斎 銘松風
35		2月10日				頭孝菴 外三名	「精進料理」のみ記載あり						

【表1-5-1】 「菘盆」と「廣間」の道具組

年号	月日	菘盆	火入	灰吹	葉入	手炉	廣間
明治14	元旦	×	×	×	×	×	×
16	元旦	×	×	×	×	×	×
17	1月	松長角	染付	青竹	蒔絵	松ニ竹	表へ二幅対 日月
18	1月	松長角	染付	青竹	蒔絵	松斎	土佐二幅対 日月 蓬萊

【表1-5-2】 道具立て表

凡例 茶会記中、項目名が記されているが、内容が書かれていない場合は「-」印を、項目名そのものがない場合は「×」を記した。

年号	月日	掛物	花生	花	釜	炭斗	水指	香合	茶入	袋
明治14	元旦	宗甫公文 松花堂蔵	粉引徳利	赤白椿、ユツリ葉	天猫平	唐物籐組	備前耳付	交趾	薩摩丸肩衝	サツマ漢東
16	元旦	宗甫公 春発句三首	粉引徳利	赤白椿、ユツリ葉	天猫平	時代竹組	伊賀耳付	南京染付丸	福寿海	×
17	1月	甫公 年頭文	青磁鯉耳	-	浄玄作 萬歳楽	平菜籠	-	橙	瀬戸耳付	×
18	1月	宗甫公 年頭の文	青磁鯉耳	-	浄玄作 萬歳楽寫	平菜籠	左張	橙	瀬戸耳付	×
年号	月日	替茶入	茶碗	替茶碗	茶杓	方六	建水	蓋置	菓子	干菓子
明治14	元旦	×	古萩	×	利休手造 無銘	了入	左張	青竹	ジョウヨウ満頭 寿の字	-
16	元旦	蒔絵蝶	砂御本	-	太郎次郎	了入	塗曲	×	ジョウヨウ饅頭 寿の字	-
17	1月	御紋雪吹	雲州焼	御本 立靄	貯清斎作 太郎冠者	×	塗曲	青竹	-	-
18	1月	御紋雪吹	雲州焼	御本 立靄	貯清斎作 太郎冠者	×	木地曲塗	青竹	-	-

【表 1 - 5 - 3】 料理献立表

凡例 茶会記中、項目名が記されているが、内容が書かれていない場合は「-」印を、項目名そのものがない場合は「×」を記した。

年	月日	向	汁	煮物	進肴	八寸	吸物	香の物
明治14	元旦	鯛作り身、大根おろし	×	小海老シソ、勝栗	【肴】味噌漬さごし	×	落し玉子、昆布結ヒテ	×
16	元旦	鰯作り身、大根おろし	×	小海老シソ、勝栗 山椒醤油焼付	鴨作落し、松露麩	×	落し玉子、昆布結ヒテ	奈ら漬
17	1月	×	×	×	海月	×	サキ梅、セリ、結昆布	×
18	1月	橙柚、さこし芋かけ	×	×	海月	×	サキ梅、結昆布、五分セリ	×
年	月日	作り身	組重					
明治14	元旦	×	×					
16	元旦	×	×					
17	1月	橙柚、さこし芋かけ	百合根、ゴマメ、苞玉子					
18	1月	×	百合根、ごまめ、苞玉子					

【表1-6-1】 掛物 (2)

清巖和尚一行物 緑柳舞春風	墨蹟
清巖一行 春来草相生	墨蹟
清巖和尚一行	墨蹟
清巖和尚横物 語帰一	墨蹟
清巖和尚横物 松の字 賛江月和尚	墨蹟
清巖和尚一行 語萬里一丈鉄	墨蹟
清巖和尚一行 語 應無住所而其心	墨蹟
清巖和尚一行 語處々円光独露	墨蹟
清巖和尚一行 月光	墨蹟
清巖和尚一行 語 處々圓光	墨蹟
清巖和尚横物 墨外起清風	墨蹟
清巖和尚一行 語 直指人心	墨蹟
一休和尚一行 語花下忘帰因美景	墨蹟
大龍和尚一行 越鳥巢南枝	墨蹟
大龍和尚一行	墨蹟
江月和尚一行 亀萬年喚友	墨蹟
江月和尚横物 無心二字	墨蹟
江雪和尚 横物	墨蹟
沢菴和尚一行 緑水青山	墨蹟
大心和尚 福寿横物	墨蹟
古溪和尚一行物	墨蹟

【表1-6-1】 掛物 (1)

名 称	種類
宗甫公文 手造水指添	消息
宗甫公文 松花堂蔵	消息
宗甫公文	消息
宗甫公半切文 六月廿八日付	消息
宗甫公 鉄砲文	消息
甫公 椿の文寫 公園筆	消息
甫公 年頭文	消息
宗甫公 年頭の文 十日付	消息
不昧公 二月廿三日付文	消息
不昧公 歌入文	消息
不昧公文	消息
石州侯文 正月廿五日付消息	消息
古田織部文	消息
長闇堂画 發句入半切文 宗甫公賛	消息
長闇堂 歌入文	消息
長闇堂歌入文 遠弐公蔵	消息
長闇堂 虫の歌入文	消息
長闇堂雪の句入文 遠州公蔵	消息
光広卿 紅葉歌入文 箱中院殿	消息
元伯宗旦豎文 雪の和歌三首 詩作一首	消息

【表1-6-1】 掛物 (4)

元伯詠草 箱如心齋	詠草
武蔵(野カ)宗丸(瓦カ) 詠草二首	詠草
二條家為卿 姫路切歌もの	和歌
元禄時代堂上方短冊	和歌
光廣春三首懷紙	和歌
中院通義卿 郭公短冊	和歌
冷泉為理卿 短冊 日の本の云々	和歌
小堀篷雪侯 短冊 題 松下靄	和歌
宗甫公 春発句三首	和歌
甫公横物歌	和歌
宗甫公短冊	和歌
季吟短冊 待郭公	和歌
深草元政上人短冊	和歌
長闇堂 秋歌入文	和歌

【表1-6-1】 掛物 (3)

翠岩和尚一行 満年松置霜	墨蹟
元伯古溪和尚一行物 橋ニ人物画賛	墨蹟
元伯一行 語 頭上漫々脚下漫々	墨蹟
遠州公横物 雲無心出岨	墨蹟
篷雪侯 貯月二字横物歌入	墨蹟
小堀篷雪横物 照火露中	墨蹟
宗友侯 中の字 歌入	墨蹟
宗友侯 中の字	墨蹟
宗中一行物 清景在新春	墨蹟
小堀宗中一行 身與白雲閑	墨蹟
萩翁一行物 茶香透竹藪	墨蹟
賣茶翁小豎幅 煎茶炊飯是順平	墨蹟
石川丈山筆横物	墨蹟
松花堂 横物 賛 江月和尚	墨蹟
旧明石藩知事 嵩翁書一行 春風百草香	墨蹟
印月和尚墨蹟	墨蹟
漁菴横物 静處	墨蹟

【表1-6-1】 掛物 (6)

松花堂筆 芙蓉畫	画
相阿弥 梅ニ雀ノ画	画
晴川院画 菊一本 宗中賛 霜の一字	画
雪舟 松間ノ月画	画
勝月畫 宗中賛	画
江雪和尚 圓桐	画
江雲和尚 白桐	画
宙宝和尚 円桐	画
光琳門人横物 友禅 紅葉小鳥	画
達磨画 木村素雪筆 賛碌々斎	画
漁樵問答ノ図 顔輝筆 李潭蒲菴兩禅師	中国画

【表1-6-1】 掛物 (5)

宗甫公像 画狩野守信 大燈国師賛	画
光琳画 寒山拾得屏風	画
常信 夏冬山水双幅	画
探幽鍾馗	画
尚信瀧	画
元信筆 岩ニ鳥 水仙	画
土佐筆 三輪山図 賛信尹公	画
土佐二幅対 日月 蓬萊	画
伊勢の図 光起筆 賛信尹公	画
光起鶴	画
如心斎 竹の畫賛 箱啞啄斎	画
元伯 橋と人物画賛	画
元伯 橋ニ人物畫賛	画
原叟 富士ノ画賛	画
津田宗及 茶白畫賛	画
津田宗及 茶白畫賛横物	画
松花堂画 寿老 賛江月和尚	画
松花堂布袋 賛沢菴和尚	画
松花堂筆 芙蓉畫	画



【表1-6-2】 花生 (1)

名称
一重切遠州公作 銘青葉
宗甫公一重切
宗甫公無銘式重切
宗甫公式重切
遠州公式重切 銘尾の上 引歌アリ
立かへり 見て□□ニ
高砂の尾上の松にかかるふしなみ
宗友作一重切 銘春の夜
宗友侯作一重切 歌銘春
宗友作 一重切 銘若草
小堀宗友手造 一重切
杳形 宗中作 銘 郭公
金森宗和 式重無銘
宗和式重切
宗和侯一重切
三齋公作 式重切
鷹司輔信公 式重切 銘 鳴瀧
輔信公式重切 無銘
輪無式重 凡鳥作
利休作尺八
宗及手造一重切

【表1-6-1】 掛物 (7)

一休禪師 心源置字七言詩	詩
宗甫公 五月雨の俳句	俳句
宗甫公短冊 花ニ咲嵐の月の時雨哉	俳句
甫公短冊 人古侘かりて遣ふ 立寝かな	俳句
大燈国師 四十首詩法語ナリ	法語
古岳和尚 紹鷗'参禪の記	記
大心和尚 茶ノ悟道歌	道歌
漁菴横物 静處	墨蹟
達磨画 木村素雪筆 賛碌々斎	画
印月和尚墨蹟	墨蹟
光琳門人横物 友禪 紅葉小鳥	画
元伯短冊	不詳
涌蓮短冊 残菊	不詳
涌蓮短冊 後菊	不詳
利休所持 江月和尚箱書付	不詳

【表1-6-2】 花生 (3)

仙叟好 二重窓切 銘 龍紋
竹の舟 銘 苔の雫
竹心作尺八 銘 斧の柄
有鱗軒 式重切 銘 鳴瀧
宗入作一重切 箱 江岑
尺八 銘 千鳥
一重切
時代籠
時代籠筒
時代手附籠
時代黒籠
信楽旅籠
信楽 うつくまる
古備前耳付
備前徳利
備前 ウツク丸
唐津手桶
朝鮮耳付長
井戸脇
井戸脇徳利
粉引徳利
青磁鯉付

【表1-6-2】 花生 (2)

宗旦一重切 発句銘 箱仙叟玄々斎
宗旦作 一重切
元伯作尺八
元伯式重切 銘 雪吹
江岑尺八
江岑作 銘 白山
如心斎作 式重 銘 寶
?啄斎一重切 銘 鶴ノ宿
輪無し式重 碌々斎作 銘 扇寿
瓢箪 常叟作 銘 巢立鶴
習々斎作 式重切 銘 おし鳥
習々斎一重 銘 をし鳥
習々斎一重切
習々斎置筒 銘 勝角力
置筒 習々斎作
木下長口子作 (※口の中は口偏に肅)
長口子ズンド切 無銘
長口子作
長口子侯古竹掛
ノンカウ作 鯉耳薄端
一入作り細口 如心斎判アリ
黒筒 山本退菴作 銘 初露

【表1-6-3】 釜 (1)

名 称
浄林手取
浄林手取 釣釜
浄玄作萬歳楽
浄玄作 萬歳楽寫
浄玄丸 本願寺?伝来
浄玄作 ふとん釜
浄玄丸
浄元作 尻張
浄元作 大広口 尾だれ
浄元作 霰
浄雪 四方口
清右衛門 鬮首
佐兵衛 四方ヲダレ
五郎左衛門手取
五郎左衛門作 鶴首七宝紋
古浄味小丸 鷹峯大虚菴トアル
浄味阿弥陀堂 了々斎箱書付
浄味作 阿弥陀堂
浄味雲龍小
浄味筋萬字
浄味丸

【表1-6-3】 花生 (4)

青磁鯉耳
青磁
交趾 鉢
唐物砂張小舟
唐金経筒地紋アリ
古銅四方薄バタ 箱如心斎 覚々斎所持
古銅共筒 随流判アリ
古銅釣瓶
端ノ坊形 浪ニ登り亀時絵 銘千歳
置筒 銘花かさ
杳形船
小堀宗英作 無銘

【表1-6-3】 釜 (3)

寒雉作 車軸
寒雉丸
仙叟好 寒雉作
寒雉作
與次郎作 霰百会
與次郎 百会
白切釜 與次郎
與次郎筋丸
與二郎 霰尾だれ
與四郎作
五郎右衛門 手取
作兵衛作 銘萬歳楽
定琳 紅葉の畫
道安作 東陽坊
道仁作 切掛形
浄光作 尻張
平釜
時代尻張
鉦霰
刷毛目
口四方
関東作 真形蔦の地紋

【表1-6-3】 釜 (2)

芦屋寫 庄兵衛竹の様
庄兵衛作 東山御物写 眞形四季竹ノ絵
箱書付 光貞
道也百会
道もおだれ
道也作 萬歳楽
釣釜 道也作 東陽坊
道也作 東陽坊
道也作 達磨堂 箱書原叟
道也作 四方
如心齋好 富士型 道也作
道也巴霰
道や作 霰
弥三右衛門 霰 透木
九兵衛作 阿弥陀堂
九兵衛作 ふとん
九兵衛作丸
九兵衛作
鉦霰 寒雉作 箱 玄々齋
寒雉作 ナタ
寒雉 少乙御前
寒雉立瓜

【表1-6-4】 香合 (1)

名 称
堆朱 遠州公箱書付
宗友書付 タカヤサン茄子
宗友侯書付 茄子
宗友作 唐木茄子
道志作 菱斗
道志作 菱斗寫
不昧公好 花籠
不昧公好 百寿
不昧侯好 丸白寿の画
不昧公好 福の字
津田宗及赤丸 箱書付一燈宗室
津田宗及手造 丸 箱一燈
道安作 蟹
蛤 玄々齋書付
ふくべ 藤村正員花押
ノンカウ赤 鶴ノ画 箱原叟
了入 朝日形
光悦写雀の子 宗乾作
乾山 甲ニ玉川ノ図
光琳蒔絵 神垣ノ図
志野

【表1-6-3】 釜 (4)

古芦屋真形 松竹梅
芦屋霰 眞形
芦屋 くづ屋形
芦屋
芦屋寫
天猫作平
天猫広口
天猫車軸
天猫眞形
天猫富士形
天猫霰丸
天猫作 霰丸
天猫丸 霰 銘をだれ
天猫霰
天猫霰肩衝

【表1-6-4】 香合 (4)

染付小丸
染付橋杭
染付 玉章
染付丸
染付
甲と虫 青貝
青貝 団扇
青貝
橙
ふくべ
時代藤ノ実 甲ニ青貝ニテ虫
籠地 笛吹 船乗 人物
漆塗丸牡丹
タガヤサン丸
黒丸 甲ニ象牙ニテ文字アリ
立唄 一筋ナダレアリ
独楽平
独楽宝珠
桃
存置 木瓜形
存置 甲ニ虫
存置丸 栗ニ猿ノ模様

【表1-6-4】 香合 (3)

交趾笠井 蓋 長入
南京染付丸
新渡 張子牛
唐物籠地丸
唐物丸 青貝文字アリ
唐物柚
唐物黒丸
唐物 独楽
古染付 蛤海老藻畫
呉須八角
呉須染付 銀杏
青磁犬鷹
青磁木魚
青磁厂
青磁
染付 張子牛寫
染付桃
染付開扇
染付鯉桶 陽柳觀音像模様アリ
染付 トキン茄子
染付 まりはさみ
染付桜手

【表1-6-4】 香合 (2)

唐津角 甲ニ鹿
備前布袋
伊賀カラン 箱原叟
信楽花籠形
信楽ガラン
大樋焼角足付 仙叟判アリ
栗田焼 藤の実
薩摩焼丸 猩々ノ図
黒根来 藤の実
朱根来 小食籠
朱根来丸
鎌倉菊形
鎌倉彫
鎌倉藤の実形
鎌倉
交趾
交趾鴨
交趾荒磯
交趾笹蟹
交趾狸
交趾中丸 甲ニ牡丹
交趾黄

【表1-6-5】 茶入 (2)

広沢手 宗和侯箱書付
瀬戸八幡手肩衝 銘 筑羽根 小堀篷露箱 書付
古瀬戸寸切
古瀬戸 肩衝
古瀬戸 耳付
古瀬戸 一重口
古瀬戸
瀬戸肩衝 落穂手
瀬戸大覚寺手 不昧公銘 山吹 箱書小堀権十郎
瀬戸?啄斎書付 銘山家
瀬戸耳付
瀬戸耳付 箱書付 銘福祿寿
瀬戸生鼠手
瀬戸生鼠手 肩衝
瀬戸翁手
瀬戸丸 肩衝 銘時雨
利休好 瀬戸ズン切
瀬戸
伊賀肩衝
唐津長
高取瓢箪 源十郎作共筒
備前釜形 銘郭公 仙叟書付

【表1-6-5】 茶入 (1)

名称
萬右衛門作 肩衝
新兵衛作肩衝
江存作 瓢箪
小堀権十郎手造 一閑文入
不入張祓 瓢箪
仁清鬻首
仁清
源十郎 尻張
習々斎手張 銘おみなし
藤四郎耳付 箱書付宗和侯
藤四郎耳付
ノンコウ 赤肩衝
源十郎肩衝
源十郎
源十郎作
藤四郎 春慶
宗伯作
仁清瓢箪
玉川手 芋の子
大津手肩衝
翁手 篷雪書付

【表1-6-6】 棗 (1)

名称
盛阿弥作尾張棗 箱書小堀権十郎
一閑張スングリ 不昧公作
宗友書付梅の木 戸沢左近作
一閑茶桶
一閑雪吹
元伯手張 一閑菊ノ模様
碌々斎好 山中作 雪吹
盛阿弥作 大棗
盛阿弥中次
盛阿弥中棗
道志作 中棗
道志作 菊黒蒔絵棗
五郎作棗
藤重作 中次
仙叟好 手造
遠州判中棗
小堀権十郎好 溜吹雪
宗甫花押 中棗
不昧公好 松風棗 歌アリ
利休時代棗 随流判喰違ヒトアリ
利休時代中棗 随流判 喰違ヒトアリ

【表1-6-5】 茶入 (3)

備前
伊部
薩摩 肩衝
薩摩瓢箪 箱書不昧公
薩摩丸 肩衝
薩摩
南蛮ルイ座
嶋物茄子
島モノ茄子
翁手
生鼠子 肩衝
ライ盆荘リ 玉柏手
時代 黒薬器
時代黒 薬器
御紋雪吹
雪吹
雪吹 銘福寿海
福寿海
蒔絵蝶
銘茶摘ミ
絵 高兼平



【表1-6-6】 棗 (3)

宗拙判大棗
面中次 福寿海トアリ
豊前上野焼 肩衝
古瀬戸 一重口
古瀬戸筒
シマモノ 手瓶
朝鮮ルイ(木偏に晶)茶 箱 松平備前守
染付
竹の棗
竹木棗
□つ竹 中次
茶箱入 笹蒔絵棗
嵯峨時代 蒔絵棗
時代嵯峨棗
蝶蒔絵中棗
時代蝶蒔絵棗
溜塗 高台寺蒔絵
時代蒔絵 平棗
若松蒔絵棗
玉蒔絵薬器
蒔絵薬器
蒔絵蝶

【表1-6-6】 棗 (2)

利休時代 中棗 随流判アリ
利休棗 元伯極付 箱了々斎 銘 影法師
利休判アリ小棗 箱書付元伯宗旦
利休中棗
元伯判中棗
黒引溜 元伯判
元伯好 木地平棗
雪吹 宗旦判アリ
碌々斎 中棗
随流銘雪吹
随流好 中棗
中棗 随流判アリ
平棗 随流判
随流判 小棗
仙叟判 中棗
泰叟 中棗
寸切 如心斎
備前玄々斎書付 箱?啄斎
駒トメ写 玄々斎
石叟公好 面取平棗
直斎仁和寺棗
溜塗駒トメ丸棗 竹叟書付

【表1-6-7】 茶碗 (1)

名称
三斎公手造 赤楽
如心斎手造 赤楽
庸軒手造 赤楽判アリ
南宗寺伝来 長次郎黒
長治郎作 銘初手造 覚々斎箱 外箱了々斎 長次郎
黒筒 長次郎 箱書元伯 銘 楓葉
ノンカウ升
ノンコウ 黒平
一入黒小服 イビツ 銘弓張月
替茶碗 一入赤
宗入赤
茂三
替茶碗 玉水弥兵衛 黒
替 玉水黒
如心斎 銘 雫
?啄斎手造黒 銘みの亀
替茶碗 習々斎手造 四方口面取
替 習々斎 面取
替茶碗 習々斎手造
不白手造 黒

【表1-6-6】 棗 (4)

溜吹雪
紋吹雪
黒雪吹
銘雪吹
青貝薬器
時代黒 薬器
黒薬器
薬器
寸切
五郎大棗
秀次中棗
御蔵帳写 唐木寸切
時代中次
時代黒棗
時代黒 面中次
詩中次
亀甲 四方張
朱桐棗
独楽
薬罐
朱 茶桶
寒雲棗
小棗

【表1-6-7】 茶碗 (3)

雲州焼
雲州焼 片身替
雲州焼 片手替
替 雲苧焼
朝日焼
伊羅保 箱書佐久間将監
古伊羅保 われ 箱書江月
伊羅保
織部 黒
織部黒
信楽花橘寫 宗中箱書
絵高麗写 慶入作焼オロシ
高麗片手
高麗半ス 箱金森宗和
斗々や 銘津守
斗々や
替茶碗 御本三島寫
新御本三島寫 唐津われ
三作三島 中服
三島平
手井戸
井戸

【表1-6-7】 茶碗 (2)

且入 志野寫
替茶碗 一元 光悦寫
井戸松花堂 銘 住吉
替茶碗 角倉焼仁清寫露
替茶碗 角倉焼 天目
熊川平 角倉焼 天目
古萩 筆洗
古萩
古萩片口
替茶碗 古萩
替 古萩
萩焼
高麗寫萩焼
萩焼
天目 瀬戸・天目台 唐物台
瀬戸唐津 小服 銘 皮鯨
古唐津
替茶碗 唐津
唐津中服 信楽
替茶碗 唐津ワレ
替茶碗 唐津
替 雲州

【表1-6-7】 茶碗 (5)

御本 後井戸脇
砂御本 大服
砂御本
新御本 三島
替茶碗 新御本
御所丸
刷毛目
刷毛目 道八作
人形手
安南
唐物桃
[茶?] 片手鉢ノ手
柿のへタ 銘京極
天目茶碗
片手
番匠呉須
端反

【表1-6-7】 茶碗 (4)

井戸 箱小堀大膳
井戸小服
井戸脇小服 小堀大膳箱書
脇井戸
井戸脇 ワレ
後井戸脇
そば
蕎麦
蕎麦 重ネ茶碗
ソバ台點 台朱花形
端反 半ス
半寸われ
ハンス ハタワリ
半寸
熊川 小服
熊川
絵御本 割高台
弥兵衛作 御本 箱書付不昧公歌アリ
替茶碗 御本立鬻
御本筒 茂三手
御本
絵御本

【表1-6-8】 薄茶碗 (3)

面取
高麗
唐津
御本筒
尾戸焼 雲靄寫
井戸脇
新朝日
朝日焼
新御本ヒラ
萩片口
黒楽
後井戸脇
御本 立靄
斗々や

【表1-6-8】 薄茶碗 (2)

黒赤 竹叟手造 銘 鶴亀
仁清平
仁阿弥 黒平
赤楽手造 不見斎 銘 恵比須
黄瀬戸 角
古薩摩
井戸小服
呉器 小服
古唐津 小服
古唐津
薩摩焼
唐津小服
紅葉 半洲
斗々や 小服
露山焼
唐津三島
唐津小服
雲州焼
古萩
比良焼筒
雲州焼 片身替リ
角倉焼仁清寫露

【表1-6-8】 薄茶碗 (1)

名称
習々斎手造 銘一曲
長次郎作 独楽形
長次郎 黒筒
長次郎 黒
ノンカウ 四方
ノンコウ 赤筒 原叟書付 銘 光明
一入黒 手造
一入黒 銘 落葉
一入黒
左入黒
了入作黒 銘松島
了入黒
左入 黒
了入黒
旦入 黒ヒラ
旦入 赤
道八作 富士
道八
茂三
黒楽 玉水作
一元黒

【表1-6-9】 茶杓 (2)

原叟共筒 銘早馬
原叟共筒 八幡竹ニテ作ル
原叟作 銘花の香
原叟作 銘鳴戸
如心齋共筒
如心齋 銘早蕨
如心齋作 牛の子ニ踏まるな庭の蝸牛 角ありてとても頼みそ
碌々齋共筒 銘慈童
碌々齋 共筒
仙叟共筒 銘みどり
仙叟 銘月迫 箱一燈
玄々齋作 銘松風
一翁共筒
文椒宗守共筒 銘龍宝
清水道竿作 共筒 無銘
遠叟公作 銘 白菊
遠州作 銘春風
宗甫公作 銘 時雨
宗甫公作共筒 銘落紅葉
宗甫公手造 箱書付共 無銘共筒
甫公共筒

【表1-6-9】 茶杓 (1)

名 称
凡鳥共筒 銘 歌 すなほなる
凡鳥作 銘 歌
凡鳥 歌銘
習々齋作 銘うたゝね
習々齋作 象牙
習々齋作
貯清齋作共筒 銘次郎冠者
貯清齋作 銘丹頂鬮
貯清齋 銘ひな鬮
貯清齋作
利休作 元伯筒
利休手造 無銘
道安作 共筒
少菴 無銘 箱仙叟 賛筒如心齋
少菴作 筒随流
宗旦作 銘マダラ
元伯共筒 銘 靈山
元伯作 筒古織
宗旦作 銘松風
江岑共筒 銘白衣
江岑作 銘柴の菴

【表1-6-9】 茶杓 (4)

甫竹共筒
村田一斎共筒
光琳作共筒
一曜斎共筒 銘ムチ
三宅亡羊共筒 早蕨ノ歌アリ
象牙
真塗
太郎冠者
御所清涼殿 呉竹
宗全作共筒
一翁共筒
次郎太郎

【表1-6-9】 茶杓 (3)

甫公作 無銘
宗中作 筒宗慶
宗中手造
宗中作 無銘
宗中作
小堀宗本共筒 銘 松風
宗本作 銘 郭公
宗本作
小堀権十郎作 筒 青木習々斎
小堀権十郎手造 銘鳩杖
小堀篷雪作
瀬田掃部寫 政安作
金森宗和作 無銘
不昧公作
古田織部作
三斎公作 共筒
江月和尚手造 筒大心和尚
江月和尚手造
松花堂共筒
甫竹作 青木宗鳳筒 銘 昔話
甫竹 筒如習斎 銘昔話
甫竹筒 如習斎

【表1-7-1】 掛物（作者別 使用会数）

作者別	会数	備考	作者別	会数	備考
<b>武家－小堀家</b>			相国寺派	1	
小堀 遠州	19		大応派	1	
権十郎	3		曹洞宗	1	
宗友	4		日蓮宗	1	
宗中	2		学僧	4	
<b>武家－小堀家以外</b>			禰宜	6	
松平 不昧	3		<b>絵師</b>		
片桐 石州	1		同朋衆	1	
古田 織部	1		土佐派	4	
萩翁	1	林良本（松本藩）のことカ	狩野派	5	
<b>茶人</b>			琳派	1	
青木宗鳳公園	1		浮世絵師	1	
珠光系	6		中国画師	1	
千家	6		<b>藩知事</b>		
表千家	2		明石藩知事 嵩翁	1	松平直致
賣茶翁高遊外	1		<b>文人</b>		
<b>公家</b>			北村 季吟	1	
<b>僧侶、学僧、画僧、禰宜</b>			石川 丈山	1	
臨濟宗大徳寺派	35		不詳	7	
			計	132	



【表1-7-5】 釜 (作者別)

作者	会数
大西家	21
江戸大西家	2
京都名越家	8
京都名越家下間家	5
西村家	15
京都西村家	5
宮崎家	11
辻家	6
不詳	54
計	127

【表1-7-6 (1)】 釜 (形状別)

形状	会数
丸	12
平	11
真形	8
手取	8
大広口	7
東陽坊	6
車軸	6
尻張	5
富士	3

【表1-7-3】 花生 (作者別)

作者	会数
武家-小堀家	15
-小堀家以外	4
公家	5
茶人-青木宗鳳家	1
-千家	6
-表千家	5
-裏千家	7
文化人	8
不詳	40
計	91

【表1-7-4】 花生 (素材別)

素材	会数
竹	53
瓢箪	1
籠	4
陶器	20
古銅	1
砂張	1
唐金	1
不詳	10
計	91

【表1-7-2】 掛物 (種類別)

種類名称	会数
和歌	14
詠草	2
消息	23
詩	1
俳句	4
法語	1
記	1
道歌	2
日本墨蹟	42
中国墨蹟	0
日本画	33
中国画	1
不詳	8
計	132

【表1-7-8】香合（素材別）

素材	会数
瓢箪	4
鉄刀木	2
堆朱	1
根来	3
鎌倉彫	1
青貝	3
蒔絵	1
蛤	1
橙	1
陶器	19
不詳	77
計	113

【表1-7-7】香合（作者別）

作者	会数
武家－小堀家	5
－小堀家以外	4
茶人－珠光系	3
－千家	1
－裏千家	1
－庸軒流	2
千家十職	2
武家系塗師	2
文化人	3
不詳	90
計	113

【表1-7-6(2)】釜（形状別）

形状	会数
雲龍	3
百会	3
尾垂	3
阿弥陀堂	3
切掛	2
四方	2
四方口	2
平	2
ふとん	2
鶴首	2
肩衝	1
切	1
葛屋	1
立瓜	1
乙御前	1
達磨堂	1
不詳	31
計	127

【表1-7-11】 棗 (作者別)

作者	会数
武家－小堀遠州家	2
－小堀家以外	0
茶人－青木宗鳳家	1
千家十職	3
塗師	8
文化人	0
不詳	96
計	110

【表1-7-10】 茶入 (形状別)

形状	会数
肩衝	12
雪吹	9
耳付	8
翁手	7
瓢箪	5
鬮首	5
生鼠手 (生海鼠手のことカ)	4
茄子	2
薬器	2
寸切	2
尻張	1
長	1
一重口	1
釜形	1
播座	1
丸	1
玉川手	1
大覚寺手	1
広沢手	1
玉柏手	1
不詳	19
計	85

【表1-7-9】 茶入 (作者別)

作者	会数
武家－小堀権十郎家	1
－小堀家以外	0
茶人－青木宗鳳家	1
千家十職	1
陶工	18
塗師	1
不詳	63
計	85

【表1-7-13】茶碗（作者別）

作者	会数
武家－小堀家	0
－小堀家以外	2
千家十職	11
茶人－青木宗鳳家	3
－千家	0
－表千家	3
－裏千家	0
－庸軒流	1
－不白流	1
陶工	5
文化人	1
不詳	113
計	140

【表1-7-12】棗（形状別）

形状	会数	形状	会数
薬器	17	仁和寺棗	1
中棗	16	面中次	1
雪吹	8	肩衝	1
寸切	6	一重口	1
中次	6	筒	1
吹雪	4	寒雲棗	1
平棗	4	四方張	1
大棗	3	独楽	1
小棗	3	薬鐘	1
茶桶	2	シマモノ	1
駒トメ	2	播茶	1
利休棗	1	不詳	26
尾張棗	1	計	110

【表1-7-16】薄茶碗（産地別）

国産地	会数
樂焼	25
国焼	27
高麗	11
ベトナム	0
中国	0
不詳	3
計	66

【表1-7-15】薄茶碗（作者別）

作者	会数
武家－小堀家	0
－小堀家以外	0
千家十職	17
茶人－青木宗鳳家	1
－千家	0
－表千家	0
－裏千家	0
－庸軒流	0
－不白流	0
陶工	8
不詳	40
計	66

【表1-7-14】茶碗（産地別）

産地	会数
樂焼	16
国焼	47
高麗	69
ベトナム	1
中国	1
不詳	6
計	140

【表1-7-18】茶杓（材質別）

材質	会数
竹	55
象牙	8
不詳	58
計	121

【表1-7-17】茶杓（作者別）

作者	会数
茶人	
青木宗鳳家	31
千家－利休系	9
－表千家	11
－裏千家	6
－武者小路千家	2
石州流清水派	1
武家	
小堀遠州家	26
小堀権十郎家	4
小堀家以外	5
僧侶、学僧	
臨濟宗大徳寺派	2
茶杓師	5
文化人	4
不詳	15
計	121

【表1-7-16】薄茶碗（産地別）

国産地	会数
樂焼	25
国焼	27
高麗	11
ベトナム	0
中国	0
不詳	3
計	66

【表1-8】大庭屋平井家文書『遠州流茶道傳授控』より、門人と傳授状況

【表1-8】大庭屋平井家文書『遠州流茶道傳授控』より、門人と傳授状況

点前名 門人名	炉風呂炭	濃茶長緒	濃茶後薄	濃茶仕籠 茶筌荘	濃茶茶器 帛紗包	濃茶	二種點	入子茶 坑	重茶坑	壺飾	外題飾	茶通箱	唐物點	台點	二重點	茶筌台	柴火棚 盃扱	濃茶台 點	濃茶台 二種點	濃茶台 茶坑	濃茶入 子茶坑	濃茶茶 筌台	
藤原おきぬ												M20.2.6											
田中おるい												M20.6.18											
毛利 為三		M22.5.1	M22.5.1	M22.5.1	M22.5.1		M22.5.1																
備中 於鶴		M22.5.1	M22.5.1	M22.5.1	M22.5.1												M22.5.1	M22.5.1	M22.5.1	M22.5.1	M22.5.1	M22.5.1	M22.5.1
竹内 文子		M23.2.6 (小習五ヶ条)						M23.5.6	M23.5.6	M23.5.6					M23.5.6		M23.5.6						
田中 咲子	M28.5.1	M27.10.11		M27.10.11	M27.10.11			M28.5.1	M28.5.1					M29.6.3		M28.5.1							
吉益 寿枝						M30.4.1 (茶道拾二カ条)							M32.4.1	M32.4.1									
小國寿恵子						M30.4.1 (茶道拾二カ条)							M32.4.1	M32.4.1									
小國 その						M30.4.1 (茶道拾二カ条)																	
吉村あい子						M30.4.1 (茶道拾二カ条)																	
土留知仍子						M30.4.1 (茶道拾二カ条)								M32.4.1									
高安千代子						M30.4.1 (茶道拾二カ条)							M32.4.1	M32.4.1									
吉岡 け以子													M32.4.1										
山田 照子						M33.4.1 (茶道拾二カ条)																	
秋山 春子						M33.4.1 (茶道拾二カ条)							M35.04	M35.04									
田邊勢以子						M33.4.1 (茶道拾二カ条)							M35.04										
柴原しの子						M33.4.1 (茶道拾二カ条)																	
田中定治郎						M34.3.1 (茶道拾二カ条)							M37.03										
稲井 春栄						M34.04 (茶道拾二カ条)							M35.04										
菱川 久子						M34.04 (茶道拾二カ条)																	
大橋 伴子						M35.04 (茶道拾二カ条)							M37.03										
塩川 仲子						M35.04 (茶道拾二カ条)																	
高木 さは子						M35.04 (茶道拾二カ条)																	
桑原寿美子						M37.03 (茶道拾二カ条)							M35.04	M35.04									
松田 節子						M37.03 (茶道拾二カ条)							M37.03										
寺谷 幾子						M37.03 (茶道拾二カ条)																	
南 よし子						M37.03 (茶道拾二カ条)																	
高木 敬子													M37.03										
原田美津子						M39.12 (茶道拾二カ条)							M39.12	M40.01									
藤田 ふく子	M42.01 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
尾木希寸子	T02.12 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
山田 芳江	T02.12 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
尾木びわ子	T02.12 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
川合あ以子	T02.12 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
山田 臣枝	T02.12 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
後藤八重子	T02.12 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
三上 をと子	T02.12 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
芦田千代子	T02.12 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
三上 よし子																							T03.05
三上 きく子																							T03.05
高木 とみ子																							T03.05
山田巫枝子																							T03.05
山田 鈴江	T03.12 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
塩太 昌生	T03.12 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
ト半 充子	T03.12 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
長里て以子	T03.12 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)													T05.10									
天木 春子	T05.10 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
八良石	T05.10 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
中野津た子	T05.10 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
森 可津	T05.10 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
今里 まき	T05.10 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						
畑野らん子	T05.10 (「小習相傳候」とあり、この五ヶ条の事力)																						

点前名 門人名 (学校茶道)	風炉薄 茶左右	風炉薄 茶炭左 右	風炉濃 茶左右	茶器帛 紗包	仕籠茶 筌荘
田中 花子			M20.9.29		
田村勢以子			M20.9.29		
松山 倉子			M20.9.29		

点前名 門人名	唐丸盆點	古子櫻 真惣行 儀
尾木希寸子	T05.10	
木村 顕子	T05.10	
森 可津子	T05.10	
今里 ます	T05.10	
三上 よし子	T05.10	
三上 キト	T05.10	
天木 春子	T05.10	
石崎喜登子		T11.10

凡 例

1. 門人の氏名は新字体に直した。
2. 伝授日の「M」は「明治」を「T」は「大正」を表す。
3. 「台點」から「濃茶茶筌台」までは、該当者のみの門人名を記している。
4. 伝授日の斜体字(田中咲子の欄)は、「濃茶」か「薄茶」かについて不詳であることを示す。

以上

【表2-1】 本居信郷著『会席附』の年月別茶会記数 (1/3)

年	月	自会	他会	不詳	合計	年	月	自会	他会	不詳	合計	年	月	自会	他会	不詳	合計	年	月	自会	他会	不詳	合計
寛政 3	1	0	1	0	1	安政 4	閏5	0	4	0	4	安政 6	不詳	0	2	0	2	文久 2	9	0	1	0	1
	閏2	0	1	0	1		6	0	2	0	2	不詳	不詳	0	1	0	1		10	0	2	0	2
不詳	閏2	0	1	0	1		9	0	3	0	3	安政 7	2	0	2	0	2		11	0	1	0	1
寛政 6	1	0	1	0	1		10	0	4	0	4		閏3	0	2	0	2		12	0	1	0	1
嘉永 2	4	0	1	0	1		11	0	2	0	2		4	0	1	0	1		不詳	0	0	0	0
	閏4	0	1	0	1		12	0	1	0	1		5	0	1	0	1	文久 3	1	0	2	0	2
	8	0	1	0	1		不詳	0	0	0	0	万延元	閏3	0	1	0	1		4	0	2	0	2
	9	0	1	0	1	安政 5	1	0	2	0	2		4	0	1	0	1		8	0	1	0	1
	10	0	2	0	2		3	0	2	0	2		5	0	1	0	1		9	0	1	0	1
	11	0	5	0	5		4	0	3	0	3		9	1	1	0	2		10	0	1	0	1
嘉永 5	9	0	1	0	1		5	0	3	0	3		10	0	3	0	3		不詳	0	0	0	0
	11	0	1	0	1		10	0	1	0	1		不詳	0	1	0	1	元治元	1	0	1	0	1
安政 2	3	0	2	0	2		11	0	3	0	3	文久元	1	0	1	0	1		2	0	1	1	2
	9	0	1	0	1		12	0	1	0	1		閏1	0	2	0	2		3	0	2	0	2
	10	0	2	0	2	不詳	不詳	0	2	0	2		2	0	3	0	3		4	0	2	0	2
安政 3	4	0	2	0	2	安政 6	1	0	7	0	7		4	0	3	0	3		5	0	1	0	1
	8	0	1	0	1		2	0	4	0	4		5	0	1	0	1		10	0	2	0	2
	10	0	6	0	6		3	0	4	0	4		8	0	1	0	1		不詳	0	0	0	0
	11	0	2	0	2		4	0	1	0	1		9	0	1	0	1	元治 2	2	0	4	1	5
	不詳	0	5	0	5		5	0	3	0	3		10	0	1	0	1		4	0	2	0	2
安政 4	閏1	0	1	0	1		9	0	4	0	4		12	0	1	0	1		5	0	1	0	1
	3	0	2	0	2		10	0	2	1	3		不詳	0	0	0	0		8	0	1	0	1
	4	0	2	0	2		11	0	4	0	4	文久 2	閏2	0	1	0	1		10	0	1	0	1
	5	0	4	0	4		12	0	1	0	1		4	0	2	0	2		11	0	1	0	1

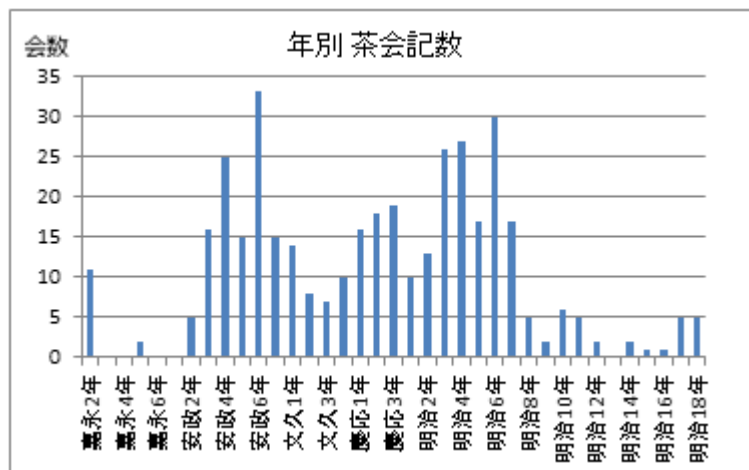
( 続く )



【表2-1】 本居信郷著『会席附』の年月別茶会記数 (2/3)

年	月	自会	他会	不詳	合計	年	月	自会	他会	不詳	合計	年	月	自会	他会	不詳	合計	年	月	自会	他会	不詳	合計
	不詳	0	0	0	0	明治元	2	0	1	0	1	明治4	1	0	3	0	3	明治6	1	0	3	0	3
慶応元	8	0	1	0	1		3	0	1	0	1		2	0	5	0	5		3	0	4	0	4
	10	0	1	0	1		閏4	0	3	0	3		3	0	1	0	1		4	0	4	0	4
	11	0	2	0	2		10	0	2	0	2		4	0	3	0	3		5	0	4	0	4
	不詳	0	1	0	1		11	0	1	1	2		5	0	2	0	2		6	0	2	0	2
慶応2	4	0	1	0	1		12	0	1	0	1		6	0	1	0	1		8	0	2	0	2
	5	0	1	0	1		不詳	0	0	0	0		7	0	1	0	1		9	0	1	0	1
	6	0	1	0	1	明治2	2	0	7	0	7		8	0	2	0	2		10	0	2	0	2
	閏6	0	1	0	1		3	0	2	0	2		9	0	1	0	1		11	0	6	0	6
	9	0	8	1	9		10	0	1	0	1		11	0	2	0	2		不詳	0	2	0	2
	10	0	2	0	2		11	0	1	0	1		12	0	4	0	4	明治7	1	0	3	0	3
	12	0	2	0	2		12	0	2	0	2		不詳	0	2	0	2		2	0	1	0	1
	不詳	0	1	0	1		不詳	0	0	0	0	明治5	2	0	2	0	2		4	0	3	1	4
慶応3	1	0	5	0	5	明治3	1	0	2	0	2		3	0	1	0	1		5	0	3	0	3
	2	0	2	0	2		2	0	4	0	4		4	0	1	0	1		6	0	2	0	2
	3	0	3	0	3		3	0	3	0	3		5	1	1	0	2		10	0	2	0	2
	4	0	2	0	2		4	0	1	0	1		6	0	1	0	1		11	0	2	0	2
	5	0	1	0	1		6	0	1	0	1		8	0	2	0	2		不詳	0	0	0	0
	6	0	2	0	2		7	0	1	0	1		9	0	1	0	1	明治8	4	0	1	0	1
	7	0	1	0	1		9	0	3	0	3		10	0	3	0	3		5	0	1	0	1
	9	0	1	0	1		10	0	1	0	1		11	0	3	0	3		6	0	1	0	1
	10	0	1	0	1		11	0	3	0	3		不詳	0	1	0	1		8	0	1	0	1
	不詳	0	1	0	1		12	0	4	0	4								10	0	1	0	1
							不詳	0	3	0	3								不詳	0	0	0	0

( 続く )



【表2-1】 本居信郷著『会席附』の年月別茶会記数 (3/3)

年	月	自会	他会	不詳	合計	年	月	自会	他会	不詳	合計
明治9	2	0	1	0	1	明治17	4	0	3	0	3
	3	0	1	0	1		5	0	1	0	1
	不詳	0	0	0	0		11	0	1	0	1
明治10	1	0	1	0	1		不詳	0	0	0	0
	2	0	1	0	1	明治18	6	0	2	0	2
	3	0	1	0	1		11	0	1	0	1
	5	0	1	0	1		12	0	2	0	2
	10	0	1	0	1		不詳	0	0	0	0
	11	0	1	0	1						
	不詳	0	0	0	0						
明治11	4	0	1	0	1						
	6	0	2	0	2						
	9	0	2	0	2						
	不詳	0	0	0	0						
明治12	1	0	1	0	1						
	11	0	1	0	1						
	不詳	0	0	0	0						
明治14	1	0	1	0	1						
	不詳	0	1	0	1						
明治15	5	0	1	0	1						
	不詳	0	0	0	0						
明治16	5	0	1	0	1						
	不詳	0	0	0	0						

【表2-2-1】 本居信郷著『會席附 式番』

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓	
1	裏	他	安4	3.19	玄伯宗旦追慕百会 茶之湯	又隠 後座 咄々齋 寒雲亭 今日庵	玄々齋		元伯宗旦肖像 清岩和尚今日庵染筆大横物 長谷川久蔵祇園会長刀鉾画 信長公羽利休拝領十二枚之内 元伯自筆道号 元伯遺書一軸	宗旦作銘元室坊	雲龍古浄味作 阿弥陀堂 与次郎作	宗旦好所持糸巻形 仙叟好伽羅之木 ト>ヤ ノンカウ作黒	赤平ノンカウ作 東福門院様物仁清焼 東福門院様御物貝桶	東福門院様物仁清焼 東福門院様御物貝桶	宗旦作銘松風 宗旦室宗見女作 銘 静	
2	裏	他	安4	3.10正午	盛功庵茶事		深津宗味	長井嘉左衛門 小野 林静 坊 親子	天室和尚一行 堅見雲起時	玄々齋一重 銘長壽柱	古天猫車軸	初代大樋嶋臺	人形手	時中焼	又玄齋 箱玄々 銘 花	
3	裏	他	安4	5.26正午		六疊敷	弥一郎	自分 吉川佐渡守 長谷川治郎兵衛 常念寺 永原	無学和尚一行物 孤松却之他間時流	伊部置	九兵衛作ワタレ	堆朱丸タルマ	【替茶碗】新朝鮮	一燈手造黒	不見齋作供筒 銘 青山	
4	表	他	安4	同29日正午		四疊半	長谷川治郎兵衛	自分 長谷川元之助 同 熊藏 口川登 道々々勘七	沢庵和尚 不二画賛横物	玄々齋武重	九兵衛作小丸釜	堆朱紅地花形	片手	志とろ焼	竺叟宗乾作 銘カタヤ口	
5	表	他	安4	閏5.5正午	於八疊敷薄茶順茶		吉川佐渡守	我尔 長井嘉左衛門 久世弥一郎 長谷川三甫 同 治郎兵衛 同 元之助 小津与兵衛門 繼松寺 吉川佐渡守	烏丸光廣短冊	破々齋手付籠 唐物写	尾州様御物写 裏金釜	唐物貝	一入黒 【替茶碗】井戸脇	溜中次	不味公御作筒ニ 田井口トアリ	
6	表	他	安4	4.26正午	不審庵	不審庵 残月亭		千宗室 イセ 長谷川六有 加州 宮崎宗口	石川丈山詩 龍虎式幅画尚伝筆	元伯作銘山吹	寒雉作尻張 道也作角	江岑好木地丸 利休形梅鉢	瀬戸唐津 呉器	江岑中裏	覚々齋作銘早馬 象牙	
7	裏	他	安4	5.3正午		三疊臺目	土橋宗齋	玄々齋 宗味 宗与口	玉丹和尚之文	伴翁宗左三重切	浄味尻張	堆朱丸	ソバ	宗旦在判小裏	碌々齋宗左作	
8	表	他	安4	閏5.21正午		塩屋町下屋敷六畳	長井嘉左衛門 順茶	我尔 小津与兵衛門 吉川佐渡守 久世弥一郎	紫野大龍和尚一行物 夏雲多奇峰	原叟作置筒 銘奈知の瀧	古浄味丸釜	ヤシ写ケヤキノ木地	フニ熊川	大裏	玄々齋作 銘 屋遠ケ記	
9	表	他	安4	5.13正午		長生庵	宗幽		蒲生克秀詠草	如心齋作二重切 銘不出来	天猫作 真形	時代四方 菊之蒔絵アリ	一入作黒 銘深ミドリ	瀬戸葉師焼	覚々齋作	
10	武者	他	安4	閏5.25正午	大徳寺茶	六疊敷		自分 岡寺 流玄寺 常念寺	大徳寺宙宝和尚 波画賛	青磁筒			朝鮮イラホ	瀬戸いもノ子	宗旦作	

【表2-2】 本居信郷『會席附』

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
								山中屋伝兵衛							
11	速水	他	安4	同1.5朝茶	速水宗寛茶事	三疊臺目		玄々齋 六有 宗味 近衛	雅章御懐紙	古田瀬戸一重切	□□裏甲	□官齋ヨリ 楽隠の巢	高麗	古瀬戸耳付	宗達作 銘和気
12	裏	他	安4	同5.7正午		三疊臺目	栗田元竺	古筆了仲 長谷川六有 鳩居堂主人 柴崎年次郎	利休文	宗旦作銘コハタシ	寒雉真形り	黒丸平根来	ト>ヤ	仁清カメ	舟越共筒
13	裏	他	安4	4.22正午	広辻氏皆伝祝茶事	松戸	通玄齋		後西帝姫宮 宝鏡寺文御筆	玄々齋好	天明作霰	唐物 元伯在判	御本	徳大寺威磨御自作	象牙
14	不詳	他	安4	6.2茶	竹屋忠兵衛茶事			長谷川六有 栗田喜十郎	遠州様文	宗全籠自作		長角保ら付	粉引	棗	一夢作共筒
15	裏	他	安4	同17	栗田元竺茶事			鈴木銀三郎 海すや茂左衛門 袋師 友湖	古織侯文句入	唐もの籠手付	寒雉雲龍	沈金手箱	長次郎黒	成阿弥大棗	啖啄齋作 彫銘 月影
16	裏	他	安4	9.6正午				宗味 治郎兵衛 嘉左衛門 勘七 道庵	天庵和尚横物 葉雨	桂籠	少庵好巴	イタヤ貝	古萩 【薄茶碗】半使	古宗哲大棗	一阿弥作共筒
17	(遠州)	他	安4	9.29正午	田中屋			我尔 大徳寺 □新吉	月	金銅	九兵衛作 ルイサ	一入作赤	志野	瀬戸耳付	金森宗和
18	裏	他	安4	10.10	菓子茶	四疊半	長谷川元之助	我尔 丹羽正三郎	応挙作 不味侯瀧	朝鮮唐津	了保作 万代屋	高取丸	伊ら保	高取丸	一燈作 銘花野
19	武者	他	安4	同12日正午	常兵衛隠居			我尔 長井嘉左衛門 長谷川次兵衛	木盤一行	鉄之クシ筒	道該作 ガンクツ釜	左入作赤楽	画御本	瀬戸	真伯宗守作 銘ヲノ頭
20	表	他	安4	同16日正午	長谷川元之助順会茶事	四疊半	長谷川元之助	我尔 小津与兵衛門 長井嘉左衛門 久世弥一郎	欠伸子	堀内不寂齋一重	浄味丸	大極焼	宗入赤	備前	不見齋作
21	表	他	安4	10.9正午		長生庵	堀内宗幽		元伯宗旦立	元伯作尺八	大平丸 時代浄味作	唐津独楽	ノンカウ作	瀬戸	元伯作共筒
22	表	他	安4	9.10正午	江戸向井将監殿名残茶事				東野様自詠短冊御哥	大瓢箪時代	丸 寒雉	小ふくべ	ト>ヤ	利休	宗和侯
23	裏	他	安4	霜月18日正午	長谷川治郎兵衛殿順茶	魚町露滴庵		京 深津宗味 継松寺 長井恵蔵 長谷川元之助 我尔	孝忠短冊	キヤウ筒	利休時代 京作莊兵衛丸	美濃丸	光悦	松山侯 松ヶ根	仙叟作 銘老女
24	表	他	安4	霜月22日正午	元伯宗旦居士式百年遠忌 追慕茶之湯	塩屋町席	同玄齋	我尔 長谷川治郎兵衛 小津与右衛門 長谷川元之助 中屋源助	宗旦筆 大徳寺山門通建之偈	宗旦作二重	宗旦時代 鰐口九兵衛作	東福門院様 御物宗旦拝領貝合蛤 月扇之絵	打彫 伊羅保	柏叟溜小棗	宗旦作共筒 銘挺杖
25	不詳	他	安4	12.13	□田館会録茶事				龍虎 梅竹大字対幅 青蓮院尊朝法親王御筆	青磁礎 大花瓶	小霰丸 初代寒雉	伊部 胴張中合	御出半使	大棗	利休作牙

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
26	石州	他	安5	改 未年3月	井伊掃部頭殿ヨリ田安様へ 就茶道御懐初メ御道々 願不残差且切之由				一休和尚一行 江国春風不吹起	南蛮鮫鱈	浄味 姥口	染付横瓜	新	瀬戸春慶	自作 銘せぬや
					田安様ヨリ御返茶			鶯鳴	□□根 銘大倉	与二郎作 尾垂	交趾鶴亀	長二郎	信楽	三斎侯	
					御新詰太夫尾崎大和守覚刑部 権大輔殿宅まで宗室 御茶 罷下道々			相伴 祐之 宗寿	桂宮様 宗仁親王 二字	唐物竹組	車軸	太平丸	古染付鉢の子 【替茶碗】 サツマ	左甚五郎作	甫竹共筒
27	表	他	安5	安政5.1.18正午	吉川佐渡守順茶	六拾疊敷		我尔 長井嘉左衛門 同 貞藏 道々や宗十郎 星□□		江岑作一重 銘 春日山	天明作 霰釜	蛤のし蒔絵	乾山黒	一入作阿か楽	□斎共筒 銘トノハラ
28	表	他	安5	正月25日正午	市場道々や口助口元服茶事	八疊之屋敷		我尔 小津清左衛門 長谷川次郎兵衛 長井貞藏	江雪一行	文叔置筒 銘 末廣	与次郎作 大千代丸	交趾南瓜	仁清	利大棗	宗二之作 銘龍門
29	江戸千家	他	安6	巳年9.25	江戸川上宗寿茶事	古織房		古筆了仲 鈴木宗栄 山本屋 磯貝素	宗且一行物	古銅経筒	古芦屋作 みそれ膚	青磁スト切	古井戸	宗且小棗	宗且作共筒 銘天晴
30	表	他	不詳	向井将監殿茶事				了仲 宗寿 山路検校 炭屋弥兵衛	道安之像	南蛮 銘チマキ	阿弥陀堂形	青磁井筒	堅手	瀬戸広口手	木下長嘯子
31	裏	他	安5	11.4正午	井筒屋丸井			了仲外三人	日東巖墨跡 雪舟山水一本墨絵	三重切利休判	与次郎阿弥陀堂	ゴス水鳥丸	大井戸	時代棗 蓋ニ菊蒔絵	宗且
32	表	他	安5	霜月23日正午	瓢風庵口楽口切茶事			向井将監殿 了仲	古岳墨跡	長ふくべ石州作	入道寒雉作 瓢箪形	祥瑞	赤楽瓢箪形	古さつまひやうたん	道八作
						困座敷		丸井弥郎左衛門	時鳥之画 探幽筆	青磁ひやうたん形	浄味作 ひやう形		禾目唐つ 【替茶碗】 古さつま焼	遠州好竹	桑の木ひやうたん
33	裏	他	安5	12.13	行国春齋茶事			了仲外三人	松花堂大字横物	青磁キツツキ丸		ありま堂	黒手	古備前	宗且共筒 銘何以
34	遠州	他	不詳		小堀宗中弟子皆伝則中悉覽 〔是迄江戸会記うつし〕			了仲外三人	家隆公竹屋切	青磁簾耳付		唐津焼黒丸形	井戸	古セト	小堀和泉守 銘山城
35	表	他	安6	未 2.21正午	山田中野三太夫殿茶事	三疊中板臺目		我尔 片岡長五郎 横川孫七 橋本徳兵衛 田中裕大夫	宣長 花茗荷		天明真形	交趾ばたん	原叟手造赤	瀬戸耳付	如心共筒宗和トアリ 二本入
36	表	他	安5	卯月3日正午	初会		不審庵碌々齋		利休さらしの文	宗入作小南蛮耳	小尻張 道也作	道安所持	珠光青磁	志の 銘瘦馬	逢源齋作二本入
37	表	他	安5	5.4正午	山田 時斗屋栄助へ	八疊敷		我尔 片岡源兵衛 橋口庵 田中福左衛門 橋尾源七	西行画	即中齋作 尺八 銘橋	道仁作	染付長角	白唐ツ平	高取耳付	紹鷗形
38	裏	他	安5	4.20正午	後后源三郎殿母七十賀祝茶事				斎藤口堂先生一行	釣付ふく瓢	常磐釜	堆朱両面彫	堅手	原叟	玄々齋

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
39	表	他	安5	5.9正午	鎌田 吉祥寺			我尔 長井嘉左衛門 小津清左衛門 小津清之助 竹政	と十々立團画賛	吉左衛門作 クツ舟		宗旦好一閑張	黄瀬戸	備前	宗旦作 銘桐重
40	表	他	安5	4.2正午	山田 中野与太夫茶事			四神官殿 福井左衛門殿 真壁周防殿 因州屋	了々齋一行	一重口一寸	道や作 茶飯釜	交趾牡丹	宗入作黒	黒棗	吸江齋作 銘風流

【表2-2-2】 本居信郷著『會席附 三番』

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
1	表	他	安5	5月16日正午		下屋敷		我尔 小津与右衛門 村田道崇 久世弥一郎 中村屋源藏	一休和尚二行物 【茶湯服掛之開キ薄茶】	少庵作	二代目作	宗旦好一閑張	礼賓三島平 古唐津	瀬戸シブ紙ノ手肩付 時代口扇蒔絵	利休作 一力月
2	石州	他	安5	3月11日			清水道口	井伊侯 仙台侯 小堀大膳侯 御詰 利倉岩佐 杉田久衛門	【御茶席】 東山殿懷紙	一重切石州侯作	あしや	万曆手製	玉子ノ手	野田手	利休
3	表	他	安5	10月23日正午	田中吉郎右衛門茶事	八疊敷	田中屋吉兵衛	我尔 吉祥寺 久世弥一郎 道々や宗十郎 三木三十郎	月口翁一行物	口置	浄玄作 裏甲	仁清作丸		瀬戸	江岑宗左
4	表	他	安5	11月20日夜咄シ	四日市宇佐口茶事	諸會書院		我尔 吉本長八 福谷冲	了々齋一行		了明作ナゲ形	乾山山道	金満片手四方	古中次	一庵作共筒
5	表	他	安6	安政6未正月10日正午		四疊半	長谷川治郎兵衛	我尔 竹内桂郎兵衛 小津太郎左衛門 小津重藏 白塚口口	吸江齋十二才書一行 玄庵十二才書一行	不見齋 置花入	カンチ尻張	ルリ蕪	長二郎作赤 銘春日野	高取	六閑齋共筒
6	表	他	安6	1月22日正午		蔵六居		我尔 林由右衛門 酒井伝右衛門 道々や宗十郎 吉川信濃守	本口和尚一行物	一燈齋二重切 銘 仙人	道や作 尻張	大樋 ツチ	一入作黒	長十郎焼	水戸侯作共筒 銘万口
7	表	他	安6	同25日正午	田中屋吉郎左衛門茶事	二疊大目		我尔 久世弥一郎 小津新兵衛 中屋源藏	玄々齋竹画 玄室八才書讀入横物	新カウチ	与次郎作 針屋釜	口口丸	志野	唐物	江岑宗左
8	裏	他	安6	同26日正午	乾彦兵衛門茶事				不見齋不二画賛	松平様	天明作広口	蛤	今高麗割高台	瀬戸新兵衛	柏叟 銘双松
9	表	他	安6	同25日夜会 正午	宇佐見新八茶事	二疊中板		山中万五郎 麻生礼助 田中長兵衛 加嶋屋口口	江月和尚 江雪和尚両筆 【後座】 英一蝶		芦屋作八角	交趾牡丹丸	志野	希之棗	如心齋共筒
10	表	他	安6	正月5日正午	初会	長生庵 無色軒	至慎齋宗幽		寛々齋寶ふね画賛 二幅対 日探幽筆仙叟写 月周信筆露叟写	了々齋一重銘青山	浄清作瓜形 浄雪作万代屋形	志野焼手鞠 唐物丸	大樋焼 如心齋判雪吹 織部筒 一入黒	啜啄齋	寛々齋 銘千とせ 躰躰
11	表	他	安6	2月11日正午	ノ庵茶事	三疊半		我尔 村田八十吉 村瀬彦之進	二三画讀 利休一行	津り籠	佐兵衛作 ノミノ	吉左衛門作	黒楽 手造物	備前焼	今日庵玄々齋 銘雲湧

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓	
								木地屋伝兵衛 道々や嘉兵衛								
12	裏	他	安6	未12月14日 晚	今日庵茶事	寒雲亭	玄々齋	客九人	冷泉為持卿	仙叟輪なし	大万代屋 与次郎作	呉洲赤絵	ノンカウ赤筒	古瀬戸大海	□松鎌掬用	
									【中立】				〔薄茶碗〕南蛮鉄絵			
13	表	他	安6	正月5日ヨリ初会 同十八日ヨリ道口移		長生庵	至慎齋宗幽		如心齋筆	了々齋作一重 銘 春山	九兵衛作 姥口小丸	志野焼手毬	高麗	啐啄齋手造赤	随流齋作	
						開キ広間 無色軒			二幅対 日探幽筆仙叟写 月周信筆露叟写		静精作瓜形	交趾 から口	覚々齋好菊桐の雪吹 唐津 一入作黒		蹲踞 今日庵玄々齋削	
14	裏	他	安6	2月29日正午	今日庵茶事	玄々齋		加州客五人 詰 深津宗味	大応和尚一行	常叟二重 銘小長月	寒雉姥口丸	仁清蛤	名物井戸 石州公所持	休大棗	松風	
15	表	他	安6	3月7日正午	野口七太夫茶事	四疊半	七太夫	我尔 青木新兵衛 石井与七 田中屋恵藏 柏屋玄助	津山中納言筆	不寂齋 銘矢橋	定林作 車軸	蛤甲ニ甫松糸	御紋付 御深井焼	サツマ焼	木津宗仙 銘黒籠	
16	裏	他	安6	3月23日正午	初会	貸切庵	宗味	玄々齋宗室 高田源右衛門 宗室 岩佐孫兵衛	大龍和尚 如心齋横物	竺叟細一重	道や作 宝珠形	不見齋手造赤	黄イラホ	盛阿弥作大棗	玄々齋 銘千世の色	
17	不詳	他	安6	3月16日七ツ時ヨリ		栗村舎		水上君両父子 酒井源右衛門 土井又一郎 上井平四郎	□巖和尚一行物 本来無一物		左兵衛作 小尻張	伊賀焼橙	仁清作	黒棗	竹 不作知	
									【後座】 床前二同				不白手造黒	古丹波	瀬戸橋戸共筒	
18	藪内	他	安6	3月29日正午		七疊敷		長谷川治郎兵衛 長谷川元之助 我尔 道々屋□七 小津清左衛門		新大樋 置筒	佐兵衛作 丸釜	古織好梅	吉左衛門作赤	瀬戸肩ツキ	宗室作二本入	
19	裏	他	安6	4月26日正午	塩屋町下屋敷順会茶事		長井六之助	我尔 長谷川治郎兵衛 久世弥一郎 長谷川元之助 小津益吉	今日庵玄々齋 竹画賛	一重切 認得齋 銘 葉玉	時代小阿弥陀堂	唐物丁子形	ソハやき	大棗 利休時代	千歳々齋 銘養老	
20	表	他	安6	5月11日正午	吉川佐渡守茶事	三疊大目		我尔 酒井近衛門 □□ 宮崎小兵衛 脇田喜齋	古織短冊	啐啄齋作尺八	浄林作雲龍	□糸丸	玄々齋手造 銘曲	瀬戸肩付	羽□小□作	
21	裏	他	安6	同15日正午		四疊半 次の間	長谷川治郎兵衛	西本□□ 若	清巖一行 萱其昌	啐啄齋二重切	弥右衛門□ カントウ作 ちやうちん形	東山時代長角	古刷毛目	落穂手 銘五月	常叟共筒	
22	表	他	安6	7日正午	千家茶事	不審庵	碌々齋	玄々齋	覚々齋一行	宗全手作		唐物 布袋	萩高台	鮫鱈小棗	一扇筒覚々齋	
23	裏	他	不詳	不詳	今日庵茶事	寒雲亭	精中		廣玄□□□ 桜□山口三首	青磁筒	伝来姫瓜 利休時代	黒根来平	長二郎黒	瀬戸	泰叟 銘水割棒	



No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
24	裏	他	安6	仲春23日	仲春23日正午初会	貸切□□	深津宗味	玄々齋 玄室 岩佐源兵衛 吉田弥左衛門 ぬ師宗哲	大龍和尚 如心齋両筆横物	竺叟作袖一重	宝珠形	不見齋手造赤	黄伊羅保	盛阿弥作	玄々齋 銘千世の色
25	裏	他	安6	5月25日正午		今日庵	長谷川治郎兵衛	古筆了仲 小津新兵衛 久世弥一郎	沢庵和尚	利休形筒	寒雉遠州好瓢	玄々齋好芽口	ト、ヤ片身替	金口黒棗	片桐石見守 銘松のみ
26	表	他	安6	9月15日正午	大坂 ちく女				如心齋筆	了々齋	ルイサ 浄雪作	啐啄齋好むさし野	古カラ津置筒	如心齋好	江岑
27	裏	他	安6	9月19日正午	神原口切於又隠	又隠	玄室		正親町院利休江居士号賜	常叟作細二重	真形松竹地紋	元伯初年手造	三島 仙叟彫銘	利休所持古瀬戸	仙叟初年玄室之頃作
						抛笈齋			利休居士筆			少庵好巴	蘭絵蛤	柏叟口造黒	【薄茶器】 寒雲木地大棗
28	表	他	安6		後水茶事				啐啄齋一行 白髪老口筆	小フクベ	屋太郎作百佗	根来食籠形	一入作黒 銘暁山	藪祖棗	道安作 銘古郷
29	遠州	他	安6	10月24日正午	久居 瀬田真齋茶事			我尔 吉川佐渡守 久世 山口少庵 □田ヤ□郎	丑年筆	古物竹張	寒雉阿弥陀釜	瀬戸	宗中作	古サツマ耳付 銘雪の口	遠州侯
30	表	他	安6	11月11日正午	不審庵茶事				一休和尚墨跡	南蛮掛筒	与次郎大阿弥陀堂	織部亀甲	長次郎黒	道安形中棗	随流判銘時雨口
31	裏	他	安6	9月下旬	江戸 千波茶事				定家句	石州黒尺八	寒雉 透木釜	時代蒔絵	古高麗	面中次	紹鷗
						開間			尚信常信両筆雁	唐物大籠	天猫筒	唐物葉形	人形手 萩	仁清	啐啄齋作
32	表	他	安6	10月25日正午	山田 浜辻茶事				大心和尚不二画	玄々齋一重	道仁平丸	一入赤 宝珠	御本	□□棗	原叟共筒
33	表	不詳	安6	10月25日	松永茶事				利休居士画	信楽旅枕	与次郎 操口丸	黄瀬戸	尼五器	サツマ久井形	宗左共筒銘時雨
34	表	他	安6	11月19日	山田 稲田氏茶事				松平公円相画		□二郎 小阿ミタ堂	亀長入作赤	唐津三嶋	中棗	啐啄齋共筒 銘雪下杉
35	表	他	安6	霜月16日正午	初会	今春口			江徳 古溪 玉舟三字墨跡	吸江齋作二重切	大阿弥陀堂 九兵衛作	青磁六角	道安形	瀬戸焼	羽口写
36	裏	他	安6	霜月19日正午	長谷川六有齋追慕茶事				清巖和尚筆 懈怠比丘不期明日	仙叟作二重切 銘妙庭守	與次郎操口霰	橙 六有手造	人形手	鉤目大棗	認得齋廿四本入
37	表	他	安7	安政7年申2月17日正午	長井嘉左衛門初口会	塩屋町席	同玄齋	我尔 長谷川万之助 竹内□郎 長谷川□□ □□坊	常叟画賛対幅之内富士乃画	仙叟作一重	利休甌釜	染付藤籠	ノンカウ作赤	瀬戸新兵衛作	竺叟宗乾作
38	不詳	他	安7	同19日正午	濱田得齋八十八賀ノ茶事	二畳半		我尔 小津与右衛門 小津□□	常巖清口懐紙	一重切竹不見齋作	浄味作 カタ付平釜	ノンカウ白菓	宗入黒	朝鮮	行水作
39	表	他	安7	閏3月6日正午	長谷川治郎兵衛茶事	三畳半大目		我尔 長谷川嘉左衛門 同 禄之助 久世弥一郎	沢庵画筆 両何為客	かつら籠	利休形卍字丸 古道也作	唐物桃形	泰叟手造赤 銘春柴	小ノ町棗	認得齋三本内 銘三輪
40	表	他	安7	閏3月21日正午	久世弥一郎茶事	六畳敷		我尔	古織文	不見齋判	阿しや	時代蒔絵丸	半使	張子棗	□々齋作

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
								村瀬 吉川 吉口郎			松竹地紋付				
41	表	他	安7	4月17日正午	吉川氏	三疊大目		我尔 野村 客三人	後西院御口筆 卯花似月御懐紙	啐啄齋作	(風炉のみ記載)	ツイ朱丸	長入赤	不昧公判	宗心作
42	表	他	安7	5月4日	不時茶	八疊敷	山口友右衛門	我尔 石田光輔 渡邊氏	光広侯短冊 亡羊宛		忠三郎作 甌口尻張	宝珠形	古瀬戸了々齋 銘君びの友	一入作赤大口 銘高山	小堀宗中侯作 大井川ト銘アリ

【表2-2-3】 本居信郷著『會席附 四番』

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓								
1	表	他	萬1	萬延元年申4日	碌々斎宗左茶事茶会	休息所七疊敷 残月亭 及台子 中立	碌々斎宗左	宗室始七人	大亀和尚筆 碌々斎横物		富士釜 道也作	吹上濱以蛤											
																	青磁青花	如心斎 銘口とケ方	藤四郎作肩衝	覚々斎作 銘兔			
																	秀吉公御筆色紙	一重宗伯女作	小阿弥陀堂 宗全作	時代トキン 白朝鮮	尼呉器	古瀬戸尻張	仙叟作伝銘
																	原叟椰子画賛	如心斎作	浄清作ハカタ形	鎌倉彫丸グリ	珠光青磁	瀬戸 銘一捺	吸江斎作
4	裏	他	萬1	5月26日正午		四疊半	長谷川治郎兵衛	広岡源二郎様 吉川佐渡守 石井与一郎 我尔	松浦鎮信侯画サン	東京寒種二重切 銘瀧月影	寒雉責紐	時代焼栗	珠光青磁	瀬戸棗形	古田織部侯とも筒 歌銘								
5	表	自	萬1	9月11日正午	吉川佐渡守茶事	三疊大目	長井嘉左衛門 我尔	久世弥一郎 田中真藏 後追紙	沢庵和尚 十三夜歌	了々斎釣花入	浄元作□□	不昧侯書付	一入黒	ヒヨヤキ	堀内仙鶴共筒 二本入銘萩すき								
6	裏	他	萬1	同12日正午		四疊半	長谷川治郎兵衛	我尔 三井利兵衛 久世弥一郎 林文昌 塩崎	宗旦二行物	玄々斎尺八	九兵衛丸釜	ツイ朱丸	柿ノへた	瀬戸	一燈作								
7	裏	他	萬1	10月6日正午		三疊大目	吉川佐渡守	広岡様 大林又市 花田様 近藤弥兵衛 小杉様 我尔	光貞公画賛	不昧公一重	カンチ作 リウガン入羽釜	了入作赤	黄伊ら保	肩衝	啐啄斎共筒 銘田鶴								
8	表	他	萬1	10月5日正午	初会	不審庵	碌々斎		利休堅文	元伯作一重 銘ヒゞ	與次郎作 伝来繰口丸	ノンカウ布袋	高麗筆洗	覚々斎好小棗	如心斎作 銘山姥								
9	表	他	萬1	10月朔日正午	初会	長生庵	至慎斎		元伯堅文	利休作一重 銘小舟	浄元作累座	交趾丸	大徳寺御盃	道安形小棗 〔薄茶器〕高取	覚々斎作 銘神志くれ								
10	裏	他	文1	閏正月13日正午		四疊半 後入 後段	長谷川次兵衛	西山 小が 水上 本居健亭 広岡源二郎 石井与一郎	定家和歌 玄々斎一行	備前置鍾馗		仁清宝珠	彫三嶋	〔薄茶碗〕如心斎手造 銘 吉祥	瀬戸口広 〔薄茶器〕竺叟 寒雲棗	仙叟作共筒 銘末広 認得斎作							
11	表	他	文1	同25日正午		六疊敷	片岡彦五郎	我尔 口屋 奥山 時代屋口助	大心和尚一行物	了入作 老いる	浄雪 日の丸釜	永楽作	了入 石山やき	老松	不見斎宗室共筒 銘松根								

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
12	裏	他	文1	2月24日正午		三疊中板	久世弥一郎	広岡源二郎殿 我尔 石井与一郎	遠州侯作文	覚々齋作一重	芦屋	旦入作丸 利休形	半使	不口齋判棗	玄々齋共筒 銘口キン
13	表	他	文1	西正月8日正午	川上宗寿茶事		川上宗寿	井筒屋久井 土屋隠居 手代 樋口屋 外巻人	松永貞徳弟子 柿藤徳玄 新春の文置且匂有	宗旦作 銘昔	寒雉あられ	ノンカウ赤丸 鳩押絵	片手	木地蔦宝珠	覚々齋共筒 銘長のし
14	表	他	文1	如月17日正午	東殿露庵御開之茶事				雪舟自画讃 探幽斎外題	原叟宗左作 銘未申	瓢箪 寒雉作	諫彼 仁清作	半使 〔薄茶碗〕長次郎作 銘飛鶴	高トリ 〔薄器〕真中次 秀次作	片桐宗園作
15	表	他	文1	2月26日	枳穀御殿露庵献茶		千精中宗室		大御門様御筆一行 伯麿芥不取	田安様一位三玄 齋公作二重 置 銘東下リ	秀吉公御好兜形 古浄味作	鷹司太閤殿被御存 五ノ内 鶴口 銘善止	九條殿下尚忠公御自作 赤染	大門様御園中赤柏花 御口中棗	近衛予楽院様御自作 銘夕御之よ
16	表	他	文1	4月9日正午		長生庵	至慎齋		了々齋筆	青磁青花	九兵衛作 姥口小丸	鱧口判 黒	井戸	肥後焼肩衝	伴翁作 銘腰ミノ
17	表	他	文1	4月10日正午	初会	不審庵	碌々齋宗左		覚々齋富士の画讃	伴翁作 銘苔の雫	古浄味作四角	唐物釉	古萩刷毛目	新兵衛焼	完全共筒
18	表	他	文1	4月3日	御釜江尾州様被相入口扇ノ御間 御茶事罷口守殿御手前	御二之間			明人 張克伝筆	青磁広口	平山殿御好 四季竹之絵 元禄庄兵衛作	堆朱根来	絵高麗 〔薄茶碗〕了入作 銘数寄	新兵衛作 〔薄茶器〕仙叟好 川太郎棗	古織作
19	裏	他	文1	5月23日	近衛大納言一条殿雅君御方	広間 又隠 御薄茶 抛筥齋 利休堂 今日庵 寒雲亭	如翁玄室 深津宗味 西村宗通 多田宗遍 日比野宗芳 三村宗祇 古田宗悦 名崎宗古 玄々齋宗室	今大崎民部権少輔 近藤式部権少輔 御年寄 花井女	二幅対 常信筆 忠熙公御詠 祇園祭之圖 信長公より利休拝領 古溪和尚筆 玉室和尚待入文 利休居士筆喫茶去	富士殿 古浄味作 仙叟好丹ノ木 先年御成ノ節 拝領塗物	夕顔 口四方 小阿弥陀堂 与次郎作 時代口口霰	東山時代蒔絵 大蛤	利休所持 建齋 義之字天目 禁裏御服茶碗粟田焼 御茶口	東福門院様ヨリ 仁清 〔薄器〕夕顔棗	紹鷗作無節 元白室宗尼作 銘静
20	裏	他	文1	8月13日	御祝打合義集茶事	塩屋町別荘	長井嘉左衛門		鉄叟和尚一行	青磁 鯉耳大	丸 浄味作	常叟好 柿 帽子形 銘 浦の苔屋	不見齋手造 銘 浦の苔屋	飛たすき	玄々齋作銘十八公案
21	表	他	文1	9月11日正午	不審庵名残		碌々齋	和州様御附御用人 水野佐渡守 御屋敷御茶之頭 大谷平左衛門 相伴 堀内宗幽 詰 原吉左衛門	如心齋筆月画サン	宗全作掛置筒		江岑判	珠光青磁	吹上松ニテ 鶯棗之写 〔薄器〕折タメ雪吹	覚々齋作 銘早馬
22	表	他	文1	10月2日正午		不審庵	碌々齋		祥翁宗左筆 的傳	伝来青磁	台子切合釜 与次郎作	金了呉	長次郎黒 〔薄茶碗〕呉器	伝来鳴物	珠光作
23	裏	他	文1	12月14日正午	夜咄茶事		長谷川次郎兵衛	広岡源二郎	天龍寺		新寒雉 大講堂	一入	古水屋	玄々齋判黒大棗	随流 銘百合

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓	
								三石吉左衛門 石井与一郎 我尔								
24	表	他	文2	文久2戊辰4月朔日 正午		長生庵	宗幽	千宗左 千宗守 釜師弥右衛門 指物師利齋	碌々齋水画サン	覚々齋 銘サキ	九兵衛作 累座	唐物独楽	黄伊羅保	道安形大棗	瀬田掃部作	
25	表	他	文2	4月12日正午		不審庵	碌々齋		珠光古市播二法師へ示し写	江岑一重	寒雉糸取	伝来 アマカハ	宗全作赤平 一入焼	新兵衛焼	道安作共筒	
26	裏	他	文2	9月17日正午		六畳敷	吉川佐渡守	久世弥一郎殿 我尔 吉川佐渡守 小津新兵衛 恵川弥五郎	雅章御 大式紙	一燈置筒	道也作不二釜	七宝	我作赤 福寿字アリ	一閑棗	玄々齋共筒 銘水□□	
27	表	他	文2	未亥閏2月11日祥口	祥齋方合齋宣翁宗心居士 五拾歳忌九月十七日ニ一々越	無口軒	至慎齋		無学和尚墨跡 方合齋之三字		方合齋好累座 浄元作	鎌倉彫大十二羅漢	宗入作木沓写 御本三嶋四方 左入作光悦写	〔茶器〕利写草給棗	方合齋作 追銘柴の庵 随流写淀川廡	
																午後濃茶延亭
																長生庵
																二階三畳 玄關次の間
28	表	他	文2	10月朔日正午		不審庵			一源和尚筆古歌	随流齋作一重	利休時代 大阿弥陀堂	宗慶作蝶形	伝来安南	原叟判中棗	伝来	
29	表	他	文2	10月7日正午	秀嶺軒小間				原叟鴛画讃	碌々齋尺八	浄元作名殿	南京青磁四方	一入作黒	瀬戸茶臼万焼	随流齋作	
30	表	他	文2	霜月9日正午	越忠院覚峻定親三百五十回 温齋□二道知五拾回 石瀬齋敬譽道尚拾三回 追慕之茶之湯霜月五日初会 連日六客	待合 六畳	濃茶 祿之助 薄 嘉左衛門	我尔 土井宗十郎 恵川弥五郎 岡村□三郎 村瀬武左衛門 道々や□七	本居宣長筆横物 大燈国師一行	少庵作一重	阿弥陀堂 孝知道也作	青磁木魚	大徳寺呉器 〔薄茶碗〕一入赤 銘告子	蹲手 〔薄茶器〕雪吹	利休作	
31	裏	他	文2	12月5日正午	清水村 乾彦四郎殿年回茶事 九兵衛 亡父七年忌追悼	今日庵		我尔 長井嘉左衛門 木地屋伝兵衛	玄々齋筆	啐啄齋一重切 銘白柅介	道也作尻張	かうち 南瓜	八代やき	瀬戸新兵衛	大心和尚 銘なむあみだぶつ	
32	表	他	文3	文久年正月22日	湊町看雲亭		長井 とミ	我尔 林文昌 山内長吉 大工左兵衛	宗伯女筆横物（俳句）	一如齋作二重 銘福寿	丸 浄玄作	仁清羽子板	赤 左入作 〔薄茶碗〕志戸呂	利 大棗 〔薄茶器〕竹籠形	精中作嵯峨土産	
33	表	他	文3	同月21日夜不時		六畳敷	広岡源二郎	我尔 小津新兵衛 恵川弥五郎 久世弥一郎 吉川佐渡守	宣長 歌切 本の歌	青磁たび枕	玄□作 大渡ビン	宗旦好半月	井戸	サツマ	ガモウ作	
34	表	他	文3	4月4日正午	初会	不審庵			如心齋筆（俳句）	元伯所持古銅 経筒	小阿弥陀堂 浄味作	簾貝	堅手	ノンカウ造耳附 〔薄器〕松ノ木寸切 桐の絵	原叟作 銘白兔	

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓	
35	表	他	文3	4月15日正午		長生庵			圓鑑国師文 北野大茶の湯	唐物青銅	姥口小丸 九兵衛作	了々斎好若木	井戸平	利休町大棗	如心斎作銘長生	
36	裏	他	文3	8月20日正午	大坂松永伝兵衛追善茶事				沢庵横物 語二十字	時代竹組 ナタ籠	之々口	唐物独楽	青井戸 銘園城寺	瀬戸宗口郎造	元伯共筒 銘白鷺	
37	裏	他	文3	文久3亥年9月7日	少庵居士式百五拾遠忌追悼 利休堂九月七日茶事	11月13日少庵 後座	今日庵宗室		秀吉公少庵 御奉書		利休堂口尻張	唐物独楽				
									少庵筆送二貫文	少庵作一重		赤楽	利休居士在判 盛阿弥作	少庵作共筒		
									近衛忠熙公御詠		少庵好巴 古浄元作	少庵好	尼呉器 仁清作 〔薄茶碗〕古瀬戸大内柿		泰叟作	
									少庵伝記							
38	表	他	文3	10月朔日正午		隠宅長春庵	宗幽		啐啄斎飛石画賛	随流斎作一重	與次郎作 切合尻張	交趾丸 蕪と菊の模様有	了々斎手造赤 銘ウソツキ	嶋物 耳付 〔薄茶器〕茶桶秀次造	如心斎作 銘口切	
39	裏	他	元1	元治1子2月	易巖妙丹二百回追慕茶事	六疊敷		長谷川次郎兵衛 三井宗中ヨリ 長谷川元之助 我尔 丹羽玄亭	相阿弥筆	玄々斎尺八 銘春雨	阿弥陀堂 与次郎作	時代利口口蒔絵	長次郎作黒	瀬戸新兵衛作 銘ひとり	認得斎作 銘竹筵	
40	藪内	他	元1	3月24日8時	角屋七郎次殿へ		角屋七郎次	我尔 石崙 三木	大徳寺宙空和尚横物 萬歳	ノボリ竹 吸江斎作	カントウ作 真形	遠州公好 玉	左入黒	瀬戸 銘乙御前	不白作二ツ節 銘更科	
41	藪内	他	元1	3月17日	蕪庵暁时会録			来賓 公儀御坊主頭 星野隆圓 鈴木宗栄 高田三永 葦嶋雄郎 上林 三人	九條尚貴公御懐紙 霞裏聞鶯	石州侯一重切	古天明茶白	織部のシキツマミ	真熊川 〔薄茶碗〕松平萩	紹鷗朱棗 〔薄器〕比老斎造 蟬のる形	東陽坊作	
42	裏	他	元1	4月3日正午	祖父宗意十三回忌 亡父六有七回忌 追慕茶事	聴雨庵	長谷川次郎兵衛	我尔 岡村哲三郎 中里輝次郎 村田本之助 中屋源蔵	国光大師一枚起請文	唐物古銅経筒	無繰口霰 浄雪作	紹鷗国朝鮮	曾婆	仁清 丸 小町棗	認得斎作 銘友国	
43	表	他	元1	卯月	茶事	不審菴	禄々斎		如心斎筆小倉色紙三首写	江岑作一重	古浄元作 セメヒモ	唐物木ホリ	井戸ワキ	元伯判中棗 〔薄茶器〕桂馬	随流斎	
44	表	他	元1	5月24日正午	桑名 竹内弥兵衛宅	不老庵	長生庵宗幽		寛々斎筆	如心斎作一重	道や作 尻 桑山	存星丸	蕎麦	瀬戸啐啄斎 〔薄茶器〕利写雪吹	随流斎作	
45	裏	他	元1	10月23日正午		塩屋町席	長井禄之助	我尔 小津太郎次郎 三井宗中ヨリ丹羽玄亭 木屋宿茶	玄々斎横物	久田不及斎作 銘時雨	寒雉作セメヒモ	萬曆丸	一燈手造赤 銘玉の枝 〔薄茶碗〕半使 唐津	大棗 〔薄茶器〕高取	認得斎作 二本入	
46	表	他	元1	同年10月	少庵二百五十遠忌追慕茶 於祖堂	軸飾り			秀吉公ヨリ少庵之召出之御書翰	少庵作二重切						
									與次郎作筋釜字	少庵所持堆朱クリ	長次郎作赤 銘小坊主	利休中棗 〔薄茶器〕仁清割菱	少庵作筒共			
						残月亭 附書院		少庵寿像								
								卷物 少庵三十三回忌之節 大徳寺和尚方 追悼二偈		少庵好霰巴釜		利休居士所持井戸	〔茶器〕少庵真中次	象牙		

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
47	裏	他	元1	正月13日正午	塩屋町	六畳 内腰掛	長井嘉左衛門	小林様 我尔 山田嘉平次 久世弥一郎	吸江斎横物 沢庵和尚筆	光悦一重切 銘寿老人	与次郎作尻張	仁清羽子板	長次郎作黒	備前 銘こつ不	舟越伊豫守作 筒ニ歌銘アリ
48	表	不詳	元1	如月19日午時後					伴翁画ナン 発端 春眠不覚暁	不識斎二重切 銘口盈		板菊白	春叟手造赤	〔茶器〕黒雪吹	吸江斎作
49	表	他	元2	元治2丑年2月9日正午	神藤作左衛門初釜			山中榮三郎 同 新十郎 同 又七郎 か々屋平造	源庵和尚一行物 伊川院寿老	粉引徳利	寒雉丸	染付張子牛	斗、屋中服	信楽肩衝	如心斎共筒 銘 さゞれ石
50	表	他	元2	同年2月13日	松永雄雪口初会	道安席	松広雄雪口	大扨又兵衛 山中新十郎 同 柴三郎	沢庵和尚横物	如心斎二重切	興治郎作 繰口平丸	染付鞠使	萩手促	祖母懐影銘 肩耳付	碌々斎共筒
51	不詳	他	元2	4月27日正午	於射陽書院 東照宮二百五十年御神祭添茶 謝恩会	上の間 違棚上 同 下 向座敷	竹川竹斎	我尔 長井嘉左衛門 長谷川元之助 丹羽文亭 外に六人	唐紙二行 字宣長(和歌・大和言葉) 護国祐民 一條左大臣忠香 赤心報国 三條内大臣実萬	利休小田原陣中作 銘尺八 伝来竹一籠 紫野大心和尚筆					
52	裏	他	元2	5月3日正午		六畳	久世弥一郎 順会	角谷 常念寺 禄之助 我尔	玄々斎短冊	一燈作一重切	浄味作四方釜	今日庵伝来写 トキン香合宗哲作	ハケ目	瀬戸黒 〔茶器〕蒔絵薄器	江岑作
53	表	不詳	元2	如月18日正午後				三井宗十郎 永楽吉五郎	石室和尚墨跡 長生庵之三字	青磁唐草彫	小尻張 古浄味作	堆朱丸人形面	大徳寺五器	利休瀬戸 〔薄茶器〕寸切	原叟共筒 銘十口
54	表	他	元2	4月16日正午		不審	碌々斎		元伯ヨリ丈山に贈ル	青口侯作	古道也作 羽子板形	伝来唐物	赤平 宗入作 〔薄茶碗〕呉器	藤四郎ひやうたん 〔薄茶器〕杓の口千切	天龍作
55	裏	他	元2	如月16日正午	長井禄之助殿上京節	又隠	覚々斎	長井禄之助 源津 宗休	一休和尚偈 七絶	不見斎 銘寿老人		呉須赤絵	一入赤 〔薄茶碗〕古伊羅保小	盛阿弥大棗 〔薄器〕古瀬戸油絵	元伯作 銘 松風
56	表	他	元2	如月19日昼後	碌々斎又参二付薄茶	不審庵	碌々斎		伴翁画サン	不識斎作二重	小尻張 古浄味作	粒菊白朝鮮	常叟手造赤	茶器=黒雪吹	吸江斎作 銘絵島
57	表	他	元2	8月23日正午	不審庵名残茶事		碌々斎		如心斎月画賛	宗左作掛籠	道也作羽子板	伝来唐物袖	堅手	藤四郎作 〔薄茶器〕覚々斎 折タメ棗	覚々斎作
58	表	他	元2	巳10月10日正午	於看雲	看雲	長井嘉左衛門 富女點立	我尔 丹羽元亭 三井宗十郎 道々や助七 岡村哲三郎	飛鳥井雅章公 富士の歌	常叟作一重	真形芦屋釜	交趾笠牛	仁清 御本写 〔薄茶碗〕赤楽 示照女子造	紀伊大守 御庭焼 〔薄茶器〕貝桶時代蒔絵 雪吹	利休形象牙

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
59	表	他	元2	霜月8日正午	角谷七郎兵衛殿へ	八畳		我尔 久世弥一郎 岡村哲三郎	貴徳院殿様 御短冊 古歌	一指斎作尺八 銘 乙女	大西浄吸作 ふとん釜	唐津やき	瀬戸唐津 〔薄茶碗〕宗入赤	瀬戸芋ノ子 銘飛鳥川 〔薄茶器〕黒棗	宜中造
60	裏	他	寛3	寛政3亥閏2月正午	神戸本多様 常楽庵向切茶事	神戸本多様		高尾九兵衛 扇や忠助 柳屋宗兵衛 □助	利休文 鶴一口花入口	南蛮サハリ細口	道ニ作 バ細形	志野	黄瀬戸	宗入瓢箪	利休共筒
61	裏	他	嘉2	嘉永2年霜月6日	知恩院法親王子今日庵御寄之茶事 献茶正午又隠ニテ		(後段)		栖川宮熾仁親王 御短冊 冬木	利休所持伝来 金紫銅経筒	丸 九兵衛作	東福門院様御物	御土産拝領宮様御手造 御次=釘彫伊羅保	古瀬戸小堀 遠州侯	紹鷗銘なし 又玄斎作銘雪ニ口
62	表	他	嘉2	葉月10日午時	不審菴茶事			楊甫 得水 古悦	清厳和尚横物	黄瀬戸立鼓	与次郎筋万字	交趾鴨	ノンコウ黒	玉ノ後小棗	随流作 銘時雨
63	裏	他	嘉2	霜月11日未時	今日庵茶事			千草屋 得水 紹甫 旦入	利休人馬の文	常叟作	鏡臺浄元作	赤絵□口堂形	長次郎作赤 銘白路与	紹鷗大棗 五郎作	伝来古作共筒
64	表	他	嘉2	霜月4日午時	長生庵ふき翁鶴口常光 七十ノ賀茶事			楊甫 長口 得水 春吉	春甫和尚	宗巴作一重	与次郎作 萬代屋	カウチ荒磯	仙叟手造 七十ノ内賀ノ彫	紹鷗大棗	原叟作 銘モトリ
65	表	他	嘉2	11月2日正午	不審菴茶事			堀内宗完 同 宗幽 谷崎浄雪	泰叟宗室 原叟宗尼 両筆	唐津	興次郎作 万代屋	染付絵文	了々斎手造	伊賀 銘山木	一翁作
66	表	他	嘉2	長月9日正午	釜崎了保還暦茶事		釜崎了保		啜啄斎画賛	長フクベ随流作	ふとん丸 九兵衛作	染付むすび文	宗入黒	町棗 旦時代	吸江斎桜木
67	表	他	嘉2	霜月8日	土橋宗三茶事		土橋宗三	清水 長坂 裏谷	元伯筆 スミノ絵賛	了々斎作置筒	寒雉作 阿弥陀堂	染付虫入	吸江斎ノ手造	盛阿弥作小棗	啜啄斎作 銘仙人
68	不詳	他	寛3	寛政3亥1月12日正午	神戸御隠居様茶事	二畳大目		清水伝右衛門 高尾九兵衛 袋崎 勇助	松花堂絵入文 発句入	倚口侯二重切	庄兵衛作 中阿弥陀堂	備前亀	長次郎黒 銘 志のゝ免		最中八十才作
69	不詳	他		閏2月4日正午			高尾九兵衛	本多伊豫守様 中条六郎衛門殿 永林春斎	遠州公 江月 大膳公 古尾 寄人江書	利休一重	浄元 乙御前	南京いちふ	ノンカウ赤	瀬戸広口	江岑作 銘寿老
70	不詳	他		寛政6正月9日午時	常平菴茶事			清水□六 高尾九兵衛 桑林春斎	松花堂茄子絵	宗旦二重	古芦屋作 銘山	如心斎手造 銘福祿寿	覚々斎手造黒 銘 □寿	備前少庵口	随流作共筒 銘 唐子
71	裏	他	嘉2	4月4日正午	風炉初り 神戸公向御屋敷	二畳敷		高尾九兵衛 清水源兵衛	一燈□□三首	如心斎作舟 銘 一艘	古芦屋車軸	丸黒 沈金彫芙蓉	轡平	芋子 権十郎様御銘	竺叟共筒 銘山簾山
72	不詳	他	嘉5	嘉永5霜月8日正午	堀内宗幽□各口や初而下向御茶				利休 いとの文	原叟作一重 銘 賀茂流	与次郎作尻張	交趾 阿ら磯		信楽肩衝	如心斎作 銘 長生
73	表	他	嘉5	同年子9月26日正午	ふしき斎改名茶事		鶴叟	千吸江斎宗左	元伯タン尺二枚	瓢箪形銘寿老	与次郎作切懸丸	左染付末広	常叟手造	利休町棗大	原叟作銘千年



No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
						無色軒		同 祿々齋 湯浅八郎兵衛	吸江齋二行物 此度乃祝国来之品		九兵衛作ルイサ	吸江齋好木彫鶴	〔薄茶碗〕青磁	〔薄器〕鳴物大海	羽瀧造
74	表	他	嘉2	10月5日正午	不審菴茶事			堀内鶴叟 指物師少齋 釜師弥浄玄	江雪和尚 心ノ字	古備前 銘二見	古道也 大アミタ釜	長入造黒 コマ	御器 啐啄齋銘小手毬	覚々齋小棗	
75	表	他	嘉2	閏4月26日正午		長生庵	宗幽		了々齋筆	如心齋宗左船	羽釜	簾見了々齋判	蕎麦井戸	備前カタ付	啐啄齋作 銘腰ミノ
76	表	他	嘉2	10月11日正午	新席	不老庵 八畳		吸江齋宗左 秦 紹甫 鋳師 浄益 袋師 夕湖	一溪和尚開炉待 春山和尚一行	吸江齋尺八	与次郎クロ丸 吸江齋好 マンジ	鶴叟手造赤	イラボ 了入赤	〔薄器〕菊桐中次	了々齋 利休象牙
77	裏	他	安2	3月23日正午		又隠		吸江齋宗左 堀内宗幽 千ノ職方	千宗尼今般家銘祝ノ文	元伯舟 銘飛口	寒雉丸姥口	コマ	伊羅保	五郎作銘大棗	仙叟共筒
78	表	他	安2	3月25日		長生庵		千宗左 同 宗女 秦 紹甫 楽右衛門	大井和尚墨跡	長入作ウスバタ	広口古芦屋	唐物青貝	珠光青磁	瀬戸了々齋	随流造
79	表	他	安2	9月29日正午		不審庵		千祿齋宗左様 神事茶事	宗旦筆		九兵衛作 フトン丸	染付口	ノンカウ黒 銘 イナツカ	瀬戸翁手 〔薄器〕了々齋在判 菊桐雪吹	利休作共筒
80	表	他	安2	10月25日正午		長生庵	堀内宗幽		仙鶴句	宗全二重切	浄味小尻張	染付木平形	ノンカウ赤 銘サキカケ	木棗 随流在判 〔薄器〕ツタ	覚々齋
81	表	他	安2	10月21日正午		不老庵	堀内宗心		吸江齋横物	時代桂籠	道仁作 而取カタ付	呉洲小丸	一入黒 銘アケボノ	古備前	ふしき齋造
82	普齋	他	安3	8月18日	杉木普齋百五十回 追祭奠茶会記 於如法禪利堂之	床 點茶席			正中 杉木家伝来自讃寿像 右 千宗旦老遺物文 左 大徳寺乾草禪師墨跡						
								大徳寺玉堂禪師一行書	翁作竹銘筆洗	雲龍 古浄味作	好 杉彫玉象嵌	【重茶碗】高麗、古萩	好銘	翁内室作 銘伊勢小町	
83	裏	他	安3		今日庵茶事 於又隠口切	又隠	玄々齋		清厳和尚筆横物 天倫の二字	一燈一重 富士の雪	大阿弥陀堂 与次郎作	呉須 八角	道安形黒 長二郎作	古丹波 銘橋立	道安形覚々齋
84	表	他	安3		住山江甫茶事				吸江齋横物 佛掛	一重切元伯 銘大筆	与次郎作丸	時代白朝鮮甲二 木筏かの蒔絵	一入黒 銘小樋	古瀬戸	啐啄齋
85	表	他	安3		加賀屋作右衛門茶事				春屋和尚二行書	一重 銘ソゲ物	尻張九兵衛作	呉洲	トノ屋	瀬戸茂右衛門	覚々齋
86	表	他	安3	4月27日正午	不審庵茶事		祿々齋		春屋和尚 不審庵記	江岑舟 銘長生丸	道や作 百会	蛤筆絵宗全造	染付雲龍	吹上ケ板溜ワシ棗	随流作
87	表	他	安3	4月15日正午	長生庵鶴叟居士三回忌追善茶事		宗幽		原叟珠数画サン	了口作一重	道や達テ	唐物丸	ソバ 〔薄茶碗〕一入作銘緑	宗旦好張拔棗 〔薄器〕吸江齋判雪吹	吸江齋 銘追慕
88	表	他	安3	10月2日正午	不審菴茶事				江雪和尚一行 一宅上柳子	覚々齋	与次郎作尻張 銘紫野	交趾鴨	宗入作黒	中棗元伯在判	如心齋作 銘かしこ
89	表	他	安3	10月16日正午	長生庵	長生庵	至慎齋	千宗左 秦 紹甫 與川春齋	春屋和尚墨跡	覚々齋掛尺八	浄味作平大丸形	染付丸ウキ扇	吸江齋手造黒	利休瀬戸 銘一文 〔薄器〕再来棗	啐啄齋作 銘長生

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
90	藪内	他	安3	辰10月21日正午	藪内口切茶事	初入 後入		井上氏 法月庵 杉山氏 植島 内藤氏	一休中字横物	竹一重切 銘冬木立	古天明平丸	瀬戸ふしき	大徳寺呉器	伊賀肩つき 銘いますされ竹心	小堀権十郎共筒
91	江戸	他	安3	10月15日正午	江戸川上宗寿茶事			古筆了仲 後五人	無準禪師墨跡	漢銅	□丸与次郎作 又伝 道也	交趾笠牛	如心斎手造黒楽	古さつま丸	少庵作共筒
92	不詳	他	安3		赤須与市殿口切茶事			細川素殿 古筆了仲 平井修隆	台徳院殿様御文 蒲生氏宛		九兵衛作 阿弥陀堂	赤絵	宗入南京	筒二重根	一尾伊織共筒
93	裏	他	安3		前沼識部正殿口切			古筆了仲 森江惣兵衛 水戸屋 伝兵衛	清巖三字一行	古備前	利休伝来 四方庵釜	交趾菊亀	大井戸	禾ノ手	利休共筒
94	不詳	他	安3	10月13日午時	西本於幸様於篋庵茶事	篋庵茶事		角倉氏親子 木村氏 藪内紹知翁	利休堅文	如心斎一重切	大阿弥陀堂 与次郎作尻張	□楽伽□	大徳寺呉器	朝日春渡	小堀宗甫侯 銘松風
95	不詳	他	安3	11月17日午時	東老御門口様於東殿御茶 枳穀御殿茶於聴松写			角倉氏 道阿方二人	中峯墨跡	古織殿作 銘もち枕	□□ 与次郎作	仁清作鷹	御本	高取 鶴□	唐物 銘鑿槌
96	裏	他	安3	10月26・27日	裏千家稽古之間席開	稽古之間			寿老人安信筆	少庵作一重	尻張	仙叟好亀	棒先青磁 〔薄茶碗〕旦入作	古瀬戸大内海 〔薄茶器〕葵・菊大棗	秀吉公御作 銘佐よし
						拋笈斎			光信筆二幅対 □冬山水		松丸写	仁清蛤	堅手 古唐津	夕顔棗	
						寒雲			大龍和尚一行	古栗田	真形 古芦屋作	原叟好 鷺会ノ木	一入作銘大黒	嶋物大海	六閑齋二本ノ内
97	裏	他	安3	丙辰霜月28日	御数寄屋御荘付 鷹司准后様梅御殿御対面所	四畳半			臨時御茶座ノ字	古銅貨狄					
									西行法師筆詠草	遠州拵作口	裏甲 与次郎作	堆朱	黒筒	〔薄茶器〕 蒔絵大棗	玄々斎作 銘木守
						三畳台目御囲			經山虎巖禪師墨跡		古芦屋 真形	天橋立松皮宗哲作	古萩割高台	古信樂	備作共筒
						二畳台目			虎巖禪師墨跡	春内ノロリ	御後□ 寒雉作				
98	表	他	慶1	葉月4日正午	不審菴茶事			隨流一行	古織作一重	與次郎作 大萬代屋	交趾丸	伊賀焼	了々斎松ノ木	天然十七作	
99	表	他	慶1	10月25日正午	御用人中ヨリ参来 公□御数寄屋改神大人之□	不審菴			江雪和尚一行 一宅上獅子	元伯一重 銘ヒゞ	與次郎作 萬代屋	伝来染付 綾文	長次郎作黒 〔薄茶器〕呉器	少庵小棗 〔薄茶器〕菊桐蒔絵中次	道安作筒共
100	裏	他	慶1	同年	又隠口切茶事			精中宗室	烏丸光廣御詠 神祇の短冊	一燈斎竹大一重	裏甲 古道也作	絵瀬戸ふくら雀 〔薄茶碗〕仁清造	高麗堅手 〔薄茶器〕嶋物	紹鷗大棗 〔薄茶器〕嶋物	常叟作
101	表	他	慶1	11月	曾祖父休甫五十回忌追慕茶事	聴雨庵 薄茶 四畳半	長谷川次郎兵衛		欲々庵墨跡 認得斎釣竿花入之文	認得斎作尺八 丹波	小阿陀堂二郎作 丸 古浄味作	呉州丸文叔	長次郎作赤	□山春慶 〔茶器〕吹雪	玄々斎作銘沢の水 象牙
102	表	他	慶1	霜月3日正午	初会 尾州吉田常和宅 於安楽亭茶事	安楽亭	堀内宗幽		玄々斎絵	唐津ひやうたん	道也巖姥口	交趾南瓜	大徳寺呉	利休瀬戸	了々斎銘長生

【表2-2-4】 本居信郷著『會席附 五番』

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
1	表	他	慶2	卯月18日正午	碌々斎宗左茶事茶会	不審庵 又隠	精中宗室		玉室和尚 玉舟和尚筆 □巖無□禪師墨跡	宗入造赤舟 仙叟好舟	道也百会霰 古阿弥陀堂 与二郎作	真塗三日月 元伯作一閑張	黒楽 ノンカウ造黒平	備前焼 今浪焼	随流作 一燈作十二月ノ内
2	裏	他	慶2	閏6月22日正午	江戸芝田町仙波本宅	開キ		長井同玄斎 田中宗逸 長井 芳 同 富 道亦	清巖筆道一字 探幽筆瀧ニ幅対	仙叟作通り筒 金満手	小切懸 寒雉作 少庵霰因幡作	古瀬戸平 根来	棒ノ手平 宗入作	宗長作小棗 瀬戸手桶	初代宗哲作共筒 初代宗哲作
3	表	他	慶2	5月27日正午	南部一乗院御門主へ献茶会記		宗幽	門跡心昭大僧正 内侍原大蔵江 近衛殿御内諸井采女 井坊大武 荒井宗玄	近衛基熙卿御筆古歌	古銅鶴首	芦屋角形 松竹ノ模様	堆朱丸牡丹彫 赤天目 旦入作 御次茶碗 珠光青磁	利休瀬戸	少庵作	
4	表	他	慶2	6月5日正午	千吸江斎祥翁宗左居士 七回忌追悼		至慎	千碌々斎宗匠 一指斎 宗守 久田宗悦 細矢宗祝 吉田紹敬	祥翁宗左筆	如心斎一重切 銘座禅	元伯好口四方 浄玄作	宗玄作□丸香合写 釘彫伊羅保	祥翁好五老松	祥翁作銘鴛鴦	
5	表	他	慶2	9月15日正午		八畳敷	井徳	我尔 吉岡泉二郎 角屋七郎次	藪内竹陰筆一行物	杉木古木 銘ヲノゝ拓		堆朱丸	片ノ手	西御門跡好 堀内宗幽造共筒 銘新樹	
6	表	他	慶2	9月29日	夜咄し茶事	六畳敷	久世源一郎	我尔 角屋七郎次 垣崎 野口 弓場市郎	松山卿懐紙		庄兵衛 阿ミタ釜	南京赤	松本休也□手造 〔薄茶碗〕 杉形伊羅保	□□院形 宗哲作 〔薄茶器〕 時代黒中棗	玄々斎好
7	表	他	慶2	10月3日正午		八畳敷	角屋七郎次	我尔 吉岡泉二郎 □覚寺 井植	大徳寺大川和尚一行物	清巖和尚	芦屋平丸釜	白朝鮮	松平萩	左入作赤楽 □中作 追銘参木	
8	表	他	慶2	同月8日正午	吉岡泉二郎殿茶事	八畳敷		我尔 角屋七郎次 井植	不見斎一行	碎月庵和尚写二重切	道庵作 平丸釜	赤楽	ノンコウ造黒 銘老学	セイ阿ミ黒 中棗 吸江斎造共筒	
9	表	他	慶2	9月9日正午			源川 川上氏	長井同玄 同 芳 同 富 詰 □	来海大□書 千秋、ノ、ノ、秋	志戸呂焼	雲龍 与次郎作	時代□□蒔絵 白朝鮮	朝日	大棗 川上不自作 銘烹湯	
10	裏	他	慶2	同月12日正午		八丁堀	平井安之	長井同玄 同 芳 同 富 道々屋右兵衛	長嘯子文	時代桂川籠	平形古天猫作	招古木 都鶴	井戸呉き	中棗手写片□平 雲□□和尚作	
11	表	不詳	慶2	同月13日九ツ時ヨリ 柳橋伊豆屋ヨリ祝		床極之席六畳 広間十五畳 七畳		元讓 同玄 名雄 道亦	松花堂布袋画替の小幅 雪舟筆横物 探幽筆三幅対 抱一筆			曲□小 真形	一入黒小服 ト、ヤ	薩摩 水□中棗	玄々斎 桜皮 象牙 啖啄齋作

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
								茶善口 登實							
12	裏	他	慶2	同月19日正午ヨリ 八時前			仙波玄識齋	同玄齋 名雄 登實 宗邊 道亦	竺叟宗乾一行  古法眼筆 福祿寿	伊賀	丸姥口 寒雉作	吳洲	井戸脇小 ノンカウ黒銘晴天 宗入赤		不見齋詩銘
13	裏	他	慶2	同月22日正午		二疊 客間	菱田露翁	同玄齋 名雄 登實	宗旦一行 一蝶福祿寿鶴	青磁八角 一燈齋作置	蒲団丸 九兵衛作 真形 天明作	染付あこぎ 赤絵吳州宝珠形	井戸脇 長次郎銘刀自	利休 時代蒔絵棗	六閑齋作 宗旦作彫銘天下泰平
14	宗偏	他	慶2	同月5日正午	□習庵露齋茶事	三疊			三藐院殿句にさく	有馬籠	古天明真形	絵高麗	井戸脇	不昧公伝来	宗偏共筒
15	表	他	慶2	同年10月5日正午	不審庵	不審庵 残月亭		佐原三位殿 村山大進 外ニ式人	佐原様短冊 探幽筆獅子	伝来黄瀬戸立鼓	伝来与次郎作繰口丸 紫野浄元作	染付 銘文 一閑張鴛鴦	長次郎作黒 御本 光悦赤	少庵小棗	道安作筒共 利休居士黒塗
16	表	他	慶2		不審庵口切茶事				普遍国師墨跡	元伯尺八銘二祖	與次郎作丸	吳州蜜柑	了蔵手造黒銘ツホ	啐啄齋 菊絵小棗	伴翁作銘柳杖
17	表	他	慶2	極月4日	夜咄し	二疊敷	長谷川治郎兵衛	山田 善光寺 我尔 道宗	啐啄齋大横物		寒雉作大尻張	一入作	コモカヒ 〔薄茶碗〕瀬戸筒	尻張棗 〔薄器〕黄南京	認得齋共筒 銘大カン
18	表	他	慶2	極月13日正午		三疊半席 薄茶棚ニテ	井植	角屋七郎次 我尔	為村  立甫不二画	夕顔	大西道仁造 ナテカタ丸	古□□造	半筒	瀬戸 銘ツラ	道安作
19	表	他	慶3	慶應3丁卯正月9日正午		八疊敷	角屋七郎次	吉岡泉二郎 □覚寺 我尔 一□	覚々齋画賛	古銅置	芦屋作平丸釜	一閑張	御本立鶴	大樋やき 銘大黒	宗甫作筒共
20	表	他	慶3	正月16日正午		三疊向切 広間	井植	我尔 吉岡泉二郎 角屋七郎次 一□	道齋公一行物 沢庵和尚文		道仁作 なて肩 浄元作 尻張	志野丸 蛤	宗入黒	時代ナク籠	幽庵作
21	裏	他	慶3	同月20日午後	松室大監	六疊敷		我尔 □光寺 道兼 下□□	六閑齋一行物 福寿開多門	玄々好無輪二重	玄々齋好 常盤釜	南京コシ千丸	一入黒道安形	古サツマ	認得齋初削 白兔雲龍二本入
22	表	他	慶3	同月29日正午	吉岡泉二郎庵へ	六疊敷		我尔 角屋七郎次 □覚寺	如心筆 南北にかしく通すらに 社ニ□参詣して	江月和尚判 可け	通齋作 ウハ平釜	栗立つ丸	黒棗 福寿文字有	鈴	啐啄齋共筒 銘よし忘
23	裏	他	慶3	卯2月29日正午		四疊半席	岸九郎左衛門 ちみ女	我尔 岡村哲三郎 長谷川治兵衛 木屋藤兵衛 三井宗十郎	三藐院信伊公画賛	玄々齋作 銘旅之友	霰宝珠 古天明作	楽焼鯛	肥後焼	苦口棗	認得齋作 銘無事
24	表	他	慶3	3月9日正午	稽古茶	六疊敷	井植	吉岡泉二郎 我尔 角屋七郎次郎	岩倉三位筆半短冊 古歌	宗旦判古木花入	阿みた釜	一入作赤ナラオタ 四方	ハケメ唐津	瀬戸唐津	道安作

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
25	表	他	慶3	同月14日正午		三畳中板席	木成や口三郎	我尔 小津左郎衛門 長井房助 塩井屋		一翁作	九兵衛作 木口甌	古銅鶴	片手	阿漕やき	堀内至道齋二本入 銘吉祥
26	裏	他	慶3	同月25日正午	長井同玄齋雅東武より帰国 御越ニ付祝茶	四畳半	長谷川治郎兵衛	口津宗休 長井ちみ女 長井嘉左衛門 我尔 常念寺 三井宗十郎	不見齋一行物	玉川蛤籠	芦屋作 真形	認得齋好 竹ノ口判有	井戸服	瀬戸やき カタツキ	玄々齋造共筒 銘閑
27	江戸	他	慶3	4月5日正午		六畳敷	井植	我尔 扇屋宗兵衛	三藐院様短冊	古木花入 宗旦判有	佐兵衛作百会	桂香合	片手	蘆山やき 平茶入	堀内宗幽造 銘新樹
28	裏	他	慶3	同年2月13日正午		六畳	大坂 長田作兵衛	垣屋十兵衛 三井芳二郎 深川三郎衛 森惣兵衛 口口五左衛門	直齋一行	覚々齋二重	寒雉平霰	染付隅田川	紀州様 熊川	一閑作赤	直齋 銘古し実の
29	表	他	慶3	暁春15日正午	山崎信兵衛兄還曆茶事	六畳 薄茶 広間		山中栄三郎 井坂六郎右衛門 岡田峰助 山中清一郎 道々や定助	原叟二行物 雪溪寿老	宗全一重切	寒雉 小霰 天猫平釜	交趾 鎌倉彫	小服 吸江齋手造	小囊元伯 利形象牙	碌々齋より伝来
30	表	他	慶3	4月15日正午	不審庵				春浦和尚墨跡	唐銅置	寒雉作小尻張	梅月	珠光青磁	瀬戸覚々齋	如心齋作銘三木町
31	表	他	慶3		山田口室 盛雪庵正午茶事		玄口齋		六閑齋短冊 笠叟筆竹の画賛	常叟作一重	古天明作小丸 古道弥作富士霰釜	鶯鶯形 象牙丸	高麗御本 清水やき平	精中齋手造平 〔薄茶器〕黒面次	認得齋共筒銘松島 一閑張
32	表	他	慶3	6月9日正午		八畳敷	井植	我尔 岡村哲三郎 吉岡泉二郎 道々屋銀藏	了々齋一行	檜木宗閑判クツ舟	作兵衛作百会	柚	瀬戸唐津	瀬戸やき	少庵作
33	表	他	慶3	同月10日正午	飾付茶事		長谷川治郎兵衛	信州上田海野町 土屋嘉右衛門 外に式人	江月和尚筆三字横物	ノンカウ作筒	玄々齋好姥口宝珠霰	唐物青貝丸	礼賓三島	時中焼文琳 銘香久山	碌々齋作 銘養老
34	裏	他	慶3	5月29日正午		聴雨庵二畳中板	長谷川治郎兵衛		元伯筆贈米文	啾啄齋作二重銘涼風	小丸道弥作	鎌倉彫丸	珠光青磁	仁和寺囊	認得齋作銘口至
35	表	他	慶3	7月10日正午	不審庵			信州 土屋嘉右衛門 外に壺人	珠光参之 随流齋筆	古銅経筒	古浄味四方	キンマ丸	伝来 高麗筆洗	新兵衛作 銘三ツ柏	少庵作筒共
36	武者	他	慶3	9月7日正午	名残茶事		聴松庵		光広卿 月寄入文	帆張舟	天猫作阿みた堂	唐物青貝 菊の模様萩		瀬戸大津手	真伯作
37	表	他	慶3	10月18日正午			井植	我尔 吉岡泉二郎 岡村口三郎 上井平四郎	宗有短冊 初冬霰	瓢	紹鷗時代 道仁作 ナテカタ	柿	一入黒	織戸	少庵作
38	表	他	明1	2月25日正午	杉田五兵衛還曆祝茶	四畳半 八畳敷 開	柳子喙松	我尔 村田八十吉 谷川蔵人 木藤	隠元和尚筆 観口各号 中院道茂卿懐紙 桂梅口口之歌 不昧公蝶画賛	二重切松尾宗二作 ソロリ 寒雉作	鱈口形古浄味作 東陽坊 寒雉作		宗全造 銘白菊 染付	老松	松尾宗五 銘祝

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
								上井平四郎							
39	表	他	明1	3月13日正午	臨時催シ		至慎齋		天龍和尚筆	友流齋宗巴作一重切	利写鶴首 浄久作	江岑好独楽	口手四方 銘ヒゞ 元伯宗旦作	瀬戸肩衝	江岑
40	表	他	明1	閏4月4日正午			至慎齋		天龍馬ノ画讃写 不識齋筆	如心齋作丸古船	利休四方與次郎作	江岑好木地丸	糸地	道安作大棗	碌々齋
41	表	他	明1	閏月14日正午		魯軒		三宅源五左衛門 堀河右馬之丞 岡部右京 宇兵衛	古風炉切形 元伯極書	唐物手付籠	浄林作車軸	溜松菊	刷毛目 啐啄齋銘	仁清作	如心齋作
42	表	他	明1	閏4月16日正午		不審庵	碌々齋		一休墨跡	元伯所持唐物経筒	道也作羽子板釜	きん満宝珠	長次郎造黒 銘満月	瀬戸藤四郎作	利休作
43	裏	他	明1	10月7日正午		咄々齋	精中宗室	忠熙公 良雅院御方	陽明御殿ヨリ拝領 寿信筆 旭松竹梅双幅						
						又隠		信君御方 玉橋	東福門院様 業平押絵 御賛共	先帝ヨリ拝領	蒲団形古浄元作	大樋亀之瀧	口門院様御手造 黒	利休瀬戸	後院之梅木彫
						抛筥斎薄茶		千代浦	忠熙公御懐紙 冬海		丸釜九兵衛作	一燈写玄猪	東門院様御手造 富士の口	[薄茶器] サツマ	宗見左作 銘都
44	表	他	明1	霜月17日正午			同玄齋	我尔 久世弥一郎 常念寺 林文昌	碌々齋一行 一二三四五六	啐啄齋一重 銘雪打	大徳寺常住文字有 浄味作	染付 銘文	二代目黒 銘コブシ拳		江岑宗左共筒 銘そめつけ
						【後座】							[薄茶碗] 萩	[薄茶器] 黄瀬戸平	
45	裏	他	明1	極月11日正午		今日庵	長谷川治郎兵衛	我尔 久世弥一郎	碌々齋一行 山是山水是水	いわまつ 銘千歳楽	与二郎作 小萬代釜	口南 水鳥	古瀬戸黒 [薄茶碗] 今高麗	伊賀耳附 [薄茶器] 随流判中棗	銘霞雪
46	裏	他	明1	10月11日		魯軒	土橋宗三		寧一山一行	原叟作一重切 銘エクホ	与二郎作 繰口平丸	存星	二代目黒	仙叟好大棗	伊丹屋宗不作
47	裏	不詳	明1	11月10日	初会 一燈居士百回忌打合	四疊半正手 薄茶於広間			仙叟筆 一燈文 一燈筆一行 前>口>	阿波筒 一燈作舟	一燈口鑄ヌキ浄元作 ルイサ丸 浄吸作	交趾 富貴之口 一燈好半開口	一入黒 唐津 志の筒	鶉口写 [茶器] 又玄齋好 ツボゞ棗	一燈作 時代象牙
48	?	他	明2	2月21日正午	一身田専修寺之宮於 安楽庵御茶御代点 町奉行高林主計殿	開ノ間 原叟好四疊半 宮様御出席	長谷川治郎兵衛	近藤柳可 中条瀬兵衛 田中治兵衛 川口久大夫 村口嘉助	曾憲国師一行 松風吹右曲 東山相阿弥 桜絵	篋 竹一重切	道仁作 四方大黒 与二郎作 雲龍	ノノコウ狸	画高麗	瀬戸義右衛門造 [薄茶器] 道安棗	遠州公共筒 銘小牧 遠州公共筒 銘
49	裏	他	明2	2月19日	飾附催	四疊半	長谷川次郎兵衛	丹羽玄真 我尔 道索 長谷川治郎兵衛	坂部様御国来之由	覚々齋造 銘サクロミ	釣釜 浄口古口之内	長井同玄齋母 庵樹の椿古木	人形手	瀬戸シブカミ手	認得齋共筒 銘清明
50	裏	他	明2	巳2月	一燈一百遠忌追福茶		長谷川嘉左衛門		一燈齋作茶匙の軸 投擲之起寄写	一燈作素筒	阿弥陀堂浄味作	大蛤一口うるし書	一燈齋作赤 [薄茶碗] 唐津	備前 銘如意 [薄器] 一燈鶉口写	一燈作石翁筒共
51	裏	他	明2	2月27日正午	一燈居士百忌追慕	四疊半	長谷川次郎兵衛		一燈居士一行	不見齋筒 銘山人	浄味丸	南京口口払子	又玄齋手造黒 [薄茶碗] 時中焼	一燈口口写 [薄茶器] 黄瀬戸	又玄齋作筒共 銘口の花坂
52	表	他	明2	2月21日七ツ時頃より		広間御休所 四疊半 開き之間薄茶	長井嘉左衛門	坂部惣大夫様 口部市之丞 西口房助 本居健亭	寿老人画菱口筆 古田織部侯文 狩野周信筆三幅対	宗旦作一重	尻張 與次郎作	東福門院御物 貝合蛤日扇画	熊川	大棗 余参作	如心齋共筒 銘花守
													宇楽やき 銘手杯 [茶器] 高取	象牙	
53	裏	他	明2	同月29日			長谷川次郎兵衛	坂部惣大夫様	定家以色紙	玄々齋無輪二重	與次郎造	宝珠形独楽	青井戸 銘阿けぼの	大津手肩衝	古田織部侯

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
						開之間		□部市之丞 長井嘉左衛門 □□房輔 我尔	龍口二福対			祥瑞蜜柑	宗入造赤	〔茶器〕原叟在判大棗	不見斎作 銘紙雛
54	裏	他	明2	3月25日正午	古稀祝茶	前荘ニ而開ノ間	瀬平宗平	長谷川嘉左衛門 □原市郎左衛門 三時庵桐蔭 川村粹庵 川喜田久太夫同席（開間）	堅田幽庵一行 古井書大幅	伊部、近藤柳可作一重 仙叟作松	芦屋釜 道也唐犬	一燈手造鶴の口 了入作黒	片手、銘春心 了入作黒	伊賀、銘春富士 〔薄茶器〕竹 堀内宗完 古稀出来	玄々斎作箱共、銘令一
55	裏	他	明2	巳2月	一燈居士百回忌追福茶事	□切庵	潤玄斎宗味		一燈居士筆一行 春來草自生	一燈好阿波焼	五徳透木 了保作	蛤一燈書付	一燈作赤	利休形中棗	又玄斎作筒共 銘雲月
56	裏	他	明2	3月26日正午	山階宮於御茶献茶		深津宗味	伏見宮 山科宮 □之宮 後藤棧宗古 外に四人	近衛前関白忠熙公御筆	端ノ坊	姥口宝珠松ノ絵アリ 屋四郎作	東福門院様御物 貝合蛤	御屋唐物	瀬戸新兵衛	角田川舟 精中宗室作
57	表	他	明2	10月8日正午	稽古場席 長生庵初会	長生庵初会 薄茶 無色軒 棚	至慎斎		知恩院尊超法親王 御揮毫御懷紙 右日の者探幽画 仙鶴写 左月周信画 鶴叟写	古銅籠平 啜啄斎一重 銘長生	小尻張 浄味作 元伯時代浄清作 立爪鏝付亀	染付開扇 了々斎好宇佐の山 拾之内	ノシカウ作黒 御本四方 萩やき	古備前肩衝 〔薄器〕ソボ、ダ棗	寛々作 銘千草 利写象牙
58	表	他	明2	12月朔日午後	茶事	六畳敷	楓井庵	我尔 久世弥一郎 上井平四郎 岡村源祐	細川三斎侯	尺八置筒 銘埋火	浄清作角	唐津亀	片手	元伯好松木溜棗 〔薄茶器〕赤絵呉洲	□庵作
59	表	他	明2	霜月11日正午	不審庵		碌々斎		少庵なげ頭巾墨跡	利休作尺八 銘一曲	与次郎作 大阿弥陀堂	鎌倉彫鴛鴦	原叟手造赤	瀬戸 伴翁銘三番叟	随流斎作
60	裏	他	明2	12月13日	近衛様御新席又新菴御初会	又新菴 日涉軒			翠山公御筆 御願し御奉讀 忠熙公御詠歌 冬日三首御懷紙	竹ノ根一重 光悦作	八角口古浄味作	金森宗和手造 真形 古芦屋	建齋天目 次=古イマリ 古唐津 次=一元作 太郎坊写	古瀬戸尻彫 〔薄茶器〕黒カワ製中次 利休堂花瓶ノ松ヲ用テ 宗室作	元伯共筒
61	裏	他	明3	正月16日正午	久世安庭改名茶事	六畳敷	壽斎亭		堀内鶴叟菊画賛	仙叟好ヘラ筒	大矢瓶	瓢	善五郎 ハケメ写	信楽 銘山人 〔薄茶器〕一燈判棗	玄々斎共筒 銘千代雲
62	表	他	明3	正月26日午後	茶事	三畳敷	楓井庵	我尔 上井 岡村 久世	道斎卿一行物	唐銅 フリ、籠	浄雪作 阿みた道丸	備前	旦入造黒	老松写	藤田高斎
63	？	他	明3	巳極月19日正午	土佐中納言様御催茶事	三畳中板		上林三入詰	清庵和尚一行 雲出洞中明	宗旦作一重切	九兵衛作 妙喜庵	交趾鳥	高麗堅手	肥後やき 銘ワキ詰	細川三斎御作
64	裏	他	明3	庚午仲春		又隠	精中宗室		近衛光山公御詠	又玄斎一重 銘赤子爪	霰露釜 浄久作	交趾福の字	長治郎黒 大夫黒と名	尾張公御国焼	豊大閣御作伝来
65	表	他	明3	2月28日		二畳中板	少亭	我尔 西村伝右衛門 上井平四郎	吸江斎筆 利休居士二百五十回忌之掛物	一燈置筒 銘口ノ入	芦屋 角手取	旦入作	赤ハタやき	黒中棗	玄々斎共筒雲之錦
66	表	他	明3	3月9日正午		四畳半	長谷川治郎兵衛	堀内宗幽 本居宗朝 三井宗十郎	了々斎一行 山呼萬歳聲	玄々斎作 銘山家眠 ふく遍	小阿弥陀堂 寒知作	仁清板夜貝	ト、ヤ	利休時代中棗	碌々斎作 生月ヲ引ル 椀口
67	表	他	明3	3月10日正午	臨時茶	四畳半	長井嘉左衛門	堀内宗幽	如心斎筆横物	泰叟宗室作一重	霰繰口	染付 飛龍	宗入黒 銘千代の友	玄々斎好金砂棗	碌々斎作筒箱共

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
								三井宗十郎 本居宗朝		銘遠浦	古天明作		〔薄茶碗〕三嶋 中服	〔薄茶器〕不見齋好 作茶桶	
68	表	他	明3	3月12日	臨時稽古茶	四疊半	西村伝右衛門	堀内宗幽 本居宗朝 上井平四郎	如心齋筆横物自画讃	古銅 置 八角	与二郎作 鈞釜	御本角 蝶の画アリ	権兵衛焼 銘花楸トアリ	仁清 〔薄茶器〕利中棗	覚々齋作
69	表	他	明3	閏14日	臨時稽古茶	三疊向切	上井平四郎	堀内宗幽 本居宗朝 西村伝右衛門	碌々齋鶴	銅細口	宗旦好 口四方	染付 立パイ	大樋やき	瀬戸 啐啄齋 銘山城	亀甲山
70	裏	他	明3	2月11日正午	山階宮於御前荘御茶			御相伴深津宗味 近衛御両卿 山階宮 広幡忠礼公 東御門跡	近衛羽山公御筆	利休形真手桶	與次郎作 尻張	仁清写馬	近衛伝来 新赤ハタ前作	紹鷗形棗	金森宗和公共筒
71	裏	他	明3	2月26日	田安様御入ニ付茶事 東京仙叟宗意宅江	道具 正月29日 抛筥斎			利休歌入三斎宛						
									沢庵和尚作二重切	阿弥陀堂 与次郎作	古染付水牛	天目 永樂作	よしの山仁清作	今井宗薫作	
72	表	他	明3	4月24日正午	亡父六有十三回忌追慕茶	聴雨菴	長谷川宗暉	本居宗朝 西村伝右衛門 上井平四郎	宗旦自画讃 六祖画又用廻四葉 本来一物連唱相唱	新 吹		はしら口 莊子義馬	萩 仙叟手造赤	大樋焼瓢箪 銘閑く山	玄々齋作 銘養老
73	表	他	明3	6月10日	夕俟時茶事	三疊	山田 祝部閑雪	宗朝 野村	如心齋文	熊野産 籠	杉釜	啐啄齋好梅月	八代焼	ツボゞ棗	江岑手造
74	表	他	明3	7月23日	鶴叟宗完居士七十回忌 追悼催ス 社中一統 巳之上刻ヨリ来請	無茗軒 飯後濃茶 長生庵 社中休之間	堀内宗幽		鶴叟像		浄清作富士形	堆朱丸グリ	旦入造黒井戸形	夕顔棗我尔好十之内	鶴叟作 銘穂口
									不識齋鶴叟伝書 吸江齋筆				朝鮮唐津平 銘ハチス	瀬戸 銘国披	随流写
									了々齋筆不識齋ノ三字	竹宝筒	浄雪作真形	碌々齋好独案	了入造赤	〔茶器〕雪吹 新開	利写象牙
75	表	他	明3	9月16日正午		七疊	碌々齋	入例場合	大心和尚堅物 禪一字	啐啄齋一重切	左口郎不二	唐物柚	乾山	松ノ木 和歌山吹上松ノ木	覚々齋
76	?	他	明3	9月22日	随縁庵席開初会		京島田 久々齋		光広公短冊 寄松祝	輪無二重新調	あられ	交趾丸鶴	本手立鶴	利休在判中棗	宗口共筒
77	裏	他	明3	9月24日	山階宮御口切		深津宗味		慶喜公御筆 東山は長寿	瓢宗旦名物	茶飯 浄雪作	古染付丸	天目了入作	□□丸赤	吸江齋 新宝山三十本ヅ
78	表	他	明3	閏月20日正午	不審菴茶事		碌々齋		元伯筆 夢	左内織戸作一重	利休時代 大阿弥陀堂	如心齋手造 鼓形	安南	古伊賀 銘山木	原叟作共筒 発句銘
79	表	他	明3	霜月28日正午		四疊半	聴雨庵	我尔 西村伝右衛門 角屋七郎次 林久昌 久世女口	烏丸光祖横物	石翁好置筒	妙勝 與次郎造	祥瑞堅爪	精中叟手削赤	大棗	吸江齋作 銘福の神
80	表	他	明3	12月5日正午		四疊半	西村伝右衛門	我尔	松竹梅和歌 御三首懐紙	青磁籠耳	浄味作 大尻張	交趾狸	志野	利黒中棗	六閑齋作共筒
81	表	他	明3	臘月17日正午	愚母病氣全快以祝会含稽古茶	看雲亭	長井とみ女	我尔 久世安亭 西村伝右衛門 角屋七郎次 板倉 益岡屋利兵衛	三筆横物 宗仁女、玄々齋、宗柏女	不見齋作二重	萬代屋清右衛門作	認得齋手造赤	半使	玄々齋自画朱うるし書 亀の中棗	碌々齋作 銘延年



No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
82	宗和	他	明3	霜月5日ヨリ口切	古筆了仲				松竹梅横物 二文字篆書鈎閑	雲州不昧公作一重切	宗和好丸	青磁獅子	錐土器	宗和所持黒平棗	金森宗和侯共筒
83	江戸	他	明3	11月20日正午		仙波太郎兵衛	溝口氏老侯 小堀権十郎蓬露 古筆了仲 鈴木宗栄	細川三斎半切立物	瓢箪宗旦	利休所持 古天明裏甲之平形	青磁木魚中形	宗胡録	古備前手付	堀内宗及共筒	
								雪舟大三幅対							
84	表	他	明3	閏月27日正午		桑居	堀内宗晋		沢庵和尚	宗已一重	与次郎作中尻張	交趾アコタ小	一入黒	利休棗	瀬戸カモン
85	表	他	明3	臘月5日正午	我尔改名披露	長生庵	堀内宗晋		如心斎ヨリ仙鶴へ	了々斎作一重 銘西王母	与次郎作面両丸	交趾早蕨	鶴叟以祝丹波黒銘昔話	中棗	了々斎作銘長寿
86	藪内	他	明3	庚午10月26日昼	初会藪内紹智家督祝出茶会録				相阿弥書横披 安心二文字	名物古銅橋爪	古天明作茶臼形	古信楽烏帽子	金海四方	花藤御本ルイ座	竺翁作共筒
87	?	他	明4	正月	初釜正午		相室玄口		山階宮晃親御染筆	利休無銘一重切	今日庵伝来 小萬代屋之写左兵衛作	橙 精中書付	青磁 〔薄茶碗〕新物吉右衛門作 黒	信楽肩付 〔薄茶器〕黒中棗	閑翁共筒 銘不老
88	表	他	明4	1月25日正午			角屋七郎次	我尔 長谷川治郎兵衛 長井嘉左衛門 長井三郎右衛門 林文昌	守信秀二画 時信三保	舟 銘業	芦屋作 平釜	蛤 茶の画	御深井焼 御紋キリ有	瀬戸 銘口御所	本居造
89		他	明4	1月27日正午		広間	長井三郎右衛門	我尔 久世少亭 大井又市 竹内嘉之助 道々や藤之助	栗翁殿 壽大一字	青磁真形	平丸縁口 浄口造	大樋やき 亀の形	□口手造 銘難波	瀬戸	吸江斎作 銘山石
90	表	他	明4	2月14日正午	家督隠居祝茶	聴松庵二畳中板	中条口平	我尔 久世少亭 岡村源祐	官休菴一指斎宗守ヨリ為願 到来之一行	啐啄斎一重 銘子寶	切掛 道也作	祥瑞柿	尼五前	瀬戸耳付	仙叟作 銘一楽

【表2-2-5】 本居信郷著『會席附 六番』

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
1	表	他	明4	2月27日正午		待合八畳敷 宗晋好二畳大目	山口右衛門	堀内宗晋 一志栗園 我尔	堀内宗露画 宗旦二行物	不寂斎作一重	与二郎作 ナテ肩ヲタレ	了々手造 吉五郎やき	無限斎手造黒 銘アケマキ	瀬戸	道安作
2	表	他	明4	同月29日正午		待合八畳敷 盛雲庵三畳上ケ 大目	松室玄レイ (零へに佳)	堀内宗晋 我尔 野村義雄	不寂斎一行物 居士堅文	常叟作一重 無銘	古天猫霰真形	備前焼袖	道入手造黒	盛阿弥小棗	道安作 二本入之内
3	表	他	明4	同月晦日正午		原叟好四畳半	衛内新左衛門	堀内宗晋 我尔 野村義雄	至慎斎一行物 此度御贈之物	啐啄斎作一重	道仁作筒	時代蒔絵丸	長入黒	嶋物丸	了々斎作 銘白俊馬
4	裏	他	明4	午冬	東京仙波吉郎兵衛口切茶記				三斎公画 三幅対雪舟筆	宗旦作瓢 発句銘	古天明裏平	青磁木魚	宗胡禄	備前手瓶 銘獨尊	津田宗及作共筒
5	表	他	明4	午12月6日御入		仙波吉郎兵衛	近衛様 田安様 京 御門跡様		一休和尚一行	宗甫作一重切	古天明裏平	青磁柿	〔天目〕東山 京宗旦在判 〔薄茶碗〕了入黒 〔薄茶碗〕さけめ萩	唐物耳付	利休共筒 銘直らキ 〔替茶杓〕又玄斎共筒 銘盗牛
6	表	他	明4	未3月2日正午		残月亭一客一亭	碌々斎	久志本從二位一禄匠 ナリ	桃枝押絵	青磁置	羽子板 道也作	真塗三日月	萩ハケメ	藤四郎作 銘さざれ石	吸江斎作 銘祝
7	表	他	明4	4月16日正午	福井斜橋殿へ			至慎斎 衛藤碧至 野村可清	松花堂句入画	南蛮	九兵衛作写 姥口丸	瓢柳円形	至慎斎手造黒	古瀬戸 銘不老仙	原叟作銘カマシ
8	表	他	明4	4月朔日正午	福井斜橋茶亭	八畳		至慎斎 我尔 一志春口亭	春屋哥入文 卯月二日トアリ	青磁四方		ヤ子形瓢香合	松平萩	古瀬戸	宗和写
9	表	他	明4	4月2日正午	山口和多理茶亭	待合八畳 席		至慎斎 我尔 野村可慎	了宝筆画 牡丹花懐紙 詠三首和歌	啐啄斎二重切 銘舊衣	浄味作 練口小尻張	天川	ノンカウ黒口四方	一閑作黒中棗	少庵作
10	表	他	明4	2月3日正午	大坂池永新兵衛茶 碌々斎大廻御下坂二付 御指きニ御座		池永新兵衛		宗旦一行物	朝鮮唐津	与次郎作中阿弥陀	南京青磁 立唄	如心斎五之内黒 〔薄茶碗〕前之通	随流斎好溜棗 〔茶器〕安南	直斎共筒
11	表	他	明4			不審菴	碌々斎		石川丈山筆	吹貫置筒	四方 古浄味作	紹鷗形白粉引キ	覚々斎手造	古備前肩衝	江岑作
12	裏	他	明4	5月9日午時	京 国松栄吉為会				精中月画賛	信楽口 光悦造	古浄味 小丸	木地扇面形	伊羅保黄瀬戸	備前肩衝 銘閑山	玄々斎選曆作 銘 玉馬
13	裏	他	明4	5月晦日	於盛雲庵朝茶事	袴附八畳 席	玄露斎		常信李白瀧見黒 元伯画讚	少庵作一重切	小達磨 浄元作	唐物存星丸形 水牛黒	一燈手造黒平 銘唐崎夜口	伊賀肩衝 銘玉手箱	仙叟作共筒
14	表	他	明4	6月上旬	正午茶事	袴附六畳 席 十畳	可清		許田洗耳写 応挙筆墨画 松花堂筆古歌色紙	啐啄斎作置筒	中丸大霰 孝知道也作	了々斎好乱桐	井戸脇	黒中棗	元伯作
15	表	他	明4	7月24日	正午茶事		野村義雅	我尔 一志栗園	松花堂色紙	江岑作尺八形	浄林作 ナテ形	紹鷗形	ノンカウ作黒	上野焼カタ付	吸江斎作共筒
16	裏	他	明4	辛未8月3日	臨時茶	看雲亭	長井嘉左衛門	和歌山 竹田拙斎 長谷川次郎兵衛 丹羽元亭	烏丸光廣卿横物 富士月画讚	宗旦作一重	小阿弥陀堂 與次郎作	東福門院様御物 貝合蛤	いら保平口 片身替り	秋の夜棗	仙叟作共筒

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
17	表	他	明4	中秋4日正午	飾事	聴雨庵	宗暉	竹田拙斎 同 玄斎 元亭	拙叟和尚 三字横物 吸江斎 玄々斎	青磁耳付	御寸釜 寒雉作	鎌倉彫甲蟹	啐啄斎手造	織部 銘キツノキ	月測宗印作
18	表	他	明4	9月21日正午	不寂斎宗心居士百回忌	長生庵			仙鶴若様との口号	常叟作置筒	九兵衛作姥口小丸	染付木瓜形	伝来青磁人形手	利休瀬戸 銘一筆	不寂斎 銘桂馬
19	表	他	明4	霜月10日正午	家督以祝口稽古茶	四疊半	小津清左衛門	我尔 大林五二郎 三井利兵衛 小津新兵衛 岡村源祐	直斎筆二行物	天龍置筒 銘ツラノ	繰口丸 与二郎作	交趾寿之字	石翁手造 銘賢人	サツマ	一燈共筒 銘扇子
20	裏	他	明4	同月26日正午	長谷川治郎吉初茶事	四疊半	長谷川治郎吉	我尔 大井 岡村	近衛忠熙卿御筆静謐横物	常叟作尺八掛	寒雉 尻張	仁清宝珠	人形手	瀬戸不西口	精中作 銘千年口
21	表	他	明4	臘月8日正午		向切席	上井平四郎	我尔 西村伝右衛門	覚々斎文句入	宗晋作	道爺造 クリロ平丸	紹鷄形白粉引キ	御本	瀬戸カタ付 啐啄斎銘山残	了々斎若年作 銘心月
22	表	他	明4	同月23日正午		三疊向切	柳井庵	久世省亭 我尔 常念寺	宗晋画賛	ナタ籠	天猫造 丸	清六造丸	馨山焼	備前やき	啐啄斎造 黒木
23	裏	他	明4	未極月23日	夜咄シ茶事		長井嘉左衛門	我尔 三井利兵衛 西場房侷	不見斎横物 無一物 三大字		大萬代屋 与次郎写 浄房作	ハジキ一入作 東下	信楽筒	小棗秀次作 〔薄器〕萬古焼	元伯共筒 銘とし
24	表	他	明5	明治5年2月朔日正午		四疊半	長井とみ	我尔 久世省亭 大井又市 ヨリ板倉吉左衛門	飛鳥井雅章公和歌	清中作	霰丸 寒雉作	古薩摩	不見斎手造黒 〔薄茶碗〕古唐津	唐物 〔薄茶器〕木地 真中次	元柏女作 銘老楽
25	裏	他	明5	3月9日正午		四疊半	二時菴	我尔 上井平四郎 長井九郎左衛門 久世省亭	玄々斎二字大横物	覚々斎一重筒 銘 露	寒雉作 車軸 釣釜	不見斎京都	信口斎作赤 一燈銘 花	竺叟好	古田織部作
26	表	他	明5	4月25日正午			小津善吉	我尔 岡村伝右衛門 大井五平郎 岡村源祐 久世安亭	玄々斎短冊	一燈作尺八 銘 一 二 三、	小丸 庄兵衛昨	堆朱 甲ニ蟹	黄伊羅保	瀬戸	啐啄斎作 銘筥
27	表	他	明5	神伏5日於飯後		飯口	久世安亭	赤沢宗凹 本居宗朝 継松寺 角屋七郎二郎	□□御たんさく	大同竹	古道也 真形 あられ	啐啄斎三日月	高麗銘蓄	宗旦大棗	紹鷄作
28	表	自	明5	5月21日正午	初会	本居席	朝ノ庵宗凹	長井嘉左衛門 同 九郎左衛門 長谷川次郎兵衛 同 次兵衛 同 由之助 小津清左衛門 同 益吉 上井平四郎 久世省亭 岡村源祐	扇子 確松志公月画賛	宗旦旅枕	古天明 芋頭	黒可間く□ 唐物	源元賢手造 〔薄茶碗〕 桐葵紋ちらし 仁清茶入萃	朝鮮唐津 〔薄茶器〕 □□大棗	一翁共筒 銘 侘介

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓	
								林文昌 丹羽元亭 西村得茶 清水八郎兵衛 竹内育次郎								
29	裏	他	明5	仲春6月正午		又隠	精中宗室	長谷川次郎兵衛 深津宗味	鳥丸光廣公御短冊	珠光青磁耳付	小阿弥陀堂 与二郎作	伝来平コマ	六有居士ヨリ模写 ノンカウ黒小印 銘入間川	東福門院ヨリ元伯領 仁清作	元伯作松風	
						咄々齋ニテ薄茶			相阿弥筆 寒山拾得之双幅	不見齋作小舟 号張良	肩面反筒霰 天猫作	富士蛤 玄々齋好	伊羅保	大立鼓笠叟在判	禁中右近 橘ニ而削	
30	裏	他	明5	6月9日正午	西京国松栄吉茶事	四疊半床		長谷川次郎兵衛 深津宗味 同苗 宗宙	よし野口懐紙 詠松久友頤	冬寒耳付	天明作 腰ニきくの 絵	青貝一文字 梅ノ図	古三島	沢三大棗	笠叟共筒 銘貝遭	
31	裏	他	明5	5月11日正午		四疊半	深津宗味	長谷川次郎兵衛 赤松栄吉	無学和尚	柏叟好 赤絵釣舟	鶴頭霰 寒雉作	長谷川休松居士 □□□	黄伊羅保	宗旦在判棗	泰叟作且模 直齋	
32	表	他	明5	9月26日正午			楓井庵	我尔 久世省亭 岡村源祐 上井平四郎	大徳寺寛州和尚 画讃横物		天明作 あられ	菊蒔絵丸	黄伊羅保	一閑張	道安作	
33	表	他	明5	仲秋19日十二時	道安席ニテ名残茶		碌々齋		一濱和尚大横文	宗全作籠	道弥作雲龍	筒根来	珠光青磁	伝来藤四郎作 新出雲焼	如心齋作 銘山姥	
34	裏	他	明5	壬申8月27日正午		咄々齋 椅子手前	玄室	英国人 トーマスボルンビー ー・ウアニス イミリイ・ウアニス 通シ 青木氏 島田久々齋 鈴木宗遂	東福門院様御自作 業平拝領翰	先帝拝領 銅ウスカタ	與次郎作 雲龍	和歌浦 月日貝 一条殿大政所	古今利	認得齋好 夕顔棗	象牙 利居士共筒	
						寒雲亭			土佐光起筆 鶴二幅対	田安三玄侯一重切 銘 □廻り	小阿弥陀堂 與次郎作 雲龍	光琳蒔絵	〔薄茶碗〕青井戸		一燈作共筒	
35	裏	他	明5	霜月5日正午		四疊半	長井嘉左衛門	世古 長谷川次郎兵衛 丹羽元亭 三井利右衛門	日野資持公	伝来瓢	尻張 與次郎作	絵高麗	長次郎作黒	一燈在判 銘如	利休作	
36	裏	他	明5	10月27日正午		四疊半	聴雨庵	我尔 長井九郎衛門 林文昌 長谷川次郎兵衛 継松寺	又玄齋一行	閑部広口	寒雉作 鉈霰	交趾 □□蟹	鬼熊川 〔薄茶碗〕了入赤 銘 頭巾	五郎作大棗 〔薄茶器〕唐物累座	象牙利休形	
37	表	他	明5	10月10日12時	初会	長生庵	宗晋		江岑筆雪中待入文	随流齋作一重切 無銘	切り合尻張 与二郎作	交趾南瓜	打彫伊羅保	道安棗大小二ツ入	如心齋共筒 銘長生	
38	裏	他	明5	同26日12時	長生庵道具万清ル事	御開キ無色庵		近衛両御所 猛山殿 光山殿 御成 御相伴三人	智恩院尊超法親王 御宸筆御色紙		繰口 ま丸 浄雪作	鶴叟好朱塗菊	〔薄茶碗〕黒一入作 銘丸頭巾 御本立鶴四方	〔薄茶器〕 唐木寸切青貝ニ而 牡丹打抜搔□アリ	野躍木 玄々齋削ル 銘養老	
39	表	他	明5	霜月21日正午		三疊向切	楓井庵	堀内宗完 本居宗朝 上井平四郎	了々齋一行	尺八置	なて形	新瀬戸はじき	松本萩	随流判中棗	覚々齋作 銘アツモリ	

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
40	表	他	明6	霜月25日正午		不審菴	碌々齋		天室和尚筆 雲門開	黄瀬戸立蠶	伝来九兵衛作 ふとん	南京啐啄齋	のんかう赤 銘 米ノ市	中棗	覚々齋作共筒 銘蟻通シ
41	表	他	明6	1月18日	於 驛部田石井別業藏六庵 午後菓子茶	藏六庵	堀内宗完		仙露人丸月画賛	如心齋作 銘一重二王	藏六庵常什大万代屋 浄雪作	織部フロントウ	不味金海瀧濱形	了々齋好木梅ノ画	宗全作 銘正義
42	表	他	明6	1月23日正午	臨時茶	看雲亭	長井九郎左衛門 我尔	堀内宗完 我尔	天然一行	如心齋尺八 銘春雨	姥口 道也作	蛤 宗完書付	宗味やき黒 銘手捻 〔薄茶碗〕松本萩	瀬戸 新兵衛作 〔薄器〕黒中棗	随流作共筒 銘末廣
43	表	他	明6	1月25日12時	臨時茶	大釣棚二畳台目	長谷川次郎兵衛 我尔	堀内宗完 我尔	碌々齋横物 寿老人自画讃	原叟作老重 銘カケカミ	姥口 萬代屋 与次郎作	蛤	瀬戸升四方 銘 青柳	仁清作 〔薄器〕玉の絵	玄々齋作 銘恵方竹筒
44	裏	他	明6			今日庵	精中叟		利休茶ノ湯本意	古丹波釣付置筒	霰丸 浄味作	喜久絵小蛤	トヽヤ	西行駒繫橋 竺叟好溜棗 本〔薄器〕瀬戸油滴 続〔替器〕宗旦判 小棗 薄〔替器〕石翁好書付 竹面中次	伝来 元伯作松風
45	表	他	明6	3月14日14時	飯後撤髮茶	聴雨庵	桑名 片桐休甫 我尔 増井喜右衛門 残間口光口 長谷川由之助		小堀大膳侯小色紙	玄々齋作無輪一重 銘不老仙	古道也作 肩衝	画ハギ	不見齋手造赤 銘祝かい 〔薄碗〕信楽	志戸呂	一燈作 銘優曇花
46	表	他	明6	3月26日正午	八畳敷席開		片桐休甫 碌々齋宗匠 相伴 中村弥次郎 竹内喜三郎 広瀬長二郎 古田彦五郎兵衛		吸江齋 玉ノ月画サン	江岑作一重		染付桃	金海	春慶松屋彫 〔薄茶器〕大棗	碌々齋清国ノ竹を以 銘白露新席ニ贈ル
47	表	他	明6	同月29日正午		二畳大目	桑名 古田嘉右衛門 碌々齋宗左 相伴 竹内弥兵衛 片桐休甫		碌々齋 玉の月画サン	元伯一重 銘大力	道也 真形霰		御本たち鶴	宗全手造黒 〔薄茶器〕雪吹	利休作
48	表	他	明6	同月29日正午	桑名於古田氏	二畳大目	碌々齋 中村源二郎 広瀬長次郎 竹内嘉三郎		円鑑国師不審庵記	元伯作尺八	道也 真形	キンマ宝珠	長次郎黒	瀬戸吉兵衛焼 銘面箱	利休作
49	表	他	明6	4月4日飾付茶		五畳	楓井庵 碌々齋宗匠 相伴 桑名 片桐休甫 我尔		道安文	元伯一重切	浄雪作 ノカツキ釣釜	阿漕焼	御本伊羅保	瀬戸ツマミ	啐啄齋 銘黒木
50	表	他	明6	同5日午ノ12時		四畳半	長谷川宗暉 碌々宗匠 相伴 片桐休甫 我尔		吸江齋一行	玄々齋作無輪一重	鎖釣 寶珠形 天明作	染付半開扇 蘭絵	如心齋手造赤 〔薄茶碗〕人形手	元伯在判 尻張棗	碌々齋作海老
51	表	他	明6	西4月11日正午	以祝相含稽古茶	看雲亭	長井九郎左衛門 薄茶 孝吉 我尔 板倉口左衛門 大林又市 藤村屋 三井利右衛門 藤岡屋利兵衛		柏叟筆一行	常叟作一重	興次郎作 尻張小	大樋寿老亀	伊羅保千草手	薩摩耳付	竺叟 銘口入松
52	表	他	明6	4月18日	臨時催 正午	不審菴	碌々齋		春屋和尚不審庵之記	古織作一重	寒雉作 小尻張	如心齋 三ツ鱗形	伝来高麗 筆洗	利休判中棗 〔薄茶器〕葛金林寺	随流作銘淀川
53	裏	他	明6	5月26日午ノ12時			長谷川富味 古筆了仲 同 妻不雪		近衛家熙公堅物	金森宗和侯二重 銘白糸	居士好卍字 古道也造	紅地堆朱輪花形	彫立峰 〔薄茶碗〕仁清	詭之大棗 〔薄茶器〕唐物耳附	玄々齋作 銘千枝

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓	
								同 昌員 小津新兵衛 木屋藤平								
54	表	他	明6	5月30日午時		不審菴	碌々齋	千宗室 了新 同 玄室 深津宗味	丈山翁詩	江岑作舟	道也巴	アマカワ	宗全作赤平	仁清四方 〔薄茶器〕サツウ	覚々齋 銘白兔	
55	表	他	明6	5月24日正午		長生庵	宗晋		了々齋筆 古歌	江岑作 銘閑月	元伯好口四方 浄元作	簾貝	刷毛目	瀬戸細長キ 銘セタカシマ 〔薄茶器〕□齋好解棗	随流作筒共	
56	裏	他	明6	5月25日正午	臨時茶	看雲亭	長井嘉左衛門 薄茶 とみ女	古筆了仲 同 不雪女 同 昌員 木屋藤兵衛	一休和尚二行 松花雪	元伯作一重 銘 傾	小阿弥陀堂 與次郎作	東福門院様御物 元伯拝領貝合ノ 蛤日扇ノ絵	常叟手造 銘金龜	瀬戸新兵衛	精中作筒共 銘 春苔	
									雪舟筆山水双幅	古伊賀	切□神代寒雉作	唐物丸	三嶋小服	〔薄茶器〕根来朱		
57	裏	他	明6	西6月25日正午		六疊	長井嘉左衛門	我尔 田中司馬 石井与一郎 木屋藤兵衛	天祐和尚 清嚴和尚兩筆	信楽 古銅龍耳	小丸 九兵衛造	唐物青貝	彫三嶋 〔薄茶碗〕□□平 銘 タ立	大棗 盛阿弥作 〔薄茶器〕唐津	精中作筒共	
58	表	他	明6	6月16日正午	不審庵 道安席		官休庵	中条市左衛門 同 家内 平吉左兵衛門	清嚴和尚円相	寂々齋籠	寒雉作 乙御前	大蜆貝一吸齋	ノンカウ作黒	益四郎 芋子	一翁共筒 銘小長カ	
59	表	他	明6	8月16日朝茶		四疊半	三時庵	我尔 丹羽玄亭 西場房輔 井筒左口左衛門 長井九郎左衛門	紫野乾宗和尚一行物	宗且一重切	□□作	一燈判 石	古萩 銘大名	サツマ	ふしき齋好 むかし形 二本入	
60	表	他	明6	8月22日	朝飯後菓子茶	八疊	楓井庵	我尔 上井平四郎 久世安庭 岡村源祐	碌々齋短冊画讃	宗且作一重 銘 苔導	天明作 真形	松江浦 吸江齋判	朝鮮イラホ	元伯好 菊蒔絵	碌々齋作共筒 銘東山	
61	表	他	明6	9月8日	皖寂五十回忌二付了々齋宗匠	残月亭	碌々齋		治寶和尚御筆 好雪ノ二字							
						九疊敷			皖寂像宗完画							
						丸炬 二疊敷			栗邊和尚筆							
						七疊敷			了々軒号別松和尚筆							
62	表	他	明6	10月27日午時臨時		七疊	碌々齋	川喜田塩翁 楽吉左衛門	如心齋菊月画讃	相籠	道弥作己 風炉	宗全作一閑張	トヽヤ	瀬戸	覚々齋作共筒	
63	表	他	明6	10月30日臨時茶	権大納棚序	大釣棚席	長谷川次郎兵衛	和歌山 坂部惣大夫 長井嘉左衛門 西場房輔 我尔	仙叟月画讃	宗全作一重	道也作コシ 雲龍蔽	瀬戸やき 弾	一入作赤 銘唐口	江岑判 中棗 黒	碌々齋 入銘 池月	
64	表	他	明6	11月6日正午		四疊半	継松寺光保	我尔 久世安庭 楓井庵主 岡村源祐 上井平四郎	大口□自画讃	小堀宗甫作 銘鄙月	あしや 丸 道也作	今里	伊羅保 〔薄茶碗〕一入黒	備前丸 〔薄茶器〕黒中棗	如心齋作 銘ツナキサル	

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
65	表	他	明6	閏月13日正午	口切茶事	六畳	楓井庵	我尔 上井平四郎 岡村源祐 久世安庭	大徳寺 江雪和尚横物	直斎作置筒 銘かゝし	与二郎作 丸可ま	ノンカウ造赤	松本萩	黒中棗	碌々斎造 銘東山
66	裏	他	明6	同11月7日午ノ時	臨時茶	一畳台目	桂雪庵	口古氏兩人 丹波氏	近衛房忠公一行 茶園永日香	宗旦作尺八 銘ハツシモ	道也尻張	染付張子牛	礼寶 〔薄茶碗〕赤膚焼 品方	飛鳥川手 〔薄茶器〕茶桶	不見斎作共筒 銘大こく
67	表	他	明6	11月23日午時		不審菴	碌々斎		一休和尚三首頌	利休居士一重	伝来与次郎作 繰口丸	交趾	宗入造黒	江岑棗	道安作共筒
68	表	他	明6	11月9日12時			玉手侘左衛門		不昧公雪中自画賛	碌々斎一重切 銘力士	古浄味作 姥口	染付竹ハシキ丸	了々斎手造黒	江岑判中棗 〔薄器〕菊桐雪吹	宗旦作早馬写
69	武者	他	明6	11月15日			千艸屋亭 平瀬宗十郎		西行 和歌	高取耳付掛	古道也 尻張	呉洲	ノンカウ黒七種ノ内 〔薄茶碗〕人形手	松本棗 〔薄茶器〕丹波立鼓形	一翁共筒 無銘
70	表	他	明6	11月28日午時		不審庵	碌々斎	白山善五郎 同 五二郎 源助	一休和尚三首頌	利休居士作一重 銘サガ野	伝来與次郎 繰口丸	交趾□□	宗入黒	江岑棗	道安共筒
71	表	他	明7	戊年1月9日午時		広間於無色軒	坂内至慎斎	小野一同	露叟筆梅画	覚々斎作一重	以藝州侯鶴叟好 繰口萬代屋	志野手鞠	金海 州浜形	瀬戸芋子	如心斎作 銘長生
72	表	他	明7	1月13日	七畳屋敷ニテ	七畳	碌々斎		元伯書神 歌発句	後園之青竹尺八	天明作大 鶴首	覚々斎木彫	仁清蓬萊 〔薄茶碗〕呉器小	嶋物 〔薄茶器〕芽張柳	啖啄斎作 銘福寿竹
73	裏	他	明7	同月28日正午				千宗室 同玄室 千宗守 堀内宗晋 深津宗味						唐物瓶子 銘梅花	紹鷗作
74	江戸	他	明7	2月24日	午時後菓子茶	三時庵四畳半席	岡村義哲	西場房輔 我尔	鶴(鶴)叟一行	宗口造 銘千歳友	九兵衛作 萬代屋小	長入作 宝珠形	萩やき 雪月花句アリ	仁清	口斎作
75	表	他	明7	4月16日正午	心祝相会稽古茶	四畳半	長井孝吉	我尔 繼松寺 吉兵衛	狩野晴川院富士画	認得斎作二重	霰丸 寒雉造	染付桃	古萩	不見斎手造黒	碌々斎作 銘寿星
76	表	他	明7	戊4月22日東京伏原公	御邸催ニ而初会				梁耜寿老之画	古銅	浄雪造 鳳凰風炉	サミタ川 桜木白朝鮮	当時吉左衛門造 〔薄碗〕井戸小服 後手 赤絵	内海唐物 〔薄器〕利休竹 羊蒔絵	記三作
77	表	他	明7	4月17日	12時大坂難波料理舎 □南亭裏ノ席向切ニ而キ張茶事		大坂住山江甫	川喜田性斎 外に五人	如心斎一行 松樹千年祿	了々斎作一重	道也作百会	染付 クチナシ	黄伊羅保 〔薄茶碗〕左入作 黒四方	盛阿弥形大棗 〔薄器〕中次	吸江斎作共筒銘鶴(鶴)
78	表	他	明7	5月30日正午	亡父六有追悼 十三年ニ當	一畳台目	聴雨庵宗暉	我 小津清左衛門 長井九郎左衛門	常叟横一行 清風来故人	青磁経筒	小阿弥陀堂 与二郎作	橙 玄々斎判	長次郎造黒 〔薄茶碗〕井戸脇	広沢手 盛阿弥小棗 三ツ入 〔薄器〕盛阿弥菓子器 三ツ入之内	石翁作
79	宗編	他	明7	明治7年5月	脇坂従四位老□□後追善 故カロ斎優学追善会記		脇坂従五位殿		カロ斎優学筆	鶴のひと聲	利休所持宗編伝来 四方釜	唐物心経	みし満	瀬戸丸肩衝 大徳寺手	宗編共筒 我夢
						広間			子□十二首哥切	唐物 セミかご	ノカツキ日作	カロ斎優学好	〔薄茶碗〕渋かみ手 大仏文字入	〔薄茶入〕木地	カロ斎優学好 二本入ノ内象牙
80	裏	他	明7	5月15日正午	正午茶事		田安德川従二位公	三門 徳川確亭様 山科宮 谷津道也	回多羅布袋図 右墨絵	豊太閤作置筒	夕顔形 口 夕顔彫	堆朱クリ揚成作	井戸 銘苔清水	利休谷川手肩衝	細川三斎歳共筒

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
								古筆了仲							
81	表	他	明7	6月1日正午	長生庵初会	長生庵	至慎齋宗晋		沢庵和尚氷室哥入之文	覚々齋作掛尺八	九兵衛作 姥口小丸	唐物丸	一入造黒	嶋物耳付	瀬田掃部共筒
82	表	不詳	明7	4月10日正午橋端	徳川家御別荘四畳半御席ニ而 利休所持金馬茶箱皆具ヲス	御待合		徳川三位様 同 御内室様 御相伴三人	元伯短冊 拝領 後成卿消息	元東山殿所持 かね 銘一寸	拝領 富士形 浄雪作		〔天目〕樂金海新調 〔薄茶碗〕井戸 皆具之内	唐物内海 〔薄茶器〕笹ノ絵棗 皆具之内	盛阿弥作黒塗
83	表	他	明7	6月25日正午	残月亭	残月亭	碌々齋	千玄室 千宗守 木下勝泥 堀内宗晋 袋師友湖	二条富敦公御短 短冊掛	古丹波焼 銘 東ミヤケ	道也作 羽子板形	南紀産サンス伽羅	一入作黒平	利休所持 笹ノ絵棗	吸江齋作 銘武蔵野
84	表	他	明7	10月11日10時	菓子茶	五疊敷楓井庵	楓井庵	我尔 西場房輔 大工右兵衛	元伯宗且不二 画讃横物	大樋焼丸	浄味 四方釜	蛤 上呂上り蛤	宗入造黒	瀬戸やき耳付	啗啄齋作 銘黒木
85	表	他	明7	10月13日正午	宗意廿七回忌 遊伴稽古茶事	二畳	聴雨庵宗章	西場房輔 我尔 片桐市七	玉舟和尚二行 教不列伝不文立字 直指人心見性成仏	精中作銘尺八	天明 立口大霰	清閑寺焼宝珠形	御本 銘古手屋	瀬戸新兵衛 肩衝	仙叟作共筒 銘塩屋
86	裏	他	明7	11月15日	又隠皆伝後心祝茶の会	又隠	又妙齋玄室		光廣公御詠 御短冊	古備前耳附置	金箔金鯨 且入	真形 柄井梅比口作	伝来ト、ヤ	利休瀬戸	玄室作 銘黒川
87	表	他	明7	11月29日正午	不審菴	不審菴	千宗左	千宗室 同玄室 前田義兵衛 初田甚蔵 □ 喜造	江雪和尚筆 横物	覚々齋作一重 銘無限	寒雉 霰鉈作り	備前布袋	ノンカウ作赤	新兵衛やき	随流作 銘時雨葉
88	表	他	明8	4月30日正午	不審菴 御着座ノ節木地丸三宣長のし	不審菴 残月亭		田安 徳川三位様 御相伴 千宗室 我尔 四人	寧一山墨跡 宝鏡寺宮竹御面讃 随流齋拝領	近衛様樂院殿 御作一重筒	芦屋達磨形 鯉ノ地紋 □形 道也作	青貝 木彫夕顔	天目 伝来建盞 御相伴 古萩焼 長次郎黒 銘 待宵	宇治焼元伯好 〔茶器〕紹鷗大棗	利休作角筒両口印アリ 珠徳象牙
89	表	他	明8	5月17日正午	長生菴		宗晋		円鑑国師筆 北野大茶湯揮打之文	常叟作 二重 銘 サギ	天猫作 真形 肩二霰	唐物長角青貝	人形手小振	瀬戸茶臼屋焼	羽瀧写 庸新作
90	表	他	明8	6月10日正午	泰叟宗安居士追悼茶事	長生庵		精中宗匠 阿波社中 森 友岳 玄室 舛屋平之□	泰叟宗安筆	南蛮徳利					元伯作 銘閑庭
91	表	他	明8	8月31日	萩熊谷五一庵於四畳半催 金馬茶箱を以	四畳半	碌々齋	毛利家奥方 御相伴女中五人 伊原閑	元伯短冊	青竹一重	道也作 富士形	嵯峨人形	金襴手 井戸 重テ	篠ノ絵棗	盛阿弥作黒塗
92	表	他	明8	10月2日午	長州ヨリ帰宅御催	七疊敷	不審菴碌々齋		了々齋栗画讃	朝鮮唐津置	芦屋達磨形	唐物柚	古萩焼	左兵衛作赤 〔薄茶器〕一閑張 溜雪吹	江岑作 銘達磨
93	表	他	明9	明治9年2月6日	心祝正午茶	四畳半席	長谷川元亭	本居健亭 小津善吉 左兵衛	寿老人 碌々齋	六閑齋作一重 銘千歳	寒雉 霰鉈造	青磁菱	瀬戸黒 銘巖根	薩摩焼	柏叟作共筒 銘淡梅一枝香
94	表	他	明9	3月20日ヨリ	錦台御席點茶大茶湯		長生庵 宗晋		越昌貝畫画	伝来利休作 銘 小舟	利休所持與次郎作 切り合	交趾丸惣藤蔓 青磁人形手	仙巖伝来 青磁人形手	伊賀焼	瀬田掃部作共筒



No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
													〔薄茶碗〕仙鶴手造赤	〔薄茶器〕江岑ノ判中棗	
95	表	他	明10	明治10年1月正午	阿波ふ羽兵二宅四畳半ニ而	四畳半	碌々斎		元伯短冊 正月と思ふ心ハ年なみの 花とは登を阿らし□りすに	原叟作一重	古浄元 ふとん	左入造伯藏主	安南	如心斎判小棗 〔薄茶器〕茶桶	利休作筒随流斎
96	表	他	明10	2月3日正午	阿波塩島中間氏	八畳敷ニテ	碌々斎宗匠ヨリ 申来ル	拾名宛	元伯短冊 正月ニ	啗啄斎一重	小阿弥陀堂 浄味作		ノンカウ作赤	元伯所持瀬戸	覚々斎 銘末廣
97	表	他	明10	3月23日		残月亭	碌々斎		正三位徳川公御筆 養天直	利休所持 青磁置	浄玄作 尻張	鎌倉彫	赤樂 宗入造	藤四郎作 元伯銘 無き石	紹鷗作
98	表	他	明10	5月13日正午	不審庵	不審庵	碌々斎		□玄御文	南蛮枡	古浄味作 四方	青貝布袋	古萩 銘むさし野	利休判中棗	道安作筒共 天正元歳トアリ
99	表	他	明10	10月5日正午		四畳半	松應	碌々斎宗匠 田中貫入 長井嘉左衛門 本居健亨	庭田重嗣卿和歌 三首懐紙	此度碌々宗匠 贈シ品	浄味 小丸	唐物東端□之浮模様	朝日	黒中棗 元伯在判	清中作箱とも 銘結のし
100	表	他	明10	11月27日正午		不審庵	碌々斎		圓継国師墨跡	古備前	寒雉霰	呉須八角	伴翁造黒	新兵衛焼	如心斎七十才之作
101	表	他	明11	明治11年4月	原叟百五十年追悼之茶	祖堂	碌々斎		原叟像	覚々斎作巻水	阿弥陀堂 浄味作	青貝丸 琉球ヨリ 元伯来ル	宗入黒	古瀬戸 餓鬼	覚々斎 銘蟻とをし
102	裏	他	明11	11年6月25, 26日	旧近衛師於 錦流亭	錦流亭 又新			豫楽院一行書 元政短冊 深草瑞光寺什物	古銅耳付 本能寺什物 信永公遺物 青磁角形本能寺什物	浄雪 銀造菊□竹彫	存星	片桐宗閑銘あき 井戸	〔茶器〕菊形 住心院什物 同 時代中次 本能寺什物	利休作 文禄 妙法院什物
103	表	他	明11	6月23日	聚光院原叟年忌法事相嘗	八畳 二畳大目	碌々斎		大心和尚筆 原叟新号 利休居士筆 寄進之状横物	覚々斎尺八 伊賀焼立鼓		木彫お志どり	井戸脇 了入黒 銘喝食	覚々斎尺八 〔茶器〕ツボゝ棗	
104	表	他	明11	明治11年9月1日	西京土手町女学校遷移式	点茶席四畳半	點茶 生徒櫻本とき 同 塚本のふ 同 清水てい 教授 千宗左		千代尼短冊 百生やつる一すしの心より	蒔絵二重 北政所へ利休ヨリ 献上	銀富士形	青貝大角	青井戸	古薩摩耳付	伴翁作
105	表	他	明11	同年同月29日		残月亭	千宗左	伊勢軍 陸軍大佐 大河内氏 陸軍會計方 岡氏 田中四郎左衛門 田中喜蔵	相阿弥	宗全作藤組	富士形 道也作	昔根来	珠光青磁	ノンカウ作耳付	江岑作
106	表	他	明12	明治12年1月20日 午後3時ヨリ	臨時七畳屋独無一物として 此日雪中也		碌々斎	舟橋清左衛門 田中四郎左衛門 久田宗悦 樂 慶入 さし理右衛門	天龍寺主之画		天明広口常張	木彫玉本	唐津志津げ	萌張柳棗	啗啄作 銘 卯杖
107	表	他	明12	12年11月正午	不審庵				元伯梅画讃	覚々斎 銘ひめ	寒雉作霰鈍	如心造赤丸	伝来高麗筆洗	宇張棗 〔薄茶器〕元伯好蕪	宗全作筒共
108	表	他	明14	明治14年1月16日	二畳敷		千碌々斎		随流書 神	道安作一重	道也百会霰	呉須蜜柑	仁清蓬萊之絵	鳥もの大福	如心斎作 銘元日
109	表	他	明14	同年	不審庵宗員神而茶事				元伯筆的伝	随流作一重切	九兵衛作 ふとん	染付結文	のんかう作黒 銘稲妻	瀬戸翁手	利休作元伯筒共
110	表	他	明15	明治15年5月30日正午	不審庵		碌々斎		利休晒し文	朝鮮耳付	道也作 羽子板形	唐物獅子	一入造 呉器	珠光時代象牙	宗全作筒共
111	表	他	明16	16年5月8日	臨時茶道相伝七畳敷ニテ	七畳	碌々斎		元伯筆不審庵	覚々斎一重 銘白頭	刷毛目 了保作	伝来コマ根	宗入黒 銘雅の友	〔棗〕少庵小	随流作

No.	流派	自他	年	月 日	茶会名	場 所	亭 主	客	掛 物	花 入	釜	香 合	茶 碗	茶 入	茶 杓
112	表	他	明17	17年4月26日正午		不審庵	碌々斎	長井同玄 同 登ミめ 同 与志め 樂 慶入	丈山筆	元伯作尺八	芦屋作 達磨	伝来 青貝布袋	宗入造黒	新兵衛焼	少庵作共筒
113	藪内	他	明17	同年同月13日正午	燕庵茶事		藪内竹翠	同玄 とミ 与志 口入 吉左衛門	一休和尚七言詩	南蛮手附	芦屋 透木	肥後焼宝珠	竹心手造 銘 松樹子 〔薄茶碗〕青井と 銘 春菊	盛阿弥作 〔薄茶器〕古染付 松竹梅画	剣中共筒 銘宝月
114	不詳	他	明17	同年同月2日正午	大坂一心寺ニテ上田誓一	三畳台目八窓席	上田誓一	同玄 与志 ちみ 詰 拓蔵	徳川三代將軍家光公御筆（和歌）	青磁経筒	万代屋地紋 古芦屋	染付菱牛	利休三十六種之写 大黒 玉水作	飛鳥川	桐江庵一口和尚 銘黒酌
115	表	他	明17	5月11日正午	不審庵		碌々斎		利休居士筆 笑擲	南蛮物三重	天貓達磨	木地丸	萩割高台	瀬戸	口共筒 無銘
116	表	他	明17	11月15日正午	不審庵 碌々斎		碌々斎		古溪和尚墨跡	元伯作二重	寒雉作霰糸屋	交趾鳥	二代目黒	吹上松 伊部棗	啐啄作 銘時鳥
117	裏	他	明18	乙酉6月7日正午	津 富岡九峯	十二畳之席		小津清左衛門 十名	飛鳥井雅章公像 哥	玄々斎好 末廣籠	宗旦 四方 道翁作	唐物藤実形	ノンカウ黒〔重茶碗〕 黄伊羅保	大棗	六閑斎共筒
118	裏	他	明18	18年6月ヨリ	不審庵ニテ		録々斎		覚々斎画讃	江岑作一重 銘青山	口四方 道也作	伝来 唐物袖	カタテ	宗全作 山科形 〔薄茶器〕口弁寺 四ツ口	元伯作筒共
119	不詳	他	明18	18年11月22日正午	於六窓庵ニ茶之湯		博物局長従四位 野村素介 参議 山田顕義殿 局長代理 正四位 室戸口 殿 古筆了仲 従四位 渡邊驥 殿 薄茶同席 点茶 御詰 野村素介	三條相国殿 後水尾天皇大字横物 思無邪		道仁作四方	鎌倉時代長角 菊蒔絵		鬼熊川	古瀬戸耳付 大海	利休長茶杓 筒片桐石州
120	表	他	明18	12月10日正午		不審庵	碌々斎		清巖和尚一行	有楽侯作一重	伝来 与次郎作 万字	交趾狸	覚々斎手造赤	元伯判中棗	道安作共筒
121	表	他	明18	12月14日	津富岡九峯殿茶事	一畳台目中板向切		我尔 濱田伝右衛門 今井田百斎	居士句入文	一重江月和尚作 銘 火峯	繰口丸 古浄味造	屏風箱	六閑斎手造黒	古信楽肩衝 如心斎銘 山里	宗旦作共筒

【表 2-3-2】② 花入

青磁簾耳付
宗入作小南蛮耳
吉左衛門作クツ舟
金銅
古銅経筒
鉄之クシ筒
宗旦作銘元室坊
元伯作銘山吹
原叟作置筒
宗旦作銘コハタシ
キヤウ筒

【表 2-3-2】① 花入

玄々斎一重
玄々斎式重
伴翁宗左三重切
如心斎作二重切
古田瀬戸一重切
堀内不寂斎一重
元伯作尺八
宗旦作二重
江岑作一重
唐物竹組
三重切利休判
即中斎作 尺八
一重口一寸
大瓢箪時代
釣付ふく瓢
長ふくべ石州作
碌々斎手付籠
宗全籠自作
桂籠
伊部置
青磁筒
唐もの籠手付
朝鮮唐津
青磁礎 大花瓶
南蛮鮫鱈
南蛮 銘チマキ
青磁ひやうたん形
青磁キツツキ丸

【表 2-3-1】② 掛物

応挙作 不昧侯瀧
雪舟山水一本墨絵
長谷川久蔵祇園会長刀鉾画
時鳥之画 探幽筆
松花堂大字横物
石川丈山詩
木盤一行
日東巖墨跡
東野様自詠短冊御哥
利休さらしの文
元伯宗旦肖像
道安之像
西行画
と十や立圃画賛
龍虎式幅画尚伝筆
龍虎 梅竹大字対幅

【表 2-3-1】① 掛物

無学和尚一行物 孤松却之他間時流
沢庵和尚 不二画賛横物
烏丸光廣短冊
紫野大龍和尚一行物 夏雲多奇峰
大徳寺宙宝和尚 波画賛
応挙作 不昧侯瀧
木盤一行
欠伸子
孝忠短冊
宗旦筆 大徳寺山門通建之偈
江雪一行
宣長 花茗荷
西行画
と十や立圃画賛
一休和尚二行物
月口翁一行物
了々斎一行
吸江斎十二才書一行 玄庵十二才書一行
本口和尚一行物
玄々斎竹画 玄室八才書讚入横物
玄室八才書讚入横物
二三画讚 利休一行

【表 2-3-4】② 香合

青磁スト切  
 青磁井筒  
 ゴス水鳥丸  
 祥瑞  
 唐津焼黒丸形  
 交趾ぼたん  
 染付長角  
 交趾牡丹  
 宗旦好所持糸巻形  
 利休形梅鉢  
 時代四方  
 長角保ら付  
 ありま堂  
 道安所持

【表 2-3-4】① 香合

仙叟好伽羅之木  
 ヤシ写ケヤキノ木地  
 江岑好木地丸  
 黒丸平根来  
 堆朱丸タルマ  
 堆朱紅地花形  
 堆朱丸  
 堆朱両面彫  
 小ふくべ  
 唐物貝  
 唐物 元伯在判  
 宗旦好一閑張  
 沈金手箱  
 イタヤ貝  
 蛤のし蒔絵  
 御物宗旦拝領貝合蛤  
 初代大樋嶋臺  
 一入作赤  
 高取丸  
 左入作赤楽  
 大樋焼  
 唐津独楽  
 美濃丸  
 伊部 胴張中合  
 染付横瓜  
 交趾鶴亀  
 太平丸  
 交趾南瓜

【表 2-3-3】② 釜

少庵好巴  
 九兵衛作 ルイサ  
 浄味 姥口  
 尾州様御物写 裏金釜  
 万代屋  
 ガンクツ釜  
 常磐釜  
 鰐口九兵衛作  
 道や作 茶飯釜  
 古芦屋作 みそれ膚  
 道仁作

【表 2-3-3】① 釜

九兵衛作小丸釜  
 古浄味丸釜  
 大平丸 時代浄味作  
 京作莊兵衛丸  
 小霰丸 初代寒雉  
 浄味丸  
 丸 寒雉  
 与次郎作 大千代丸  
 道也作角  
 天猫作 真形  
 寒雉真形り  
 天明真形  
 古天猫車軸  
 車軸  
 寒雉作尻張  
 浄味尻張  
 小尻張 道也作  
 雲龍古浄味作  
 寒雉雲龍  
 九兵衛作ヲタレ  
 与二郎作 尾垂  
 阿弥陀堂 与次郎作  
 阿弥陀堂形  
 与次郎阿弥陀堂  
 入道寒雉作 瓢箪形  
 浄味作 ひやう形  
 天明作霰  
 天明作 霰釜

【表 2-3-7】 棗

大棗  
 成阿弥大棗  
 古宗哲大棗  
 大棗  
 利大棗  
 江岑中棗  
 宗旦在判小棗  
 柏叟溜小棗  
 宗旦小棗  
 瀬戸春慶  
 溜中次  
 棗  
 松山侯 松ヶ根  
 時代棗  
 黒棗  
 左甚五郎作  
 遠州好竹

【表 2-3-6】 茶入

瀬戸いもノ子  
 高取丸  
 東福門院様御物貝桶  
 古さつまひやうたん  
 瀬戸広口手  
 古瀬戸耳付  
 瀬戸耳付  
 高取耳付  
 東福門院様物仁清焼  
 時中焼  
 一燈手造黒  
 志とろ焼  
 瀬戸薬師焼  
 仁清カメ  
 徳大寺威磨御自作  
 瀬戸  
 備前  
 瀬戸  
 利休  
 信楽  
 一入作阿か楽  
 古備前  
 古セト  
 志の 銘瘦馬  
 備前

【表 2-3-5】 ② 茶碗

御本  
 画御本  
 古井戸  
 大井戸  
 井戸  
 片手  
 堅手  
 堅手  
 ヲニ熊川  
 ソバ  
 呉器  
 粉引  
 古染付鉢の子  
 人形手  
 新  
 黒手

【表 2-3-5】 ① 茶碗

赤平ノンカウ作  
 ノンカウ作黒  
 一入作黒  
 長次郎黒  
 宗入赤  
 ノンカウ作  
 トヽヤ  
 一入黒  
 長二郎  
 宗入作黒  
 赤楽瓢箪形  
 瀬戸唐津  
 古萩  
 志野  
 伊ら保  
 乾山黒  
 仁清  
 光悦  
 打彫 伊羅保  
 禾目唐つ  
 古さつま焼  
 珠光青磁  
 白唐ツ平  
 黄瀬戸  
 原叟手造赤  
 朝鮮イラホ  
 高麗  
 御出半使

【表 2-4-1】 掛物 - 作者別使用会数

作者	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
公家	6	7	11	20	16	60
武家	3	3	6	5	5	22
茶人一能阿系	0	0	0	0	0	0
一珠光系	0	0	0	0	0	0
一利休系	4	2	8	6	12	32
一千利休	1	0	9	1	5	16
一表千家	1	7	21	17	16	62
一表千家堀内家	0	0	0	2	7	9
一裏千家	0	4	12	10	9	35
一武者小路千家	0	0	0	1	0	1
一藪内家	0	0	0	1	0	1
一宗徧流	0	0	0	0	0	0
一江戸千家系	0	0	0	0	0	0
臨濟宗大徳寺派	12	10	26	11	20	79
妙心寺派	0	0	2	0	2	4
天龍寺派	0	0	1	1	1	3
建長寺派	0	1	0	0	0	1
円覚寺派	0	0	1	0	0	1
曹洞宗	0	0	2	0	0	2
天台宗	0	0	0	1	0	1
高野山真言宗	0	0	1	0	0	1
日蓮宗	0	0	0	0	1	1
黄檗宗	0	0	0	1	0	1
中国僧	0	0	2	1	1	4
合作	0	0	0	2	1	3
本居家	1	0	3	0	0	4
絵師	4	4	5	9	8	30
文化人	2	0	3	2	8	15
中国文人	0	1	0	0	0	1
不詳	11	8	18	19	23	79
合計	45	47	131	110	135	468

【表 2-4】 本居信郷『会席附』記載の茶道具の使用状況  
 事項別に【表 2-4-1】から【表 2-4-16】に示す。

【表 2-3-8】 ② 茶杓

又玄斎 箱玄々
竺叟宗乾作
碌々斎宗左作
玄々斎作
覚々斎作
宗旦作
啐啄斎作
金森宗和
真伯宗守作
不見斎作
宗和侯
三斎侯
木下長嘯子
宗旦
道八作

【表 2-3-8】 ① 茶杓

宗旦作銘松風
不見斎作供筒
舟越共筒
一夢作共筒
一阿弥作共筒
元伯作共筒
宗旦作共筒 銘挺杖
不昧公御作筒二
覚々斎作銘早馬
宗達作 銘和氣
一燈作 銘花野
仙叟作 銘老女
甫竹共筒
□斎共筒
宗旦作共筒 銘天晴
宗旦共筒
如心共筒宗和トアリ
宗二之作 銘龍門
小堀和泉守 銘山城
宗旦作 銘桐重
吸江斎作 銘風流
自作 銘せぬや
逢源斎作二本入
紹鷗形
象牙
利休作牙
桑の木ひやうたん
宗旦室宗見女作

【表 2-4-3】 花入 - 作者別使用会数

作者	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
武家	1	3	5	2	9	20
公家	0	0	0	0	1	1
茶人一能阿系	0	0	0	0	0	0
一珠光系	0	0	0	0	1	1
一利休系	5	1	11	7	13	37
一千利休	0	0	4	2	4	10
一表千家	6	7	21	10	25	69
一表千家堀内家	1	1	0	0	2	4
一表千家久田家	0	0	1	0	0	1
一裏千家	2	12	14	18	16	62
一速水流	0	0	0	0	0	0
一武者小路千家	1	0	1	0	0	2
一藪内家	0	0	0	0	0	0
一宗徧流	0	0	0	0	0	0
一不白流	0	0	0	0	0	0
一庸軒流	0	0	0	1	0	1
一江戸千家系	0	0	0	0	0	0
臨濟宗大徳寺派	0	0	0	3	1	4
妙心寺派	0	0	0	0	0	0
天龍寺派	0	0	0	0	0	0
建長寺派	0	0	0	0	0	0
本居家	1	0	0	0	0	1
千家十職一樂家	2	0	2	2	0	6
一宮崎家	0	0	0	1	0	1
文化人	0	0	1	1	0	2
不詳	22	13	43	46	52	176
合計	41	37	103	93	124	398

【表 2-4-2】 掛物 - 種類別使用会数

種類	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
和歌	5	5	16	17	23	66
詠草	1	0	1	0	0	2
消息	6	1	16	9	13	45
詩	1	0	1	0	2	4
俳句	0	0	2	0	1	3
奉書	0	0	1	0	0	1
記	0	0	2	0	3	5
偈	1	0	0	0	0	1
道号	1	0	0	0	0	1
起請文	0	0	1	0	0	1
日本墨跡	16	19	42	43	36	156
中国墨跡	0	0	0	1	1	2
日本絵画	12	7	23	24	39	105
中国絵画	2	0	0	0	1	3
押絵	0	0	0	0	1	1
日 墨跡+画	0	2	1	0	0	3
額	0	0	0	0	1	1
不詳	0	13	25	16	14	68
合計	45	47	131	110	135	468

【表 2-4-6】① 釜 - 形状別使用会数

形状	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
丸	8	3	15	9	16	51
角	1	0	3	3	0	7
真形	3	1	4	4	5	17
車軸	2	1	1	1	1	6
尻張	3	4	12	9	8	36
雲龍	2	1	1	2	4	10
尾垂	2	0	1	0	0	3
阿弥陀堂	3	5	13	10	5	36
裏甲	1	1	2	1	0	5
瓢箪	2	1	1	0	0	4
巴	1	1	1	0	1	4
累座	1	1	4	0	0	6
姥口	1	0	0	0	0	1
裏金	1	0	0	0	0	1
万代屋	1	2	4	3	5	15
ガンクツ	1	0	0	0	0	1
霞	2	1	6	6	0	15
常盤	1	0	0	1	0	2
鯨口	1	0	0	1	0	2
茶飯	1	0	0	1	0	2
瓜	0	3	0	0	0	3
広口	0	1	1	0	0	2
針屋	0	1	0	0	0	1
八角	0	1	0	1	0	2
宝珠	0	2	0	3	0	5
野溝	0	1	0	0	0	1
平丸	0	1	2	5	0	8
筒	0	1	0	0	2	3
透木	0	1	0	0	0	1

【表 2-4-4】 花入 - 素材別使用会数

素材	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
竹	13	21	53	36	68	191
瓢箪	3	1	1	3	2	10
籠	3	3	4	7	8	25
陶磁器	12	4	15	9	26	66
銅	2	0	6	8	3	19
砂張	0	0	1	0	0	1
鉄	1	0	0	0	0	1
木	0	0	1	4	0	5
かね	0	0	0	0	0	0
不詳	7	8	22	26	17	80
合計	41	37	103	93	124	398

【表 2-4-5】 釜 - 作者別使用会数

作者	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
千家十職 - 大西家	0	8	11	13	6	38
江戸大西家	0	1	0	0	0	1
名越家	0	0	0	0	0	0
京都名越家	7	1	11	11	6	36
京都名越家下間家	1	0	2	0	0	3
江戸名越家	0	0	0	0	0	0
西村家	4	7	10	14	22	57
京都西村家	4	0	14	0	0	18
宮崎家	6	5	11	9	10	41
辻家	4	4	23	17	15	63
高橋因幡	0	0	0	1	0	1
不詳	14	18	31	39	14	116
合計	40	44	113	104	73	374



【表 2-4-7】 香合一作者別使用会数

作者	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
武家	0	0	0	1	0	1
公家	0	0	0	0	0	0
茶人一能阿系	0	0	0	0	0	0
一珠光系	0	0	0	0	0	0
一利休系	0	1	0	1	0	2
一千利休	0	0	0	0	0	0
一表千家	0	0	0	6	2	8
一表千家堀内家	0	0	1	0	0	1
一表千家久田家	0	0	0	0	0	0
一裏千家	0	2	1	3	0	6
一速水流	0	0	0	0	0	0
一武者小路千家	0	0	0	0	0	0
一藪内家	0	0	0	0	0	0
一宗徧流	0	0	0	0	0	0
一不白流	0	0	0	0	0	0
一庸軒流	0	0	0	0	0	0
一江戸千家系	0	0	0	0	0	0
本居家	0	0	0	0	0	0
千家十職一樂家	2	4	6	6	0	18
一飛來家	1	1	1	1	0	4
一永楽家	0	0	1	0	0	1
大樋家	2	1	0	2	0	5
松坂町人	0	1	0	1	0	2
文化人	0	3	4	1	0	8
不詳	38	33	97	79	118	365
合計	43	46	111	101	120	421

【表 2-4-6】 ② 釜一形状別使用会数

形状	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
甌	0	1	0	0	0	1
平	0	1	0	4	0	5
提灯	0	1	0	0	0	1
卍	0	1	2	0	0	3
百会	0	1	1	3	0	5
富士	0	0	3	3	0	6
日の丸	0	0	1	0	0	1
夕顔	0	0	1	0	0	1
兜	0	0	1	0	0	1
責紐	0	0	3	1	0	4
切合	0	0	1	0	0	1
布団	0	0	3	2	1	6
大講堂	0	0	1	0	0	1
羽子板	0	0	2	1	0	3
乙御前	0	0	1	0	1	2
羽釜	0	0	3	0	0	3
口四方	0	0	1	0	0	1
四方	0	0	0	3	1	4
茶臼	0	0	0	1	0	1
東陽坊	0	0	0	1	0	1
切掛	0	0	0	2	0	2
鶴首	0	0	0	1	1	2
裏平	0	0	0	0	2	2
なで肩	0	0	0	0	3	3
肩衝	0	0	0	0	1	1
達磨	0	0	0	0	1	1
芋頭	0	0	0	0	0	0
不詳	2	5	18	22	15	62
合計	40	44	113	104	73	374

【表 2-4-9】 茶碗—作者別使用会数

作者	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
武家	0	1	0	0	0	1
公家	0	0	1	2	0	3
茶人—能阿系	0	0	0	0	0	0
—珠光系	0	0	0	0	0	0
—利休系	0	0	0	1	0	1
—千利休	0	0	0	0	0	0
—表千家	0	2	7	1	7	17
—表千家堀内家	0	0	0	0	1	1
—表千家久田家	0	0	0	0	0	0
—裏千家	1	4	7	6	6	24
—速水流	0	0	0	0	0	0
—武者小路千家	0	0	0	0	0	0
—藪内家	0	0	0	0	1	1
—宗徧流	0	0	0	0	0	0
—不白流	0	1	0	0	0	1
—庸軒流	0	0	0	0	0	0
—江戸千家系	0	0	0	0	0	0
本居家	0	1	1	0	0	2
千家十職—樂家	10	12	36	27	37	122
—飛來家	0	0	0	0	0	0
—永樂家	0	0	0	2	0	2
大樋家	0	1	0	1	0	2
松坂町人	0	0	0	0	0	0
文化人	3	0	3	0	2	8
不詳	36	32	80	79	99	326
合計	50	54	135	119	153	511

【表 2-4-8】 香合—素材別使用会数

素材	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
木	4	1	9	13	19	46
瓢箪	1	0	0	1	0	2
堆朱	4	1	4	3	3	15
—閑張	1	1	1	3	0	6
貝	3	3	4	7	18	35
陶器	20	19	64	48	47	198
石	0	1	0	0	0	1
根來	0	2	0	0	0	2
果実	0	1	0	2	1	4
銅	0	0	0	1	0	1
象牙	0	0	0	1	0	1
水牛角	0	0	0	0	1	1
不詳	10	17	29	22	31	109
合計	43	46	111	101	120	421

【表 2-4-11】 棗—作者別使用会数

作者	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
武家	1	0	0	0	0	1
公家	0	0	0	0	0	0
茶人一能阿系	0	0	0	0	0	0
一珠光系	0	0	0	0	0	0
一利休系	2	0	0	1	0	3
一千利休	1	0	0	0	0	1
一表千家	1	0	0	0	0	1
一表千家堀内家	0	0	0	0	0	0
一表千家久田家	0	0	0	0	0	0
一裏千家	1	0	0	0	0	1
一速水流	0	0	0	0	0	0
一武者小路千家	0	0	0	0	0	0
一藪内家	0	0	1	0	0	1
一宗徧流	0	0	0	0	0	0
一不白流	0	0	0	0	0	0
一庸軒流	0	0	0	0	0	0
一江戸千家系	0	0	0	0	0	0
本居家	0	0	0	0	0	0
千家十職一樂家	0	0	0	0	0	0
一中村家	0	0	0	0	0	0
一飛来家	0	0	1	0	3	4
一永楽家	0	0	0	0	0	0
大桶家	0	0	0	0	0	0
塗師	1	0	4	0	6	11
陶工	0	0	0	0	0	0
松坂町人	0	0	0	0	0	0
文化人	1	1	0	3	1	6
不詳	10	22	63	51	67	213
合計	18	23	69	55	77	242

【表 2-4-10】 茶碗—産地別使用会数

産地	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
日本〔樂焼〕	13	13	37	27	37	127
日本〔国焼〕	15	21	41	45	61	183
中国	2	1	8	9	12	32
高麗	18	10	37	30	35	130
ベトナム	0	0	1	1	1	3
シャム・ビルマ	0	1	0	0	0	1
不詳	2	8	11	7	7	35
合計	50	54	135	119	153	511

【表 2-4-13】 茶入一作者別使用会数

作者	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
武家	0	0	0	0	0	0
公家	1	0	0	0	0	1
茶人一能阿系	0	0	0	0	0	0
一珠光系	0	0	0	0	0	0
一利休系	0	0	0	0	0	0
一千利休	0	0	0	0	0	0
一表千家	0	1	0	1	0	2
一表千家堀内家	0	0	0	0	0	0
一表千家久田家	0	0	0	0	0	0
一裏千家	1	0	0	1	1	3
一速水流	0	0	0	0	0	0
一武者小路千家	0	0	0	0	0	0
一藪内家	0	0	0	0	0	0
一宗徧流	0	0	0	0	0	0
一不白流	0	0	0	0	0	0
一庸軒流	0	0	0	0	0	0
一江戸千家系	0	0	0	0	0	0
本居家	0	0	0	0	0	0
千家十職一樂家	1	1	2	1	0	5
一中村家	0	0	0	1	0	1
一飛来家	0	0	0	0	0	0
一永楽家	0	0	0	0	0	0
大樋家	0	0	0	0	0	0
塗師	0	0	0	0	0	0
陶工	0	2	9	4	9	24
松坂町人	0	0	0	0	0	0
文化人	0	0	0	0	3	3
不詳	23	19	57	49	67	215
合計	26	23	68	57	80	254

【表 2-4-12】 棗一形状別使用会数

形状	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
大棗	5	5	9	6	10	35
中棗	1	2	3	13	14	33
小棗	3	1	5	4	5	18
大+小	0	0	0	0	1	1
中次	1	2	4	2	4	13
春慶	1	0	0	0	0	1
紹鷗形	0	0	0	1	0	0
利休形	0	0	4	0	0	4
道安形	0	0	2	0	0	2
寸切	0	0	1	0	2	3
竹籠	0	0	1	0	0	1
雪吹	0	0	8	1	3	12
茶桶	0	0	1	0	2	3
町棗	0	0	1	0	0	1
ツボツボ棗	0	0	0	2	1	0
老松	0	0	0	1	0	0
平	0	0	0	2	0	0
尻張	0	0	0	1	1	0
薬器	0	0	0	0	1	0
夕顔	0	0	0	0	1	0
耳付	0	0	0	0	1	0
金輪寺	0	0	0	0	1	0
立鼓	0	0	0	0	1	0
茶通	0	0	0	0	1	0
不詳	7	13	30	22	28	100
合計	18	23	69	55	77	242

【表 2-4-15】 茶杓一作者別使用会数

作者	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
武家	6	4	10	10	4	34
公家	0	0	1	0	0	1
茶人一能阿系	0	1	1	0	3	5
一珠光系	0	0	3	1	20	24
一利休系	11	1	5	9	0	26
一千利休	0	2	5	2	11	20
一表千家	7	10	42	26	40	125
一表千家堀内家	0	0	1	5	2	8
一表千家久田家	0	0	0	0	0	0
一裏千家	8	14	22	24	22	90
一速水流	1	0	0	0	0	1
一武者小路千家	1	1	1	1	3	7
一藪内家	0	0	0	0	1	1
一宗徧流	0	0	1	1	1	3
一不白流	0	0	1	1	0	2
一庸軒流	0	0	0	0	0	0
一江戸千家系	0	0	0	0	0	0
一松尾流	0	0	0	1	0	1
本居家	1	0	1	1	0	3
千家十職一樂家	1	0	0	0	0	1
一飛来家	0	0	0	0	0	0
一永楽家	0	0	0	0	0	0
一中村家	0	0	0	2	0	2
茶杓師	1	0	0	0	1	2
塗師	0	0	0	0	2	2
大桶家	0	0	0	0	0	0
松坂町人	0	0	0	0	0	0
町人	0	0	0	1	0	1
臨濟宗大徳寺派	0	0	1	0	0	1
天台宗	0	0	1	0	0	1
文化人	2	0	0	0	0	2
不詳	6	14	15	17	13	65
合計	45	47	111	102	123	428

【表 2-4-14】 茶入一形状別使用会数

形状	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
芋の子	1	0	0	0	2	3
丸	1	0	2	0	2	5
瓢箪	1	0	2	1	0	4
広口手	1	0	0	0	0	1
野田手	0	1	0	0	0	1
落穂手	0	1	0	0	0	1
飛鳥川手	0	0	0	0	1	1
広沢手	0	0	0	0	1	1
翁手	0	0	0	0	1	1
耳付	4	2	3	2	7	18
貝桶	1	0	0	0	0	1
肩衝	0	3	6	5	10	24
大海	0	1	3	0	0	4
大口	0	1	0	0	0	1
老松	0	0	2	0	0	2
宝珠	0	0	1	0	0	1
尻張	0	0	1	1	0	2
口広	0	0	2	0	0	2
文琳	0	0	0	1	0	1
手付	0	0	0	1	0	1
累座	0	0	0	1	0	1
平	0	0	0	2	0	2
内海	0	0	0	0	1	1
四方	0	0	0	0	1	1
尺八	0	0	0	0	1	1
不詳	17	14	46	43	53	173
合計	26	23	68	57	80	254

開催事由	第2番	第3番	第4番	第5番	第6番	計
皆伝	1	0	0	0	0	1
元服	1	0	0	0	0	1
改名	0	0	1	2	0	3
隠居	1	0	0	0	0	1
賀祝	1	1	3	6	5	16
撤髮	0	0	0	0	1	1
追善・追慕	1	1	7	6	5	20
年回	0	0	1	0	0	1
遠忌・忌	1	0	4	0	3	8
献茶	0	0	2	2	0	4
打合せ	0	0	0	1	0	1
謝恩	0	0	1	0	0	1
遷移式	0	0	0	0	1	1
初会	1	3	5	3	5	17
初釜	0	0	1	1	0	2
朝	0	0	0	0	1	1
名残	1	0	2	1	1	5
口切	1	0	5	2	2	10
夜咄	0	0	1	2	1	4
(席)開	0	0	2	0	1	3
風炉	0	0	2	0	0	2
稽古茶	0	0	0	4	0	4
順茶	4	0	0	0	0	4
臨時	0	1	0	2	6	9
茶事	12	14	19	11	5	61
計	25	20	56	43	37	181

※「開催事由」について、「祝」と「稽古茶」が重複する場合は、先に記されている事由を取った。

【表2-4-16】茶杓一素材別使用会数

素材	貳番	三番	四番	五番	六番	合計
竹	24	23	60	93	80	280
象牙	3	0	5	4	4	16
木	1	0	1	2	3	7
一閑張	0	0	0	1	0	1
不詳	17	24	45	2	36	124
合計	45	47	111	102	123	428

【表3-1】上田家関係略系図

『幕末維新の芸藩と国老上田家展図録』財団法人広島市文化振興事業団編集発行（平成元年十月二十七日）五十六頁より転載

西暦	和暦	年齢	事	跡	広島藩の動向	日本の動向
1832	享和二		七月二十七日 安敦の父安世、家督を相続。 この年 安世好み「袖摺御花活」造られる。			九月 レザノフ長崎に来航
1833	享和三				二月 画家 岡岷山没（七三）	
1834	文化一		九月六日 安世、恭昭公（前藩主浅野重盛）を山水軒に迎え、恭昭公より自筆の絵「鄧蘇菊土童之図」を贈る。		高田郡吉田村出身の眼科医 土生玄碩、將軍家斉の侍医に抜擢される	
1840	文化七					一月 滝沢馬琴『南総里美八犬伝』第一集刊
1844	文化一一		一〇月二十八日 安世、重盛の子 長機より書を求められる。また長機より書「松高眠白鶴」を拝領。 このころ 儒学者頼春水・杏坪、たびたび上田家下屋敷の山水軒に招かれる。			
1845	文化一二		頼春水、藤原程高の和風室詩を揮毫。			
1846	文化一三		安世、頼春風に書を求め、春水・杏坪のものと合わせて三兄弟の詩書を續巻に仕立て「山水園詩長巻」と命名。		二月 儒学者 頼春水没（七一）	
1847	文化一四		安世、浅野長機より書「敬慎齋」を拝領。翌年九月上田家の儒臣山口直洋、箱裏に「敬慎齋説」を書き、 頼春風、山水軒において一行書「阮君云何不樂」を書く。		飯田篤老『篤老園自撰句帖』 心学者矢口米成、心学講舎敬信舎を開く	小林一茶『おらが春』
1848	文政二					
1850	文政三	一	五月二日 安敦、広島藩家老上田家一〇代安世の次子として広島城郭内上田家上屋敷に生まれる。母、久。			
1851	文政四	二	一月四日 安敦の父安世没（四四）。翌年、藩主の命により、浅野主計の子安節が安世の跡を継ぐ。			伊能忠敬『大日本沿海輿地全図』 二月 異国船打払令
1852	文政五	三	安敦、このころから漢学・堀川学を学ぶ。		九月 頼杏坪ら『芸藩通志』を完成	頼山陽、松平定信に『日本外史』を献じる
1853	文政六	四				
1854	天保一	一				
1855	天保二	二			二月 藩主浅野斉賢没（五八）、翌年一月一二代斉藤慶封 このころ 広島領内の各地で村方騒動頻発	
1856	天保三	三				九月 頼山陽、京都に没（五三） 安藤広重『東海道五十三次』刊 天保の大飢饉（一三九）
1857	天保四	四				
1858	天保五	五			七月 儒学者頼杏坪没（七九） 一二月 広島藩主浅野斉康、家祖長政夫妻を祭神とする機津神社を造営	

\*年齢はすべてかぞえ年で表記

\*明治五年（1872）以前はすべて天保暦による

1864	元治 一	四五
1863	文久 三	四四
1862	文久 二	四三
1861	文久 一	四二
1860	安政 五	三九
1859	安政 四	三八
1858	安政 三	三七
1857	安政 二	三六
1856	安政 一	三五
1855	嘉永 六	三四
1854	嘉永 五	三三
1853	嘉永 四	三二
1852	嘉永 三	三一
1851	嘉永 二	三〇
1850	嘉永 一	二九
1849	弘化 三	二七
1848	弘化 二	二六
1847	弘化 一	二五
1846	天保 八	一八
1845	天保 七	一七
1844	天保 六	一六
1843	天保 五	一五
1842	天保 四	一四
1841	天保 三	一三
1840	天保 二	一二
1839	天保 一	一一

二月二八日 安政、元服。

九月 京都より陶工千種平を招き、長次郎七種茶碗の写しを造らせる。

五月二五日 安簡 藩主浅野斉康より泉邸(繪堂園)に招かれる。

八月二八日 安簡、安政を嗣子とする。

この年 二代茶事預り師龜野村餘休没。

五月一七日 安政、初めて登城し、藩主浅野斉康に拝謁。

一月三日 上田家の儒臣 山口西園没。

この年 安政、茶道書『奥儀』を著す。

九月二三日 安政、松澤(安節)作の庭焼の赤茶碗に、「寛波根」と命名。

六月晦日 安政の長女 伸、生まれる。

七月一日 養父二代安節没(五〇)。

八月二六日 安政、藩主浅野斉康より家督相続を認められ、遺領一万七千石を継承。

三月二日 次女 豊、生まれる。

四月二三日 公事により上京し、藩の若君浅野長勲に拝謁。

八月二六日 藩主浅野茂長に水主町の邸に招かれ酒を賜り、和歌を詠じる。

この年 一代安節の子安靖(亀次郎)を嗣子とする。

四月一六日 次女 豊、没(三)。

二月一四日 藩主の命を受け、出陣。古江村に坐る(二月二三日城下にもとる)。

二月二八日 登城、出陣の労として金若干を賜る。

二月一九日 総督徳川慶勝より佩刀・槍穂・手綱を賜る。

この年 天候不順により大凶作、各地に百姓一揆・打ち壊し続出

頼山陽の『日本外史』刊行される

砲術師奥弥衛門、大砲を製造

一月 広島藩、銀札価500分の1の平価切り下げを断行

十一月 広島藩三家老、藩政改革の建白書を提出

四月 藩主浅野斉康致仕、二代慶應親封

夏、秋 広島城下にコレラ流行、死者多数

九月 藩主浅野慶徳没(三三)

一月 二代浅野茂長(のち長訓)親封

五月 「砂持加勢 本川の川さらえが行われる。

八月 広島藩、上田安政ら三家老に政事への参事を命じる

〇月 広島藩、藩政改革の訓令を発する

三月 広島藩、兵制を改革

六月 広島藩、領内の海岸要地に砲台を建設

八月二三日 広島藩、幕府より征長軍先鋒を命ぜられる

一〇月 広島城下に幕兵・諸藩兵集結

十一月四日 広島国泰寺において長州藩二家老の首実検がおこなわれる

十一月六日 征長軍総督徳川慶勝、広島に来着

二月 大塩平八郎の乱

アヘン戦争(一四二)

天保の改革(一四三)

七月 異国船打払令を緩和

一月 佐賀藩、反射弓を築造

六月 ベリ、浦賀に米航

三月 日米和親条約調印

六月 日米修好通商条約調印

九月 安政の大獄始まる

三月 桜田門外の変

二月 和宮降嫁(公武合体)

八月 生麦事件

5、6月 下関事件

七月 薩英戦争

八月一八日 八月十八日の政変

七月一九日 蛤御門の変

八月二日 將軍家茂、長州親征を宣言

八月五日 四国連合艦隊下関砲撃事件

一二月一六日 高杉晋作ら下関で挙兵



1 8 7 1	明治 四	五二
1 8 7 0	明治 三	五一
1 8 6 9	明治 二	五〇
1 8 6 8	明治 一	四九
1 8 6 7	慶応 三	四八
1 8 6 6	慶応 二	四七
1 8 6 5	慶応 一	四六
1 8 6 4	元治 一	四五

一月一日 登城藩の若君浅野長勲の膝下において酒麴を賜る。  
 一月四日 総督府陣払い。藩主浅野茂長の命を受けて総督府に到り総督徳川慶勝に拝謁。  
 二月二三日 嗣子安樂、病弱のため廢嫡される。  
 三月二四日 老中小笠原長行の旅邸に到り、大監察永井主水正・監察平山謙次郎と対面。老中小笠原長行に拝謁。  
 五月二三日 藩主浅野茂長より先鋒を命じられる。  
 六月一日 老中小笠原長行の旅邸に到り、歩兵奉行竹中丹後守らと議議を行う。  
 七月一九日 藩主浅野茂長の命を受けて出陣。保井田村、上河内村、上深川村を経て上伏谷村（現佐伯郡湯葉町）に到り、八月一四日城下にもどる。その間、一四代茶事預り師範野村巴斎、陣において『陣中控』を記す。

冬 藩の若君浅野長勲の遠馬に従い祇園に到る。

四月四日 前藩主浅野長訓の召しにより泉邸において酒を賜る。  
 四月 領地を藩に奉還。  
 六月 京都において藩主浅野長勲に拝謁。広島藩在京藩士の総括を命ぜられる。  
 九月二七日 帰国。  
 一〇月二七日 登城。金の間において知藩事浅野長勲に拝謁。永世秩禄八五〇石を賜り上士に置かれる。また五級大参事として遇される。  
 一二月二二日 家臣士格の者を率いて登城。  
 一月二九日 知藩事浅野長勲の遠馬に従い岩島に到る。帰路、泉邸において酒を賜る。  
 二月 浅野友三郎の弟重遠を養子にする。  
 一〇月三日 致任。同日、藩庁より重遠の家督相続を認められる。  
 八月七日 刺髪・鎌翁と改める。これより専ら心を風雅に寄せ、以後、しばしば庁より命を受けるが固辞。その心を詠じた歌

一一月七日 広島藩、第二回征長の先鋒を命ぜられる。  
 二月七日 老中小笠原長行、広島に到着  
 二月 幕兵・諸藩兵ふたたび広島に集結  
 六月五日 征長征總督徳川茂承、広島に着陣  
 六月八日 広島藩、征長軍先鋒を解かれる  
 六月一四日 赤州口の戦い知まる  
 七月一八日 広島藩主ら連署して長州戦争をやめるように進言  
 九月四日 征長軍總督徳川茂承、陣を払う

一〇月六日 広島藩主、政権返還の建白書を幕府に提出  
 一〇月八日 広島藩、護摩・長州両藩と三藩同盟義挙を盟約  
 四月一八日 広島藩、奥州出兵を命ぜられる  
 五月一八日 広島藩、藩府職制を改革、新たに政事堂を設置

一月 藩主浅野長訓致任、一四代長勲襲封  
 六月 浅野長勲、広島藩知事に任じられる  
 八月 広島藩、職制改革を行い家老を廃止  
 一〇月 広島藩、藩士の秩禄を定める

八月 広島藩、藩学問所を城内八丁馬場に移し、修道館と称す

七月 広島県庁、広島城の本丸に設置  
 八月 元広島藩主浅野長訓の東京移住を農民が阻止、これを契機に一カ月余にわたり武一

一一月二七日 総督徳川慶勝、従軍諸藩に解陣を令す  
 一一月七日 幕府、第二次長州征伐を令す  
 一月二二日 薩長同盟なる  
 八月二二日 家茂の喪につき征長体戦の勅命が出る  
 八月 「ええじゃないか」騒動始まる  
 一〇月 大政奉還  
 一二月 王政復古の大号令  
 一月 鳥羽・伏見の戦い（戊辰戦争開始）  
 三月 五箇条の御誓文  
 四月 江戸開城  
 九月 一世一元の制  
 九月 天皇、東京に行幸  
 三月 東京遷都  
 五月 函館五稜郭開城（戊辰戦争終結）  
 六月 阪結奉還  
 七月 鹿藩置県

1889	明治二二	六九	二月二六日 病没。佐伯郡大野山に葬られる。	騒動おこる 一〇月 広島城本丸に鎮西鑓台第一分營が設置され、広島県庁は三の丸に移転	八月 学制頒布 一月 徴兵令布告
1888	明治二一	六八	六月 宗箇の茶約「敵がくれ」について巻物「敵がくれ記」を記す。	一月 第五軍管広島鎮台設置される 三月 広島県庁、広島城内から小町国奉寺に移る	七月 地租改正条例布告 一〇月 狂韓論敗れる 二月 民権議員設立の建白書 二月 佐賀の乱
1888	明治二〇	六七	五月三日 謙翁、伊賀花入銘「生爪」を用いて茶会を行う。	六月 広島城内に練兵場を創設	三月 廃刀令公布 八月 金庫公債証書発行条例
1888	明治一八	六六	五月三日 謙翁、伊賀花入銘「生爪」を用いて茶会を行う。	四月 備後六部、岡山県より広島県へ移り、現広島県城が成立	一二月 地租改正条例反対一揆 二月 西南戦争始まる 九月 西郷隆盛日刃し、西南戦争終わる
1888	明治一七	六五	六月二七日 養子安靖（亀次郎）、家督を継ぐ。	四月 広島県庁舎、加古町に移工 五月 第一回広島県議会議開かれる	
1888	明治一六	六四	この年 一四代上田家茶事預り師範中村快堂、『茶法守方之類并銘物土器鑑定之覚』、『七事手前之式口伝書』を著す。	二月 広島に第五百四十六国立銀行開業 四月 千田貞暎、広島県令に就任	
1888	明治一四	六二	この年 一四代上田家茶事預り師範野村円斎没。		一〇月 国会開設の勅諭
1888	明治一三	六一	三月 田広島藩士の田文・生計の方策を講ずるため、浅野忠・浅野道興・辻維岳とともに提唱して同進社を創立。		
1888	明治一二	六〇	八月 安靖（亀次郎）、謙翁の命により、宗箇の「泉州櫻井合戦二番目足し」を厳島神社に寄進。		
1887	明治一一	五九	八月 安靖（亀次郎）、謙翁の命により、宗箇の「泉州櫻井合戦二番目足し」を厳島神社に寄進。		
1887	明治一〇	五八	四月五日 山水軒に元広島藩主浅野長勲とその令室を迎え、茶会を行う。		
1887	明治九	五七	八月二日 重遠、病のため家督を辞す。謙翁、再び家督を継ぐ。		
1887	明治八	五六	この年 東京に元広島藩主浅野長勲を尋ねる。紀行文『東行日記』、『郡の須左比』を記す。また、山縣一承に「富士之図」を描かせる。		
1887	明治七	五五	五月 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1887	明治六	五四	この年 謙翁好み「真塗折鶴金襴経蓑」、「洞塗折鶴銀襴経蓑」造られる。		
1887	明治五	五三	この年 広島城郭内の上田家土屋敷を返還し、舟入村神崎の上田家下屋敷の山水軒に移る。		
1887	明治四	五二	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1887	明治三	五一	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1887	明治二	五〇	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1887	明治一	四九	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1886	明治〇	四八	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1885	明治〇	四七	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1884	明治〇	四六	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1883	明治〇	四五	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1882	明治〇	四四	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1881	明治〇	四三	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1880	明治〇	四二	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1879	明治〇	四一	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1878	明治〇	四〇	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1877	明治〇	三九	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1876	明治〇	三八	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1875	明治〇	三七	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1874	明治〇	三六	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1873	明治〇	三五	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1872	明治〇	三四	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1871	明治〇	三三	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1870	明治〇	三二	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1869	明治〇	三一	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1868	明治〇	三〇	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1867	明治〇	二九	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1866	明治〇	二八	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1865	明治〇	二七	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1864	明治〇	二六	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1863	明治〇	二五	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1862	明治〇	二四	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1861	明治〇	二三	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1860	明治〇	二二	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1859	明治〇	二一	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1858	明治〇	二〇	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1857	明治〇	一九	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1856	明治〇	一八	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1855	明治〇	一七	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1854	明治〇	一六	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1853	明治〇	一五	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1852	明治〇	一四	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1851	明治〇	一三	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1850	明治〇	一二	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1849	明治〇	一一	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1848	明治〇	一〇	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1847	明治〇	〇九	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1846	明治〇	〇八	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1845	明治〇	〇七	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1844	明治〇	〇六	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1843	明治〇	〇五	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1842	明治〇	〇四	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1841	明治〇	〇三	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1840	明治〇	〇二	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		
1839	明治〇	〇一	この年 謙翁好み「丸卓」造られる。		

【表3-2】 上田家下屋敷・船屋敷、神崎表記の変遷表

出典：広島城絵図集成（（財）広島市未来都市創造財団 広島城，平成25年3月19日発行）

- 凡例 1. 本表は、浅野家が広島に入部をして以降に作られた絵図や地図から作成した。  
 2. 下屋敷と船屋敷の町名については、記載がない場合あるいは判読不能の場合は、（ ）により所在地が判別出来るようにした。  
 3. 成立年については図録の説明文に依った。  
 4. 村上宣昭学芸員による景観年代比定は、上部に㊦を入れた。

No.	史料・地図名	成立年 (㊦は景観年代)	下屋敷 町名・(所在地)	船屋敷 町名・(所在地)	神崎表記	頁
1	4 寛永年間広島城下図（広島城蔵）	寛永年間 (1624~44)	上田主水下屋舗 (六丁目作場、西堂川長久寺西)	無	無	10-11
2	5 安芸国広島城所絵図（国立公文書館蔵）	㊦正保2（1645）年以降カ	侍町	無	無	12-13
3	6 広島絵図（元和五年御入国之砌御城下絵図） (広島市立中央図書館蔵)	元和5（1619）年 ㊦明暦3（1657）年以前	無 (無彩色=武家地)	無 (無彩色=侍屋敷)	無	14-15
4	8 芸州広島之図（山口県文書館蔵）	寛政7（1795）年筆写	上田主水家中 (西堂川沿い、餌場島北)	上田主水 (猫屋川沿い、材木新開)	無 無	18-19
5	9 広島絵図（三原市中央図書館蔵）	㊦享保前期頃まで	上田主水 (家中屋敷から西北) 上田主水家中屋敷 (西堂川沿い)	上田主水 (庄屋東隣、猫屋川沿い)	無	20-21
6	10 広島城下町絵図（広島城蔵）	㊦正徳5（1715）年以前頃	上田主水下屋敷 (西堂川西)	上田主水 (瓦焼新開、猫屋川沿い)	無	22-23
7	11 広島町新開絵図 (広島市市民局文化スポーツ部文化振興課蔵)	享保13（1728）年夏筆写	判読不能	判読不能	判読不能	24-25
8	12 享保十四年頃広島地図（個人蔵）	享保14（1729）年頃 ㊦享保10（1725）年以前 同12（1727）年以前頃	上田要人下屋舗 (西堂川沿い、六丁目村) 上田要人下屋舗 (上記から西北)	無	無	26-27
9	13 広島城下地図（山口県文書館蔵）	㊦元文2（1737）年以降 宝永4（154）年以前頃	上田主水家中 (西堂川沿い) 上田主水家中 (上記から西北)	無 (無彩色=侍屋敷の区分あり)	無	28-29

No.	史料・地図名	成立年 (◎は景観年代)	下屋敷 町名・(所在地)	船屋敷 町名・(所在地)	神崎表記	頁
10	14 広島城下絵図 (広島県公文書館蔵)	◎天明2 (1782) 年以前	上田主水家中 (西堂川川沿い、侍屋敷の最南端) 上田主水家中 (上記家中屋敷の北) 上田主水中屋敷 (上記家中屋敷から西北) ※下屋敷は、管見では未見	上田□□ (大新開の北、本川沿い)	無か焼損	30-31
11	15 藝州広島圖 (東北大学附属図書館)	◎天明3 (1782) 年以降 同 8 (1788) 年以前	上田主水家中 (西堂川沿い、侍屋敷最南端) 上田主水 (上記家中屋敷から西北)	白色 (白色=侍屋敷の区分あり)	無	32-33
12	16 芸州広島之図 (山口県文書館蔵)	◎享和3 (1803) 年～ 文化元 (1804) 年頃	上田主水下屋舗 (西堂川沿い、本□寺南) 上田主水下ヤシキ (長久寺西)	上田主水船ヤシキ (船入村)	無	34-35
13	17 広島古図 (名古屋市蓬左文庫蔵)	◎天保6 (1835) 年～ 同14 (1843) 年以前頃	下屋敷 下寺町・(西堂川沿い)	無 (屋敷区画あり)	無	36-37
14	18 広島城下町絵図 (広島城蔵)	◎弘化元 (1844) 年～ 同 3 (1846) 年以前頃	上田 ※下屋敷カ (榎新開東、西堂川沿い、国泰寺新開西)	上田 船屋敷 (対岸に住吉社あり)	無	38-39
15	19 広島城下侍屋敷繪圖 (広島県立図書館蔵)	文久4 (1864) 年正月筆写	上田主水※下屋敷カ (榎新開東、西堂川沿い)	上田 船屋敷 (対岸に住吉社あり)	無	40-41
16	20 広島城下町絵図 (個人蔵)	◎弘化3 (1846) 年以降 安政元 (1854) 年以前頃	上田 ※下屋敷カ (榎新開東、西堂川沿い、国泰寺新開西)	上田 船屋敷 (対岸に住吉社あり)	無	42-43
17	21 御城下侍屋敷町新開絵図 (個人蔵)	万延元 (1860) 年作成	上田主水 下屋敷 (西堂川沿い、大□□町)	上田主水船屋敷 (対岸は国泰寺新開)	無	44-45

【表3-3】 山水軒、神崎表記の変遷表

- 凡例 1. 「出典」欄に記載の種々の資料により、時系列に表した。  
 2. 「神崎」の表記は、地図では表記の有無と、これがある場合は位置を記した。  
 3. 「神崎」の表記は、広島案内書（現在の旅行書）の場合は、その箇所をそのまま記した。  
 4. 「地図名／項目」の欄は、「項目」については案内書の記述項目を挙げ、斜体字にした。

No.	地図名 / 記載項目	出版年	山水軒の記載 町名・(所在地)	神崎表記	出典	頁
1	天明年間の広島城下地図 (西紀1595年頃)	天明年間 (西暦1595年頃)	上田主水船屋敷 無	無		④
2	明治十年広島市街地図 (西紀1875年)	明治10 (1875) 年	無 カハラヤキ	無	『新修 広島市史』第五巻 の地図 広島市役所	⑥
3	明治27年 広島市街地図 (西紀1894年)	明治27 (1894) 年	上田氏邸 「河原町」が邸名の中にあり	神崎 「上田氏邸」邸内最南端に表示		⑦
4	広島名所 西部 ◎神崎 旅館及料理業 ◎料理業	明治33 (1900) 年	旅宿及料理業 ◎料理業 萬春園は河原町の下にあり舊藩上田家の有するものにて邸内広く老松深々として風趣多し近來借受けて料理を営めるなり(中略)以上はいづれも建物廣大にして衆人を容るゝが故に集會所として適合せり之に次ぐ料理屋は(後略)	広島名所 西部 ◎神崎 河原町の南、江波村に差掛かる邊りを神崎と稱す本川の水將に海に注がんとするの涯りにして若しそれ三春天朗かなるの日杖をこの邊に曳かば柳翠岸邊に搖き麥隴波紋を生じて景愛すべし古人また神崎の夜雨を賞したりき		広島繁盛記 附嚴島林 保登・東瀛社
5	広島の名所 ◎神崎	明治34 (1901) 年	無	広島の名所 西部 ◎神崎 河原町の南、江波村に差掛かる邊りを神崎と稱す本川の水將に海に注がんとするの涯りにして若しそれ三春天朗かなるの日杖をこの邊に曳かば柳翠岸邊に搖き麥隴波紋を生じて景愛すべし古人また神崎の夜雨を賞したりき	広島案内記 附嚴島林 保登・東瀛社	58
6	○広島市内著名商工人名録 料理店業	大正2 (1913) 年	吉村廣吉 (萬春園) 河原町	無	広島案内記 附嚴島名勝案内 吉田直次郎・友田誠眞堂	27
7	広島市街新地図 大正元年調査	大正2 (1913) 年	〔地図〕 萬春園 河原町	無	広島市街新地図 大正元年調	地図

No.	地図名 / 記載項目	出版年	山水軒の記載 町名・(所在地)	神崎表記	出典	頁
			[案内 料理及旅館] 万春園 河原町	無	植村日進堂	案内
8	大正7年 広島市街地図 (西紀1918年)	大正7(1918)年	無	無	『新修 広島市史』第五巻の地区 広島市役所	⑧
9	最新 広島市街地図	大正8(1919)年	万春園 河原町	無	最新 広島市街地図 森次郎 製 (駈々堂旅行案内)	地図
10	明治大正時代 史蹟名勝天然記念物	大正14(1925)年	萬春園 船入町字神崎にあり、もと藝藩家老上田男爵家の別業にして、明治維新後は一家久しく此處に住せしが、同三十年の頃、大手町七丁目の邸に移りてより、一時料理商魚松に貸付し、料亭となり、萬春園と號したりしも、四十年の頃、土地家屋とも市内豪商某の有に歸せり、園中の家屋は山水軒と稱し、藝藩客儒山名嘉方雲巖、又は黃鳥軒、梅居と號す の記あり(後略)	字	広島市史 第四巻 広島市役所	743
11	「裏千家広島のおゆみ」 大正十五年まで	昭和40(1965)年	[記述内容要約] ・大正九年五月十五日、裏千家家元宗匠初来広、茶会。会場は市内河原町の鈴木別荘「万春園」。家元一行は十三世円能齊宗匠、宗綱夫人、広瀬拙齊舎弟、坂本宗倫業躰、山口宝善氏ら九名。 ・大正十一年六月、広島地方在住の裏千家修好者の会発足。十四世淡々齊宗匠を万春園に迎え発会式と茶会を催し、宗匠より会名を「松風会」と名付けられた。	無	裏千家広島のおゆみ 茶道裏千家淡交会広島支部	1 2

【表3-4】 上田安敦著『雅遊謔録』-底本 広島県教育委員会発行 政治史・茶道史研究協議会編集『上田家文書調査報告書 上田家茶書集成』(平成17年3月31日発行)所収 295~314頁

- 凡例 1. 左端の番号は、筆者が便宜的に付けた番号である。  
 2. 底本の凡例で「内容を示すものを史料の上部に付けた。」の箇所は、その記述から、当表では「茶会名 他」欄として扱い太字で記した。尚、表記は底本のままとした。  
 3. 和歌や説明文の中に道具書きがある場合は、それを記した。  
 4. 道具名称が事項名以外及び説明文で判明する事項は、〔 〕で記した。  
 5. 初入、後入等の表記は【 】で「掛物」の欄に記した。  
 6. 朱書きは斜体字で記した。

No.	元号	自他	月日	茶会名 他	場所	亭主	客	掛物	花生	釜	香合	茶入	茶椀	茶杓
1	明7	他	4月19日	明治七年 卯月十九日茶事 多田雪齋方にて茶事	多田雪齋方	多田雪齋	自分 浅野孫夫 野村円蔵 飛入ニ而 桑門雪溪	軸 頼阿之歌 自筆	有馬か籠	浄久 宝珠形 姥口	新渡 車軸形	平棗 春正作	ノンコウ栴形 了入ノ作	竹 吸江斎作 銘有寿
2		自	同月29日	同月廿九日 此方ニ而茶事	山水軒	山水軒	桑門雪溪 多田雪齋 勝手見合 野村円蔵 中村豊次郎	道具付、料理付等にハ略之						
3		他	5月16日	△五月十六日 生花之会 雪齋方にて生花の会	雪齋方	雪齋	山水軒 重遠同道 円蔵同伴	其席ニ而点出ニ而薄茶飲ます						
4		他	後6月16日	△六月十六日茶事 浅野孫夫催ニ而、神応院無名庵 ニ而茶事濃薄茶	神応院無名庵	浅野孫夫	自分 雪溪 円蔵 豊次郎 雪齋	道具付并に料理付ハ略之、 尤道具之内、掛軸」ハ、 当院之所蔵ニ而、長懋公之御歌」 庵の名を、何といふかと たつねれは無と答へて有明の窓	〔花入〕鞍馬山の伐蛇竹 銘 鞍馬山					
5		他	前5月29日	五月廿九日茶事 桑門雪溪方ニ而正午	桑門雪溪方	桑門雪溪	自分 西村翠庵 浅野孫夫 野村円蔵 多田雪齋 中村豊次郎〔勝手見合・後席〕	(冊) 千種有功卿短尺 ふしの御歌	〔花入〕手付トクミ	小阿弥陀堂 浄雪作	唐物青貝 薄茶器 黒中棗 宗哲作	仁清	半使 替茶碗 楽七種ノ内 木守写 了入作	(簡) 〔茶七〕宗固君御作 (富士ヶ峰) 銘ふしかね
6		自	10月20日	△十月廿日茶事	山水軒	山水軒	雪溪、雪齋 雪齋 円蔵 豊次郎(何水見合)							
7		他	11月2日	十一月二日 雪齋方ニ而薄茶 雪齋方ニ而薄茶	雪齋方	雪齋	山水軒 雪溪 円蔵 豊次郎飛入 山県二承	貞徳之歌						
8		自	同月13日	神応院にて遊ぶ けふ一瓢携て、人々と神応院に あそぶ庭の紅葉よし	神応院	人名(亭主) 山水軒  雪齋	人名一持参品 山水軒一茶箱、重硯の器 但し此内ニ吸筒も有之 孫夫一からすみ 二承一小重 雪齋一茶箱、小重 豊次郎同行 従者飛鳥理三郎	人名一行為 二承一席画 菊の画 安敦一二承の席画に大根 雪齋一俳諧の発句書く						
9		他	12月14日	※十二月十四日花会 常念寺にて五流打込生花会有	常念寺茶室	雪溪	山水軒 伊藤春房 円蔵 豊次郎 憲吉 雪齋	【桑小卓】			大樋 雀			
10		自	同月16日	△十二月十六日定日釜掛 定日	山水軒	山水軒	円蔵 豊次郎 雪溪(夕方から) 憲吉							
11		他	同月21日	△十二月廿一日茶事	伊藤春房宅	伊藤春房	自分	【初飾付】						

No.	元号	自他	月日	茶会名 他	場所	亭主	客	掛物	花生	釜	香合	茶入	茶碗	茶杓
				伊藤春房宅ニ而茶事			雪斎 円藏 豊次郎 憲吉	【丸卓】 野々宮卿 初雪の御うた	竹		黄南京 鴛鴦	棗 黒中	大樋黒 鶴の模様	〔茶七〕 竹
12	明8	自	1月9日	※明治八年一月九日茶事 明治八乙亥のとし一月九日	山水軒	山水軒	野村円藏 中村豊次郎							
13		自	同月26日	△一月廿六日茶事 同月廿六日 午後	山水軒	山水軒	伊藤春房 桑門嶺月 多田雪斎 円藏〔勝手見〕 豊次郎〔勝手見〕	【初入】 袋棚	唐物花籠 靈照女		長懋公御作先代へ茄子香合 銘 初夢	織部 銘山里 袋の中ニ 棗 黒中形 宗哲	萩広しまと云う文字有 薄茶器 唐津	〔茶七〕 祖君御作
14		自	2月6日	二月六日定日釜掛 二月六日	山水軒	山水軒	円藏 豊次郎							
15		他	同月19日	※二月十九日茶事 木村里亭か宅にて正午	木村里亭宅	木村里亭	自分 蒲生雪潭 中村豊次郎 野村円藏 多田雪斎	【溜席】 福祿寿 狩野常信筆 【初入】 武者小路実蔭卿 御歌 江山春興多 打出てみれば水のなかれずに つらなる山も雪間あけつゝ 【後入】		天明霰棗形 尾垂レ 蓋唐鏡 大西浄雪 極箱	祥瑞開扇			
16		自	同月26日	※二月廿六日定日 同月廿六日	山水軒	山水軒	憲吉 雪斎 円藏 豊次郎		瀬戸一雪斎 沙張薄縁一憲吉					
17		不詳	4月4日	※四月四日桜見	神応院		山水軒 重遠 亀次郎 理三郎〔従者〕							
18		自	同月6日	△四月六日花見茶事	山水軒	山水軒	雪溪 とく 伊藤春房 木村里亭	【会附】 祥光御御歌 鞍あふみ云々 【後】		天描操口	青磁浮牡丹			
19		他	卯月14日	※卯月十四日茶事 中村豊次郎に招かれて行	中村豊次郎宅カ	炭手前 中村豊次郎 濃茶薄茶手前 高田久兵衛	自分 雪溪 円藏 高田久兵衛〔会席〕	【初入】	竹一重切 祖君御作	四方口尾たれ 大石良雄所持之品 のよし	亀 富士屋桂斎作			
20		他	5月5日	※五月五日茶會 雪斎かもとにて茶会	多田雪斎	雪斎	自分 福王寺院主 久兵衛 野村円藏	【初入】	遠州公御作 竹一重切 銘村雲		鶴 仁清	棗 宝珠形		
								【後入】 我等歌 まとみして春の木芽を 煮てのめは野辺の遊も おもはさりけり 但し 此うたハ、去春はしめて まねかれたる時酔のまきれに よみたる歌也				薄茶器 藤重中次	三島 替茶碗 唐津	茶七 祖君御作と 申ことなれとも うたかはし



No.	元号	自他	月日	茶会名 他	場所	亭主	客	掛物	花生	釜	香合	茶入	茶碗	茶杓	
21		他	5月17日	五月十七日茶事 井前静ぬしのもとにて茶事有、 尤薄茶にて会席出ル	井前静	井前静	自分 岡本与七郎 多田雪斎 野村円蔵 〔勝手見繕〕 田村憲吉	【広間】 三幅対 伊川筆 【茶席】 大徳寺翠巖和尚一行書 雲岫山岳青	唐竹 くつ形舟	小丸炉縁金銀蒔絵花筏	香炉 唐金岩ニ島 古銅フクラ雀 米翁刻と彫有之	棗 杉ノ皮付 但し相生松之枝	(御本) ゴホン 替茶碗 赤染了入	茶七 少庵作	
22		自	10月20日	十月廿日茶事 於此方	山水軒	山水軒	蒲生雪潭 井前 静 多田雪斎 勝手見繕 野村円蔵 中村豊次郎	【書院掛物】 龍虎 二幅対 西蜀之人 雪裕ト申事 【会心亭】 林良筆 枯木鳥 【会心亭茶席】 青蓮院様 御自画賛	籠	自在釜	香炉 古備前 布袋 堆朱梅 布袋	棗 時代蒔絵 菊水	井戸 替茶碗 萩	象牙	
23		他	11月18日	※十一月十八日茶事 広藤忠雄ぬしのもとに招かれて 行、茶事有	広藤忠雄宅	炭手前 主人 濃茶手前 土屋政之進 濃茶 内室	自分 仙石典次 多田雪斎	【初入】 【後入】 豊佐殿 時雨のうた 【薄茶 座敷】 松二鶴 応挙筆	竹二重切 砂鉢	浄雪	永楽	瀬戸耳付	ノンコウ 黒染 銘さゝれ石	茶七 竹二重曲 遠州作	
24		自	12月16日	※十二月十六日釜掛おさめ 十二月十六日 釜の掛おさめ	山水軒	山水軒	円蔵 豊次郎 土屋政之進								
25	明9	自	1月16日	※明治九年一月十六日釜掛初 明治九年一月十六日 けふ釜かけ初	山水軒	山水軒	円蔵 豊次郎 雪斎	維明大徳 雪梅の図 【丸卓】	竹一重切 千宗守作 銘初春				大樋梅 棗 旧邸の古木にて 作る 折鶴のもよふ	朝日 替茶碗 黒染	茶七 祖公御作
26		他	2月23日	△二月二十三日茶事 二月二十三日 嶺月ぬしの隠宅にまねかる	桑門嶺月氏隠居宅	桑門嶺月	自分 同 池永清水 式 海禅寺不染 野村円蔵 中村豊次郎 多田雪斎	景樹懐紙	〔花入〕 籠	浄雪	頼弼の作	棗 雪吹	松本焼 銘栗栖野箱書有 替茶碗 六兵衛ミしま写	茶七 象牙	
27		他	4月24日	四月廿四日茶事 同月廿四日 福王寺僧宅にまねかる	福王寺僧宅	炭手前 院主 手前 世並屋松之助	自分 仙石典二 多田雪斎 飛入にて 浅野孫夫	清巖筆 市隠 意是不欲山林深	備前	天明	新渡染付	棗 中 蒔絵	左入 聖に而	茶七 竹 宗旦作	
28		他	3月10日	※三月十日茶事 三月十日 世並屋一郎左衛門か宅にまねか れて行	世並屋一郎左衛門宅	世並屋一郎左衛門 手前 市郎左エ門 弟松之助并縁者新八等	自分 亀次郎 円蔵 雪斎	実蔭御詠草 名所山 春秋とゆきかふ風の 音羽山も紅葉も近きなかめに、 いく世ともたれかはしらむ 滝つせの岩根いみしき 亀の尾のやま	竹 二重切	古浄味 二所ほと銀 クサヒ打、誠に老き 釜也	(趾) 青地交地	妙喜庵老松 後棗 蒔絵中次	替茶碗 宗入黒染	象牙	
29		不詳	6月4日	六月四日歌會 己斐村深山房ニ而歌会	己斐村深山房										
30		自	11月20日	※十一月廿日 十一月廿日	山水軒	山水軒	西村翠庵 伊藤春房 岡田清	祇園元璋之嶺松の詩 【広間】 唐画山水 対幅	竹一重切 祖公作	古天描 操口国師釜	すんころく 梅か香	棗 時代蒔絵	拝領 瀬戸 替茶碗 高麗	茶七 遠州作	
31	明10	自	1月20日	明治十年一月廿日茶会 ○明治十丁亥年一月廿日茶会	山水軒	山水軒	伊藤春房 桑門嶺月 多田雪斎 勝手見合 野村円蔵 中村豊次郎	織部公消息 但し桐釜の添文	古渡唐金象耳	桐の釜	大樋梅	唐大海 中形棗 黒宗哲	尾張瀬戸御庭焼 替茶碗 朝日 同古志野	茶七 重政公作 二重曲	
32		自	4月5日	△四月五日 御成茶席 正二位様并二	山水軒	山水軒 亀次郎	正二位様 御前様	【道具附】 東山院様勅筆 御歌	竹一重切 祖君	自在釜とそ	香梅か雪 青磁 浮牡丹				

No.	元号	自他	月日	茶会名 他	場所	亭主	客	掛物	花生	釜	香合	茶入	茶碗	茶杓	
				御前様、午後一時過ぎより御成被為在、於席薄茶奉也		御取持 仙石典二	御相伴 平井正太郎 御女中 おきよ おらく	【袋棚】 【台】 【書院床】 二幅対 花鳥ノ絵 周子晁 【会心亭】 東涯筆		山ノ文字有 白交地		キンマ	天目 銀覆輪 替茶碗 萩広しまの文字有	茶七 象牙 利休形	
33		他	10月27日	△十一月廿七日茶室にて薄茶 十月廿七日 伊藤春房許行たれは、茶室に案内して薄茶有、(後略)	伊藤春房宅茶室	伊藤春房	山水軒 山香忠一								
34		自	11月20日	△十一月廿日茶事 十一月廿日 茶事	山水軒	山水軒	伊藤春房 広藤忠雄 山香忠一 勝手見合 野村円藏 中村豊次郎	天筆御詠 樵路霜 浦冬月 難忘恋 右三題	大機君竹一重切		青磁 柿	棗 時代蒔絵 楓ニ浪	萩 ひろしま 替茶碗 かた手	茶七 利休うつし	
35	明11	他	1月8日	※明治十一年一月八日釜掛初 中村豊次郎方釜掛初薄茶也	中村豊次郎方	中村豊次郎	自分 伊藤春房 桑門嶺月 野村円藏 多田雪斎	明人無門の書	備前鶯口	(浄味) 日の丸 古状見		棗 老松	赤楽 是ハ先年奉心へ 遣候器也 替茶碗 藤名 同 仁清	茶七 象牙	
36		自	1月16日	一月十六日釜掛初 ○おなし月十六日 我宿の釜初メ	山水軒	山水軒	西村翠庵 山香忠一 伊藤春房 円藏 豊次郎	千種有功卿 玉の御自画自賛	尺八 銘音曲 祖公御作	山の釜	大樋梅	棗 老松	朝日 替茶碗 高原	茶七 二重曲 備前公御作	
37		自	4月26日	※四月廿六日県令招き茶事 明治十一年 県令藤井勉三殿、此方所持之茶器類見物有之度よし、年寄尋相聞く、依之四月二十六日茶事催して招く、夕四時過入来、(後略)	山水軒	山水軒	藤井勉三殿 井上正充 山県篤造 林	【表居間床】 祝宮明之書 一幅もの 【違棚】 子昂馬之絵 【部屋方書院床】 唐画山水 二幅対 【後】 紀州葛城山松之図 【茶事次第 薄茶】 東山院様勅筆 【袋棚】	伊賀 銘いのち 祖君御作 一重切	桐の模様 古織添状有之	香炉 古備前ツマミ 麒麟 鮑貝 竜の彫物有之		棗 時代蒔絵	茶盃 萩 ひろしま 替茶碗 金海 同 黒楽 一入	茶七 多賀左近作

【表 3-6-1】掛物

名 称	種類
東山院様 勅筆御歌	和歌
祥光卿御歌 鞍あふみ云々	和歌
織部公消息 桐釜の添文	消息
祇園元瑜之嶺松の詩	詩
祝管明之書 一幅もの	墨蹟
林良筆 枯木鳥	画
青蓮院様 御自画賛	画
東涯筆	不詳
千種有功卿 玉の御自画自賛	画
維明大徳 雪梅之図	画
紀州葛城山松之図	画
席画・席句	画句
唐画山水 対幅	画
花鳥二幅対 周子冕筆	画
龍虎 二幅対 西蜀之人 雪裕	画
二幅対 花鳥ノ絵 周子冕	画
子昂馬之絵	画
痴絶布袋 一幅	画

茶道具別に【表 3-6-1】から【表 3-6-9】に示す。

【表 3-6】 『雅遊謾録』自会記の茶道具

年	月	自会記	他会記	その他	月別合計
明治 7	4	1	1	0	2
	5	0	2	0	2
	6	0	1	0	1
	10	1	1	0	2
	12	1	2	0	3
8	1	2	0	0	2
	2	2	1	0	3
	4	1	1	1	3
	5	0	2	0	2
	10	1	0	0	1
	11	1	1	0	2
	12	1	0	0	1
9	1	1	0	0	1
	2	0	2	0	2
	3	0	1	0	1
	6	0	0	1	1
	11	1	0	0	1
10	1	1	0	0	1
	4	1	0	0	1
	10	0	1	0	1
	11	1	0	0	1
11	1	1	1	0	2
	4	1	0	0	1
	計	18	17	2	37

【表 3-5】 『雅遊謾録』自他会記別表

【表 3-6-7】茶碗

名称	産地
萩広しま	萩
天目 銀覆輪	
朝日	朝日
拝領 瀬戸	瀬戸
尾張瀬戸御庭焼	瀬戸
井戸	朝鮮

【表 3-6-8】替茶碗

名称	産地
萩広しまの文字有	萩
高原	肥前
萩	萩
唐津	唐津
朝日	朝日
古志野	志野
黒楽	楽
黒楽 一入	楽
高麗	高麗
金海	高麗
かた手	

【表 3-6-4】香合

名称
長懋公御作先代へ茄子香合 銘 初夢
大樋梅
青磁 柿
青磁 浮牡丹
堆朱梅 布袋
鮑貝 竜の彫物有之
すんころく 梅か香

【表 3-6-5】茶入

名称
織部 銘山里
利休 銘難波
唐大海
キンマ

【表 3-6-6】棗

名称
旧邸之古木にて 折鶴
黒中形 宗哲
老松
時代蒔絵
時代蒔絵 菊水
時代蒔絵 楓ニ浪
キンマ
木

【表 3-6-2】花生

名称	控	御向
竹一重切 祖君		
祖君御作 一重切		
尺八 銘音曲 祖公御作	1 / 5	
竹一重切 祖公作		
重羽公御作 竹一重切		
大機君竹一重切	3 / 6	
竹一重切 千宗守作 銘初春	1 / 12	
籠		
唐物花籠 霊照女	2 / 15	179
伊賀 銘いのち	2 / 6	
瀬戸		
白交地		
沙張薄縁		
古渡唐金象耳		

【表 3-6-3】釜

名称	控	御向
桐の模様 古織添状有之	1	
自在釜	2	
自在釜とそ 山ノ文字有	3	〜64
古天描 操口国師釜	6	
天描操口		
山の釜		

【表 3-6-9】茶杓

名 称
祖君御作
祖公御作
重政公(備前公)作 二重曲
多賀左近作
竹 宗旦作
遠州作
象牙
象牙 利休形
利休うつし

掛物の種類 使用場所 会数		和歌	消息	詩	席画・席句	日本墨蹟	中国墨蹟	日本画	中国画	不詳
会附	2	祥光院卿								
		東山院								
表居間床	1						祝宮明之			
書院床	4						花鳥周子冕 2		唐山水、龍虎	
広間	1								唐山水	
違棚	1								馬之絵	
会心亭	3							林良筆枯木鳥	布袋	東涯筆
会心亭茶席	1							青蓮院自画賛		
初入	0									
後入	2	東山院						紀州葛城山松		
席画・席句	1				安敦含め 4名					
不詳	5	天詠御筆	織部公消息 桐釜の添文	祇園元瑜嶺松				維明大徳雪梅		
								千種有功卿 玉画自賛		
計	21	4	1	1	1	0	3	5	5	1

凡例

1. 「和歌」は作者名を記した。
2. 「中国墨蹟」は作品名と作者名を記した。
3. 「中国墨蹟」の「書院床」欄の数字は、2会使用されたことを示す。
4. 「中国画」は作者名が不詳の為、画題のみを記した。
5. 場所が「不詳」の掛物は5軸ある。「山水軒」内で使用されたことは確かであるが、開催場所が不詳であるので、「不詳」の欄に入れた。

所属	氏名	会数	備考
広島藩主	浅野長勲	1	12代
	室	1	12代長勲夫人
	おきよ	1	女中
	おらく	1	女中
不詳	平井正太郎	1	長勲相伴
茶事預師範	野村円蔵	5	勝手見合
		6	客
	中村豊次郎	5	勝手見合
		6	客
		1	讓翁同行
讓翁従者	飛鳥理三郎	1	神心院茶会
旧広島藩士	山縣二承	1	上田家家臣、画家
	岡田清	1	上田家儒者
	井前静	1	井前静左衛門の事カ、勘定所
広島縣職員	藤井勉三	1	権令、山口縣土族
	井上正充	1	大属、山口縣土族
	山県篤造	1	権大属、山口縣土族
	伊藤春房	6	広島縣土族
常念寺	桑門雪溪	4	
	とく	1	桑門家
	桑門嶺月	2	
不詳	多田雪斎	6	
	西村翠庵	2	
	山香忠一	2	
	田村憲吉	2	
	木村里亭	1	
	広藤忠雄	1	
	蒲生雪潭	1	
	土屋政之進	1	
	林	1	権令茶会末客

【表3-9】 『雅遊漫録』 自会記客参加会数

作者	会数
祖君(宗箇)	2
祖公	2
重羽公・大機君	2
茶人	1
不詳	7
計	14

素材	会数
竹	7
籠	2
陶器	3
金工	2
計	14

【表3-8】 『雅遊漫録』 自会記「花生」の種類と使用会数

【表 3-11-2】花生

名 称
竹一重切 祖君御作
遠州公御作 竹一重切 銘村雲
如心齋船 銘留守
唐竹 くつ形舟
竹
竹二重切
竹 二重切
有馬か籠
籠
備前
備前鳶口

【表 3-11-3】釜

名 称
四方口尾たれ 大石良雄所持之品
尾上 是ハ元浅野家国方所持之釜にて、 高名なる物
天明霰棗形 尾垂レ 蓋唐鏡 大西浄雪
天明
浄雪
浄久 宝珠形 姥口
古浄味 二所ほと銀クサヒ打、 誠に老き釜也
日の丸 古状見 (浄味)

【表 3-11-1】掛物

名 称	種類
頓阿之歌 自筆	和歌
貞徳之歌	和歌
野々宮卿 初雪の御うた	和歌
武者小路実蔭卿 御歌	和歌
豊佐殿 時雨のうた	和歌
景樹懐紙	和歌
実蔭卿御詠草 名所山	和歌
福禄寿 狩野常信筆	和歌
懐紙掛 おのかよみし快堂のうた	和歌
我等歌 まとみして春の木芽を煮て のめは野辺の遊もおもはさりけり	和歌
大徳寺翠巖和尚一行書 雲収山岳青	墨蹟
清巖筆 市隠	墨蹟
明人無門の書	墨蹟
三幅対 伊川筆	画
松二鶴 応挙筆	画

【表 3-1-1】

『雅遊謾録』他会記の茶道具

茶道具別に【表 3-1-1-1】から【表 3-1-1-9】に示す。

【表 3-1-0】

『雅遊謾録』他会記会数

亭主氏名	会数
多田 雪斎	4
中村 豊次郎	2
伊藤 春房	2
桑門 雪溪	2
桑門 嶺月	1
木村 里亭	1
井前 静	1
広藤 忠雄	1
浅野 孫夫	1
福王子	1
世並屋一郎左衛門	1
計	17



【表 3-11-7】茶碗

名称	産地
赤楽 是ハ先年奉心へ遺候器也	楽
絵高麗 箱書付金森宗和侯 利休居士所持	高麗
黒筒茶碗 左入作且入箱極	楽
ノンコウ枅形 了入ノ作	楽
ノンコウ 黒楽 銘さゝれ石	楽
左入 聖に而	楽
松本焼 銘栗栖野箱書有	国
大樋黒 鶴の模様	国
コモカイ	高麗
三島	高麗
ゴホン (御本)	高麗
半使	高麗

【表 3-11-6】棗

名称
黒中形 宗旦書付
妙喜庵老松
老松
杉ノ皮付 但し相生松之枝
松木寸切
平棗 春正作
棗 中黒
藤重中次
蒔絵中次
時代蒔絵
中 蒔絵
宝珠形
雪吹

【表 3-11-4】香合

名称
頼弼の作
永楽
亀 富士屋桂齋作
鶴 仁清
古銅フクラ雀 米翁刻と彫有之
新渡 車軸形
新渡染付
黄南京 鴛鴦
祥瑞開扇
青地交地 (趾)

【表 3-11-8】替茶碗

名称	産地
赤楽了入	楽
宗入黒楽	楽
仁清	京
六兵衛ミしま写	京
朝日	国
唐津	国
藤名	国

【表 3-11-5】茶入

名称
瀬戸
瀬戸耳付

種類	数
楽焼	2
国焼	4
朝鮮	1

【表3-11-6】『雅遊謾録』他会記「替茶碗」の種類別使用会数

種類	数
楽焼	5
国焼	2
高麗	5

【表3-11-5】『雅遊謾録』他会記「茶碗」の種類別使用会数

形状	数
中	3
老松	2
中次	2
平	1
宝珠	1
雪吹	1
寸切	1
不詳	2

【表3-11-4】『雅遊謾録』他会記「花生」の形状別使用会数

材質	数
竹	7
籠	2
陶器	2
作者	数
武家	2
茶人	1
不詳	8

【表3-11-3】『雅遊謾録』他会記「花生」の材質別、作者別使用会数

種類	数
和歌	10
墨蹟	3
画	2

【表3-11-2】『雅遊謾録』他会記「掛物」の種類別使用会数

【表3-11-9】茶杓

名称
祖君御作と申ことなれともうたかはし
竹二重曲 遠州作
竹 吸江斎作 銘有寿
啐碌斎 銘吉祥
少庵作
竹 宗旦作
竹
象牙

客 亭主	多田雪斎	中村豊次郎	伊藤春房	桑門雪溪	桑門嶺月	木村里亭	井前静	広藤忠雄	浅野孫夫	福王寺院主	世並屋 一郎左衛門	計
多田雪斎	4	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	15
中村豊次郎	1	2	1	2	1	1			1			9
伊藤春房		1	2	1								4
桑門雪溪	2	1		2					1			6
桑門嶺月		1			1							2
木村里亭						1						1
井前静							1					1
広藤忠雄								1				1
浅野孫夫	1			1					1	1		4
福王寺院主	1									1		2
世並屋一郎左衛門											1	1
野村円蔵	4	2	1	2	1	1	1		1		1	14
重遠同道	1											1
山県二承	1											1
高田久兵衛	1	1										2
田村憲吉			1	1			1					3
山香忠一			1									1
西村翠庵				1								1
池永清水					1							1
海禅寺不染					1							1
蒲生雪潭						1						1
岡本与七郎							1					1
仙石典次								1		1		2
上田亀次郎											1	1
上田安敦	4	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	17

凡例

1. 欄内の数字は茶会の参加会数を示し、空欄は零会を表す。
2. 色付き欄の数字は、亭主として参加した会数を表す。
3. 他会記は全 17 会で、上田安敦はその全ての茶会に参加している。

【表3-18】上田安敦著『上田家茶会記録』-底本 広島県教育委員会発行 政治史・茶道史研究協議会編集『上田家文書調査報告書 上田家茶書集成』(平成17年3月31日発行)所収 316~325頁

- 凡例 1. 左端の番号は、筆者が便宜的に付けた番号である。  
 2. 「茶会名」は、底本に記載があるものについてはそれを記し、本文を筆者が要約して記した会については〔 〕を付した。  
 3. 初入、後入等の表記は【 】で「掛物」の欄に記した。

1. 「茶会記 明治十八年ヨリ」(茶書148)														
No.	元号	自他	月日	茶会名	場所	亭主	客	掛物	釜	香合	花生	茶入	茶椀	茶杓
1	明18	他	1月30日	正午 大森細君会			山水軒 広藤忠雄 大館東雲 伊藤春房 中村豊次郎 木村里亭							
2		自力	5月3日	正午 山水軒	山水軒カ	山水軒カ	大森細君 大館東雲 岡本細君 中川清一郎							
3		他	同月6日	正午 浜田雨村	浜田雨村邸	浜田雨村	山水軒 大森細君 大館東雲 秋田栄三郎 鈴木大巖 中村豊次郎							
4		他	#####	大森敬之転任帰京ニ依而 細君告別茶事 正午			山水軒 桑門嶺月 中川清一郎 木村里亭 中村豊次郎	(中院) 通茂御歌 山家月 花紅葉心におらぬ松の戸に 月影きよき身にそたえける	古天猫 欠有カスカイニてトメル、 蓋もおなし			古瀬戸	古萩 袋入	
5		自力	11月3日	右細君送別茶事 正午	山水軒	山水軒カ	大森細君 相伴 秋田栄三郎 浜田雨村 半頭 中村豊次郎	【初入】 近衛殿下、鷹司殿下、 九条殿下 (色) 御式紙 【後入】	国師釜古天猫	鮑浪ニ竜の彫有				
											竹船 宗左作 銘我友	古瀬戸 銘覚雲 棗 時代蒔絵 水ニ紅葉	高麗御所丸 同 朝日 同 古志野	茶七 松濤君御作 櫻井竹 銘蓬萊
								【開広間】 三幅対 老松 中老子 左右芦鷹 伊川筆						
6		他	#####	中川清一郎宅ニて茶事	中川清一郎宅	中川清一郎	山水軒 上田亀次郎 横田直太郎 河野為太郎 半頭 中村豊次郎							
7	明19	他	2月10日	午後茶事	山水軒	主 亀次郎 薄茶 山水軒	中川清一郎 横田直太郎 高野為太郎	【初入】 北小路祥光画 鞍鏡之御歌 【後入】	古天猫 手取釜	赤絵呉使 香薫衣更 福				
												膳所耳付 棗 老松	堅手 (薄)茶椀 大樋立鷗	茶七 藤村庸軒作 銘 はま弓
8		自	3月36日	表ニ而午後茶事		山水軒	深瀬静 金子窓月 中村快堂	【初入】 祇園院様松之詩 【後入】	浄雪 万字	根来朱				
											唐金方壺	織部 棗 中次	瀬戸唐津 亀次郎從東京被帰ル品也 同 朝鮮	茶七 八百杉 銘千とせ
9	明20	他	5月9日	父子ニ而中村快堂方へ招かる	中村快堂方	中村快堂	山水軒 上田亀次郎 相伴 浜田雨村							

【表3-18】 上田安敦著『上田家茶会記録』

No.	元号	自他	月日	茶会名	場所	亭主	客	掛物	釜	香合	花生	茶入	茶椀	茶杓			
							吉井二敬										
10		自	5月31日	山水軒にて正午稽古茶会	山水軒	主 山水軒老人 半頭 大野為次 給仕 利勢子 亀次郎	種子 愛子 豊次郎	正二位公御書				膳所耳付	庭焼 七種写 鉢開	先代作			
11		他	6月8日	於表正午茶事	亀次郎	主 亀次郎 半頭 豊次郎	山水軒 貞松 利勢 為次	藪内竹翁書				海鼠手	庭焼 七種写之内木守	桑山			
12		自	7月7日	山水軒茶事	山水軒	山水軒	伝福寺大巖禪師 横田清人 中川清一郎 吉井敬二	【初入】 覚道公御筆 松高白鶴眠 【後入】	車軸 古山城 蓋古天明	堆朱 印袋		伊賀 銘いのち	古備前	祖公作 銘さても 替茶碗 黒楽 一入 同 半使	金香 宗和作 留書付 風早藤宰相殿		
13	明21	他	2月28日	午後之茶		亀次郎	山水軒 中村豊次郎 側女中 利勢子 大野為次	正二位公御途上 御詩作 二幅対									
14		他	4月24日	織村与一方にて正午茶事	織村与一方	織村与一	山水軒 上田亀次郎 中川清一郎 中村豊次郎										
15		他	3月17日	中川清一郎方にて正午茶事	中川清一郎方	中川清一郎	山水軒 上田亀次郎 横田直太郎 中村豊次郎 手前 高野為太郎	□□□□掛ニ而、 おのか歌									
16		自	9月30日	山水軒茶事	山水軒	主 山水軒 添 亀次郎 半頭 豊次郎	中川清一郎 瀧前素大 吉井敬二	【初入】 祖公御作品 【後入】	車軸 古山城友蓋 古天明	根来朱		備前掛花入	新兵衛 銘松坂 薄茶器 時代蒔絵 楓ニ水	萩わり高台 同 高原焼	遠州作 筒ニ加藤右馬様 小堀遠作と有之		
<b>2. 「記（東山院様…）」（茶書126）</b>																	
		不詳						東山院様御詠 鶴阜公御筆 之内 覚道公御筆 【広間床】 (之) 周子冕 花鳥 二幅対 【会心亭】 (紀) 呂記 鯉 或ハ東涯書	山字	織部 (磁) 或ハ青地浮牡丹	祖公作	中次 棗 (蒔盞) 或ハ金馬	天目 台 萩 ひろしま 或ハ金海	象牙			
<b>3. 「明治十五年二月廿三日」（茶書142）</b>																	
明15	不詳	2月23日	正午山水軒	山水軒		伝福寺 浜田雨村 吉井二敬 多田紅養		【待合間】 (之) 周子冕 花鳥 二幅対 【敬慎斎 初入】 北小路祥光卿御歌 もののふの家のほまれの 鞍あふみいく万世も かけてつたへよ 【中立会心亭】 伊藤東涯先生書 【後入】		香炉 青磁向兎				竹二重切、先祖ヨリ四代 重羽作	瀬戸 銘立木 薄茶器 棗 黒イチくぬり	半使 撰州 高原	藤村庸軒作 銘はま弓

No.	元号	自他	月日	茶会名	場所	亭主	客	掛物	釜	香合	花生	茶入	茶椀	茶杓
<b>4. 「茶会会附」 (茶書144)</b>														
	明16	不詳	2月13日	茶会				【初入】 古天明 手取釜	印袋 堆朱梅	竹一重切 祖先作				
								【後入】 千種有功卿 玉の画賛				新兵衛 銘相坂 棗 遠州好 糸目雪吹	萩 底ニかなにて ひろしまと有之 同 金海	藤村庸軒作共筒 銘男正員はまゆミ
								【広間】 雪裕 竜虎二幅対						
								【会心亭】 黄初平 羊之図 伯猷筆						
<b>5. 「明治十八年五月三日茶事記」 (茶書134)</b>														
	明18	自	5月3日	茶事記	山水軒	山水軒	大森細君 大館禿辱 岡本細君 中川清一郎	【初入】 織田有楽の文	車軸 山城 蓋古天貓	青磁浮牡丹				
								【後入】			伊賀生爪	利休 銘難波 薄茶器 藤重中次	萩菱形 底ニひろしま 替茶椀 金海 同黒楽 一入	金森宗和作 筒風早前宰相殿 茶匕 象牙

茶道具別に【表3-19-1】から【表3-19-9】に示す。

【表3-19-2】 釜

名称	会記	控
国師釜古天猫	1	6
浄雪 万字 車軸 古山城 蓋古天明		10
先祖ヨリ伝来、作不知 箱ニ自在釜ト有之	3	
古天明 手取釜	4	
車軸 山城 蓋古天猫	5	

【表3-19-3】 香合

名称	会記	
根来朱	1	
堆朱 印袋	3	
堆朱印黛 梅	4	
青磁浮牡丹	5	

【表3-19-4】 花入

名称	会記	控
竹船 宗左作 銘我友 唐金方壺 伊賀 銘いのち 備前掛花入	1	1/9 2/13
竹二重切、先祖ヨリ四代 重羽作		3
竹一重切 祖先作	4	
伊賀生爪	5	1/11

【表3-19-1】 掛物

名称	会記	種類
近衛殿下、鷹司殿下、九条殿下御色紙	1	和歌
三幅対 老松 中老子 左右芦鷹 伊川筆		画
祇園院様松之詩		詩
正二位公御書		書
覚道公御筆 松高白鶴眠		書
祖公御作品		不詳
周子冕 花鳥 二幅対	3	画
北小路祥光卿御歌 もののふの家のほまれの 鞍あふミいく万世も かけてつたへよ		和歌
伊藤東涯先生書		書
千種有功卿 玉の画賛	4	画
雪裕 竜虎二幅対		画
黄初平 羊之図 伯猷筆		画
織田有楽文	5	消息

【表 3-19-9】茶杓

名称	会記
松濤君御作 檜井竹 銘蓬萊	1
八百杉 銘千とせ	
先代作	
金香 宗和作 留書付 風早藤宰相殿	
遠州作 筒ニ加藤右馬様 小堀遠州作と有之	
藤村庸軒作 銘はま弓	3
藤村庸軒作共筒 銘男正員はまゆみ	4
金森宗和作 筒風早前宰相殿 茶七 象牙	5

【表 3-19-7】茶碗

名称	会記
高麗御所丸	1
朝日	
古志野	
瀬戸唐津	
瀬戸朝鮮	
庭焼 七種写 鉢開	
祖公作 銘さても	
萩わり高台	
高原焼	
半使	
撰州 高原	4
萩 底ニかなニて ひろしまと有之	
金海	5
萩菱形 底ニひろしま	

【表 3-19-8】替茶碗

名称	会記
黒樂 一入	1
半使	
金海	5
黒樂 一入	

【表 3-19-5】茶入

名称	会記
古瀬戸 銘覚雲	1
織部	
膳所耳付	
古備前	
新兵衛 銘松坂	
瀬戸 銘立木	3
新兵衛 銘相坂	4
利休 銘難波	5

【表 3-19-6】薄茶器

名称	会記
時代蒔絵 水ニ紅葉	1
時代蒔絵 楓ニ水	
中次	3
黒イチイチぬり 道恵	
遠州好 糸目雪吹	
藤重中次	5



客	亭主	上田亀次郎	浜田雨村	中川清一郎	中村快堂	織村与一	不詳	参加会数
上田安敦		3	1	2	1	1	2	10
上田亀次郎		3		2	1	1		7
浜田雨村			1		1			2
中川清一郎		1		2		1	1	5
中村快堂		1	1	2	1	1	2	8
織村与一						1		1
広藤忠雄							1	1
大館東雲			1				1	2
伊藤春房							1	1
木村里亭							2	2
大森細君			1					1
秋田栄三郎			1					1
鈴木大巖			1					1
桑門嶺月							1	1
榎田直太郎		1		2				3
河野為太郎				1				1
吉井二敬					1			1
貞松		1						1
利勢子		2						2
大野為次		2						2
高野為太郎		1		1				2

凡例

1. 欄内の数字は茶会の参加会数を示し、空欄は零会を表す。
2. 色付き欄の数字は、亭主として参加した会数を表す。
3. 他会記は全10会で、上田安敦はその全ての茶会に参加している。

【表3-21】

「上田家茶会記録」他会記亭主と客の相関

参会者	会数	会記
中村豊次郎(快堂)	3	1
中川清一郎	3	
大森細君	2	
吉井敬二	2	
大館東雲	1	
岡本細君	1	
秋田栄三郎	1	
浜田雨村	1	
深瀬静	1	
金子窓月	1	
伝福寺大巖禅師	1	
榎田清人	1	
瀧前素大	1	
伝福寺	1	
浜田雨村	1	3
吉井二敬	1	
多田紅養	1	
大森細君	1	5
大館禿辱	1	
岡本細君	1	
中川清一郎	1	

【表3-20】

「上田家茶会記録」自会記の参会者

【表4-1】 博覧会の名称・会期・開催場所

No.	名称	明治年	自		至		開催場所	主催	No.	名称	明治年	自		至		開催場所	主催
			月	日	月	日						月	日	月	日		
1	大学南校物産会	4	5	14	5	20	九段招魂社	大学南校物産局	23	新潟博覧会	7	6	1	7	4	白山神社	新潟県
2	京都博覧会	4	10	10	11	11	本願寺大書院	三井高福、小野抱賢、能谷直孝	24	金沢博覧会	7	6	16	7	31	金沢市兼六園内東別院	石川県
3	文部省博覧会	5	3	10	4	29	湯島聖堂大成殿	文部省	25	大町博覧会	7	7	1	7	10	大町旧陣屋	大町博覧会社
4	第1回京都博覧会	5	3	10	5	30	西本願寺、知恩院、建仁寺	京都博覧会社	26	高遠博覧会	7	7	20	8	10	高遠満願寺	高遠博覧会社
5	和歌山博覧会	5	5	20	6	10	鷲森本願寺	和歌山県	27	木曾福島博覧会	7	8	10	8	25	木曾福島興善寺	福島博覧会社
6	厳島博覧会	5	6	10	7	10	厳島千畳閣大聖院	広島県	28	太宰府博覧会	7	9	20	10	19	西高辻信厳居宅	博覧会社
7	徳島旧城展覧会	5	8				徳島城	不詳	29	東京・吉原博覧会	8	2月15日より30日間			江戸町金瓶楼	俵屋和助、泉屋忠兵衛	
8	金沢展覧会	5	9	16	10	16	金沢市兼六園内巽新殿	石川県	30	第4回京都博覧会	8	3	15	6	22	京都御所、仙洞御所、大宮御所	京都博覧会社
9	第2回京都博覧会	6	3	13	6	10	京都御所、仙洞御所	京都博覧会社	31	熊本博覧会	8	4月1日より60日間			熊本錦山神社	熊本博覧会社	
10	伊勢山田博覧会	6	3	15	5	31	伊勢山田大世古町元御師龍太郎	度会県、神社司庁	32	第1回奈良博覧会	8	4	1	6	19	東大寺大仏殿	奈良博覧会社
11	太宰府博覧会	6	3	20	4	20		尾崎鑠、西高辻信厳、三木隆助	33	京都・本願寺集覧会	8	4月15日より			本願寺	本願寺	
12	金刀比羅宮博覧会	6	3		4		金刀比羅宮	不明	34	長野博覧会	8	7	1	8	19	善光寺大勸進	長野博覧会会主
13	東京山下門内博物館博覧会	6	3	1	6	10	東京山下門内博物館	博覧会事務局	35	飯田博覧会	8	1月20日より30日間			飯田峰高寺	不詳	
14	伊勢山田博覧会	7	3	1	5	31	不詳	度会県				9月21日より20日間					
15	第3回京都博覧会	7	3	1	6	8	京都御所、仙洞御所	京都博覧会社	36	大分展覧会	8					不詳	不詳
16	東京山下門内博物館博覧会	7	3	1	6	10	東京山下門内博物館	博覧会事務局	37	大阪博物場大会	9	3	15	6	22	大阪博物場	大阪博物場
17	飯田博覧会	7	3	20	4	20	飯田岩戸社	不詳	38	第2回奈良博覧会	9	3	15	6	25	東大寺大仏殿	奈良博覧会社
18	松本博覧会	7	4	15	6	3	松本城天守閣	松本博覧会社	39	第5回京都博覧会	9	3	15	6	22	京都御所、仙洞御所、大宮御所	京都博覧会社
19	聖堂書画大展観	7	5	1	5	31	湯島聖堂大成殿	博覧会事務局	40	長野博覧会	9	4	15	6	20	善光寺大勸進	小宮山三左衛門ほか6名
20	名古屋博覧会	7	5	1	6	10	東本願寺名古屋別院	愛知県下博覧会社	41	彦根城博覧会	9	5	3	6	1	彦根城	不詳
21	伊賀上野博覧会	7	5	15	6	13	伊賀上野旧津県支庁	〔伊賀上野〕博覧会社	42	富山博覧会	9	9	1	9	20	富山市梅沢町大法寺	不詳
22	高島博覧会	7	5	17	6	5	上諏訪正願寺	高島博覧会社									

東京文化財研究所編『明治期府県博覧会出品目録明治4年～9年』  
(中央公論美術出版平成16年5月30日発行) から筆者作成



1 屋内諸具之部 〔属〕  
房室諸具 屏障類 燈燭類 鏡箱類 庖厨諸具 飲食器皿 烟具類等

1 食物飲料之部  
塩 糖 味噌 醤油 醋 酒 焼酎等ノ諸品并煙草及ヒ植物ヲ以テ製造スル者製造品等

1 紡織具之部  
機 杼 織 篋 紡車并縫裁諸具

1 紡織料之部  
綿 麻 苧 蚕 山繭 羊毛等

1 布帛之部  
綿布 麻布 絹 天鵲絨 襪子 綴子 毛絨 毛氈 葛布 芭蕉布 紙布 駱布等并和漢  
古代ノ金襴布土類  
〔傍線ノ部分〕古金襴并古代ノ布巾等

1 衣服裝飾之部  
官服 常服 山民ノ服 婦女服飾 櫛簪ノ類 傘笠 雨衣 印籠 巾着 履履ノ類

1 皮革之部  
各種ノ皮革并土革ノ類  
〔古皮革ノ綴〕

1 貨幣之部  
古今金銀銅鉄等ノ貨幣 幣幣 古錢并万国古今ノ貨幣等  
〔傍線ノ部分〕古金銀古錢并古貨幣等

1 諸金製造器之部  
銅 鐵 錫等其ヒ他金屬ヲ以テ製造セリ諸器等  
〔傍線ノ部分〕銅 黄銅 赤銅 青銅 紫金 鉄 錫

1 玻璃之部  
各色玻璃并製造器具  
〔傍線ノ部分〕シ

1 陶磁器之部  
古今各國陶磁器并舶來品等  
〔傍線ノ部分〕シ 終リニ一等アリ

1 漆器之部  
漆 漆 青貝 椎末等ノ諸器物

1 理化学化学器械之部  
掛丸鏡等大氣ノ学ニ関係スル器 電學器械 伝信機 化学諸器械 寒暄計 晴雨計等  
〔傍線ノ部分〕シ  
ソラリスミコツ

1 鏡類之部  
望遠鏡 顕微鏡 鏡 日顕微鏡 三稜玻璃并光線等ノ諸器械  
〔傍線ノ部分〕シ

1 照像之部  
照像ニ關スル諸器并照像類  
〔傍線ノ部分〕シ

1 時計之部  
各種自鳴鐘 時辰鐘 沙漏等  
〔傍線ノ部分〕シ

1 測量器械之部  
測量ノ諸器 天球儀 地球儀并天象地理ノ図

1 度量權衡之部  
秤 天平 尺 斗 升 算盤等并古代ノ用品

1 茶器香具花器之部  
茶 将棗 雙六 戲籠 八将行成 投壺 棊子 投筒 歌牌等  
〔傍線ノ部分〕シ  
〔馬ノ頭〕 盆 茶籠等ノ茶器 香盒 香炉等ノ香具 花瓶 花台等ノ花器  
〔傍線ノ部分〕シ 終リニ一等アリ

1 遊戯具之部  
碁 将棗 雙六 戲籠 八将行成 投壺 棊子 投筒 歌牌等

1 雜職等偶人并見玩之部  
童子 天兒 雜人形 雜人形 木偶 土偶 其他見玩之品  
〔傍線ノ部分〕シ  
〔茶具人形等并其ヒ他見玩之品ノ類〕

〔此ノ間ニ「古仏像并仏具ノ部」「化石ノ部」アリ。40頁参照〕

1 北海道并伊豆諸島産球之産物類

1 諸雜物及未詳之部  
〔傍線ノ部分〕シ

1 屋内諸具之部 (上記と同じ)

1 食物飲料之部 (上記のほか「鳥獸魚介ノ乾脯塩麩製菓等」をかかへ)

1 紡織具之部 (上記と同じ)

1 紡織料之部 (上記と同じ)

1 布帛之部 (上記のうち「和漢…」を「和漢古代ノ布巾并図」とする)

1 衣服裝飾之部 (上記のうち「印籠巾着」を除き「茶衣身二帯フル所ノ品」を加えている)

1 皮革之部 (上記と同じ)

1 貨幣之部 (上記と同じ)

1 諸金製造器之部 (上記古器旧物保存ノ布告ノ内容と同じ)

1 玻璃之部 (上記と同じ)

1 陶磁器之部 (上記と同じ)

1 漆器之部 (上記のほか「ア初メ諸國ノ製造品并古代ノ品磁漆製舶來品」を加える)

1 理化学器械之部 (上記のほか「電學ノ器械」を加える)

1 鏡類之部 (上記と同じ)

1 照像之部 (上記と同じ)

1 時計之部 (上記と同じ)

1 天球地球儀之部 (上記と同じ)

1 度量權衡之部 (上記のほか「并万国ノ品」を加える)

1 茶器香具花器之部 (上記のうち「漆器、花瓶、花台」を除く。誤脱かし)

1 遊戯具之部 (上記と同じ)

1 雜職等偶人并見玩之部 (上記と同じ)

1 古器物之部  
古代ノ品書へハ曲玉管玉璽并鐵器古石鏡天狗ノ飲カノ齋筈石  
碑古鏡古銅古瓦古鐵器其他古物類并舶來品 古仏像 并諸具古錢文  
古物ノ図畫風俗ノ考証トナルヘキ古畫古畫續類

1 北海道并伊豆諸島産球之産物及器物

1 諸雜物及未詳之品物  
左ノ二部ハ書庫ノ部ニ入ルヘシ

1 書籍之部  
和漢洋并印度東洋外國ノ古書新書并有益ノ書ト書籍ヲ作ルニ用  
ニル所ノ具及木版石版銅版活字等

1 書画之部  
諸名畫墨迹法帖石搨油畫其ヒ各種ノ圖畫類

## 発表論文リスト

### ○著書 共著

- ・ 平井勝彦・市村祐子編『大庭屋平井家茶会々記集―貯月菴宗従茶事会記録―』（大阪市史史料集 第四十八輯 大阪市史編纂所編 大阪市史料調査会発行 平成九年二月発行）
- ・ 市村祐子「解題」 平井勝彦・市村祐子編『大庭屋平井家茶会々記集―貯月菴宗従茶事会記録―』（大阪市史史料集 第四十八輯 大阪市史編纂所編 大阪市史料調査会発行 平成九年二月発行） 査読付
- ・ 市村祐子「大坂における幕末・明治初期の町人文化―大庭屋平井家の歴代当主と遠州流茶道―」（熊倉功夫編『茶人と茶の湯の研究』所収 思文閣出版 平成十五年十二月二十日発行） 査読付
- ・ 市村祐子 分担執筆 茶道（『明治時代史辞典 2』吉川弘文館 平成二十四年七月） 査読付
- ・ 市村祐子 分担執筆 近代黎明期茶道史への試論（茶文化研究発表会実行委員会 世界お茶まつり2013『女性研究者による茶文化研究論文集』平成二十五年四月） 査読無

### ○論文

- ・ 市村祐子「幕末明治初期茶道史への一試論―大坂町人大庭屋平井家十代貯月菴宗従の遠州流茶道を中心として―」（『野村美術館紀要 第七号』所収 平成十年三月） 査読付
- ・ 市村祐子「幕末明治初期における伊勢国松坂の茶の湯―本居信郷著『会席附』を中心として―」（『茶の湯文化学 十六号』所収 平成二十一年三月） 査読付